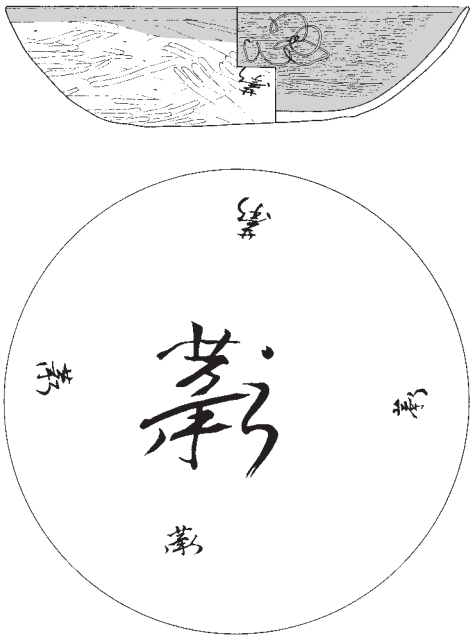
三重県埋蔵文化財調査報告３５１

朝見遺跡（第１・２次）発掘調査報告

── 松 阪 市 和 屋 町 ──



２０１４（平成 26）年 10 月

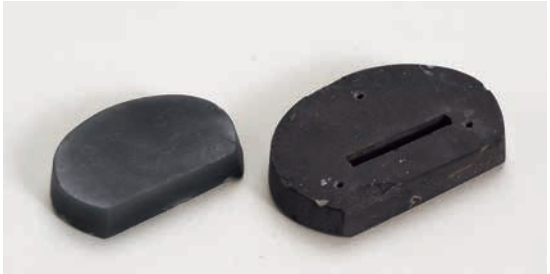
三重県埋蔵文化財センター

１　ＳＤ47出土遺物

２　ＳＫ48（北から）

３　ＳＤ47斎串

４　ＳＤ47 越州窯系青磁椀（675）



５　ＳＤ52 石帯（1336・1337）

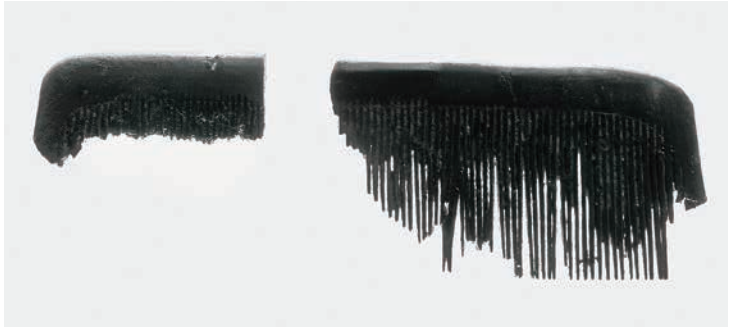
6　主な緑釉陶器

巻頭図版３

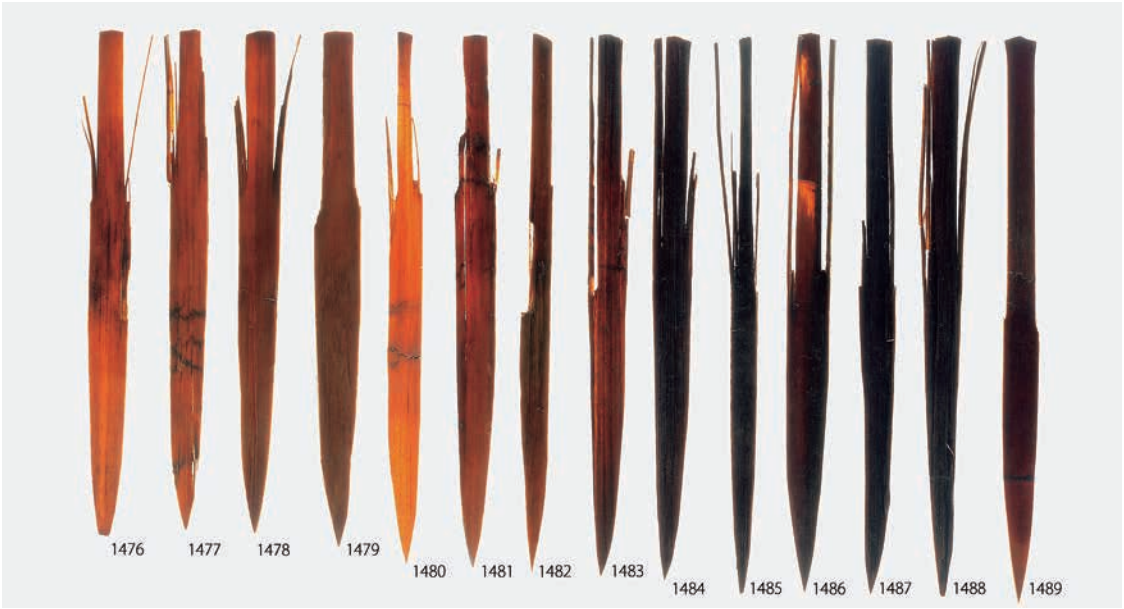
７　ＳＥ72上層（北から）

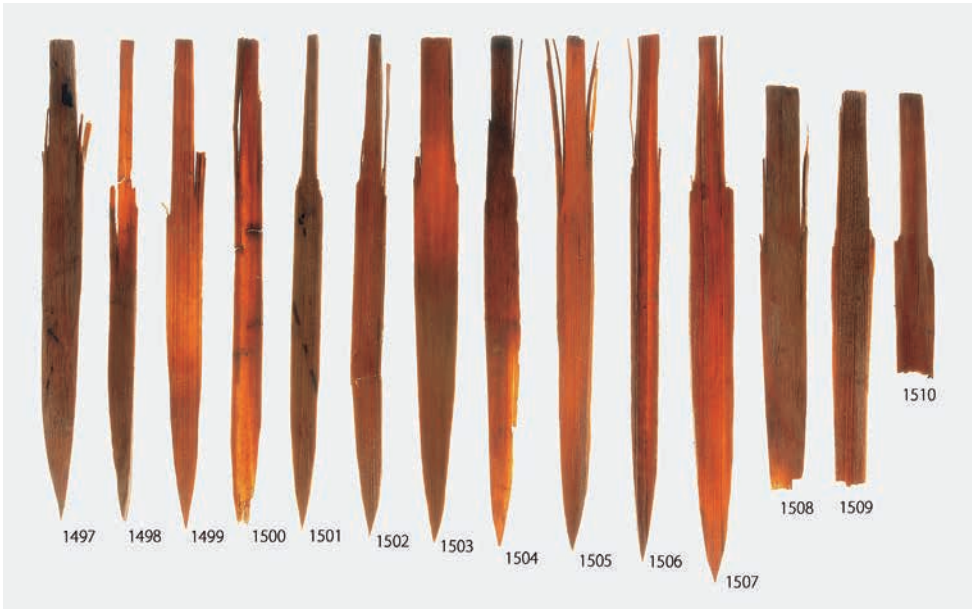
８　ＳＥ72最下層出土遺物

９　ＳＥ72黒色土器小壺（1448）

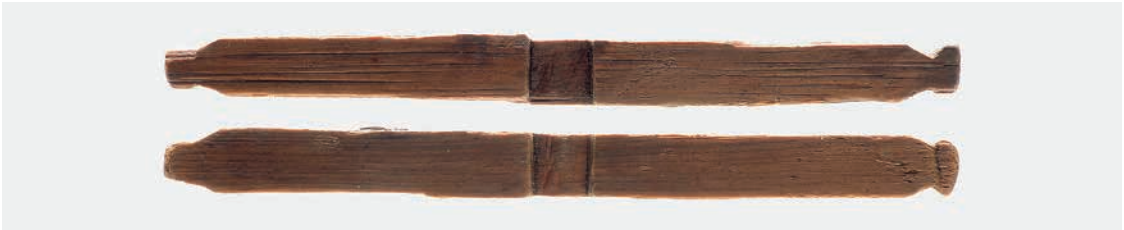


10　ＳＥ72横櫛（1520・1521）





11　ＳＥ72斎串（1476～1489、1497～1510）



12　ＳＥ72紡織具（1518・1519）

13　ＳＤ47鳥形木製品（1199）

例　　言

1．本書は、三重県松阪市和屋町に所在する朝見遺跡（第１・２次）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、平成 22 年度経営体育成基盤整備事業（朝見上地区）・平成 23 ～ 24 年度高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産部（旧農水商工部）から依頼を受けて実施した。

3．発掘調査の経費は、その一部を国庫補助金を得て三重県教育委員会が負担し、その他は三重県農林水産部から経費の執行委任を受けた。

4．調査の体制等は次の通りである。全ての調査主体は三重県教育委員会である。

平成 22 年度 範囲確認調査

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究Ｉ課　相場さやか

調査期間　平成 22 年度９月 14 日～ 10 月６日

対象面積　162,000㎡（範囲確認調査坑 160 カ所）

平成 22 年度 第１次調査

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究Ｉ課　相場さやか

調査期間　平成 22 年 10 月 27 日～ 11 月 19 日

調査面積　205㎡

平成 23 年度 第２次調査（本調査）

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究Ｉ課　　技師　相場さやか　萩原義彦

主幹　伊藤裕偉　　主査　大川操

調査期間　平成 23 年５月 25 日～ 12 月 22 日

調査面積　3,325㎡

平成 23 年度 第２次調査（工事立会調査）

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究Ｉ課　相場さやか

調査期間　平成 24 年２月 10 日、２月 15 日～ 17 日、２月 24 日

調査面積　87㎡

5．調査にあたっては、地元自治会、朝見上土地改良区をはじめ、松阪農林事務所、松阪市教育委員会、丸亀重機建設株式会社、株式会社北村組の協力を得た。

6．当報告書の作成業務は調査研究１課が行った。執筆は調査担当者が行い、目次と文末に明示した。第Ⅴ章の木製品樹種同定は、保存処理を行わなかった遺物は布谷知夫氏（三重県立博物館）に依頼し、保存処理を行った遺物は株式会社吉田生物研究所に委託した。動物遺存体の同定は、丸山真史氏（奈良文化財研究所）に依頼した。そのほかの自然科学分析は、委託先の株式会社九州テクノリサーチ（現・日鉄住金テクノロジー株式会社）・株式会社古環境研究所から提出されたものを掲載した。遺物の撮影は、相場・萩原・田中久生・小原雄也が行った。本書の編集は相場が行った。

7．現地調査および報告書作成にあたって以下の方々から有益なご教示を頂いた。（五十音順・敬称略）

植月学（山梨県立博物館）、榎村寛之（斎宮歴史博物館）、尾野善裕（京都国立博物館）、覚張隆史（北里大学医学部）、小林秀（三重県文化振興課）、杉原和恵（防府市教育委員会）、土肥孝（国際縄文学協会）、中島恒次郎（太宰府市教育委員会）、布谷知夫（三重県立博物館）、平尾政幸（京都市埋蔵文化財研究所）、平川南（国立歴史民俗博物館）、間渕創（三重県立博物館）、丸山真史（奈良文化財研究所）

8．本書が扱う記録類ならびに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。ご活用頂きたい。

凡　　例

地図類

1．本書で使用した地図類は、国土地理院発行の１：25,000 地形図「松阪」「松阪港」、三重県共有デジタル地図（平成 23 年測図）、松阪市発行１：2,500 都市計画平面図等を基にしている。

2．2006 三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号:三総合地第 93 号）。

3．調査区の座標は、測地成果 2000 に対応した新座標第Ⅵ系で標記している。本書での方位は座標北で示している。

遺構・遺物類

4．土層図は、層の区分を実線で表し、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の線よりも太い線で表現した。

5．土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行、1967 年初版、2003 年第 23 版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。

6．本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。

ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＫ：土坑　ＳＲ：旧流路　ＳＺ：不明遺構　Ｐｉｔ：柱穴・小穴

遺物類

7．当報告での遺物実測図の縮尺は遺物によって異なっている。土器は１／４縮小、石製品・金属製品は１／２縮小と１／３縮小を基本とした。木製品は１／６縮小を基本とし、櫛は１／２縮小、斎串は１／３縮小、その他小型品は１／４縮小とした。井戸枠や杭などの大型木製品は１／８縮小や１／ 10 縮小で掲載した。

8．遺物実測図のうち、上下の外郭線（口縁部・底部など）に空白を入れているものは、残存が少ないが既成事実に基づきおおよその大きさを推測して示したものである。当報告書では須恵器壺や製塩土器が相当する。

9．遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行、1967 年初版、2003 年第 23 版）を基準にした。緑釉陶器の色調は、『DIC カラーガイド 日本の伝統色』（大日本インキ化学工業株式会社、第５版、1989 年）を参考とし、黄色（830 鬱色（ひわいろ））、浅緑色（840 浅緑）、黄緑色（829 若草色）、緑色（826 鸚鵡緑（おうむみどり）パロットグリーン）、深緑（848 深緑）の５色に分類した。

10. 器種を示す用語は、「つき」は「坏」に統一し、「わん」は「椀」「碗」を慣例的使用に応じて使い分けた。

11. 遺物観察表は、土製品ほか（土器・石製品・金属製品）と木器類で異なった様式を用い、以下の要領で記載した。

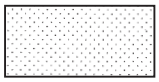
＜遺物観察表　凡例＞

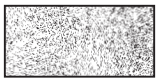
全般　報告番号……出土遺物実測図掲載番号である。
実測番号……実測段階の登録番号である。
調査区……１区・２区・３区などの大地区を記した。
小地区……調査時に設定したアルファベットと数字の組み合わせによるグリッド名を記した。
遺構……遺物の出土した遺構名や層名を記した。
特記事項……遺物の特徴となる事項を記した。土錘の重量や、木製品の残存状況は特記事項に記載した。

土器類　器種・質等……「弥生土器」・「須恵器」・「陶器」などの区分とその器種を記した。
法量……遺物の規格を記す。数値は各々の部位の最大径であり、内法や実測段階での接地面ではない。
調整・技法の特徴……内外面の特徴を記した。「A→B」は、Aの後にBが施されたことを示す。
胎土……小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
残存度……指示部位を 12 分割した際の残存度を示した。

木器類　取上番号……調査時の取り上げ番号である。
器種……大別分類＞細別分類＞器種・小分類を記載した。分類の参考にした文献は本文中に記載した。
木取り……木器加工時の木取りを記載した。
樹種……樹種の同定は、保存処理を行った遺物は（株）吉田生物研究所に委託した。そのほか保存処理を行わなかった遺物は布谷知夫氏（三重県立博物館）に依頼した。

12. 木製品実測図に用いたスクリーントーンは以下の通りである。


焼け


樹皮

写真図版

13. 遺物写真の番号は、遺物実測図の番号と対応している。なお、遺物の写真図版は縮尺不同である。

目　　次

Ⅰ　前言
1　調査の経緯……（相場）……1
2　文化財保護法等にかかる諸手続……（〃）……1
3　調査の経過……（〃）……2
4　発掘調査と記録の方法……（〃）……3

Ⅱ　位置と環境
1　地理的環境……（萩原・相場）……6
2　歴史的環境……（〃）……6

Ⅲ　遺構
1　範囲確認調査……（相場）……12
2　基本層序……（〃）……12
3　１区……（〃）……20
4　２区……（〃）……24
5　３区・４区……（〃）……24
6　５区……（〃）……29
7　６区……（〃）……30
8　７－１区・７－３Ａ区……（〃）……30
9　７－２区・７－３Ｂ～Ｅ区・７－４区……（〃）……37
10　７－５区・７－６区……（相場・萩原）……40
11　７－７区……（萩原）……44

Ⅳ　遺物
1　出土遺物の概要……（相場）……48
2　範囲確認調査……（〃）……48
3　１区……（〃）……48
4　２区……（〃）……51
5　３区・４区……（〃）……51
6　５区……（〃）……51
7　６区……（〃）……54
8　７－１区・７－３Ａ区……（〃）……58
9　７－２区・７－３Ｄ区・７－４区……（〃）……64
10　７－５区・７－６区……（相場・萩原）……111
11　７－７区……（萩原）……118

Ⅴ　自然科学分析
1　分析の目的……（相場）……159
2　朝見遺跡（第２次）木製品の樹種同定結果……（布谷知夫）……159
3　出土木製品の樹種同定結果……（株式会社吉田生物研究所）……162
4　自然科学分析報告（微化石分析）……（株式会社古環境研究所）……169
5　自然科学分析報告（昆虫化石同定）……（株式会社古環境研究所）……191
6　鍛冶・鋳造関連遺物分析調査結果……（株式会社九州テクノリサーチ）……192
7　赤色顔料分析……（相場）……200
8　朝見遺跡出土の動物遺存体……（丸山真史）……213

Ⅵ　調査のまとめ

1　朝見遺跡の変遷……（相場）……220
2　平安時代の遺構……（　〃　）……221
3　朝見遺跡の牛馬と祭祀……（　〃　）……226
4　平安時代の遺物……（相場・萩原）……227
5　平安時代における墨書土器の傾向……（相場）……232
6　出土木製品の樹種……（　〃　）……239
7　条里型地割の施工と朝見遺跡……（　〃　）……240
8　平安時代における朝見遺跡の実態……（　〃　）……244
9　民俗行事と今後の課題……（　〃　）……247

挿　図　一　覧

第１図　調査区配置図
第２図　遺跡位置図
第３図　遺跡周辺地形図
第４図　平成22・23年度確認調査坑位置図
第５図　調査区土層断面図（１）１～２区・４・５区
第６図　調査区土層断面図（２）６－１区
第７図　調査区土層断面図（３）７－１・７－３Ａ区
第８図　調査区土層断面図（４）７－２区
第９図　調査区土層断面図（５）７－４区
第10図　調査区土層断面図（６）７－５区
第11図　調査区土層断面図（７）７－７区
第12図　調査区平面図（１）５区
第13図　調査区平面図（２）６－１・６－２区・４区
第14図　調査区平面図（３）３区・４区
第15図　調査区平面図（４）７－１区
第16図　調査区平面図（５）２・７－１・７－３区
第17図　調査区平面図（６）１・７－２～４区
第18図　調査区平面図（７）７－４・７－５区
第19図　調査区平面図（８）７－５～７区
第20図　５区ＳＤ35平面図・立面図
第21図　７－１区ＳＤ38平面図
第22図　７－１区ＳＤ38杭列平面図・立面図
第23図　７－１区ＳＺ40平面図・立面図（１）
第24図　７－１区ＳＺ40平面図・立面図（２）
第25図　７－１区ＳＤ38・ＳＺ40模式図
第26図　７－２区ＳＫ48平面図・断面見通し図
第27図　７－５区ＳＥ72平面図・断面図・立面図
第28図　７－５区ＳＥ72模式図
第29図　７－５区ＳＥ80平面図・断面図
第30図　７－７区ＳＥ64平面図・断面図
第31図　出土遺物実測図（１）範囲確認調査
第32図　出土遺物実測図（２）１区
第33図　出土遺物実測図（３）２～４区
第34図　出土遺物実測図（４）５区
第35図　出土遺物実測図（５）６区
第36図　出土遺物実測図（６）７－１区
第37図　出土遺物実測図（７）７－１区
第38図　出土遺物実測図（８）７－１区
第39図　出土遺物実測図（９）７－１区
第40図　出土遺物実測図（10）７－１区
第41図　出土遺物実測図（11）７－１区
第42図　出土遺物実測図（12）７－１区
第43図　出土遺物実測図（13）７－１区
第44図　出土遺物実測図（14）７－１区
第45図　出土遺物実測図（15）７－１区
第46図　出土遺物実測図（16）７－２区
第47図　出土遺物実測図（17）７－２区
第48図　出土遺物実測図（18）７－２区
第49図　出土遺物実測図（19）７－２区
第50図　出土遺物実測図（20）７－２区
第51図　出土遺物実測図（21）７－２区
第52図　出土遺物実測図（22）７－２区
第53図　出土遺物実測図（23）７－２区
第54図　出土遺物実測図（24）７－２区
第55図　出土遺物実測図（25）７－２区
第56図　出土遺物実測図（26）７－２区
第57図　出土遺物実測図（27）７－２区
第58図　出土遺物実測図（28）７－２区
第59図　出土遺物実測図（29）７－２区
第60図　出土遺物実測図（30）７－２区
第61図　出土遺物実測図（31）７－４区
第62図　出土遺物実測図（32）７－４区
第63図　出土遺物実測図（33）７－４区
第64図　出土遺物実測図（34）７－４区
第65図　出土遺物実測図（35）ＳＤ47・53木器類
第66図　出土遺物実測図（36）ＳＤ47・53木器類
第67図　出土遺物実測図（37）ＳＤ47・53木器類
第68図　出土遺物実測図（38）７－２区
第69図　出土遺物実測図（39）７－２区
第70図　出土遺物実測図（40）７－４区
第71図　出土遺物実測図（41）７－４区
第72図　出土遺物実測図（42）７－２区・７－４区

第73図　出土遺物実測図（43）７－２区・７－４区
第74図　出土遺物実測図（44）７－５区
第75図　出土遺物実測図（45）７－５区
第76図　出土遺物実測図（46）７－５区
第77図　出土遺物実測図（47）７－５区
第78図　出土遺物実測図（48）７－５区
第79図　出土遺物実測図（49）７－５区
第80図　出土遺物実測図（50）７－５区
第81図　出土遺物実測図（51）７－５区
第82図　出土遺物実測図（52）７－５区
第83図　出土遺物実測図（53）７－５区
第84図　出土遺物実測図（54）７－５区
第85図　出土遺物実測図（55）７－５区
第86図　出土遺物実測図（56）７－５区
第87図　出土遺物実測図（57）７－５区
第88図　出土遺物実測図（58）７－５区
第89図　出土遺物実測図（59）７－５区
第90図　出土遺物実測図（60）７－５区
第91図　出土遺物実測図（61）７－５区
第92図　出土遺物実測図（62）７－５区
第93図　出土遺物実測図（63）７－５区
第94図　出土遺物実測図（64）７－５区
第95図　出土遺物実測図（65）７－５区
第96図　出土遺物実測図（66）７－７区
第97図　ＳＤ47植物珪酸体分析結果
第98図　ＳＤ53植物珪酸体分析結果
第99図　ＳＤ49植物珪酸体分析結果
第100図 ＳＤ52植物珪酸体分析結果
第101図 ＳＤ47植物珪酸体分析結果
第102図　ＳＥ72植物珪酸体分析結果
第103図　７－４区花粉ダイアグラム
第104図　ＳＥ72花粉ダイアグラム
第105図　ＳＤ47花粉ダイアグラム
第106図　７－３Ｄ区ＳＤ47花粉ダイアグラム
第107図　ＳＥ72種実ダイアグラム
第108図　７－３Ｄ区種実ダイアグラム
第109図　Ｆｅ0-Ｔｉ02二元平衡状態図
第110図　朝見遺跡の変遷（１）
第111図　朝見遺跡の変遷（２）
第112図　平安～鎌倉時代の大溝
第113図　緑釉陶器生産地の推移
第114図　ＳＤ47出土緑釉陶器の生産地
第115図　朝見遺跡出土斎串の型式分類
第116図　墨書される土器
第117図　食膳具の墨書位置
第118図　墨書土器出土遺構の比率
第119図　判読できる文字
第120図　ＳＥ72墨書土器出土位置図
第121図　第１・２次の主な墨書土器（１）
第122図　第１・２次の主な墨書土器（２）
第123図　多文字墨書土器の類例
第124図　主な刻書土器
第125図　斎串の樹種
第126図　火付木の樹種
第127図　杭における樹種選択の推移
第128図　調査区と周辺の小字
第129図　櫛田川下流域の郡・郷と荘園

表　一　覧

第１表　朝見上地区確認調査・発掘調査実施概要
第２表　朝見遺跡（第１・２次）調査概要
第３表　平成22年度範囲確認調査結果一覧表
第４・５表　　第１次・第２次調査遺構一覧表
第６～38表　出土遺物観察表（土製品ほか）
第39～44表　出土遺物観察表（木製品）
第45表　杭・井戸枠類樹種同定結果一覧
第46表　微化石分析資料一覧
第47表　植物珪酸体分析結果
第48表　花粉分析結果
第49表　種実計測値
第50表　種実同定結果（堆積物）
第51表　種実同定結果（水洗選別済み）
第52表　昆虫化石同定結果
第53表　鍛冶・鋳造関連遺物の履歴と調査項目
第54表　鍛冶・鋳造関連遺物の化学組成
第55表　鍛冶・鋳造関連遺物調査結果のまとめ
第56表　種名表
第57表　馬歯のストロンチウム同位体比
第58表　ウマ・ウシの集計表
第59表　ウマ・ウシの臼歯計測値
第60表　緑釉陶器の時期・生産地・器種分類結果
第61表　ＳＤ47出土緑釉陶器の時期・生産地
第62表　第１・２次調査出土墨書土器一覧
第63表　墨書土器の種類と器種
第64表　判読できる文字
第65表　杭の点数および樹種
第66表　条里溝一覧

写　真　一　覧

写真１　井戸枠材（1603）
写真２～７　樹種同定顕微鏡写真（１）～（６）
写真８　植物珪酸体分析
写真９　花粉・胞子・寄生虫卵（１）
写真 10　花粉・胞子・寄生虫卵（２）
写真 11　出土種実（堆積物）
写真 12　出土種実（水洗選別済み）
写真 13　昆虫写真
写真 14　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果
写真 15　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果
写真 16　鉄塊系遺物の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果
写真 17　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果
写真 18　鉄器片（鋳造品）の顕微鏡組織
写真 19　鉄器片（鍛造品）滓の顕微鏡組織
写真 20　鉄器片（鍛造品）の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果
写真 21　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果
写真 22　鉄器片（鋳造品）・坩堝の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果
写真 23　鉄器片（鍛造品）の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果
写真 24　鉄器片（鋳造品）の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果
写真 25　ＳＤ 38 出土のウマ
写真 26　ＳＤ 38 出土のウシ
写真 27　ＳＥ 72・ＳＤ 57 出土のウマ
写真 28　ＳＤ 38 出土のウシ
写真 29　条里型地割航空写真（昭和 23 年撮影）
写真 30　四藺生神事のようす
写真 31　面塚と虫送り

写　真　図　版　一　覧

巻頭図版１　ＳＤ 47 出土遺物
巻頭図版２　ＳＫ 48・ＳＤ 47 斎串・
　　ＳＤ 47 越州窯系青磁椀・ＳＤ 52 石帯
巻頭図版３　主な緑釉陶器
巻頭図版４　ＳＥ 72 上層・ＳＥ 72 最下層出土遺物
　　ＳＥ 72 黒色土器小壺・ＳＥ 72 横櫛
巻頭図版５　ＳＥ 72 斎串・ＳＥ 72 紡織具・
　　ＳＤ 47 鳥形木製品
図版表紙　現在の朝見上地区
写真図版１　調査前風景・１区（１）
写真図版２　１区（２）・２区・３区・４区
写真図版３　５区
写真図版４　６区
写真図版５　７－１区（１）
写真図版６　７－１区（２）
写真図版７　７－１区（３）
写真図版８　７－３区
写真図版９　７－２区（１）
写真図版 10　７－２区（２）
写真図版 11　７－４区
写真図版 12　７－５区（１）
写真図版 13　７－５区（２）
写真図版 14　７－７区
写真図版 15　出土遺物　土器類（１）
写真図版 16　出土遺物　土器類（２）
写真図版 17　出土遺物　土器類（３）
写真図版 18　出土遺物　土器類（４）
写真図版 19　出土遺物　土器類（５）
写真図版 20　出土遺物　土器類（６）
写真図版 21　出土遺物　土器類（７）
　　石製品・金属製品
写真図版 22　出土遺物　墨書土器（１）
写真図版 23　出土遺物　墨書土器（２）
写真図版 24　出土遺物　墨書土器（３）
写真図版 25　出土遺物　墨書土器（４）
写真図版 26　出土遺物　墨書土器（５）・刻書土器
写真図版 27　出土遺物　木器類（１）
写真図版 28　出土遺物　木器類（２）
写真図版 29　出土遺物　木器類（３）
写真図版 30　出土遺物　木器類（４）
写真図版 31　出土遺物　木器類（５）
写真図版 32　出土遺物　木器類（６）
写真図版 33　出土遺物　木器類（７）
写真図版 34　出土遺物　木器類（８）
写真図版 35　出土遺物　杭（１）
写真図版 36　出土遺物　杭（２）
写真図版 37　出土遺物　杭（３）

Ⅰ　前　　言

1　調査の経緯

a　調査の概要

松阪市東部に位置する朝見地区は、一級河川櫛田川左岸に広がる田園地帯で、松阪市の穀物生産の中枢を担っている。この地区は条里型地割が明確に残っており、佐久米古墳群・堀町遺跡など既に実態が明らかになっている遺跡も多く、松阪市内でも有数の遺跡密集地である。また、朝田寺や式内社など歴史ある寺社も点在している。

今回の調査は、高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）に伴って実施したものである。発掘調査の結果、平安時代や鎌倉時代の条里溝、大溝や井戸を確認し、多彩な遺物が出土した。

b　調査に至る経過

農業基盤整備事業の計画　朝見地区の水田用水源は櫛田川である。昭和 26 ～ 47 年の県営櫛田川沿岸農業水利改良事業によって整備された櫛田川の頭首工より取水し、同事業による幹線用水路が地区内を南東→北西方向に走っている。平成 21 年度、高生産性農業の実現と経営体育成を図るとともに、生活環境の一体的な整備を行うことにより、農業・農村の健全な発展に寄与することを目的とし、朝見上地区土地改良区（和屋町・立田町・朝田町）によって基盤整備事業が計画された。事業の総面積は、３町合わせて 1,590,000㎡である。

保護協議と分布調査　この基盤整備事業にかかる埋蔵文化財保護について、平成 21 年度に三重県農水商工部（現・農林水産部）から、工区内の埋蔵文化財の有無について照会があった。事業地内には堀町遺跡・四常遺跡・大角遺跡・中坪遺跡・朝見遺跡の存在が知られていた。平成 21 年 10 月に事業地内の分布調査を行ったところ、周知の遺跡周辺の地表面に遺物の散布が認められた。

これを受けて、平成 21 年 10 月 27 日、松阪農林事務所（以下、松阪農林）と埋蔵文化財センター（以下、センター）で協議を行い、範囲確認調査を実施することとなった。

朝見上地区の確認調査（第１表）　朝見上地区における対象面積は 799,060㎡と広大であるため、協議の結果、平成 22 ～ 25 年度の４カ年に渡って範囲確認調査を実施した。調査は松阪農林による労務提供で実施され、丸亀重機建設株式会社が土工部門の監理を行った。

朝見遺跡（第１・２次）調査の事前協議　第１・２次調査対象範囲は、162,000㎡で、平成 22 年度９月～ 10 月に確認調査を実施した。主に溝を検出し、墨書土器など多くの遺物が出土した。この結果を受け、センターは松阪農林に対し工事の施工にあたって保護措置が必要であると回答した。両者で協議の結果、要調査範囲のうち道路・水路・ポンプ場などの構造物建設予定地を調査対象とし、水田面については遺構面の掘削を行わないよう調整した。

2　文化財保護法等にかかる諸手続

発掘調査にかかる文化財保護法の諸通知は、以下により行われている。

・三重県埋蔵文化財保護条例第 48 条第１項
　平成 22 年９月９日付、松農環第 4236 － １号
　（県教育長あて県知事通知）「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知書」

【第１次調査】

・文化財保護法 99 条第１項
　平成 22 年 11 月２日付、教埋第 197 号
　（県教育長あて県埋蔵文化財センター所長報告）
・文化財保護法第 100 条第２項
　平成 23 年２月 22 日付、教委第 12 － 4409 号
　（松阪警察署長あて県教育長通知）

【第２次調査】

・文化財保護法 99 条第１項
　平成 23 年６月７日付、教埋第 295 号
　（県教育長あて県埋蔵文化財センター所長報告）
・文化財保護法第 100 条第２項
　平成 24 年１月５日付、教委第 12 － 4415 号
　（松阪警察署長あて県教育長通知）

3　調査の経過

a　各調査の概要

第１次調査　平成22年度に行った第１次調査は、水槽およびポンプ場施工予定地を対象とし、１～４区を設定した。調査は松阪農林による労務提供で工事立会の形式で実施し、丸亀重機建設株式会社が土工部門の監理を行った。

第２次調査　平成23年度に行った第２次調査は、道路・水路施工予定地を対象とし、５～７区を設定した。第２次の場合、各調査区の距離が離れていること、工期の問題があったことから、作業を円滑に進めるため複数の調査区で同時に調査を進めた。

本調査は、発掘調査業務（土工監理）と補助業務を株式会社イビソクに委託した。

工事立会調査　平成23年度に行った工事立会調査は、１区と７－３Ｅ区の間、７－４区と７－５区の間の２ヵ所を対象とした。これらは現況道路の通行止めを伴うため、本調査終了後に工事立会の形式をとった。この際出土した遺物は、隣接する調査区とともにまとめている。調査は松阪農林による労務提供で、株式会社北村組が土工部門の監理を行った。

b　発掘調査の経過

【第１次　調査日誌（抄）】2010年

10月27日～11月２日　確認調査後、１区調査開始。
11月４日～９日　２区調査。朝見小学校６年生、発掘調査見学会。
11月15日～19日　３・４区の調査。道具撤収。

【第２次　本調査　調査日誌（抄）】2011年

４月12日・４月22日　現地協議（松阪農林）。
５月26日　センターでの事前協議（イビソク）。
６月６日　現地協議（イビソク・北村組）。調査前風景撮影。
６月７日　現地協議（土地改良区・イビソク）。
６月９日　５－１区調査開始。
６月28日　７－１西区重機掘削開始。
７月１日　雨天で難航するも、５－１区掘削終了。
７月11日　７－１東区重機掘削開始。
７月12日　７－１東区で牛の下顎出土、杭を検出。
７月19日～21日　台風６号による休工。
７月25日　７－１東区で杭列を複数確認、馬の頭蓋骨出土。７－２区重機掘削開始。
７月27日　７－１区全景写真撮影。ＳＺ40検出。７－２区で土器が多量に出土し始める。
７月29日　７－１西区で1/20平面図作成、７－１東区で1/10平面図作成・杭取り上げ、７－２区で段階確認後1/40略測図作成、７－４区で重機掘削…と、同時進行で慌ただしさが増す。
８月１日　ＳＤ38で杭取り上げ、ＳＺ40解体。７－２区人力掘削。
８月４日　７－３Ａ区重機掘削開始。
８月４日～９日　７－２区ＳＤ47炭層から、毎日コンテナ２箱分の多彩な遺物が出土。ＳＫ48検出、実測、写真撮影。
８月10日　土肥孝氏来訪。ＳＫ48のご教示を頂く。
８月18日～29日　７－４区人力掘削。７－２区同様多量の遺物が出土。石帯１点目出土。
８月30日　７－７区重機掘削開始。７－４区全景写真撮影、７－３Ａ区人力掘削。
９月１日～５日　台風12号による休工。
９月１日　榎村寛之氏による墨書土器の指導。
９月８日　７－７区で馬歯出土。
９月９日　７－５区重機掘削開始。
９月12日　丸山真史氏による出土獣骨調査指導。
９月13日　松阪市記者会にて報道提供。榎村寛之氏による現地指導。
９月15日　７－５区ＳＥ72掘削開始。
９月17日　現地説明会は台風15号襲来で中止。プレハブで遺物の展示を行う。
９月26日　７－２区、７－４区ＳＤ47最下層を掘削。墨書土器や斎串が多量に出土。
９月27日　７－５区ＳＥ72上層で土師器坏出土。
９月28日　ＳＥ72最下層で祭祀遺物などが出土。高さ２ｍ以上の井戸枠を解体。
９月29日　７－６区重機掘削。７－７区ＳＥ64掘削。
10月２日　小林秀氏による墨書土器の指導。
10月３日　７－３Ｂ～Ｄ区重機掘削開始。
10月７日　７－３Ｄ区人力掘削。ＳＤ47炭層再び。
10月12日　ＳＤ47から斎串や鳥形木製品出土。
10月19日～25日　工事の都合による調査休止。
10月24日・25日　現地協議（松阪農林・北村組）。
10月31日　６－１区重機掘削開始。ＳＤ90検出。
11月２日　６－１区全景写真撮影。
11月15日　５－２区重機掘削開始。
11月22日　ＳＤ35で杭列検出、馬歯出土。
11月25日　５－２区全景写真撮影。
11月28日　７－３Ｅ区重機掘削開始。
12月１日　５－２区・７－３Ｅ区調査終了。

【第２次　工事立会調査　調査日誌（抄）】2012 年

２月 10 日　１区と７－３Ｅ区の間。ＳＤ１掘削。

２月 24 日　７－４区と７－５区の間（現況道路）を工事立会。石帯２点目が出土！

【その他、類例調査や調査指導など】

・2011 年 11 月 19 ～ 20 日　獣骨に関する類例調査。研究会「牧と考古学－牛をめぐる諸問題－」（帝京大学山梨文化財研究所）

・2011 年 12 月 14 日～ 15 日　施釉陶器に関する類例調査。（防府市教育委員会、太宰府市教育委員会）

・2013 年１月 11 日　尾野善裕氏、平尾政幸氏による、緑釉陶器に関する調査指導。

・2013 年１月 28 日　平川南氏による、墨書土器に関する調査指導。

ｃ　発掘調査の普及・公開

・センターＨＰ上で、発掘調査情報を提供した。

・2010 年 11 月、朝見小学校６年生現場見学（15 名）。

・2011 年９月 17 日、現地説明会開催予定であったが台風により中止。ただし、天候が回復したため、プレハブで遺物の展示を行った（参加者約 110 名）。

・2012 年３月「おもろいもん出ましたんやわ@三重 2011」で遺跡紹介と遺物展示（参加者約 60 名）。

・2010 ～ 2011 年、県松阪庁舎において発掘調査の速報展示を３回行い、出土資料などを展示した。

・2012 年９月 29 日、立田町公民館において地元への出前講座を実施（参加者約 25 名）。

・2013 年２月２日～ 2013 年３月 24 日、松阪はにわ館「松阪からこんなのでました’09 ～ 12」（松阪市文化財センター主催）で遺物 81 点を展示。同３月２日市民講座で遺跡紹介（参加者約 60 名）。

・2013 年３月３日、条里制・古代都市研究会にて調査事例報告（参加者約 100 名）。2014 年３月刊行『条里制・古代都市研究』29 号に遺跡紹介掲載。

・2013 年４月 10 日～６月 12 日、斎宮歴史博物館「いにしえの赤色」で朱墨付着の転用硯（1246）を展示。

4　発掘調査と記録の方法

ａ　掘削の方法

調査区は田面に設定されていたため、まず調査区と廃土置き場の現耕作土・コンクリート製用水路を除去し、スペースの確保を行った。

工事と調査が同時進行し工期が迫るなか、大溝が何本も交錯する調査となり、遺構の掘削には適宜重機を用いた。

なお、埋戻しは基本的に工事施工業者が行った。

ｂ　地区設定

第１次調査　松阪農林の都合により、南から順に１～４区を設定した。ポンプ場と水槽建築予定地にあたる。調査時には４ｍ四方のグリッドを任意の方位で設定し、1/40縮尺の遺構カードを作成した。ただし、隣接する第２次調査区との関係上、報告書には第１次調査時のグリッドは掲載していない。

第２次調査　北から順に５～７区を設定した。朝見遺跡のある和屋町では条里型地割の正方形を活かした耕地区画整備が検討されたため、現状で水路が流れる位置に新しい道路・水路が通る工事計画となった。そのため、道路・水路建築予定地（５～７区）に関しては区画に沿った調査区設定となり、必然的に条里溝の上を掘削することとなった。

平成 23 年度は、和屋町西側の発掘調査と基盤整備工事が同年度内に行われ、かつ複数の施工業者が工事を担当していたため、発掘調査は工事の全体計画と進捗状況にあわせて進められることとなった。したがって、１つの調査区内でも調査時期が異なる小地区が存在しており、それぞれ枝番を設定して対応している。

遺物の取り上げや遺構カード作成時に用いる４ｍ四方のグリッド設定は、国土座標に則ったものではなく条里型地割の方向に沿った設定とした。第２次調査は対象範囲が広大であったため、地区設定は大地区（アルファベット大文字）→小地区（アルファベット小文字・数字）に分けて行った。まず、もっとも南端に位置する５区を大地区Ａとし、第２次調査範囲が全て収まるようＡ→Ｍの大文字を付与した。小地区は、４ｍグリッドが 25 列× 25 列並ぶ正方形とし、西→東方向に数字1→ 25 の数字を、北→南方向にａ→ｙのアルファベットを付与した（第1図）。

ｃ　遺構番号

平成 22 年度第１次調査では、１～ 12 番を用いた。

平成 23 年度第２次調査では、31 ～ 90 番を用いた。調査開始日から時系列に沿って機械的に番号を付与したため、調査区をまたいでいる場合がある。なお、平成 24 年度第３次調査では 93 番を使用している。

d　遺構図面

略測図は、第１次調査では遺構検出段階で４ｍグリッド単位の1/40縮尺略測図をした。第２次調査では、主な遺構が大規模な溝であったため、1/40縮尺略測図は作成せず1/100縮尺略測図のみを作成した。

平面図は1/20縮尺で手書き実測を行った。検出した遺構が溝のみであった７－１区や５－２区は1/50縮尺を用い、７－３Ｅ区はデジタル測量を行った。個別の詳細図は、適宜1/10縮尺平面図・立面図等を手書き実測した。

断面図は、ほぼ全ての調査区で1/20縮尺手書き実測を行った。隣接した区間が多いため、３区や５－２区など一部の調査区については実測図を報告書に掲載せず、本文中で層序のみを記載した。

e　遺構写真

全景写真や個別遺構の写真は４×５判、６×７判で撮影した。調査の進捗など、細かな記録は35㎜判を撮影し、適宜デジタル写真を撮影した。

f　遺物類の保存処理と収蔵

出土遺物は、報告書掲載遺物（Ａ遺物）と未掲載遺物（Ｂ遺物）に区分を行った。未掲載遺物のうち、緑釉陶器・墨書土器は全点参考資料として収蔵した。

木製品は、保存処理を行った個体はＡ遺物として収蔵した。処理を行わなかった杭等は基本的に記録保存としたが、自然乾燥させたものはＡ遺物とした。動物遺存体は、写真図版25・26の２点はＰＥＧ含浸処理法で保存処理を行い、残りはアクリル系合成樹脂を塗布した上でＡ遺物とともに収蔵した。（相場）

第１図　調査区配置図　（１：4,000）

第１表　朝見上地区確認調査・発掘調査実施概要

調査年度	範囲確認調査							発掘調査		
	遺跡名（所在地）	確認面積	範囲確認調査坑数	現状	調査期間	主な遺構	対応	遺跡名・次数	調査面積	形式
平成22年度	朝見遺跡（和屋町）	162,000㎡	160ヶ所（1,437㎡）	水田	20100914～20101006	溝	要調査	朝見遺跡（第1次）	205㎡	工事立会
平成23年度	堀町遺跡（朝田町）	123,020㎡	66ヶ所（396㎡）	水田	20111219～20111227	溝 土坑 井戸	要調査	朝見遺跡（第2次）	3,412㎡	本調査 工事立会
	四常遺跡（朝田町）	4,900㎡	3ヶ所（18㎡）	水田	20111214	なし	施工可			
	大角遺跡（朝田町）	1,060㎡	2ヶ所（12㎡）	水田	20111214	溝	要調査			
	朝見遺跡	40,080㎡	29ヶ所（248㎡）	水田	20111214～20111219	溝	要調査			
平成24年度	中坪遺跡（立田町）	131,000㎡	74ヶ所（444㎡）	水田	20121203～20121208	溝 土坑	要調査	堀町遺跡（第5次）	4,396㎡	本調査
								大角遺跡（第1次）	64㎡	工事立会
	朝見遺跡	150,000㎡	55ヶ所（330㎡）	水田	20121211～20121214	溝	要調査	朝見遺跡（第3次）	236㎡	工事立会
平成25年度	朝見遺跡	187,000㎡	64ヶ所（384㎡）	水田	20130904～20130913	溝 土坑	要調査	堀町遺跡（第6次）	5,463㎡	本調査
								中坪遺跡（第1次）	1,955㎡	本調査
								朝見遺跡（第4次）	452㎡	工事立会
平成26年度								中坪遺跡（第2次）	1,073㎡（予定）	本調査
								朝見遺跡（第5次）	8,922㎡（予定）	本調査
平成27年度以降								未定	未定	本調査

第２表　朝見遺跡（第１・２次）調査概要

次数	調査区	面積	調査期間	現状	施工後	時代	主な遺構・概要
第1次	1	82㎡	20101027～20101102	水田	水槽	平安～鎌倉	鎌倉時代の大溝。
	2	64.5㎡	20101104～20101109	水田	ポンプ場	平安～鎌倉	鎌倉時代の大溝。
	3	36㎡	20101115～20101119	水田	ポンプ場	鎌倉	
	4	22.5㎡		水田	ポンプ場	鎌倉	
第2次	5-1	277㎡	20110609～20110701	水田	水路	古墳～平安	平安後期～室町の条里溝（東西方向）。
	5-2	365㎡	20111114～20111128	水路 道路	道路	平安～室町	平安後期～室町の条里溝（東西方向）。
	6-1	340㎡	20111031～20111104	水路 水田	道路	古代～近世	平安後期の条里溝（東西方向）、近世の条里溝（南北方向）。 古代の旧流路。
	6-2	3㎡	20110922	水田	ポンプ場	古代？	古代の旧流路。
	7-1	415㎡	20110701～20110803	水田	水路	鎌倉～室町	鎌倉～室町の条里溝（東西方向）。 鎌倉の堰・牛馬骨。
	7-2	218㎡	20110725～20110901, 0926	水田	道路 水路	平安～鎌倉	平安前期の大溝（遺物多量）。 鎌倉の大溝。
	7-3A	215㎡	20110804～20110907	水田	水路	平安	平安後期の溝（南北）。
	7-3B	60㎡	20111004～20111014	水田	水路	中世～現代	16世紀の水路・昭和前半の水路攪乱。
	7-3C	139㎡		水田	水路	中世～現代	16世紀の水路・昭和前半の水路攪乱。
	7-3D	116㎡	201101003～20111014	水田	水路	平安～鎌倉	平安～鎌倉時代の大溝。
	7-3E	177㎡	20111128～20111201	道路	道路 水路	室町・現代	16世紀の水路・昭和前半の水路攪乱。
		75㎡	20120210～20120217	道路	道路 水路	鎌倉	工事立会、7-3E区と１区の間。 鎌倉時代の大溝。
	7-4	188㎡	20110729～20110916, 0926	水田	水路	平安～鎌倉	平安前期の大溝（遺物多量）。 平安後期～鎌倉の大溝。
		12㎡	20120224	道路	水路	平安	工事立会、7-4区と7-5区の間。 平安後期の溝から石帯出土。
	7-5	595㎡	20110909～	水田	道路 水路	平安～近世	平安前期の井戸、大溝、溝。 中世・近世の旧流路。
	7-6	17㎡	20110929	道路	水路	近世	近世の旧流路。
	7-7	200㎡	20110830～20110915	水田	水路	平安～鎌倉	平安後期の条里溝（東西方向）。中世の井戸。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

朝見遺跡（1）は、行政区分上において松阪市和屋町に位置している。松阪市は、東は多気郡明和町、西は奈良県、南は多気町・大台町、北は津市と接する。面積は623.77㎢と広域で、南北に長い三重県のほぼ中央部を東西方向に広く占めている。

松阪市には、多くの河川が東流あるいは北流しており、櫛田川やその支流である祓川は、とりわけ流域規模が大きい。両河川は氾濫を起こして幾度にも渡って流れを変えながら現在にいたっており、その結果、両河川の下流域には広大な沖積平野が形成される。この沖積平野部の背後には丘陵地帯が広がっている。祓川右岸には、明野原台地と呼ばれる洪積台地が東方に広がっている。

朝見遺跡は、櫛田川左岸の沖積平野に位置し、第１・２次調査区の標高は海抜６～７ｍ前後である。

2　歴史的環境

当遺跡周辺は松阪市内でも有数の遺跡密集地帯で、沖積平野やそれを取り巻く周辺丘陵地帯・洪積台地上で多くの遺跡が存在する。そこで、朝見遺跡が存続した時期を中心として、弥生時代後期・古墳時代・平安～鎌倉時代について発掘調査例などをもとに各遺跡の概要を述べる。

弥生時代後期　朝見遺跡と隣接する瀬干遺跡（２）では、計８基の方形周溝墓が検出され、いわゆる「パレススタイル壺」が出土した。朝見遺跡は比較的広大な面積を有しているが、西端部については瀬干遺跡と同様の遺構が発見される可能性が高い。

櫛田川を挟んで対岸の約４㎞東南に位置する金剛坂遺跡（３）・織糸遺跡（４）・寺垣内遺跡（５）は、前期の集落をはじめとして中・後期から古墳時代初頭にかけて、多くの方形周溝墓が確認され、弥生時代を通じて安定した居住が確認される。

約1.5㎞南に位置する天王山遺跡（６）では、竪穴住居と方形周溝墓が確認されている。西へ約２㎞の村竹コノ遺跡（７）は、環濠・竪穴住居・土坑・方形周溝墓などが検出された大規模な環濠集落である。丘陵上に立地する草山遺跡（８）は、後期から断続的に営まれた大規模な集落で、人・獣・鏡などの土製品が出土した方形台状遺構を検出し、小銅鐸が出土した。朝見遺跡と一連の遺跡群と考えられる堀町遺跡（９）は、村竹コノ遺跡と同じく環濠・土坑・井戸が確認されるなど大規模な集落とみられているが、銅鐸形土製品が出土していることが特筆される。杉垣外遺跡（10）では、調査は行われていないが、環濠の出土遺物から弥生時代後期とみられる。

このように、弥生時代後期には遺跡の数が爆発的に増加する。当該地は環濠を有する集落が多いことが特徴で、伊勢湾西岸域を考える上で重要な地域である。

古墳時代　朝見遺跡周辺には、複数の古墳が認められ、当該地には古墳を造営する基盤があったことが推測される。

堀町遺跡と隣接して佐久米古墳群が存在する。前方後円墳と推測される大塚山古墳（11）は既に削平され、円墳とみられる丸山古墳（12）や糠塚古墳（13）は原形を失うほど損壊を受けている。しかしながら、大塚山古墳は、刀剣・槍・鏃・冑・銅鏡・勾玉などの出土遺物の豊富さによって著名である。朝見遺跡のある和屋町では古墳７基が存在したと言われているが、現在は面塚と呼ばれる１基だけが地表面に残っている。そのほか、朝田町に１基（俗称森塚あるいは天土塚）、立田町（旧・立利町）字北浦に１基存在したといわれており、神宮徴古館には、伝出土の仿製三獣鏡が所蔵されている。

飛鳥・奈良時代　櫛田川下流域左岸は、伊勢国飯野郡の領域である。飯野郡は、度会郡・多気郡と合わせて、国司権力が及ばない伊勢神宮の神領「神三郡」にあたる。官道の古代伊勢道は、近世参宮街道とほぼ同じ位置に通っていたと考えられ、官道は斎宮跡地内で側溝を有する幅約９ｍの直線道として確認される。櫛田川下流域には、この官道と軸を同一とする飯野郡条里型地割（北から約15°東偏）が広がっており、施工年代は古代末頃と推測されている。

朝見遺跡から約５㎞東に位置する斎宮跡（14）は、昭和 45 年度から継続して調査が行われており、朝見遺跡の発掘調査成果と関連する可能性が高い。相可出張遺跡（15）は飛鳥時代の石組遺構が検出され、禊の場であった可能性が指摘される。琵琶垣内遺跡（16）は奈良時代末頃にピークを迎える集落で、「下厨前」「厨前」などといった墨書土器がみられることから、斎宮寮に貢納する供物の供給地として機能していたと推測される。大雷寺廃寺（17）は、奈良時代後期から平安時代前期頃の寺院とされ、軒瓦が発見されている。天王山遺跡や丸野･中谷遺跡（18）では奈良時代の竪穴住居が検出されており、両遺跡とも集落跡とみられる。

平安時代　飯野郡･多気郡域内では、延暦 22 年（803）に川合荘が、弘仁 12 年（821）には大国荘が成立する。両荘は、東寺が持っていた荘園の中でも特に重要なものであったが、神宮による強い圧迫と櫛田川の氾濫によって 12 世紀には崩壊している。

飯野郡域では、大川上遺跡（19）で９世紀後半の神宮寺の存在を示唆する墨書土器「神宮寺」が複数出土している。大蓮寺遺跡（20）では、飯野郡条里プランと軸を同じくする 10 世紀後半の掘立柱建物と区画溝が検出される。大蓮寺遺跡からは陰刻花文の施された猿投窯産の緑釉陶器が出土しており、朝見遺跡と一連の遺跡群と捉えられる。

多気郡域では、沿岸部に位置する南山遺跡（21）で奈良～鎌倉時代の遺物が出土しており、櫛田川・祓川河口部の集落と考えられる。東裏遺跡（22）では、越州窯系青磁椀が出土している。カウジデン遺跡（23）では役所跡とみられる５間×４間の四面庇の掘立柱建物が確認され、出土遺物には土馬や斎串などがある。多気郡条里との関わりが指摘される巣護遺跡（24）では､石帯や緑釉陶器が出土している。

平安時代後期～中世　堀町遺跡では、掘立柱建物・井戸・土坑などが確認されており大規模な集落が営まれていたとみられる。約 2.5㎞南に位置する横地西ノ垣内遺跡（25）では、平安から中世にかけての集落跡が確認されている。山添遺跡（26）は、鎌倉から室町時代にかけて掘立柱建物や井戸が検出される。櫛田遺跡群のかん志ゆう地区（27）では鎌倉時代の掘立柱建物・溝が確認されており、この遺跡群も山添遺跡と同様に中世集落とみられる。草山遺跡は、平安時代から鎌倉時代にかけて南東隅に土坑を有する掘立柱建物や井戸などで集落が構成される。斎宮跡地内にもまとまった集落遺跡がみられる。中坪遺跡（28）は平成 25 年度に発掘調査が行われ、室町時代の溝や井戸が多数確認される。

概して平安時代後期からの遺跡は、全体的に中世まで継続する遺跡が多いようである。（萩原・相場）

〔 参考文献 〕

・伊藤裕偉 2004「斎宮寮・伊勢道・条里」『斎宮歴史博物館研究紀要』14
・三重の古瓦刊行会 1996『三重県の古瓦』
・多気町史編纂委員会 1992『多気町史』通史
・松阪市 1978『松阪市史　第２巻』
・松阪市教育委員会 1986『草山遺跡発掘調査報告書』
・明和町 2005『明和町史』斎宮編
・明和町教育委員会 1971『金剛坂遺跡発掘調査報告』
・三重県教育委員会 1979『三重県埋蔵文化財年報９』
・三重県教育委員会 1979『山添遺跡発掘調査報告』
・三重県教育委員会 1980『昭和 54 年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
・三重県教育委員会 1985『昭和 59 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
・三重県埋蔵文化財センター 1995『明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・巣護遺跡』
・三重県埋蔵文化財センター 1996『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡』、同 2000『瀬干遺跡（第２次）発掘調査報告』
・三重県埋蔵文化財センター 1997『櫛田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ』
・三重県埋蔵文化財センター 1999『横地西ノ垣内遺跡発掘調査報告』
・三重県埋蔵文化財センター 1999『大川上遺跡発掘調査報告』
・三重県埋蔵文化財センター 2003『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』
・三重県埋蔵文化財センター 2003『堀町遺跡』
・三重県埋蔵文化財センター 2006『琵琶垣内遺跡（第１・４次）発掘調査報告』
・三重県埋蔵文化財センター 2006『織糸遺跡』
・三重県埋蔵文化財センター 2006『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』
・三重県埋蔵文化財センター 2009『村竹コノ遺跡』
・三重県埋蔵文化財センター 2012『相可出張遺跡（第２次）発掘調査報告』
・三重県埋蔵文化財センター 2012『大蓮寺遺跡（第２次）現地説明会資料』

第２図　遺跡位置図　（１：50,000）〔国土地理院「松阪」「松阪港」１：25,000より〕

第３図　遺跡周辺地形図（１：15,000）

第４図　平成22・23年度確認調査坑位置図（１：5,000）

朝見遺跡
平成23年度の範囲確認調査坑には、「23-」を冠している。
0
200m

Ⅲ　遺　構

1　範囲確認調査

a　範囲確認調査の概略（第４図）

発掘調査に先立ち、平成 22 年度９月に事業地内の範囲確認調査を行った。調査では、160 ヶ所に対して４×２ｍの調査坑を設定した。該当箇所の現況は全て水田で、現代の幹線用水路より西側に１～44・47 ～ 158 を設定し、東側に 45・46、160・161 を設定した(1)。

b　範囲確認調査の遺構

遺構は、主に溝および流路で、時期は平安時代から鎌倉時代が主体である。調査坑全面が旧流路という区間もあった。

次に、特筆すべき調査坑について、本調査で見つかった遺構と関連付けながら述べる。

弥生時代　７－５区の南東側に位置する No.22 は、表土直下で弥生時代後期の土坑を検出し、高坏（第 31 図３～６）が出土した。この付近は今回調査を行わなかったが、弥生時代の集落が展開している可能性がある。

古墳時代～飛鳥・奈良時代　No.92・94 ～ 97 は旧流路域にあたり、これは６－１区ＳＲ 88 と同一の流路と考えられる。第２次調査において、ＳＲ 88 からはほとんど遺物が出土しなかったが、No.97 からは古墳時代後期から古代の範疇と考えられる土師器類（第 31 図７～９）が出土している。

平安時代　７－３Ａ区に隣接する No.40 は、調査坑全面が旧流路にあたり、底部に「至良」？と書かれた平安時代前期の土師器坏(第 31 図 15)が出土した。位置は平安時代後期の溝と考えられるＳＤ 56 の直上にあたるため、混入遺物と考えられるが、朝見遺跡の墨書土器を考える上で重要である。

７－５区自然流路ＳＤ 66 付近にある No.16 からは、包含層から平安時代の土師器坏・灰釉陶器・炉床に近い部位とみられる鉄滓が出土した。

中世　７－７区直上にあたる No.12 からは、底部に墨書「十」と書かれた 12 世紀後半代の山茶碗など(第 31 図 22・23）が出土した。

2　基本層序

a　朝見遺跡第１・２次の基本層序

調査区ごとの詳細は後述することとし、ここでは第２次調査全体の層序を概観する。

朝見遺跡の範囲は、南北約 1.1km、東西約 1.5km と広大である。立地は全て沖積地で、大部分が水田である。標高は海に向かって徐々に低くなり、もっとも上流の南西端では標高 8.0 ｍ、もっとも下流の北端では標高 3.0 ｍで、高低差は約 5.0 ｍである。第１・２次調査区内では、南端で標高 6.0 ｍ、北端で標高 4.0 ｍ、現在の集落は標高 6.5 ｍ程である。また､朝見遺跡の北に位置する中坪遺跡(標高約 4.0 ｍ)と堀町遺跡（標高 2.1 ～ 3.0 ｍ）とは、遺構検出面の堆積状況や埋土に共通点が見出せる地区がある。

基本層序は、以下の通りである。

① 現代耕作土
② 旧耕作土～床土
③ 包含層Ⅰ（室町時代～近世）
　　Ⅱ（平安時代後期以降）
　　Ⅲ（平安時代前期以前）
④ 地山（遺構検出面はベースａ・ｂ、その下にベースｃ～ｅが堆積する）

まず現代耕作土が約 20cm 堆積し、その下に室町時代～近世の遺物を含む床土と旧耕作土がみられる。この床土と旧耕作土は、地区によって２～４回の互層が観察され、繰り返し耕作を行ったことがわかる。

包含層は、形成された時期によって３つに細別されるが、地区によっては全くみられない所もあり、その場合は現代耕作土・床土を除去し、すぐに遺構検出面となる。包含層Ⅰは、５区・７－１区・７－５区・７－７区などで確認される。包含層Ⅱは、７－２区・７－４区で確認され、特に７－４区では遺構検出面直上に炭混じりの層として堆積している(第９図 39 ～ 43 層)。包含層Ⅲは７－２区・７－５区のみにみられ、平安時代前期の遺構検出面となっている（第８図 24・25 層、第 10 図６層)。

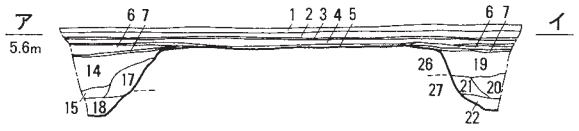
遺構検出面は浅黄色シルト（土層断面図ベース

第３表　平成 22 年度範囲確認調査結果一覧表

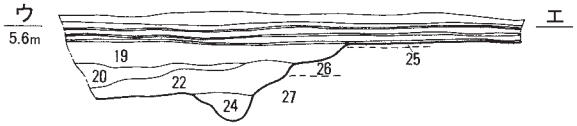
年度	調査坑No.	包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺 構	遺 物
22	1	—	—	—	—
22	2	—	—	—	—
22	3	—	—	—	—
22	4	—	—	—	—
22	5	90cm	—	—	—
22	6	—	—	—	—
22	7	105cm	125cm	土坑か	—
22	8	98cm	—	—	土師器
22	9	90cm	—	—	—
22	10	—	—	—	—
22	11	—	—	—	—
22	12	—	45cm	溝２条	土師器・山茶碗
22	13	—	60cm	溝２条	土師器
22	14	62cm	—	—	—
22	15	—	60cm	溝２条	—
22	16	98cm	—	—	土師器・土錘・灰釉陶器・鉄滓
22	17	64cm	—	—	—
22	18	49cm	—	—	土師器
22	19	-	60cm	溝か	—
22	20	76cm	—	—	—
22	21	70cm	—	—	土師器・須恵器
22	22	—	24cm	土坑か	弥生土器
22	23	—	42cm	ピット・溝	土師器
22	24	17cm	26cm	溝	土師器
22	25	—	—	—	—
22	26	—	30cm	ピット・溝	土師器
22	27	60cm	—	—	土師器
22	28	—	33cm	溝か	土師器
22	29	—	63cm	溝か	土師器
22	30	—	50cm	溝か	土師器
22	31	46cm	70cm	落ち込み	土師器
22	32	—	37cm	溝か	土師器
22	33	—	63cm	溝	—
22	34	38cm	—	—	土師器
22	35	43cm	—	—	—
22	36	—	57cm	溝・ピット	—
22	37	80cm	(111cm)	落ち込み	土師器
22	38	—	(80cm)	旧流路	土師器
22	39	—	65cm	ピット	—
22	40	104cm	(136cm)	旧流路	土師器
22	41	102cm	—	—	—
22	42	90cm	(110cm)	—	土師器
22	43	—	70cm	落ち込み	土師器
22	44	—	—	—	—
22	45	—	96cm	ピット	土師器
22	46	—	—	—	—
22	47	—	—	—	—
22	48	—	—	—	—
22	49	—	—	—	—
22	50	—	—	—	—
22	51	—	—	—	—
22	52	—	—	—	—
22	53	—	—	—	—
22	54	—	—	—	—
22	55	—	—	—	—
22	56	—	—	—	—
22	57	—	—	—	—
22	58	—	—	—	—
22	59	28cm	50cm	溝	—
22	60	—	—	—	土師器
22	61	—	—	—	—
22	62	—	—	—	—
22	63	—	—	—	—
22	64	—	—	—	—
22	65	—	—	—	—
22	66	—	—	—	—
22	67	—	—	—	—
22	68	—	—	—	—
22	69	—	—	—	—
22	70	—	—	—	—
22	71	—	—	—	—
22	72	—	—	—	—
22	73	—	—	—	—
22	74	—	—	—	—
22	75	—	—	—	—
22	76	—	—	—	—
22	77	—	—	—	—
22	78	—	—	—	—
22	79	—	—	—	土師器
22	80	72cm	88cm	ピットか	土師器
22	81	—	—	—	—
22	82	—	—	—	—
22	83	—	75cm	旧流路	土師器
22	84	—	—	—	—
22	85	—	—	—	—
22	86	—	—	—	—
22	87	—	—	—	—
22	88	—	—	—	—
22	89	—	50cm	土坑か	土師器
22	90	(80cm)	—	—	—
22	91	(100cm)	—	—	—
22	92	(120cm)	(180cm)	旧流路か	—
22	93	(100cm)	—	—	—
22	94	—	(89cm)	旧流路	土師器
22	95	—	(75cm)	旧流路	土師器
22	96	—	(84cm)	旧流路	土師器
22	97	—	(131cm)	旧流路	土師器・須恵器
22	98	—	(44cm)	溝か	土師器
22	99	—	(50cm)	ピット・土坑	土師器
22	100	—	(52cm)	土坑か	土師器
22	101	—	—	—	—
22	102	—	(52cm)	溝か	—
22	103	—	25cm	溝か	土師器
22	104	—	—	—	土師器・山茶碗
22	105	—	42cm	土坑	土師器
22	106	—	—	—	—
22	107	—	65cm	ピット	土師器
22	108	—	48cm	溝か	土師器
22	109	—	52cm	ピット	—
22	110	—	(147cm)	旧流路か	—
22	111	—	—	—	—
22	112	—	—	—	—
22	113	—	—	—	—
22	114	—	—	—	近世陶磁器
22	115	—	—	—	—
22	116	—	—	—	—
22	117	—	52cm	溝	土師器
22	118	—	—	—	—
22	119	—	—	—	—
22	120	—	—	—	—
22	121	—	—	—	—
22	122	—	—	—	—
22	123	—	—	—	—
22	124	—	—	—	—
22	125	—	—	—	土師器・山茶碗
22	126	—	—	—	—
22	127	—	—	—	土師器
22	128	—	52cm	ピット	土師器
22	129	43cm	—	—	土師器
22	130	—	—	—	—
22	131	—	—	—	—
22	132	—	—	—	—
22	133	—	—	—	土師器
22	134	—	—	—	—
22	135	—	—	—	土師器
22	136	—	—	—	—
22	137	—	—	—	—
22	138	—	—	—	—
22	139	—	—	—	—
22	140	—	—	—	—
22	141	—	—	—	—
22	142	—	—	—	—
22	143	—	—	—	—
22	144	—	—	—	土師器
22	145	—	50cm	溝か	土師器
22	146	—	37cm	溝か	—
22	147	—	30cm	溝か	—
22	148	—	—	—	—
22	149	—	—	—	—
22	150	—	—	—	山茶碗
22	151	—	—	—	—
22	152	—	—	—	—
22	153	—	—	—	—
22	154	—	—	—	土師器
22	155	—	—	—	土師器
22	156	—	—	—	土師器
22	157	—	—	—	—
22	158	—	—	—	—
22	159	—	—	—	—
22	160	—	—	—	土師器
22	161	—	55cm	溝	土師器

（　）…括弧内は遺構上面の深さではなく掘削深

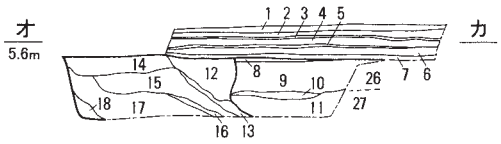
1区 南壁土層断面



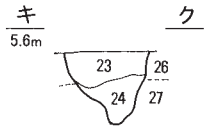
1区 西壁土層断面



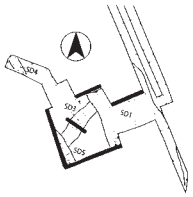
1区 北壁土層断面



1区 SD3



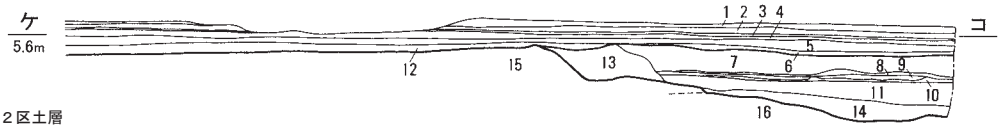
断面位置図 1区



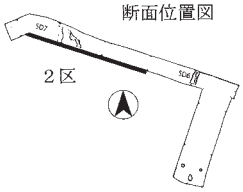
1区土層

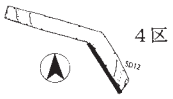
1 5Y7/2 灰白色土 〔現代耕作土〕
2 2.5Y6/6 明黄褐色土 〔旧耕作土Ⅰ〕
3 5Y7/2 灰白色シルト 〔床 土Ⅰ〕
4 2.5Y6/8 明黄褐色土 〔旧耕作土Ⅱ〕
5 5Y7/2 灰白色シルト 〔床 土Ⅱ〕
6 2.5Y7/6 明黄褐色土 〔旧耕作土Ⅲ〕
7 2.5Y6/6 明黄褐色シルト 〔床土Ⅲ〕
8 2.5Y6/1 黄灰色シルト（細粒砂混じり）
9 2.5Y6/2 にぶい黄色粘質土（暗灰黄色・黒褐色ブロック多く含む） 〔ＳＤ１〕土取り痕跡
10 2.5Y3/2 暗灰黄色シルト質土
11 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土（暗灰黄色・黒褐色ブロック多く含む） 〔ＳＤ１〕土取り痕跡
12 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質土
13 10YR4/4 褐色シルト質土（極細粒砂多量に含む）
14 2.5Y5/3 黄褐色シルト
15 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
16 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂混じり土
17 10YR5/1 褐灰色粘土
18 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 〔ＳＤ１〕
19 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
20 10YR4/3 にぶい黄褐色土
21 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 〔ＳＤ５〕
22 2/5Y4/2 明黄灰色粘質土
23 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
24 2.5Y2/4 暗灰褐色粘質土 〔ＳＤ３〕
25 2.5Y7/4 浅黄色シルト（ベースａ）
26 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベースｂ）
27 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（ベースｃ）

2区 南壁土層断面



断面位置図

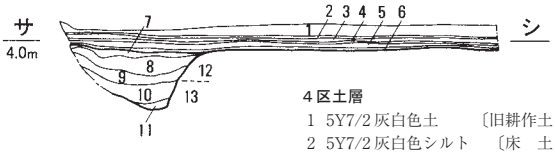




2区土層

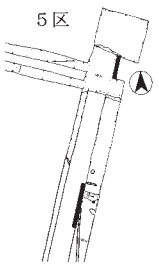
1 2.5Y2/4 暗灰褐色土〔現代耕作土〕
2 5Y7/2 灰白色土 〔旧耕作土Ⅰ〕
3 2.5Y6/8 明黄褐色土 〔床 土Ⅰ〕
4 2.5Y6/6 明黄褐色土〔旧耕作土Ⅱ〕
5 2.5Y7/6 明黄褐色土〔旧耕作土Ⅲ〕
6 2.5Y6/8 明黄褐色土 〔床 土Ⅱ〕
7 2.5Y7/6 明黄褐色土 〔旧耕作土Ⅳ〕
8 5Y7/2 灰白色シルト 〔床 土Ⅲ〕
9 2.5Y6/6 明黄褐色土 〔旧耕作土Ⅴ〕
10 2.5Y6/8 明黄褐色土 〔床 土Ⅳ〕
11 2.5Y6/6 明黄褐色土 〔旧耕作土Ⅶ〕
12 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 〔包含層〕
13 2.5Y3/5 黄褐色シルト質土
14 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土 〔ＳＤ７〕
15 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベースｂ）
16 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（ベースｃ）

4区 南壁土層断面

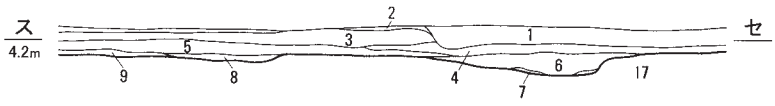


4区土層

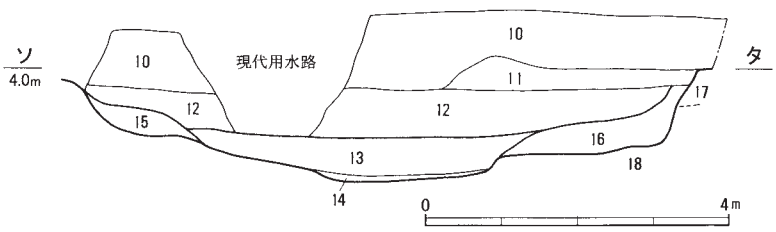
1 5Y7/2 灰白色土 〔旧耕作土Ⅰ〕
2 5Y7/2 灰白色シルト 〔床 土Ⅰ〕
3 2.5Y6/6 明黄褐色土 〔旧耕作土Ⅱ〕
4 2.5Y6/8 明黄褐色土 〔床 土Ⅱ〕
5 2.5Y7/6 明黄褐色土 〔旧耕作土Ⅲ〕
6 2.5Y6/6 明黄褐色シルト〔床 土Ⅳ〕
7 2.5Y6/1 黄灰色シルト
8 10YR5/2 灰黄褐色シルト
9 10YR5/2 灰黄褐色シルト
10 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土
11 10YR5/1 褐灰色粘質土（極細粒砂混じり） 〔ＳＤ12〕
12 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベースｂ）
13 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（ベースｃ）



5区 西壁土層断面



5区 SD35

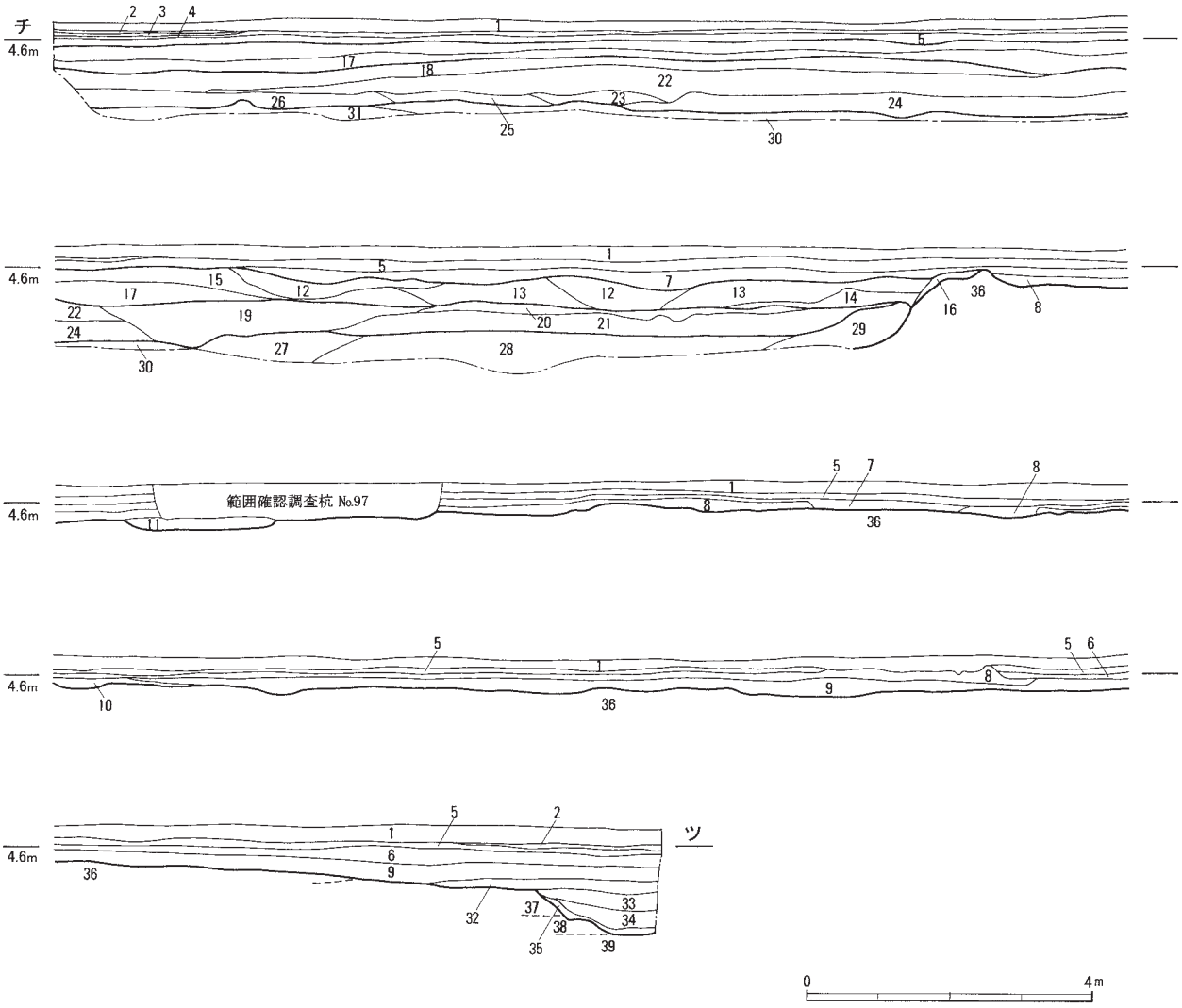


5区土層

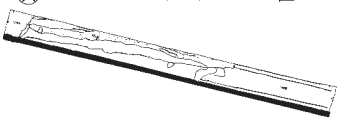
1 2.5Y2/4 暗灰褐色土〔現代耕作土〕
2 7/5Y5/2 灰オリーブ色シルト
3 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
4 2.5Y6/1 黄灰色シルト質土
5 2.5Y5/1 黄灰色砂質土 〔包含層Ⅰ〕
6 2.5Y5/1 黄灰色粘土
7 2.5Y4/2 暗灰色粘土 〔ＳＤ34〕
8 10YR6/1 灰色シルト質土 〔ＳＤ32〕
9 10YR5/1 褐灰色粘質土
10 現代盛土
11 5B5/1 青灰色粘土
12 5B3/1 暗灰色細粒砂
13 5B2/1 青灰色シルト 〔現代攪乱〕
14 N6/ 灰色細粒砂
15 5G6/1 緑灰色粘土 〔ＳＤ35〕中世後期
16 5G6/1 緑灰色粘土（極細粒砂混じり） 〔ＳＤ35〕平安後期
17 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベースｂ）
18 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（ベースｄ）

第５図 調査区土層断面図（１）（１：100） １～２区・４・５区

6-1区 南壁土層断面



断面位置図　６－１区



６－１区土層

1 5Y7/2 灰白色土　〔旧耕作土Ⅰ〕
2 2.5Y5/6 黄褐色シルト　〔床　土Ⅰ〕
3 2.5Y6/6 明黄褐色　〔旧耕作土Ⅱ〕
4 2.5Y6/8 明黄褐色シルト〔床　土Ⅱ〕
5 10YR6/2 灰黄褐色シルト
6 2.5GY7/1 暗オリーブ灰色土
7 10YR6/1 褐灰色シルト
8 10YR6/6 明黄褐色シルト
9 N6/　灰色シルト
10 10YR5/1 褐灰色粗粒砂
〔包含層Ⅰ〕

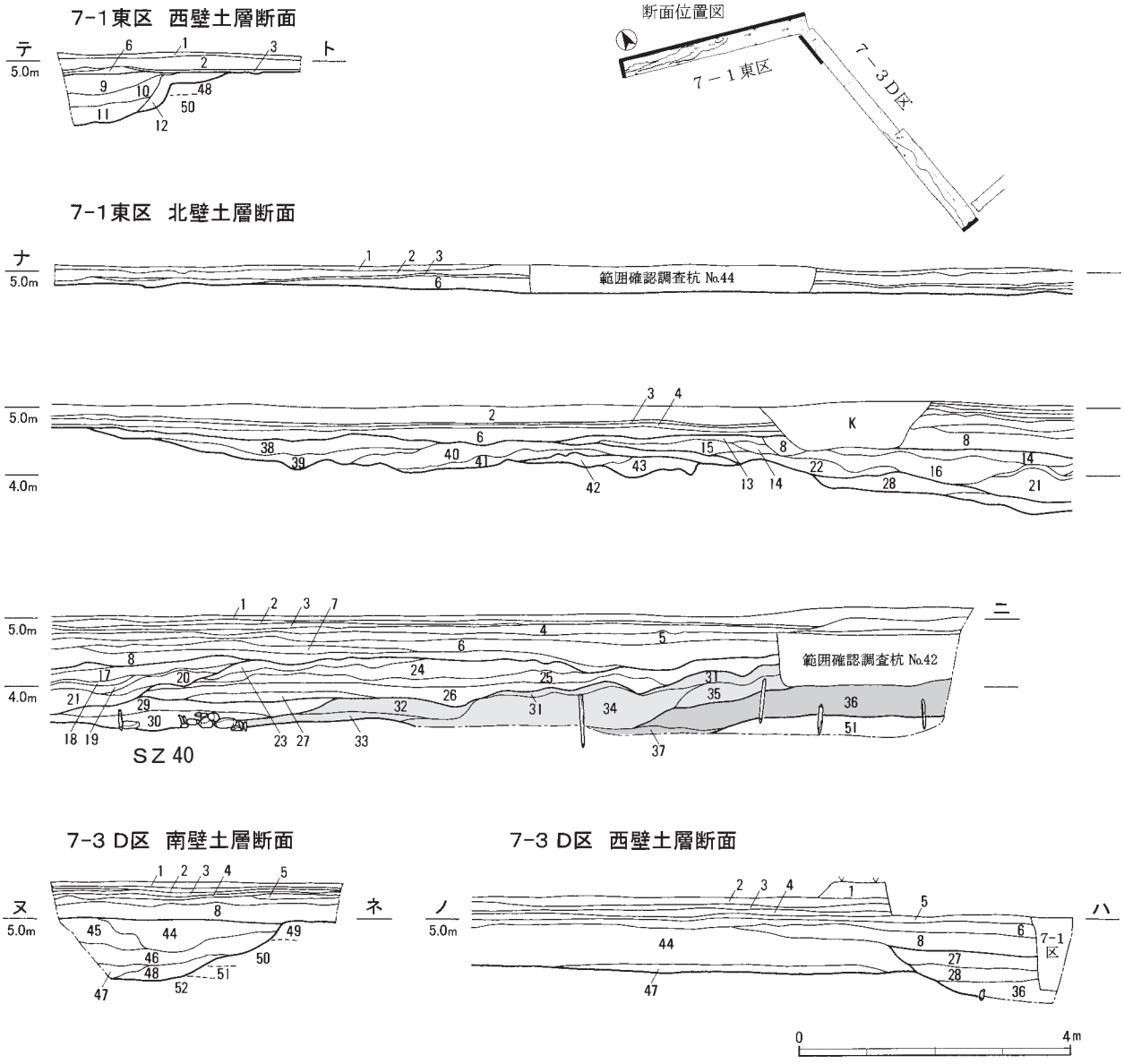
11 10YR6/1 褐灰色粗粒砂
12 5YR5/1 褐灰色粗粒砂
13 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
14 5YR5/2 灰褐色シルト
15 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
16 10YR4/1 褐灰色細粒砂
17 2.5Y7/6 明黄褐色シルト
〔ＳＤ88〕上層

18 5Y5/1 灰色シルト
19 5B4/1 暗青灰色粘土
20 10YR3/3 暗赤褐色粗粒砂
21 5YR5/2 灰褐色粘土
22 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂
23 N3/ 暗灰色シルト
（暗青灰色細粒砂と互層）
24 5B4/1 暗青灰色細粒砂
25 7.5Y5/3 灰オリーブ色細粒砂
26 N3/ 暗灰色シルト
〔ＳＤ88〕中層

27 5PB4/1 暗青灰色礫
28 10BG6/1 青灰色粘土
29 2.5Y8/6 黄色粘土
30 5B4/1 暗青灰色礫
31 5B5/1 青灰色細粒砂
32 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
33 5PB6/1 青灰色シルト
34 5B5/1 青灰色粘土
35 5B5/2 青灰色粗粒砂
〔ＳＤ88〕下層

36 2.5Y7/4 浅黄色シルト（ベースａ）
37 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベースｂ）
38 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（ベースｃ）
39 5PB7/1 明青灰色粘質土（ベースｄ'）

第６図　調査区土層断面図（２）（１：100）６－１区

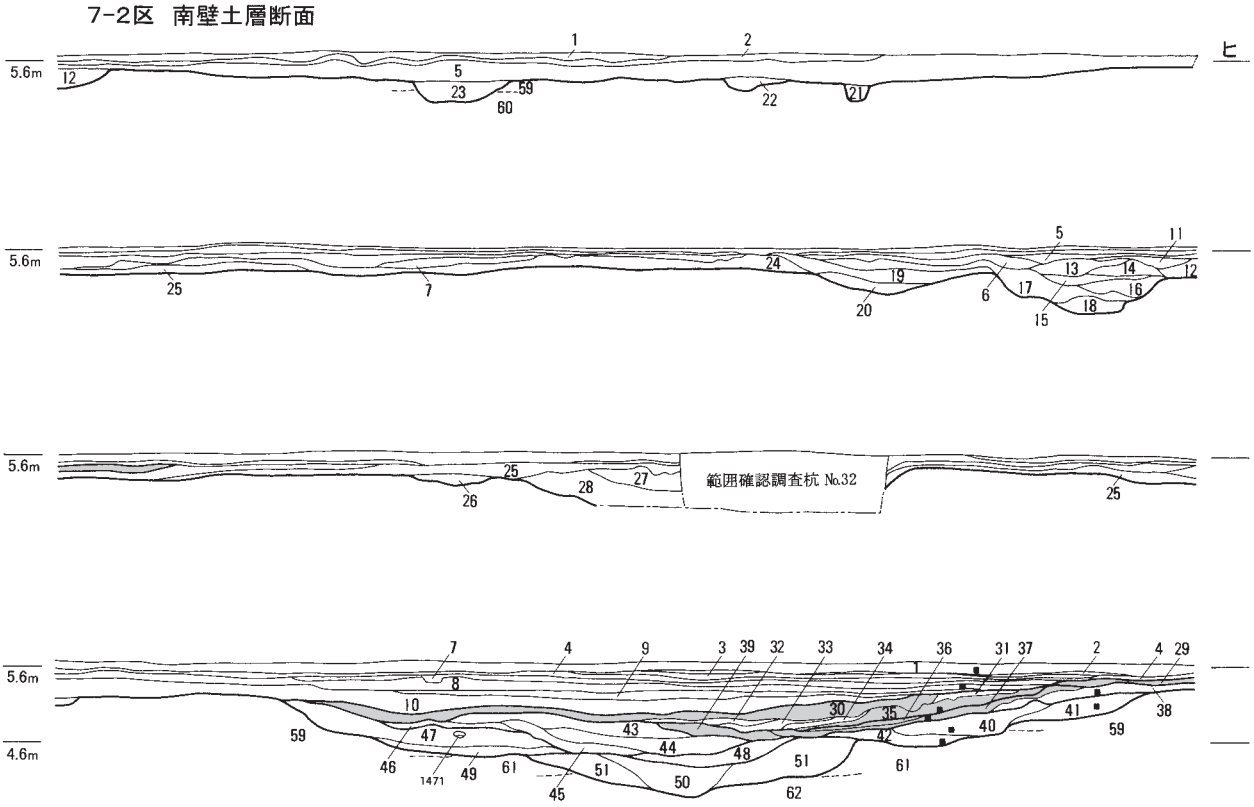


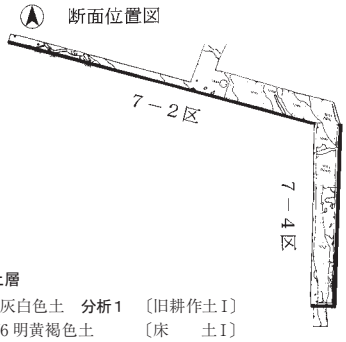
7－1東区・7－3A区土層

1 5Y7/2 灰白色土 〔現耕作土〕
2 2.5Y5/6 黄褐土 〔旧耕作土Ⅰ〕
3 2.5Y5/6 黄褐色シルト 〔床土Ⅰ〕
4 2.5Y5/6 黄褐色土 〔旧耕作土Ⅱ〕
5 2.5Y6/8 明黄褐色シルト〔床 土Ⅱ〕
6 2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じりシルト
7 2.5Y6/1 黄灰色シルト質土
8 5Y6/1 灰色粗砂混じり土
〔包含層Ⅰ〕
9 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
10 10YR6/1 褐灰色シルト
11 10YR5/1 褐灰色砂質土
12 10YR6/2 灰黄褐色シルト（ベースaブロック 40%）
〔SD 37〕
13 2.5Y5/1 黄灰色シルト質土
14 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
15 2.5Y6/1 黄灰色シルト
16 2.5Y6/1 オリーブ灰色粘質土（極細粒砂混じり）
17 2.5Y6/1 黄灰色シルト土
18 2.5Y6/2 灰黄色シルト質土
19 5Y6/1 灰色極細粒砂混じりシルト
20 N7/ 灰白色粘質土
21 10YR1/1 灰色粘質土
22 10YR5/1 灰色粘質土
〔SD 38〕上層
23 5Y6/1 灰色シルト質土
24 10Y7/1 灰白色粘質土
25 5Y5/3 灰オリーブ色細粒砂
26 10Y5/1 灰色粘質土
27 7.5Y6/1 灰色中粒砂
〔SD 38〕中層 粘質土と砂の互層
28 N5/ 灰色粘土（牛骨含む）
29 10YR5/1 黄褐色小粒砂（礫混じり）
30 5BG6/1 青灰色粘土
〔SD 38〕SZ 40
31 10YR7/1 灰色粘質土
32 5Y4/2 灰オリーブ色砂質土
33 N5/ 灰色粘土
34 10YR6/1 灰色粘土
35 10YR5/1 灰色粘質土
〔SD 38〕下層
36 10Y3/2 オリーブ黒色粘質土
37 2.5Y4/3 オリーブ褐色小粒砂（粗砂混じり）
〔SD 38〕堤盛土
38 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
39 7.5YR6/1 褐灰色極細粒砂
40 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂質シルト
41 10YR6/1 褐灰色砂質土（ベースbブロック 2%混じる）
〔SD 37〕
42 7.5YR6/2 灰褐色シルト
43 2.5Y6/1 黄灰色シルト極細粒砂混じりシルト
〔SK 39〕
44 10YR6/2 灰黄褐色シルト
45 2.5Y6/1 黄灰色砂質土
46 10YR5/3 にぶい黄褐色土（ベースbブロック 15%混じる）
47 2.5Y5/3 黄褐色砂質土
48 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
〔SD 56〕
49 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベースb）
50 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（ベースc）
51 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（ベースd）
52 2.5Y5/4 黄褐色粘質土（ベースe）
K 攪乱

第７図　調査区土層断面図（３）（１：100）７－１区・７－３Ａ区

7-2区　南壁土層断面





0　4m

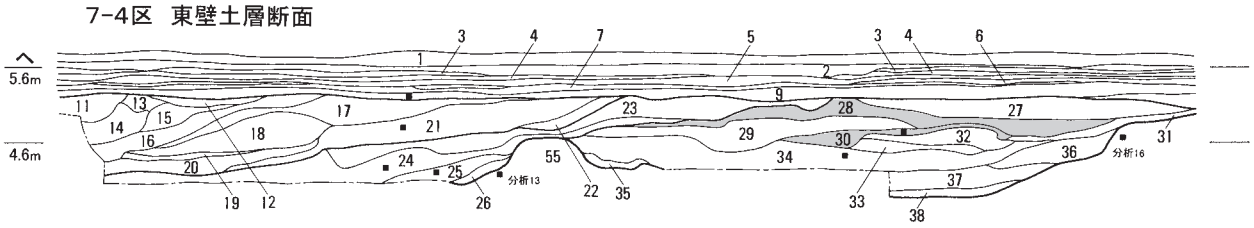
7－2区土層

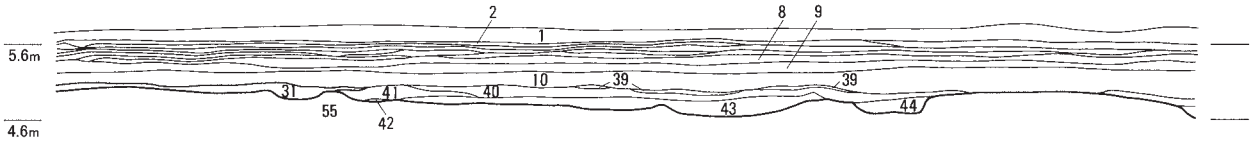
1 5Y7/2 灰白色土　**分析1**　〔旧耕作土Ⅰ〕
2 2.5Y6/6 明黄褐色土　〔床　土Ⅰ〕
3 5Y7/2 灰白色シルト　〔床　土Ⅱ〕
4 2.5Y6/8 明黄褐色土　〔旧耕作土Ⅱ〕
5 5Y6/2 灰オリーブ色土
6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質土
7 10YR5/4 にぶい黄褐色土
8 5Y4/1 灰色土　**分析2**
9 5Y5/1 灰色粘質土
10 10YR6/1 褐灰色シルト（土器多く入る）　〔包含層Ⅱ〕
11 2.5Y7/1 灰色土
12 2.5Y7/2 灰黄色土（土器小片入る）
13 2.5Y7/2 灰黄色砂質土（細粒砂混じり）
14 5Y6/1 灰色シルト
15 10YR7/2 にぶい黄褐色土
16 10YR6/1 褐灰色シルト（ベースブロック 20%）
17 5YR5/1 褐灰色シルト質土（土器小片入る）
18 7.5YR5/2 灰褐色砂質土
19 7.5YR6/4 にぶい橙色シルト質土
20 10YR6/2 灰黄褐色土　〔ＳＤ 43〕
21 5Y5/1 灰色シルト質土
22 2.5Y6/1 黄灰色砂質土　〔ＳＤ 42〕
23 10YR5/2 灰黄褐色土　〔ＳＤ 41〕
24 7.5Y6/1 褐灰色シルト質土
25 10YR5/1 褐灰色砂質土（ベースブロック 30%）　〔包含層Ⅲ〕
26 2.5Y5/1 黄灰色シルト（極細粒砂混じり）
27 7.5Y6/2 灰褐色砂質土
28 7.5Y6/1 褐灰色シルト質土　〔ＳＤ〕
29 10YR6/1 褐灰色シルト（土器・炭多量）
30 10YR4/1 褐灰色砂質土（土器・炭多量）
31 2.5Y5/3 黄褐色土（土器入る）
32 7.5Y4/2 灰褐色土（ベースブロック 20%）
33 7.5Y4/3 褐色土（ベースブロック 30%）
34 2.5Y5/3 黄褐色土
35 2.5Y3/1 黒褐色土（製塩土器・炭多量）**分析3**　〔ＳＤ 47 最上層〕
36 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
37 5Y3/2 オリーブ黒砂質土（炭多量）**分析4**
38 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
（ベースブロック 50%・土器多量）**分析5**　〔ＳＤ 47 上層〕
39 10YR4/1 褐灰色砂質土（土器・炭多量）
40 2.5Y5/4 黄褐色粘質土（土器少量）　**分析6**
41 10YR5/2 灰黄褐色粘質土　**分析7**
42 10YR5/1 褐灰色土　**分析8**
43 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
44 5Y4/2 灰オリーブ色粗粒砂（土器多量）
45 7.5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂
46 10YR6/1 褐灰色土　〔ＳＤ 47 中層〕
47 10YR5/1 褐灰色粘質土
48 10BG5/1 青灰色粘土
49 10BG4/1 暗青灰色粘土
50 7.5Y4/3 褐色粗粒砂（土器多量）　〔ＳＤ 47 下層〕
51 10YR3/3 暗褐色粘土（木製品多量）**分析 25 と同一層**　〔ＳＤ 47 最下層〕
52 10YR6/1 褐灰色シルト
（極細粒砂混じり）　〔ＳＤ 51〕
53 7.5Y6/1 褐灰色シルト
54 10YR5/4 にぶい黄褐色土
（褐灰色シルト混じり）
55 10YR6/1 褐灰色土
56 10YR3/2 黒褐色土
57 2.5Y6/1 黄灰色粘土
58 10BG5/1 青灰色粘土　〔ＳＤ 49〕
59 2.5Y7/4 浅黄色シルト（ベース a）
60 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベース b）
61 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（ベース c）
62 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（ベース d）

分析…第 46 表と対応
図中■から採取

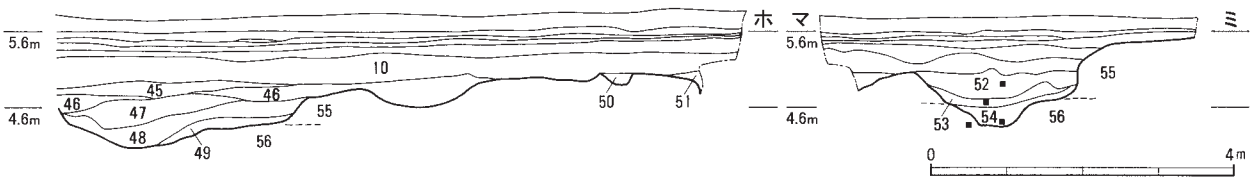
第８図　調査区土層断面図（４）（１：100）７－２区

7-4区　東壁土層断面





7-4区　南壁土層断面



7－4区土層（第9図）

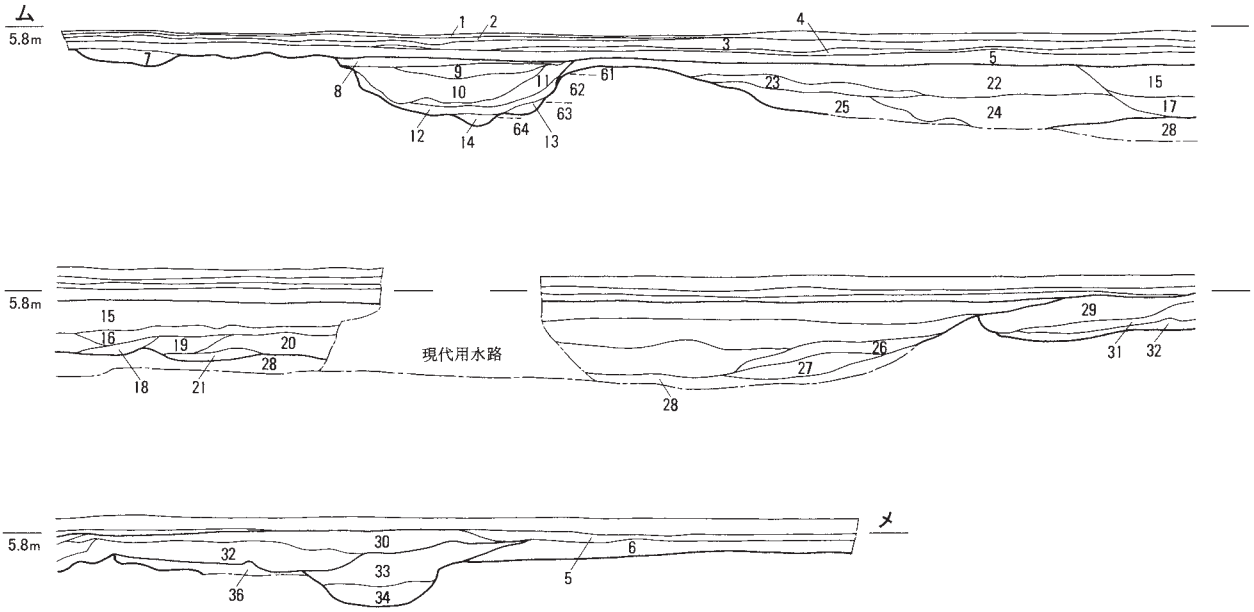
1 5Y7/2 灰白色土　〔旧耕作土Ⅰ〕
2 2.5Y6/6 明黄褐色土　〔旧耕作土Ⅱ〕
3 5Y7/2 灰白色シルト　〔床　土Ⅰ〕
4 2.5Y6/8 明黄褐色土　〔床　土Ⅱ〕
5 5Y7/2 灰白色シルト　〔床　土Ⅲ〕
6 2.5Y7/6 明黄褐色土　〔旧耕作土Ⅲ〕
7 2.5Y6/6 明黄褐色シルト〔床　土Ⅳ〕
8 7.5Y7/1 明褐灰色土
9 5Y4/1 灰色土　**分析9**　〔包含層Ⅱ〕
10 10YR6/1 褐灰色シルト
11 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土と10YR4/1 褐灰色粘質土のブロック互層
12 10YR6/4 にぶい黄橙色土
13 10YR6/3 にぶい黄橙色土
14 10YR6/2 灰黄褐色砂質土
15 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
16 10YR6/1 褐灰色砂質土
17 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト質土
18 2.5Y6/1 黄灰色砂質土（細粒砂多く含む）
19 2.5Y6/2 灰黄色シルト
20 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混じりシルト
21 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質土 **分析10**
22 10YR6/3 にぶい黄橙色土（ベースブロック20%混じる）　〔SD 51〕
23 2.5Y5/4 黄褐色シルト（極細粒砂多く含む）
24 N4/ 灰色シルト質土（粗砂やや含む）**分析11**
25 N5/1 灰色極細粒砂　**分析12**
26 5Y5/2 灰オリーブ極細粒砂　〔SD 49〕
27 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土（炭やや入る）
28 2.5Y6/1 黄灰色粘質土（炭多量）　〔SD 53 上層〕
29 10YR5/6 黄褐色砂質土（土器多量）
30 2.5Y5/1 黄灰色粘質土（土器・炭多量）**分析14**
31 2.5Y6/1 黄灰色シルト質土（炭少量）
32 5Y6/2 灰オリーブ色土（炭少量）
33 7.5GY オリーブ灰色砂質シルト（極細粒砂混じり）　〔SD 53 中層〕
34 N5/ 灰色粘質土　**分析15**　〔SD 53 下層〕
35 N7/ 灰色粘土
36 2.5Y7/2 灰黄色シルト
37 N4/1 灰色粗砂混じりシルト
38 5GY4/1 暗オリーブ灰色粗砂　〔SD 53 最下層〕
39 2.5Y3/1 黒褐色土（土器・炭少量）
40 10YR6/2 灰黄褐色シルト（土器・炭少量）
41 10YR4/6 褐色シルト質土（ベースブロック10%）
42 10YR2/1 黒色炭
43 10YR6/3 灰褐色シルト（土器・炭少量）　〔包含層Ⅱ〕
44 10YR5/4 にぶい黄褐色土
45 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト
46 7.5YR5/3 にぶい褐色砂質土
47 2.5Y6/2 灰黄色シルト
48 7.5YR5/2 灰褐色シルト（自然木多い）
49 10YR6/6 明黄褐色粗砂質シルト　〔SD 54〕
50 7.5YR5/3 にぶい褐色砂質土
51 7.5YR5/3 にぶい褐色砂質土
52 10YR4/6 褐色土（土器・炭少量）**分析17**
53 5B6/1 青灰色粘土 **分析18**　〔SD 52〕
54 10YR5/6 黄褐色中粒砂（土器多量）**分析19**
55 2.5Y7/4 浅黄色シルト（ベースa）**分析13・分析16**
56 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（ベースd）**分析20**

7―5区土層（第10図）

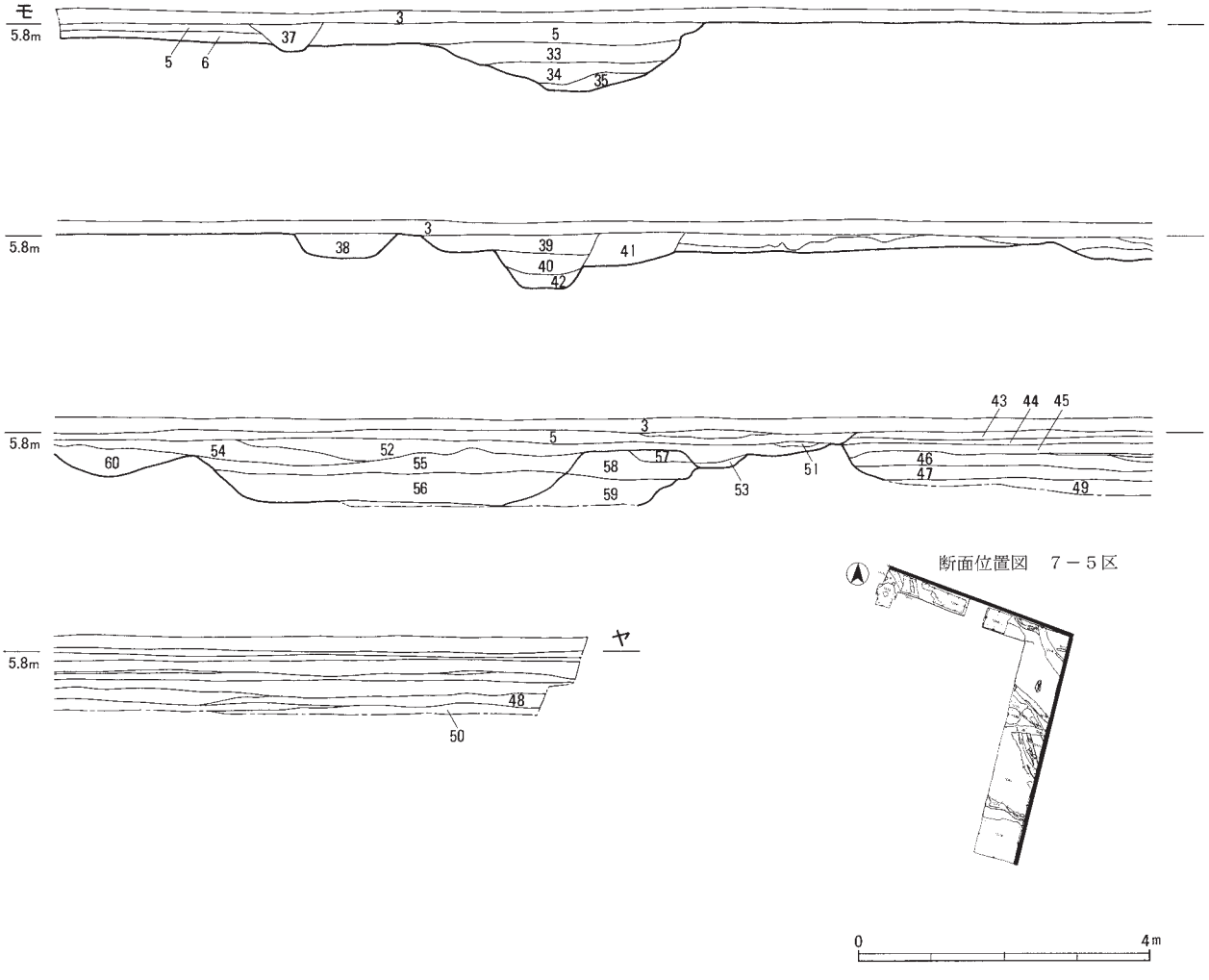
1 5Y7/2 灰白色土　〔現代耕作土〕
2 2.5Y6/6 明黄褐色土　〔床　土Ⅰ〕
3 5Y7/2 灰白色土　〔旧耕作土〕
4 2.5Y6/8 明黄褐色シルト　〔床　土Ⅱ〕
5 10YR6/1 褐灰色シルト　〔包含層Ⅰ〕
6 10YR6/6 明黄褐色シルト　〔包含層Ⅲ〕
7 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト〔SD 71〕
8 5YR6/1 褐灰色細粒砂
9 5YR6/1 褐灰色シルト
10 5YR6/1 褐灰色細粒砂（シルト混じり）
11 5YR4/1 褐灰色粗粒砂
12 10YR5/6 黄褐色中粒砂（土器多量）
13 5YR4/1 にぶい赤褐色細粒砂
14 10YR5/8 黄褐色粗粒砂　〔SD 52〕
15 5YR6/1 褐灰色シルト
16 7.5YR7/3 にぶい橙色シルト
17 5YR6/1 褐灰色細粒砂
18 10BG1.7/1 暗青灰色細粒砂
19 N6/ 灰色細粒砂
20 5PB6/1 青灰色粘土　〔SD 66〕上層
21 5PB5/1 青灰色細粒砂
22 10YR3/2 灰黄褐色シルト
23 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト
24 5YR5/2 灰褐色細粒砂
25 5YR4/1 褐灰色細粒砂
26 5YR5/1 褐灰色極細粒砂
27 7.5YR6/1 褐灰色細粒砂　〔SD 66〕中層
28 5B5/1 青灰色粘土　〔SD 66 下層〕
29 10YR7/8 黄橙色シルト
30 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト
31 10YR6/1 褐灰色シルト
32 10R3/2 暗赤褐色細粒砂　〔SD 68〕
33 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
34 10YR6/8 にぶい黄橙色シルト
35 10YR6/4 にぶい黄橙色細粒砂
36 10YR5/1 褐灰色粘土（暗黄褐色粘土ブロック混じる）　〔SD 69〕
37 10YR6/1 褐灰色シルト　〔SD 77〕
38 10YR5/6 黄褐色シルト　〔SD 78〕
39 10YR5/1 褐灰色細粒砂
40 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
41 10YR6/1 褐灰色粗粒砂
42 10YR6/2 灰黄褐色シルト　〔SD 81〕
43 2.5Y7/2 灰黄色シルト
44 10YR6/8 暗黄褐色土
45 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
46 2.5Y6/1 灰黄色シルト質土
47 2.5Y6/1 黄灰色粘質土（極細粒砂含む）
48 5Y6/1 灰色粘質土
49 10YR6/1 灰色粘質土（極細粒砂多く含む）
50 5Y4/2 灰オリーブ色粘土　〔SD 74〕
51 5YR6/2 灰褐色シルト
52 7.5YR6/1 褐灰色シルト
53 5YR6/2 灰褐色粘土
54 7.5Y6/1 褐灰色粗粒砂
55 2.5YR6/5 赤灰色粗粒砂
56 5YR5/3 にぶい赤褐色シルト　〔SD 83〕
57 7.5YR6/4 にぶい橙色シルト
58 2.5YR6/1 赤灰色粘土
59 5B5/1 青灰色粘土　〔SD 73〕
60 10YR5/2 灰黄褐色粗粒砂　〔SD 79〕
61 2.5Y7/4 浅黄色シルト（ベースa）
62 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベースb）
63 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（ベースd）
64 2.5Y5/4 黄褐色粘質土（ベースe）

第9図　調査区土層断面図（5）（1：100）7－4区

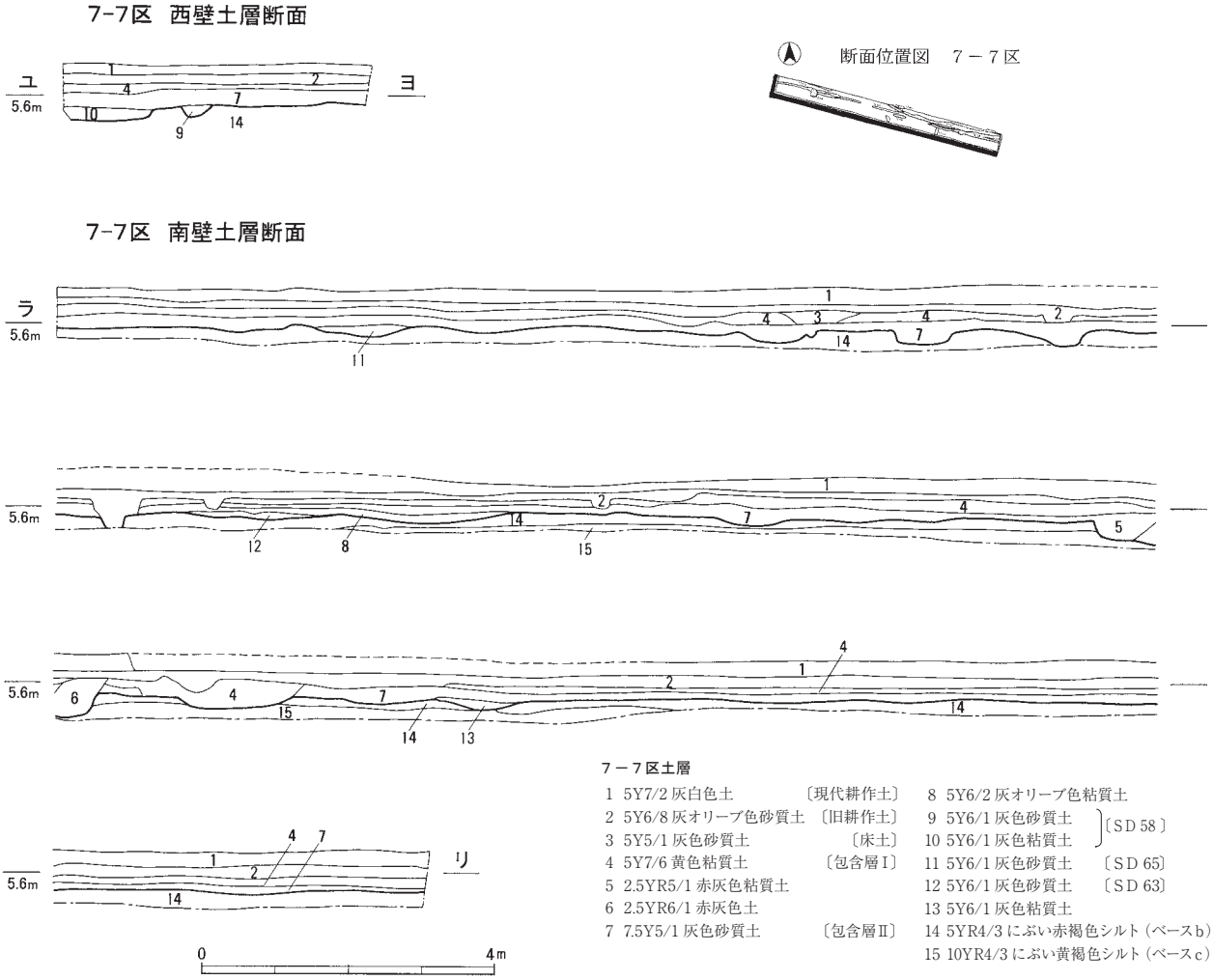
7-5区　北壁土層断面



7-5区　東壁土層断面



第10図　調査区土層断面図(６)(１:100)　７－５区



7－7区土層

1	5Y7/2 灰白色土	〔現代耕作土〕	
2	5Y6/8 灰オリーブ色砂質土	〔旧耕作土〕	
3	5Y5/1 灰色砂質土	〔床土〕	
4	5Y7/6 黄色粘質土	〔包含層Ⅰ〕	
5	2.5YR5/1 赤灰色粘質土		
6	2.5YR6/1 赤灰色土		
7	7.5Y5/1 灰色砂質土	〔包含層Ⅱ〕	
8	5Y6/2 灰オリーブ色粘質土		
9	5Y6/1 灰色砂質土	〔SD 58〕	
10	5Y6/1 灰色粘質土	〔SD 58〕	
11	5Y6/1 灰色砂質土	〔SD 65〕	
12	5Y6/1 灰色砂質土	〔SD 63〕	
13	5Y6/1 灰色粘質土		
14	5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベースb）		
15	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（ベースc）		

第11図　調査区土層断面図（7）（1：100）7－7区

a）、もしくはその下のにぶい赤褐色シルト（同b）で、5区では古墳時代前期から近世の遺構全てがこの層を検出面とする。遺構検出面以下に堆積しているにぶい黄褐色シルト（同c）、黒褐色粘質土（同d）、黄褐色粘質土（同e）は、人の手が加えられていない層である。

調査対象外とした5－2区北西方向から範囲確認調査坑 No.156 にかけては、包含層の下に黒褐色粘質土がみられる。この層は安定した面とは捉えられず、基本的に生活の痕跡は認められない。

遺構埋土は灰白色砂質土がもっとも多い。これは検出した遺構のほとんどが溝および流路であるためと考えられる。したがって、ベースbが遺構検出面の場合、概ねベースは黒色で、遺構埋土は白色の砂質土である。

3　1区

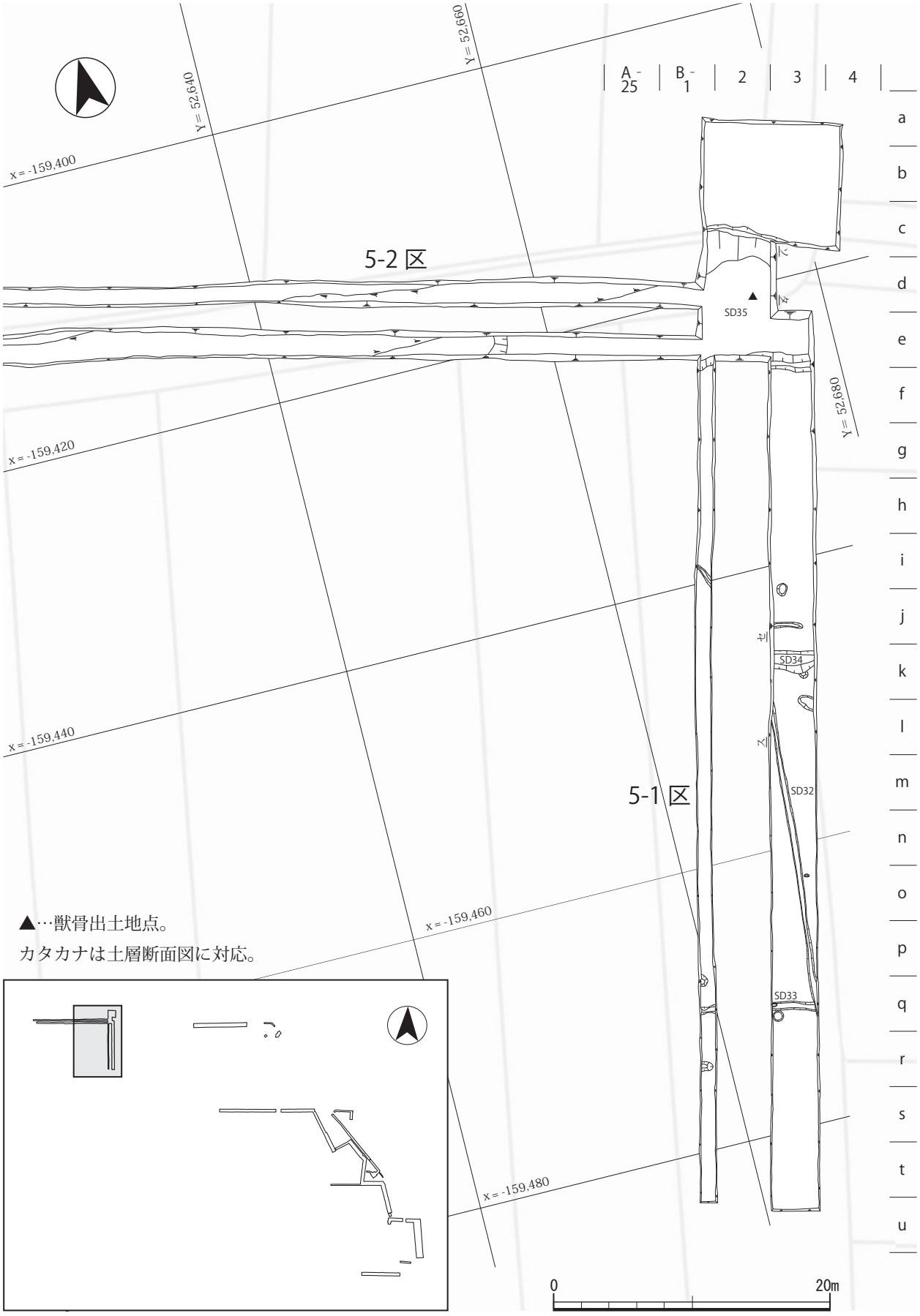
a　概要（第17図）

1区は、水槽建設予定地であったため先行して調査が行われた。7－3E区と1区との連結部分は、工事立会調査を行った。調査区は不整形で、調査面積は 82㎡、地表面の標高は 5.8 mである。

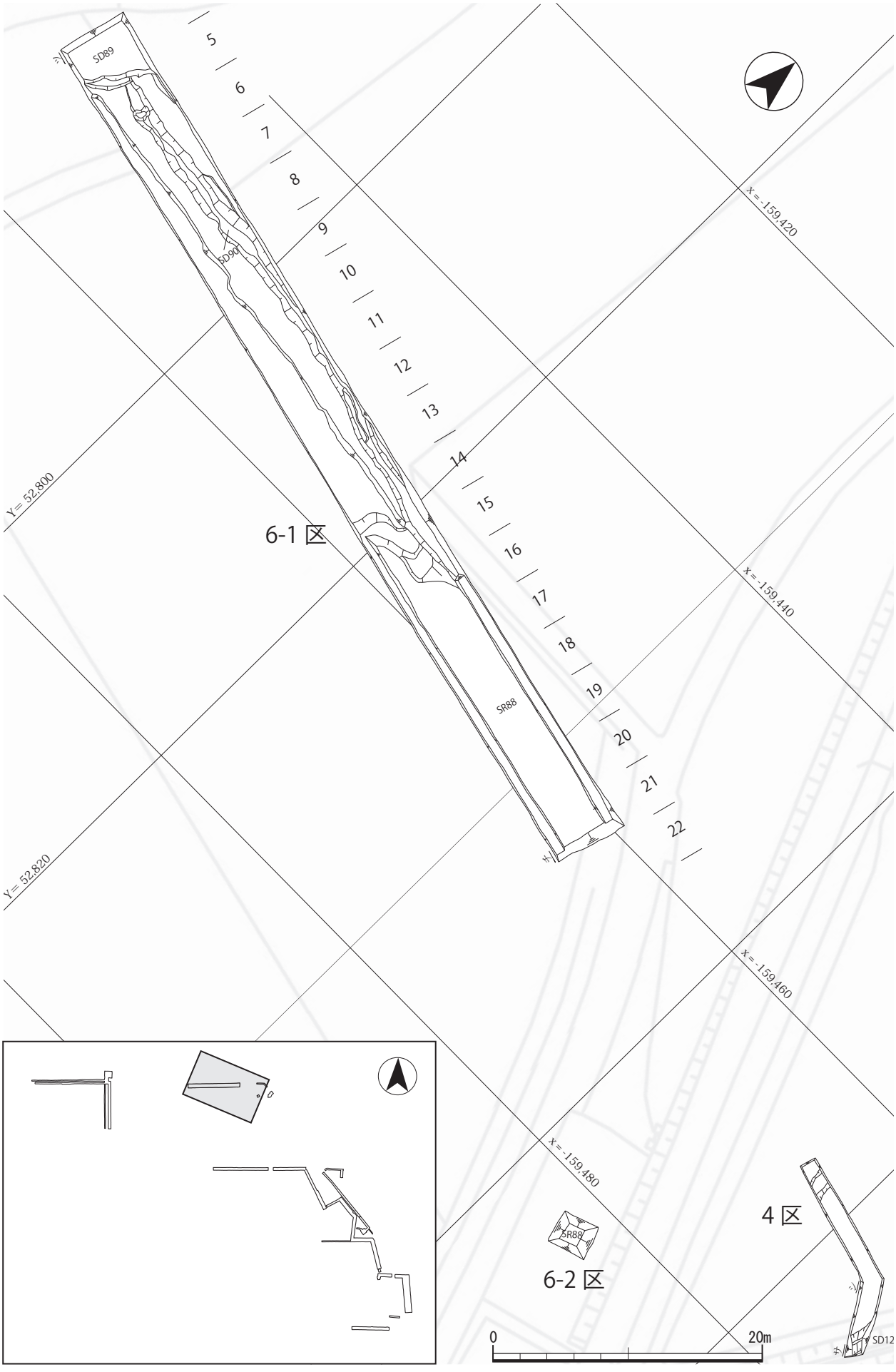
検出された遺構は溝6条で、いずれも隣接した調査区に続いている。

b　層序（第5図）

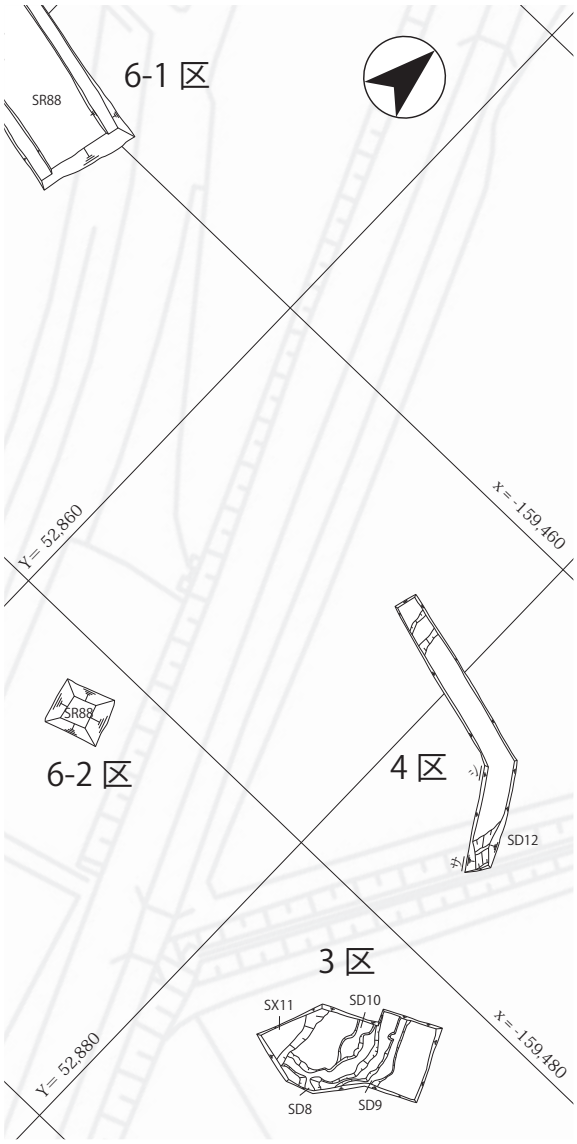
1区は、現代耕作土を除去したのち、重機掘削を行った。遺構検出面までの深さは、地表面から 35cm である。旧耕作土と床土が3～4層繰り返された下でにぶい赤褐色シルトの遺構検出面となり、包含層はみられなかった。

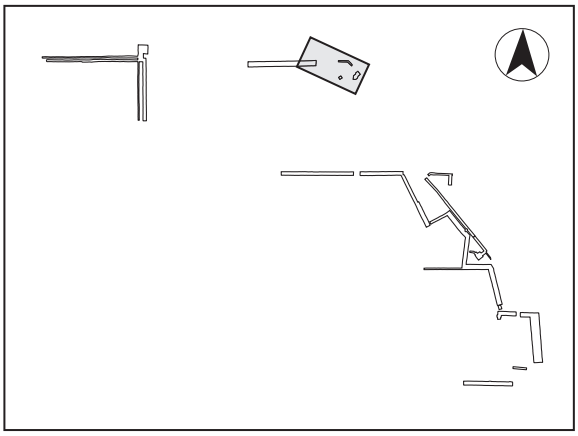


第12図　調査区平面図（1） 5区（1：400）



第13図　調査区平面図（2） 6－1・6－2区・4区（1：400）





第14図　調査区平面図（３） ３区・４区（１：400）

ｃ　平安時代後期～鎌倉時代の遺構

ＳＤ１（ＳＤ51）　調査区東端で検出された大溝で、隣接する７－４区で検出された大溝ＳＤ51と同一である。２区ＳＤ７も、埋土の堆積状況が同じであることから一連の大溝である可能性がある。溝幅は4.8ｍで、深さは1.5ｍである。

上層で褐色シルト、下層で黄灰色粘質土が堆積する。溝の東半部でみられる暗灰黄色粘質土と黒褐色粘質土のブロックが混じる層は、人工的に土を掘削し再度埋まった層で、その理由として土取り・溝浚い・掘り直しなどが推測される。溝の埋没時期は、10世紀後半の灰釉陶器が含まれることから、平安時代後期の可能性があるが確かではない。溝が埋まったのち行われた土取りの時期は、山茶碗や青磁片から12世紀後半から13世紀前半頃と考えられる。

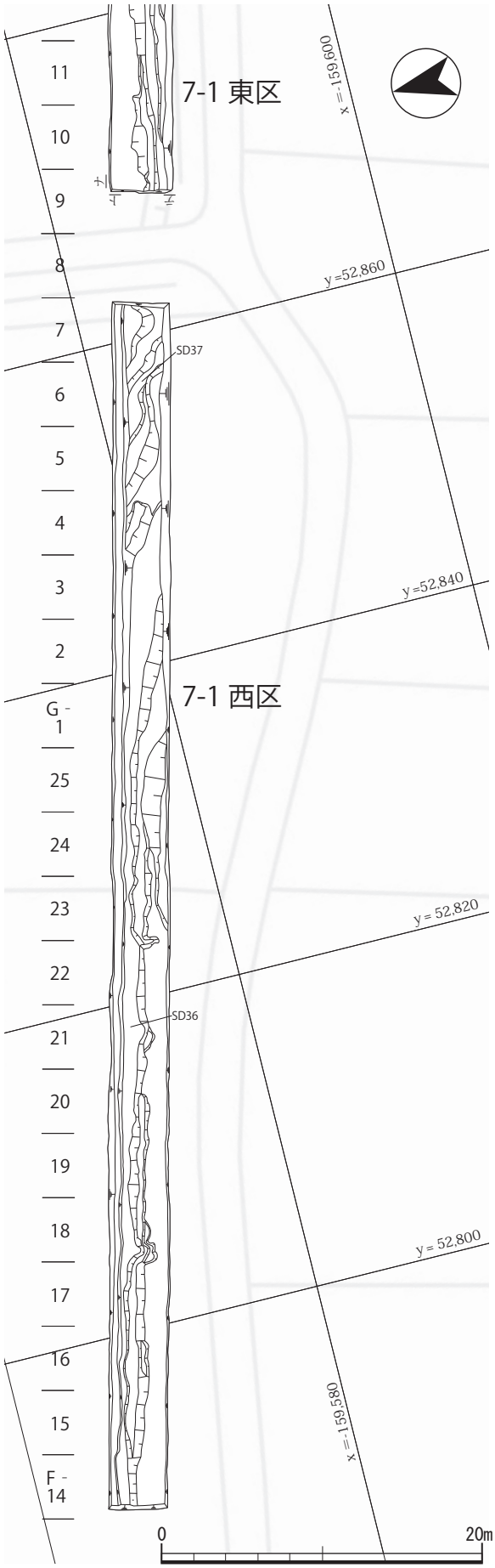
７－３Ｅ区ＳＤ87は、ＳＤ１と流れの方向が同一であるため、ＳＤ１の後継と捉えられる。この流路は、現代の幹線用水路まで受け継がれるものである。大溝すなわち幹線用水路は、朝見遺跡のある和屋町から中坪遺跡のある立田町までをつないでおり、現況の道路敷きを主軸として、若干東西に蛇行はするものの、当該地の条里型地割を斜め方向に区切る溝である。幹線用水路は昭和26～47年頃直線的に整備されているが、昭和23年に撮影された航空写真では、素掘りの溝として機能していたことが見てとれる（写真29）。

この大溝は、７－１区ＳＤ38や５区ＳＤ35・６－１区ＳＤ90といった東西方向の条里溝への配水用として利用されていたことが推測され、平安時代後期以降における当該地の水田利用を考える上でもっとも重要な流路の１つといえる。

ＳＤ３　調査区のほぼ中央で検出した溝で、幅・深さともに約１ｍを測り、形状は逆三角形状を呈する溝である。

９世紀前半以降と考えられる灰釉陶器が出土しており、溝の時期は平安時代前期後半と考えられ、ＳＤ47の支流にあたる可能性がある。

ＳＤ５　調査区内で東岸のみ検出した溝で、土師器のほか、猿投窯産の緑釉陶器片や灰釉陶器片が出土した。７－２区ＳＤ49と同一の溝である可能性が高いため、詳細はＳＤ49の項を参照されたい。



第15図　調査区平面図（4）７－１区（１：400）

4　2区

a　概要（第 16 図）

７－３Ｅ区に隣接し、幹線用水路を渡った位置にあたる。Ｌ字状を呈し、調査区の面積は 64.5㎡、標高は 5.8 m、遺構検出面は 5.5 mである。

検出された遺構は溝２条である。

b　層序（第５図）

現代耕作土の下で、旧耕作土と床土の互層が４回繰り返される。灰黄褐色粘質土の包含層の下で、にぶい赤褐色シルトの遺構検出面を確認した。現地表面から遺構検出面までの深さは約 30cm である。

c　鎌倉時代の遺構

ＳＤ７　調査区の西端で検出した溝で、深さは約１mである。溝の方向は現況の幹線用水路と平行している。遺物は出土していないが、埋土の堆積状況から７－３Ｅ区ＳＤ 87 や１区ＳＤ１と同一の溝である可能性が高い。

5　3区・4区

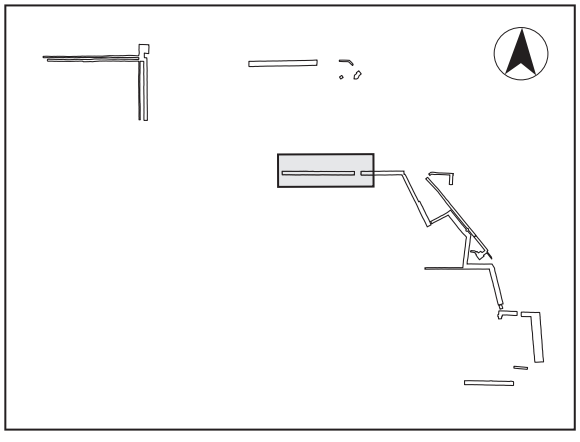
a　概要（第 14 図）

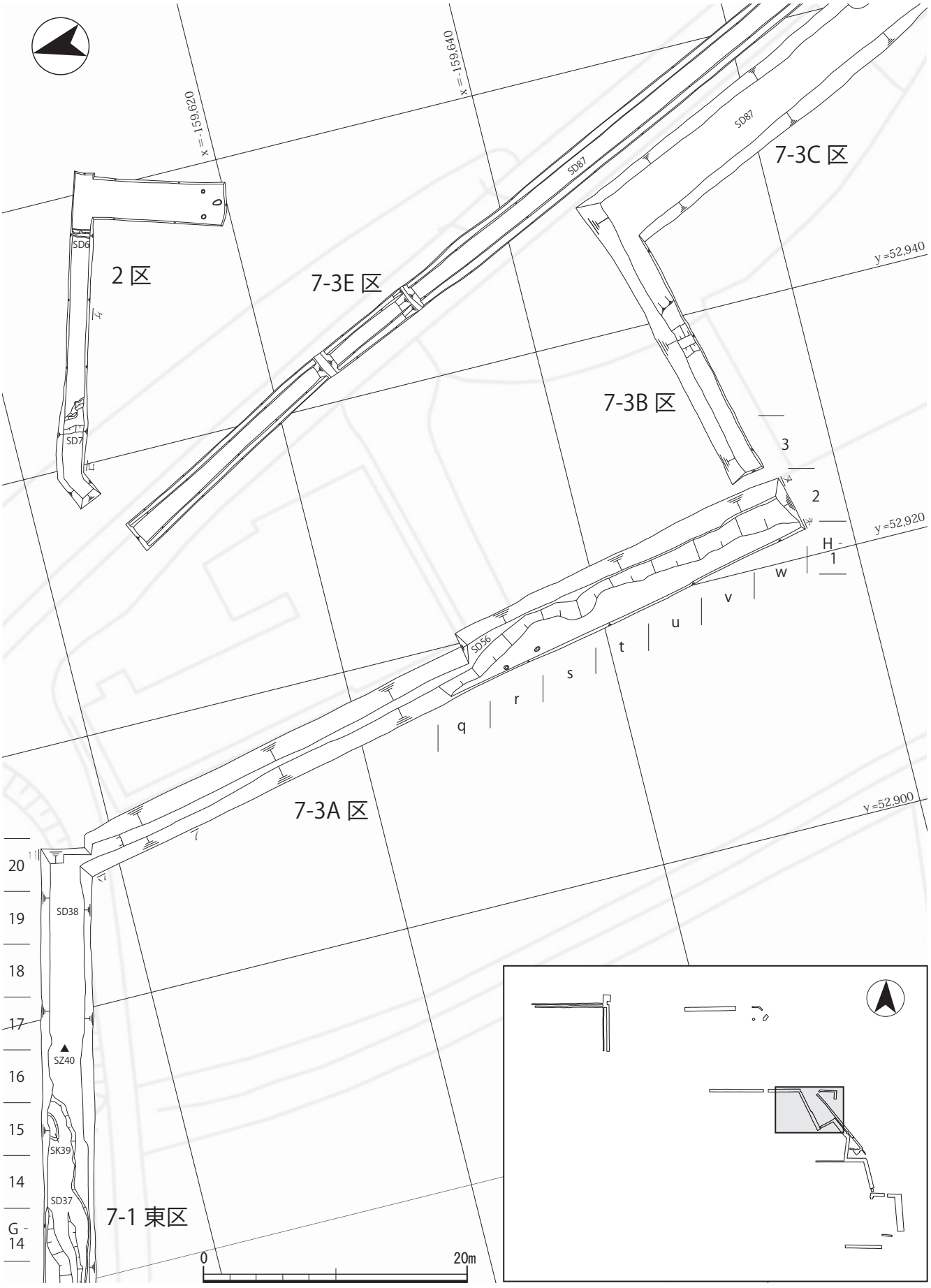
３区・４区は、第１～２次調査全体の北東端に位置し、６区と隣接する。３区と４区は素掘りの溝によって分断されているが、基本層序や標高はほぼ同一である。

検出された遺構は、３区では浅い溝や落ち込み状の溝４条、４区では溝２条である。

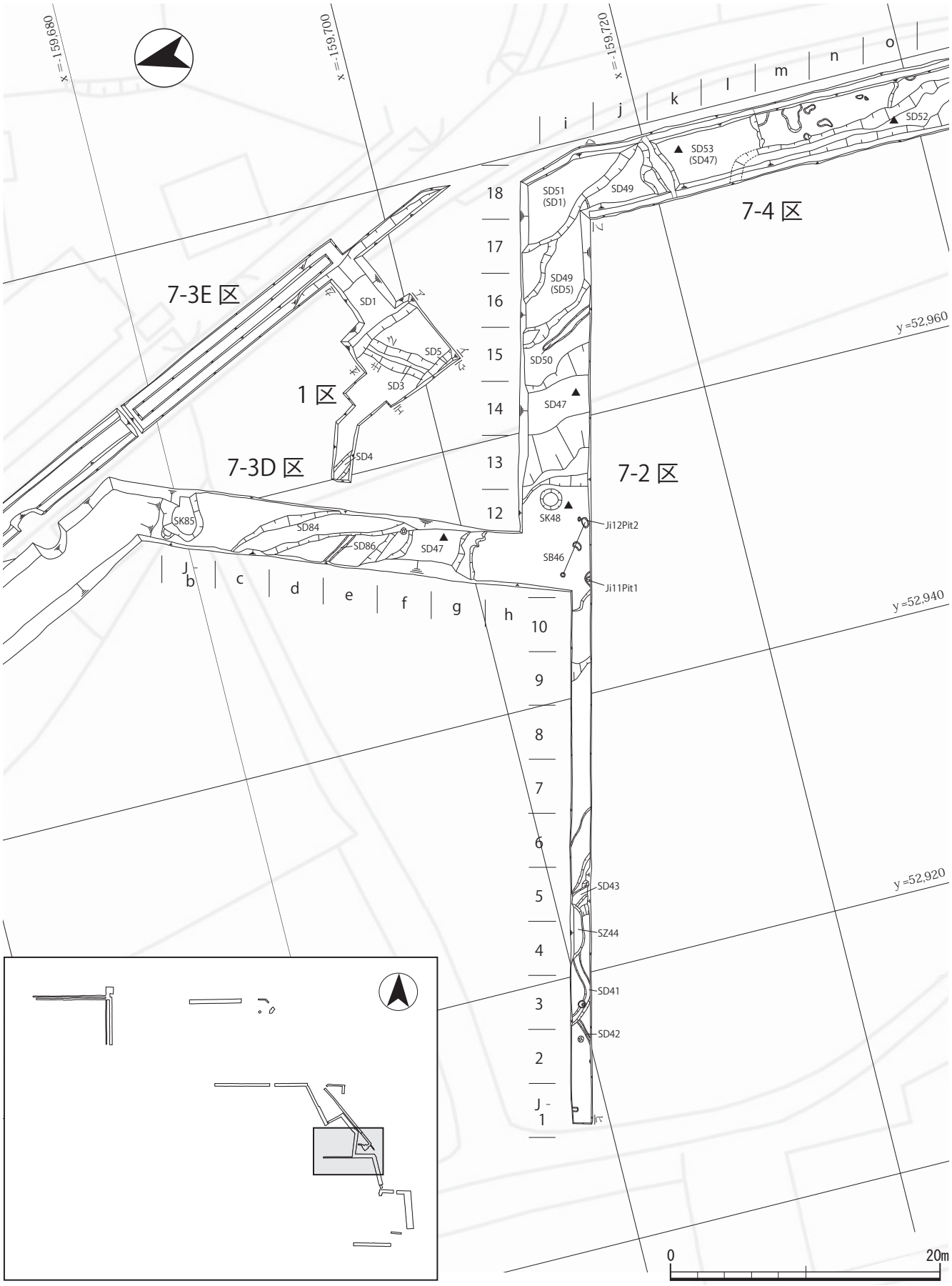
b　層序（第５図）

現代耕作土の下で、旧耕作土と床土の互層が２回



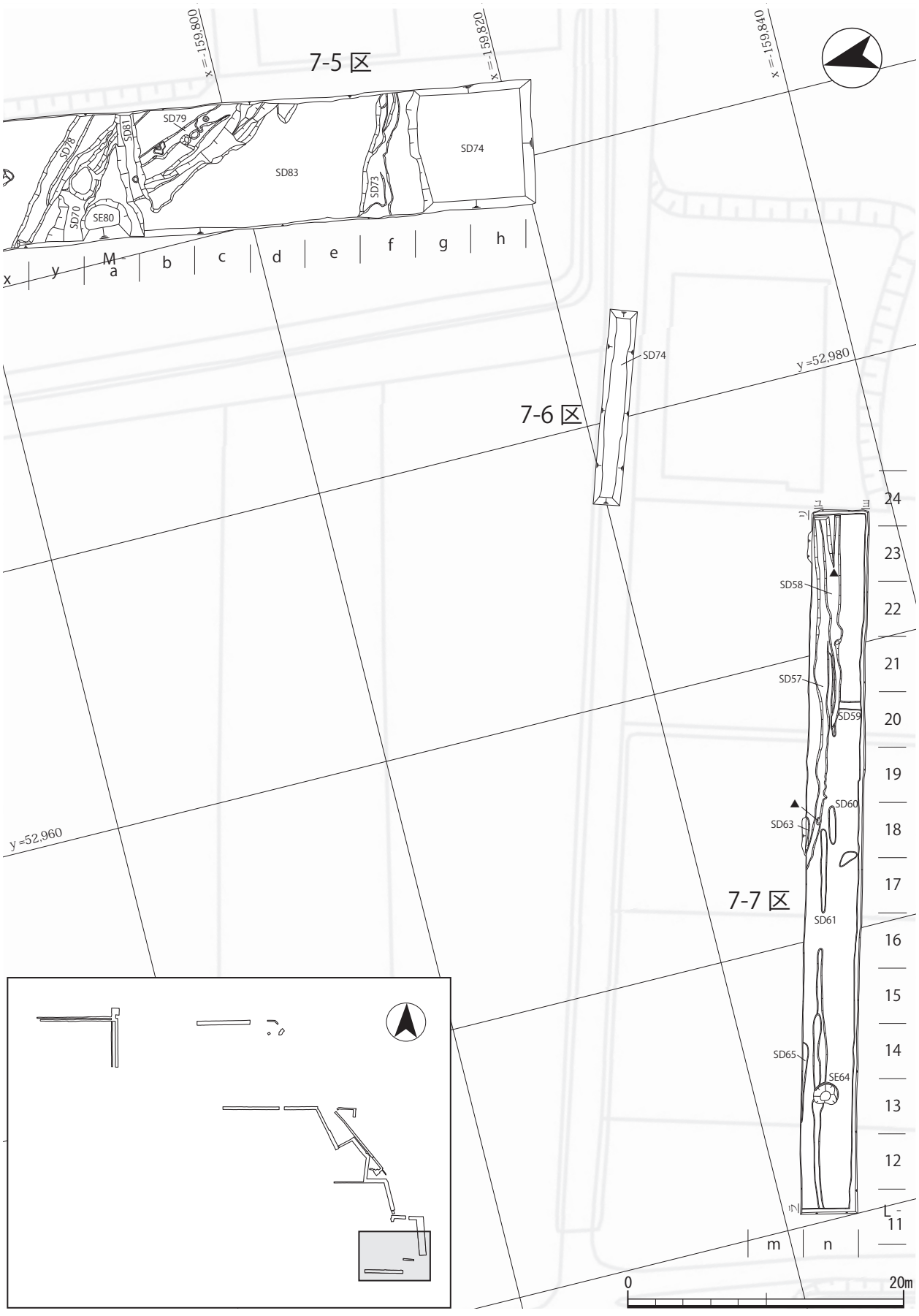


第16図　調査区平面図（５）２・７－１・７－３区（１：400）



第17図　調査区平面図（6）1・7－2～4区（1：400）

第18図　調査区平面図（7） 7－4・7－5区（1：400）



第19図　調査区平面図（8）７－５～７区（１：400）

繰り返される。包含層はみられず、遺構検出面はにぶい赤褐色シルトである。現地表面から遺構検出面までの深さは35cmである。

c　平安時代～鎌倉時代の遺構

ＳＤ８　３区で検出した溝で、ＳＤ９・ＳＤ10と重複関係にある。ベースの上に中～細粒砂が浅く堆積しており、人工的に掘り込まれたというよりは落ち込み状に堆積したものと考えられる。ＳＤ８～ＳＤ11の時期は、土器片から古代の範疇と考えられる。縄文晩期と考えられる土器片が１点出土している。

ＳＤ12　４区で検出した溝で、幅1.3ｍ、深さ0.7ｍである。上層は灰黄褐色シルト、下層は粘質土が堆積している。逆三角形状を呈した、非常に人工的な溝である。時期は、出土遺物から平安時代末から鎌倉時代初頭で、現地表面を流れる流路の前身とみられる。

6　５区

a　概略（第12図）

５区は、もっとも北西端に位置し、Ｌ字状に長くのびる調査区である。標高は4.6ｍ前後である。

基盤整備事業工事の施工時期が、南北方向に60ｍのびた区間（５－１区）と東西方向に109ｍのびた区間（５－２区）で異なっていたことから、調査期間が分かれることとなり、それぞれ枝番を付けて対応した。したがって、双方の調査区にまたがっているＳＤ35は、都合２回掘削を行っている。

検出された遺構は、土坑２基、溝３条で、このうちＳＤ35は東西方向の条里溝である。

b　層序（第５図）

５－１区は、現代耕作土を除去した上で重機掘削を行った。基本層序は、現代耕作土20cm、灰オリーブ色シルト～黄灰色砂質土の包含層30cmの下で、にぶい赤褐色シルトの遺構検出面となる。

５－２区は現代の用水路と道路（条里溝ＳＤ35と同一方向）の下を掘削したため、攪乱によって大半の遺構面が壊されていた。したがって、第12図では５－２区西側の詳細平面図を掲載していない。

c　古墳時代の遺構

ＳＤ34　５－１区のほぼ中央で検出した、落ち込み状の遺構である。ベースの上に中～細粒砂が浅く堆積し、西側底面から少量の遺物が出土した。時期は、古墳時代初頭である。土器類のほか、緑色凝灰岩の管玉（92）が１点出土していることから、付近に埋没した墳墓が存在する可能性がある。

d　平安時代後期～室町時代の遺構

ＳＤ35（第５図ＳＤ35、第20図）　５－１区と５－２区にまたがって検出した東西方向の条里溝で、平安時代後期から室町時代、そして現代に至るまで機能している。幅9.3ｍ、深さ0.86ｍで、流れの方向は東→西と考えられる。６－１区で検出したＳＤ90と一連の溝である可能性が高い。工事の都合上２回に分けて掘削したため、ＳＤ35の断面図を通しで作成することはできなかった。

５－１区（南北方向の調査区）内で検出した範囲は、ＳＤ35の南岸傾斜部分にあたる。埋土の堆積は、上層は褐色シルト層～灰色粘土、中層は灰色砂礫層で、下層の緑灰色粘土（第５図ＳＤ35:16層に相当）からは緑釉陶器、灰釉陶器、土師器が出土した。したがって、溝が最初に埋没した時期は平安時代後期と考えられる。

５－２区（東西方向の調査区）では、室町時代の木組の杭を検出した。溝の最下部（第５図ＳＤ35；13～14層）まで室町時代の遺物が入り込んでいることから、平安時代後期から使い続けてきた溝が一定程度埋没したのち、室町時代後期段階でそれを改修するように再度掘削を行ったと考えられる。

現代のコンクリート製用水路建築時の攪乱および盛土（第５図ＳＤ35；10～12層）は、室町時代の層を少なくとも80cmほど壊しており、この際に、丸杭の上半部が欠損し、地盤に刺さった先端のみ残存したと考えられる。

杭は溝の北半部に集中する。西と東にまとまりがみられるが、列として認識はできなかった。杭の先端は、最下層（第20図１層）もしくは基盤層（同２層）に達しているものが多い。杭の先端は、粗く削って尖らせるタイプ、斜めに切り落とすタイプ、方形に整えながら尖らせるタイプに大別されるが、いずれも径５～６cm程度の小型の丸杭を用いており、大規模な構造物とは言い難い。溝の上層は攪乱を受けているものの盛土などの堤構造は観察されなかった。したがって、おそらく杭同士を結ぶように粗朶

などを絡ませ、流れの向きを調節する役割を有していたことが想定される。

木杭と木杭の隙間で、ウシとウマの歯が見つかった（第20図▲地点）。これは、この付近もしくは上流で投棄されたものが、杭列で堰き止められて朽ちていったものとみられる。

7　6区

a　概要（第13図）

６－１区は、北部に位置する東西方向の細長い調査区で、全長は71ｍである。調査区のほぼ中央をコンクリート製の用水路が縦断していたため、撤去したのち調査を行った。結果、用水路の真下から同方向の条里溝ＳＤ90を検出した。

検出された遺構は溝２条と旧流路１条で、そのうちＳＤ89は南北方向、ＳＤ90は東西方向の条里溝と考えられる。

６－２区はポンプ場建設予定地である。2.5ｍ×３ｍの範囲のみ掘削を行い、全面旧流路であった。この旧流路はＳＲ88と考えられる。

b　層序（第６図）

６区は、現代耕作土を除去した上で重機掘削を行った。基本層序は、現代耕作土20cmの下で、旧耕作土と床土の互層が２回繰り返され、灰黄褐色シルトの包含層が約20cm堆積する。遺構検出面は浅黄色シルト～にぶい赤褐色シルトで、現地表面から遺構検出面までの深さは50cm程度である。

c　古代の遺構

ＳＲ88　６－１区の東半部と６－２区全域にまたがる、川幅の広い旧流路である。全体の規模は不明だが、調査区内で幅約2.9ｍ、深さ1.2ｍを測る。出土遺物は少なく、全てローリングを受けているため明確な時期は不明であるが、条里溝ＳＤ90が造られる平安時代後期には埋没していたことが想定される。範囲確認調査坑No.97からは古代の範疇の土師器類が出土している。埋土の堆積には砂層と粘土のラミナが観察され、機能時には一定量の水量があったものと推測される。

流れの方向は不明であるが、６－２区でも同様の堆積が認められたことから、少なくとも６－１区西半～６－２区の範囲で流れていた旧流路と考えられる。また、６－１区の南側に位置する範囲確認調査坑No.92・94～97でも旧流路を検出している。高低差を考えると南→北方向に伸びる流路となり、ＳＤ１と同一の軸をとるものと思われる。

d　平安時代後期の遺構

ＳＤ90　６－１区を縦断する東西方向の条里溝で、時期は平安時代後期から現代である。

溝の上層～中層は、現代のコンクリート製用水路建築時に攪乱を受けて破壊されているため、土層断面での堆積状況は観察できなかった。僅かに残った最下層には灰色中粒砂が多く堆積しており、土師器、灰釉陶器など一定量の遺物が出土した。

出土遺物から、最下層埋没の時期は平安時代後期で、５区ＳＤ35とは一連の条里溝と考えられる。ＳＤ35が室町時代に大規模な改修を受けているのに対し、ＳＤ90は現代の攪乱がみられるものの中世の遺物がほとんどみられないことから、平安時代後期段階に溝が埋まったのちは、中世・近世と改修はされなかったようである。

なお、埋土からはモモの種が１点出土している。

e　時期不明の遺構

ＳＤ89　６－１区西端で検出した、南北方向の条里溝である。遺物はほとんどみられなかったが、中世には使用されていたと考えられる。付近には、南北方向の条里溝と、それに併走する農道が現代まで走っていたが、廃棄物の投棄が著しかったため西暦2000年頃に埋め立てられたとされる。調査区北西隅の最下層で時期不明の木製の丸杭を３本検出したが、調査条件が悪く記録を取ることはできなかった。

8　7－1区・7－3A区

a　概要（第15・16図）

７－１区は東西方向の調査区で、現況は水田である。調査区のほぼ中央を、南北方向の現代用水路が横断していることから、７－１区を東西に分断し、７－１東区（全長43ｍ）・７－１西区（全長73ｍ）に細分して調査を進めた。調査の結果、調査区を縦断する東西方向の条里溝を検出した。条里溝の時期は平安時代後期～中世で、東端からは鎌倉時代後期の杭列と獣骨を確認した。

７－３Ａ区は南北方向の調査区で、全長は60ｍ

第20図　５区ＳＤ35平面図・立面図（１：50）

である。現況は水田で、斜め方向の地割に沿ってほ場整備の水路が計画された。調査の結果、調査区を縦断する南北方向の溝を検出した。

b　層序（第７図）

現代耕作土を除去した上で重機掘削を行った。基本層序は、現代耕作土 20cm を除去したのち、旧耕作土と床土の互層が２回繰り返され、灰黄色シルトの包含層が約 20cm堆積する。遺構検出面はにぶい赤褐色シルトである。

c　平安時代後期の遺構

ＳＤ 56（第７図・第 16 図）　７－３Ａ区で検出された南北方向の溝で、鎌倉時代後期のＳＤ 38 と重複する。溝の規模は幅 15 m、深さ約１m、全長は 60 m以上である。層序は､上層は灰黄褐色シルト層、下層は黄褐色土である。出土遺物は他の溝と比べて少ないが、灰釉陶器瓶（413）が出土しており、溝の埋没時期は平安時代後期である。

７－３Ａ区が地割に沿った調査区設定であるのに対し、ＳＤ 56 も調査区を縦断するように検出されたことから、現地表面に現れた地割はこのＳＤ 56 をもとに形成されたと考えられる。

d　平安時代後期～室町時代の遺構

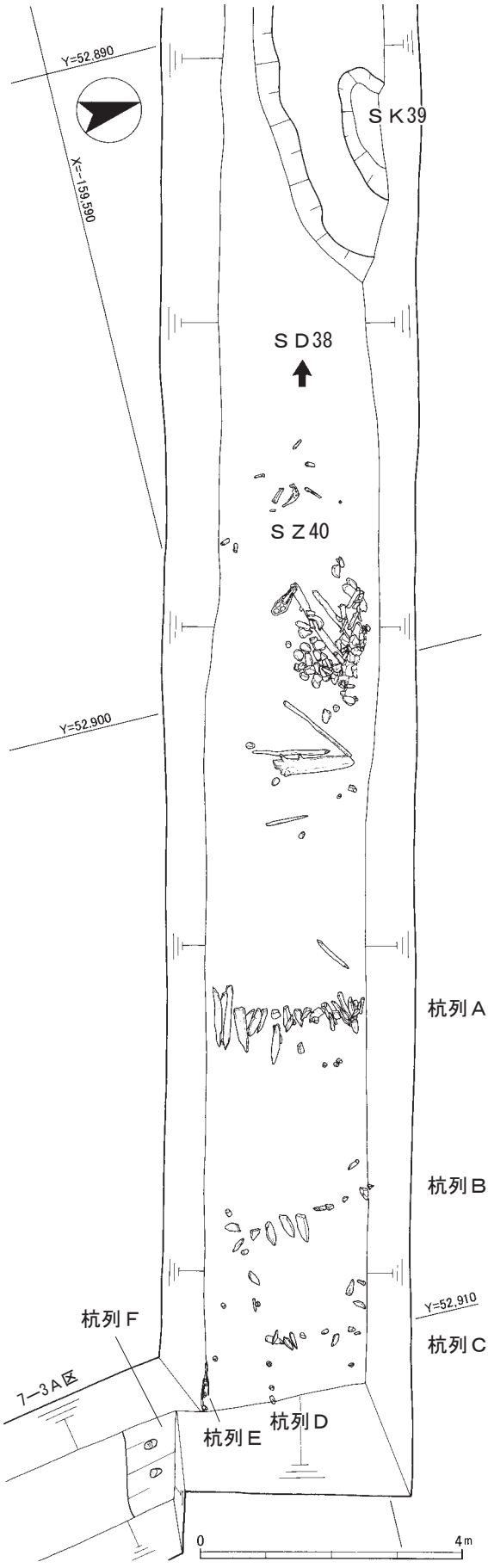
ＳＤ 36（第 15 図）　７－１西区で検出した、東西方向の条里溝である。ＳＤ 37 と重複しており、重複順はＳＤ 37 →ＳＤ 38 →ＳＤ 36 である。溝は幅約 3.5 m、深さ約１mで、条里溝であることから全長は 50 m以上と考えられる。溝の断面形はおおむね逆台形状を呈する。法面の形状は様々で、緩やかに傾斜する箇所、ほぼ垂直に落ちる箇所、一段テラスを設ける箇所などがみられる。

出土遺物は時期幅があり、溝が最初に埋まった時期は平安時代後期、全て埋没した時期は室町時代である。

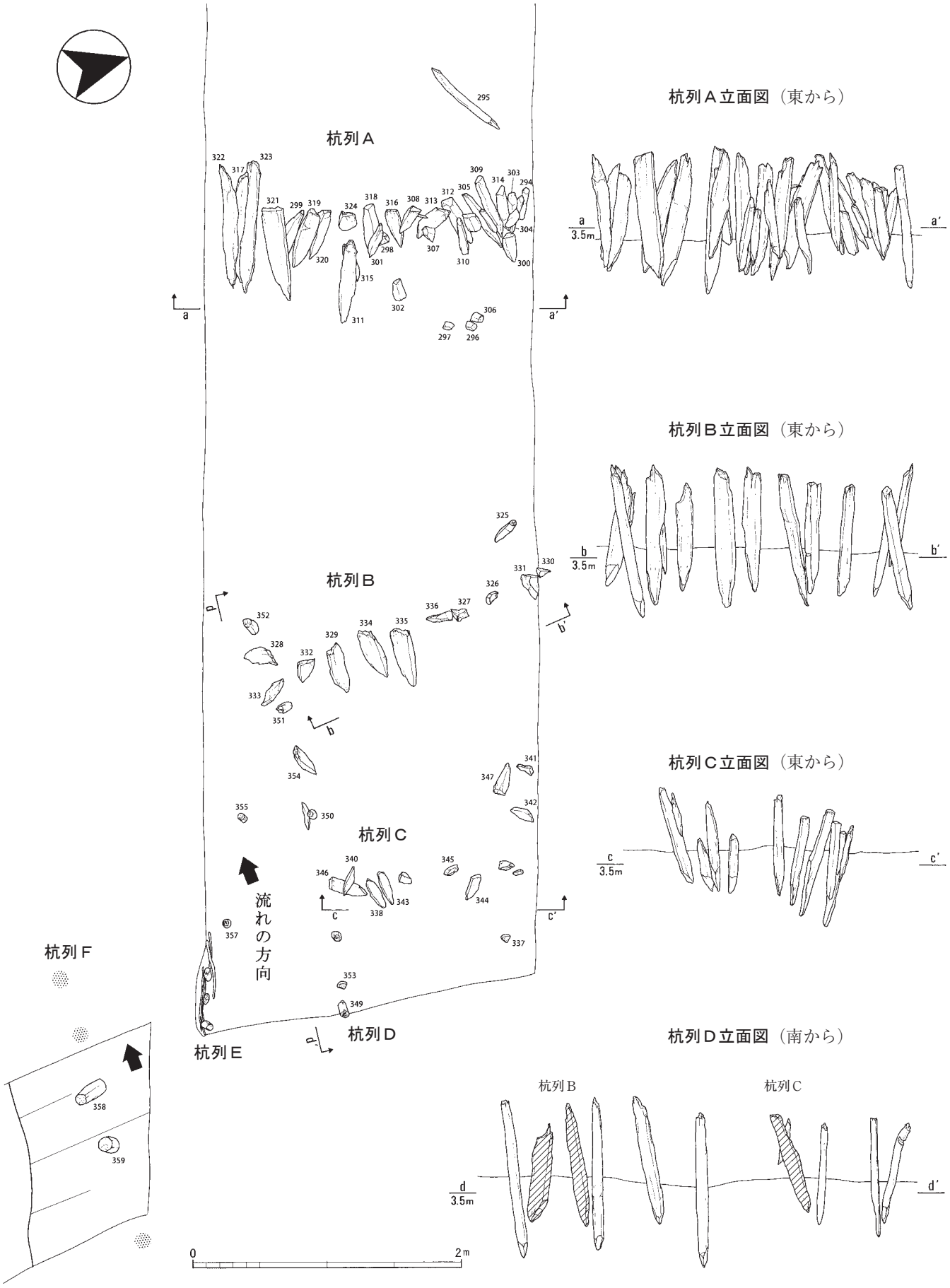
ＳＤ 37（第 15・16 図）　７－１西・７－１東区で検出した、東西方向の条里溝である。ＳＤ 37 と重複しており、重複順はＳＤ 37 →ＳＤ 38 →ＳＤ 36 である｡溝の埋土は灰黄褐色シルト～砂質土である。

ＳＤ 36 同様、出土遺物は時期幅がみられ、平安時代後期から中世の土師器鍋や山茶碗が出土している。溝が全て埋没した時期は、室町時代である。

ＳＤ 38（第 16 図・第 21 ～ 25 図）　７－１東区で



第21図　７－１区ＳＤ38平面図（１：100）



第22図　７－１区ＳＤ38杭列平面図・立面図（１：40）

検出した、東西方向の条里溝である。溝は幅約3.5ｍ、深さ0.8ｍ以上で、全長は30ｍ以上と考えられる。

ＳＤ37と重複しており、重複順はＳＤ37→ＳＤ38→ＳＤ36である。ＳＤ38最下層で、木組の杭列を５条確認し、石組を伴う不明遺構ＳＺ40および獣骨を検出した。

ＳＤ38の基本的な層序は、以下の通りである。

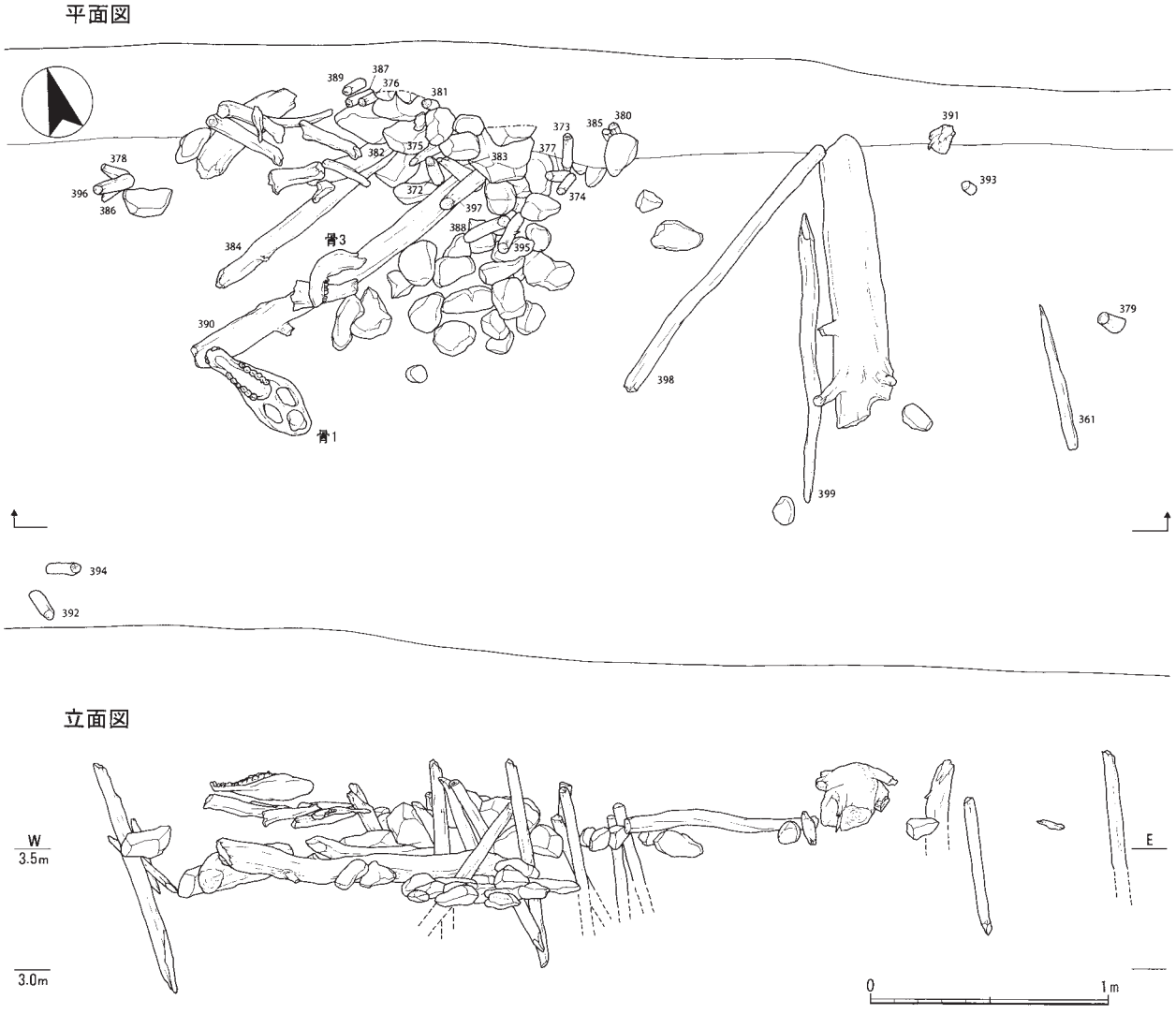
上層　　黄灰色シルト層
中層　　粘質土と砂の互層
下層　　灰色粘土～粘質土層
最下層　土手状盛土と護岸（杭による土留め）
　　ＳＺ40（石組遺構）

最下層では、調査区東端で、ベース（第７図51層）の上にオリーブ黒色粘質土（同36・37層）が土手状に堆積する。これは護岸と考えられ、その構造については別項を設け後述するが、護岸とＳＺ40はほぼ同時期に造られたものと考えられる。

護岸とＳＺ40が造られたのち、土手の法面を覆うように下層（同31～35層）が堆積する。中層は砂層と粘土のラミナがみられ、溝の機能時には一定量の水量があったことが推測される。上層は黄灰色シルトが主体である。

なお、範囲確認調査坑No.40は全面流路域にあたり、平安時代前期の墨書土器「至良」が出土していることから、ＳＤ38やＳＤ56と同一の流路である可能性、もしくは近接して複数の流路が併走している状況がうかがえる。

ＳＤ36・ＳＤ37と同じく、出土遺物に時期幅がみられる。杭列が造られた時期は鎌倉時代後期であるが、溝そのものが機能した時期は、平安時代後期



第23図　７－１区ＳＺ40平面図・立面図（１）（１：30）　獣骨の番号は第59表と対応。

から鎌倉時代後期と考えられる。

ｄ　杭による護岸（第 21・22 図）

概要　ＳＤ 38 の底面で検出した鎌倉時代後期の木組の杭列である。５条のまとまりを確認し、便宜的に、西から順にＡ→Ｅの名称を付けた。杭列は堤の構造材ないしは護岸に用いられており、条里溝に水を引きこむための水利施設と考えられる。

杭列Ａ　南北方向の杭列で、溝に対して直交する。調査区内で幅 2.3 ｍ、30 本の列を確認したが、両端とも調査区外に続いているため全長は不明である。

木製の杭は全て蜜柑割材で、比較的残存度の高いものは約 90cm が残る。角度は北に対しやや東に振る。杭は直立し、しっかりと打ち込まれる。杭列Ａは、同じ蜜柑割材を用いている杭列Ｂ～Ｃと比べて軸が異なり、杭を打つ間隔が密集しているため、他の杭列とは性格と機能が異なるものと考えられる。

杭列Ａの先端は土手（第７図 36 ～ 37 層）の法面裾部に刺さっており、杭列Ｂ～Ｃを基礎とした土手の「護岸」としての役割が想定される。ＳＤ 38 土層断面では、杭列を境として灰色粘質土（同 31 層）と灰色粘土（同 32 層）が確認され、これは杭列Ａが土留めを行った結果堆積したと考えられる。

杭列Ｂ　南北方向の杭列で、溝に対して直交する。調査区内で約 2.3 ｍ、13 本の列を確認したが、北側は調査区外に続いているため全長は不明である。南端は杭列Ｄとぶつかる点で終結する。

木製の杭は全て蜜柑割材で、１本の残存長は平均 88cm で、直立して先端がベースに到達する。杭は１本１本がしっかりとした造りとなっており、列Ａと同時期に伐採・加工されたものであろう。杭は等間隔に打たれるが、杭列Ａと比べるとまばらで、杭と杭の間は７～ 10cm 程度である。

杭列Ｂと杭列Ｃは主軸が同一で、杭列Ｄに対し直交することから、同じ性格を有するものと考えられる。ＳＤ 38 の土層断面で確認されるオリーブ黒色粘質土（第７図 36 層）は杭列Ｂ～Ｃをほぼ覆っており、杭列はこの土手の基礎部分に相当する。

杭列Ｃ　南北方向の杭列で、溝に対して直交する。調査区内で約 1.6 ｍ、11 本の列を確認したが、北側は調査区外に続いているため全長は不明である。南端は杭列Ｄとぶつかる点で終結する。

木製の杭は全て蜜柑割材で、角度はほぼ南北方向である。杭列Ａ～Ｂに比べ杭は脆弱で全長も短いが、先端はベースに到達する。杭を打つ間隔はまばらである。杭列Ｂと同じく、土手の基盤と考えられる。

杭列Ｄ～Ｆ　東西方向の杭列で、溝の流れに平行する。杭列Ｄ～Ｆの方向はいずれも同一で、全て丸太材を用いていることが特徴である。

杭列Ｄは杭列Ｂ～Ｃと直交し、調査区内で全長 3.2 ｍ、７本の列を確認した。丸杭の長さは約 118cm で、径は７cm としっかりしている。杭は垂直に打ち込まれ、30 ～ 50cm 間隔で打たれている。

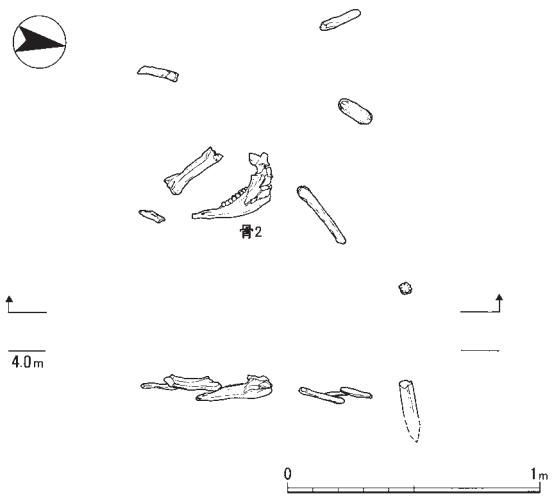
杭列Ｅは調査区の南西端で検出した。調査区の隅であったことから全体像はわからなかったが、杭と杭をつなぐように横方向の粗朶が確認された。このことから、利用時は蔦状の植物や小枝・葦や藁などを杭間に絡め、水路を区画していた可能性が高い。

杭列Ｆは７－３Ａ区で確認される。ＳＤ 38 南岸の法面裾に打ち込まれており、丸杭を２本検出した。全体像は不明であるが、杭列Ｄ～Ｅと平行するものと考えられる。

ｅ　石組遺構（第 21・23・24 図）

ＳＺ 40　ＳＤ 38 の底面で検出した石組遺構および杭である。調査区内では東西２ｍ、南北 1.5 ｍを確認したが、遺構は調査区外の北側に続いているため全体像は不明である。

構造は、径約 20cm の丸太材を横木として基盤とし、その上に人頭大ほどの石を組み、径約５cm の丸杭で

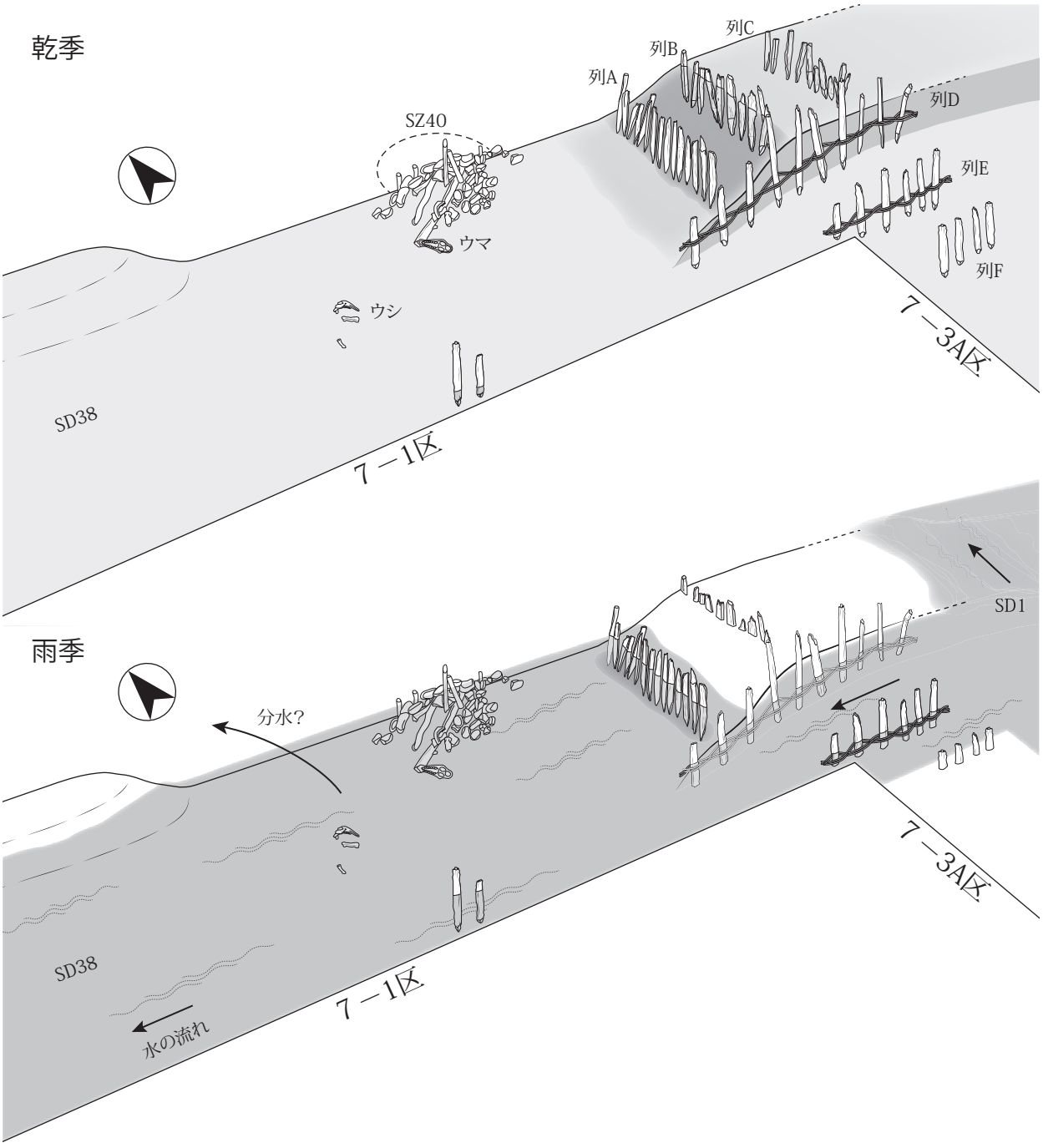


第24図　７－１区ＳＺ40平面図・立面図（２）（1：30）

石を固定する。丸杭の刺さる位置は規則的ではなく、あくまでも石を固定するようまばらに打ち込まれる。

石組周辺では、獣骨が出土した。ウマの頭蓋骨（第23図骨１）とウシの下顎骨（第23図骨３）は丸太材の直上で出土した。ウシは、ＳＺ40から西に１ｍほど進んだ先で、下顎骨（第24図骨２）のほか１頭分にあたる四肢が出土した。ウマは頭蓋骨のみが出土しているが、歯のすり減り具合から生後８～９年の壮齢個体と推測され、死因が老衰である可能性は低い。獣骨が意図的に置かれたかどうかは不明であるが、もし上流から流れ着いたものであればＳＺ40東側の杭列で堰き止められる可能性が高いため、獣骨はＳＺ40周辺で投棄されたと考えられる。

ＳＺ40の用途は不明であるが、杭や石が乱雑に積まれていることから水利施設とは考え難い。出土遺物は、底部に「大」と墨書された山茶碗のほか、土師器皿８点・木札状製品３点・火付木１・積木のような未成品６点である。石組周辺で土師皿が複数



第25図　７－１区ＳＤ38・ＳＺ40模式図

まとまって出土したこと、獣骨の投棄や火付木がみられること、木札状木製品が地面に突き刺さるように出土したことが特筆される。

ｆ　杭列の立地と性格

護岸の規模と構造　ＳＤ38底面で検出した５条の杭列は、調査区内で長さ6.5ｍ、幅約４ｍの範囲で確認される。

まず、ベース（第７図51層）およびオリーブ黒色粘質土（同36～37層）は､土手状を呈した「堤」と考えられる。土手部分の土層断面では版築技法や敷葉工法は確認されなかったため、あくまでも盛土の基礎は杭で、杭列Ｂ～Ｃとその周囲を固定するように土を盛っていると考えられる。

一方、杭列Ａは、蜜柑割のしっかりとした杭を、間隔を密にして打ち込んでいる。杭列Ａは土手の法面裾部に刺さっており、杭列Ｂ～Ｃに支えられた土手の「護岸」としての役割が考えられる。

杭列Ｄ～Ｆは丸太材の杭で、水路を区画するものと考えられる。この水路は西から東に取りつくもので、具体的には現在の幹線用水路と同じ位置を走る大溝ＳＤ１（ＳＤ51）から、東西方向の条里溝ＳＤ36～38へと水を配っている。したがって、これら杭列およびＳＺ40は、条里溝の水口に取り付けられた施設といえる。

杭列からＳＤ38岸部までは11ｍの開きがあり、その間でＳＺ40を検出した。杭列から条里溝ＳＤ38岸部までが広い空間となっていることから、もしかしたら北方向に伸びる溝が重複しているのかもしれない。護岸改修工事を行ったのは水の流れていない乾期が想定され、ＳＺ40構築時には溝の底面に水が流れていなかった可能性が高い。

杭列の時期と出土状況　ＳＤ38は平安時代後期から機能している溝と考えられるが、下層とＳＺ40からは山茶碗類の出土がみられることから、堤が構築された時期は鎌倉時代後期と考えられる。

９　７－２区・７－３Ｂ～Ｅ区・７－４区

ａ　概要（第８～９図、第17図）

７－２区・７－３Ｂ～Ｅ区・７－４区は、地区をまたぐ遺構が多いため、まとめて記載する。標高は5.8ｍ前後である。基盤整備事業に伴う工事の都合上、７－２区・７－４区は夏に調査を行い、７－３Ｂ～Ｅ区は秋に調査を行った。

検出した主な遺構は、大溝７条、土坑１基で、溝の方向はいずれも条里型地割と一致しない。

ｂ　層序（第15～17図）

現代耕作土を除去した上で重機掘削を行った。基本層序は、現代耕作土20cmを除去したのち、旧耕作土と床土の互層が２～４回繰り返され、褐灰色シルトの包含層が約20㎝堆積する。遺構検出面は浅黄色色シルトである。

ｃ　平安時代前期後半～平安時代後期の遺構

ＳＤ41・ＳＤ43（第17図）　７－２区西端で検出した。ＳＤ41は幅0.5ｍ、深さ0.3ｍの小規模な溝である。Ｓ字状に蛇行しながら東西方向に５ｍ程確認される。ＳＤ42・ＳＺ44と重複する。出土遺物は土師器坏・土師器甕・灰釉陶器で、時期は平安時代前期後半である。

ＳＤ41はＳＤ43と同一の溝である可能性が高く、ＳＤ41・ＳＤ43からは同じヘラ記号をもつ土師器坏（第46図426・430）が出土している。

ＳＢ46（第17図）　根石を伴う掘立柱建物で、ＳＫ48と隣接する。ピットから志摩式製塩土器と灰釉陶器が出土しており、時期は平安時代前期後半と考えられる。第１・２次調査で確認された唯一の建物跡であるが、調査区の端で検出したためプランは不明である。建物の軸はＮ52°Ｗで、旧飯野郡条里プランとは若干異なっている。

ＳＤ47（ＳＤ53）（第８・９図､第17図）　７－２区・７－３Ｄ区・７－４区にまたがる大溝で、多量の遺物が出土した。７－２区と７－３Ｄ区は最上層でつながっていることを確認したため、同じＳＤ47とした。ＳＤ53は、調査区がやや離れているため異なる遺構番号を付与したが、ＳＤ47と埋土の堆積と遺物出土状況が類似することから同一の溝であると判断した。

溝の規模は深さ1.4ｍ、全長20ｍ以上である。機能時の幅は８ｍで、最上層の氾濫堆積を含むと幅16.2ｍとなる。ＳＫ48に隣接する。７－３Ｄ区ＳＤ47は、中世の溝ＳＤ86と重複している。

７－２区ＳＤ47の基本層序と時期は、以下の通りである。

最上層　褐灰色シルト～土層（炭層Ⅰ）
上層　黄灰色土～粘質土層（炭層Ⅱ）
10 世紀後半～ 11 世紀初頭
中層　褐灰色砂質土～土層
下層　青灰色粘土土層
最下層　褐色粗砂・暗褐色粘土層
９世紀末～ 10 世紀前半

７－４区ＳＤ 53 の基本層序は､以下の通りである。
上層　黄灰色粘質土層（炭層Ⅱに相当）
中層　黄灰色砂質土層
下層　灰色粘土層
最下層　灰色粗砂混じりシルト層

最下層は、まず暗褐色粘土層（第８図 51 層）が堆積する。この粘土層からは、斎串のほか鳥形や刀形などの木製形代が出土しており、大溝使用時に水辺の祭祀が行われたことを示している。溝のほぼ中央を流れる褐色粗粒砂（同 50 層）ではラミナが観察され、機能時に一定量の流水があったことがわかる。破片状態で多量に出土した土器は、近場の上流から流れてきたものと考えられ､「官」の墨書土器が出土している。最下層の埋没年代は、出土遺物から平安時代前期後半段階の９世紀末から 10 世紀前半と考えられ、後世の攪乱は受けていない。平安時代前期以前の遺物は、弥生時代後期の土器以外みられないことから、溝が掘削された時期と機能した時期はほぼ同一であると思われる。

下層は、青灰色粘土層が相当し、この層は最下層を覆うように堆積している（同 47 ～ 49 層）。多くの墨書土器がこの層から出土しており､「成」３点､「貢」１点､「美」１点など、底部に一文字だけ墨書された土師器坏・皿を投棄する祭祀行為が認められる。下層の埋没時期は、出土遺物から９世紀末から 10 世紀前半と考えられ、最下層と大きな時期差はみられない。

中層は、溝の両岸からの流れ込みと考えられる褐灰～黄褐色粘質土層が相当する（同 39 ～ 47 層）。遺物は全て破片で、この層は自然に堆積したものと考えられる。

上層および最上層は、多量の炭片とともに多くの遺物が出土した。(2) 上層は、溝の西側から東側に向かって緩やかに堆積している（同 36 ～ 38 層）。最上層には炭の層が 20cm ほど堆積し、その範囲は大溝の西側に大きく広がっている（同 29 ～ 35 層）。ＳＫ 48 はＳＤ 47 上層を除去したのち検出されたことから、上層が堆積した時期は平安時代後期以降ということになる。

この上層・最上層からは、第１・２次調査でもっとも多くの遺物が出土した。そのほとんどが、50 ㎡ほどの面積に 20 ～ 30cm 堆積した炭層から出土したことが特筆される。遺物の時期は９世紀末から 11 世紀初頭と幅が広く、山茶碗も２点出土している。ただし、主体は緑釉陶器や越州窯系青磁などを含んだ９世紀末から 10 世紀前半の土器群で、これらが 10 世紀後半の土器群や炭と混在して出土した。したがって､溝が埋没した 10 世紀後半の段階で、約 100 年間使用・保管されていた土器群が一括で捨てられた状況が想定される。

なお、比較的残存度の高い炭化材２点の樹種同定を行ったところ、１点はネジキ、１点はおそらくネムノキであった。(3)

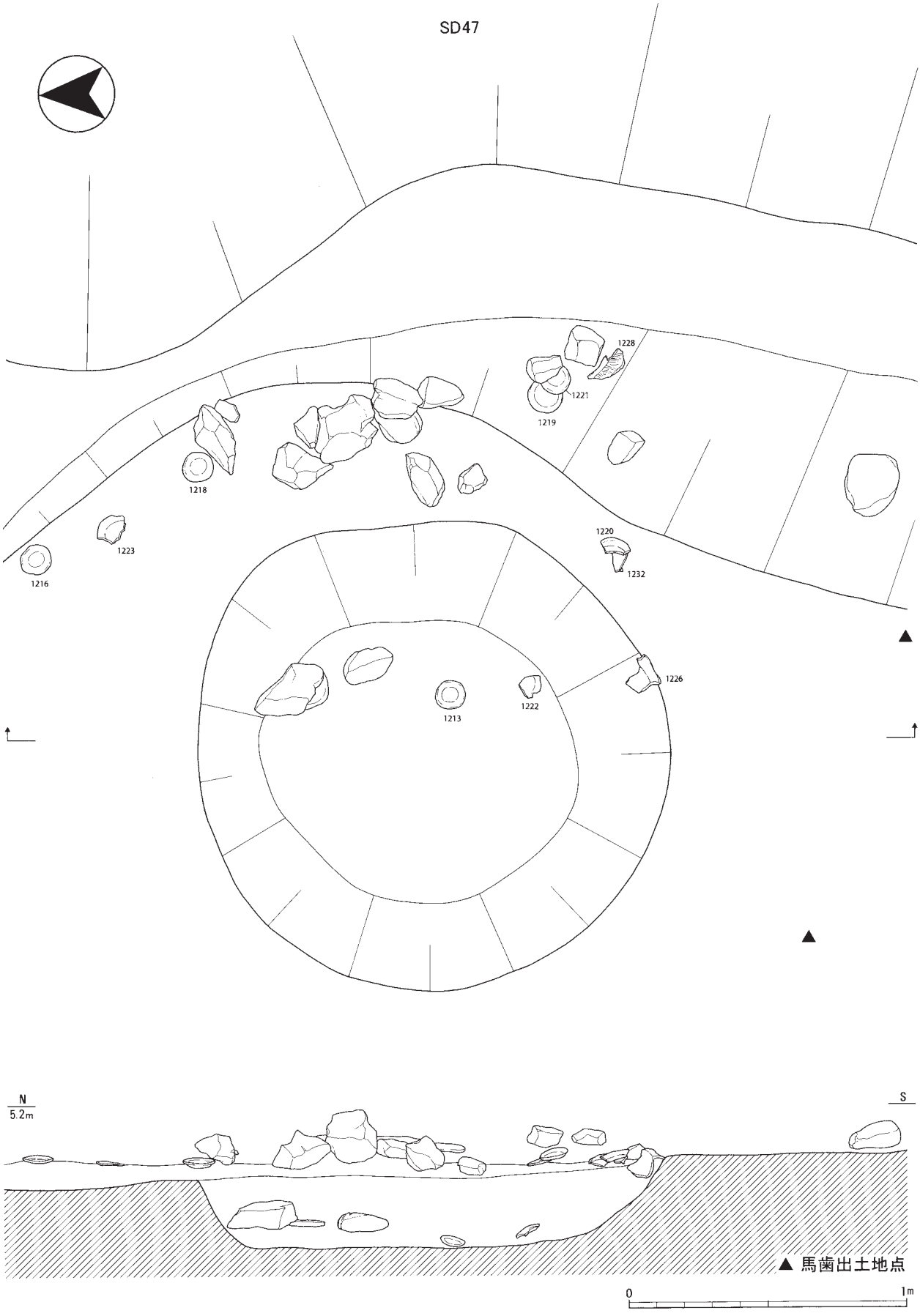
ＳＫ 48（第 26 図）　７－２区のほぼ中央で検出した土坑である。直径 1.7 ｍのほぼ正円形を呈し、深さは 0.25 ｍと浅い。埋土は黒褐色粘質土で、土器と炭を多量に含んだＳＤ 47 上層を掘削したのち、浅黄色粘質土のベース面で検出した。

土坑の時期は 10 世紀後半と考えられる。遺構の重複順は、ＳＤ 47 最下層～中層→ＳＫ 48 →ＳＤ 47 上層・最上層（炭層）である。

ＳＫ 48 周辺には、ＳＤ 47 に向かって角ばった自然石を配し、その間にほぼ完形の土師器皿５点を配していることが特筆される。これらは上向きで出土し､投棄されたものとは考えられなかったことから、ＳＫ 48 に伴うものとして扱った。

一方、土坑内の出土遺物は、完形の土師器皿１点・甕片１点のみである。正円形の土坑は何かを埋めるために用いられたと考えるのが自然であることから、中にあった遺物は土坑の浅さゆえに朽ちてしまう有機物などが想定される。土坑南側では遺構検出面直上からウマと考えられる歯が２点見つかっており、例えばウマなどの埋納が推測される。

これらのことから、ＳＫ 48 は大溝に関わる水辺の祭祀行為の痕跡と考えられ、その目的はウマを用



第26図　７－２区ＳＫ48平面図・断面見通し図（１：20）

いた雨乞いなどが想定される。

d　平安時代前期後半～鎌倉時代初頭の遺構

ＳＤ 49（第８図、第 17 図）　７－２区・７－４区で検出した、蛇行する大溝である。１区と同一の可能性が高い。幅 10 ｍ、深さ 1.1 ｍ以上で、調査区内での全長は約 18 ｍである。

遺構の時期は、出土遺物から平安時代前期後半から鎌倉時代前期で、機能していた期間はＳＤ 52 とほぼ同時期と考えられる。最下層から墨書土器「業」「葉」など５点・土馬・朱墨の付着した灰釉陶器が出土している。

ＳＤ 52（第９図、第 17・18 図）７－４区・７－５区で検出した大溝で、溝の方向は南北である。幅 2.2 ｍ、深さ 0.7 ｍで、調査区内の全長は約 40 ｍである。

層序は上層、中層、下層に細分される。中層にあたる青灰色粘土層（第９図 53 層）は場所によって厚く堆積しているが、遺物はほとんど含まれない。最下層の黄褐色中粒砂層（同 54 層）は出土遺物が多く、特に石帯２点（1336・1337）がこの層から出土したことが特筆される。

遺構の時期は、出土遺物から平安時代前期後半から鎌倉時代前期と考えられる。ＳＤ 49・ＳＤ 52 出土遺物は、ＳＤ 47 と比べて木製祭祀遺物がみられず墨書土器が少量であること、転用硯や石帯が出土したことから、やや実務的な色合いが強い傾向が見てとれる。また、ＳＤ 52 は溝の方向がほぼ南北であるため、区画溝の可能性がある。

e　鎌倉時代の遺構

ＳＤ 51　７－２区・７－４区で検出した大溝である。１区ＳＤ１と同一の可能性が高い。詳細はＳＤ１の項を参照されたい。

f　時期不明の遺構

ＳＤ 54（第 18 図）　７－４区の南端で検出した溝である。ＳＤ 52 と重複するが、前後関係は不明である。幅 4.2、深さ 0.7 ｍを測るが、土坑の可能性もあるかもしれない。

ＳＤ 84（第 17 図）　７－３Ｄ区で検出した溝である。幅 1.1 ｍ、深さ 0.8 ｍを測り、ＳＤ 86、ＳＤ 47 と重複する。ＳＤ 47 掘削時に取り上げた遺物のうち、山茶碗（1345）、瓦器椀（1334）はＳＤ 84 の遺物である。ＳＤ 49、ＳＤ５と同一の溝である可能性がある。

ＳＤ 87（第 16 図）　７－３Ｅ区で検出した溝である。現況道路の真下を掘削した。出土遺物はほとんどみられなかったが、16 世紀代の土師器鍋（1351）が出土していることから、中世後期の可能性が高い。周辺の遺構から推測すると、ＳＤ１（ＳＤ 51）に後続する水路の可能性が高い。工事深以下は掘削していないため、深さは不明である。南半部は現代の攪乱によって削られている。

10　７－５区・７－６区

a　概要（第 17・18 図）

この調査区は、平成 22 ～ 23 年度の調査の中で一番広い面積である。調査区は南北方向が 51 ｍで、東西方向が 44 ｍの逆Ｌ字形である。調査区は、現在南北方向に用水路が走っているため、その部分を除いている。そのため、調査時には地区を３分割し、便宜的に７－５①～７－５③区の番号を付与して調査を実施した。

７－５区の面積は 595㎡、７－６区の面積は 17㎡で、標高は 5.5 ｍ前後である。検出された遺構は、井戸２基、土坑１基、溝 12 条と少なく、７－６区の大部分は溝である。　（萩原・相場）

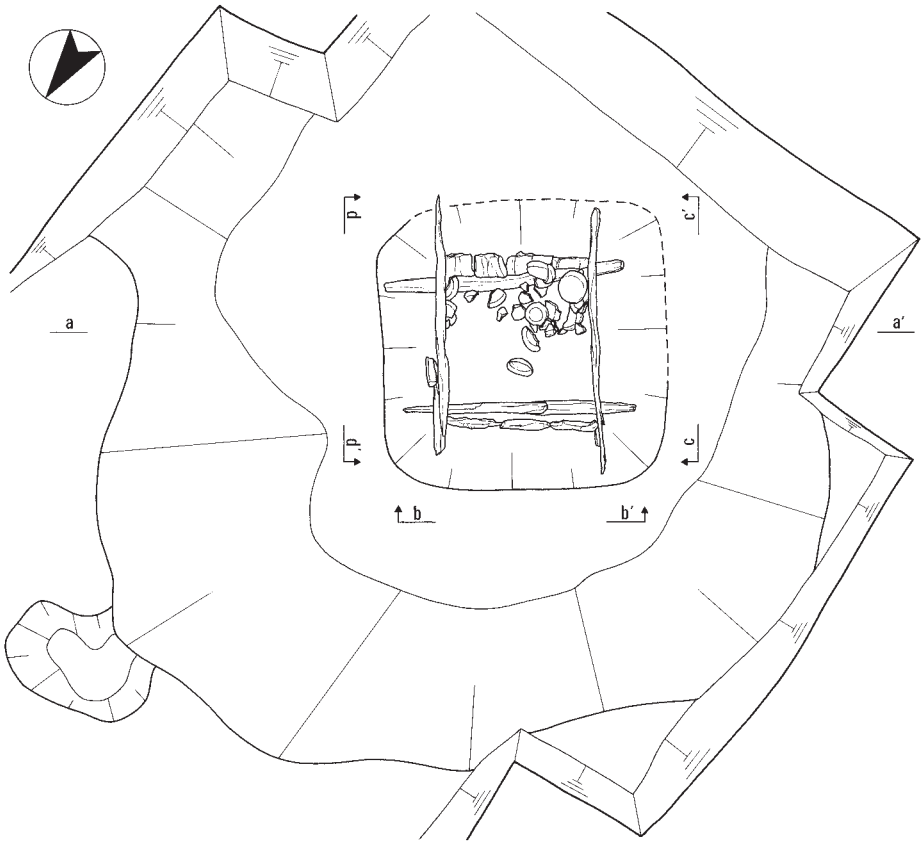
b　層序（第 10 図）

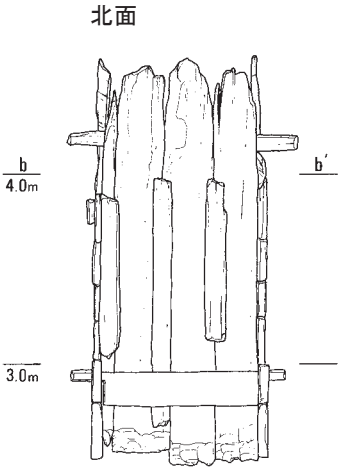
現代耕作土を除去した上で掘削を行った。上から耕作土、灰褐色シルトの順で、遺構は灰褐色シルト上において検出した。　（萩原）

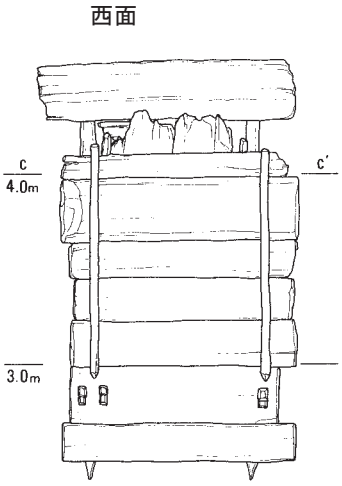
c　平安時代前期後半の遺構

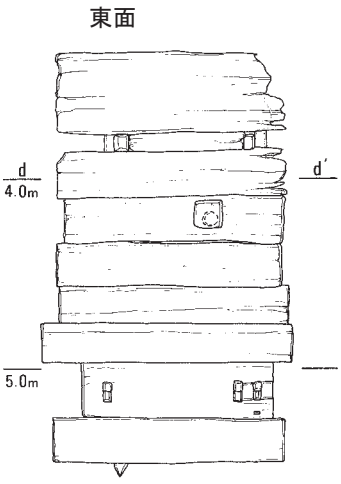
ＳＤ 66　７－５区の北側に位置している。中央付近には、大溝を分断するような形で、北→南方向に流れるコンクリート製用水路が流れている。ＳＤ 66 は、この現代用水路の前身と考えられることから、流れの方向も北→南と推測される。ＳＤ 66 の規模は、幅約 20 ｍ、深さ 1.2 ｍ以上である。

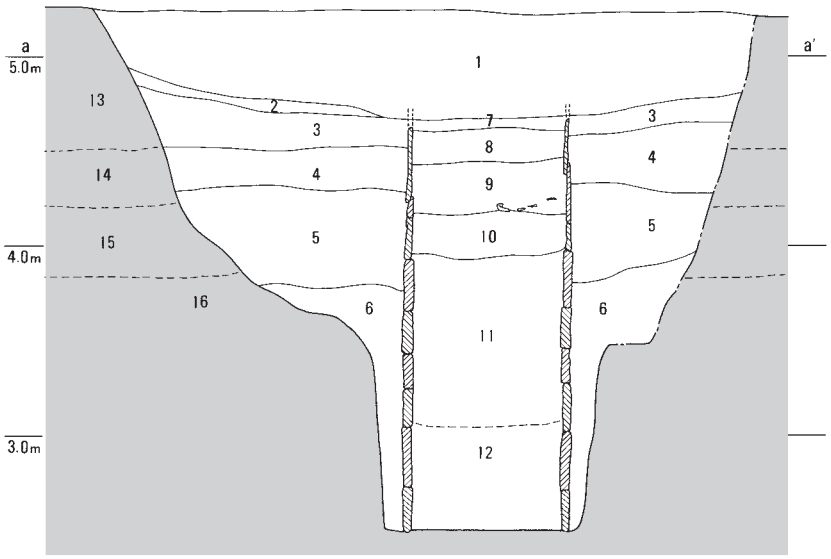
層序は上層・中層・下層に細分され、工事掘削深度以下は調査を行わなかったため最下層は不明である。中層にあたる褐灰色細粒砂から土師器、黒色土器などのほか、斎串（1661）・祭祀遺物と考えられる棒状木製品（1662）・墨書土器 14 点が出土した。溝の埋没時期は、平安時代前期後半と考えられ、ＳＤ 47 とは、出土遺物や堆積状況が同一であることから一連の溝である可能性が高い。　（相場）





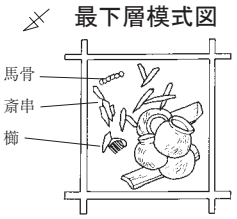


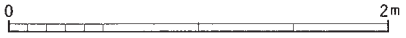




1　10YR3/1 黒褐色粘土（黄褐色ベースブロック 40％含む）
2　10YR5/2 灰黄褐色土
3　10YR4/1 褐灰色砂質土
4　10YR3/1 黒褐色粘土（黄褐色ベースブロックと 1 層を 50％含む）
5　10YR3/1 黒褐色砂質土（黒色粘土と青灰色粘土混じり）
6　10G6/1 緑灰色粘土
7　7.5YR4/1 褐灰色土　〔最上層〕
8　10YR4/2 灰黄褐色土　〔最上層〕
9　10BG5/1 青灰色粘土　〔上層〕
10　5BG5/1 青灰色砂質土（黒色粘土混じり）〔中層〕
11　10YR3/1 黒褐色粘土（褐色土混じり）　〔下層〕
12　10YR2/1 黒色粘土（腐食土・遺物多い）　〔最下層〕
13　2.5Y7/4 浅黄色シルト（ベース a）
14　5YR4/3 にぶい赤褐色シルト（ベース b）
15　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（ベース d）
16　2.5Y5/4 黄褐色粘質土（ベース e）

堀方
埋土
地山





第27図　７－５区ＳＥ72平面図・断面図・立体図（１：40）

ＳＤ 68（第 18 図） この溝は、７－５区で東西方向に掘削された溝である。溝の規模は、幅 0.28 ～１m、深さ 0.16 mである。遺物には、土師器・緑釉陶器唾壺(1674)などが出土している。溝の時期は、平安時代後期とみられる。（萩原）

ＳＥ 72（第 27 ～ 28 図） ７－５区の調査区西端で掘方を検出した。井戸の可能性が高かったため調査区を南に拡張して掘削を行ったところ、木組の井戸枠が確認され、９世紀末から 10 世紀前半の土器や木製祭祀具など良好な一括資料が出土した。

井戸掘方は不整円形で、東西４m以上、南北 3.8 m以上、遺構検出面から底までの深さは 2.75 mである。調査時、標高 3.8 m付近から非常に激しい湧水があったことから、最下層の土層断面および遺物出土状況は図化・撮影ができなかった。

井戸掘方の埋土は、下から緑灰色粘土、黒褐色砂質土、黒褐色粘土（ベースブロック混じり）、褐灰色砂質土～灰黄褐色土、青灰色粘質土(ベースブロック混じり）で、最下層の緑灰色粘土はヘドロ状に近いものであった。遺構検出面は標高 5.3 mで、井戸枠検出面は 4.7 mである。この間に 60cm 堆積する最上層（第 27 図１層）は粘土ブロック混じりであることから人工的に埋められた層と考えられるが、還元層(同 15 層)より上部の材は風化が著しいため、元々は遺構検出面まで何段かの材があったが朽ちてしまった、もしくは井戸枠検出面よりさらに上部にあった井桁などの構造材が抜き取られたものと考えられる。朽ちた有機物の痕跡や、井桁抜き取り痕は観察できなかったが、枠内上層（同９層）には井戸閉鎖時の祭祀と考えられる多量の土師器坏が正位で並べられていたことから、使用時の井戸枠上端から枠内上層までは、手が届く程度の高低差しかなかったものと思われる。掘方出土遺物は、土師器坏、皿がある。土師器坏には、底部に「籌」「令」と墨書された土師器坏の墨書土器２点が含まれる。加工痕が認められる材（1570 ～ 1572）は、井戸枠と同じスギ材であることから、枠を現地に据え付ける際に発生した木端であろう。

井戸枠は正方形で、一辺 0.8 mである。井戸枠は標高 4.7 mで検出し、そこから下に 2.15 mが残存するが、還元層（同 15 層）より上部の有機物は風化が著しいため、実際の全長はさらに長かった可能性が高い。

井戸枠の構造は、縦板と横板を組み合わせたもので、南北に縦板を並べ、東西に横板を積み重ねたものである。縦板と横板は規格性があるため、あらかじめ井戸枠用に用意したものと考えられ、転用材の可能性がある材はほとんどない。縦板は全長 2.1 m以上×幅 29cm ×厚み６cm のもの、横板は全長 1.2 m×幅 20cm ×厚み６cm のものが主体である。樹種同定の結果、いずれの材もスギであるため、元々は１つの材であった可能性が高い。

構築順は、まず掘方底部に横板の最下段（1589・1600）を据える。横板下から２段目（1590･1601）は、縦板固定用の横桟状板材と連結する臍穴が両端に認められる。この横桟状板材（1602 ～ 1605）は計４枚見つかっているが、横板２段目の材には臍穴が３ヶ所しか確認できない。そのため、木釘孔などが共通する横桟状板材２枚（1602・1603）は重ねて１つの材として用い、縦板の内側を固定していたことが圧痕から推測される。一方、両端に臍があるだけの単純構造をとる横桟状板材（1604・1605）は、２枚で縦板を挟み込むように固定していたことが圧痕からわかる。約 2.2 mが残存する長細い縦板は、先端を杭状に尖らせており、一辺４枚を用いる。

２段目より上段の横板は、内側を縦板に当てるように積み上げて、外側は土圧で固定したと考えられる。横板を７枚ずつ積み上げたのち、縦板の内側から棒状の横桟（1606・1607）で固定する。横桟より上部に位置する板材は、比較的厚みが薄く、粗雑な材を用いており、風化が著しい。丸い穴の開いた横板（1585）には、外側から穴を塞ぐ板材（1581）が取り付けられていた。また、西面横板の外側には、横板を固定するために細長い杭（1612・1613）を２本打ち込んでいる。縦板と縦板の間には腰板（1608 ～ 1611）が認められ、隙間から漏れる水をとめる役割を有している。

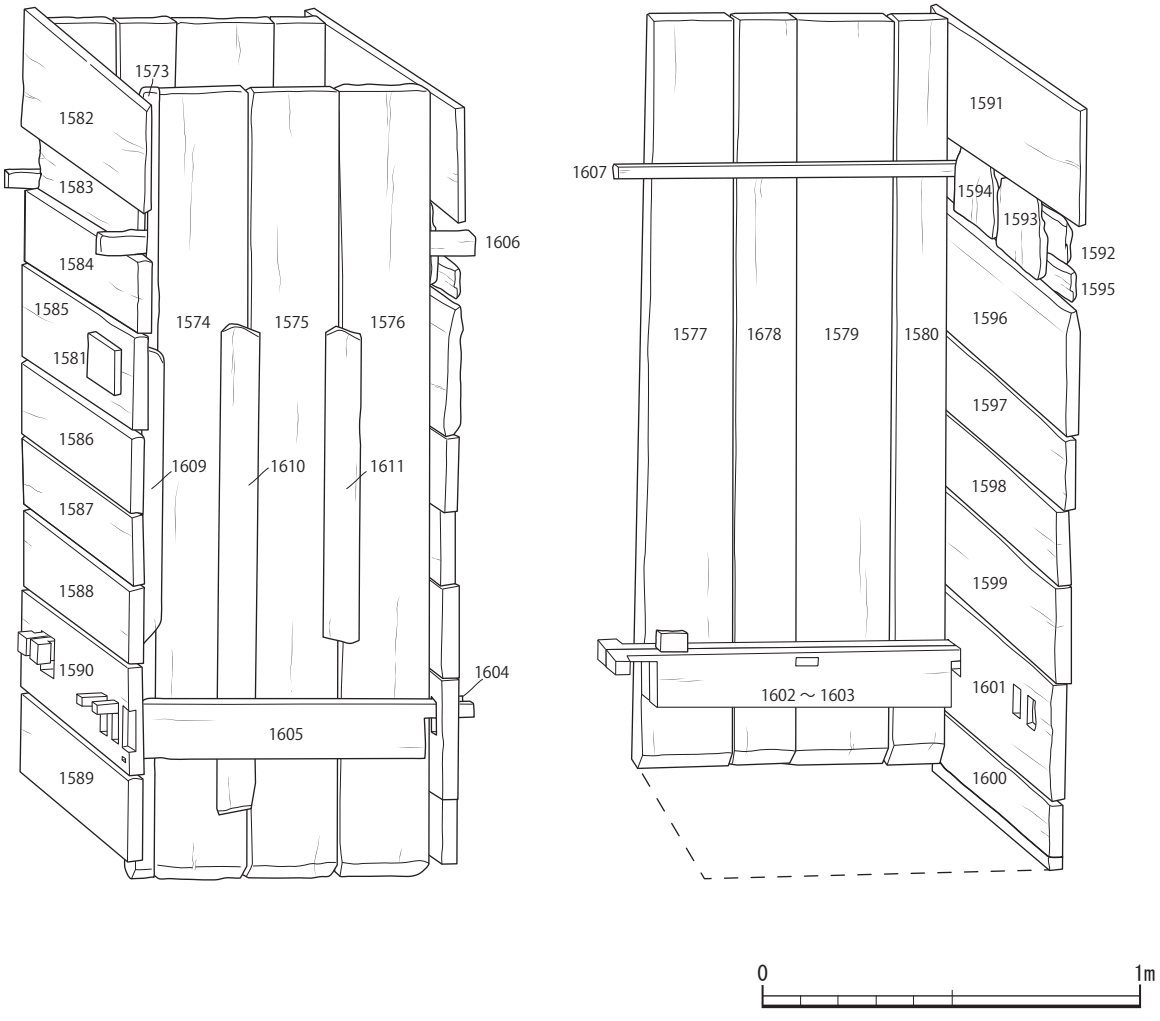
底は岩盤と考えられる固い層で、川原石の敷設や曲物の埋設は認められず、中央を掘りくぼめた土坑状の落ち込みなどもみられなかった。縦板の先端を杭状に尖らせてあることから、これを岩盤に直接打ち込み、板材を固定していたものと推測される。

井戸枠内の埋土は、最下層・下層・中層・上層・最上層に細分される。このうち、最下層と下層の間は、周囲からの湧水により分層を確認することができなかった。いずれの埋土も、保水性は高く有機物がしっかり残るものの、あまりヘドロ状ではない。

出土遺物は、青灰色粘土の上層（第24図9層）と黒色粘土の最下層（同12層）に完形品が集中し、その他の層では破片程度である。なお、ＳＥ72出土土器全体の様相として、土師器類のみが用いられ、陶器類はほとんどみられないことが特筆される。

最下層の出土遺物は、土器類・木製祭祀具・獣骨に大別される。まず土器類であるが、調査時に欠損したものの、元々はほとんどが完形品であったと考えられる。出土した器種は、土師器坏・土師器甕・土師器鉢・黒色土器椀・黒色土器小型壺がある。土師器坏は２点に底部穿孔があり（1433・1434）、墨書土器は「籌」１点（1446）、「粂」１点（1445）、不明１点（1444）である。黒色土器椀（1449）は畿内産で、底部に四方結界を示す墨書がみられる。黒色土器小型壺（1448）も畿内産である。甕は、外面全体に煤が付着する約６点と、使用痕跡がみられない13点に大別される。煤が付着した甕は、内面にも炭化物が付着し、底部外面に焼成前のヘラ記号が描かれる。一方、未使用の甕のうち１点（1458）には両面に「南」と墨書されている。このほか、最下層からは志摩式製塩土器（1473・1474）、灰釉陶器瓶片（1475）が出土しているが、これらは残存状況が悪いため、井戸構築時に紛れ込んだものと考えられ、一括性は低い。

最下層出土木製祭祀具は、斎串・紡織具・横櫛、火付木（燃えさし）が挙げられる。斎串（1476～



第28図　７－５区ＳＥ72模式図（１：20）

1510）は約35本出土した。紡織具（1518・1519）は、2つが十字状に組み合わさるものである。横櫛（1520・1521）は2点出土した。火付木（1532～1538）は7本出土し、長方形に加工したもの、自然木をそのまま用いたものがある。最下層からは、このほか曲物底板（1522・1523）、折敷片（1517）、木札状の板材片（1524～1530）が出土したが、これらが祭祀行為に伴うかは不明である。

最下層出土獣骨は、ウマの歯である。井戸枠内南東隅において、斎串をまとめて取り上げた直下で出土した。出土時には歯が並んでおり、頭蓋骨の残骸とみられる有機物がしっかりと残っていた。

上層の出土遺物は、土師器坏約25枚（1539～1562）である。いずれも完形で、同一の器種が多量に投棄されていることから、中に何らかの有機物を入れて供献されたことが想定される。井戸枠内ではモモの種が見つかっていることから、具体的にはモモなどの果物類を用いた可能性がある。これも、井戸を閉鎖する際の祭祀と考えられる。

ＳＥ72の時期は、出土遺物から平安時代前期後半、9世紀末から10世紀前半である。構築時（掘方の出土土器群）、廃絶時（井戸枠内最下層の土器群・井戸枠内上層の土器群）は、時期差がほとんどみられない。したがって、井戸を掘って使用し、閉鎖時に祭祀遺物を一括投棄・供献するといった一連の流れは、土器編年における1～2型式の間に行われたことがわかる。（相場）

ｄ　鎌倉時代～近世の遺構

ＳＥ80（第29図）　この井戸は、7－5区の中ほどに位置している。井戸の規模は、長径が1.7ｍ、深さ1.6ｍである。ＳＤ70及び81の重複関係を整理するとＳＤ70→ＳＤ81→ＳＥ80の順である。遺物には、土師器から陶器椀（1742～1765）などが出土している。井戸の時期は、室町時代以降とみられる。

ＳＤ81（第18図）　この溝は、調査区中ほどに位置し、東西方向に掘削された溝である。溝の規模は、幅1.6ｍ、深さ0.4ｍである。遺物には、土師器から陶器など（1686～1694）が出土している。溝の時期は、平安から室町時代とみられる。

ＳＤ83（第18図）　調査区の中央部のほとんどを占める溝である。溝の規模は、幅11.5ｍ、深さ約1ｍである。遺物には、土師器、陶器椀、ロクロ土師器、緑釉陶器、南伊勢系土師器鍋（1695～1741）など広範囲な時期のものが出土している。時期の新しいものは、溝の埋没時期を示していると判断できる。溝の時期は平安時代から室町時代にかけてとみられる。（萩原）

ＳＤ74（第18図）　7－5区の南端に位置し、7－6区全てが流路域にあたる。遺物は微量であるが時期は近世で、最下層まで掘削を行わなかった。（相場）

11　7－7区

ａ　概要（第19図）

この調査区は、平成23年度調査の中でもっとも南側に位置している。調査区は、南北方向が4ｍで東西方向が50ｍの長方形である。調査区の調査面積は、200㎡である。調査区の標高は、5.8ｍとほぼ一定で削平などは少なかったと推測される。

検出された遺構は、井戸が1基、土坑1基、素掘溝6条と少ない。しかしながら、溝は東西方向に掘削されており、一定方向に保たれて掘削されたと思われる。遺物は、細片が中心であるが出土している。

ｂ　層序（第11図）

上から耕作土、灰オリーブ色砂質土、黄色粘質土、灰オリーブ粘質土、灰褐色粘質土の順で遺構は、灰褐色粘質土上において検出した。

ｃ　鎌倉時代の遺構

ＳＥ64（第29図）　ＳＥ64は、調査区のやや西側に位置する。平面形は、ほぼ円形で径1.6～1.8ｍ、深さ1.3ｍを測る。溝（ＳＤ61）との新旧関係は、井戸の方が新しい。出土遺物は土師器片のみでほとんどなく、溝との重複関係を考慮すると鎌倉時代以降の可能性が高いとみられる。

ＳＤ57（ＳＤ61）　ＳＤ57は、途中で途絶するものの調査区の東西方向にほぼ一直線になるように掘削されたものである。溝の規模は検出長約24ｍ、幅0.5～1.2ｍ、深さ0.05～0.2ｍを測る。溝は、ほぼ同時期の溝（ＳＤ58）と重なったりしている。遺物は、細片が中心であるものの土師器片・山茶碗・馬歯・土錘など（1818～1825・1830・1831）が出土している。なかでも馬歯は、溝のほぼ外縁部から出土しており何らかの意図があった可能性もある。

溝の時期は、鎌倉時代の可能性が高いと思われる。

ＳＤ58　ＳＤ58は、ＳＤ57とほぼ隣り合わせに掘削されている。溝は、やや弧を描いてＳＤ57と重複したあと北に向かう。

溝の規模は、検出長約16ｍ、幅0.3～0.5ｍ、深さ約0.05～0.2ｍを測る。ＳＤ57との新旧関係は、ＳＤ58の方が古いとみられる。遺物は、細片が中心であるが土師器片、須恵器片、山茶碗、土錘、馬歯（1826～1829）が出土している。溝の時期は、ＳＤ57とほぼ同じ時期であろう。

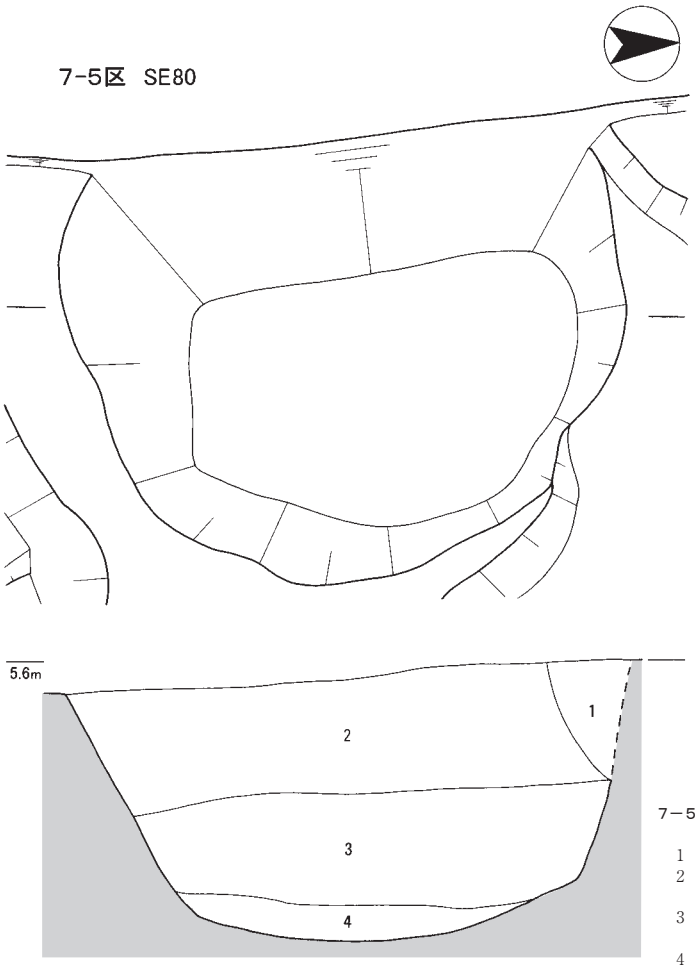
ＳＤ59・60・63・65　これらの溝は素掘溝である。ほぼＳＤ57と同様に東西方向に掘削される。遺物は、土師器細片･須恵器片が含まれる。溝の時期は、上記した溝の時期と同一頃とみられる。　（萩原）

〔註〕

（1）第4図は、平成22年度に行った範囲確認調査坑には1～160を配し、平成23年度に行った範囲確認調査坑には数字の前に「23－」を冠して記載した。なお、朝見遺跡は、平成24・25年度にも範囲確認調査が行われている。

（2）7－2区ＳＤ47上層･最上層は､調査時に「炭層」「包含層」（平安時代後期以降の遺構形成面に相当）の名称を用いて遺物の取り上げを行った。報告書掲載時には層序および遺物の取り上げ日を基準として「上層」「最上層」に区分した。7－2区を掘削したのち調査を行った7－4区ＳＤ53・7－3Ｄ区ＳＤ47については、7－2区を参考に層序ごとに遺物の取り上げを行い、報告書掲載時に「上層」～「最下層」を割り振った。

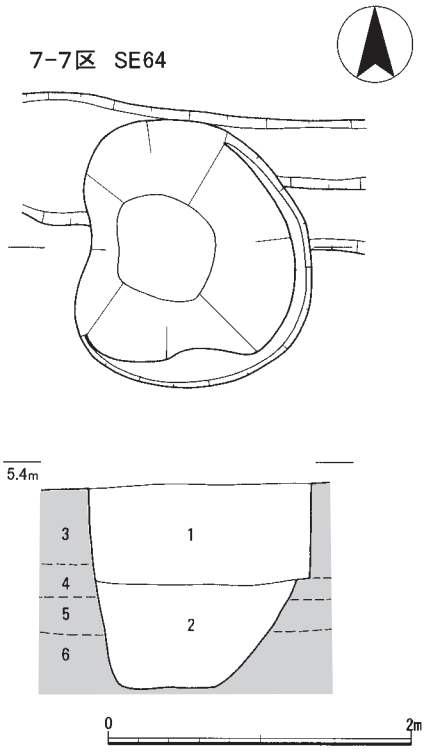
（3）布谷知夫氏（三重県立博物館）のご教示による。
ネジキ Lyonia ovalifolia Drude subsp. neziki (Nakai et Hara) Hara　ツツジ科
ネムノキ　Albizia julibrissin Durazz. マメ科



7－5区ＳＥ80

1　ＳＤ70
2　10YR5/2灰黄褐色粗粒砂（10YR7/8黄橙色粗粒砂混じり）
3　5B5/1青灰色粗粒砂（5B6/1青灰色シルト混じり）
4　5B4/1暗青灰色シルト（5B6/1青灰色シルト混じり）

第29図　７－５区ＳＥ80平面図・断面図（1：50）



7－7区ＳＥ64

1　10GY6/1緑灰色シルト（ベースｂ、ベースｃ’ブロック混じり）
2　10GY6/1緑灰色シルト
3　5YR4/3にぶい赤褐色粘土（ベースｂ）
4　7.5YR1.7/1黒色粗砂土（ベースｃ’）
5　10GY6/1緑灰色シルト（灰褐色粘質土、橙色粘質土混じり）
6　10GY6/1緑灰色シルト

第30図　７－７区ＳＥ64平面図・断面図（1：50）

第４表　第１次調査遺構一覧表

次数	地区	遺構名	形態	時期	グリッド	長さ 長径（m）	幅 短径（m）	深さ（m）	概要・備考
1次	1	SD1	溝	平安後期？～鎌倉前期	1次c5～d5	28.0～	4.8	1.5	7-4区SD51、7-3E区SD1と同一。重複順はSD3→SD5(SD49)→SD1(SD51) 。
	1	SD2	欠番						SD1土取り位置と同一
	1	SD3	溝	平安前期後半	1次c4～d4	5.3	1.1	0.95	重複順はSD3→SD5(SD49)→SD1(SD51)。SD47の支流か？
	1	SD4	溝	不明	1次a3	3.0～	1.0	0.1	落ち込み状の浅い溝
	1	SD5	溝	平安～鎌倉前期？	1次d4	3.8～	1.0～	0.43～	7-2区SD49と同一。重複順はSD3→SD5(SD49)→SD1(SD51)。
	2	SD6	溝	近世	1次c2～c3	1.3	0.7	0.3	
	2	SD7	溝	鎌倉	1次g2～g3	2.3～	6.0～	0.91	SD1(SD51)と同一の可能性が高い。現況道路（7-3E区）と平行して走る幹線用水路の前身か。
	3	SD8	溝	平安後期か	－	5.0	0.75	0.27	浅い溝。SD9、SD11の上面にあたる。
	3	SD9	溝	平安後期か	－	2.5～	0.85～	0.04	浅い溝。SD8の下で検出。
	3	SD10	溝	平安後期か	－	4.0～	0.6	0.07	浅い溝。
	3	SD11	落ち込み	平安後期か	－	3.8～	1.8～	0.36	西側に向かって落ち込む。
	4	SD12	溝	平安後期～鎌倉初頭	－	1.9～	1.3	0.73	逆三角形を呈する。

第５表　第２次調査遺構一覧表

2次	5-1	SD31	欠番						SD35と同一。
	5-1	SD32	溝	近世	B13～q4	21.0～	0.48	0.05	耕作溝か。
	5-1	SD33	溝	近世	Bq2～4	8.50～	0.51	0.13	耕作溝か。
	5-1	SD34	落ち込み	古墳前期	Bk3	3.0～	1.32	0.13	浅い土器溜まり、管玉出土。
	5-1 5-2	SD35	溝	平安後期～室町	Be3	不明	9.30	0.86	東西方向の条里溝。最下層の時期は平安後期。下層で室町時代後期の杭列を検出。
	7-1	SD36	溝	平安後期～室町	Fh14･i14～Gh5･i5	50.0～	3.5～	0.99	東西方向の条里溝。重複順はSD37→SD38→SD36。
	7-1	SD37	溝	平安後期～室町	Fh3･i3～Gi14･h14	39.0～	4.8～2.0	1.34	東西方向の条里溝。重複順はSD37→SD38→SD36。
	7-1	SD38	溝	平安後期～室町	Gi13･h13～i20･h20	30.0～	3.5～	0.79	東西方向の条里溝。重複順はSD37→SD38→SD36。下層で木組杭列、牛馬骨、石組遺構を検出
	7-1	SK39	土坑	平安	Gh14	4.0	1.3～	0.16	
	7-1	SZ40	石組	鎌倉後期	Gh16	4.32	1.5～	1.1～	条里溝SD38最下層で検出した石組遺構。周囲から土師皿・火付木・牛馬骨が出土。
	7-2	SD41	溝	平安前期後半	Ji3･j3～i4･i4	5.1～	0.51	0.27	SD42→SD41→SZ44
	7-2	SD42	溝	平安前期以前	Ji2～j2	2.0～	0.25	0.07	SD42→SD41→SZ44
	7-2	SD43	溝	平安後期以降	Ji5～j5	1.5～	2.0	0.55	平安時代後期に形成された包含層の上面で検出。
	7-2	SZ44	土坑？	平安後期？	Ji4～i5	4.2	0.35	0.91	SD42→SD41→SZ44
	7-2	SZ45	欠番						SD47炭層のうち炭溜まりをくくる。
	7-2	SB46	掘立柱建物	平安前期後半～後期	Ji11～i12	4.2～	不明	－	SK48に隣接。プランは不明。
	7-2	SD47	溝	平安前期後半～後期	Ji13･j13～i14･j14	20.0～	16.2	1.4	大溝SD53と同一の可能性あり。上層に厚く堆積する炭層から多量の土器が、最下層から祭祀遺物・墨書土器が出土。
	7-2	SK48	土坑	平安後期	Ji12	1.67	1.7	0.25	SD47に隣接。祭祀土坑か。
	7-2 7-4	SD49	溝	平安前期後半～鎌倉前期	Ji15～i19 j16～j19	18.0～	10.0～	1.1～	SD47が埋没したのち機能する大溝。重複順はSD3→SD5(SD49)→SD1(SD51)。
	7-4	SD50	溝	不明	Ji16	5.0～	0.3	0.1	落ち込み状の浅い溝
	7-4	SD51	溝	鎌倉前期	Ji18	28.0～	4.8	1.5～	1区SD1、7-3D区SDと同一。重複順はSD3→SD5(SD49)→SD1(SD51)。
	7-4 7-5	SD52	溝	平安前期後半～鎌倉前期	J118～Jv22	40.0～	2.2	0.7	SD47が埋没したのち、SD49と併走する溝。
	7-4	SD53	溝	平安前期後半	Jk18～l19	5.0～	8.0	1.3	大溝SD47と同一。上層の炭層からは多量の土器群が出土した。最下層からは祭祀遺物のほか、墨書土器が出土した。
	7-4	SD54	溝	不明	Jq20	0.5～	4.2	0.67	SD52との重複関係不明。

次数	地区	遺構名	形態	時期	グリッド	長さ 長径（m）	幅 短径（m）	深さ（m）	概要・備考
2次	7-4	SK55	欠番						SD54と同一。
	7-3A	SD56	溝	平安後期	Gj21～w2	60.0～	15.0	0.9	重複関係はSD56→SD38。
	7-7	SD57	溝	鎌倉前期	Ln16～n23	21.1～	0.5～1.2	0.05～0.2	東西方向の条里溝。馬歯出土。
	7-7	SD58	溝	鎌倉前期	Ln19～n23	17.0～	0.3～0.5	0.05～0.2	東西方向の条里溝。馬歯出土。
	7-7	SD59	溝	鎌倉前期	Ln19	1.2～	0.57～0.6	0.05	
	7-7	SD60	溝	鎌倉前期	Ln17	3.0～	0.56	0.07～0.1	
	7-7	SD61	溝	鎌倉前期	Ln10～n17	6.0～	0.45～1.0	0.03～0.1	
	7-7	SK62	土坑	不明	Ln16	1.1	0.7	0.07	
	7-7	SD63	溝	鎌倉前期	Ln17	3.0～	—	0.06～0.08	
	7-7	SE64	井戸	不明	Ln12	1.6	1.76	1.2	
	7-7	SD65	溝	鎌倉前期	Ln13～14	6.0～	—	0.1	
	7-5	SD66	溝	平安前期	Ju23～25 Ku1～2	4.0～	20.2	1.0～	SD47（SD53）と同一の可能性が高い。 現代用水路が直上を流れている。
	7-5	SD67	欠番						
	7-5	SD68	溝	平安後期	Ku2～4	0.7	0.6～1	0.6	重複順はSD66→SD68→SD69。
	7-5	SD69	溝	鎌倉前期以降	Ku4・w4～w5	12.0～	1.85～2.7	0.8	
	7-5	SD70	溝	鎌倉～室町	Ky3・a3～a5・b5	4.0～	1.4～2.65	0.2	
	7-5	SD71	溝	鎌倉前期以降	Ju20	7.0～	1.1	0.35	
	7-5	SE72	井戸	平安前期後半	Jv20	5.0～	3.8	2.72	木組の方形井戸（縦板＋横板組）。 最下層と上層から多量の祭祀遺物が出土。
	7-5	SD73	溝	鎌倉～室町	Kf5～f7	9.0	9.1～	0.35	SD83と同一の溝。
	7-5	SD74	溝	室町～近世	Kg5～g7・h5～h7	9.0	9.1～	1.1～	旧流路の可能性が高い。7-6区まで続く。
	7-5	SD75	欠番						
	7-5	SK76	土坑	不明	Ju20	1.0～	0.2～	0.2～	
	7-5	SD77	溝	近世	Ku4～w5	2.0～	0.25～0.55	0.4	
	7-5	SD78	溝	室町	Kx4～y5	11.0～	1.05～1.25	3.4	
	7-5	SD79	溝	鎌倉前期以降	Mb4～c6	8.0～	0.75～1.0	0.4	
	7-5	SE80	井戸	鎌倉前期	Ky4・Ma4	3.8	3.0	1.7	石組の井戸。
	7-5	SD81	溝	室町	Ma4～a6	0.9	3.6	0.7	
	7-5	SD82	欠番						SD83と同一。
	7-5	SD83	自然河道	鎌倉～室町	Ma4～f6	9.0～	11.6～17	0.9～	
	7-3D	SD84	溝	中世？	Jc11～f12	14.2～	1.1	0.8	時期は不明であるが、SD5(SD49)と同一の可能性がある。
	7-3D	SK85	土坑	近世	Ja11～b12	3.2	3.0	1.07	
	7-3D	SD86	溝	不明	Je11	2.8～	0.28	0.07	浅い落ち込み状の溝。
	7-3C 7-3E	SD87	溝	中世～現代	Hj1～c15	74.0～	不明	0.66～	SD1に後続する水路か。 現代まで用水路として使用されたのち、埋め立てられる。
	6-1	SR88	自然河道	古代？	Ce15～f22	5.5～	29.0～	1.2	調査区東半を流れる旧流路。
	6-1	SD89	溝	中世？～現代	Ce3～f5	5.5～	7.0～	5.8	南北方向の条里溝。西端で木杭を検出。 現代まで使用される。
	6-1	SD90	溝	平安後期～現代	Ce5～e16	50.0～	1.35	1.22	東西方向の条里溝。平安後期に造られ、現代も同一の線上にコンクリート製の溝が走る。

Ⅳ　遺　物

1　出土遺物の概要

a　遺物の数量と構成

朝見遺跡第１・２次調査で出土した遺物は、土製品・木製品・瓦・石製品・鉄製品・動物遺存体がある。コンテナに換算すると約 200 箱出土しており、遺構に伴う遺物の大半は平安時代から中世の土器類である。(1)

以下では、調査区および出土遺構ごとに遺物の様相を詳述する。製作技法の特徴や法量など、個々の詳細については遺物観察表（第６～ 44 表）を参照されたい。なお、実測図の掲載は遺物の種別に関わらず調査区・遺構ごとで通し番号としたが、遺物観察表は土製品・石製品・金属製品が記載された第６～ 38 表と、木製品のみを記載した第 39 ～ 44 表を作成している。

2　範囲確認調査の出土遺物

調査坑 22（１～６）　１～６は弥生土器である。１は壺の口縁部で、緩やかに内湾して端部を丸くおさめる。２は甕の口縁部で、内外面ともにハケ調整を施し、端部に面を持つもの。３～６は高坏。３・４は有段高坏の坏部で、逆ハの字状にほぼ直線的に伸び、内外面ともにタテミガキを施す。５・６は高坏脚柱部で、外面に櫛描直線文が巡る。これらの時期は、いずれも弥生時代後期の山中式期前半段階に併行する。

調査坑 97（７～９）　７は土師器坏で、口縁部は直線的に開くもの。８は把手付の土師器椀で、体部外面は細かいミガキ調整で、体部内面はヨコ方向のケズリ調整である。９は土師器甕。これらは流路出土資料であるが、斎宮跡出土土器による編年（以下、「斎宮編年」）の第Ⅰ期第１～２段階に相当する。

調査坑 40（10 ～ 15）　10 ～ 15 は土師器坏である。いずれも非ロクロ成形で、13 ～ 15 は器壁が薄く口縁部が外反するもの。いずれも斎宮編年第Ⅱ期第３段階に相当する。15 の外面底部の墨書は、「至良」もしくは「貢殿」と考えられる。(2)

その他の調査坑（16 ～ 26）　16 ～ 18 は土師器甕。16 は古墳時代後期のものであろうか。17・18 は体部外面に粗いタテ方向のハケメがみられ、斎宮編年第Ⅱ期第３段階に相当する。19 はロクロ成形の土師器大皿である。20・21 は灰釉陶器椀で、21 は内面に自然釉が付着し、楢崎彰一・斎藤孝正氏による編年（以下、「樽崎・斎藤編年」）の黒笹 90 号窯式期に相当する。22･23 は渥美型の陶器碗（以下、「山茶碗」(3)）である。22 は藤澤良祐氏による編年（以下、「藤澤編年」）の第５型式後半である。23 も藤澤編年の第５型式で、底部に「十」の墨書がみられる。24 は鎬連弁文をもつ龍泉窯系青磁椀で、露胎部分と施釉された境は赤色に変色している。大宰府出土中国陶磁器分類(4)のⅢ類に比定され、時期は 14 世紀頃である。25・26 は土師質の土錘である。

3　１区の出土遺物

a　平安時代～中世の遺物

ＳＤ１（ＳＤ 51）（27 ～ 66）　１区ＳＤ１出土遺物と、７－２区ＳＤ 51 出土遺物をまとめて掲載した。この溝は、調査区毎に掘削を行っているが、整理段階では調査区を超えて平安時代後期の遺物（27 ～ 41）と、鎌倉時代初頭～前期の遺物（42 ～ 66）に分けて掲載した。27 ～ 32 は土師器坏である。やや深い坏部をもち、器壁が薄く口縁端部を丸くおさめるもので、斎宮編年第Ⅲ期第１段階に併行する。33 は土師器甑、34 は土師器甕である。35・36 はロクロ成形の土師器椀で、36 は底部外面に回転糸切り痕が残っている。37 は須恵器の大甕。38 は緑釉陶器椀で、猿投窯産の製品と考えられる。40 は志摩式製塩土器の底部である。41 は鉄釘である。

42 ～ 44 は非ロクロ成形の土師器小皿である。45・46 は灰釉陶器椀で、樽崎・斎藤編年の百代寺窯式期に相当し、時期は 11 世紀前半。47 ～ 66 は山茶碗である。47 ～ 56 は尾張型で、47 はこの中ではもっとも古く知多・猿投産第３～４型式に相当し、49・50 は知多・猿投産の第４～５型式、51 ～ 55 は知多・猿投産の第５型式、56 は知多・猿投産

の第６型式と考えられる。57 ～ 66 は渥美型で、57 ～ 59 が第４型式、60 ～ 66 が第５型式である。

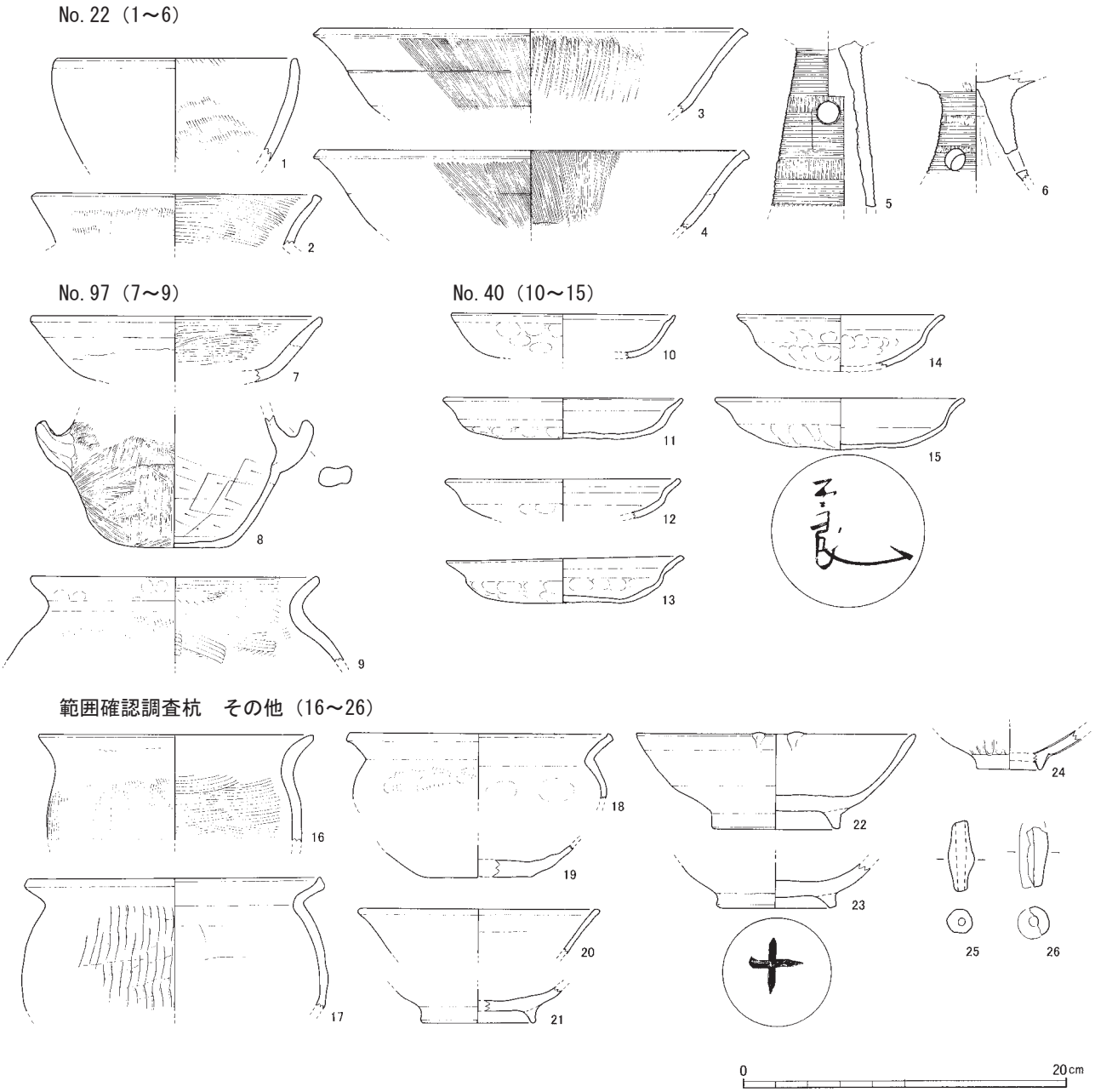
出土遺物の年代観から、大溝ＳＤ 51 は平安時代後期から機能し、13 世紀前半に埋没したと考えられる。

ＳＤ３（67･68） 67 は土師器甕。68 は灰釉陶器椀で、三日月高台を有し、楢崎・斎藤編年の黒笹 90 号窯式期である。ＳＤ３の時期は９世紀末から 10 世紀前半頃である。

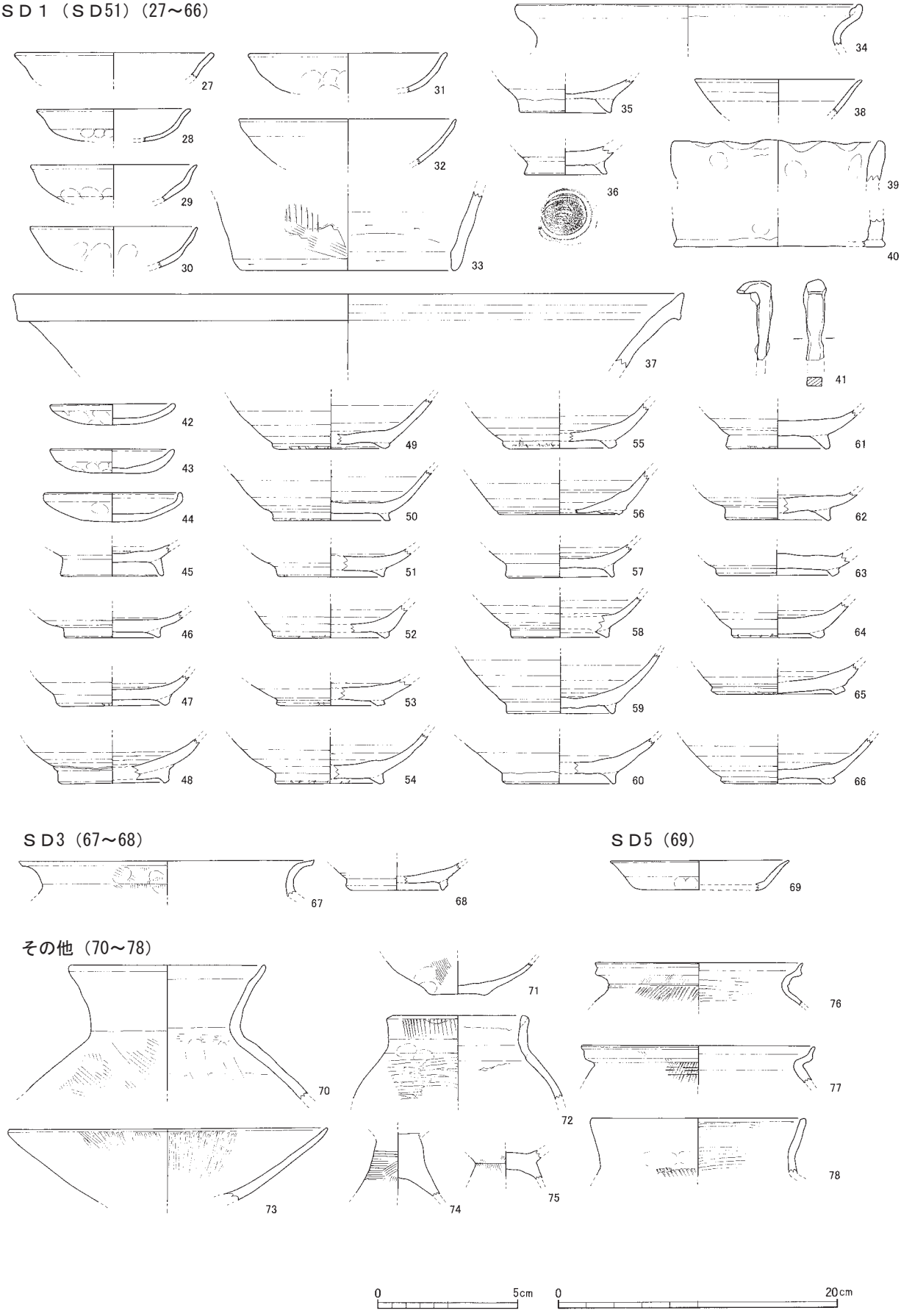
ＳＤ５（69） 69 は土師器坏。斎宮編年第Ⅱ期第４段階に相当し、遺物の時期は 10 世紀前半である。なおＳＤ５は７－２区ＳＤ 49 と同一の溝である可能性が高いため、遺構の時期はＳＤ 49 を参照されたい。

ｂ　その他の遺物

その他（70 ～ 78） 70 ～ 78 は弥生土器もしくは古式土師器で、ＳＤ１～５の掘削・埋没過程で紛れ込んだものと考えられる。70 ～ 72 は壺である。70 は体部外面にナナメハケがみられ、器壁は厚い。72 は短頸壺で、直立する口縁部の外面にはタテ方向の粗いハケ調整が施される。74 は高坏。75 ～ 77 はＳ字状口縁台付甕（以下、「Ｓ字甕」）で、口縁部外面に刺突を持たないＢ類である。78 はほぼ直立する口縁部をもつ甕で、古墳時代中～後期の長胴甕か。



第31図　出土遺物実測図（１）範囲確認調査（１：４）



第32図　出土遺物実測図（２）１区（41は１：２、他は１：４）

4　2区の出土土器

ｐｉｔ１（79）　２区の出土遺物は土師器小片のみであったが、１点図化を行った。79は非ロクロ成形の土師器皿。斎宮編年第Ⅲ期第２段階に相当し、時期は平安時代後期である。

5　3区・4区

a　平安時代の遺物

ＳＤ11（80・81）　80は土師器皿である。81は灰釉陶器椀で、楢崎・斎藤編年の黒笹90号窯式期に相当し、時期は９世紀末から10世紀前半である。

ＳＤ12（82・83）　82は土師器甕で、平安時代後期のもの。83はロクロ成形の土師器椀で、底部に糸切痕がみられる。

b　その他の遺物

その他（84～86）遺構に伴わない遺物をその他とした。84～86の時期は弥生時代後期後半である。84は壺の口縁部で、口縁部外面はハケ調整のちタテミガキを施し、内面はハケメがみられる。85は甕の脚台接合部で、86は高坏脚柱部である。

6　5区

a　弥生時代の遺物

ＳＤ34（87～92）　87は壺の底部。88は甕の口縁部で、口縁端部に面をもつもの。89・90は高坏で、89の坏部は椀状に内湾して立ち上がり、口縁端部は内傾する。90は内湾傾向が認められる脚柱部で、これらの形状から、時期は廻間Ⅰ式期後半段階に位置付けられる。91は土師質の土錘である。92は石製の管玉で、石材は緑色泥岩である。

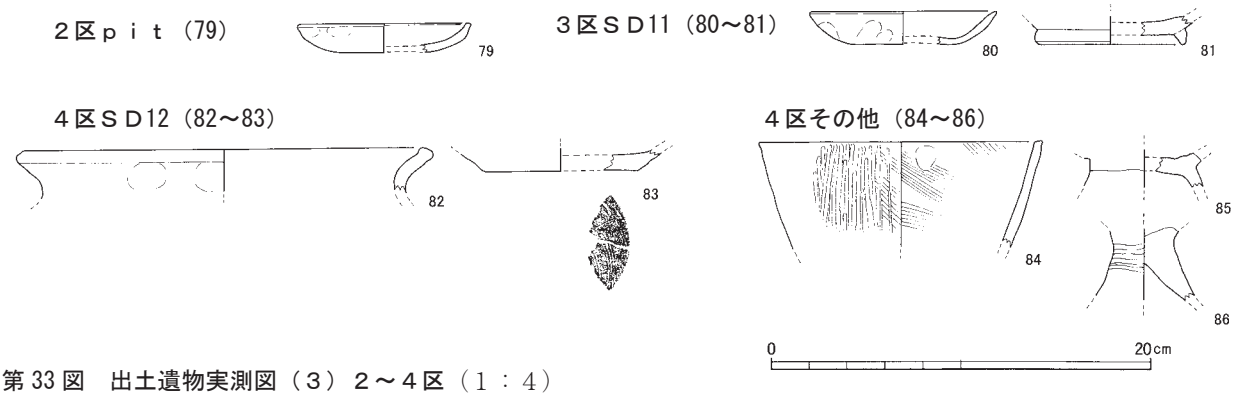
b　平安時代～中世の遺物

ＳＤ35最下層（93～97）　ＳＤ35は、調査期間の異なる５－１区・５－２区にまたがっているため、遺物の取り上げを層序ごとに行えなかった。したがって、報告書掲載時には５－１区出土遺物を最下層とし、５－２区出土遺物を下層とした。93は南伊勢系の土師器鍋で、伊藤裕偉氏の編年（以下、「伊藤編年」）Ⅰｂ期に属するもの。94～96は灰釉陶器。94は皿の高台部で、楢崎・斎藤編年の黒笹90号窯式期である。95・96は椀で、時期は楢崎・斎藤編年の折戸53号から東山72号窯式期であろうか。97は猿投窯産の緑釉陶器椀で、外面に釉が認められ、時期は９世紀末頃である。

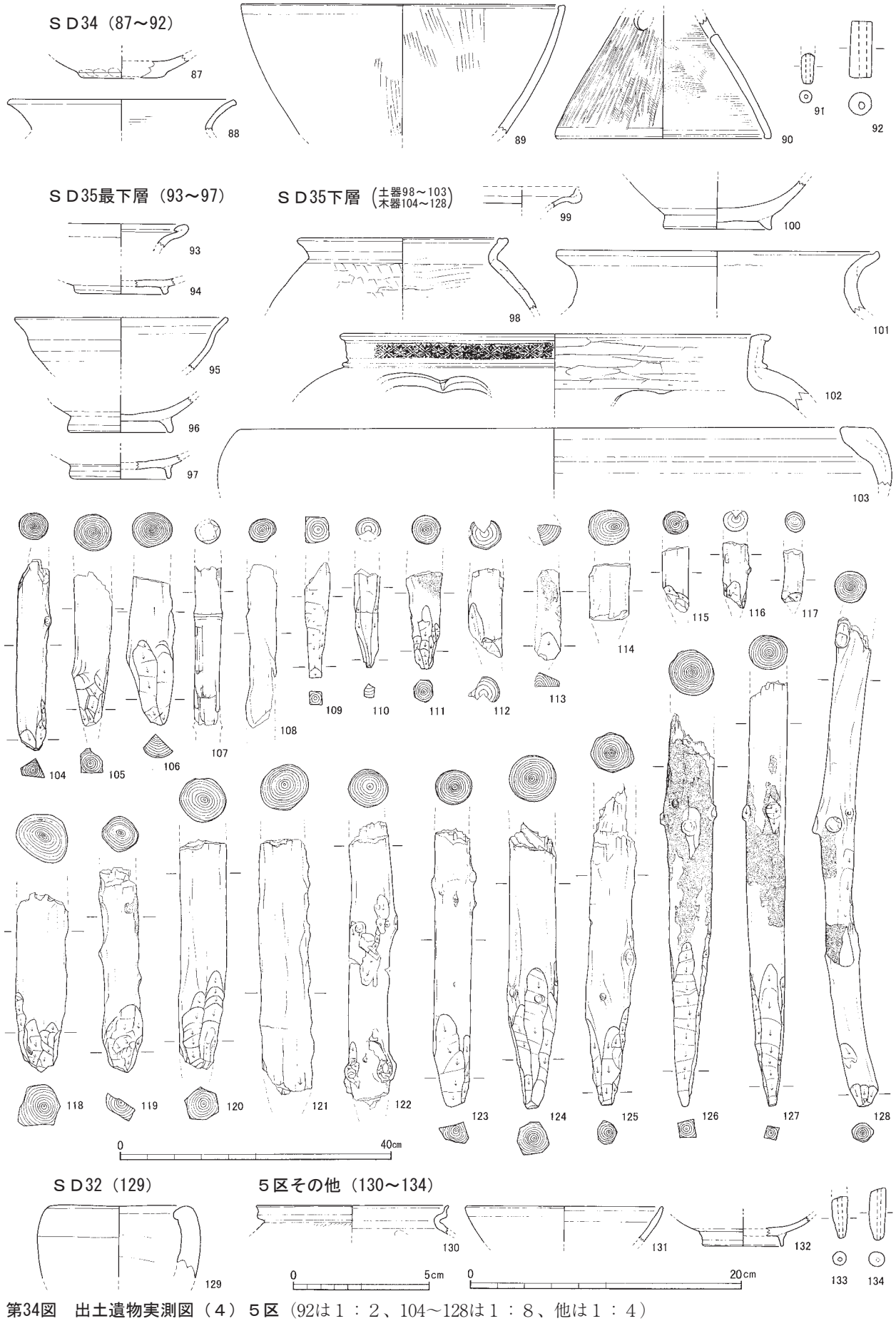
出土遺物から、ＳＤ35最下層の機能時期は９世紀末から11世紀前半頃と考えられる。

ＳＤ35下層（土器98～103、木器104～128）98は土師器甕で、斎宮編年第Ⅲ期第２段階頃。99は南伊勢系土師器の鍋で、伊藤編年のⅣｃ期に相当し、16世紀後半のもの。100は尾張型の山茶碗で、藤澤編年第３型式である。101は渥美産の陶器甕で、渥美窯製品の１ａ型式期、12世紀前半頃のものと考えられる。102・103は瓦質土器で、102は風炉、103は浅鉢である。風炉は口縁部外面に花菱文がめぐり、肩部に大きな雲形の透かしが付くもので、垂直に立ちあがった口縁部の内面は板ナデによって成形され、体部外面は丁寧なヘラミガキ調整である。

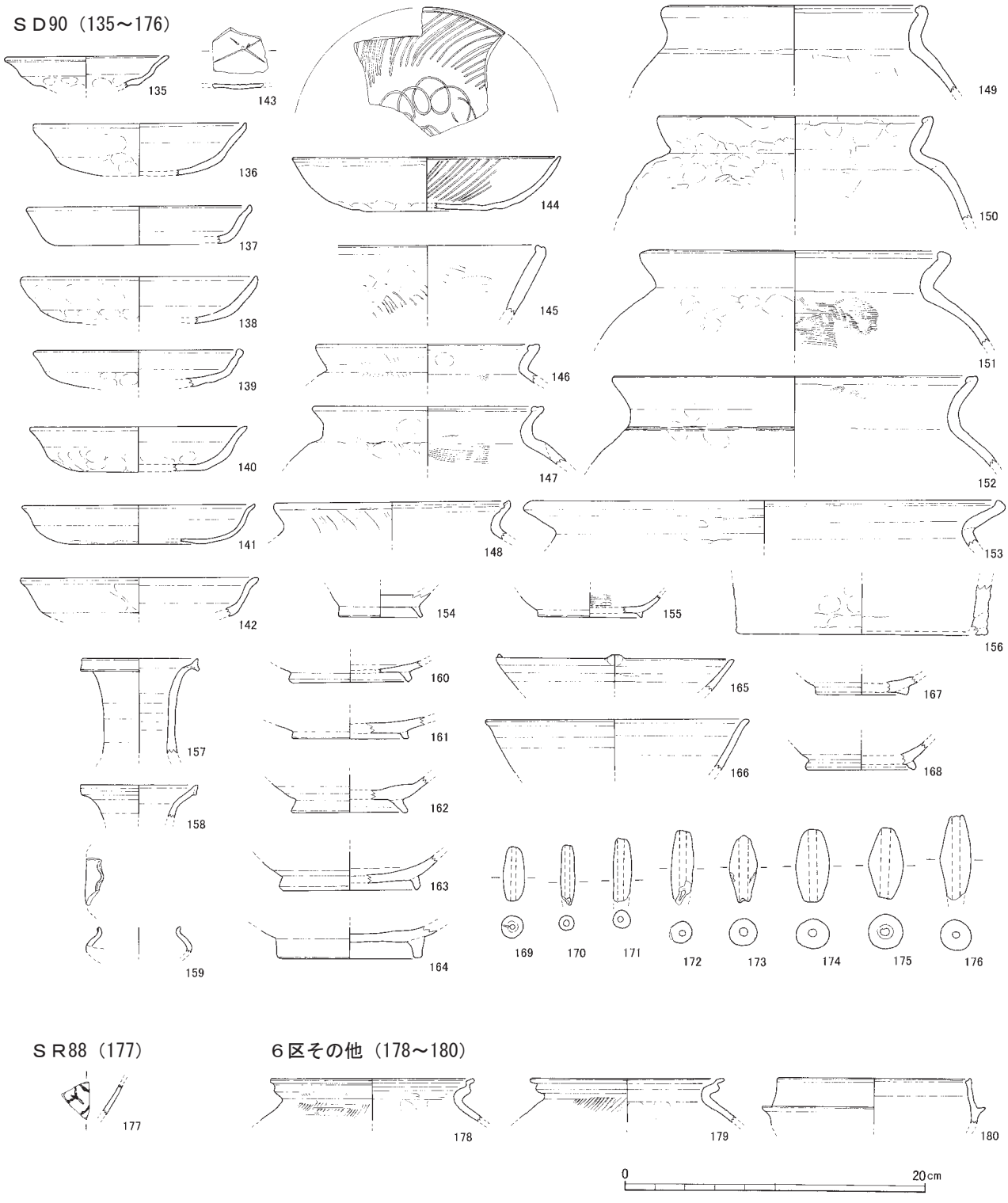
104～128は木製の杭である。いずれも丸太材で、中には107のようなマダケを用いていることが特筆される。杭先端部の調整は、111・118～120のように複数回削り込みを入れて整えるもの、109・126・127のように断面形を正方形状に整えるもの、



第33図　出土遺物実測図（３）２～４区（１：４）



第34図　出土遺物実測図（４）５区（92は１：２、104～128は１：８、他は１：４）



第35図　出土遺物実測図（５）６区（１：４）

112・113・117のように一方向から斜めに切り落とすものがみられる。

ｃ　近世の遺物・その他

ＳＤ32（129）　129は土師器の坩堝と考えられ、厚い器壁をもち、体部は内湾し椀状を呈する。そのほか、ＳＤ32からは土師器片などが出土しており、遺構の時期は近世と考えられる。

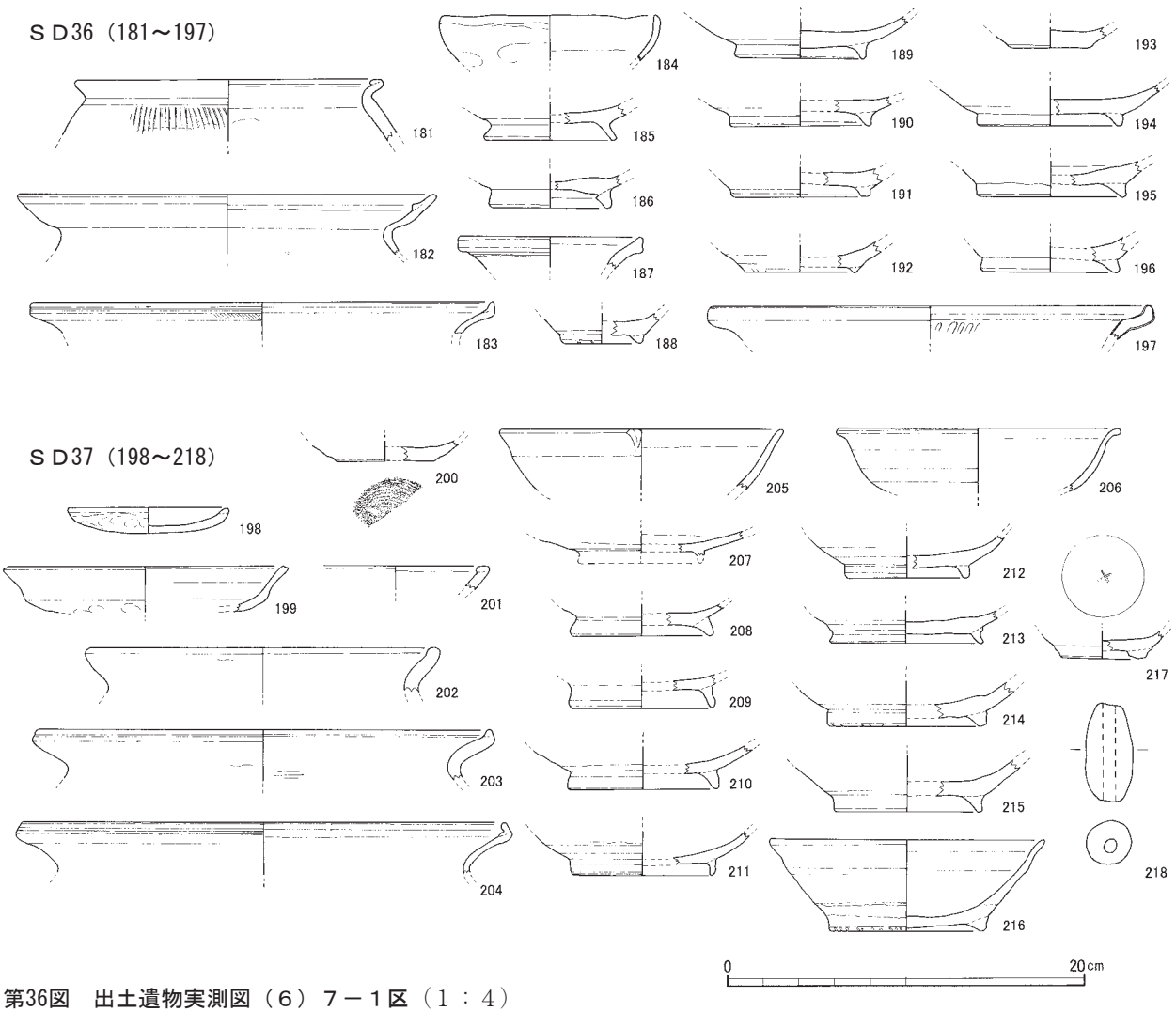
その他（130～134）　包含層出土遺物である。130はＳ字甕の口縁部で、口縁端部が垂直に立ち上がるＢ類。131は須恵器坏である。132は灰釉陶器椀で、楢崎・斎藤編年の黒笹90号窯式期頃であろうか。133・134は土師質の土錘である。

7　6区

ａ　平安時代後期の遺物

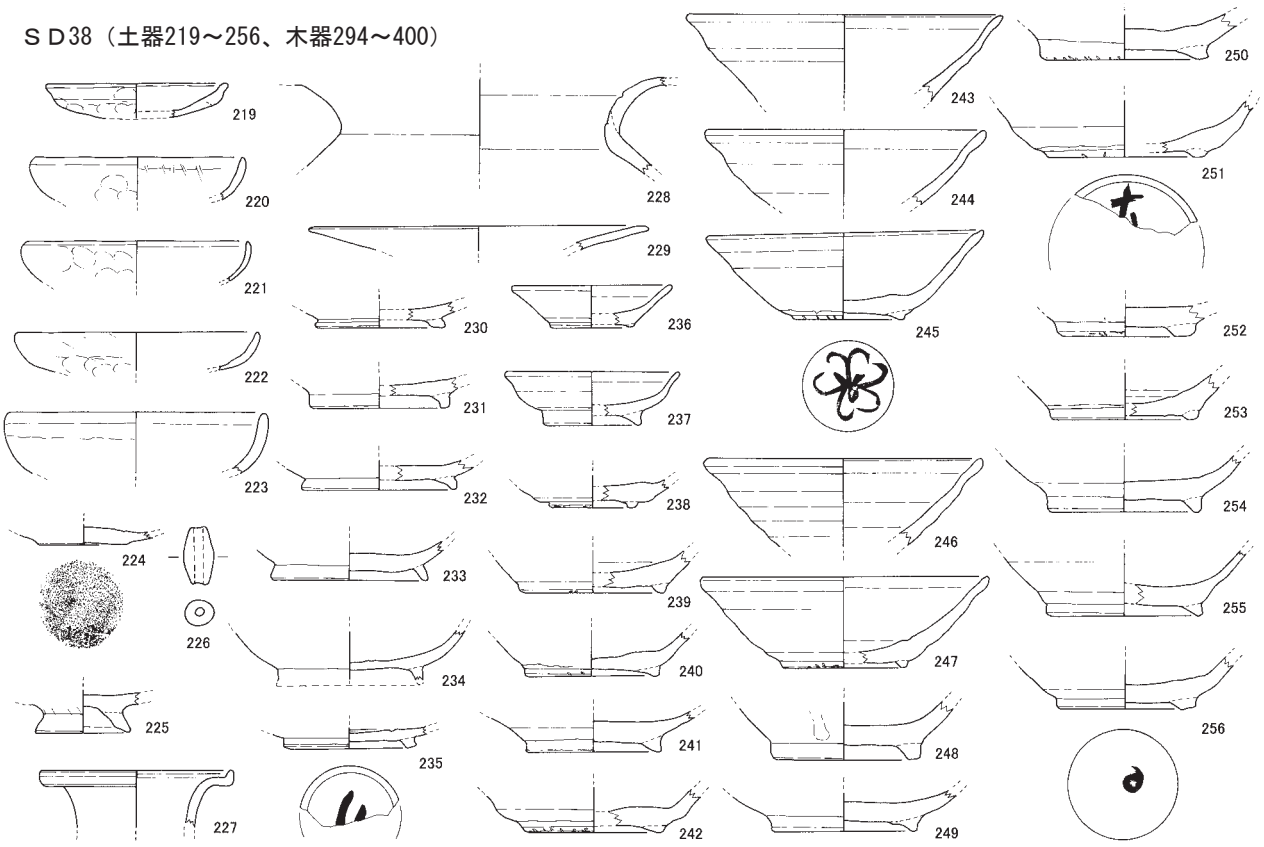
ＳＲ90（135～176）　ＳＲ90は自然流路であるため、様々な時期の遺物が混在しているが、ここでは器種ごとに詳述する。135～142は土師器坏。136～138は口縁端部を上方へわずかに屈曲させるもので斎宮編年第Ⅱ期第３段階に相当し、135・140～142は器壁が薄く口縁端部を外反させるもので斎宮編年第Ⅱ期第４段階である。143は土師器の皿か坏の底部で、内面に「×」印のヘラ記号がみられる。144は土師器椀で、内面に放射状・螺旋状の暗文が施されるもの。145は把手が付くタイプの土師器鍋と考えられる。146～153は土師器甕。いずれも口縁部端部が折り曲げられて肥厚する。149・150は体部内面にヘラケズリを行うもので、時期は平安時代後期である。154はロクロ成形の土師器椀。155は黒色土器の椀で､内面にわずかに暗文がみられる。156は志摩式製塩土器の底部片である。

157は須恵器の瓶。158～168は灰釉陶器である。

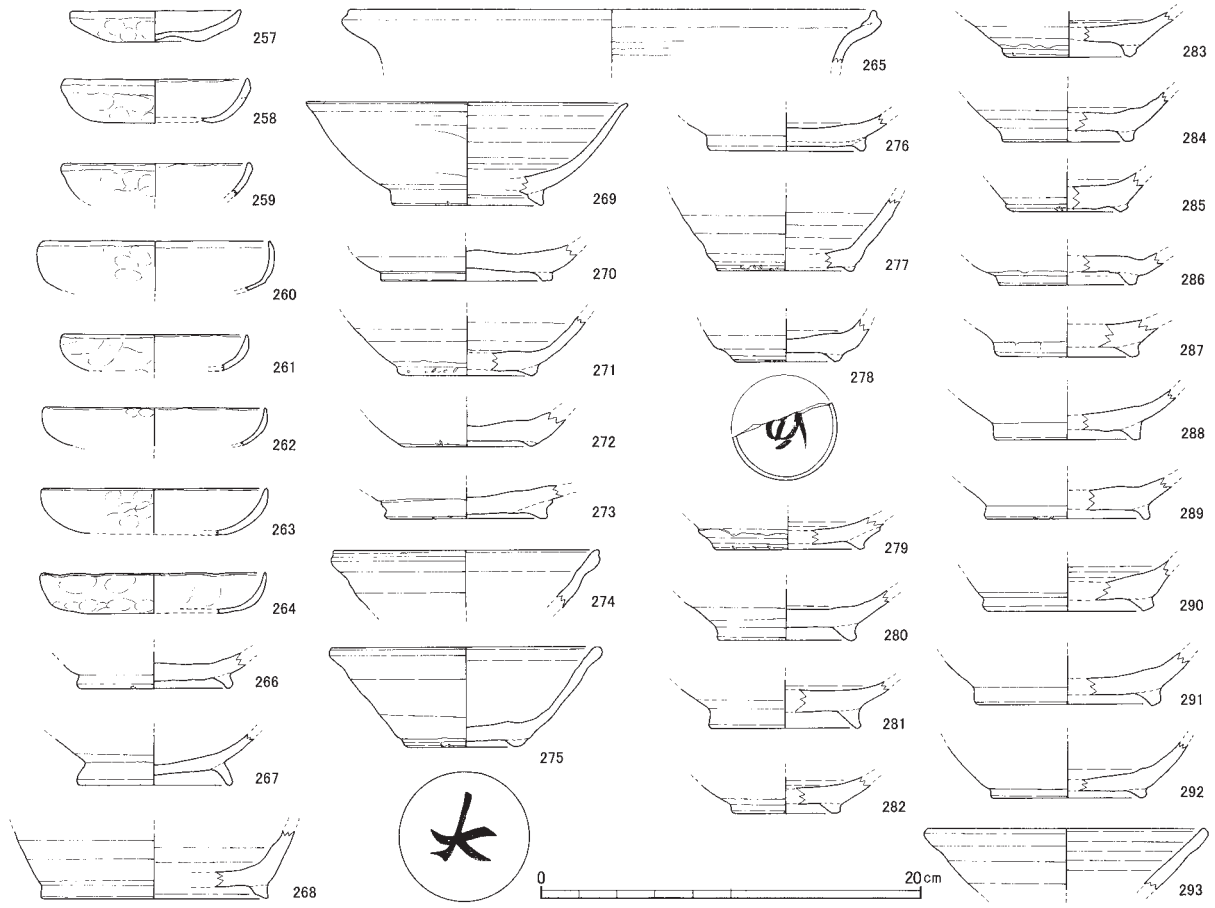


第36図　出土遺物実測図（６）７－１区（１：４）

ＳＤ38（土器219～256、木器294～400）

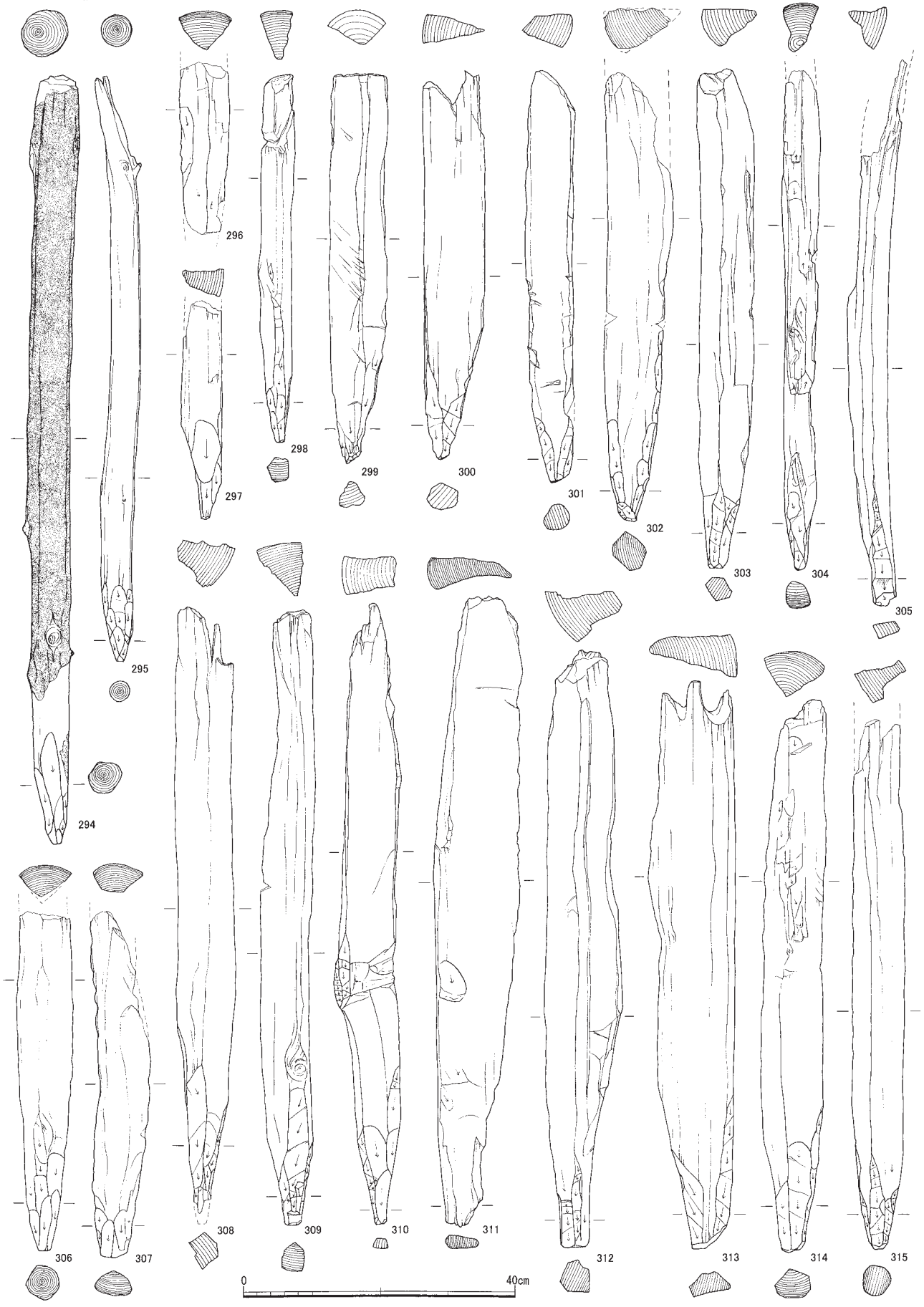


ＳＺ40（ＳＤ38下層）（土器257～293、木器367～399）



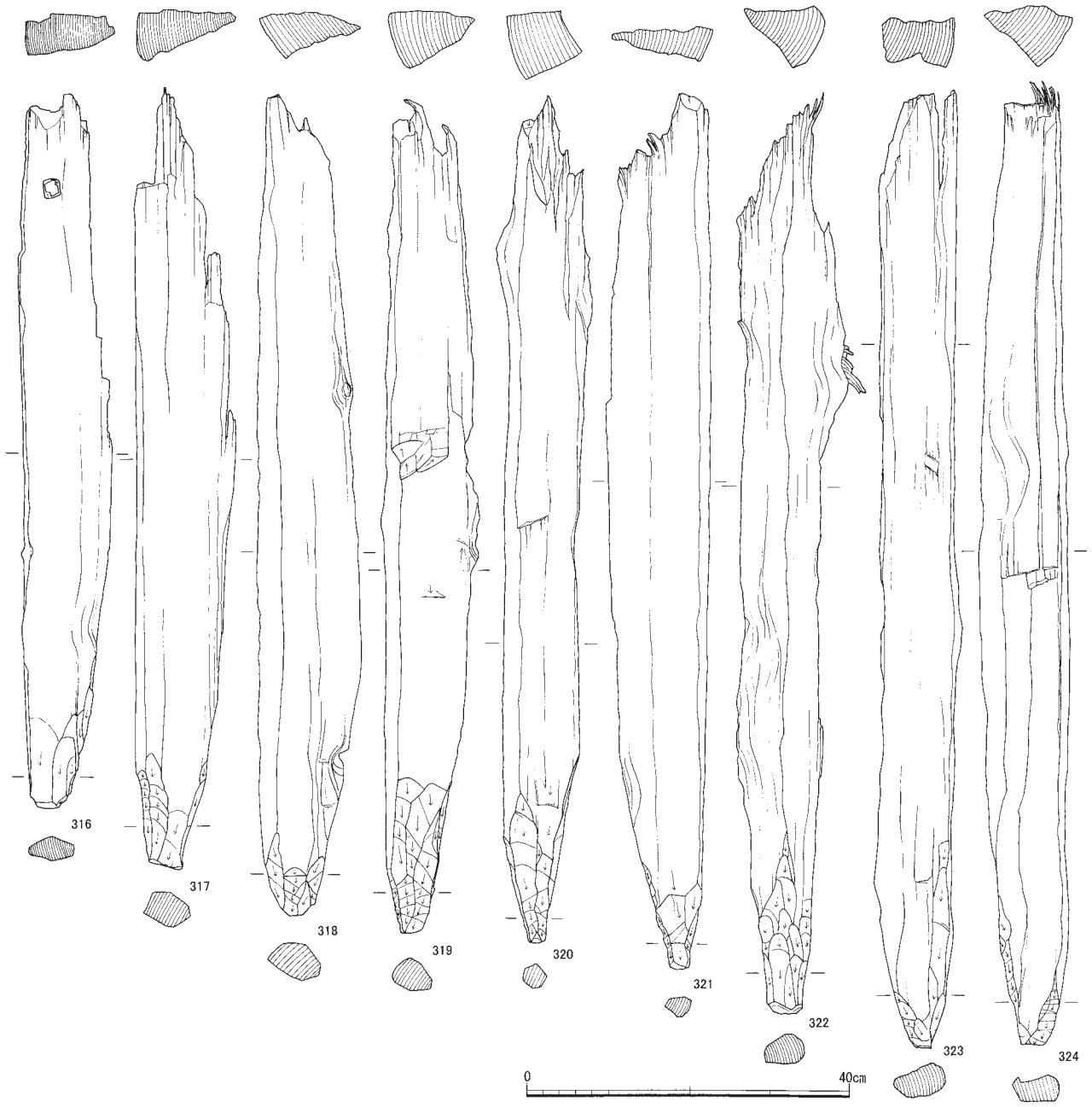
第37図　出土遺物実測図（７）７－１区（１：４）

ＳＤ38 杭列Ａ（294～324）



第38図　出土遺物実測図（８）７－１区（１：８）

ＳＤ38 杭列Ａ



第39図　出土遺物実測図（９）７－１区（１：８）

158 は瓶で、口縁部の内外面が施釉される。159 は耳皿の小片で、伊藤正人氏による分類の２類に相当する。(5) 160・161 は皿、162・163・165・166 は椀、164 は深椀で、樽崎・斎藤編年の東山 72 号窯式期から百代寺窯式期と考えられる。167・168 は軟胎の緑釉陶器椀で、近江産である。169 ～ 176 は土師質の土錘。169 は丸みを帯びるもの、170 ～ 172 は細長く小型のもの、173 ～ 176 は比較的大型で胴部の中心に稜をもつものである。

ＳＤ 88（177） 177 は猿投窯産の緑釉緑彩陶器で、時期は９世紀末であるが、遺構に伴う可能性は低い。

ｂ　その他の遺物

その他（178 ～ 180） 遺構に伴わない遺物をその他とした。

178・179 はＳ字甕の口縁部で、口縁端部が外反し肩部外面にヨコハケを持つＢ類である。180 は須恵器坏身で、時期は田辺昭三氏による陶邑編年ＴＫ 23 ～ 47 型式に併行するものと考えられる。

8　7－1区・7－3A区

a　平安時代後期～中世後期の土器

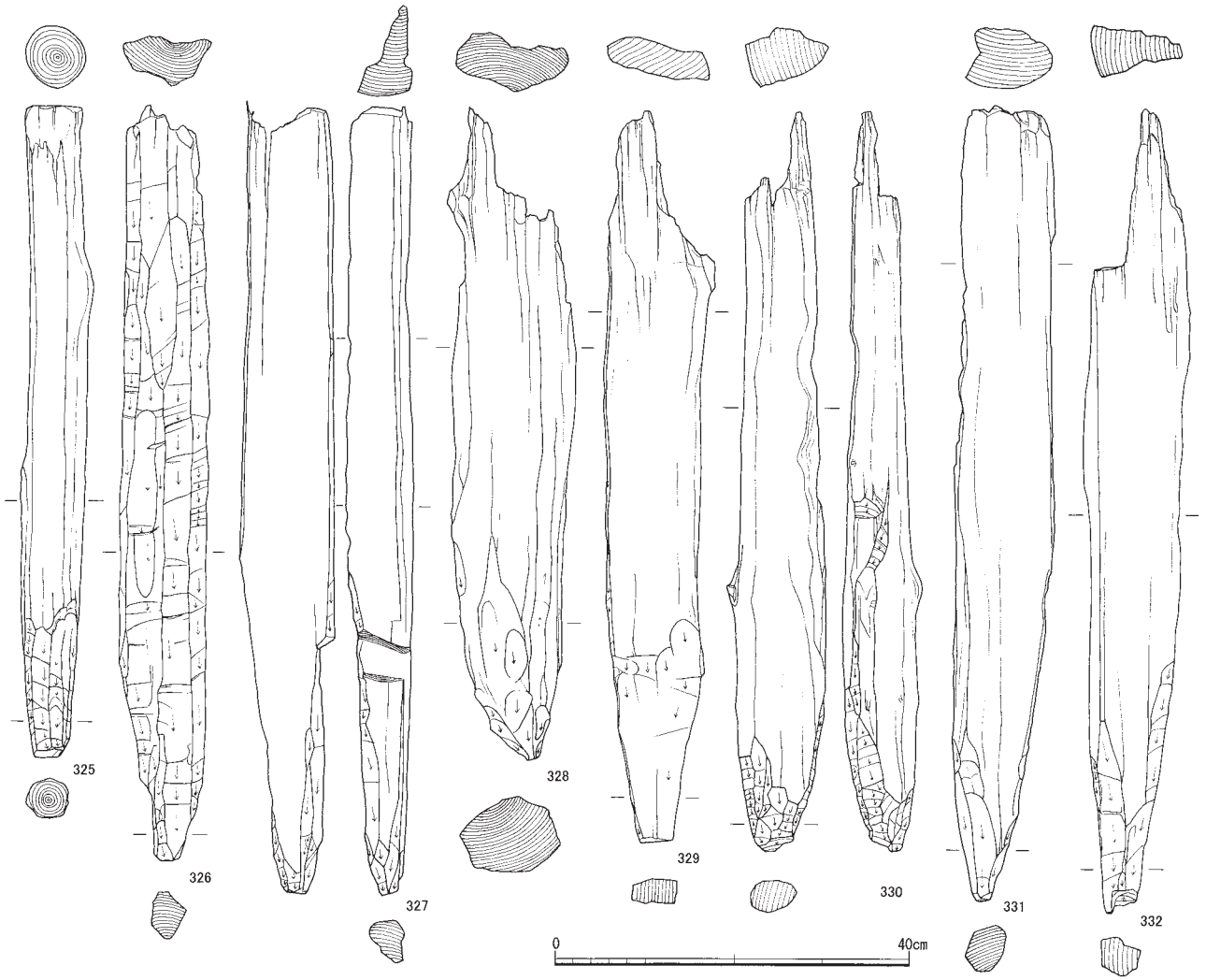
ＳＤ 36（181 ～ 197）　ＳＤ 36 からは、主に平安時代後期から中世後期までの遺物が出土している。

181 は土師器甕で、時期は平安時代後期である。182・183 は南伊勢系土師器鍋で、182 は伊藤編年Ⅲｂ期で 15 世紀前半、183 は同Ⅳｃ期で 16 世紀前半頃である。184 は土師器皿で、同Ⅲｂ期である。185 はロクロ成形の土師器椀で、時期は平安時代後期。186・187 は灰釉陶器で、186 は樽崎・斎藤編年黒笹 90 号窯式期前後である。188 ～ 196 は山茶碗。188 ～ 192 は尾張型の猿投ないしは知多産で、188・189 が藤澤編年第 4 型式、190 ～ 192 が同第 5 型式である。195・196 は渥美型で同第 5 型式である。197 は青磁の大皿で、時期は 13 世紀末から 14 世紀前半頃。

ＳＤ 37（198 ～ 218）　ＳＤ 37 は、ＳＤ 36 と同じく様々な時期の遺物が混在しているが、主な時期は平安時代中期から中世後期である。

198 は土師器小皿で、時期は 13 世紀前半頃。199 の土師器坏は器壁が厚く胎土は精良で、平安時代前期後半のもの。200 はロクロ成形の土師器皿。201 ～ 203 は土師器甕で、概ね平安時代後期のもの。204 は南伊勢系の土師器鍋で、伊藤編年Ⅳｃ期に相当し、時期は 16 世紀前半。205 ～ 211 は灰釉陶器。205･206 は椀の口縁部で、205 には輪花がみられる。207 は皿の高台部であろうか。208 ～ 211 は椀の高台部で、樽崎・斎藤編年の東山 72 号窯式期が主体であるが、211 は三日月状の高台を呈した同黒笹 90 号窯式期のもの。212 ～ 217 は山茶碗で、212 は渥

ＳＤ38 杭列Ｂ（325～336）



第40図　出土遺物実測図（10）７－１区（１：８）

美型、213 ～ 217 は尾張型である。212 の椀は藤澤編年第３型式で、ＳＤ 37 出土山茶碗の中ではもっとも古い。213 は同第４型式、214 ～ 217 は同第５型式。217 は山茶碗の小皿で、内面に「×」印のヘラ描きが見られ、知多･猿投産の同第４型式である。218 は土師質の土錘。

ＳＤ 38 土器類（219 ～ 256）　ＳＤ 38 は中世前期～後期の遺物が主体となるが、ＳＤ 36・ＳＤ 37 と同様に平安時代後期の遺物もみられる。ＳＺ 40 周辺で出土した遺物については別項を設けて掲載したが、ＳＤ 38 の溝底で検出した遺構であるため、遺物が混在している可能性がある。

第41図　出土遺物実測図（11）７－１区（１：８）

219 ～ 222 は南伊勢系土師器の皿。219 はＡ形態で、伊藤編年Ⅰａ期にあたる 11 世紀頃。220 ～ 222 はＢ形態で、時期は同Ⅱａ期の 13 世紀前半頃。223 は土師器椀。224 はロクロ成形の土師器椀、225 は同じくロクロ成形の台付皿である。226 は土師質の土錘。

227・228 は須恵器。227 は瓶で、口縁端部が上方につまみ上げられるもの。228 は大型の甕で、外面に自然降灰が認められる。230 は近江産の緑釉陶器で、時期は 10 世紀中頃である。229・231 ～ 235 は灰釉陶器。229 は皿で、釉を刷毛によって塗布した痕跡がみられる。231 ～ 234 は椀の高台部で、時期は樽崎・斎藤編年の東山 72 号窯式期であろうか。235 は皿の高台部で、底部に墨書が見られるが釈読はできない。

236 ～ 256 は藤澤編年第３～６型式の山茶碗で、時期は 11 世紀後半～ 13 世紀中頃と幅広く認められる。236･237 は渥美型の小椀で、236 は同第５型式、237 は同第４型式。238 ～ 247･250･251 は尾張型で、243 がもっとも古い第３～４型式で、238 ～ 242・250・251 が同第５型式、244 が同第６型式である。248・249 は渥美型の椀で同第４型式、252 ～ 256 は同第５型式である。また、山茶碗のうち３点の底部外面に墨書がみられ、245 は３枚の花弁をもつ花紋が描かれる。251 は「大」であろうか。

ＳＺ 40（ＳＤ 38 最下層）土器類（257 ～ 293）　ＳＺ 40 は、ＳＤ 38 の底で検出した遺構である。257 ～ 264 は南伊勢系の土師器皿。257 の時期は伊藤編年のⅡａ期で、13 世紀初頭である。258 ～ 260 の時期は同Ⅱｂ期の 13 世紀後半で、258 は胎土が白みがかり口縁端部をしっかり作るもの。261 は同Ⅲａ期、262 は同Ⅱｂ～Ⅲａ期である。263・264 は同Ⅲａ期の 14 世紀中頃と考えられる。265 は南伊勢系の土師器鍋で、時期は同Ⅳｃ期の 16 世紀前半頃である。

266 ～ 268 は灰釉陶器。266・267 は、樽崎・斎藤編年の黒笹 90 号窯式期である。268 は瓶の高台部である。269 ～ 293 は山茶碗。269 ～ 280 が尾張型、281 ～ 292 が渥美型で、293 は産地が不明である。尾張型については、269 は藤澤編年第３型式、270 は同第４～５型式、272・273 は同第５型式、274 ～ 278 は同第６型式、279 は同第７型式である。275 は底部外面に墨書「大」が見られる。渥美型につい

ては、280・281 は同第４～５型式、285 ～ 292 は同第５型式のものである。

ＳＺ 40 出土遺物の時期は、流路資料ということもあり 11 世紀から 16 世紀と幅が広い。しかしながら、石組の間から出土した土師皿が 13 世紀末から 14 世紀前半のものであること、石組付近に一括投棄された可能性がある山茶碗の時期が藤澤編年第５型式であることから、石が組まれた時期は鎌倉時代と考えられる。

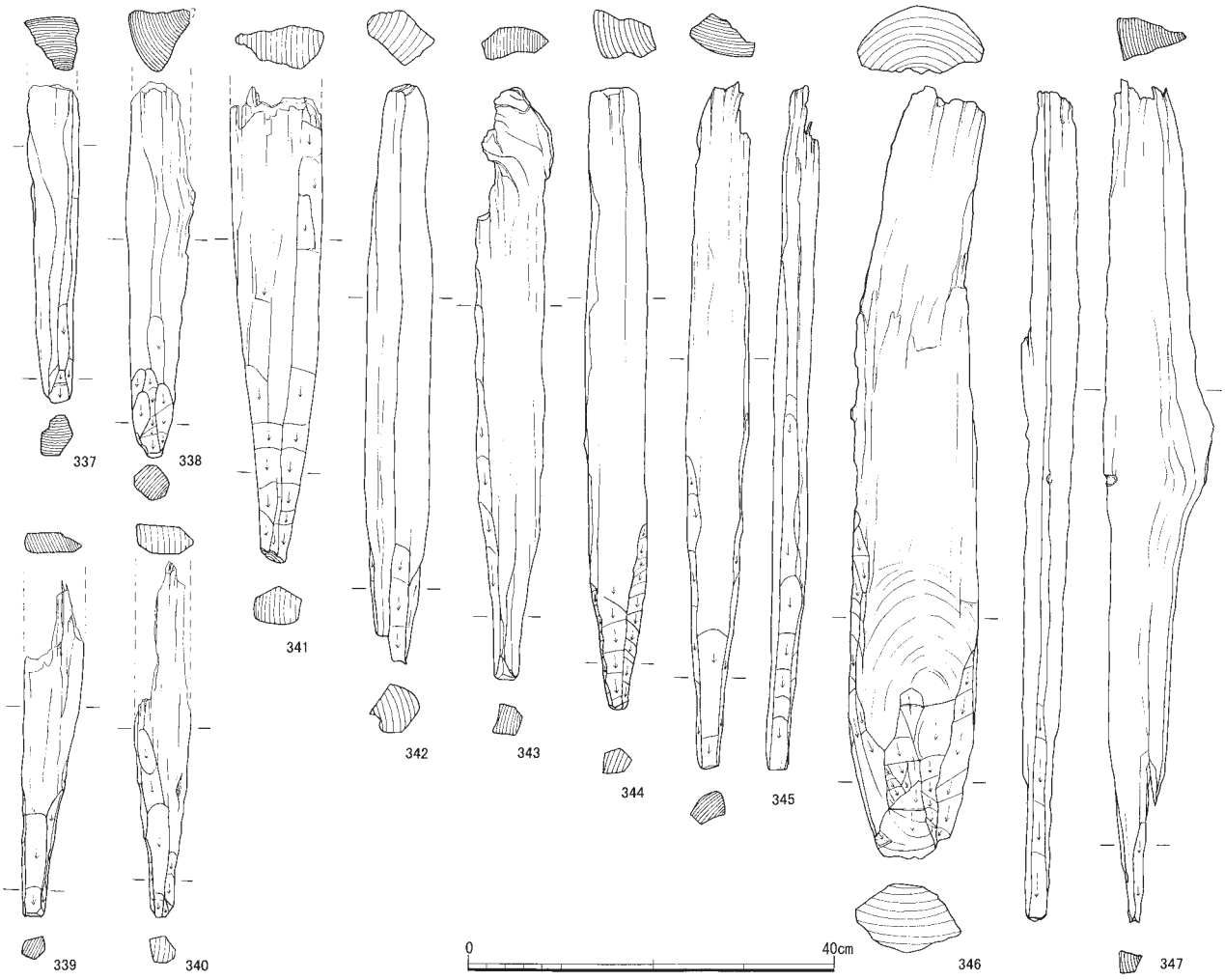
ＳＤ 38 木器類（294 ～ 360）　ＳＤ 38 の底で検出した堰の構成材である。樹種の同定結果は遺物観察表（第 39 ～ 44 表）に反映した。杭における樹種の検討は第Ⅵ章を参照されたい。

杭列Ａの杭は 294 ～ 324 である。294・295 の２本は樹皮を残した丸太杭である。31 本のうち 29 本が蜜柑割材で、先端以外には手斧痕跡がなく、伐採当初から杭として製作されていたようである。310 や 319 は、節を削って加工した痕跡が認められる。杭列Ａを構成する杭の長さは、約 60cm、約 80cm、約 100cm の３種類に大別される。

杭列Ｂは 325 ～ 336 の 12 点を図示した。12 点中１点が丸杭、１点が建築部材転用材、残り 10 点が蜜柑割材である。326 は面取束柱の転用材で、樹種はモミである。堰Ｂを構成する杭の長さは、おおむね 80 ～ 90cm 程度である。

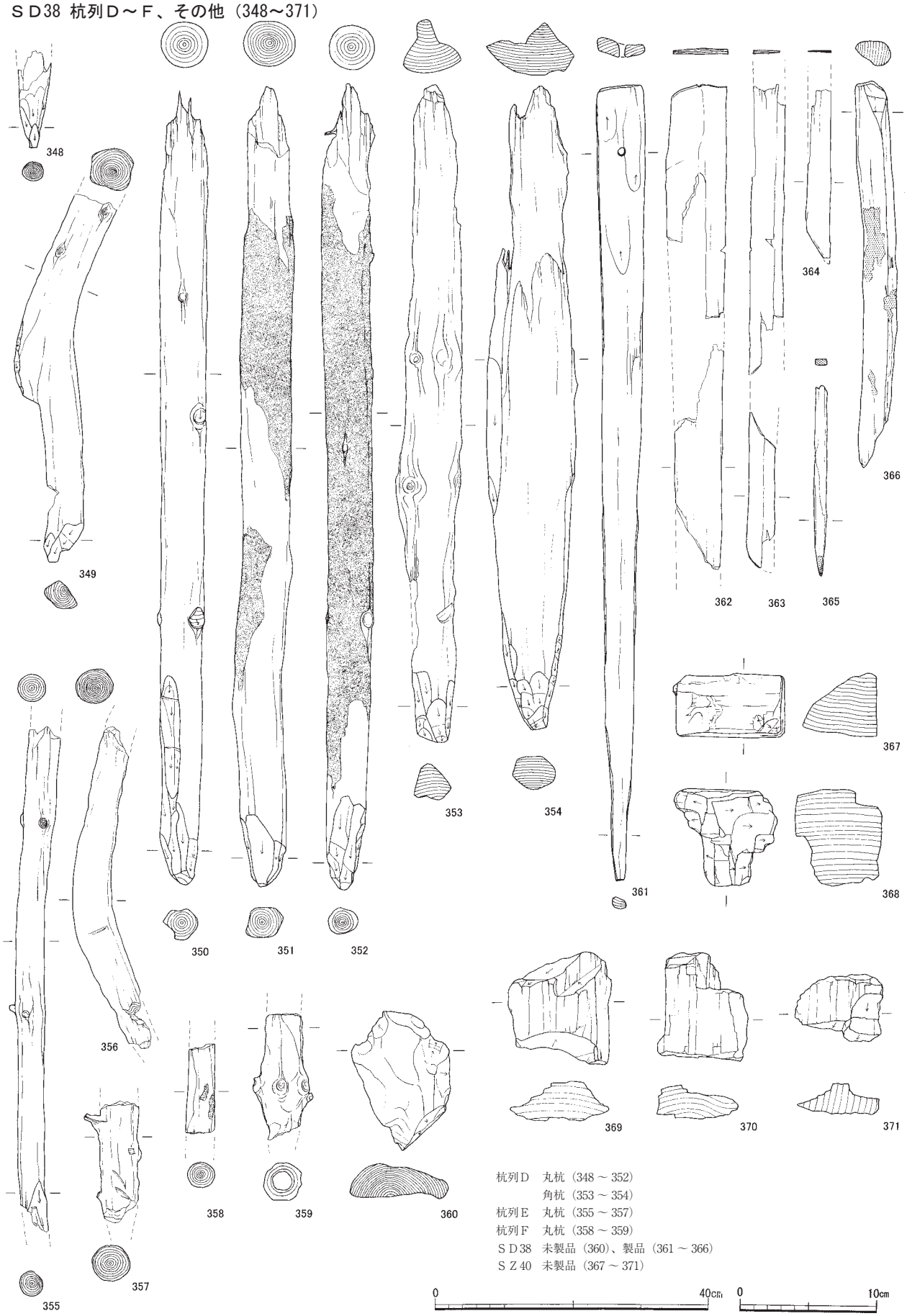
杭列Ｃの杭は 337 ～ 347 である。いずれも蜜柑割材であるが、堰Ａ･Ｂに比べ脆弱な材を用いており、強度はそれほど求められなかったようである。346 は半裁材で、節部分を杭の先端に加工しているため、杭としては粗雑な作りとなっている。堰Ｃを構成する材は、両端部が残存している材から推定すると、60 ～ 80cm の範疇におさまる。

ＳＤ38 杭列Ｃ（337～347）



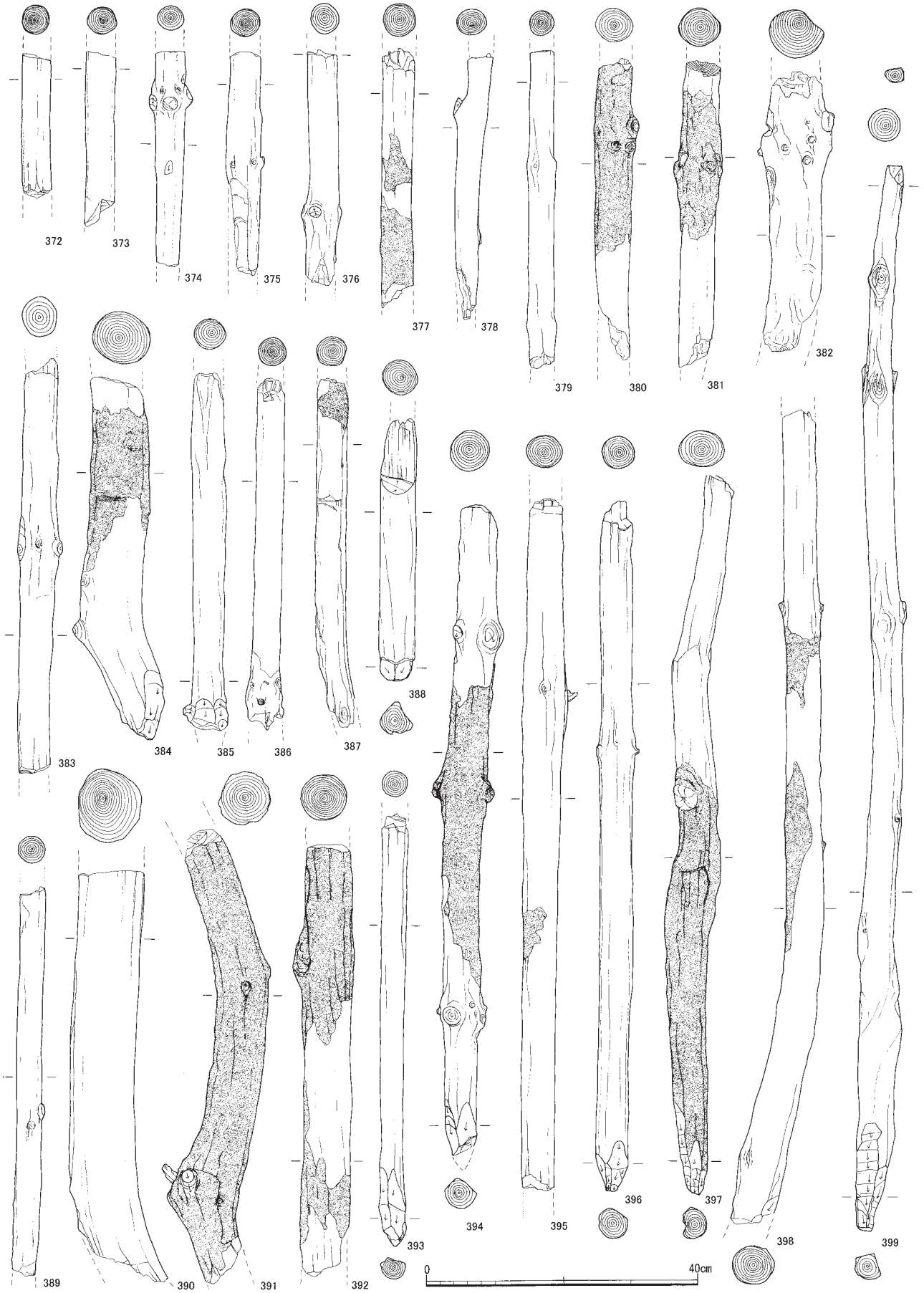
第42図　出土遺物実測図（12）７－１区（１：８）　ＳＤ38杭列Ｃ

ＳＤ38 杭列Ｄ～Ｆ、その他（348～371）



第43図　出土遺物実測図（13）７－１区（367～371は１：４、他は１：８）

ＳＺ40　（ＳＤ38下層）（372～399）



第44図　出土遺物実測図（14）７－１区（１：８）　ＳＺ40（ＳＤ38下層）

杭列Ｄは丸杭を主体として、角杭を主体とする杭列Ａ～Ｃに対し直交する。丸杭は348～352の５本、角杭は353・354の２本である。丸杭は、樹皮や節が認められるものの直径６cmのしっかりとした材を用いており、長さは約120cmである。一方、角杭は約100cmで、杭列Ａと同じ系統のもの。

杭列Ｅの杭は355～357で、すべて丸杭である。杭列Ｅの丸杭は、杭列Ｄに比べ直径が小さく、弱い作りとなっている。

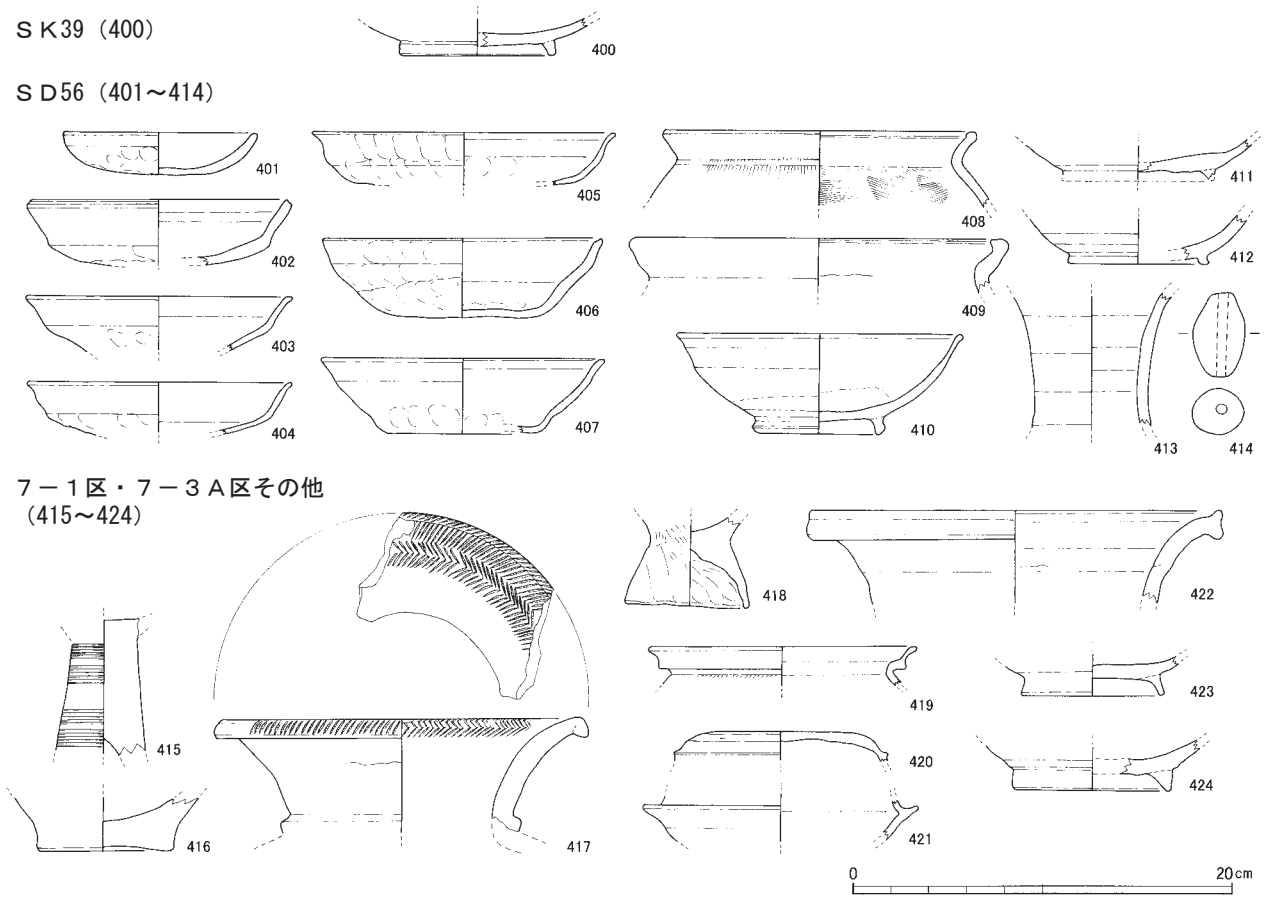
杭列Ｆの杭は358・359。残存状況は悪いが、丸杭を用いた杭列であったことがわかる。

ＳＺ40（ＳＤ38最下層）木器類（360～399）　360は未製品と考えられる材で、樹種はウルシである。361は杭列ＡとＳＺ40の間から出土した板状の製品で、平坦面に穿孔が認められる。先端がわずかに焼けていることから、杭転用材として二次加工されたのではなく、元々の形状が先端を尖らせるものであった可能性が高いが、用途は不明である。362～364は木札状木製品で、赤外線による墨痕は見られなかった。365・366は先端もしくは一部が焼けた火付木、いわゆる「燃えさし」である。367～371は積木状木製品。これらの樹種は、周辺の杭列と同じマツやムクノキ材であることから、堰を構築する際に出た木端と考えられるが、367は意図的に加工されている可能性がある。

ＳＫ39（400）　400は猿投窯産の緑釉陶器で、時期は９世紀後半から10世紀前半頃。

ＳＤ56（401～414）　401は土師器小皿で、白っぽい胎土を持つ平安時代後期のもの。402～407は土師器坏で、402は口縁端部に面をもち沈線を施す。406・407はやや新しい様相を示している。408・409は土師器甕である。410～413は灰釉陶器。410は樽崎・斎藤編年黒笹90号窯式期の椀で、内外面に漬け掛けによる釉がみられる。413は瓶である。414は丸みを帯びた土師質の土錘である。

遺物から、ＳＤ36の時期は平安時代後期である。



第45図　出土遺物実測図（15）７－１区（１：４）

その他（415 ～ 424）　包含層出土もしくは遺構に伴わない遺物である。415 ～ 419 は弥生時代後期から古墳時代初頭の土器群。415 は山中式併行期の高坏で、脚柱部に櫛状工具による直線文がみられる。416・417 は壺で、417 は口縁部内面に矢羽状文が施され、頸部外面に貼り付け突帯をもつ。418 は台付甕の脚台部で、内外面に粗いナデがみられる。419 はＳ字甕の口縁部で、口縁端部が外反するＢ類。420・421 は古墳時代の須恵器である。420 は蓋で、陶邑編年ＴＫ 208 型式併行期であろうか。421 は坏身で、口縁端部と底部が欠損しているものの陶邑編年ＴＫ 43 ～ 209 型式併行期と考えられる。ただし、421 は残存率が低いため、もし径がより小さくなるならば陶邑編年ＴＫ 217 型式併行期の可能性がある。

422 は須恵器壺で、時期は平安時代前期頃か。423 は黒色土器の椀で、高台の形態から、時期は 10 世紀後半頃であろうか。424 は山茶碗で内面に煤が付着し、高台を意図的に割った痕跡がみられる。

9　7－2区・7－3D区・7－4区

a　平安時代前期後半～平安時代後期の遺物

ＳＤ 41（425 ～ 428）　425・426 は土師器坏で、坏部はやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は内湾する。426 は坏部内面に「Ψ」のようなヘラ描きが観察されるが、欠損しているため文字か絵画かは不明である。427 は土師器坏で、内面に放射状暗文が施される。428 は土師器甕で、体部内面はヨコハケ、体部外面は粗いタテハケの調整がみられる。

時期は、斎宮編年第Ⅱ期第２段階に相当する９世紀中頃と考えられる。

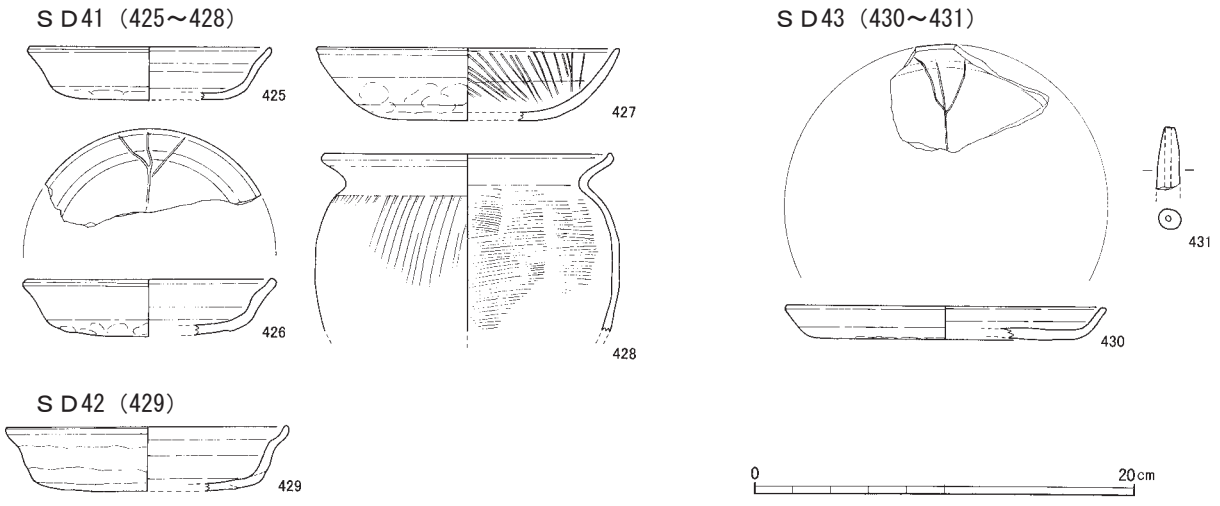
ＳＤ 42（429）　429 は土師器坏で、時期はＳＤ 41 と同じく９世紀中頃である。

ＳＤ 43（430・431）　430 は土師器皿である。内面に「Ψ」のようなヘラ記号がみられ、器種は異なるがＳＤ 41 土師器坏（426）と同じ記号を記したものと考えられる。時期は９世紀中頃である。

ＳＤ 47・ＳＤ 53 出土遺物（432 ～ 1212）ＳＤ 47 は層序に従って遺物の取り上げを行った。ＳＤ 47 と同一の溝である可能性が高いＳＤ 53 についても、同じ層序に基づき遺物を取り上げた。

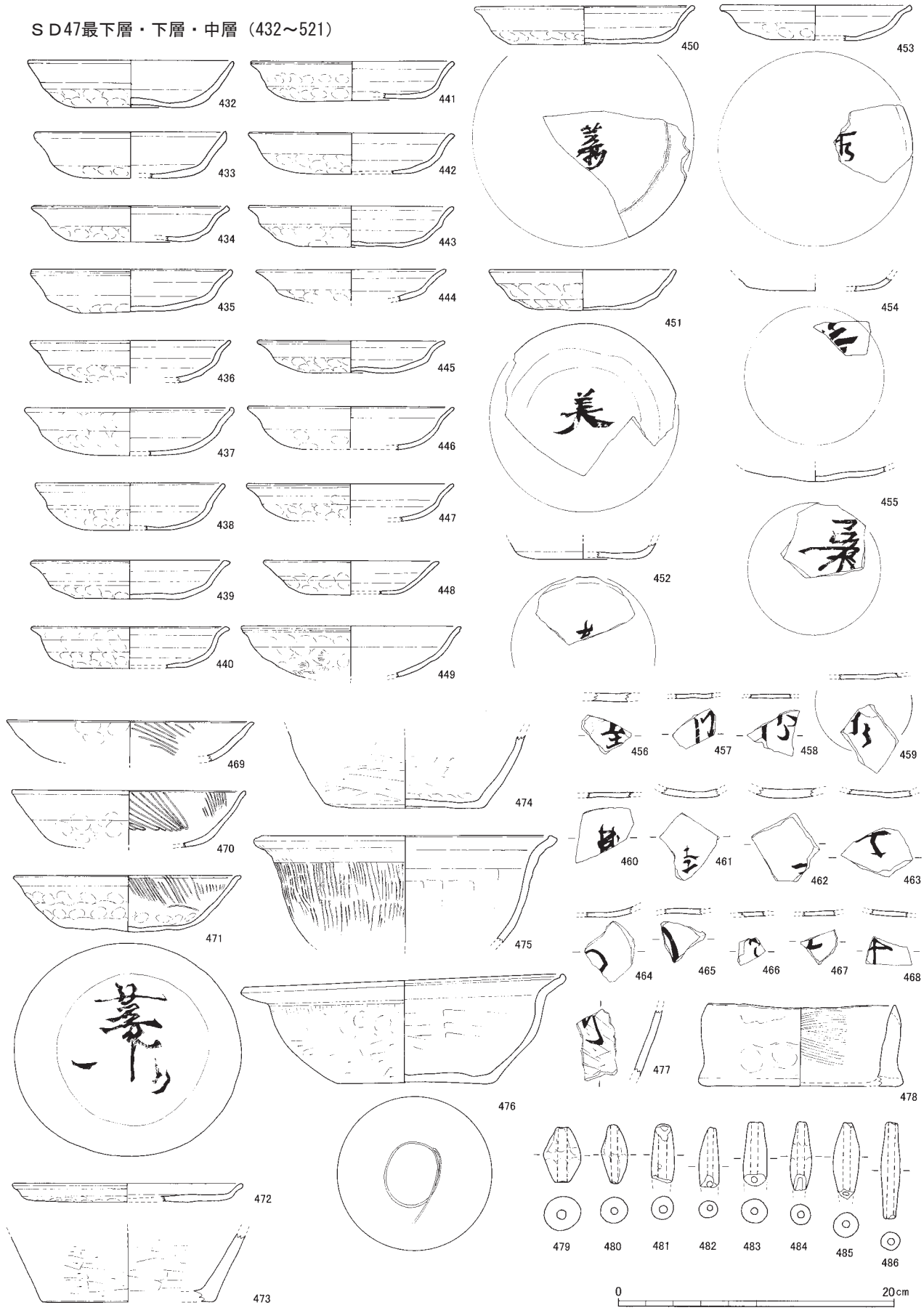
以下では、まずＳＤ 47 出土土器を「最下層･下層･中層」「上層・最上層（炭層）」に分けて掲載した。次いで、ＳＤ 53 出土土器を「最下層･下層」「中層」「上層」に分けて掲載した。ＳＤ 47 およびＳＤ 53 出土木製品については、いずれも下層出土資料であったため、最後にまとめて掲載した。これらの詳細な層序については遺物観察表を参照されたい。

ＳＤ 47 最下層・下層・中層（432 ～ 521）　432 ～ 455 は土師器坏である。432・433 は深い坏部から口縁部が直立しており、やや古い様相を示す。434・435 は口縁端部に面をもち、沈線が巡るもの。436 ～ 447 は器壁が薄く口縁部が緩やかに外反しており、時期は斎宮編年第Ⅱ期第３段階。448 の口縁部は直線的な立ち上がりをみせる。449 は深い椀状を呈し、外面にナデによる圧痕がみられ、やや新しい様相を示している。450 ～ 468 は墨書がみられる土師器坏



第46図　出土遺物実測図（16）７－２区（１：８）

ＳＤ47最下層・下層・中層（432～521）



第47図　出土遺物実測図（17）７－２区（１：４）

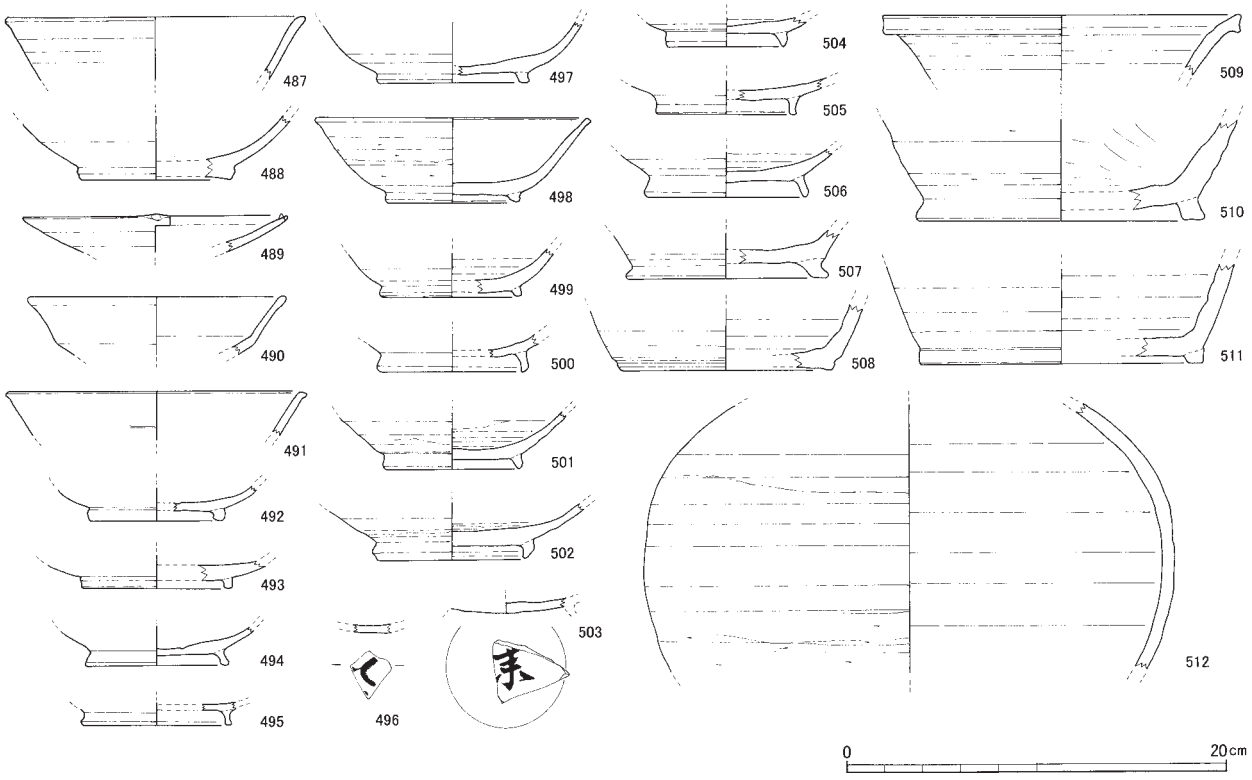
である。基本的には斎宮編年第Ⅱ期第３段階に相当するが、451 は同第Ⅱ期第４段階である。墨書はすべて底部外面に書かれている。「籥」の可能性がある個体は 450・452 ～ 459 である。451 は「美」と釈読され、吉祥文字の可能性がある。460 は「再」もしくは「成」の可能性がある。469 ～ 471 は内面に放射状暗文をもつ土師器坏。471 は完形品で、椀状を呈し外面に圧痕がみられることから、斎宮編年第Ⅱ期第４段階頃と考えられ、底部に墨書「籥」が書かれている。472 は土師器皿である。473 は土師器甑の底部片で、体部外面にヨコ方向のケズリ調整がみられ、内面は板ナデによって成形している。474 ～ 476 は土師器鉢。476 の体部外面上半部は粗いハケのちオサエ調整、体部外面下半部はケズリ調整がみられ、内面は板ナデ調整である。底部外面は平坦で、大きく「○」のヘラ記号がみられる。477 は土師器甕で、内面にはケズリ調整と墨書が確認される。甕の内面は通常は文字の書かれる面ではないことから、破片になったあと習字されたものと推測されるが、文字は不明である。

478 は志摩式製塩土器で、内面はヨコハケ調整される。479 ～ 486 は土師質の土錘。479・480 は径が大きく体部中央に明瞭な屈曲をもつタイプ、481 ～ 485 は径 1.5cm 程度で緩やかに丸みもつ細長いタイプ、486 は径が小さく細長いタイプである。

487 ～ 496 は緑釉陶器である。487・488 の椀は京都市洛西（大原野）窯跡群の小塩窯産で、488 は蛇ノ目高台で、時期は９世紀末頃。489 ～ 994 は猿投窯産である。489 は皿で、輪花がみられる。490 ～ 493 の椀は、内面にミガキを施したのち施釉されており、時期は９世紀末。494 の椀は 10 世紀初頭である。495 は硬胎の素地で、産地は美濃もしくは近江と考えられ、時期は 10 世紀半ば頃である。496 は猿投窯産の緑釉緑彩陶器である。時期は 10 世紀初頭頃で、花文を描いたものであろうか。

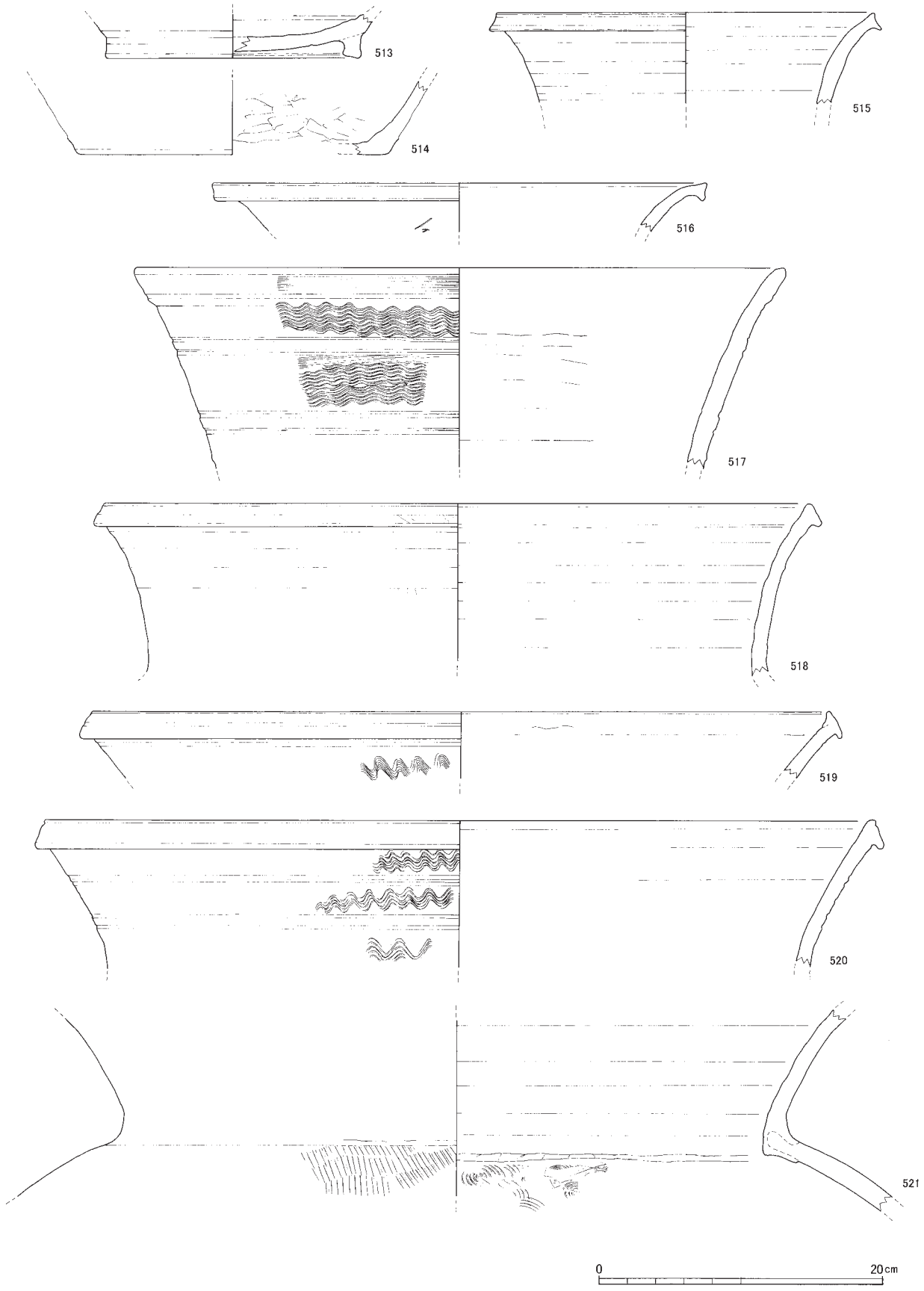
497 ～ 512 は灰釉陶器。497・498 の椀は内面の自然降灰が顕著で、高台部は樽崎・斎藤編年黒笹 14 号窯式期の特徴を有する。499 ～ 506 の椀は、同黒笹 90 号窯式期と考えられる。507 ～ 512 は壺もしくは瓶。508・509・512 は外面に釉が認められ、508 は漬け掛けであろうか。なお、503 は底部の高台内側に「籥」に類似した墨書が認められる。513 ～ 521 は須

ＳＤ47最下層・下層・中層



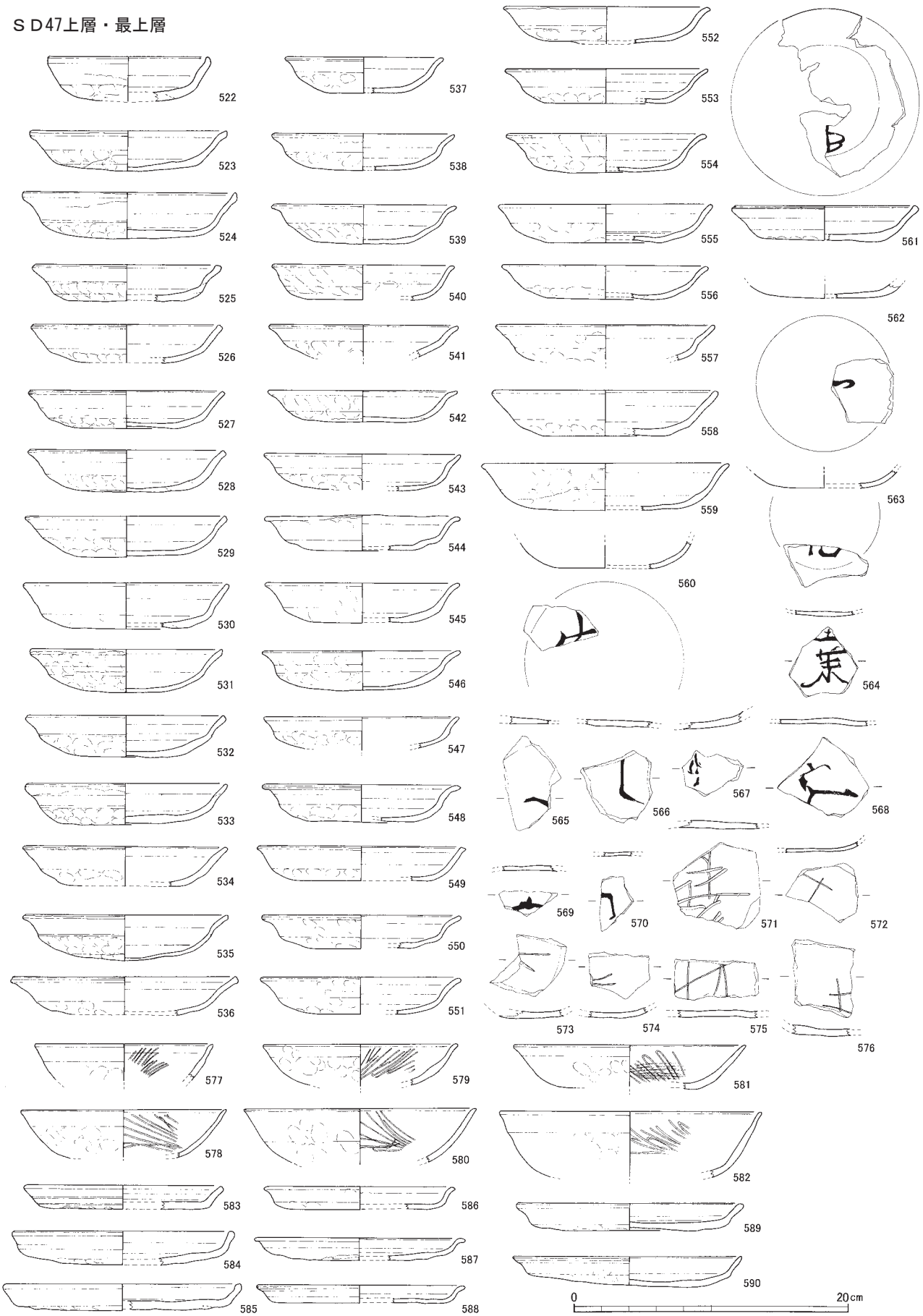
第48図　出土遺物実測図（18）７－２区（１：４）

ＳＤ47最下層・下層・中層



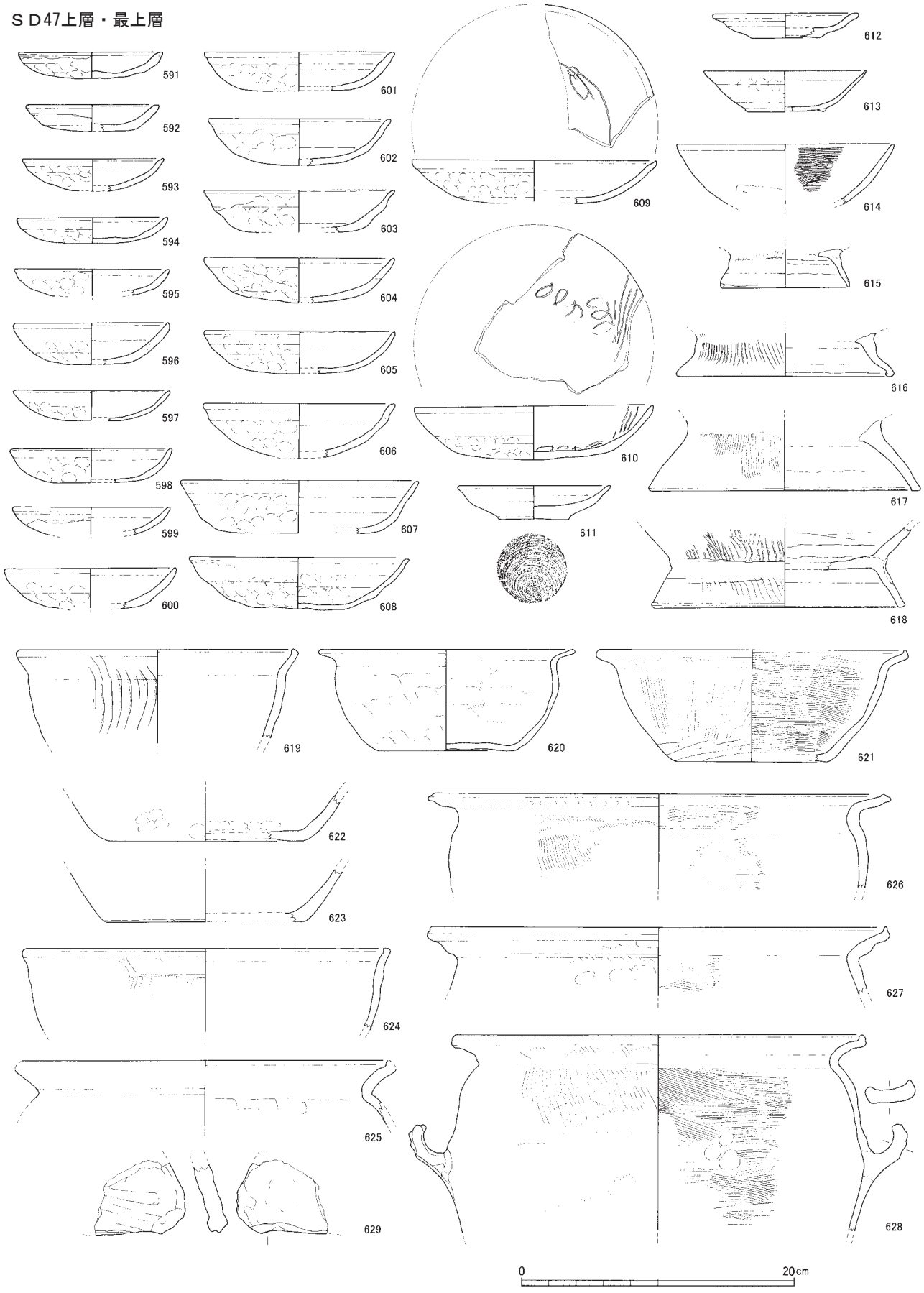
第49図　出土遺物実測図（19）７－２区（１：４）

ＳＤ47上層・最上層



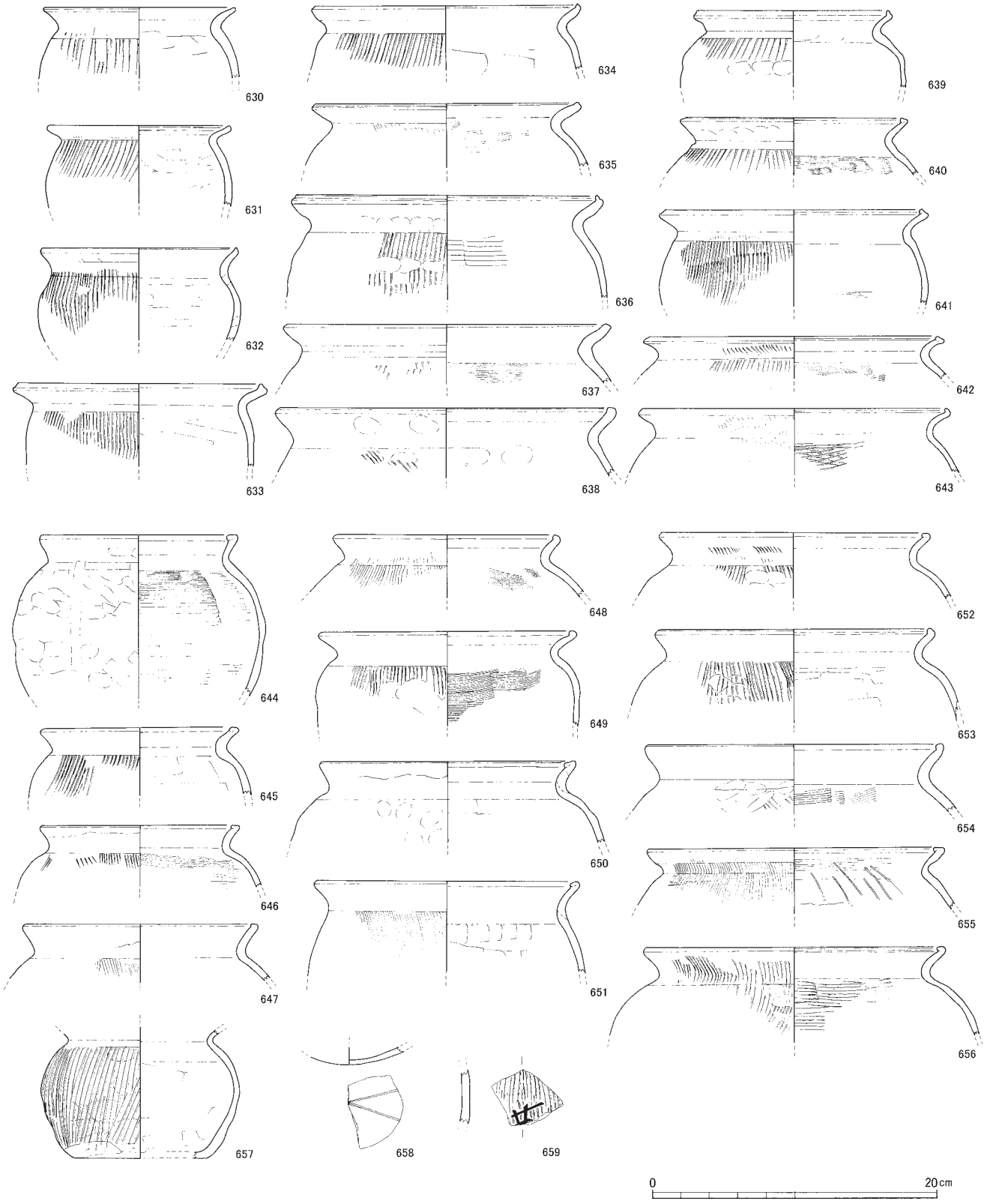
第 50 図　出土遺物実測図（20）７－２区（１：４）

ＳＤ47上層・最上層



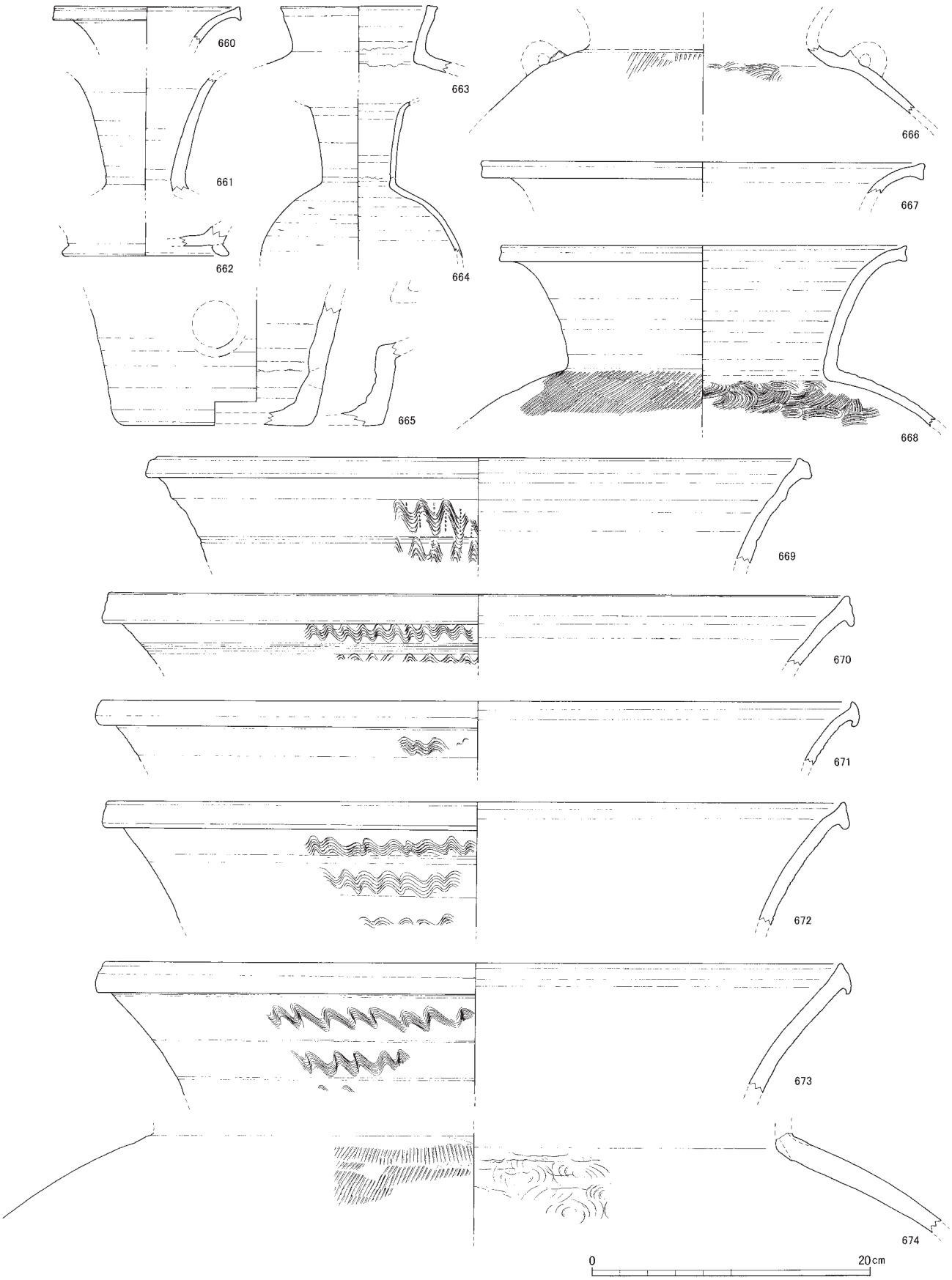
第 51 図　出土遺物実測図（21）７－２区（１：４）

ＳＤ47上層・最上層



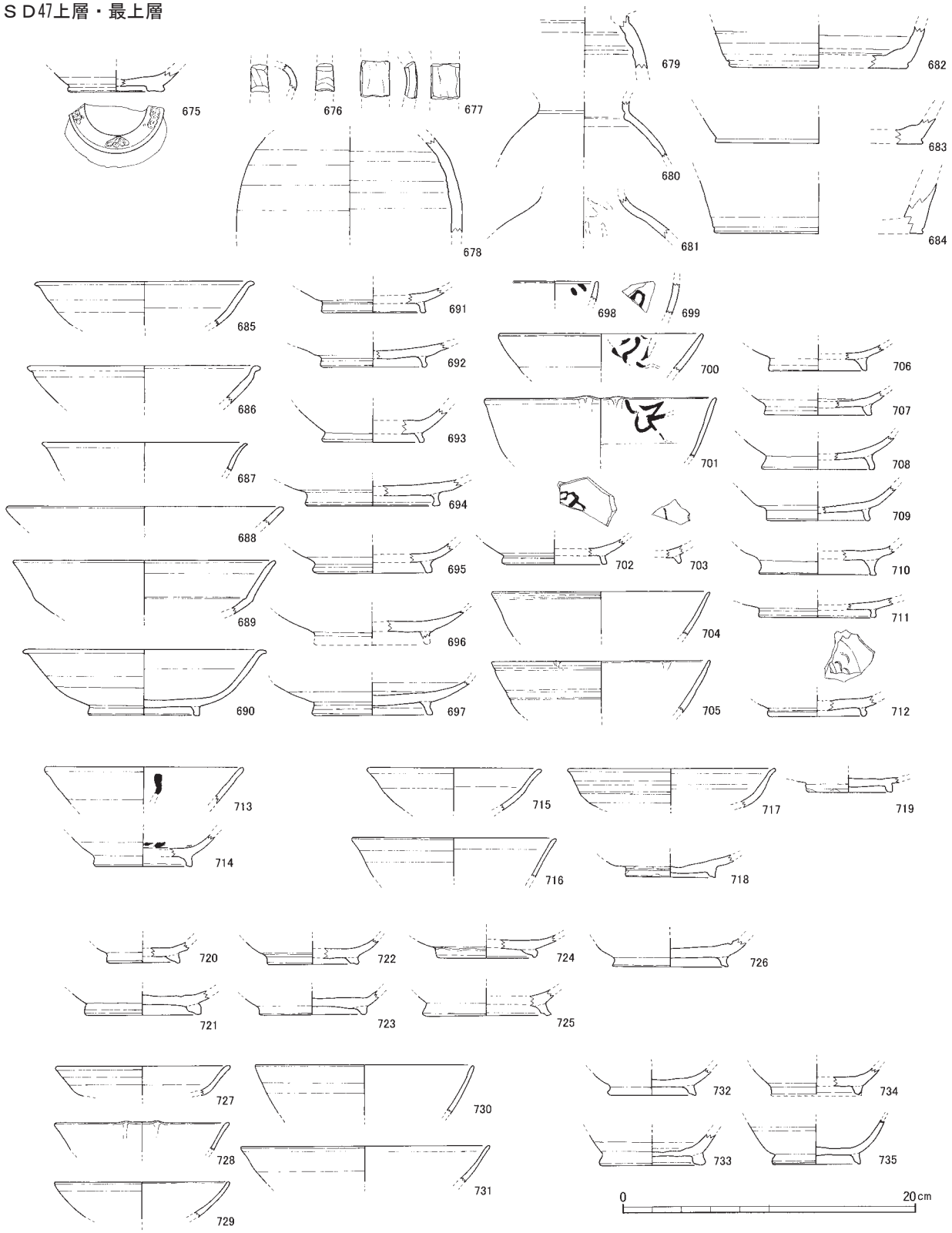
第52図　出土遺物実測図（22）７－２区（１：４）

ＳＤ47上層・最上層



第53図　出土遺物実測図（23）７－２区（１：４）

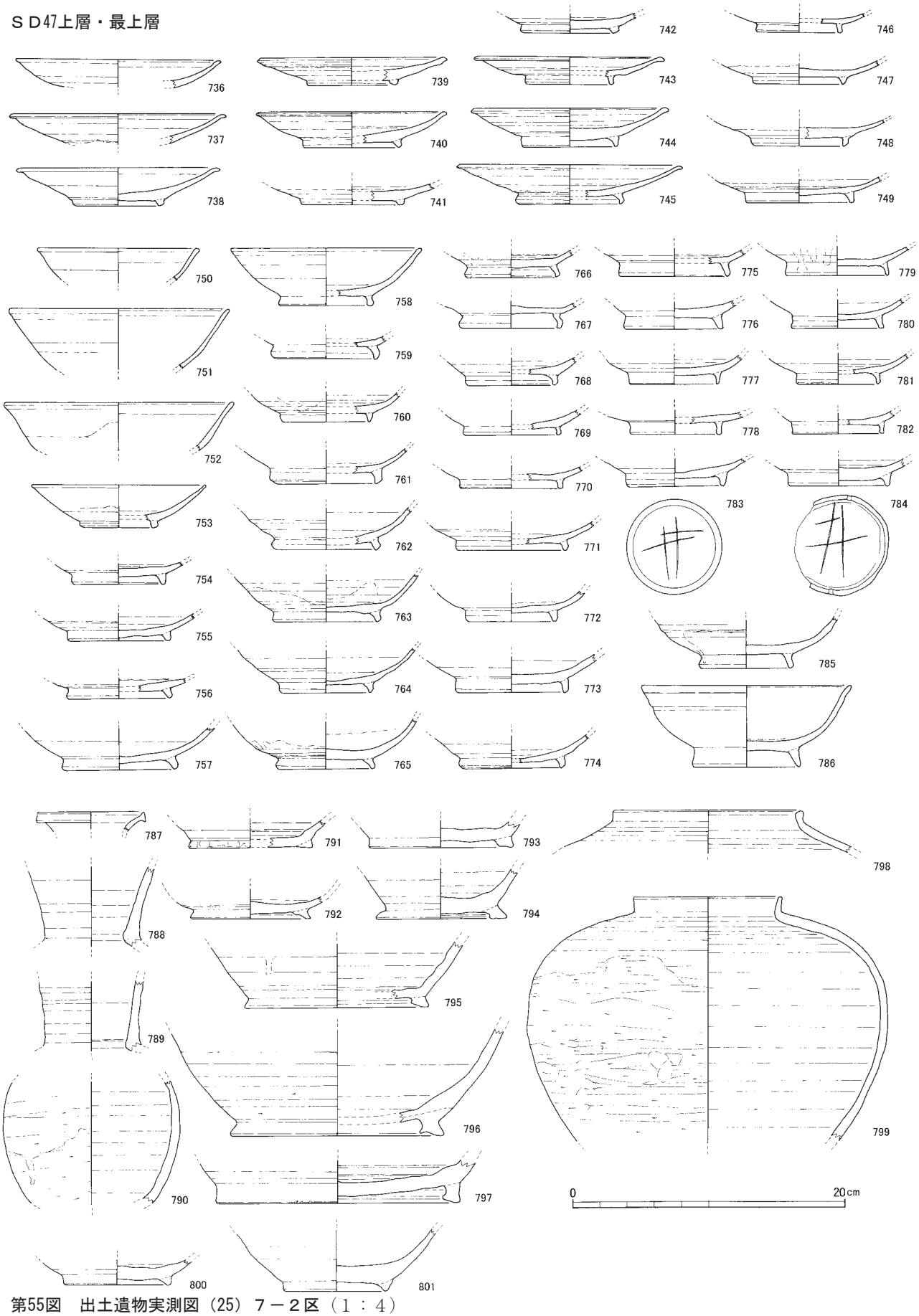
ＳＤ47上層・最上層



緑釉陶器椀
- 猿投産・東海系（685 ～ 712）
- 防長産？（713・414）
- 京都産（715 ～ 719）
- 近江産（720 ～ 726）
- 美濃産（727 ～ 731）
- 近江もしくは美濃産（732 ～ 735）

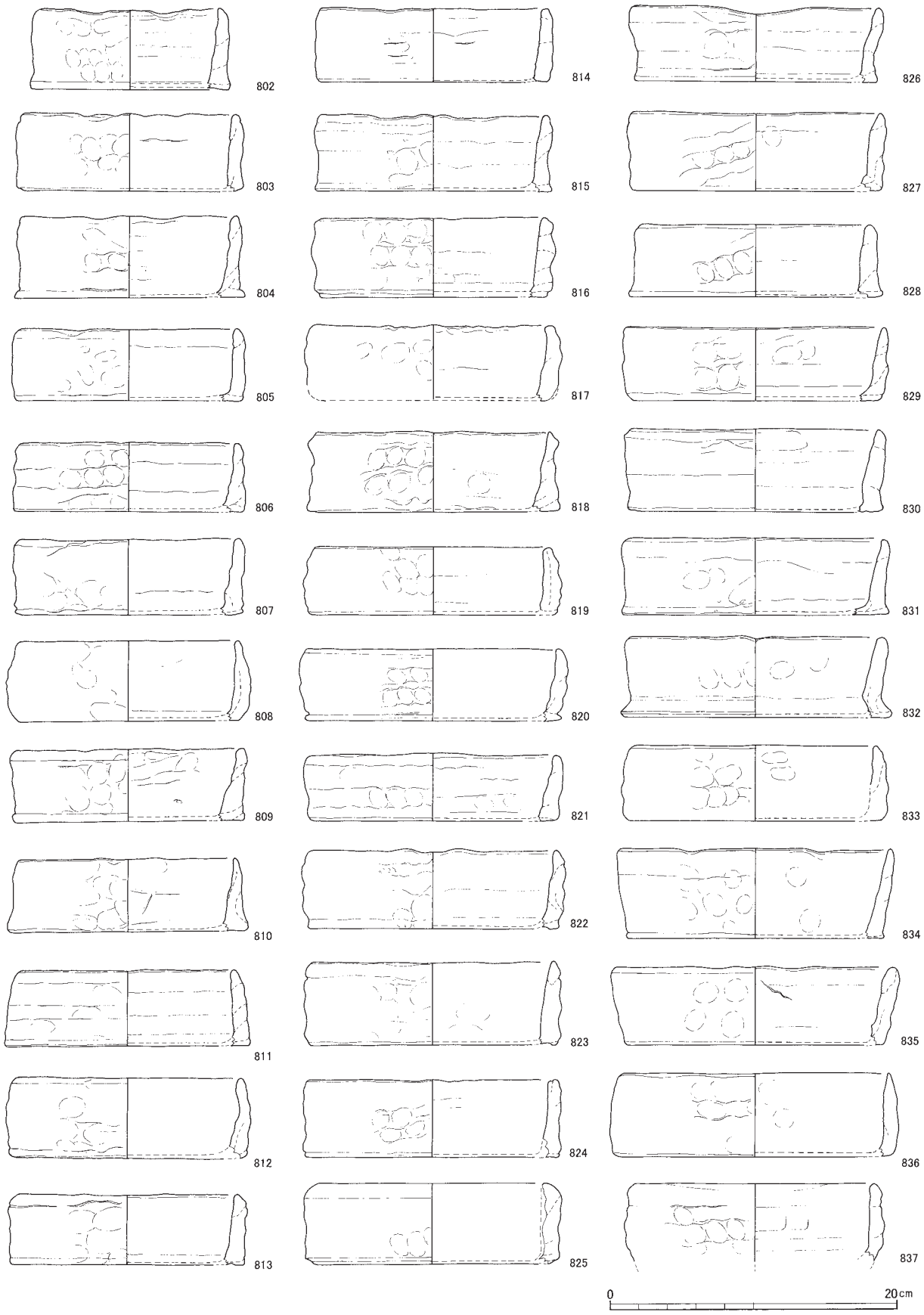
第54図　出土遺物実測図（24）７－２区（１：４）

ＳＤ47上層・最上層



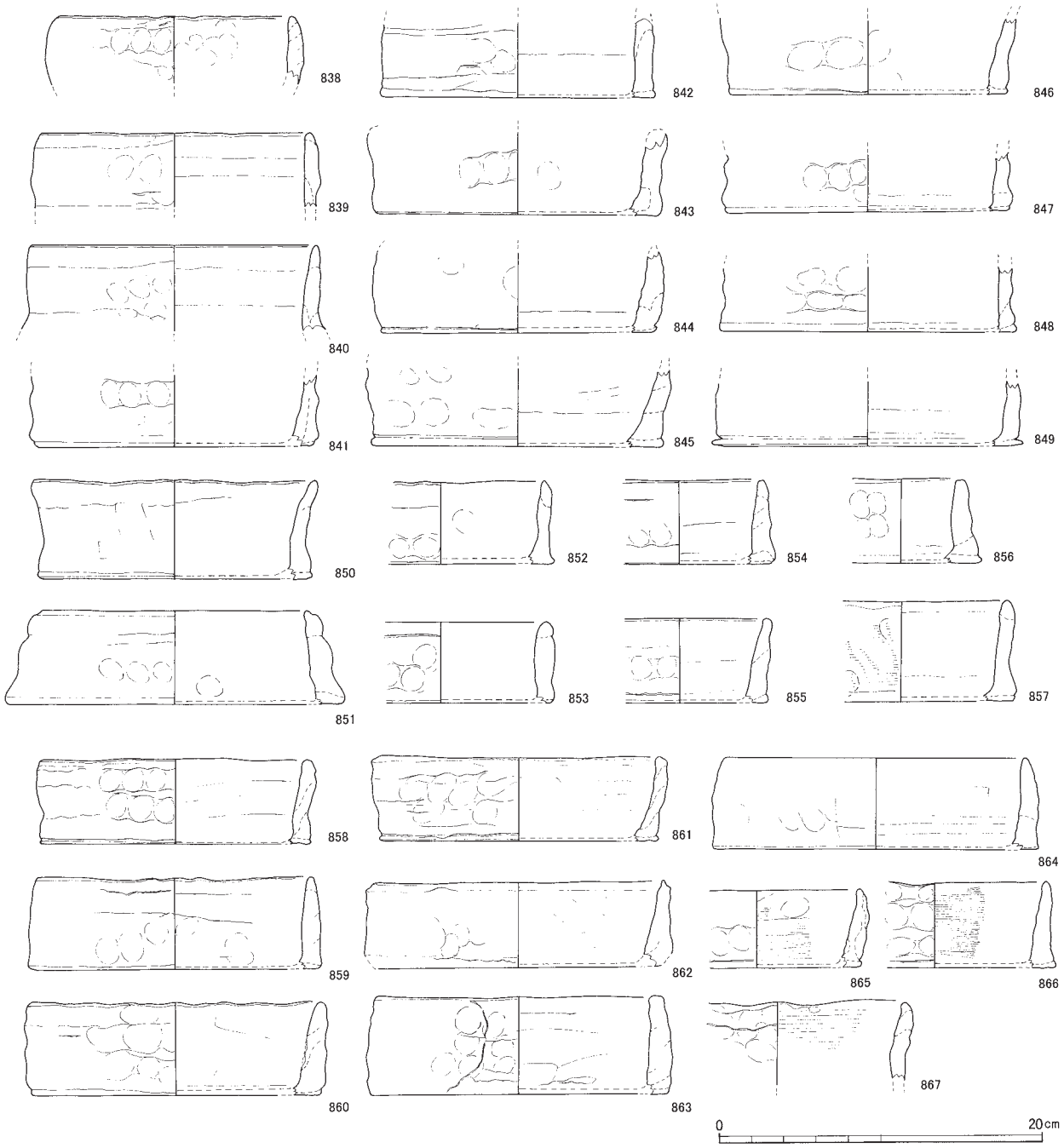
第55図　出土遺物実測図（25）７－２区（１：４）

ＳＤ47上層・最上層



第56図　出土遺物実測図（26）７－２区（１：４）

ＳＤ47上層・最上層

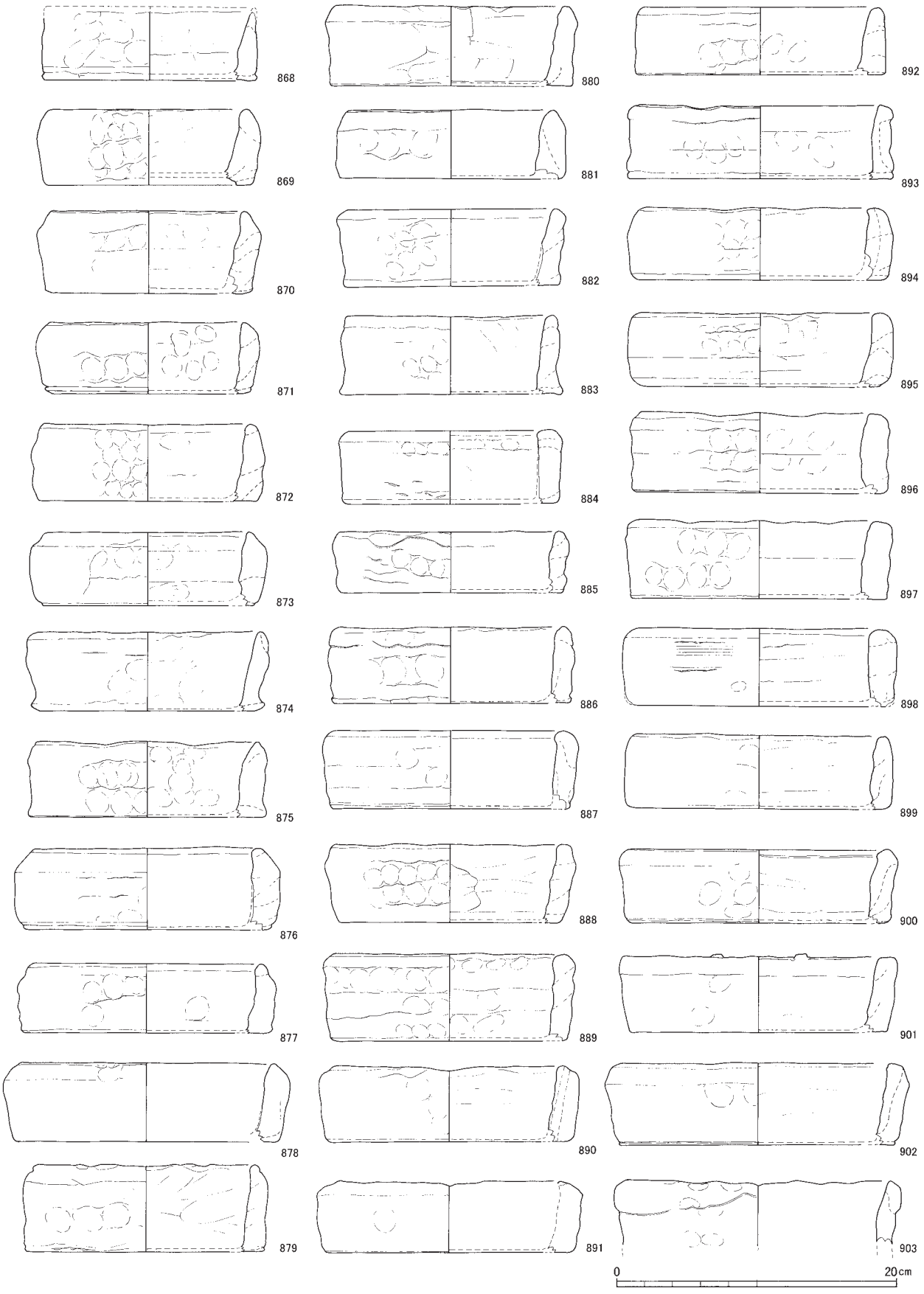


第57図　出土遺物実測図（27）７－２区（１：４）

恵器。513 は高台部で、内面に自然釉が付着している。514 は鉢の底部で、内面は板ナデ調整を行ったのち、オサエによる成形を行っている。515 ～ 521 は甕。517 は口縁部が直線的にのびて口縁端部を丸くおさめており、外面には波状文と沈線がみられる。518 ～ 520 の口縁部はやや外反しながらのび、口縁端部は外側に面を持つ。518 は外面に黄土が塗布されており、外面には擦痕のような細かいタテハケがみられる。須恵器の産地は、518･520 が猿投窯産で、実測できなかった須恵器甕の体部片の多くが猿投窯産であったことが特筆される。519 や 521 の産地は、猿投窯産ではないことから、伊勢や美濃などの可能性が考えられよう。

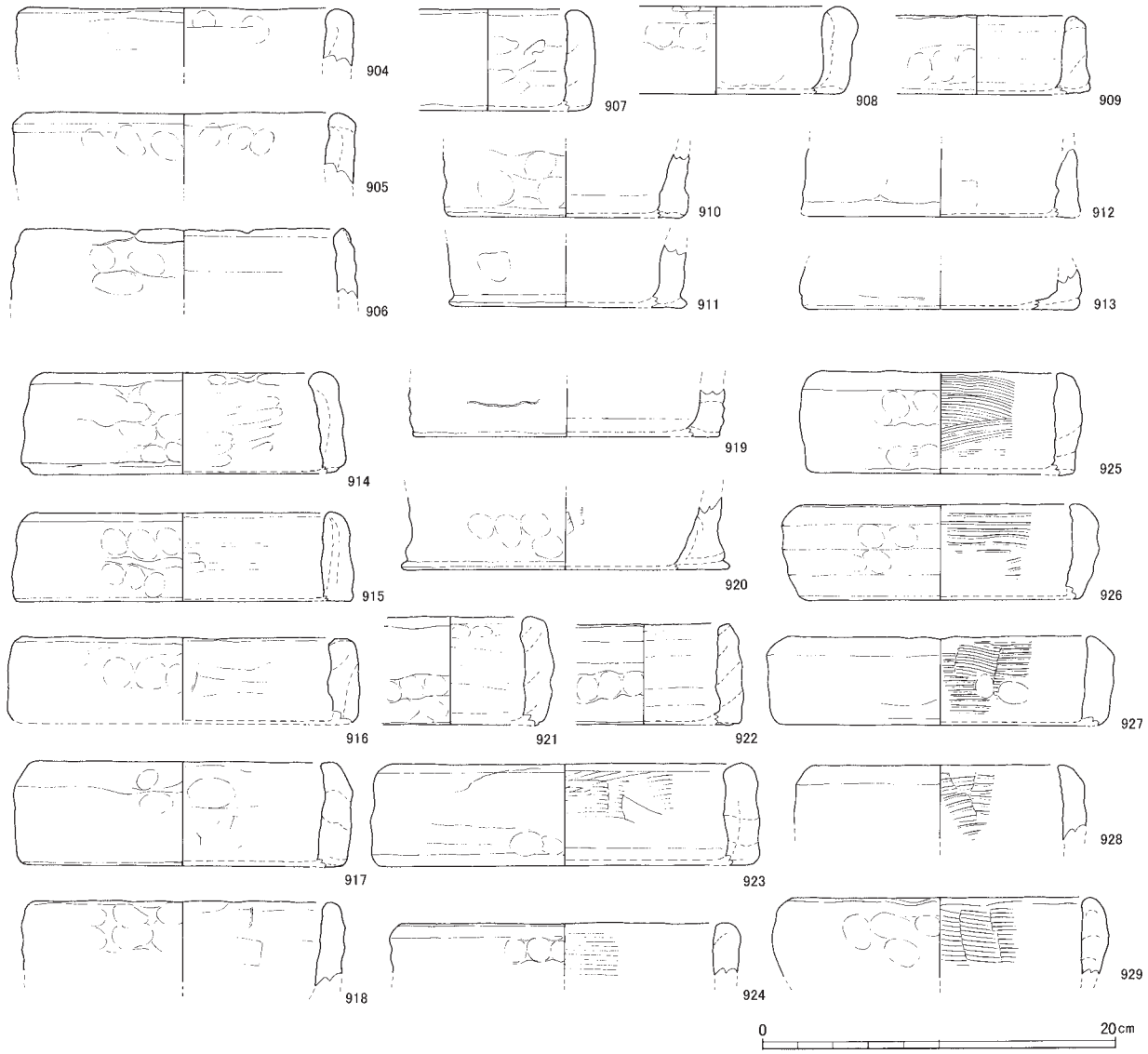
ＳＤ 47 最下層・下層・中層の時期は、土師器坏や灰釉陶器から９世紀末が中心と考えられる。ただし、流路資料であるため時期幅が広く、土師器の中

ＳＤ47上層・最上層



第58図　出土遺物実測図（28）７－２区（１：４）

ＳＤ47上層・最上層



第59図　出土遺物実測図（29）７－２区（１：４）

には斎宮編年第Ⅱ期第４段階（10世紀前半）の様相を呈する個体が含まれており、緑釉陶器にも10世紀半ば頃の近江もしくは美濃産の椀が認められる。

ＳＤ47上層・最上層（522～1023）　最上層では、多量の炭とともに多くの遺物が出土している。土師器坏・椀は、大きくふたつの時期差が見られたことから、522～563と591～610に分けて掲載した。

522～590は、ＳＤ47上層・最上層出土の土師器供膳具の中で古い様相を示す一群である。522～563は土師器坏。522はやや腰が張り、口縁部が内湾するもので、斎宮第Ⅱ期第１段階に相当する。523・524はそれに続く同第Ⅱ期第２段階のもの。同第Ⅱ期第３段階に相当する個体はもっとも多く、525～537は口縁端部に面をもち沈線がみられるタイプ、538～559は大きく外反した口縁部と丸みを帯びた口縁端部をもつタイプである。560～570は墨書、571～576はヘラ記号がみられる一群である。墨書土器は最下層～中層に比べ完形品が少ないことから、祭祀行為として投棄されたのではなく、既に欠損していたものを不用品として廃棄した可能性が高い。破片資料が多いため釈読できる点数は少ないが、564は「葉」に類似する文字と推測される。また、571はヘラ記号というより線刻文字と言えそうであるが、意味は不明である。墨書される位置は、基本的に土師器坏もしくは皿の底部外面であるが、573～576のヘラ記号は底部内面である。577～582は暗文土

師器の坏で、いずれも内面に放射状暗文が施される。583 ～ 590 は土師器皿。583 ～ 585 は奈良時代から続く系譜であろうか。586 ～ 590 は口縁部を強いヨコナデによって外反させる。

591 ～ 612 は上層・最上層出土土師器供膳具の中でも新しい様相を示す一群で、白っぽく粒の粗い胎土で、外面のオサエ痕がはっきりと残る。591 ～ 593 は小皿。594 ～ 610 は土師器椀で、内面に螺旋状暗文がみられる個体もあるが、前段階に比べ粗雑である。611・612 ロクロ成形の小皿。

613・614 は黒色土器椀である。615 ～ 618 は台付鉢の台部で、鉢部との接合面には斜格子状の圧痕がみられる。619 ～ 624 は土師器鉢。625 ～ 628 は口径が広いことから把手付鍋の可能性があり、628 は把手が 1 つ残存している。629 は土師器片で、移動式カマドの底部の可能性がある。630 ～ 659 は土師器甕。630 は口縁部が直線的である。631・632 は口縁端部を上方にわずかにつまみ上げるもの、633 ～ 643 は口縁端部を上方に明確につまみ上げるもの。これらは概ね斎宮編年第Ⅱ期第 3 ～ 4 段階に相当し、時期は 9 世紀後半から 10 世紀前半頃と考えられる。644 ～ 656 は口縁端部が折り曲げられて肥厚するもので、斎宮編年第Ⅲ期第 1 段階に相当し、時期は 10 世紀後半頃である。これらの中には、体部外面をハケ調整せずオサエ・ナデのみ行う個体もみられる。657 は小型の甕。658 は底部に線刻が見て取れ、おそらく「×」印である。659 は体部外面に墨書がみられ、草冠と推測されることから、「薗」のような字になるのかもしれない。

660 ～ 674 は須恵器。660 ～ 664 は瓶もしくは壺である。665 は器種不明で、体部の中央部分に円形の注口をもつため、横瓶のような形状になる可能性もある。666 ～ 674 は甕である。このうち、670 ～ 672 は猿投窯産。674 は肩部外面に黄土の塗布がみられる。

675 は越州窯系青磁椀の高台部である。胎土は淡黄灰色で精良である。蛇ノ目高台で、高台部外面に重ね焼きの跡がある。全面に淡黄色の釉がかかるが、高台畳付は削られている。その形状から、大宰府編年[6]の椀Ⅰ－ 1 b 類で、9 世紀中頃の浙江省産と考えられる。[7]

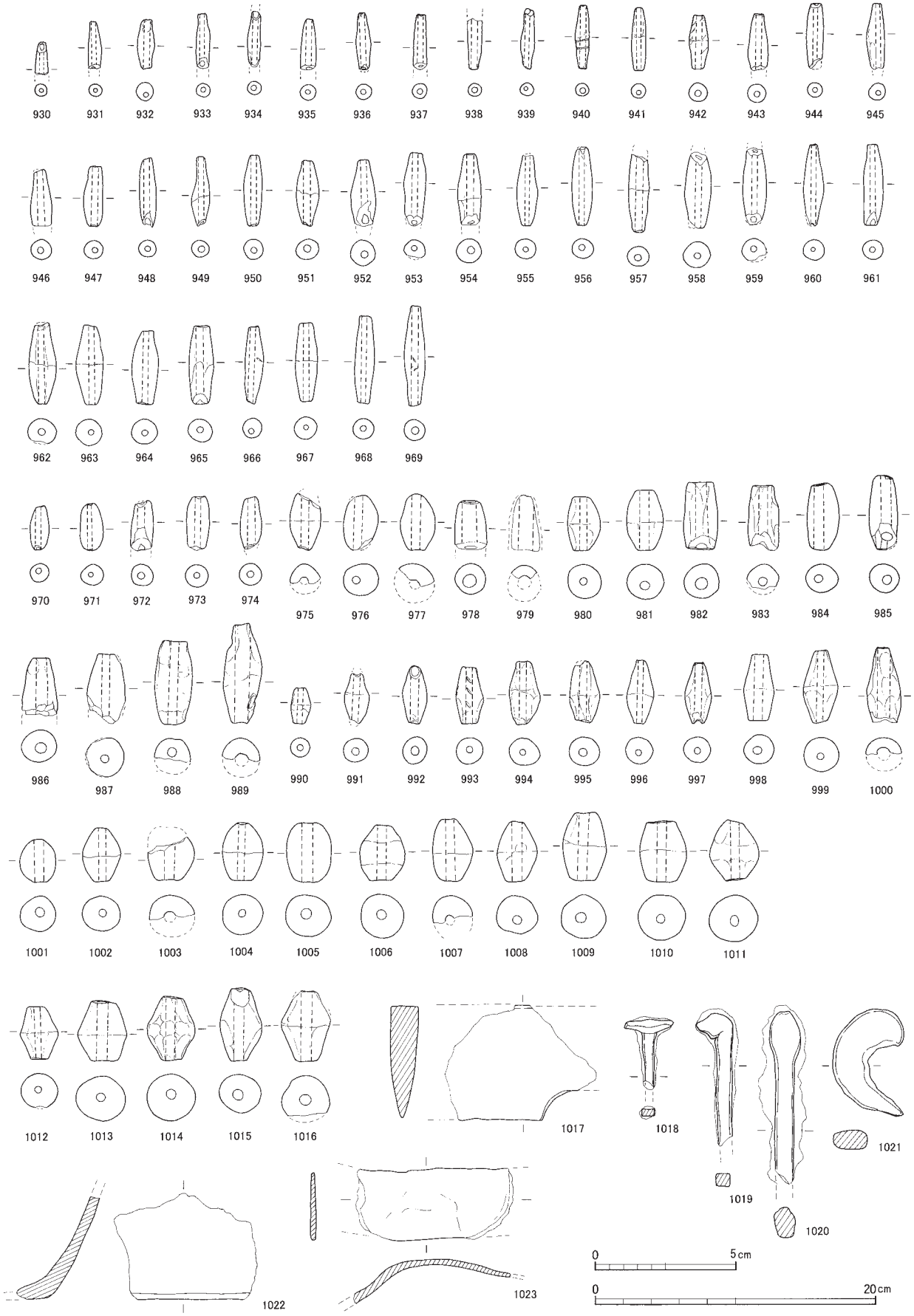
676 ～ 735 は緑釉陶器で、最上層では実測可能な個体が 60 点出土した。675 ～ 684 は壺ないし瓶で、すべて猿投窯産である。676 の把手は 9 世紀後半以前、677 の把手は 9 世紀後半のものである。680・681 は唾壺。682 ～ 684 は瓶の底部である。

685 ～ 735 の器種は椀ないし皿で、以下では産地・時期ごとに掲載した。[8] 685 ～ 712 は猿投窯産もしくはそれに類する東海地方産。685・686 は口縁部が緩やかに外反し、9 世紀後半以前の古い様相を示す。698 ～ 712 は、9 世紀末頃のもので、このうち 698 ～ 712 は 9 世紀末頃のもので、このうち 698 ～ 703 には緑彩技法の花文が、701・705 には輪花が、712 には陰刻花文が認められる。713・714 は釉や胎土から同一個体の可能性があり、防長産もしくは東海地方産と考えられ、土師質で焼成の甘い胎土は防長産として違和感がないものの、東海系の範疇でも捉えられるものである。時期は 9 世紀後半から 10 世紀前半頃である。比較的小さい高台径から腰を張らず立ち上がる形状と、高台端部の内面が傾斜する形状が防長産、特に長門産に近い。[9] 釉がかかる前段階の調整はミガキ調整がなされ、釉は底面外面まで施される。715 ～ 719 は京都産である。いずれも削り出し高台で、高台部の内面に釉は見られない。715 ～ 718 は篠窯、719 は小塩窯もしくは篠窯のもので、時期は 10 世紀初頭頃である。720 ～ 726 は近江産で、時期は 10 世紀前半から半ば頃である。727 ～ 731 は美濃産で、728 は輪花が認められ、時期は 10 世紀後半。732 ～ 735 は美濃もしくは近江産である。

736 ～ 799 は灰釉陶器で、高台の形態は樽崎・斎藤編年黒笹 14 号窯式期から黒笹 90 号窯式期のものが主体である。736 ～ 749 は皿、750 ～ 786 は椀である。施釉方法は、765 で漬け掛けを確認できた。783・784 は、底部外面に細い線刻で「＃（ドーマン）」が刻まれている。787 ～ 795 は瓶、796 ～ 799 は壺である。短頸壺 799 は肩部に施釉が認められ、体部外面は上から下方向のロクロケズリを施している。800・801 は山茶碗の高台部で、渥美型の第 3 ～ 4 型式のもの。

802 ～ 929 は志摩式製塩土器。朝見遺跡から出土した志摩式製塩土器のほとんどは、ＳＤ 47 とＳＤ 53 の上面に堆積した炭層から出土している。802 ～ 867 は比較的薄い器壁をもち上方に向かって直立するもの。粘土紐を巻き上げて成形する手法は共通するが、こ

ＳＤ47上層・最上層



第60図　出土遺物実測図（30）７－２区（1017～1023は１：2、その他は１：４）

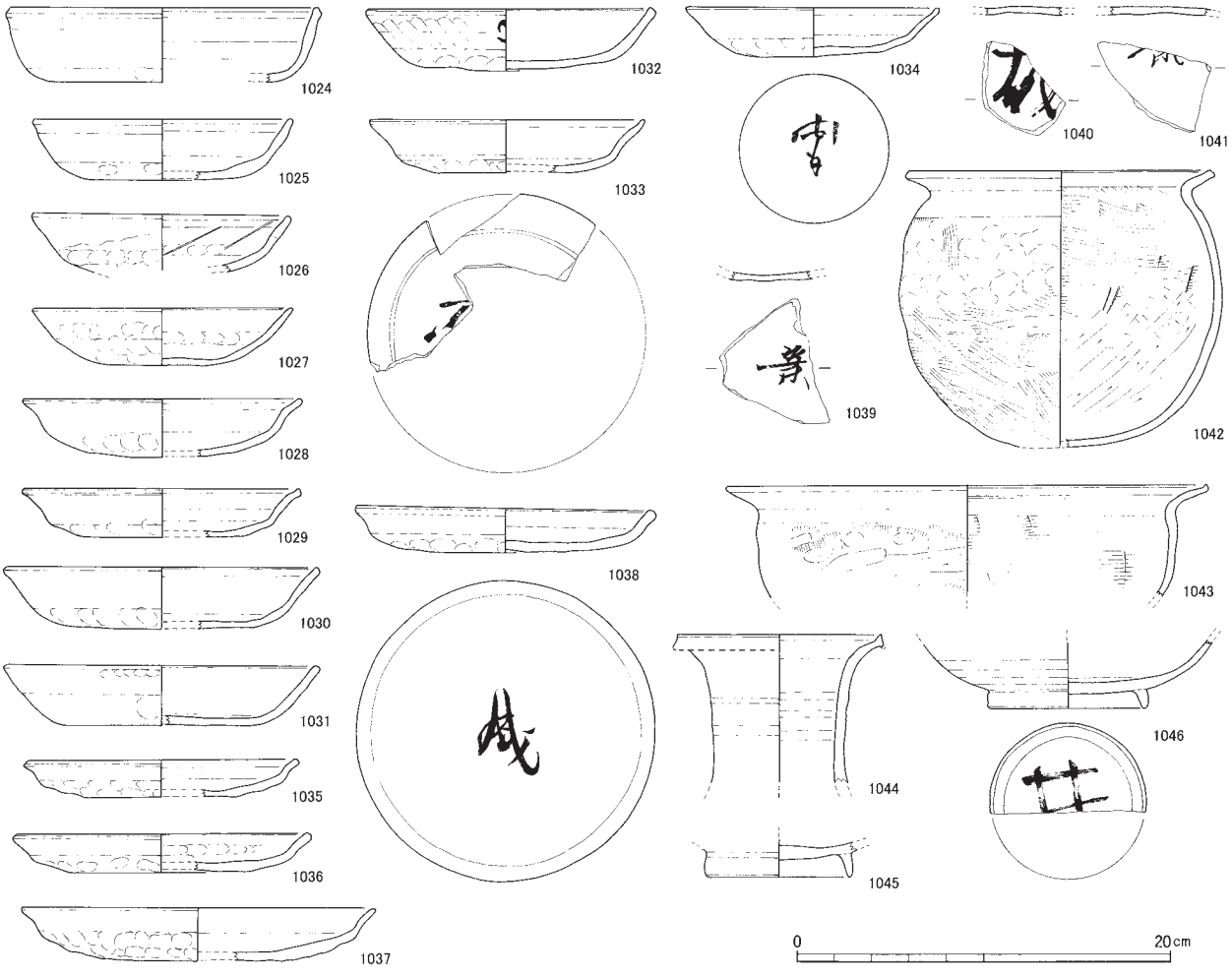
のうち802～856は外面をオサエ、内面をナデ・オサエで調整するタイプ、857は外面をハケ調整したのちオサエを行うタイプ、858～864は内面を板状工具で調整するタイプ、865～867は内面をハケ状工具で調整するタイプである。一方、868～929は比較的厚い器壁をもつもの。わずかに内湾気味に立ち上がり口縁端部を上方につまみ上げる868～883と、口縁端部を平坦に整形する884～909に分けられる。また、914～922は内面を板状工具で調整するタイプ、923～929は内面をハケ状工具で調整するタイプである。これらは、斎宮跡出土志摩式製塩土器を用いた新名氏の編年[10]によるⅡ－３期からⅡ－４期に相当し、時期は９世紀後半から10世紀前半頃である。

930～1016は土錘。930～969は細長い形状で、このうち930～945は全長５cm未満、956～969は全長５～７cm程度である。970～989は全体的に丸みを帯びた形状で、径は１cm～2.8cmと厚い傾向にある。990～1000は丸みを帯びつつも中心に稜をもつ形状である。1001～1011は球体に近い形状を呈する。012～1016はその中心に明確な屈曲をもち、工具によって面をとるものである。

1017～1023は金属製品。1017は刀子片で、厚みは0.5cm。表面に土師器片が付着しており、おそらく鉄加工用に利用されたものと考えられる。1018・1019は釘である。1020は工具の切先で、ヤリガンナの可能性がある。1021は用途不明の金属製品で、勾玉のような形状を呈する。1022は鍋の破片で、外面に煤が付着している。1023は用途不明であるが、鍋の体部片である可能性がある。

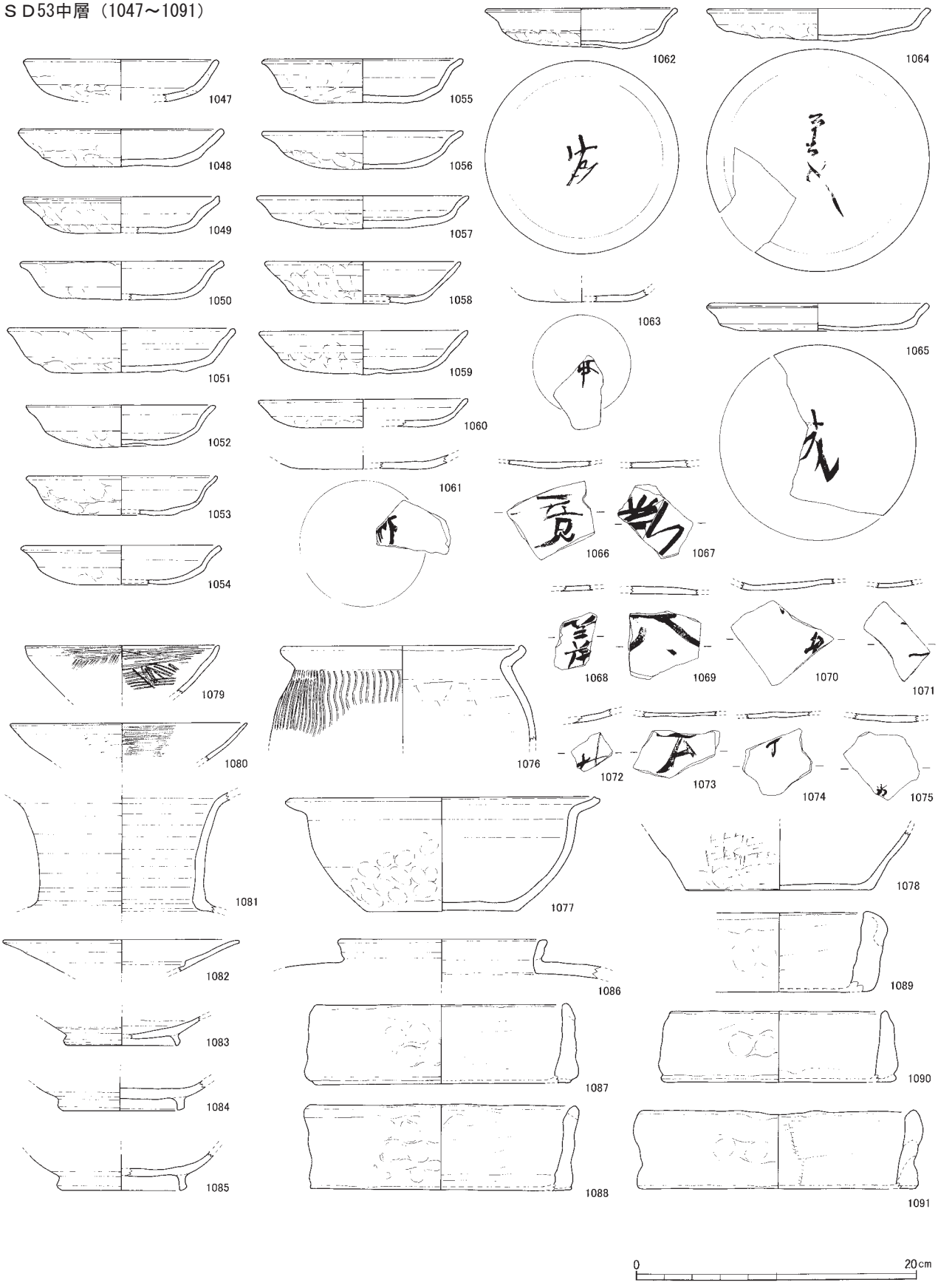
ＳＤ47最上層で出土した土師器や緑釉陶器、灰

ＳＤ53最下層・下層（1024～1046）



第61図　出土遺物実測図（31）７－４区（１：４）

ＳＤ53中層（1047～1091）



第62図　出土遺物実測図（32）７－４区（１：４）

釉陶器の多くは、９世紀第３四半期から第４四半期の様相を示している。しかしながら、最上層は平安時代後期のＳＫ48上面に堆積しており、出土遺物の中にはロクロ成形の土師器や、近江・美濃産の緑釉陶器を含むなど、斎宮編年第Ⅲ期第１段階に相当する平安時代後期の遺物が少なからず認められる。そのため、最上層そのものが堆積した時期は10世紀後半と考えられる。したがって、朝見遺跡がもっとも栄えた時期である９世紀末の遺物を、10世紀後半に投棄したことがわかる。

ＳＤ53最下層（1024～1046）　1024～1029・1032～1034は土師器坏。1024はやや古い様相を示すもの。1030・1031は土師器椀である。1035～1038は土師器皿。1032～1034・1038～1041は墨書された坏もしくは皿で、1032は坏部外面に文字が書かれていることが特筆される。1034は「官」、1038・1040は「成」の可能性が高い。1039は「業」であろうか。1042は土師器甕、1043は土師器鉢である。

1044～1046は灰釉陶器で、1044は瓶、1045・1046は椀である。1046は墨書土器で、底部外面に墨書「＃」（ドーマン）が書かれている。ＳＤ53最下層の時期は、斎宮編年第Ⅱ期第３段階、樽崎・斎藤編年黒笹90号窯式期にあたる９世紀末頃である。

ＳＤ53中層（1047～1091）　1047～1063は土師器坏で、1047はやや古い様相を示す。1048～1057は斎宮編年第Ⅱ期第３段階、1058・1059は同第４段階に相当する。1060・1064・1065は土師器皿。1061～1075は墨書土器である。1062は「官」、1065は「成」、1066は「貢」と釈読されるが、他の遺物は欠損やかすれで釈読できない。1067・1068は「衞」の一部である可能性が高い。

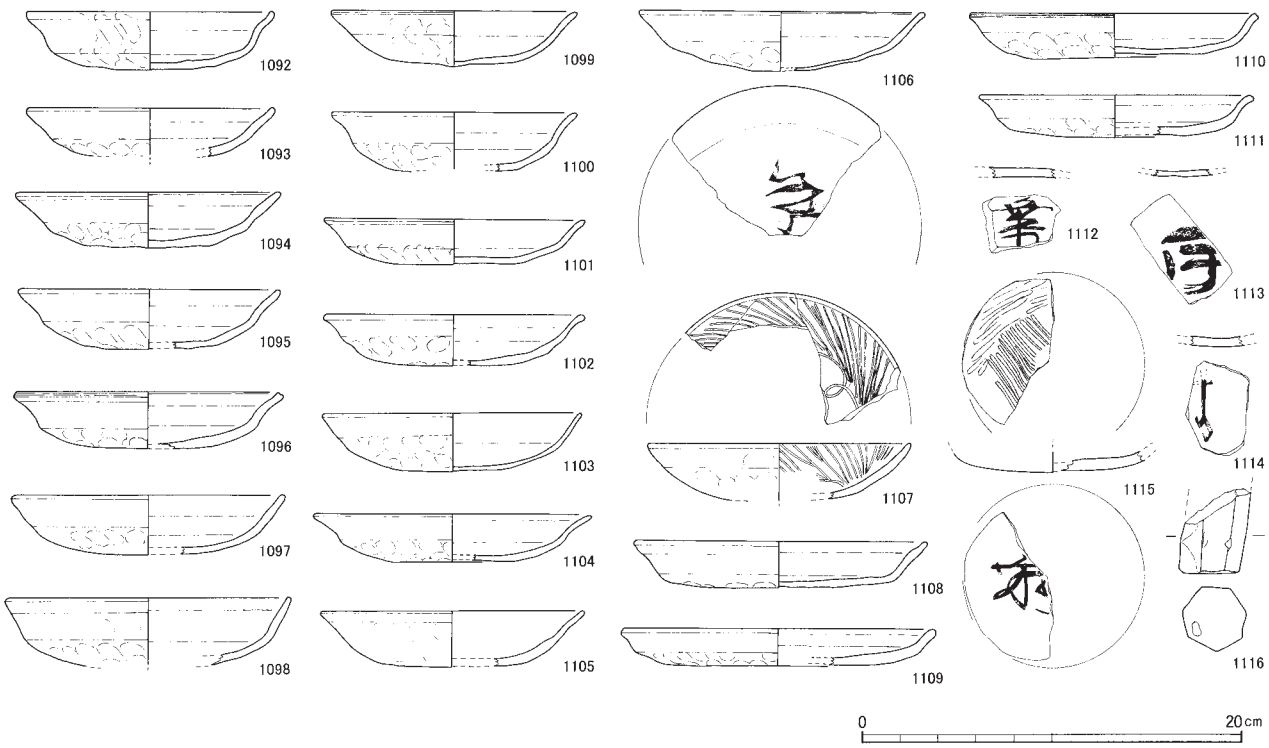
1079･1080は黒色土器椀である。1076は土師器甕、1077は土師器鉢である。

1081は須恵器壺の頸部である。1082～1086は灰釉陶器。1082は段皿で、内面に刷毛塗りの釉が認められる。1083～1085は三日月高台を有する樽崎･斎藤編年黒笹90号窯式期のもの。1086は短頸壺。1087～1091は志摩式製塩土器で、1088～1091の胴部内面には板ナデの痕跡が認められる。

ＳＤ53中層の時期は、最下層とほぼ同じか、それよりやや時期が下る10世初頭頃と考えられる。

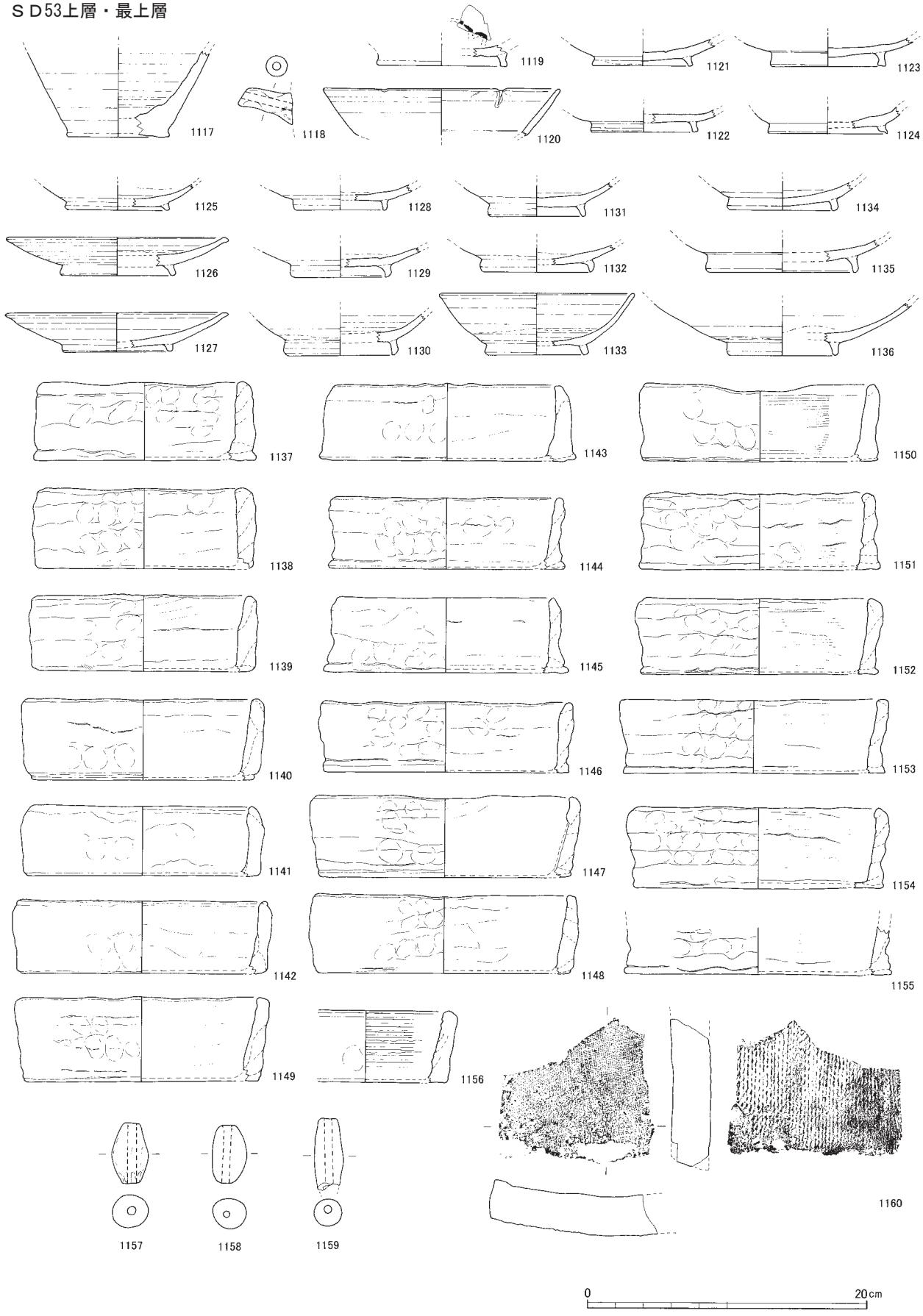
ＳＤ53上層（1092～1160）　1092～1106は土師器坏。

ＳＤ53上層・最上層（1092～1160）



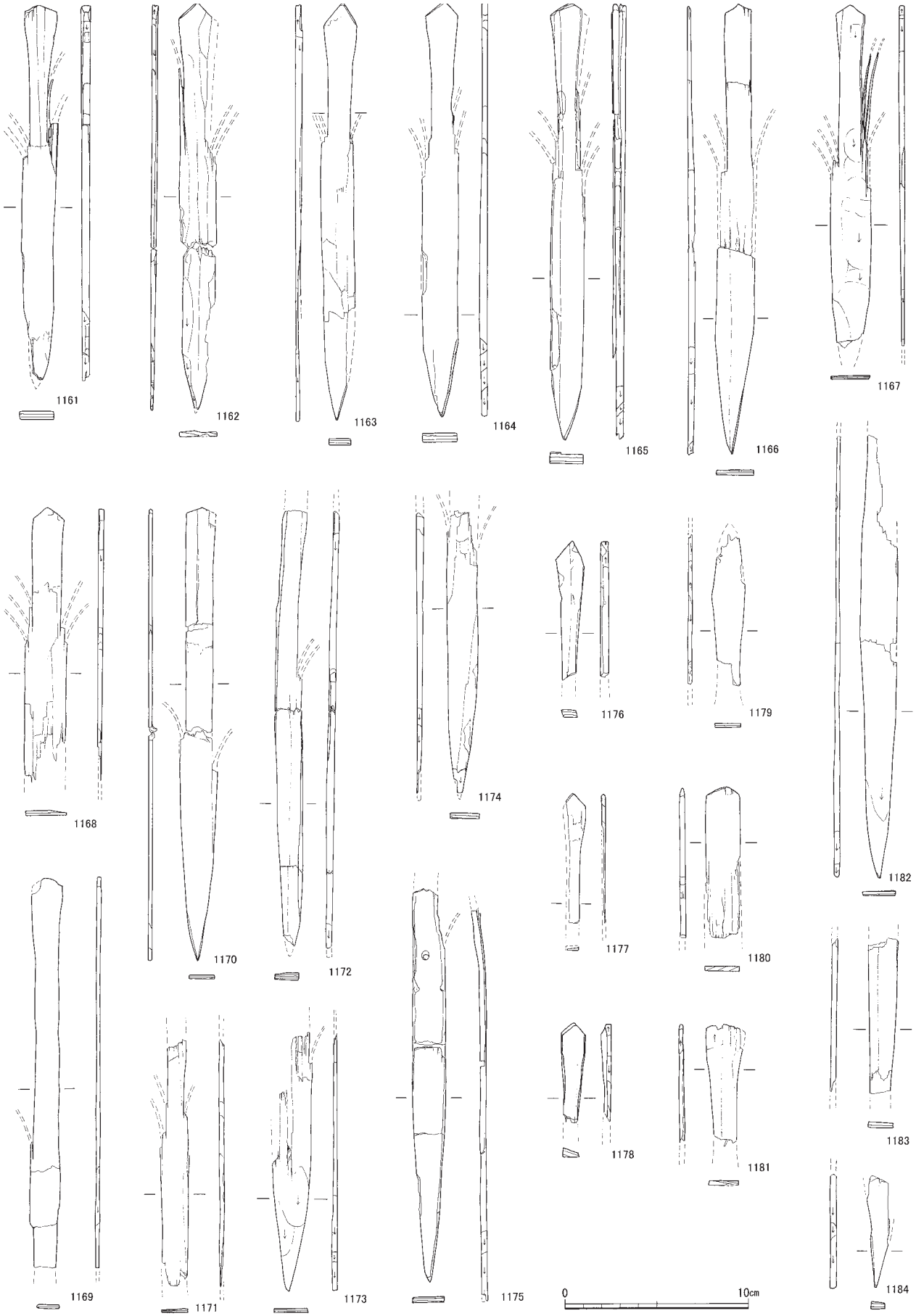
第63図　出土遺物実測図（33）７－４区（１：４）

ＳＤ53上層・最上層



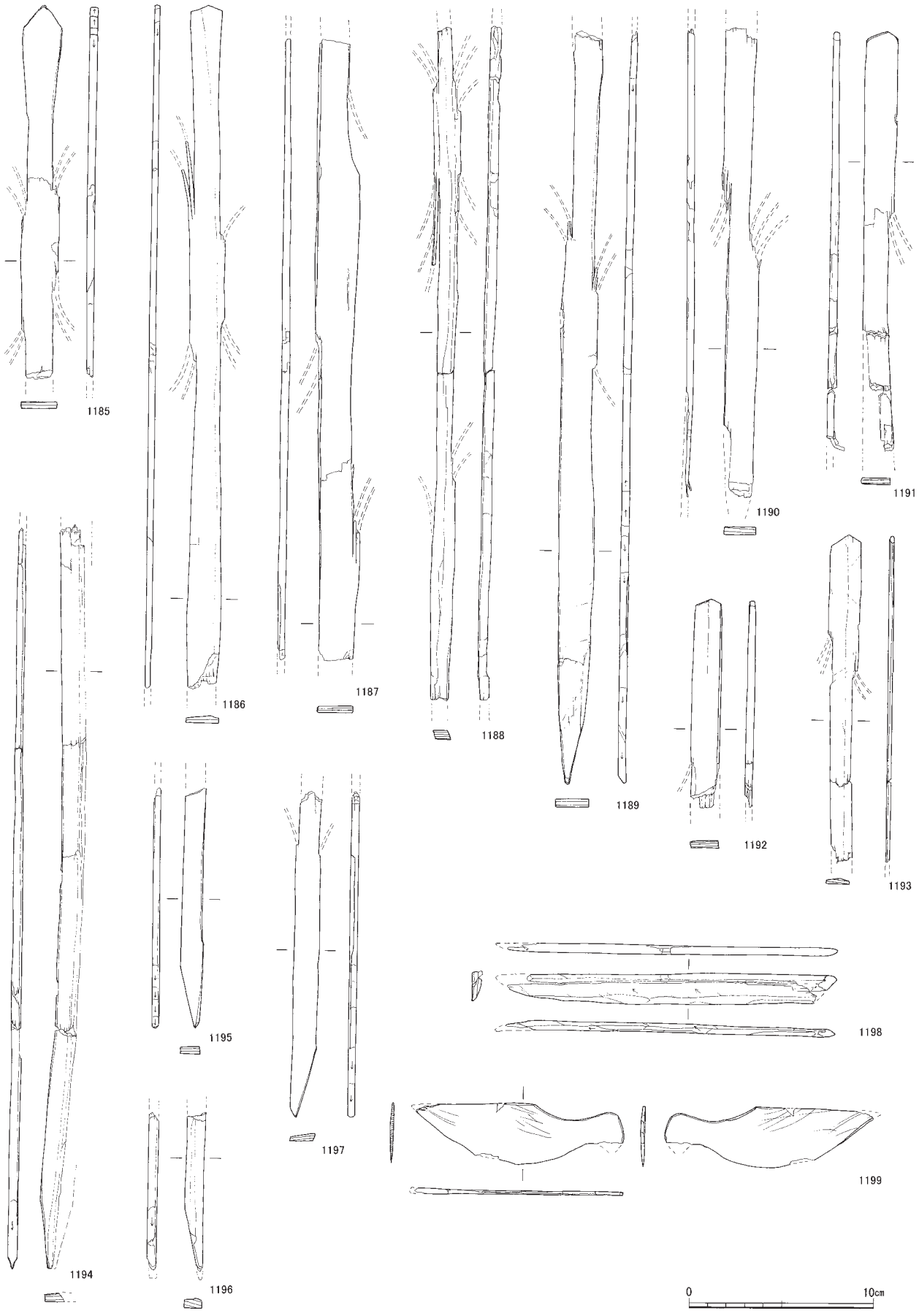
第64図　出土遺物実測図（34）７－４区（１：４）

ＳＤ47・ＳＤ53木器類（1161～1212）



第65図　出土遺物実測図（35）ＳＤ47・ＳＤ53木器類①（１：３）

ＳＤ47・ＳＤ53



第66図　出土遺物実測図（36）ＳＤ47・ＳＤ53木器類②（１：３）

1106 は底部に墨書が認められるが、釈読はできなかった。1107 は暗文土師器の坏。1108 ～ 1111 は土師器皿。1112 ～ 1114 は土師器坏もしくは皿の底部で、外面に墨書が認められ、1112 は「第」の可能性がある。1115 は黒色土器椀で、底部の墨書は「衙」の一部であろうか。1116 は土師質で、外面をケズリ調整で面取りし柱状にしており、盤の脚部と考えられる。

1117 は須恵器の瓶である。1118 ～ 1124 は緑釉陶器である。1118 は近江産の水注瓶で、時期は 10 世紀中頃。1119 ～ 1123 は猿投窯産の椀で、時期は 9 世紀末頃である。1119 は明黄色の透明な釉がかかり、見込み部分に濃い緑で描かれた緑彩の花文がみられる。1020 は輪花が 1 ヵ所残存する。1124 は近江産の椀で、時期は 10 世紀中頃。1125 ～ 1136 は灰釉陶器で、1125 ～ 1127 は皿、1128 ～ 1136 は椀と考えられる。1125 は内面に刷毛塗りによる釉がみられる。いずれも樽崎・斎藤編年の黒笹 90 号窯式期のもの。

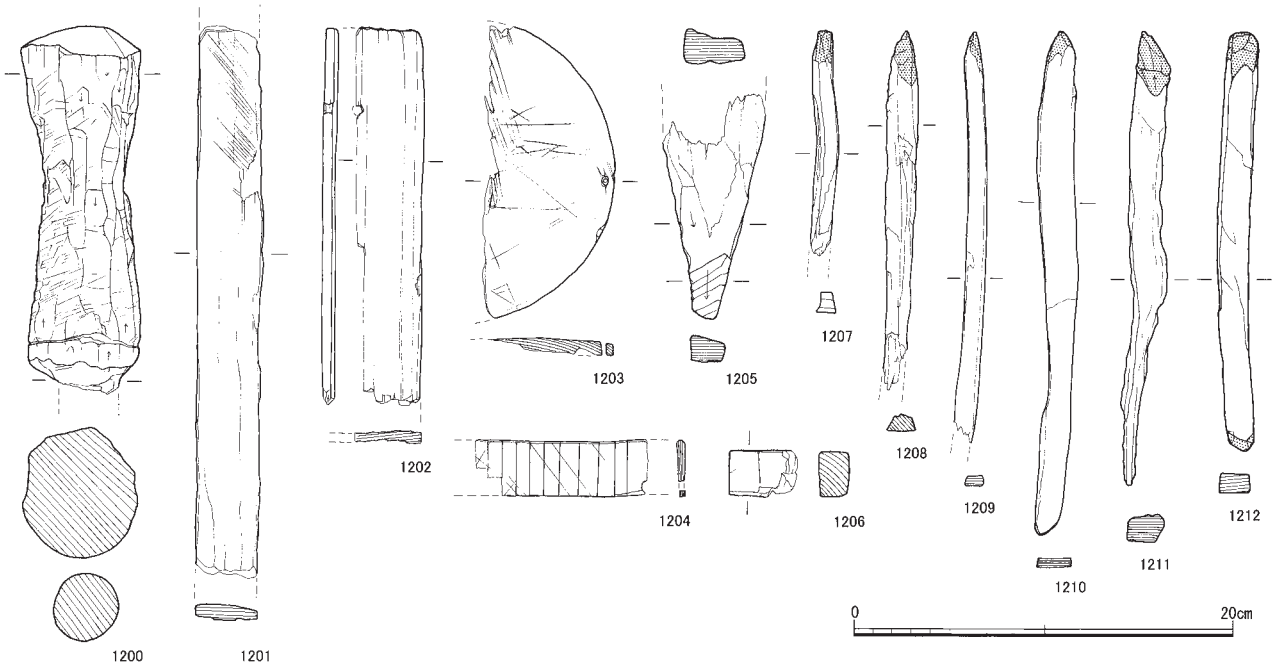
1137 ～ 1156 は志摩式製塩土器である。1137 ～ 1139 は径が狭く、やや厚い器壁を持つもの。1140 ～ 1147 の胴部は直立し、径は広い。1148 ～ 1156 は内面を板状もしくは刷毛状の工具で調整するもの。1157 ～ 1159 は土錘であるが、ＳＤ 47 最上層に比べ出土量は少ない。1160 は土師質の平瓦で、凹面布目、凸面縄目である。

ＳＤ 53 上層は、斎宮編年第Ⅱ期第３～第４段階に相当し、時期は９世紀末から 10 世紀前半頃。

ＳＤ 47・ＳＤ 53 木器類（1161 ～ 1212）　ＳＤ 47・ＳＤ 53 から出土した遺物をまとめて掲載した。これらは下層の粘土層からまとまって出土しており、時期は９世紀後半から 10 世紀初頭と考えられる。(11)

1161 ～ 1197 は斎串である。大溝出土斎串の厚さは 0.3 ～ 0.45cm で、ＳＥ 72 出土斎串に比べ分厚い造りとなっている。樹種はスギが主体であるが、ヒノキ属が３点、アスナロ属が１点含まれる。1161 ～ 1170 は上端を圭頭状にして下端を剣先状に作り、切り込みは側面を割裂くように上端木口から割れ目を入れるタイプ。これらは『木器集成図録－近畿古代編－』に記載された型式分類のＣⅣ型式に相当し、切り込みは左右２ヵ所以上行われる。1271 ～ 1275 は上端が欠損しているが、1161 と同様の形態になると推測される。1176 ～ 1181 は圭頭のみ、1182 ～ 1184 は下端のみ残存するが、これらもＣⅣ型式になる可能性が高い。ＣⅣ型式には、1261・1276 のように切り込みを内側に入れることによって圭頭状の上端からくびれを作るタイプと、1268・1280 のように上端から切

ＳＤ47・ＳＤ53



第67図　出土遺物実測図（37）ＳＤ47・53木器類③（１：３）

り込みをまっすぐ降ろすタイプがあるようであるが、型式差か制作者の差かは不明である。

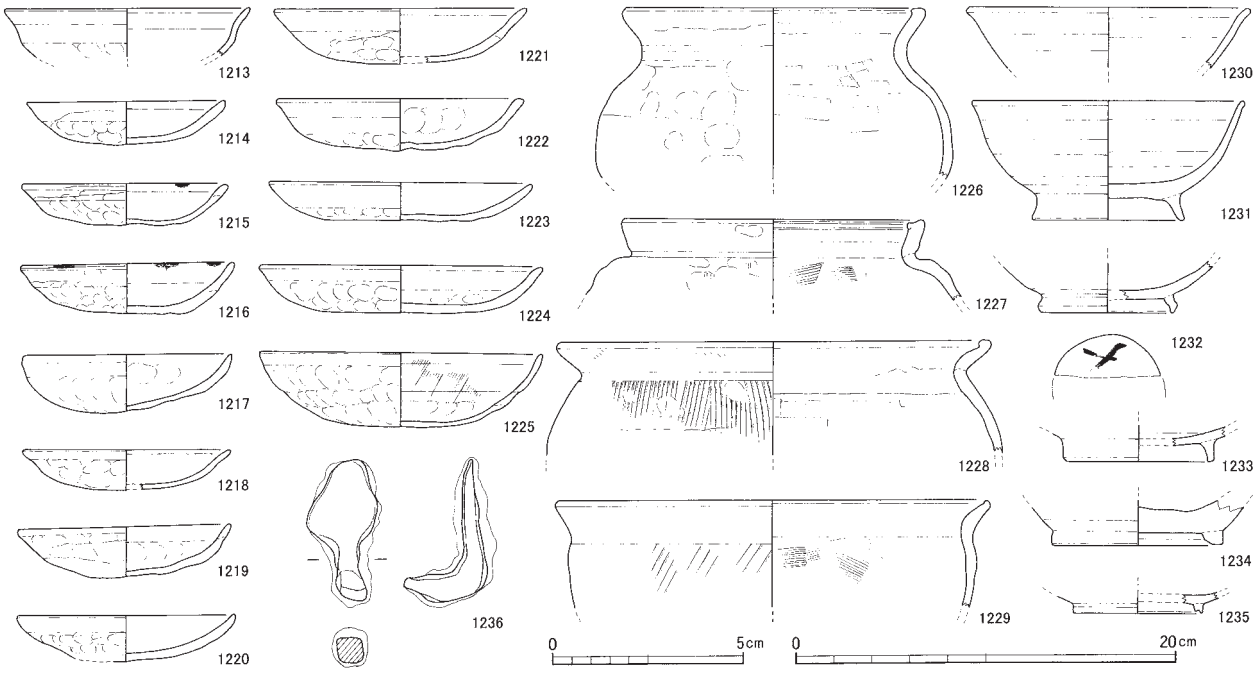
1185・1186は上端を圭頭状にし、おそらく下端は剣先状を呈し、切り込みが上下に伸びるＣⅤ型式である。ＣⅣ型式に比べ全長が長い傾向にある。1187～1190は、頭部は欠損するが1186と同じＣⅤ型式になるものと思われる。1191～1193は圭頭状の上端を有するＣ型式であるが、切り込みが下方に伸びるタイプ。1994～1997は下端のみ残存し、切先を一側面から鋭く斜めに切り落としている。

1298は刀子形木製品で、樹種はヒノキ属である。柄と切先は欠損している。刃部に向かって丁寧な加工が施されており、棟は平らに整形される。1299は鳥形木製品で、樹種はアスナロ属である。長さ11.2cm、厚み0.3cmと小型で薄く、手の平に乗るサイズである。背にあたる上端部分を平らに整形し、お腹にあたる下端部分は非常に薄く削り込んでいる。嘴は欠損する。両側面に羽根と尾羽を表現する細い線刻が確認される。

1200は砧で、柄は欠損する。側面に、使用時についたと考えられる擦痕が多くみられる。1201は板状製品で、丁寧に削られた平坦面に斜め方向の擦痕が認められる。1202も板状製品で、穿孔が残存する。1203・1204は曲物で、1203は底板、1204は側板である。1205は杭で、板状材の先端を丁寧に加工している。1206は用途不明であるが、他の材に比べ非常にきれいな造りをしている。1207～1212は火付け木、いわゆる「燃えさし」で、いずれも先端が炭化している。1207・1209・1212は刃物による切断加工が見受けられるが、1208・1211は自然木をそのまま使用している。

ＳＫ48（1213～1235）　1213～1224は土師器坏。1213はやや古い様相を示す。1214～1224は白っぽい胎土で、粘土紐の積み上げ痕が明確に確認できるものが多い。1225は椀状を呈し、内面に細かいハケ調整がみられる。1226～1228は土師器甕。1229は把手付鉢の口縁部であろうか。これら土師器の時期は、概ね斎宮編年第Ⅲ期第1段階に相当する。1230～1234は灰釉陶器。1231は厚手の器壁で腰が張る形態をしており、内面に自然降灰が認められ、樽崎・斎藤編年東山72号窯式期のもの。1232は同黒笹90号窯式期のもので、底部に墨書が認められる。1234は瓶で、高台内面を工具で削っている。1235は緑釉陶器皿である。1236は金属製品で、釘と考えられるが、先端は欠損している。

ＳＫ48の時期は、土師器と灰釉陶器から10世紀



第68図　出土遺物実測図（38）７－２区（1236は１：２、他は１：４）

後半頃と考えられる。

ＳＤ 49 下層（1237 ～ 1246） 1237 は土師器坏で、形状から斎宮編年第Ⅲ期第 1 段階頃か。1238 も土師器坏で、時期は不明であるが、底部に「業」の墨書が見られる。1239 は土師器皿で、底部の墨書は「籌」の一部と推測される。1240・1241 も墨書土器で、1240 は「葉」、1241 は「籌」であろうか。1242 は土師器鉢である。1243 はロクロ成形の土師器椀である。

1244 は猿投窯産の緑釉陶器で、時期は 9 世紀末頃。1245・1246 は灰釉陶器。1246 は三日月高台を有する樽崎・斎藤編年黒笹 90 号窯式期のもので、底部の墨書は「葉」の一部と推測される。

ＳＤ 49 下層の時期は、ロクロ土師器が出土していることから 10 世紀後半と考えられる。

ＳＤ 49 上層（1247 ～ 1278） 1247 ～ 1250 は土師器坏、1251・1252 は土師器皿である。白っぽい胎土にやや分厚い器壁が多く、斎宮編年第Ⅲ期第 1 段階に相当する。1250 の墨書は、「業」ないしはそれに類する文字と推測される。1253 は土師器の底部片で、墨痕が認められるが文字は釈読できない。1254・1255 はロクロ成形の土師器。1254 は椀もしくは小皿の底部、1255 は底部が厚く高く突出する小皿である。1256 は台付椀で、土師質の台部のみ残存する。1257 ～ 1259 は土師器甕。1259 の墨書は体部内面にみられることから、甕が割れてから書かれたものと推測されるが、文字かどうかの判別は難しい。

1260 ～ 1262 は須恵器。1260 は鉢で、体部外面にタタキ調整がみられる。1261・1262 は甕の口縁部で、猿投窯産の可能性がある。1263 ～ 1271 は灰釉陶器。1263 ～ 1265 は皿で、高台の形状からおおむね樽崎・斎藤編年黒笹 90 号窯式期と考えられる。1266 ～ 1270 は椀で、1270 の高台はやや新しい形状を呈する。1271 は瓶の底部で、内面に自然釉がみられる。1271 ～ 1273 は山茶碗の高台である。1271・1272 は尾張型の猿投ないし知多産で、藤澤編年第 5 型式。1273 は渥美型で藤澤編年第 5 型式。

1275 は土師質の丸瓦で、凹面布目、凸面縄目が観察される。1276・1277 は土錘で、どちらも丸みを帯びたもの。1278 は土馬の体部片である。体部は片側のみ残存し、頭部および両手足は欠損している。剥離面から、体部は中空であったことが推測される。

ＳＤ 49 上層は、灰釉陶器は 9 世紀末の様相を示しているものの、土師器類が 10 世紀後半の様相を示していることから、下層と同じく 10 世紀後半に堆積したと考えられる。ただし、山茶碗が出土していることから 12 世紀後半段階でもわずかな流れが残存していたか、上面が窪地であったことが推測される。

ＳＤ 52（1279 ～ 1338） ＳＤ 52 の出土遺物は、1279 ～ 1335 は土製品、1336・1337 は石製品、1338 は木製品である。遺物のほとんどが、最下層の砂層から出土している。

1279 ～ 1283 は土師器坏で、時期は斎宮編年第Ⅱ期 4 段階頃と考えられる。1284 ～ 1286 の土師器皿も同時期である。1287 の土師器小皿と、1288 のロクロ成形の土師器椀は、斎宮編年第Ⅲ期第 2 段階頃であろうか。1289 ～ 1296 は土師器甕で、口縁端部を丸くおさめる平安時代後期のもの。

1299・1300 は緑釉陶器。1299 は猿投窯産の瓶である。体部外面に陰刻花文が見られ、時期は 9 世紀末頃。1300 の時期は 10 世紀初頭である。1301 ～ 1303 は須恵器。1301・1302 は坏で、1302 は美濃須衛窯産。1303 は壺の高台部である。1303 は壺の高台部である。

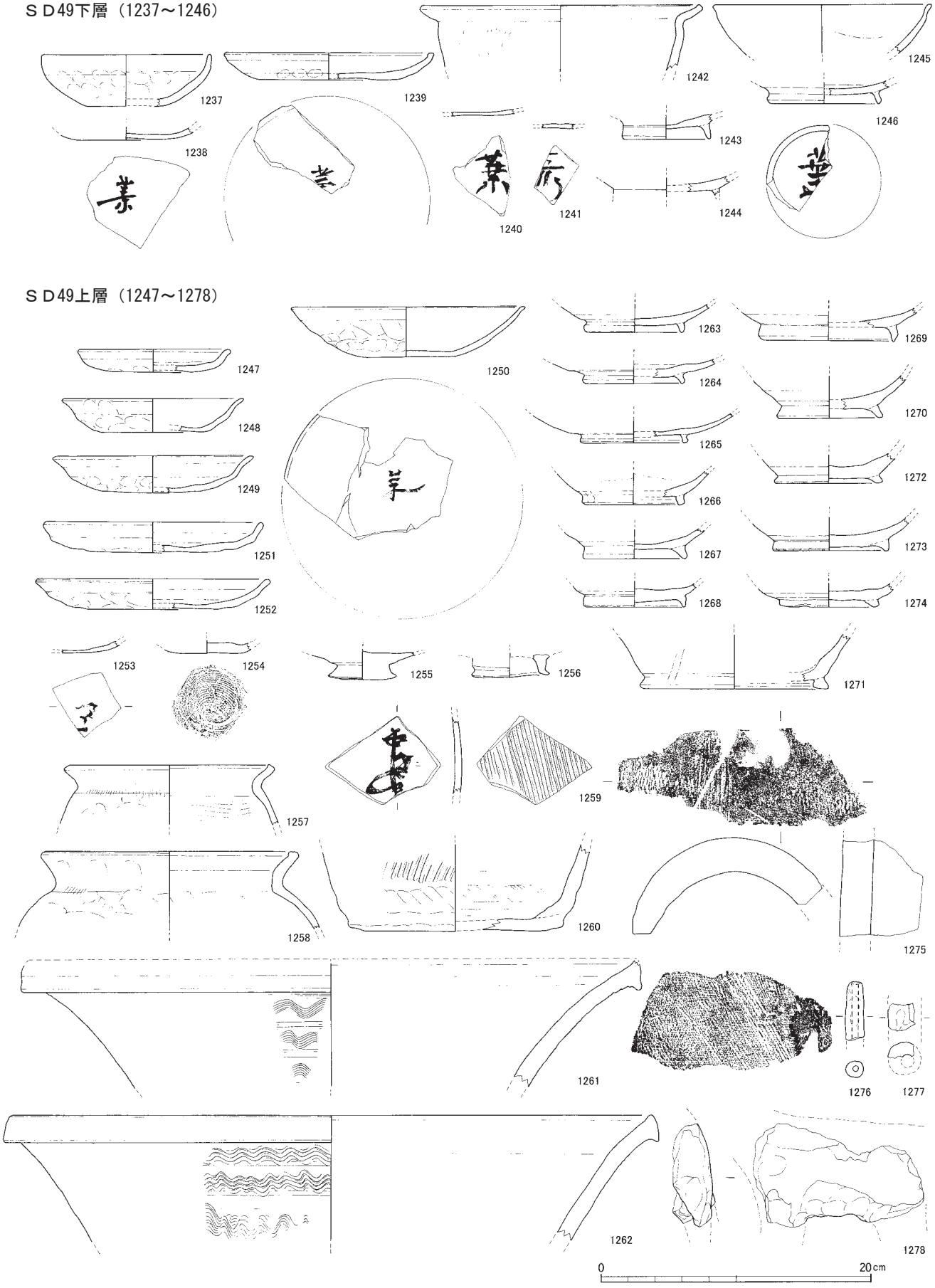
1304 ～ 1316 は灰釉陶器。1304・1305 は瓶、1306 は三足盤の可能性があるもので、脚が 1 ヵ所残存する。1307 は樽崎・斎藤編年黒笹 90 号窯式期の皿で、内面の自然降灰が顕著である。底部に墨書が見られ、「籌」の一部である可能性がある。1308 ～ 1316 は椀で、時期は 1308 ～ 1314 が黒笹 90 号窯式期、1315・1316 が百代寺窯式期と考えられる。1308 は輪花が認められる。1309 は底部に細い線刻が書かれているが、意味は不明である。1315 は釉を漬け掛けした痕跡がみられる。1317 ～ 1324 は山茶碗。1317 ～ 1321 は渥美型で藤澤編年第 4 型式。1322・1323 は底部に籾殻圧痕が付着しており、尾張型の知多・猿投産で、藤澤編年第 4 型式。

1325 ～ 1331 は志摩式製塩土器である。1328・1329 は胴部内面に板ナデの痕跡が認められる。1332 ～ 1335 は土師質の土錘。比較的大きなものが多く、1335 はほぼ球体を呈し、重量は 44.02 ｇである。

1336・1337 は石製鋳具の丸鞆である。[12] 1336 は裏面に潜り穴が 2 ヶ所あるが、穴の配置は横一列というよりはやや斜め方向で規則性はなく、穴の向きも

ＳＤ49下層（1237～1246）

ＳＤ49上層（1247～1278）



第69図　出土遺物実測図（39）７－２区（１：４）

不揃いである。石材は瑪瑙[13]で、製作時期は平安時代。1337は滑石製。長方形の垂孔を裏側から見ると同心円状の削り込み擦痕が観察され、回転工具で裏面から垂孔を開けたことがわかる。丸鞆に孔をあけ３方に鋲穴をつける型式は正倉院宝物にあるような古いものであるが、作られた時期は平安時代と考えられる。[14]

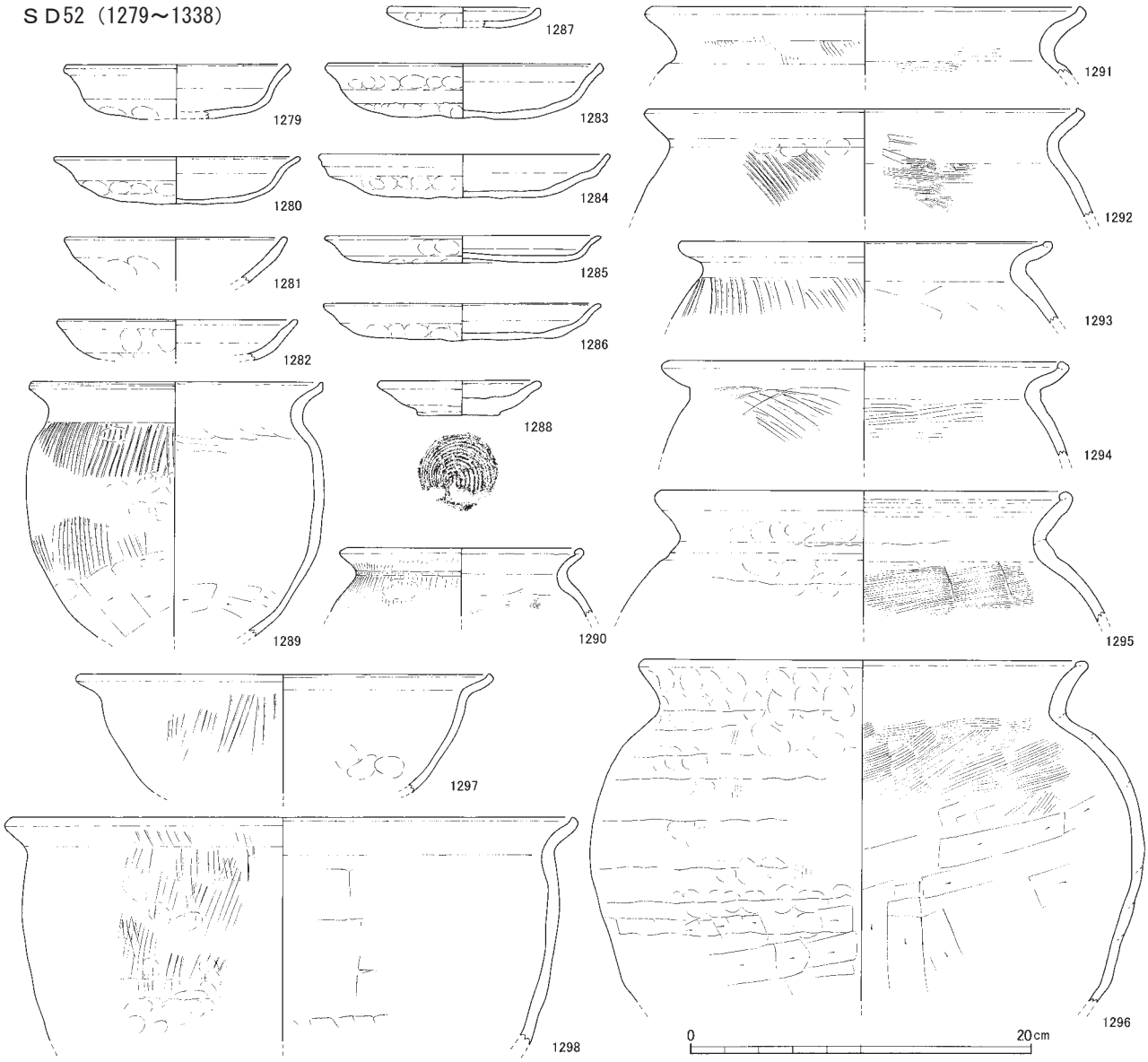
1338は板材である。元々は丁寧に加工してあったとみられるが、表面は摩耗しており手斧痕は観察できない。スギやヒノキを多く用いる平安時代において、マツを用いていることが特筆される。

ＳＤ84(1339～1349)　1339～1341は土師器小皿で、斎宮編年第Ⅲ期第２段階のもの。1342～1345はロクロ成形の土師器。1342・1343は平底の椀、1344・1345は底部に糸切痕のある椀である。1346～1348は山茶碗。1346・1347が尾張型で、藤澤編年の第４型式。1348が渥美型で、藤澤編年の第５型式である。1349は大和型の瓦器椀。体部内外面のヘラミガキは密で、時期は11世紀後半頃であろうか。

ＳＤ84の時期は、出土遺物から11世紀前半から後半にかけてと考えられる。

ＳＤ85（1350）　1350は南伊勢系の土師器鍋で、外面に煤が付着している。時期は、17世紀代の近世と考えられる。

ＳＤ87（1351・1352）　1351は南伊勢系の土師器鍋で、伊藤編年のⅣｂ期に相当し、時期は16世紀代



第70図　出土遺物実測図（40）７－４区（１：４）

とみられる。1352は土師質の土錘である。

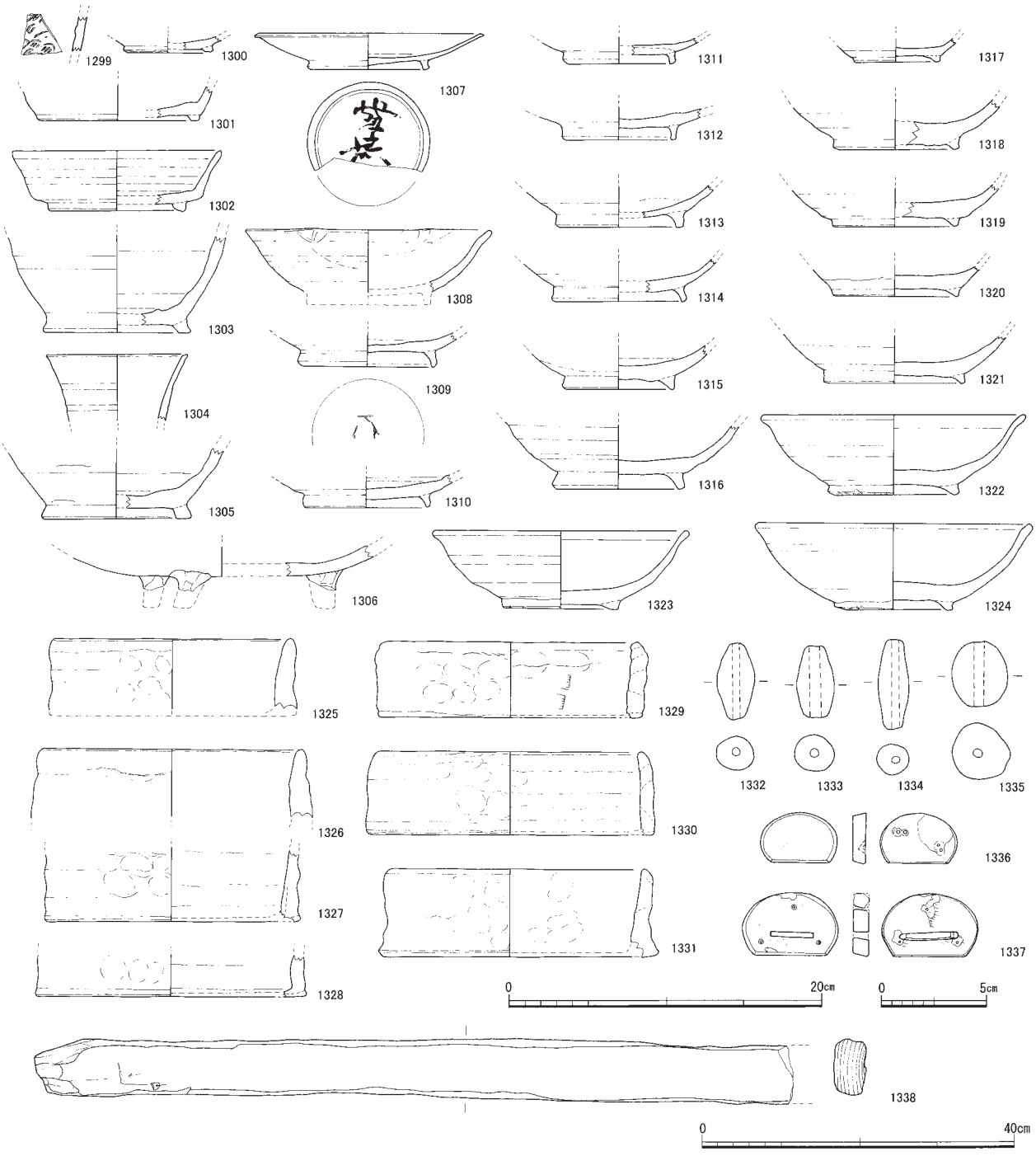
柱穴群（1353～1358）　7－2区で検出したピット出土資料である。

1353はJ－j3グリッドPit1出土の土師器坏で、斎宮編年第Ⅲ期第1段階のもの。

1354はJ－j12グリッドPit2出土の灰釉陶器皿で、樽崎･斎藤編年黒笹90号窯式期に相当する。このピットは、掘立柱建物SB46を構成するものである。

1355～1358はJ－j11地区Pit1出土資料。いずれも志摩式製塩土器ばかりのため、SD47最上層に製塩土器が多量投棄された際にピット内に入り込んだものと思われる。

7－4区包含層（1359～1381）　7－4区SD53南側の遺構検出面直上に堆積した炭層から出土した遺物群である。1359は土師器皿で、時期は9世

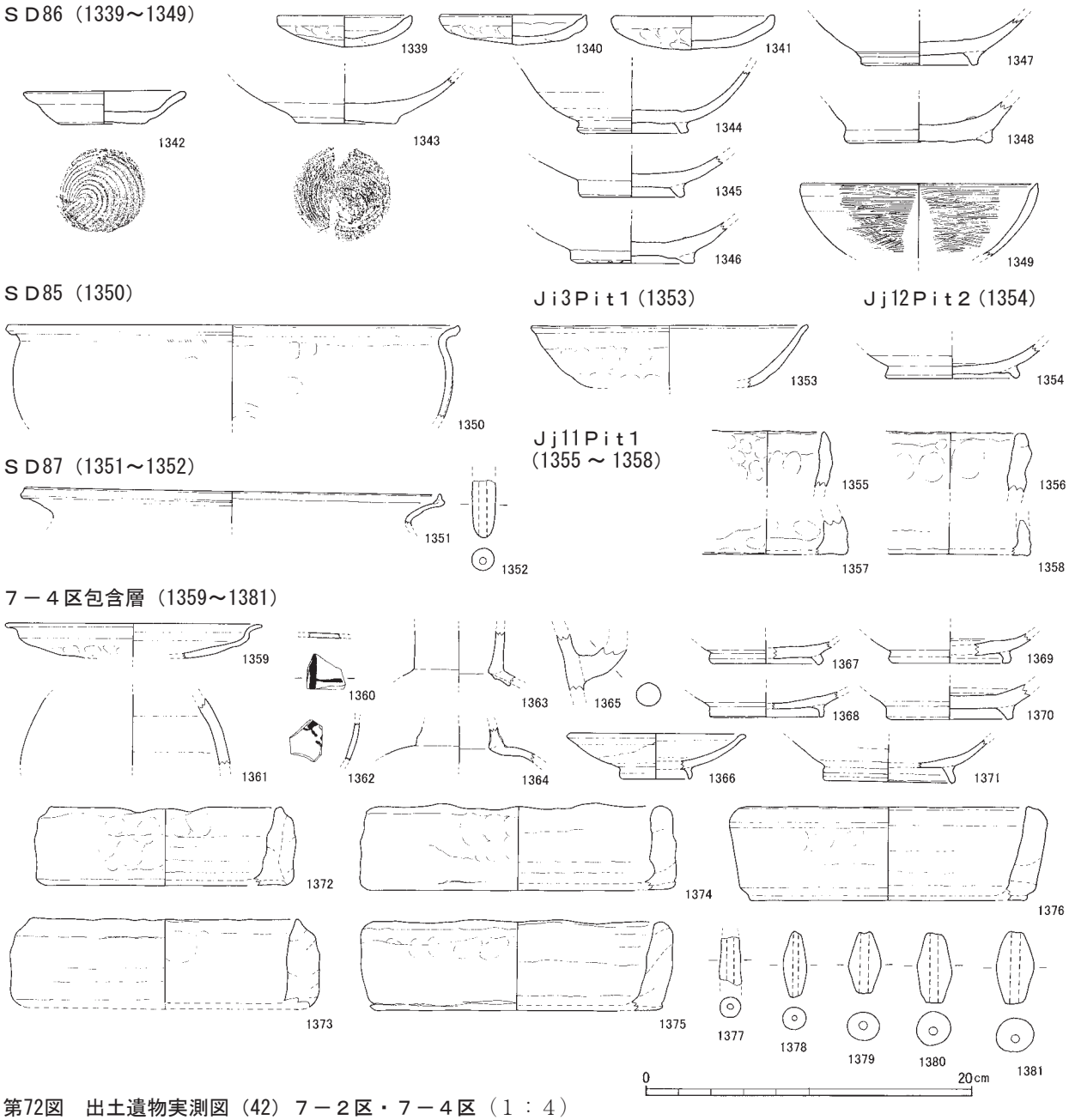


第71図　出土遺物実測図（41）7－4区（1336・1337は1：3、1338は1：8、他は1：4）

紀後半。1360 は土師器坏もしくは皿の底部で、墨書がみられるが文字は不明である。1361 は猿投窯産の緑釉陶器瓶で、時期は 9 世紀後半である。1362 も猿投窯産で、緑釉緑彩陶器の椀である。おそらく花文を描いていたものと推測され、時期は 9 世紀末頃。1363 ～ 1371 は灰釉陶器。1363・1364 は小型の瓶類、1365 は瓶の把手部分。1366 は皿。1367 ～ 1371 は皿もしくは椀で、高台の形状から樽崎・斎藤編年黒笹 90 号窯式期であろうか。1372 ～ 1376 は志摩式製塩土器。胴部の器壁が厚く、器高が低いものが多い。1376 は胴部内面に板ナデの痕跡が認められる。1377 ～ 1381 は土師質の土錘で、細く短いタイプと、中央に緩やかに稜を持つタイプに分類される。

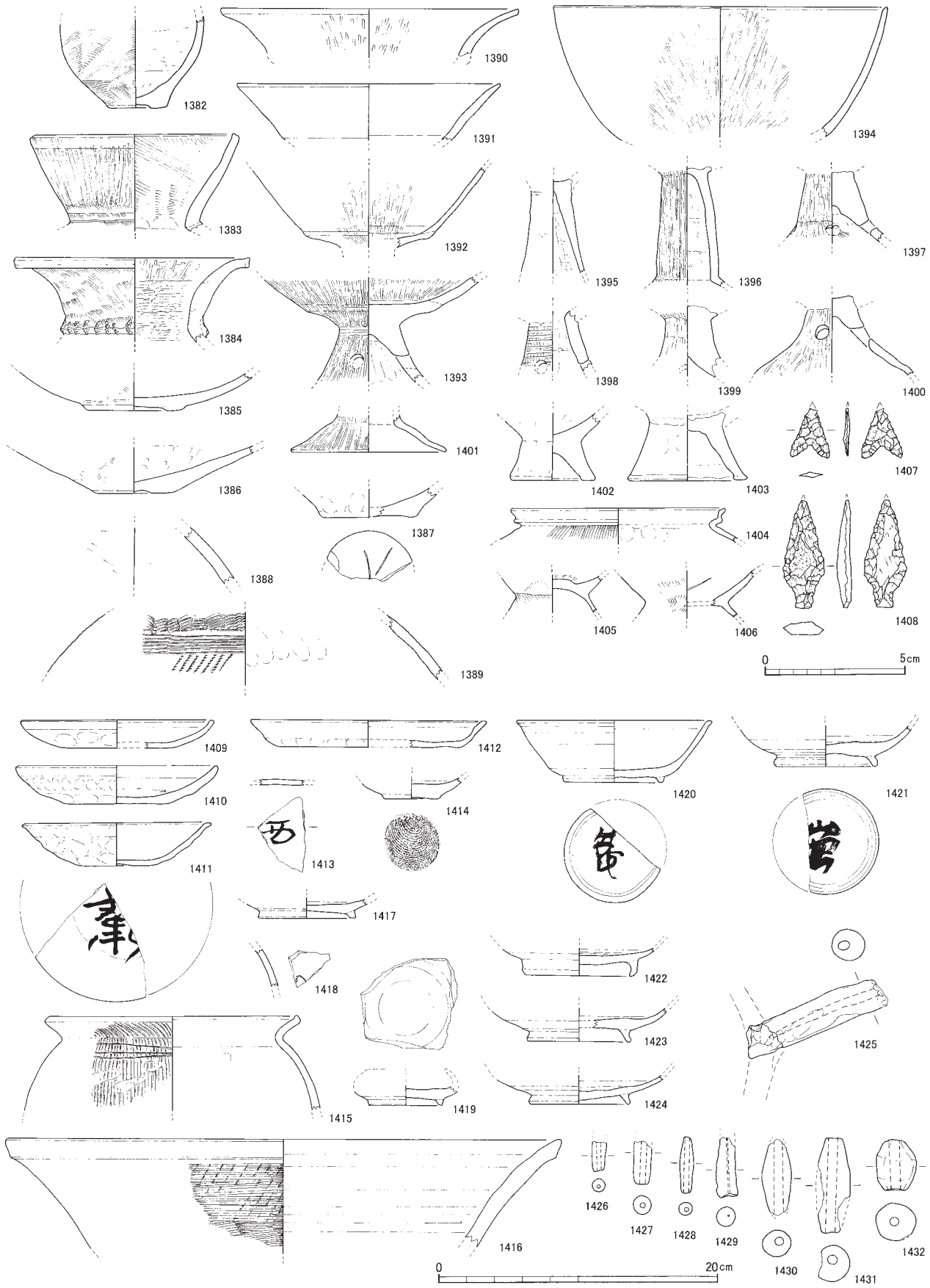
７－２区・７－４区その他（1382 ～ 1432） 遺構に伴わないものや廃土採集資料を「その他」とした。出土した地点は遺物観察表を参照されたい。

1382 ～ 1406 は弥生時代後期から古墳時代初頭の土器群である。1382 ～ 1389 は壺。1382 は小型の壺で、体部外面に粗いハケ調整が見られる。1383 の口縁部は外面に細かいタテミガキが施される。1384 は口縁部で、頸部外面に巡る貼付突帯に、櫛による刺突が施される。1385 ～ 1387 は底部である。1387



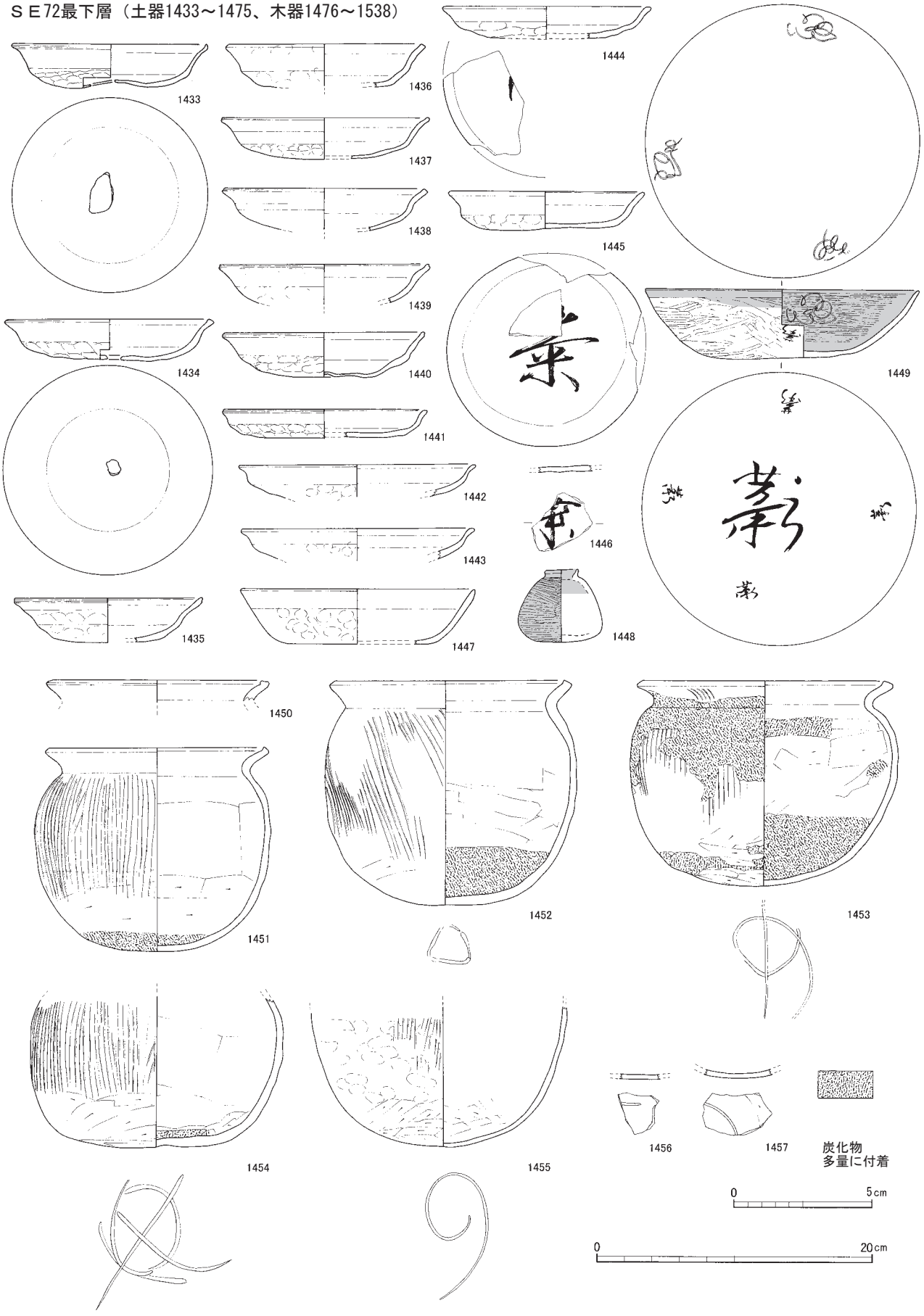
第72図　出土遺物実測図（42）７－２区・７－４区（１：４）

７－２区・７－４区その他（1382～1432）



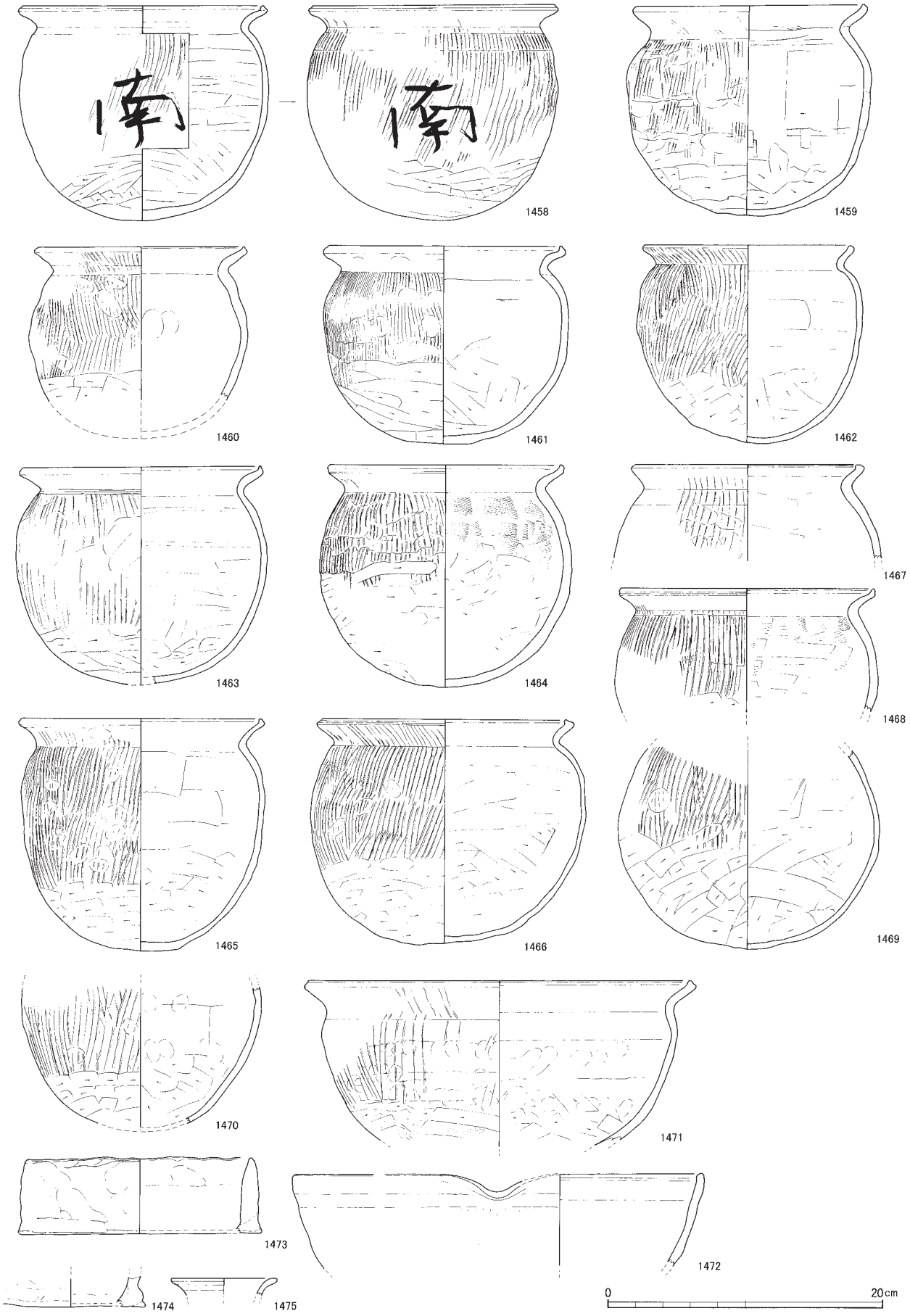
第73図　出土遺物実測図（43）７－２区・７－４区（1407・1408は１：２、他は1：４）

ＳＥ72最下層（土器1433～1475、木器1476～1538）



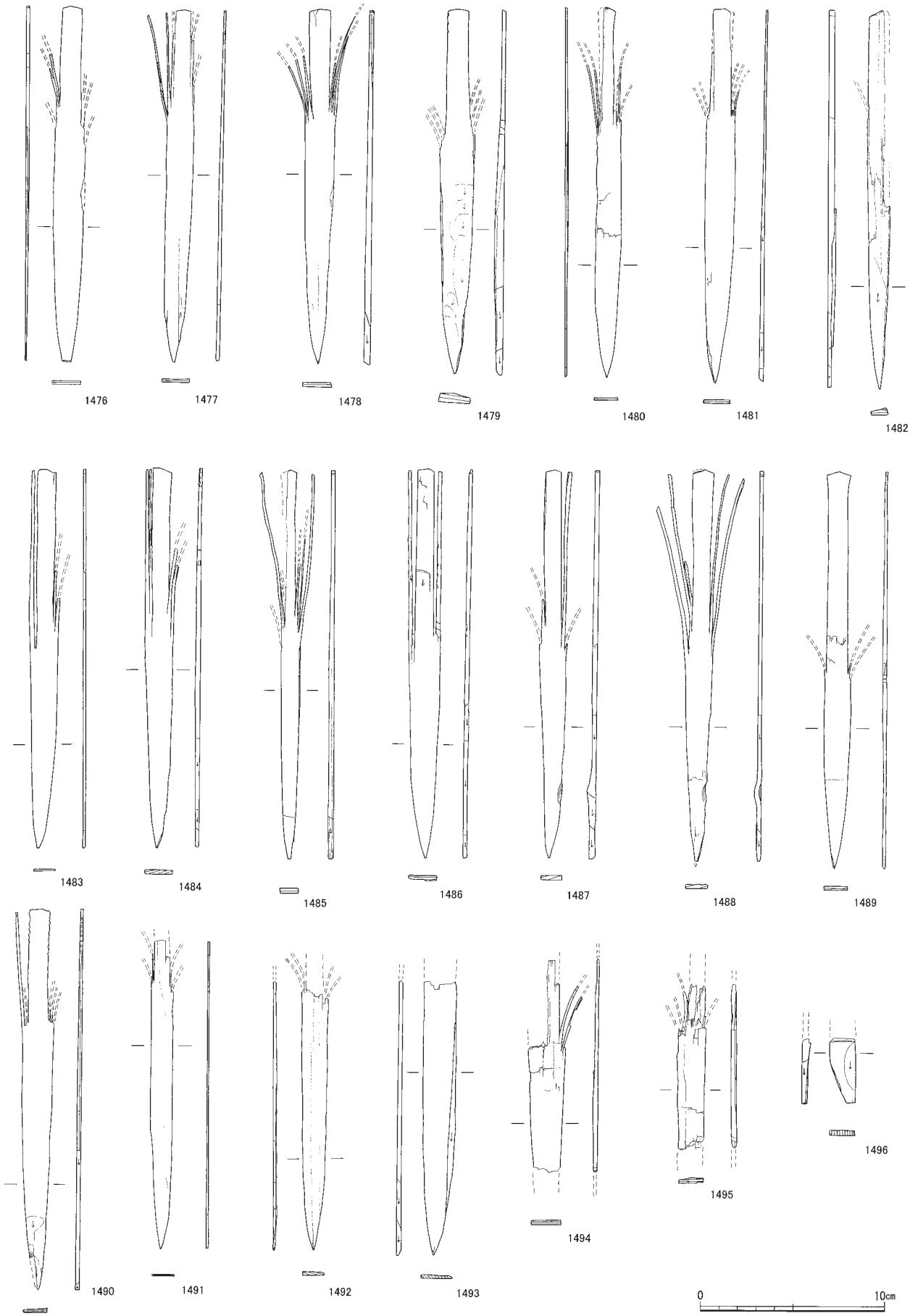
第74図　出土遺物実測図（44）７－５区（1488は１：２、他は１：４）

ＳＥ72最下層



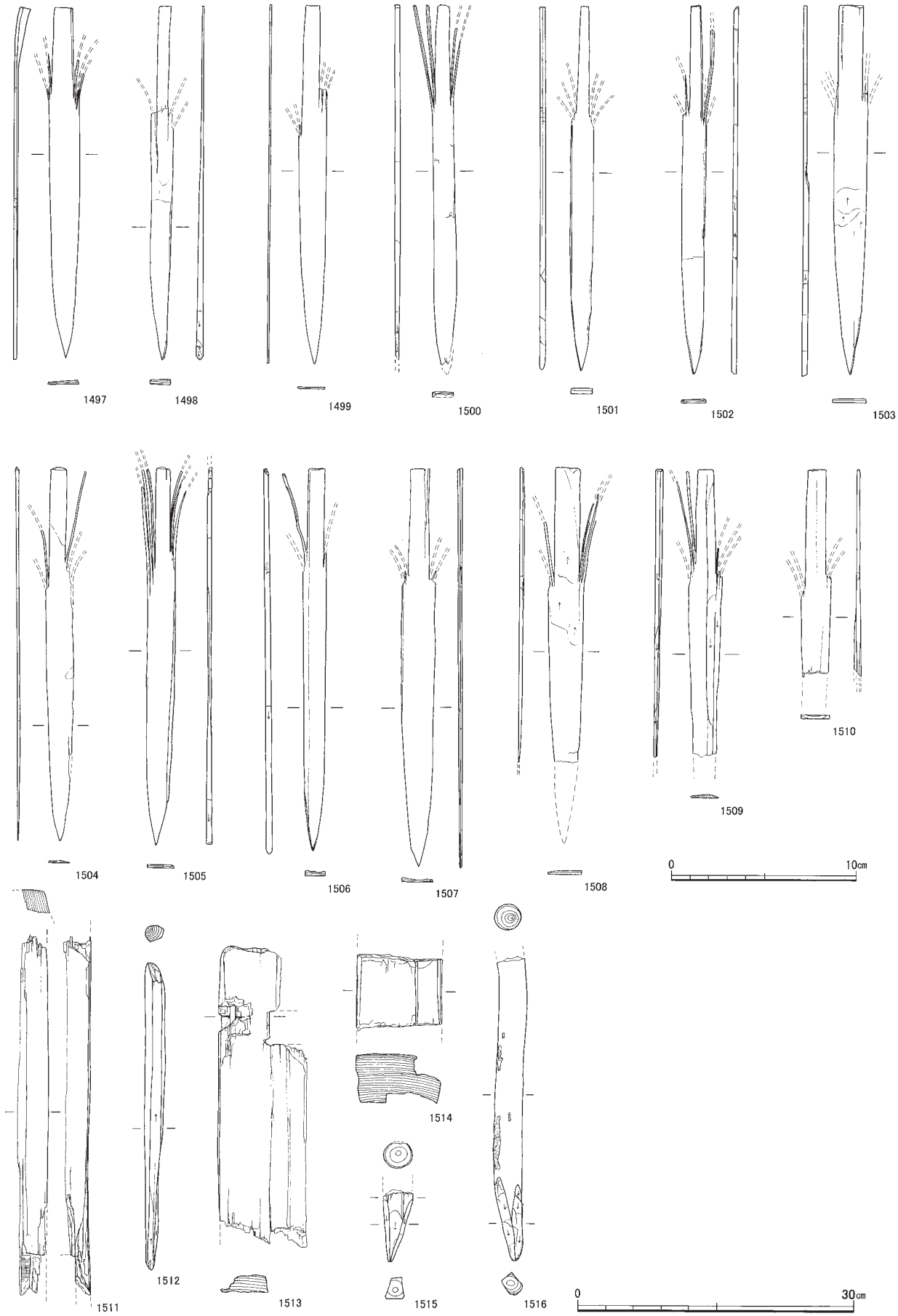
第75図　出土遺物実測図（45）７－５区（１：４）

ＳＥ72最下層



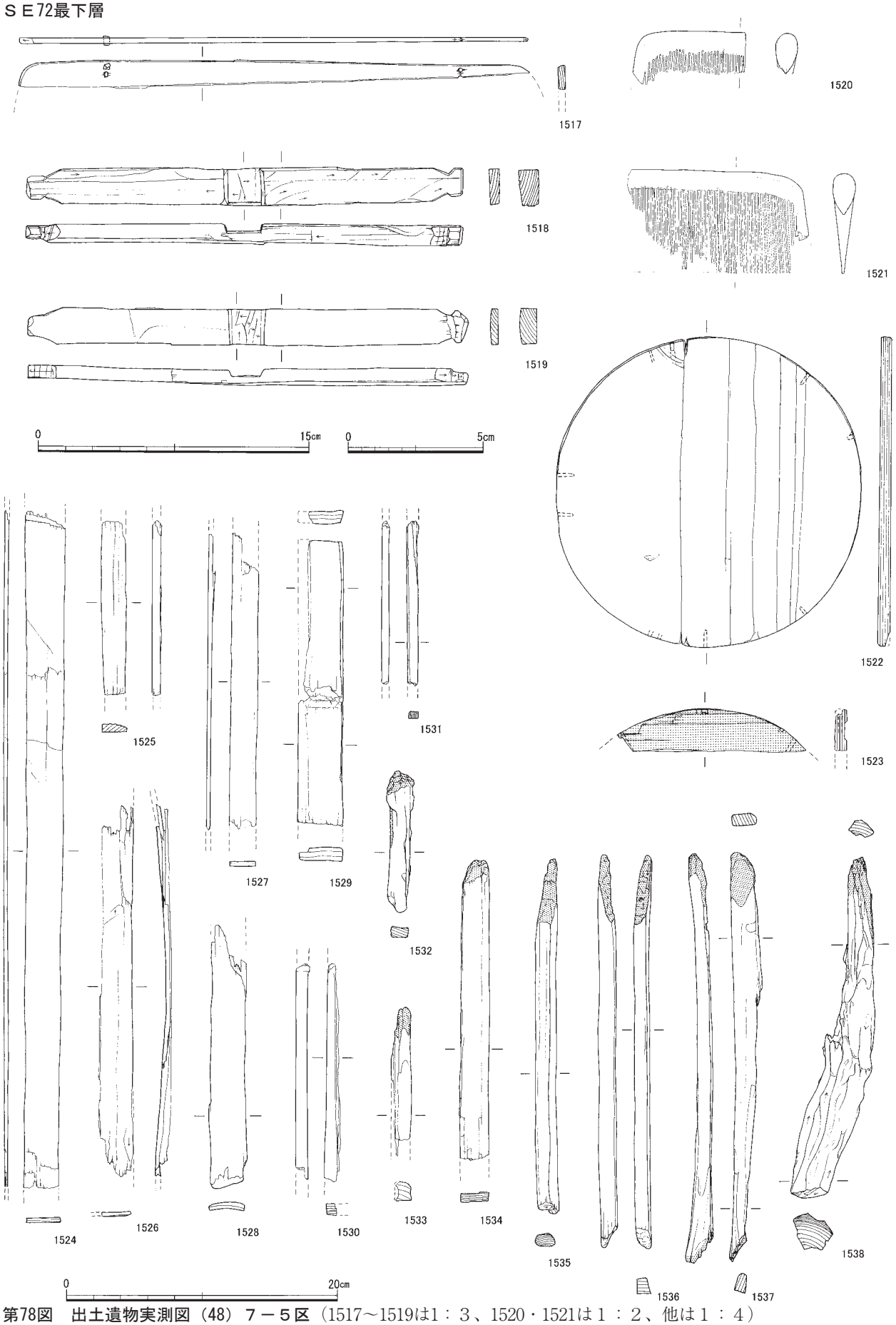
第76図　出土遺物実測図（46）７－５区（１：３）

ＳＥ72最下層



第77図　出土遺物実測図（47）７－５区（1497～1510は１：３、他は１：４）

ＳＥ72最下層



第78図　出土遺物実測図（48）７－５区（1517～1519は1：３、1520・1521は１：２、他は１：４）

の形状はやや古い様相を示す底部で、底部にヘラ記号が見られる。1389は肩部で、外面に上から櫛状工具による波状文・直線文・刺突文見みられる。

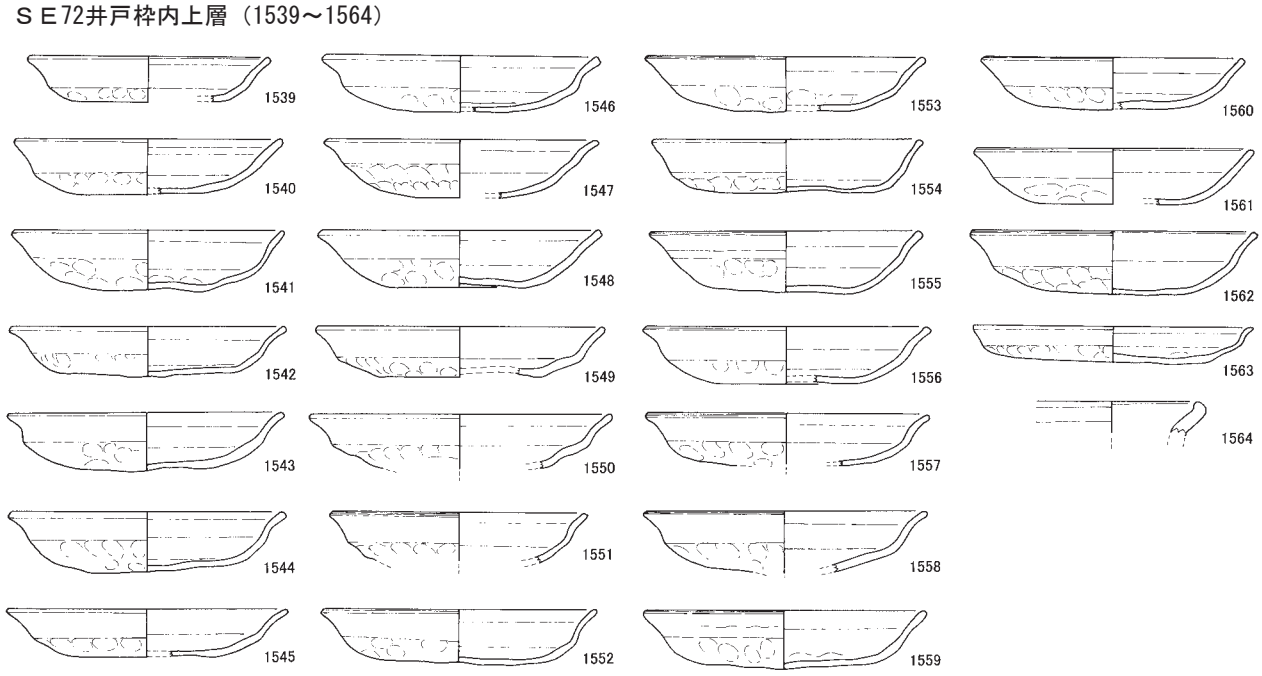
1390～1400は高坏。1390・1391は山中式併行期の坏部上半部で、内外面はタテミガキ調整である。1393・1394は深い椀状の坏部をもち、時期は廻間式Ⅰ式期に併行する。1395～1400は脚柱部。1398は脚柱部外面に櫛描直線文が施される。1400の脚柱部は内湾傾向を示し､廻間Ⅰ式期に併行するもの。1401は脚付壺の脚部であろうか。

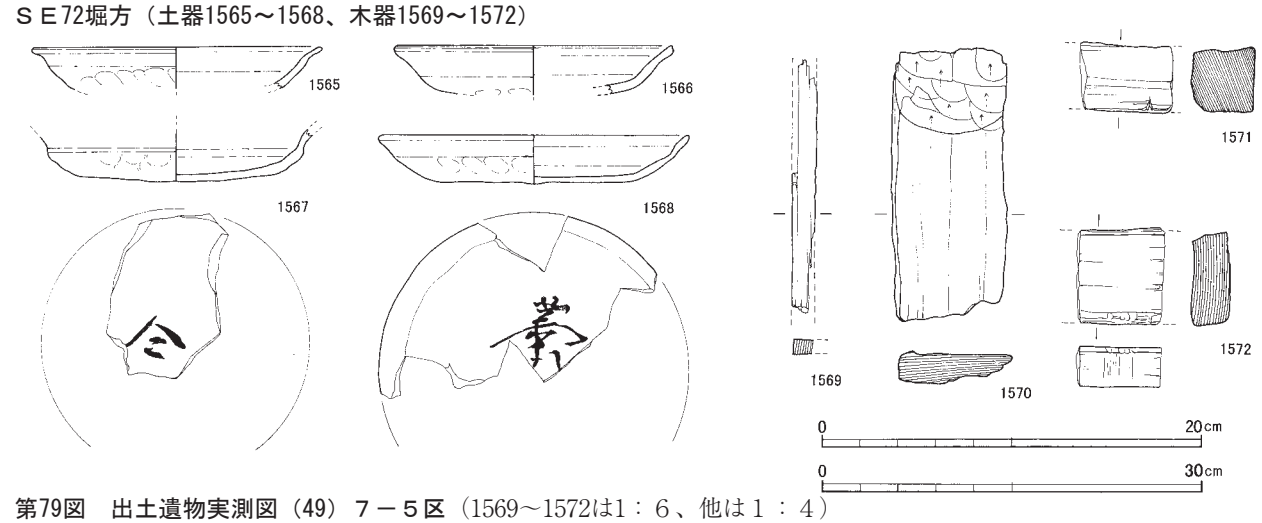
1402・1403は台付甕の脚台部で、弥生時代後期前半のもの。1404～1406はＳ字甕のＢ類である。

1407・1408は石鏃。1407は凹基無茎式で、時期は縄文時代であろうか。石材はサヌカイトで、重量は0.34ｇである。1408は有茎石鏃で、剥離面が大きく粗雑なつくりであることから、時期は弥生時代中期頃と考えられる。石材は二上山サヌカイトで、重量は2.62ｇである。

1409～1431は９世紀後半から11世紀前半頃の遺物である。1409～1411は土師器坏。1411は斎宮編年第Ⅱ期第４段階に相当し、底部の墨書は「衞」の一部と考えられる。1412は土師器皿。1413は土師器坏もしくは皿の底部で外面に「西」の一字がみられる。1414はロクロ成形の土師器で、底部に回転糸切痕が残る。1415は土師器甕である。

1416は須恵器の甕で、口縁部外面をハケ調整し





第79図　出土遺物実測図（49）７－５区（1569～1572は1：６、他は１：４）

ＳＥ72井戸枠材（1573～1618）　井戸枠縦板北面①

第80図　出土遺物実測図（50）７－５区（１：10）

ＳＥ72　井戸枠縦板北面②

第81図　出土遺物実測図（51）７－５区（１：10）

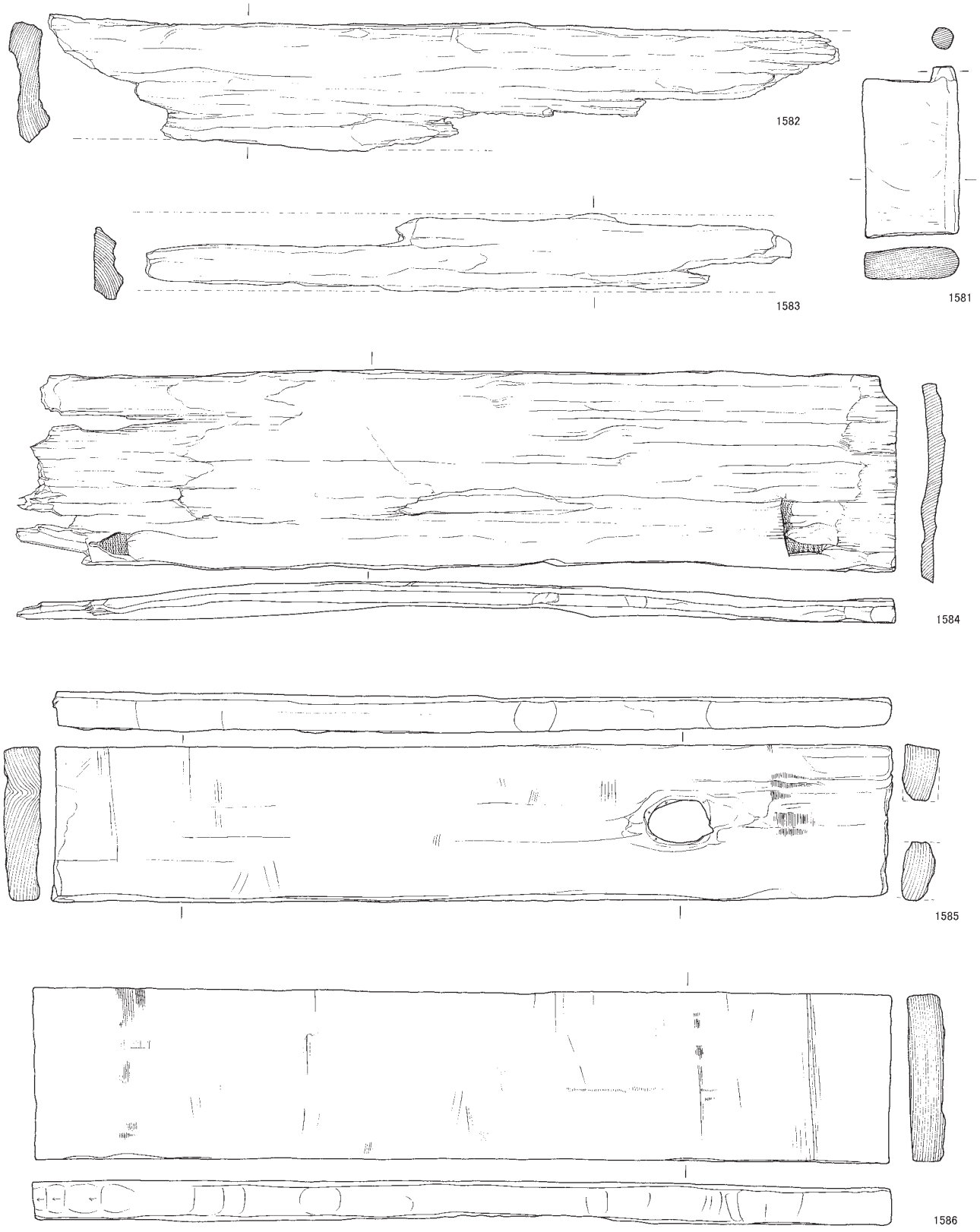
ＳＥ72　井戸枠縦板南面①

第82図　出土遺物実測図（52）７－５区（１：10）

ＳＥ72　井戸枠縦板南面②

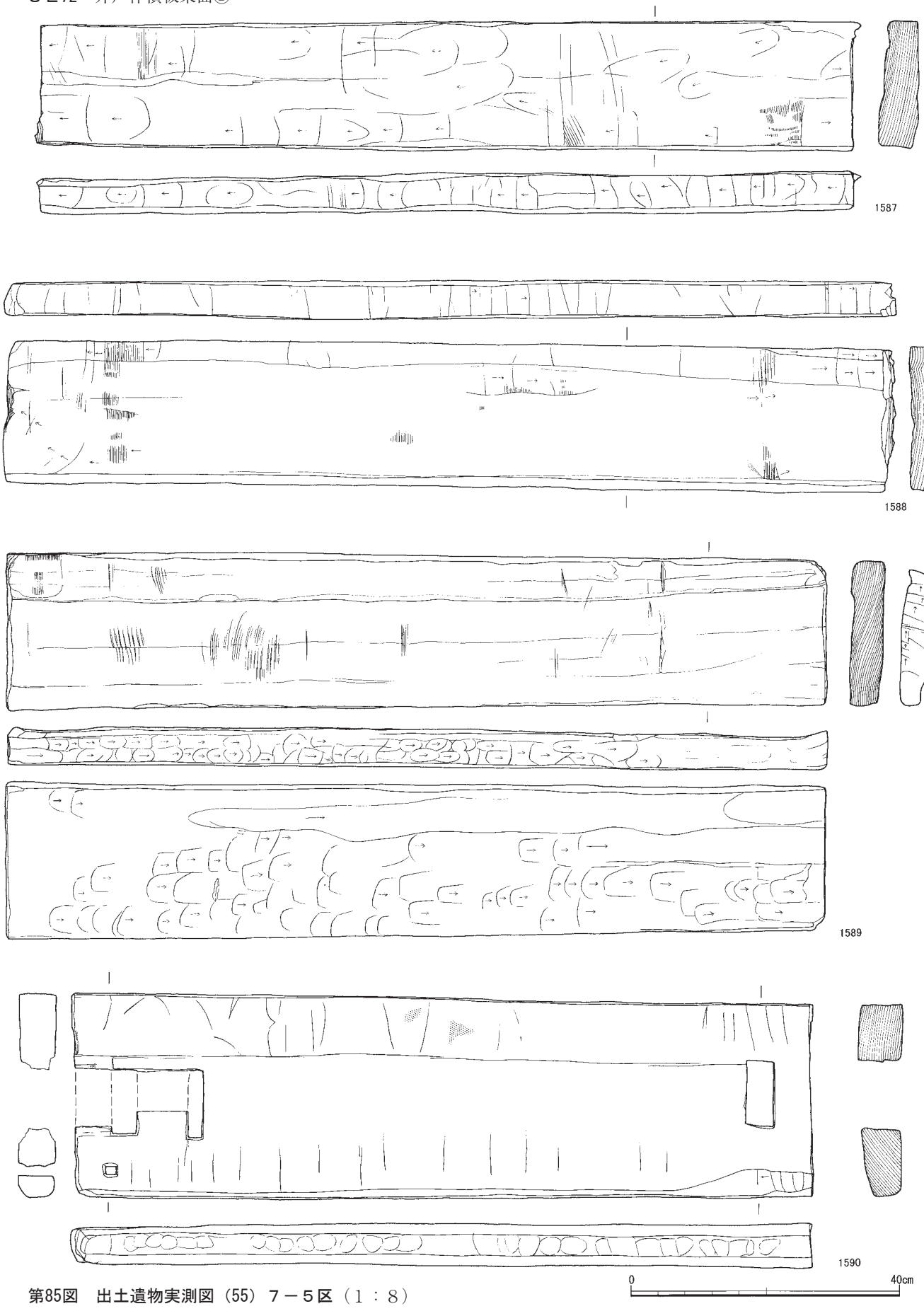
第83図　出土遺物実測図（53）７－５区（１：10）

ＳＥ72　井戸枠横板東面①



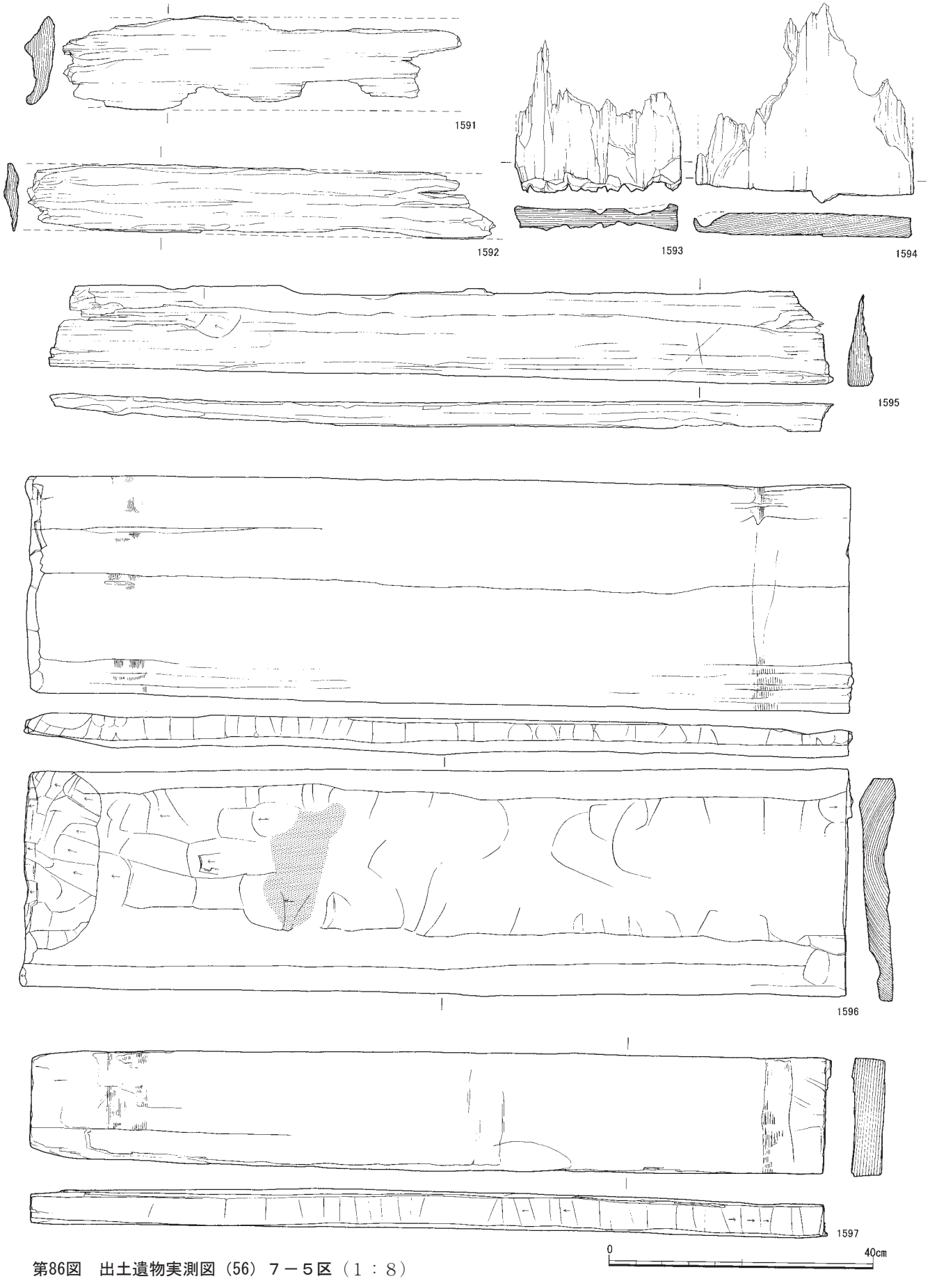
第84図　出土遺物実測図（54）７－５区（１：８）

ＳＥ72　井戸枠横板東面②



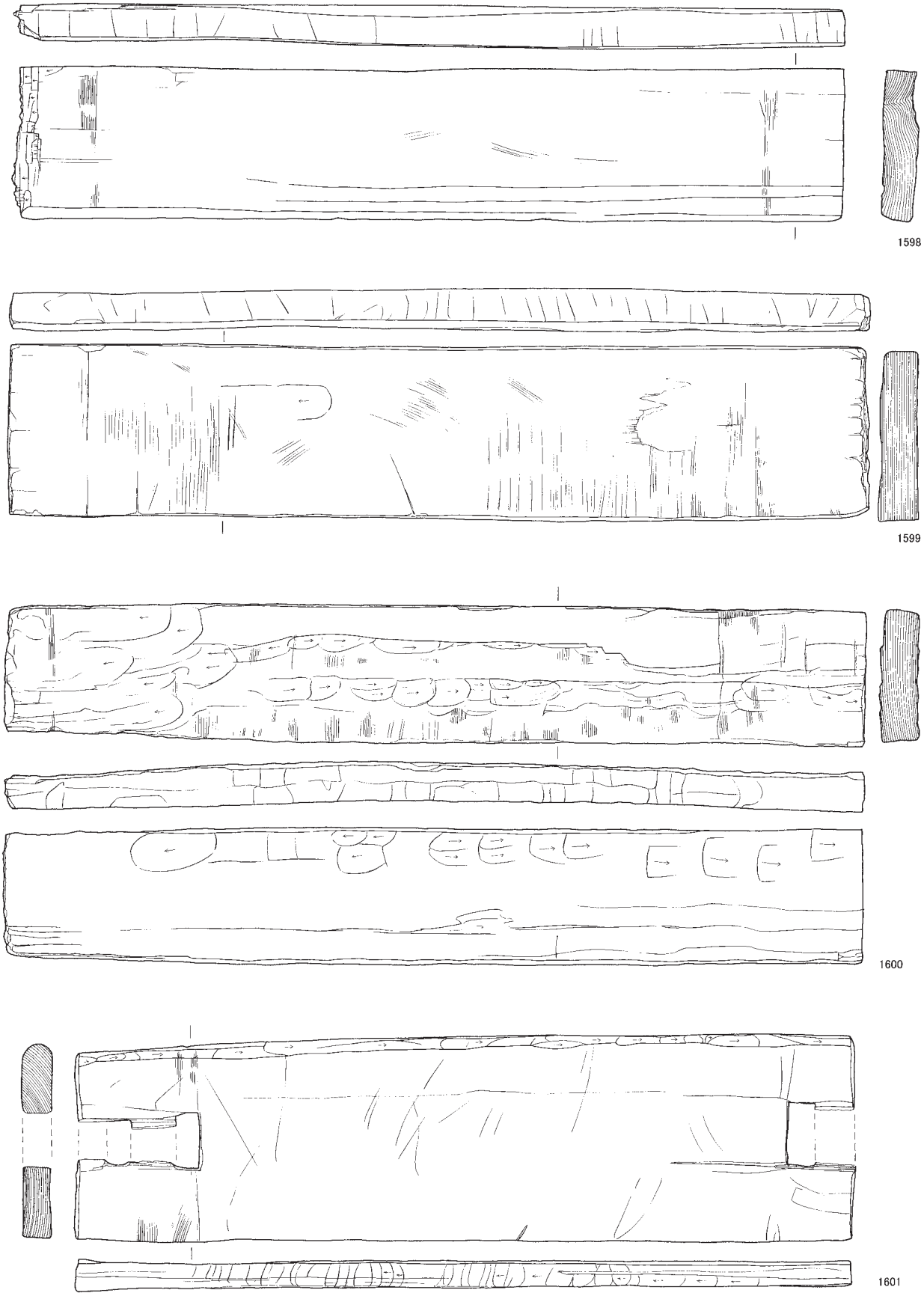
第85図　出土遺物実測図（55）７－５区（１：８）

ＳＥ72　井戸枠横板西面①



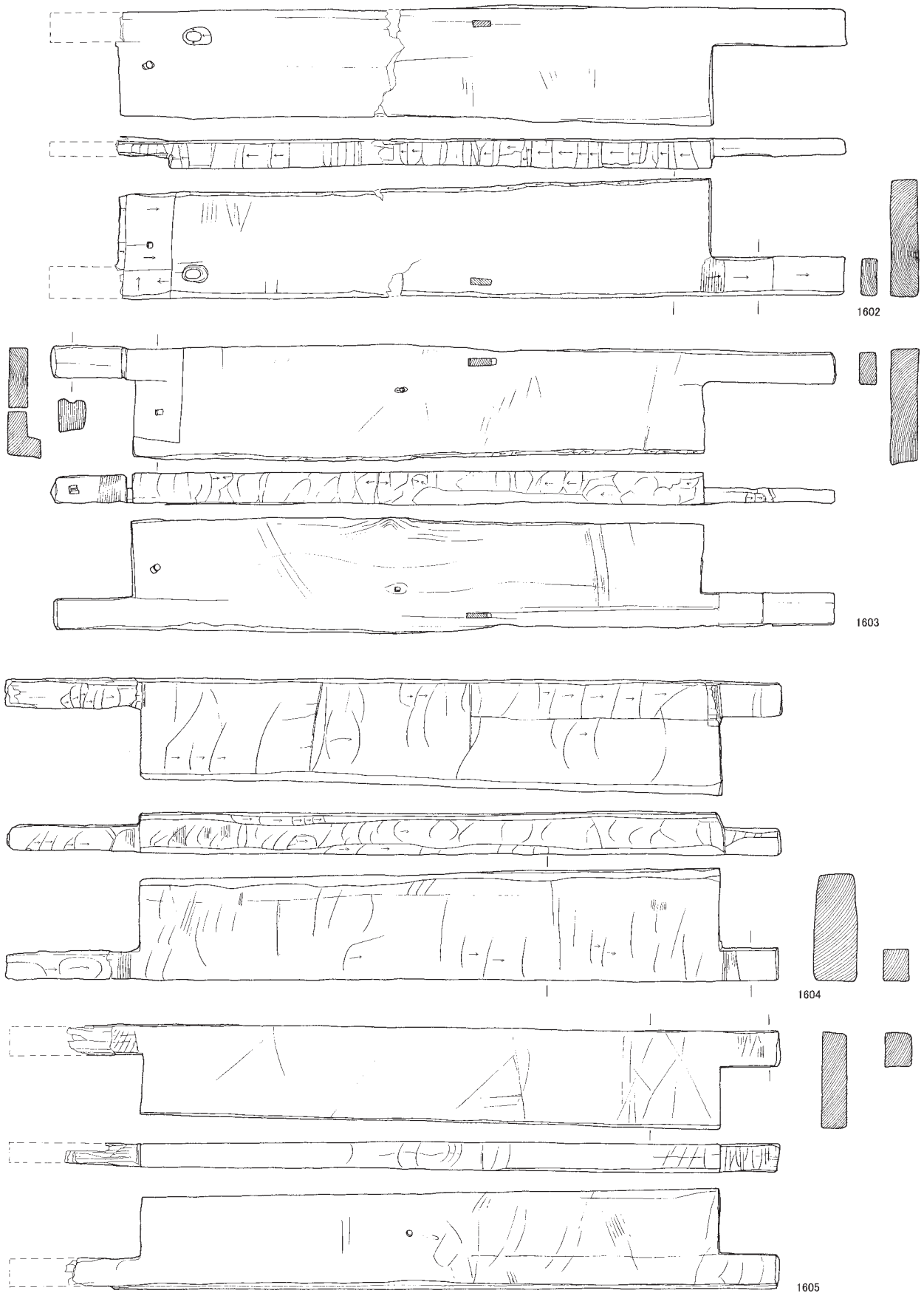
第86図　出土遺物実測図（56）７－５区（１：８）

ＳＥ72　井戸枠横板西面②



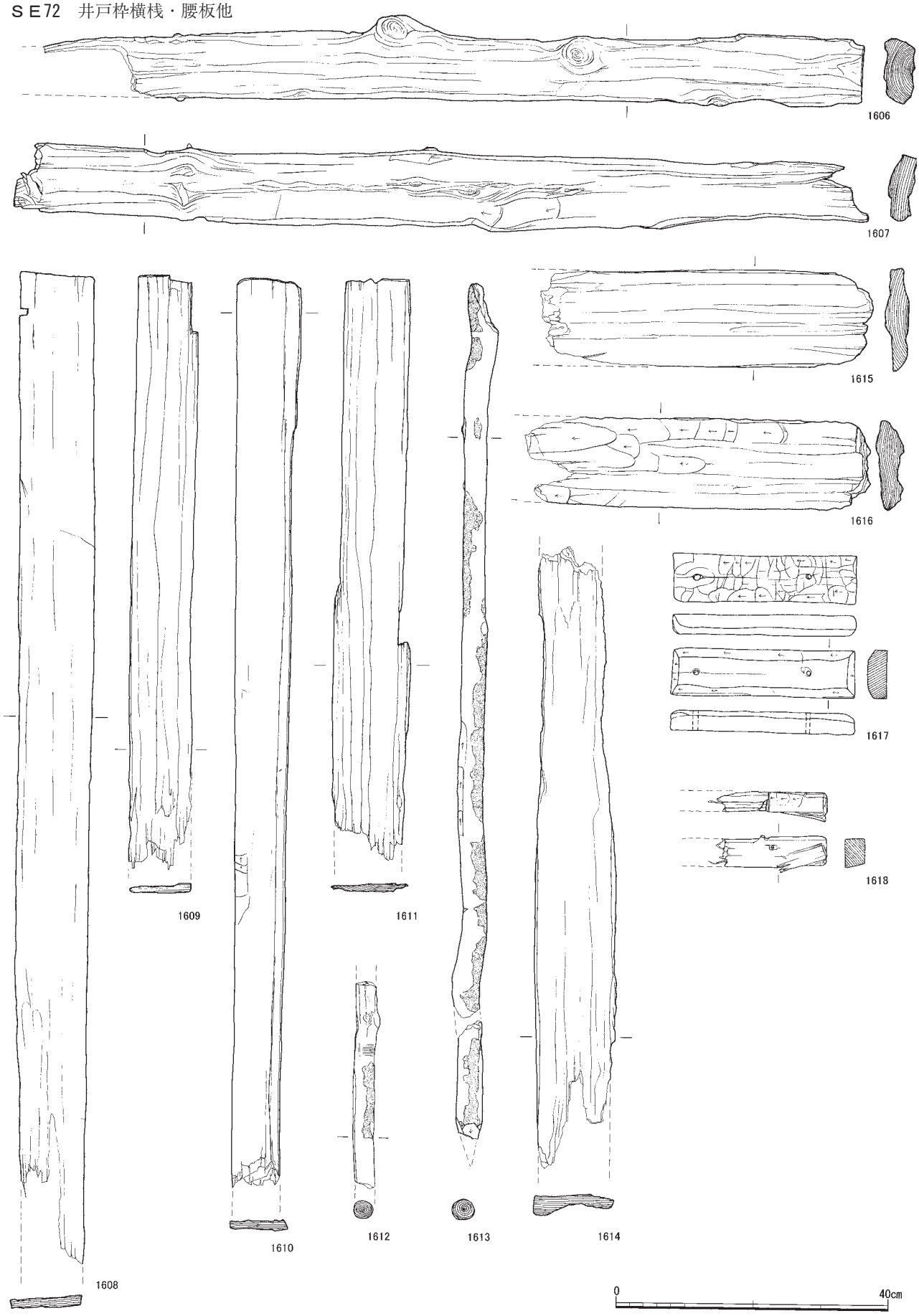
第87図　出土遺物実測図（57）７－５区（１：８）

ＳＥ72　井戸枠横桟



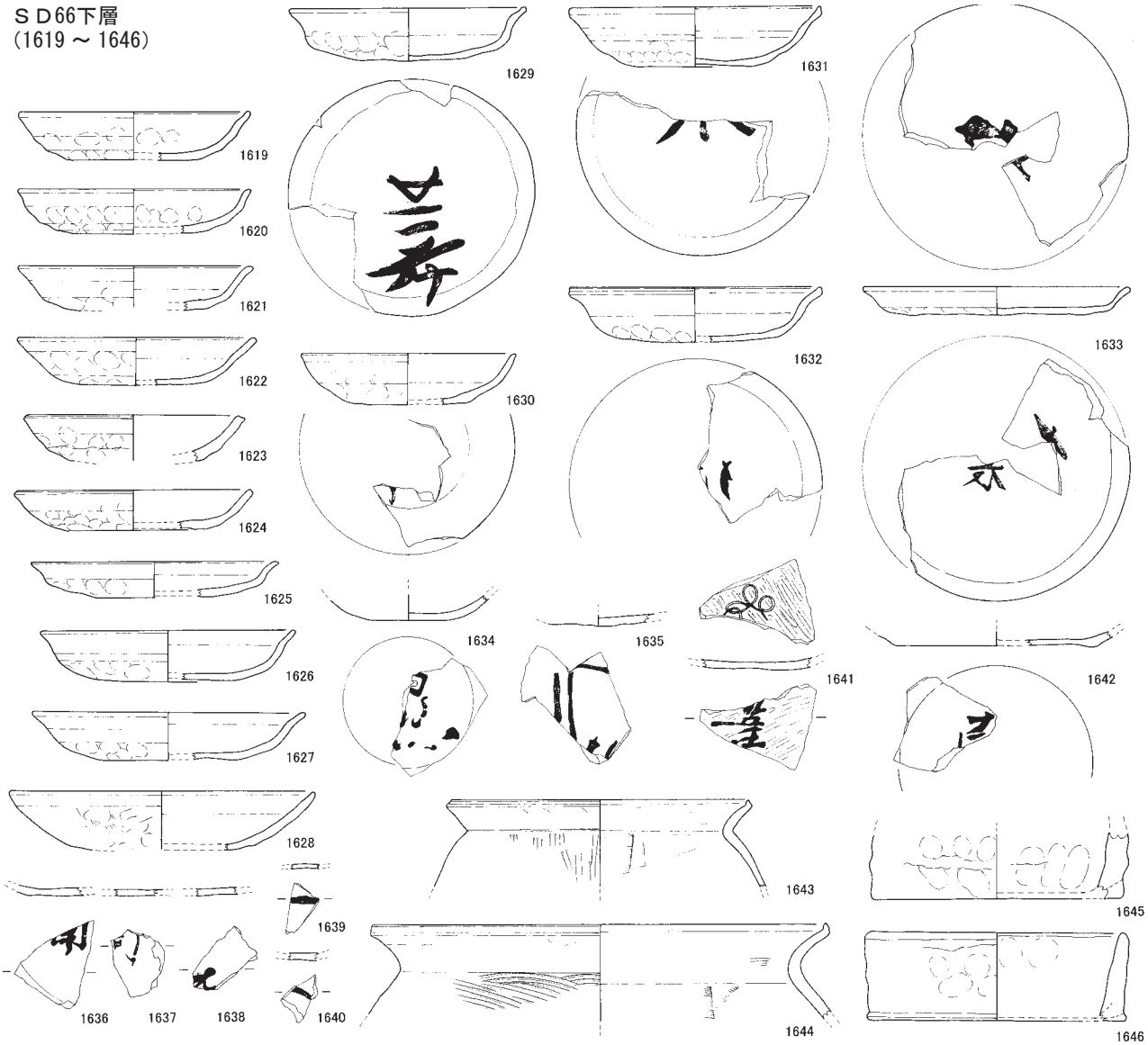
第88図　出土遺物実測図（58）７－５区（１：８）

ＳＥ72　井戸枠横桟・腰板他

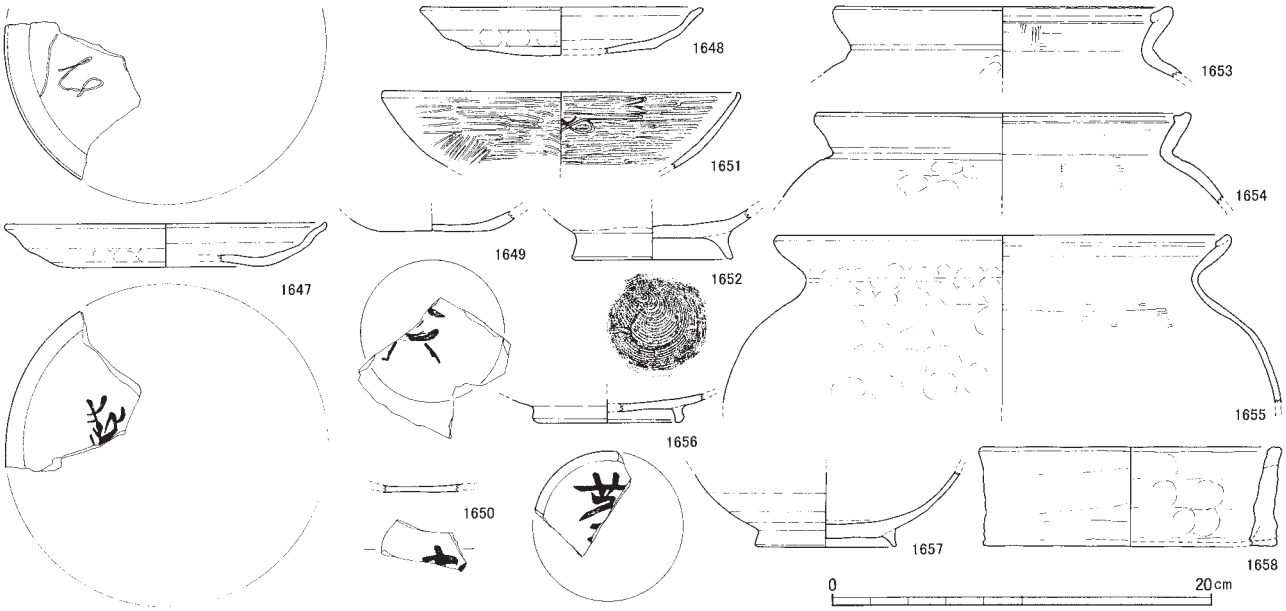


第89図　出土遺物実測図（59）７－５区（１：８）

ＳＤ66下層
（1619 ～ 1646）



ＳＤ66上層（1647～1658）



第90図　出土遺物実測図（60）７－５区（１：４）

たのち、横方向の細かいカキメが施される。1417～1419は緑釉陶器。1417は近江産の椀で、時期は10世紀半ば頃。1418は瓶の体部片で、わずかに陰刻が認められる。1419は近江産の耳皿で、伊藤正人氏の分類でいうａ類である。(15) 1420～1424は灰釉陶器で、おおむね樽崎・斎藤編年の黒笹90号窯式期のもの。1420の椀は釉が刷毛塗りされており、底部の墨書は「再」もしくは「成」であろうか。1421の墨書は「官」もしくは「宮」と考えられる。

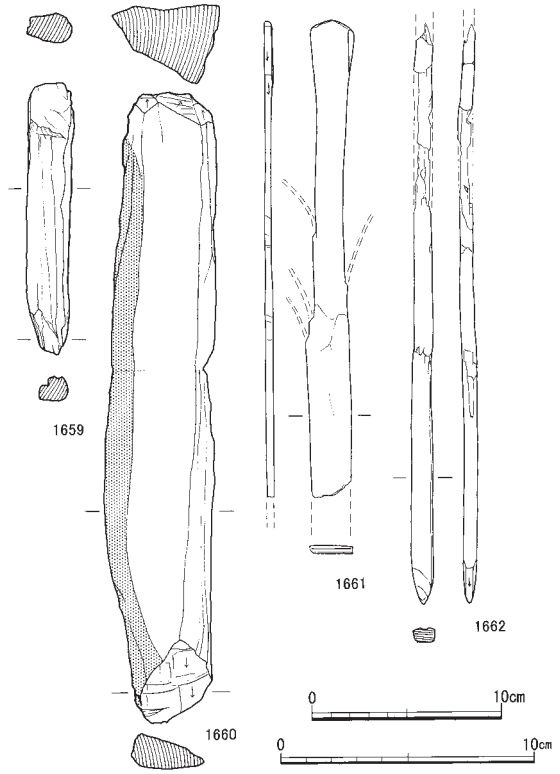
1425は土師質の棒状土製品で、椀や鉢に伴う把手であろうか。断面は中空で、器壁と接合した痕跡が観察される。1426～1432は土師質の土錘。1426～1429は小型で細長い形状、1430・1431は大型で細長い形状である。1432は円形状を呈し、長さは短い。

10　７－５区・７－６区

ａ　平安時代の遺物

ＳＥ72井戸枠内最下層（土器類1433～1475、木器類1476～1538）最下層から出土した一括性の高い土器群で、完形品が多い。1433～1440は土師器坏で、このうち1433・1434は底部に内→外方向の

ＳＤ66木製品（1659～1662）



第91図　出土遺物実測図（61）７－５区
（1659・1660は１：４、1661・1662は１：３）

穿孔が認められる。1441～1443は土師器皿。1447は土師器椀で、他の器種に比べやや新しい様相を示している。1444～1446は墨書土器で、1445は「粂」、1446は「籌」であろうか。

1448・1449は黒色土器。1448はＢ類のミニチュア壺で、希少性が高い。口縁部は小さく立ち上がり、袋状の体部を有し、底部は扁平である。底部に至るまで丁寧なヘラミガキ調整が認められ、銀器のような光沢をもつ。類例は京都府京都市仁和寺境内(16)、同京都市平安京右京三条一坊六・七町跡(17)、奈良県橿原市藤原京右京五条四坊(18)、大阪府大阪市大坂城下層(19)などから出土しており、畿内産と考えられる。1449も畿内産で、内面が黒いもの。内面は丁寧なミガキ調整で、外面はケズリのちミガキが施される。底部外面の墨書は、中央に大きく書かれた「籌」のまわりを取り囲むよう、小さな「籌」が４つ書かれており、四方結界を表現しているものと想定される。

1450～1470は土師器甕で、完形に近い形で出土している個体が多い。甕は使用痕によって大きく２つに分類され、1450～1457は内外面ともに煤が多量に付着した状態で出土し、1458～1470は未使用の状態で出土している。煤が付着した個体の多くは底部に焼成前のヘラ記号が見られるため、最初から用途別に製作された可能性が高く、祭儀用の器と考えられる。ただし、ヘラ記号の統一性はなく、「△」「○」「⊗」「φ」が確認される。一方、未使用の一群は、1458と1461以外は目立った特徴はない。1458は対面する２方向に「南」と大きく墨書されており、1461は口縁部に油煙痕が認められる。

1471は土師器鉢である。1472～1475は破片資料のため、意図的に投棄された一群には含まれない可能性が高い。1472は土師器の片口鉢、1473・1474は志摩式製塩土器である。1475は灰釉陶器瓶の口縁か。

1476～1538は木製品。1476～1510は斎串である。遮光されていたため、白木の色そのままの状態で出土した。1476～1489は上端を圭頭状に、下端を剣先状にしたもので、上端の端面から切り込みが入っており、『木器集成図録－近畿古代編－』の型式分類のＣⅣ型式に相当する。1490は上端を圭頭状にするが、切り込みを入れたのち、側面を凸凹に加工

するもの。1491 ～ 1496 は一部のみ残存している。

1497 ～ 1510 は、圭頭状というよりは平頭状といえそうな一群である。意図的に平頭にしたものかどうかは不明であるが、僅かに圭頭状を意識しているため、ここではＣⅣ型式に分類しておく。

1511 ～ 1514 は木製品の破片で、1511 は両端を欠損するが、一部に圧痕が認められる。1515・1516 は杭で、先端部を丁寧に削り込んでいる。

1517 は折敷の底板片で、桜の綴皮が残存している。1518・1519 は紡織具で、これらは２つを×字状に組み合わせることができる。1520・1521 はイスノキ材の横櫛で、祭祀具と考えられる。平面形は長方形を呈し、肩部に丸みをもち、背は直線的である。『木器集成図録－近畿古代編－』のＡⅡ型式に相当する。1522・1523 は曲物底板で、いずれも木釘が残存し、1523 は片面が黒く焼けている。

1524 ～ 1531 は木片で、用途は不明である。丁寧な加工を施したものもあるが、いずれも赤外線による墨書は認められなかった。1532 ～ 1538 は火付木、いわゆる「燃えさし」で、炭化は先端のみに認められる。1532・1538 は刀物による切断加工は見受けられない。1536 は他の火付木に比べ非常にきれいな造りをしている。

ＳＥ 72 最下層出土遺物の時期は、土師器類から斎宮編年第Ⅱ期第３段階に相当し、ＳＤ 47 最下層と同じ９世紀末から 10 世紀前半頃と考えられる。

ＳＥ 72 井戸枠内上層（1539 ～ 1564） 1539 ～ 1564 は土師器坏。完形が多く、出土状況から一括性が非常に高い。斎宮編年第Ⅱ期第３段階に相当し、最下層出土遺物と時期差はほとんど見られない。1564 は土師器甕であるが破片資料で、土師器坏とともに投棄されたものではなく混入したものと思われる。

ＳＥ 72 掘方（土器類 1565 ～ 1568、木器類 1469 ～ 1572） 1565 ～ 1568 は土師器坏である。1567 は「令」、1568 は「衙」の墨書が底部にみられる。1569 ～ 1572 は加工痕を残す材で、井戸構築時に発生した廃材であろうか。時期は９世紀後半頃か。

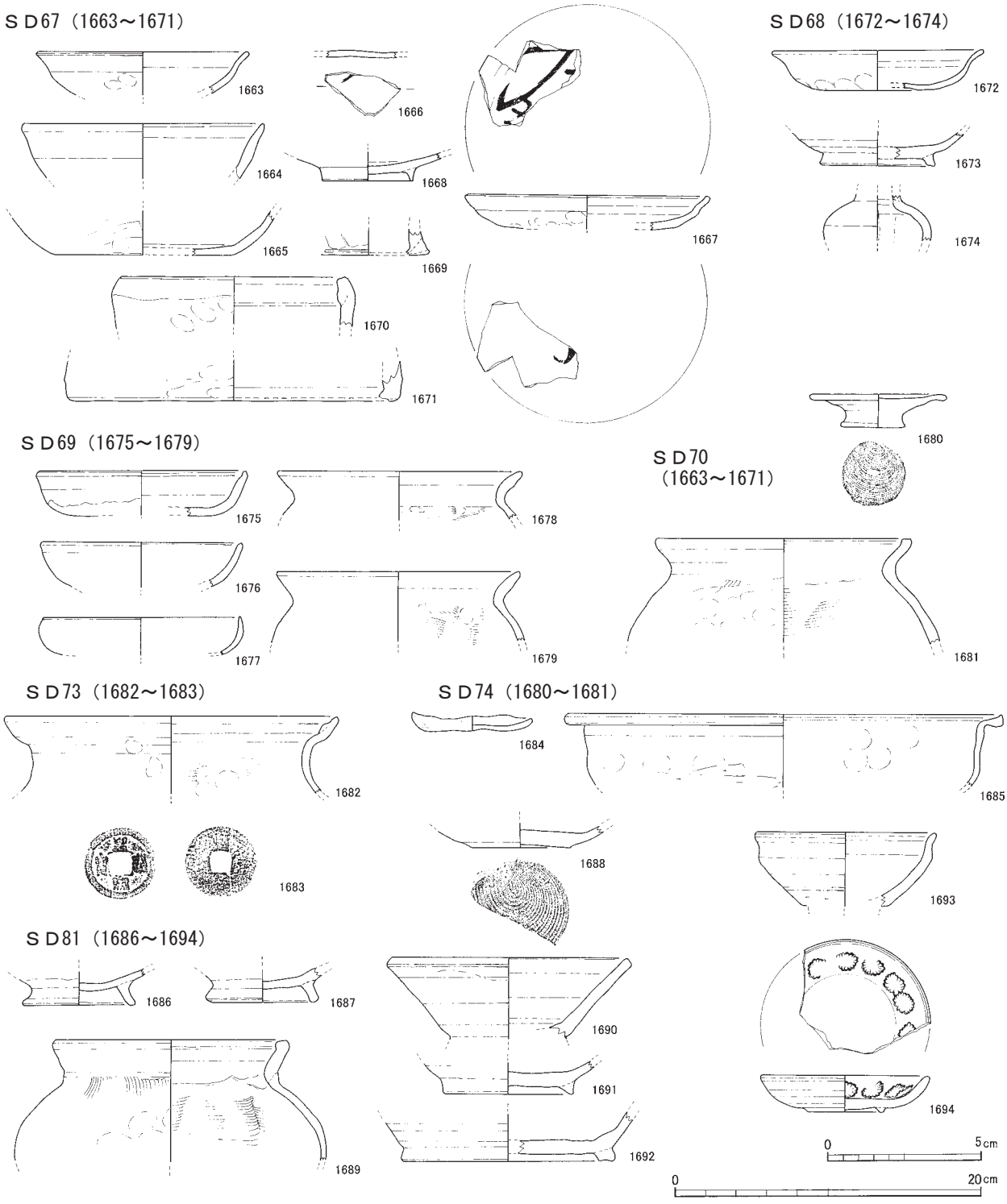
ＳＥ 72 井戸枠材（1573 ～ 1618） 井戸枠材は、縦板材・横板材・横桟・腰板に分けられる。いずれもスギ材で、1581・1590・1596・1601・1608・1610 は建築部材の転用材である可能性が高い。井戸枠の構造および板材の配置については、第 28 図を参照されたい。

1573 ～ 1580 は縦板材。北面は細長い 1573 を含め４本、南面は同じような幅の板材で４本が用いられる。いずれも上端は腐食しているため正確な全長は不明であるが、1578・1579 は 2.23 ｍ残存するため、元々はすべて２ｍを越す板材であったことが推測される。側面には、上から下に向かって丁寧な手斧痕が確認できる。岩盤に打ち込むため下端を剣先状に尖らせており、先端は岩盤に当たってつぶれている。表面に数字などの墨書は確認されなかったが、1579 の側面には、他に見られない粗い加工痕とともに「↑」印が２ヶ所線刻されており、1579 のみ他の縦板と様子が異なっている。

1581 ～ 1590 は東面横板、1591 ～ 1601 は西面横板である。縦板と接していた内側には縦板との当たり痕が明瞭に確認される。まず東面を見ると、上段に位置していた 1582・1583 は腐食が進み、手斧による加工痕は確認できない。1584 は縦板との当たり痕付近に焼けた痕跡がある。1585 は径８cm ほどの孔が空いており、それを塞ぐように 1581 が外側からあてがわれていた。この孔が井戸枠の構造上故意に空けてあったものなのか、1585 が転用材であったため後から孔を塞いだのかは不明であるが、1581 は一方に凸状の加工が見られるため転用材とみられる。西面を見ると、上段部では短い縦板 1593・1594 を用い、その隙間を埋めるように短い横板 1591・1592 を配置しているのがわかる。1596 は板材の中央付近に焼けた痕跡が確認される。東面も西面も、最下段より一段上に横桟と組み合わさる孔を持つ横板 1590・1601 が設置される。

1602 ～ 1607 は横桟で、臍には縦板との当たり痕

写真１　井戸枠材（1603）



第92図　出土遺物実測図（62）７－５区（1683は１：２、他は１：４）

が明瞭に残る。横桟のうち1602～1605の設置位置については、調査時水位の上昇が激しく、井戸枠材の元々の位置を把握しないまま取り上げたため、整理段階で組み合わせや当たり痕から検討を行ったものである。1602・1603は、板材のほぼ中央に２つの材を貫通する材（写真図版33）や穿孔が残っていたため、使用時には２つを密着させていたことがわかる。穿孔や板材の組み合わせから、使用時には南面縦板の井戸枠内側に設置されていたことが推測され､これらは横板２点(1590･1601)と組み合わさっていたと考えられる。ただし、1602・1603を組み合わせた場合、小さな長方形の窪みができるが、この用途は不明である（写真１）。横桟1604･1605は、北面縦板を井戸枠内外両側から挟み込んでいたと推測され、東西面の横板２点（1590・1601）と組み合わさるもの。また、1606・1607は井戸枠上段で縦板を固定するための横桟である。地上で人の目に触れる位置にあったにも関わらず、他の横桟に比べ加工が粗く、節などが残った状態で使用されていることが特徴的である。

1608～1611は腰板で、縦板の隙間を埋めるよう配置されていた。いずれも薄板材で、板葺屋根の葺板であった可能性がある。1612・1613の杭は、西面横板を外側から支えるよう打ち込まれていたもの。スギと比べて水に強くないシイ属・ヤナギ属が用いられていること、樹皮が残っていることから、井戸を構築する際、現地調達で急遽拵えたものかもしれない。

1615～1618は板材。井戸枠に伴うものと考えられるが、用途や部位は不明である。1617は丁寧な加工痕がみられ、２ヶ所穿孔されている。

ＳＤ66下層（土器類1619～1646）　1619～1632は土師器坏。時期は概ね斎宮編年第Ⅱ期第３段階に相当するが、1628・1630は椀状を呈しており、やや新しい様相を示す。1629～1632は墨書土器で、いずれも底部外面に墨書がみられる。1629は「衞」と推測され、文字は底部中央より下寄りに大きく書かれている。1633は土師器皿で、内外面に墨痕が見られるが、文字は不明である。1634～1640は土師器坏もしくは皿の底部。1641は黒色土器の底部で、底部内面にミガキ調整が、底部外面に墨書「業」が確認される。1642は土師器鉢の底部で､「南」の一字が読める。1643・1644は土師器の口縁部。1645・1646は志摩式製塩土器である。

ＳＤ66下層の時期は、土師器坏類から斎宮編年第Ⅱ期第３～４段階頃と考えられる。

ＳＤ66上層（1647～1658）　1647は土師器皿。底部外面に書かれた「皆」は、文字の大きさが小さいため、この土器には２文字以上が書かれていたと推測され、人名の可能性がある。1648は土師器坏。1649・1650は土師器坏もしくは皿の底部で、1649は底部に細い筆致で文字が書かれているが釈読はできなかった。1651は黒色土器で、内外面に丁寧なミガキ調整が施される。1652はロクロ成形の土師器椀である。1653～1655は土師器の甕で、時期は平安時代後期のもの。1656・1657は灰釉陶器椀。1656の時期は樽崎・斎藤編年黒笹90号窯式期で、底部に書かれた墨書は「衞」の可能性がある。1657は同東山72号窯式期のものであろうか。1618は志摩式製塩土器である。

ＳＤ66上層の時期は、ロクロ成形の土師器や土師器甕から、斎宮編年第Ⅲ期第１段階に相当する平安時代後期と考えられる。

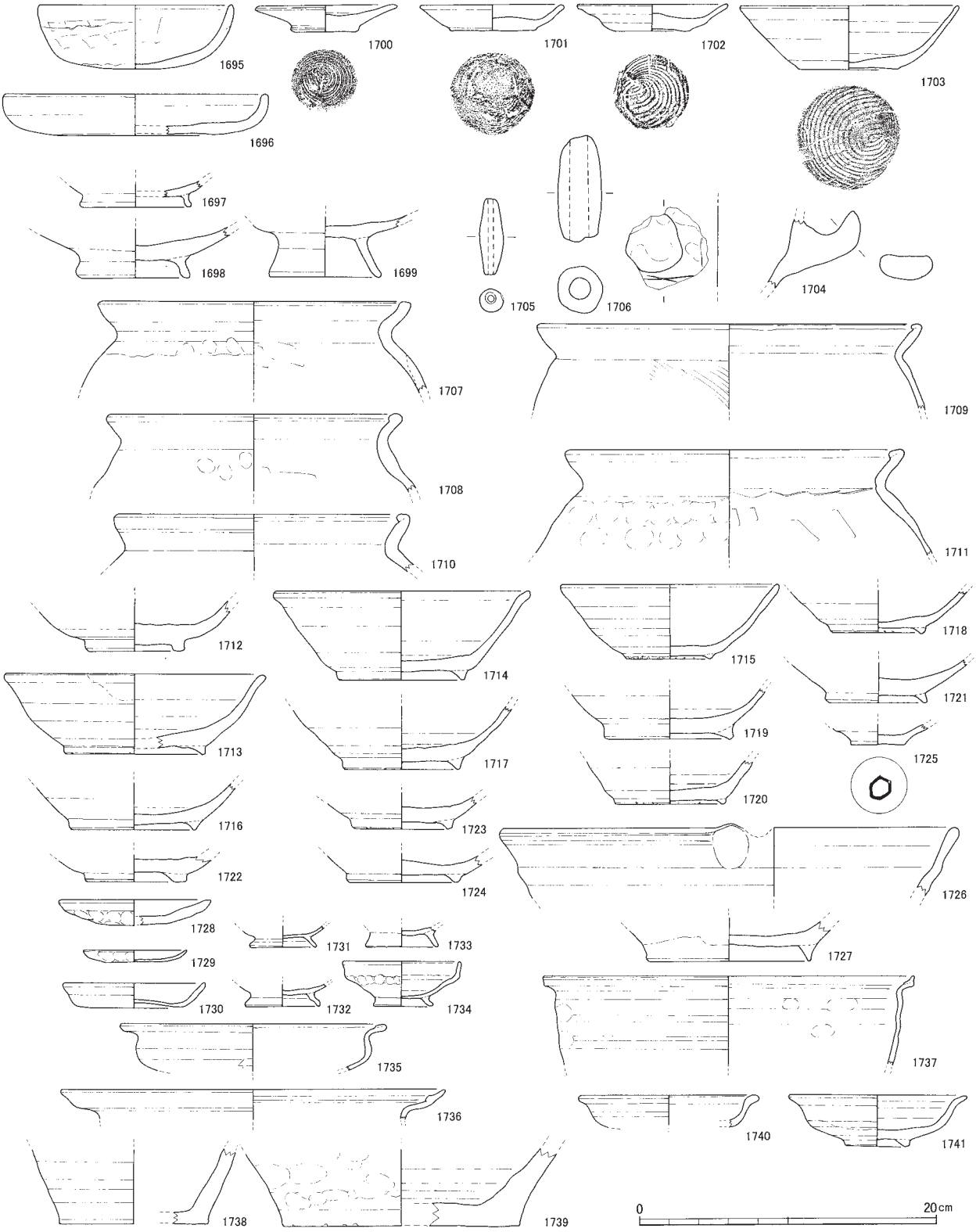
ＳＤ66木製品（1659～1662）　ＳＤ66からは、木製品４点のほか多くの自然木が出土した。

1659･1660は板材である。1660は先端が杭状に尖っている。樹種はコナラで、居住域周辺から伐採された可能性が高い。1661は斎串である。上端を圭頭状にし、上方に切り込みを入れる。下端は欠損しているが恐らく剣先状となるもので、ＣⅣ型式と考えられ、ＳＤ47と同じくスギ材を用いたやや厚い形状である。1662は用途不明木製品であるが、ヒノキ材を用い、先端は剣先状を呈する。下端と側面を丁寧に加工しており斎串のような祭祀具の一種である可能性があるが､斎串ほど薄くはない。　（相場）

ＳＤ67（1663～1671）　1663～1665は土師器坏、1666・1667は土師器坏か皿で共に墨書で文字が書かれており、1667は「成」の可能性がある。1668は灰釉陶器椀の底部から高台部にかけてである。1669～1671は、志摩式製塩土器である。遺物の時期は、10世紀後半とみられる。

ＳＤ68（1672～1674）1672は土師器坏、1673は近江産の緑釉陶器椀、1674は美濃産の緑釉陶器唾壺で

ＳＤ83（1695～1741）



第93図　出土遺物実測図（63）７－５区（１：４）

ある。遺物の時期は、10 世紀後半とみられる。

ｂ　中世の遺物

ＳＤ 69（1675 ～ 1679） 1675・1676 は土師器坏、1677 は土師器皿、1678・1679 は土師器甕である。遺物の時期は、土師器坏及び甕が 10 世紀後半とみられ、土師器皿は、14 世紀後半とみられる。

ＳＤ 70（1680・1681） 1680 はロクロ成形の土師器台付皿である。1681 は土師器甕である。遺物の時期は 11 世紀後半とみられる。

ＳＤ 73（1682・1683） 1682 は南伊勢系土師器鍋、伊藤編年のⅡｂ期後半に相当する。1683 は、銭貨である。銭名は「皇宋通寶」である。遺物の時期は、14 世紀前半とみられる。

ＳＤ 74（1684・1685） 1684 は土師器皿、1685 は南伊勢系土師器鍋である。遺物の時期は、16 世紀前半とみられる。

ＳＤ 81（1686 ～ 1694）1686・1687 は土師器台付椀、1688 はロクロ土師器皿、1689 は土師器甕、1690・1691 は山茶碗、1692 は灰釉陶器瓶の底部、1693 は天目茶椀、1694 は陶器丸皿である。遺物の時期は広範囲に及び 10 世紀後半から 16 世紀にかけてのものである。

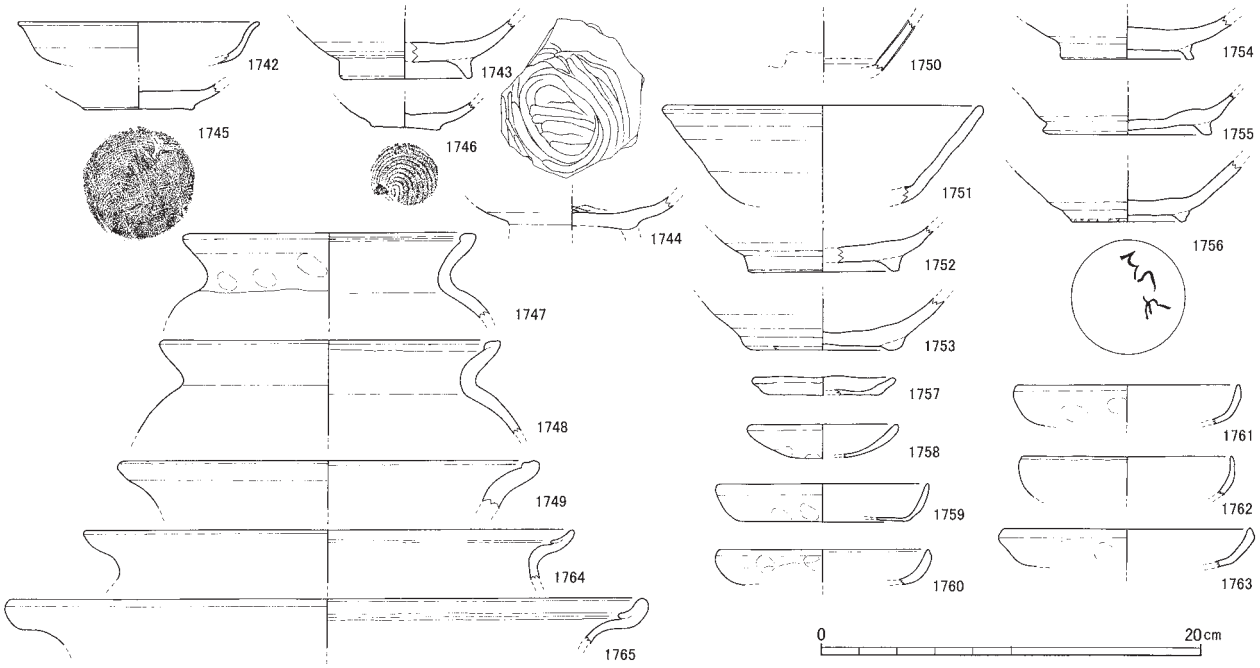
ＳＤ 83（1695 ～ 1741）1695 は土師器椀、1696 は土師器皿、1697 は緑釉陶器椀、1698・1699 は土師器台付椀、1700 ～ 1703 はロクロ土師器皿と椀、1704 は土師器甑か鍋の把手部分、1705・1706 は土錘、1707 ～ 1711 は土師器甕、1712 は青磁椀、1713 ～ 1725 は山茶碗、1726・1727 は陶器鉢、1728 ～ 1730 は土師器皿、1731 ～ 1734 は土師器台付小椀、1735 ～ 1737 は南伊勢系土師器鍋、1738 は陶器壺、1739 は陶器甕、1740・1741 は陶器皿である。遺物の時期は広範囲に及び 9 世紀から 16 世紀後半までである。溝の存続期間を示していると考えられる。

ＳＥ 80（1742 ～ 1765） 1742 は土師器坏、1743 は土師器台付椀、1744 は黒色土器椀、1745・1746 はロクロ土師器皿、1747 ～ 1749 は土師器甕、1750 は白磁椀、1751 ～ 1756 は山茶碗、1757 ～ 1763 は土師器皿、1764・1765 は南伊勢系土師器鍋である。

この遺構の遺物の時期も広範囲に及んでいて、10 世紀から 14 世紀前半にかけてのものである。（萩原）

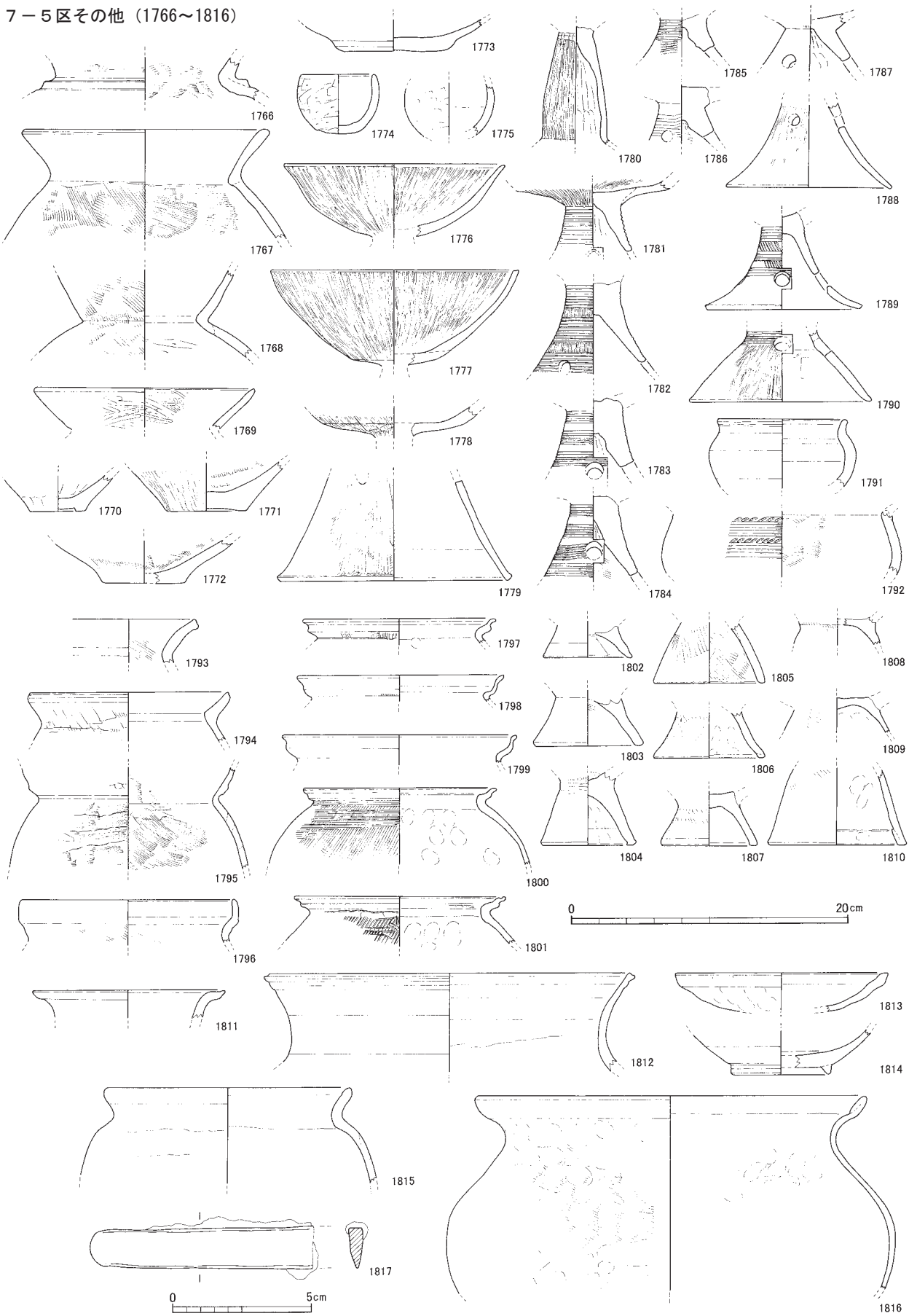
ｃ　その他の遺物

包含層・その他（1766 ～ 1817） 1766 ～ 1810 は弥生時代後期から古墳時代初頭の土器群で、いずれもＳＥ 72 付近から出土した。1766 ～ 1775 は壺である。1766 は広口壺で、頸部に突帯が巡る。1767・1768 は体部外面に粗いハケ調整がみられ、粗雑なつくりとなっている。1769 は口縁部の内外面にヨコ方向のミガキが施されており、おそらく丸く膨らむ胴部を



第94図　出土遺物実測図（64）７－５区（１：４）

７－５区その他（1766～1816）



第95図　出土遺物実測図（65）７－５区（1817は１：２、１：４）

もつもの。1770 ～ 1773 は底部で、1770 ～ 1772 は山中式併行期、1773 は古墳時代初頭の様相を示す。1774・1775 の小型壺は、外面を板状の工具で調整している。1776 ～ 1778 は高坏の坏部。1776 は椀状を呈し、口縁端部が僅かに外反している。1777 の坏部はやや深く、廻間Ⅰ式併行期。1779 ～ 1790 は高坏もしくはワイングラス形高坏の脚部である。1779 は山中式併行期の高坏裾部である。1780 は長細い形状を持つ脚柱部で、やや古い様相を示すもの。1789 は短い脚部と外反する裾部であることから、ワイングラス形高坏の可能性が高い。1790 は椀状の坏部に伴う脚部であろうか。1791・1792 は鉢で、1792 は外面に櫛描直線文と刺突文が巡る。1793 ～ 1810 は甕。1793・1794 は「くの字」状口縁甕である。1795 は直立する口縁部をもつもので、外来系土器の可能性がある。1796 は受口状口縁甕で、外面は粗いハケ調整である。1797 ～ 1801 はＳ字甕の口縁部で、1797 ～ 1800 はＢ類、1801 はＣ類。1802 ～ 1810 は脚台部で、1802 ～ 1805 は弥生時代後期後半の様相を示す。1806 ～ 1810 はＳ字甕の脚台部である。　（相場）

1811 は須恵器𤭯、1812 は須恵器壺である。1813 は土師器坏、1814 は山茶碗、1815 は土師器甕、1816 は南伊勢系土師器鍋、1817 は小柄の柄部分である。遺物の時期は、土師器坏が 11 世紀後半から 12 世紀前半のもの、山茶碗は、藤澤編年第４型式で 12 世紀中葉のものとみられる。土師器甕は 12 世紀後半のものである。小柄は、鎌倉時代とみられる。四日市市伊坂城跡 (20)（報告番号 368）や松阪市戸井口遺跡 (21)（報告番号２）の出土例に似る。　（萩原）

11　７－７区

ａ　平安時代～鎌倉時代の遺物

ＳＤ 57（1818 ～ 1825）　1818 は土師器甕、1819 は緑釉陶器椀、1820・1821 は山茶碗、1822 ～ 1825 は土錘である。遺物の時期は、広範囲に及ぶ。甕は、11 世紀中葉、山茶碗は、藤澤編年の第５型式とみられ、12 世紀後半から 13 世紀初頭のものである。

ＳＤ 58（1826 ～ 1829）　1826 は土師器坏、1827・1828 は山茶碗、1829 は土錘である。遺物の時期は、土師器坏が 10 世紀代であろう。山茶碗は、藤澤編年第５型式とみられ、12 世紀後半から 13 世紀初頭にかけてのものである。

ＳＤ 61（1830・1831）　1830 は土師器坏、1831 は土錘である。遺物の時期は、10 世紀代であろうか。

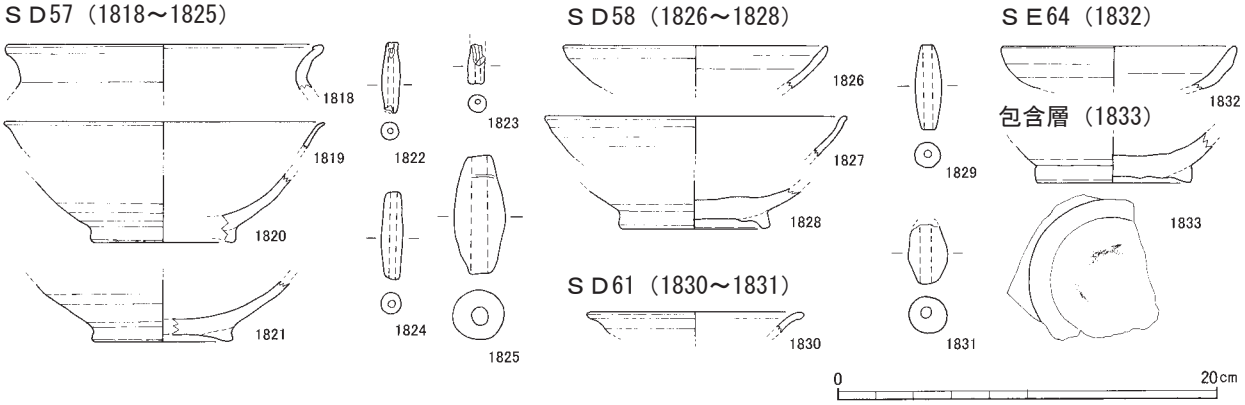
ＳＥ 64（1832）　1832 は土師器坏である。遺物の時期は、12 世紀代であろうか。

包含層（1833）　1833 は、山茶碗である。底部に薄い墨書がなされている。おそらく「〇」であろう。高台部は研磨されている。山茶碗は、藤澤編年の第４型式とみられ、12 世紀中葉である。　（萩原）

〔 註 〕

（１）編年・時期に関して、以下の編年を参考にした。

- 上村安生 2002「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- 赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター／同 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター／同 2001「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡 考察編』愛知県埋蔵文化財センター
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ／田辺昭三 1980『須恵器大成』角川書店



第96図　出土遺物実測図（66）７－７区（１：４）

・古代の土器研究会編 1992『古代の土器１ 都城の土器集成』
・奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』、同 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』
・斎宮歴史博物館 2001『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』
・大川勝宏 1993「斎宮の黒色土器－供膳形態を中心に－」『斎宮歴史博物館　研究紀要』２斎宮歴史博物館
・楢崎彰一・斎藤孝正 1983「猿投窯編年の再検討について」『愛知県陶磁資料館　研究紀要』２ 愛知県陶磁資料館
・斎藤孝正 2000『日本の美術 越州窯系青磁と緑釉・灰釉陶器』409 号 至文堂
・尾野善裕 2003「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『古代の土器研究－平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に－』古代の土器研究会
・伊藤裕偉 1990「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1 三重歴史文化研究会／同 2008「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編 考古２
・藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第３号』三重県埋蔵文化財センター
・藤澤良祐ほか 2007『愛知県史』別編窯業２ 中世・近世 瀬戸
・柴垣勇夫ほか 2012『愛知県史』別編窯業３ 中世・近世 常滑系

（２）本稿における墨書土器の釈読は、平川南氏、榎村寛之氏のご教示による。

（３）いわゆる「山茶碗」は概念的な用語であるが、本稿では便宜的に東海系無釉陶器椀を指す名称として使用する。

（４）横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』４ 九州歴史資料館／大宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』

（５）伊藤正人 2000「耳皿ノート」『中近世土器の基礎研究ＸＶ』日本中世土器研究会

（６）前掲註（４）に同じ。

（７）越州窯系青磁の時期については、中島恒次郎氏のご教示による。

（８）緑釉陶器の産地と時期は、尾野善裕氏、平尾政幸氏のご教示による。

（９）防長産緑釉陶器については、杉原和恵氏のご教示による。
杉原和恵 2003「防長」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器－生産地の様相を中心に－』古代の土器研究会

(10) 新名強 2011「斎宮跡と塩」『斎宮歴史博物館 研究紀要』20 斎宮歴史博物館

(11) 木製品の器種名と分類に関して、以下を参考にした。
・上原真人 1985『木器集成図録 近畿古代篇』奈良文化財研究所
・三重県埋蔵文化財センター 2000『六大Ａ遺跡発掘調査報告（木製品編）』

(12) 平尾政幸 2001「平安京の石製銙帯とその生産」『研究紀要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

(13) 石材の鑑定は、堀木真美子氏のご教示による。

(14) 石帯の製作技法および時期については、平尾政幸氏のご教示による。

(15) 前掲註（５）に同じ。

(16) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990『仁和寺境内発掘調査報告－御室会館建設に伴う調査－』

(17) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013『平安京右京三条一坊六･七町跡－西三条第（百花亭）跡－』。なお、百花亭からはミニチュア壺が６点出土し、「つまようじ」状の木片が内部に残存していたことから、「爪楊枝容器」として使用された可能性が指摘される。また、ミニチュアの黒色土器は壺以外に、椀・鉄鉢形鉢が出土しており、女性が使用した玩具であると推測されている。

(18) 橿原市教育委員会 1995『図録 橿原市の文化財』

(19) 大阪歴史博物館常設展示（大阪城下層）

(20) 三重県埋蔵文化財センター 2003『伊坂城跡発掘調査報告』

(21) 三重県埋蔵文化財センター 2005『戸井口遺跡・スブクリ遺跡（１・２次）発掘調査報告』

第６表　出土遺物観察表（土製品ほか）（１）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	001-07	弥生土器　壺	範確	no. 22	耕作土直下	(口)15.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ後ハケメ	密	橙5YR7/6	口縁部2/12	
2	001-06	弥生土器　甕	範確	no. 22	耕作土直下	(口)19.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ハケメ	やや粗	外:灰白2.5Y8/2 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部2/12	
3	012-01	弥生土器　高坏	範確	no. 22	－	(口)27.0	外:ヨコナデ→ミガキ 内:ヨコナデ・ハケメ→ミガキ	密	橙5YR6/6	口縁部1/12	
4	012-02	弥生土器　高坏	範確	no. 22	－	(口)27.0	外:ヨコナデ→ミガキ 内:ヨコナデ→ミガキ	密	外:にぶい赤褐5YR5/4 内:明赤褐5YR5/6	口縁部2/12	
5	012-03	弥生土器　高坏	範確	no. 22	－	(脚柱)4.0	外:ミガキ→櫛描直線文 内:オサエ・ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい黄橙10YR6/4	脚柱12/12	穿孔径1.3cm 直線文３条残存
6	012-04	弥生土器　高坏	範確	no. 22	－	(脚柱)4.3	外:ミガキ→櫛描直線文 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	脚柱12/12	穿孔径1.7cm、３方透し 直線文3条残存(7本単位)
7	002-06	土師器　坏	範確	no. 97	SD	(口)17.8	外:ナデ 内:ヨコミガキ	密	外:橙5YR6/6 内:にぶい橙7.5YR6/4	口縁部2/12	
8	011-06	土師器　椀	範確	no. 97	SD	(底)7.0	外:ミガキ、オサエ・ナデ 内:ケズリ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい褐7.5YR5/4	底部11/12	
9	002-05	土師器　甕	範確	no. 97	SD	(口)17.2	外:オサエ・ナデ→ハケメ 内:ハケメ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部2/12	
10	011-04	土師器　坏	範確	no. 40	－	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:浅黄橙7.5YR8/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部4/12	
11	011-01	土師器　坏	範確	no. 40	－	(口)15.0 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部4/12	
12	011-03	土師器　坏	範確	no. 40	－	(口)14.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	
13	011-05	土師器　坏	範確	no. 40	－	(口)14.8 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部5/12	
14	011-02	土師器　坏	範確	no. 40	－	(口)13.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部1.5/12	
15	012-05	土師器　坏	範確	no. 40	－	(口)15.5 (高)3.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙5YR7/6 内:橙5YR7/6	口縁部7/12	墨書「玉良」
16	001-02	土師器　甕	範確	no. 31	包含層	(口)16.4	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外:黒褐2.5Y3/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部4/12	
17	001-05	土師器　甕	範確	no. 26	SD	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ 内:板状工具ナデ	密	外:灰白10YR8/1 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部1～2/12	
18	002-07	土師器　甕	範確	no. 43	SD 直上	(口)16.0	外:オサエ→ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:灰白2.5Y8/2 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部2～3/12	
19	002-04	ロクロ 土師器　大皿	範確	no. 37	－	(底)6.6	外:ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	底部6/12	
20	002-03	灰釉陶器　椀	範確	no. 38	SD	(口)7.5	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:灰黄2.5Y7/2	口縁部1/12	
21	001-03	灰釉陶器　椀	範確	no. 12	耕作土直下	(底)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/1	底部5/12	内面に自然釉
22	003-02	陶器 (山茶碗)　椀	範確	no. 104	－	(口)17.4 (底) 8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白N7/	底部12/12	輪花あり 渥美第５型式後半
23	001-04	陶器 (山茶碗)　椀	範確	no. 12	耕作土直下	(底)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y8/1	底部12/12	渥美第５型式
24	001-01	青磁　椀	範確	no. 21	－	(高台)4.0	外:ロクロナデ→削り出し高台→鎬蓮弁文→釉 内:ロクロナデ→釉	密	緑灰10GY6/1	高台部3/12	鎬蓮弁文
25	003-05	土師質　土錘	範確	no. 16	－	(長)4.3 (径)1.6	オサエ・ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	完形	
26	003-06	土師質　土錘	範確	no. 16	－	(長)3.6 (径)1.7	オサエ・ナデ	密	外:暗灰N3/ 内:灰白10YR8/2	径6/12	
27	006-03	土師器　皿	1	1次 d5	SD1	(口)14.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	橙5YR6/6	口縁部2/12弱	
28	005-02	土師器　坏	1	1次 c2-d5	SD1	(口)11.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部1/12	
29	004-06	土師器　坏	1	1次 d5	SD1	(口)12.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:淡橙5YR8/4 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部2/12	
30	004-09	土師器　坏	1	1次 d5	SD1	(口)12.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12強	
31	004-08	土師器　坏	1	1次 d5	SD1	(口)14.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部1/12	
32	005-01	土師器　坏	1	1次 d5	SD1	(口)15.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部1/12強	
33	006-02	土師器　甑	1	1次 d5	SD1	(口)15.6	外:タテハケメ→ケズリ 内:ケズリ	やや密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部1/12強	
34	148-01	土師器　甕	7-2	i17	SD51 下層	(口)25.0	外:ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:灰白10YR8/2	口縁部2/12	口縁端部に炭化物付着
35	190-04	ロクロ 土師器　椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)6.6	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:回転ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/4	高台部5/12	平安後期
36	190-06	ロクロ 土師器　椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)約6.0	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ・沈線 内:回転ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	高台部3/12	平安後期
37	006-01	須恵器　甕	1	1次 d6	SD1 土取り	(口)48.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰オリーブ5Y4/2	口縁部1/12弱	
38	005-05	緑釉陶器　椀	1	1次 d3	SD5	(口)12.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y7/1 釉:黄緑	口縁部1/12弱	猿投　硬胎
39	006-05	土師質　製塩土器	1	1次 d5	SD1	(口)15.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部2/12	志摩式
40	006-04	土師質　製塩土器	1	1次 d5	SD1	(底)15.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR6/8	底部1/12弱	志摩式
41	010-01	鉄製品　釘	1	1次 d5	SD1	(長)2.85 (幅)0.85	－	－	－	尖端欠損	厚み:1.30 重さ:2.81
42	147-06	土師器　小皿	7-2	Ji17	SD51 下層	(口)9.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	灰黄2.5Y7/2	口縁部4/12	
43	190-05	土師器　皿	7-3E	Ji18	SD51 下層	(口)9.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:灰白2.5Y8/2	口縁部9/12	
44	148-02	土師器　小皿	7-2	Ji17	SD51 下層	(口)10.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:浅黄橙10YR8/3 内:灰白10YR8/2	口縁部1/12	
45	188-05	灰釉陶器　椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部4/12	
46	189-08	灰釉陶器　椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部10/12	内面に自然降灰
47	189-05	陶器 (山茶碗)　椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ・内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部4/12	知多・猿投第３～４型式
48	188-06	陶器 (山茶碗)　椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白N7/0	高台部4/12	知多・猿投第４～５型式 硯に転用の可能性あり

第７表　出土遺物観察表（土製品ほか）（２）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
49	188-03	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	やや密	灰白5Y7/1	高台部 5/12	知多・猿投第４～５型式
50	188-01	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	外:灰白7.5Y7/1 内:灰白5Y7/1	高台部 12/12	知多・猿投第４～５型式
51	189-03	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや密	灰白5Y7/1	高台部 4/12	知多・猿投第５型式
52	189-06	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや粗	灰白5Y8/1	高台部 2/12	猿投・知多第５型式
53	189-04	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ・内面研磨	やや密	灰白5Y8/1	高台部 2/12	猿投・知多第５型式
54	148-05	陶器（山茶碗）	椀	7-2	Ji18	SD51 下層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白2.5Y7/1	高台部 5/12	知多・猿投第５型式
55	189-01	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白2.5Y7/1	高台部 6/12	知多・猿投第５型式
56	188-04	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)9.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/1	高台部 2/12	知多・猿投第６型式
57	148-04	陶器（山茶碗）	椀	7-2	Ji18	SD51 下層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰黄2.5Y7/2 内:灰白2.5Y7/1	高台部 5/12	渥美第４型式
58	188-07	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰黄2.5Y7/2 内:灰白5Y7/1	高台部 2/12	渥美第４型式
59	148-03	陶器（山茶碗）	椀	7-2	Ji18	SD51 下層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰黄2.5Y7/2	高台部 7/12	渥美第４型式
60	004-04	陶器（山茶碗）	椀	1	1次 d5	SD1	(底)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:にぶい褐7.5YR6/4	底部 3/12	渥美第５型式
61	189-07	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰白5Y7/1	高台部 9/12	渥美第５型式
62	189-02	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	内外:灰白2.5Y7/1	高台部 5/12	渥美第５型式
63	190-03	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)約9.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 2/12	渥美第５型式 内面炭化物
64	190-02	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 12/12	渥美第５型式
65	190-01	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)9.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白7.5Y7/1	高台部 4/12	渥美第５型式
66	188-02	陶器（山茶碗）	椀	7-3E	Ji18	SD51 下層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	外:灰5Y6/1,灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/1	高台部 5/12	渥美第５型式
67	005-06	土師器	甕	1	1次 c4	SD3 上層	(口)21.2	外:オサエ・ナデ→ハケメ 内:ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR7/4 内:にぶい褐7.5YR5/3	口縁部 1/12弱	内面に炭化物付着
68	004-01	灰釉陶器	椀	1	1次 c4	SD3	(底)6.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y8/1 内:灰白2.5Y8/1	底部 3/12	
69	004-07	土師器	坏	1	1次 d4	SD5	(口)12.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR6/6	口縁部 1/12	
70	009-01	古式土師器	壺	1	1次 c4	SD3	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ 内:オサエ・ナデ→口縁部板ナデ	密	外:明赤褐2.5YR5/8 内:明赤褐2.5YR5/8	口縁部 3/12	
71	004-03	古式土師器	壺	1	1次 d5	SD3	(底)8.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:浅黄橙10YR8/3 内:にぶい褐7.5YR5/3	底部 2/12	
72	005-04	古式土師器	短頸壺	1	1次 c4	SD3 上層	(口)9.2	外:ミガキ→タテハケメ 内:ナデ	密	明赤褐5YR5/8	口縁部 3/12弱	
73	008-04	古式土師器	高坏	1	1次 c4	SD3	(口)22.8	外:ミガキ 内:ミガキ	密	外:浅黄橙10YR8/3 内:浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12強	
74	005-03	古式土師器	高坏	1	1次 c5	SD1 最下層	(脚柱)3.1	外:櫛描直線文 内:ナデ・ハケメ	密	明赤褐2.5YR5/8	脚柱 12/12	
75	007-07	古式土師器	甕（S字甕）	1	1次 c4	SD3	(接合部)4.4	外:ハケメ 内:脚台内面ナデ、体部内面ハケメ	密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい黄橙10YR7/2	接合部 12/13	
76	008-01	古式土師器	甕（S字甕）	1	1次 c4	SD3	(口)15.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→板状工具痕	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
77	006-06	古式土師器	甕（S字甕）	1	1次 c4	SD3 上層	(口)17.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ・オサエ	密	外:明赤褐5YR5/6 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	
78	007-08	古式土師器	甕	1	1次 c4	SD3	(口)15.4	外:ヨコナデ・オサエ→ハケメ 内:工具ナデ後オサエ	密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12強	
79	007-01	土師器	皿	2	1次 c5	Pit1	(口)9.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12強	
80	007-02	土師器	皿	3	－	SD11	(口)9.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR6/6～浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
81	007-04	灰釉陶器	椀	3	－	SD11	(底)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y8/1	底部 3/12	
82	008-03	土師器	甕	4	－	SD12 上層	(口)22.0	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	密	外:黒褐10YR2/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
83	007-03	ロクロ土師器	椀	4	－	SD12 下層	(底)8.2	外:回転ナデ→糸切 内:ロクロナデ	密	灰白10YR8/2	底部 3/12	
84	007-09	古式土師器	壺	3	－	SD10	(口)15.0	外:ナデ→ミガキ 内:ハケメ・オサエ	密	外:明赤褐5YR5/6 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12弱	
85	007-06	古式土師器	甕（S字甕）	3	－	SD10	(接合部)5.7	外:ハケメ 内:脚台内面ナデ	密	外:橙5YR6/6 内:にぶい黄橙6/3	接合部 6/12	
86	007-05	古式土師器	高坏	3	－	SD9 北端	(口)11.0	外:櫛描直線文 内:ナデ	密	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12	
87	123-03	古式土師器	壺	5-1	Ak3	SD34	(底)6.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:灰褐10YR5/1 内:黄灰2.5YR5/1	底部 3/12	
88	122-08	古式土師器	甕	5-1	Ak3	SD34	(口)17.0	外:ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR5/2 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/12未満	外面に煤付着
89	123-04	古式土師器	高坏	5-1	Ak3	SD34	(口)24.0	外:ミガキ→磨滅 内:ミガキ→磨滅	密	外:浅黄2.5Y7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
90	123-05	古式土師器	高坏	5-1	Ak3	SD34	(底)16.0	外:ハケメ→ミガキ 内:ハケメ	密	外:浅黄橙10YR8/3 内:にぶい黄橙10YR7/4	底部 2/12	透かし３方向、径不明
91	124-07	土師質	土錘	5-1	Ak3	SD34	(長)2.0 (幅)0.9	オサエ・ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	－	残重量1.69ｇ
92	124-08	石製品	管玉	5-1	Ak3	SD34	(長)2.05 (幅)0.8	外:ケズリ？	－	－	完形	残重量2.51ｇ 石材：緑色泥岩
93	123-01	土師器	鍋	5-1	Ae3	SD35 最下層	小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 片	外面に煤付着
94	122-03	灰釉陶器	皿	5-1	Ae3	SD35 南岸	(高台)6.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部 3/12	
95	122-06	灰釉陶器	椀	5-1	Ae3	SD35 最下層	(口)15.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y8/1 内:オリーブ黄5Y6/3	口縁部 1/12	内面自然降灰
96	122-02	灰釉陶器	椀	5-1	Ae3	SD35 最下層	(高台)5.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白N7/0 内:灰白5Y7/1	高台部 10/12	内面自然降灰

第８表　出土遺物観察表（土製品ほか）（３）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
97	055-02	緑釉陶器	椀	5-1	－	SD35 最下層	(高台)7.6	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→軸 内:ロクロナデ→軸	密	素地:灰白5Y7/1 軸:濃緑	高台部 4/12	猿投Ⅱ中新 梗胎
98	124-03	土師器	甕	5-2	Ae2	SD35 下層	(口)15.6	外:板ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR6/2 内:灰黄2.5Y6/2	口縁部 1/12	
99	123-02	土師器	焙烙	5-2	Ae2	SD35 下層	小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:黒N2/0 内:灰白2.5Y7/1	口縁部 片	外面に煤付着
100	122-01	陶器 (山茶碗)	椀	5-2	Ae2	SD35 下層	(高台)8.1	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 12/12	尾張・知多第３型式
101	122-09	陶器	甕	5-2	Ae3	SD35 下層	(口)23.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	外:黒褐10YR3/2 内:灰黄褐10YR4/2	口縁部 1/12未満	渥美１型式
102	124-01	瓦質土器	風炉	5-2	Ae2	SD35 下層	(口)32.0	外:ヘラミガキ→花文 内:ナデ→板ナデ→ヘラミガキ	密	黒N2/0	口縁部 2/12	
103	124-02	瓦質土器	浅鉢	5-2	Ae2	SD35 下層	(口)42.8	外:ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	灰N5/0	口縁部 1/12	
129	124-04	土師器	坩堝	5-1	Am3	SD32	(口)11.0	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y7/1	口縁部 2/12	口縁部に煤付着
130	122-07	古式土師器	甕	5-1	－	包含層	(口)14.2 (頸)13.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	浅黄2.5Y7/4	口縁部 1/12未満	
131	122-05	須恵器	坏	5-1	－	包含層	(口)14.6	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰N6/1	口縁部 1/12	
132	122-04	灰釉陶器	椀	5-1	－	包含層	(高台)6.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y8/1	高台部 2/12	
133	124-06	土師質	土錘	5-1	－	遺構検出	(長)3.1 (幅)1.0	オサエ・ナデ	密	浅黄2.5Y7/3	－	残重量2.65ｇ
134	124-05	土師質	土錘	5-1	－	表土掘削	(長)3.9 (幅)1.1	オサエ・ナデ	密	浅黄橙10YR8/4	－	残重量5.44ｇ
135	071-01	土師器	坏	6-1	Ce12	SD90 最下層	(口)11.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
136	067-04	土師器	坏	6-1	Ce15	SD90 最下層	(口)14.3 (高)3.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12	
137	067-06	土師器	坏	6-1	Ce15	SD90 最下層	(口)15.0 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12未満	
138	071-04	土師器	椀	6-1	Ce8	SD90 最下層	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
139	070-04	土師器	坏	6-1	Ce13	SD90 最下層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR6/4	口縁部 1/12	
140	067-02	土師器	坏	6-1	Ce13	SD90 最下層	(口)14.5 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	淡橙5YR8/4	口縁部 1/12	
141	067-01	土師器	坏	6-1	Ce7	SD90 最下層	(口)15.5 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰黄2.5Y7/2	口縁部 3/12	
142	067-05	土師器	坏	6-1	Ce14	SD90 最下層	(口)15.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙5YR7/4	口縁部 1/12	
143	067-03	土師器	坏か皿	6-1	Ce12	SD90 最下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部片	底部内面にヘラ記号「×」ヵ
144	070-05	土師器	椀	6-1	Ce8	SD90 最下層	(口)17.8 (高)3.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→放射状・螺旋状暗文	密	外:にぶい橙5YR7/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	内面に暗文あり
145	066-04	土師器	把手付鍋	6-1	Ce15	SD90 最下層	－	外:ケズリ→ナデ→ハケメ 内:ハケメ→板ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12未満	
146	065-03	土師器	甕	6-1	Ce10	SD90 最下層	(口)14.9 (頸)13.4	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ	密	橙2.5YR6/6	口縁部 1/12	
147	065-02	土師器	甕	6-1	Ce13	SD90 最下層	(口)15.4 (頸)13.9	外:ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄2.5Y7/3	口縁部 1/12	
148	065-04	土師器	甕	6-1	Ce14	SD90 最下層	(口)15.8 (頸)14.3	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12	
149	069-02	土師器	甕	6-1	Ce14	SD90 最下層	(口)17.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→体部板ナデ	密	外:黄灰2.5Y4/1 内:灰黄2.5Y7/3	口縁部 3/12	
150	065-01	土師器	甕	6-1	Ce8	SD90 最下層	(口)18.4 (頸)16.6	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→板ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 6/12	
151	069-01	土師器	甕	6-1	Ce13	SD90 最下層	(口)20.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	密	外:灰黄2.5Y6/2 内:灰黄褐10YR6/2	口縁部 3/12	口縁部外面に炭化物付着
152	068-04	土師器	甕	6-1	Ce13	SD90 最下層	(口)24.4	外:オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内:磨滅	密	外:灰白10YR8/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 5/12	体部外面に炭化物付着
153	068-05	土師器	甕	6-1	Ce13	SD90 最下層	(口)32.0	外:ヨコナデ・外面に工具の当たり痕あり 内:ヨコナデ	密	外:灰白10YR8/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 1/12未満	
154	068-06	ロクロ土師器	椀	6-1	Ce14	SD90 最下層	(高台)5.6	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y8/2	高台部 5/12	
155	071-02	黒色土器	椀	6-1	Ce7	SD90 最下層	(高台)7.0	外:ナデ→貼付高台 内:ミガキ→暗文	密	外:灰白10YR8/2 内:暗灰N3/0	高台部 1/12	
156	071-03	土師質	製塩土器	6-1	Ce13	SD90 最下層	(底)17.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:橙5YR6/6 内:橙2.5YR6/6	底部 1/12	志摩式
157	065-05	須恵器	瓶	6-1	Ce8	SD90 最下層	(口)7.7	内:回転ナデ 内:回転ナデ	密	褐灰10YR6/1	口縁部 1/12	
158	069-04	灰釉陶器	瓶	6-1	Ce11	SD90 最下層	(口)8.0	外:回転ナデ→軸 内:回転ナデ→軸	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/2	口縁部 1/12	内外面全て軸あり。
159	071-05	灰釉陶器	耳皿	6-1	Ce10	SD90 最下層	(口)5.5	外:ナデ→自然降灰 内:ナデ	密	外:オリーブ灰10Y6/2 内:灰白2.5Y7/1	小片	
160	070-02	灰釉陶器	皿	6-1	Ce10	SD90 最下層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	外:灰白5Y8/2 内:灰白5Y8/1	高台部 3/12	
161	070-06	灰釉陶器	皿	6-1	Ce15	SD90 最下層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→軸 内:ロクロナデ・内面研磨→自然降灰	密	灰白2.5Y8/1	高台部 3/12	外面刷毛塗り？
162	069-05	灰釉陶器	椀	6-1	Ce14	SD90 最下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 3/12	
163	069-06	灰釉陶器	椀	6-1	Ce8	SD90 最下層	(高台)9.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 4/12	
164	065-06	灰釉陶器	深椀	6-1	Ce8	SD90 最下層	(高台)9.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白10YR7/1	高台部 3/12	
165	070-01	灰釉陶器	椀	6-1	Ce12	SD90 最下層	(口)15.8	外:ロクロナデ→輪花→自然降灰 内:ロクロナデ→輪花	密	灰白5Y8/1	口縁部 1/12	輪花あり
166	070-03	灰釉陶器	椀	6-1	Ce15	SD90 最下層	(口)19.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12	内面自然降灰
167	068-07	緑釉陶器	椀	6-1	Ce9	SD90 最下層	(高台)6.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→軸 内:ロクロナデ→軸	密	素地：浅黄橙7.5YR8/4 軸：オリーブ灰10Y4/2	高台部 2/12	近江産か
168	055-05	緑釉陶器	椀	6-1	C114	SD90 最下層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→軸 内:ロクロナデ→軸	密	素地:灰白2.5Y8/1 軸:浅緑	高台部 2/12	産地不明 軟胎
169	068-03	土師質	土錘	6-1	Ce13	SD90 最下層	(長)3.5 (幅)1.4	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/2 灰黄2.5Y7/2	完形	残重量7.42ｇ

第９表　出土遺物観察表（土製品ほか）（４）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
170	066-05	土師質	土錘	6-1	Ce8	SD90 最下層	(長)4.0 (幅)1.0	オサエ・ナデ	密	灰白10YR8/2	ほぼ完形	残重量2.86ｇ
171	066-08	土師質	土錘	6-1	Ce10	SD90 最下層	(長)4.2 (幅)1.25	オサエ・ナデ	密	灰白2.5YR7/1	完形	残重量5.98ｇ
172	066-09	土師質	土錘	6-1	Ce10	SD90 最下層	(長)4.9 (幅)1.5	オサエ・ナデ	密	灰白7.5YR8/2	ほぼ完形	残重量8.77ｇ
173	066-06	土師質	土錘	6-1	Ce10	SD90 最下層	(長)4.5 (幅)1.8	オサエ・ナデ	密	灰白10YR8/2	完形	残重量9.32ｇ
174	066-07	土師質	土錘	6-1	Ce10	SD90 最下層	(長)4.8 (幅)1.25	オサエ・ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	完形	残重量17.82ｇ
175	068-02	土師質	土錘	6-1	Ce14	SD90 最下層	(長)4.7 (幅)2.3	オサエ・ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	完形	残重量18.27ｇ
176	068-01	土師質	土錘	6-1	Ce8	SD90 最下層	(長)5.65 (幅)12.05	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/2	完形	残重量15.37ｇ
177	055-07	緑釉緑彩陶器	椀	6-1	－	SR88 西岸上層	－	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:浅黄橙7.5YR8/3 釉:黄に緑	小片	猿投 平安京Ⅱ中新
178	066-02	古式土師器	甕 (S字甕)	6-1	Ce8	SD90 最下層	(口)13.7 (頸)12.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12未満	
179	066-01	古式土師器	甕 (S字甕)	6-1	Ce8	SD90 最下層	(口)12.9 (頸)11.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12未満	
180	065-07	須恵器	坏	6-1	Ce7	SD90 最下層	(口)13.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	青灰5PB5/1	口縁部 1/12未満	
181	125-01	土師器	甕	7-1西	Fi21	SD36	(口)17.3 (頸)16.1	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	明褐灰5YR7/2	口縁部 1/12	
182	125-03	土師器	鍋	7-1西	－	SD36 上面	(口)23.5 (頸)18.6	外:ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/12	
183	128-04	土師器	鍋	7-1西	Fi21	SD36	(口)21.6	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	灰黄褐10YR6/2	口縁部 片	16世紀前半
184	127-06	土師器	皿	7-1西	Fi21	SD36	(口)12.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12	
185	126-03	ロクロ土師器	椀	7-1西	Fi21	SD36	(高台)7.4	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白10YR8/2	高台部 3/12	
186	126-05	灰釉陶器	椀	7-1西	Gi4	SD36 南岸テラス	(高台)6.9	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	明紫灰5P7/1	高台部 3/12	
187	128-03	灰釉陶器	瓶	7-1西	Fi23	SD36	(口)10.4	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	灰白N8/0	口縁部 1/12	
188	126-07	陶器 (山茶碗)	皿	7-1西	Gi4	SD36 南岸テラス	(高台)4.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 3/12	猿投・知多４型式後半
189	126-04	陶器 (山茶碗)	椀	7-1西	Fi21	SD36	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ→内面研磨	密	明紫灰5P7/1	高台部 9/12	猿投第４型式
190	126-01	陶器 (山茶碗)	椀	7-1西	Gi4	SD36 南岸テラス	(高台)7.9	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	紫灰5P6/1	高台部 3/12	猿投・知多第５型式
191	127-02	陶器 (山茶碗)	椀	7-1西	Gi4	SD36	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 1/12	知多・猿投第５型式後半
192	126-08	陶器 (山茶碗)	椀	7-1西	Gi4	SD36	(高台)6.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 2/12	知多５型式
193	126-06	陶器 (山茶碗)	皿	7-1西	Gi4	SD36 南岸テラス	(底)4.8	外:ロクロナデ→糸切 内:ロクロナデ	密	明紫灰5P7/1	底部 5/12	渥美第５型式
194	127-03	陶器 (山茶碗)	椀	7-1西	Gi4	SD36	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白N8/0	高台部 1/12	渥美第４型式
195	126-02	陶器 (山茶碗)	椀	7-1西	Fi21	SD36	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	紫灰5P6/1	高台部 2/12	渥美第５型式前半
196	127-01	陶器 (山茶碗)	椀	7-1西	Gi4	SD36	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 2/12	渥美第５型式
197	125-04	青磁	大皿	7-1西	Gi3	SD36	(口)25.1？	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→施文・釉	密	外:灰白N8/0 内:オリーブ灰10Y5/2	口縁部 1/12	
198	130-04	土師器	小皿	7-1東	Gi12	SD37 下層	(口)9.1 (高)1.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/2	口縁部 9/12	
199	131-04	土師器	坏	7-1東	Gi13	SD37 上層	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙5YR7/6 内:灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
200	129-08	ロクロ土師器	皿	7-1東	Gi10	SD37 下層	(底)5.7	外:回転ナデ→糸切 内:回転ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	底部 3/12	
201	128-01	土師器	甕	7-1西	Gi6	SD37 上層	－	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/3	小片	
202	129-01	土師器	甕	7-1東	－	SD37 上層	(口)20.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:灰白10YR8/2 内:黒褐2.5Y3/1	口縁部 1/12	
203	130-01	土師器	甕	7-1東	Gi10	SD37 下層	(口)26.0	外:ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR6/2 内:灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
204	129-02	土師器	鍋	7-1東	－	SD37 上層	(口)27.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:灰褐7.5YR4/2 内:浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	外面に煤付着
205	131-01	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi12	SD37 下層	(口)16.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	口縁部 1/12	輪花あり
206	129-06	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi12	SD37 上層	(口)16.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰黄2.5Y6/2	口縁部 1/12	
207	129-07	灰釉陶器	皿	7-1東	Gi10	SD37 下層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	釉:灰オリーブ7.5Y6/2 素地:灰白5Y7/1	高台部 1/12	釉ハケ塗り
208	130-05	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi12	SD37 下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部 5/12	
209	131-03	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi14	SD37 上層	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白N7/0	高台部 2/12	
210	131-02	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi14	SD37 上層	(高台)8.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白N7/0 内:灰白7.5Y7/1	高台部 2/12	
211	129-05	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi12	SD37 上層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	釉:灰オリーブ5Y6/2 素地:灰白N7/0	高台部 2/12	H72窯式期、外面自然降灰
212	130-03	陶器 (山茶碗)	椀	7-1東	Gi12	SD37 下層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白N8/0	高台部 3/12	渥美３～４型式
213	129-04	陶器 (山茶碗)	椀	7-1東	Gi12	SD37 上層	(高台)8.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部 2/12	猿投第４型式
214	130-06	陶器 (山茶碗)	椀	7-1東	Gi12	SD37 下層	(高台)9.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ→内面研磨	密	外:灰白2.5Y8/1 内:灰白N7/0	高台部 3/12	知多・猿投第５型式
215	127-04	陶器 (山茶碗)	椀	7-1西	Gi6	SD37 上層	(高台)8.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 2/12	猿投５型式
216	130-07	陶器 (山茶碗)	椀	7-1東	Gi12	SD37 下層	(口)14.4 (高)5.1 (高台)8.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部 1/12	知多・猿投第５型式
217	129-03	陶器 (山茶碗)	皿	7-1東	Gi12	SD37 上層	(高台)4.7	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y8/1	高台部 1/12	知多・猿投第４型式

第 10 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（５）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
218	130-02	土師質	土錘	7-1東	Gi11	SD37 下層	(長)5.5 (幅)2.5	オサエ・ナデ	密	軸:灰白2.5Y8/2 素地:オリーブ黒5Y3/1	完形	
219	142-01	土師器	皿	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(口)9.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y8/1	口縁部 2/12	
220	141-02	土師器	皿	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(口)11.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
221	141-01	土師器	皿	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(口)12.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12	
222	145-02	土師器	皿	7-1東	－	SD38 杭列周辺	(口)13.0	外:オサエ・ナデ→板ナデ 内:ナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
223	144-03	土師器	椀	7-1東	Gi19	SD38 杭列A	(口)14.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR6/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 2/12	
224	142-05	ロクロ土師器	椀	7-1東	－	SD38 杭列周辺	(底)4.8	外:糸切→回転ナデ 内:回転ナデ	やや粗	外:灰白5Y7/1 内:灰黄2.5Y7/2	底部 12/12	
225	145-03	ロクロ土師器	台付皿	7-1東	－	SD38 杭列周辺	(底)5.0	外:回転ナデ→高台貼り付け後ナデ 内:回転ナデ	密	外:灰白5Y8/1 内:灰白10YR8/2	底部 1/12	
226	145-04	土師質	土錘	7-1東	－	SD38 杭列周辺	(長)3.0 (幅)1.4	オサエ・ナデ	密	灰黄2.5Y5/1	完形	
227	139-04	須恵器	瓶	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(口)10.2	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや密	灰白N7/	口縁部 2/12	
228	141-03	須恵器	甕	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(口)18.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや密	外:灰N6/0 内:灰N7/0	口縁部 2/12	外面に自然釉付着
229	144-02	灰釉陶器	皿	7-1東	Gi19	SD38 杭列A	(口)18.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	軸:灰白5Y7/2 素地:灰白5Y7/1	口縁部 2/12	釉刷毛塗り？
230	055-04	緑釉陶器	椀	7-1東	Gi19	SD38 杭列A	(高台)6.8	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:緑	高台部 4/12	近江 平安京Ⅲ古～中
231	140-05	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)7.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	外:灰褐7.5YR5/2 内:灰白5Y7/1	高台部 2/12	
232	140-01	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)8.1	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 1/12	
233	139-05	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)8.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部 2/12	
234	139-07	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰5Y6/1	高台部 1/12	高台部に煤付着
235	144-04	灰釉陶器	皿	7-1東	Gi19	SD38 杭列A	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白N8/0	高台部 4/12	外面底部墨書「□」
236	145-06	陶器（山茶碗）	小椀	7-3A	Gi20	SD38 杭列F	(口)8.4 (高)2.2 (高台)4.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白N8/0 内:灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12	渥美第５型式
237	145-05	陶器（山茶碗）	小椀	7-3A	Gi20	SD38 杭列F	(口)9.2 (高)5.2 (高台)2.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 6/12	渥美第４型式 内面に自然釉
238	144-05	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi19	SD38 杭列A	(高台)4.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 4/12	知多・猿投第５型式
239	144-06	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	－	SD38 杭列周辺	(高台)7.7	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 3/12	知多第５型式
240	139-01	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや粗	灰白N8/	高台部 12/12	知多・猿投第５型式
241	145-01	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	－	SD38 杭列周辺	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部 12/12	知多第５型式
242	139-02	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや密	灰白5Y7/1	高台部 3/12	知多・猿投第５型式
243	142-03	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	－	SD38 杭列周辺	(口)16.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白7.5Y7/1	口縁部 2/12	猿投第３～４型式
244	143-06	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi19	SD38 杭列A	(口)15.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	口縁部 3/12	知多・猿投第６型式
245	140-03	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(口)14.6 (高)4.55 (高台)5.9	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや密	灰白5Y7/1	口1/12 高12/12	知多第５型式 底部墨書あり(花文)
246	142-02	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	－	SD38 杭列周辺	(口)14.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗	灰白2.5Y7/1	口縁部 4/12	知多第６型式
247	141-05	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(口)15.2 (高)6.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや粗	灰白N8/	口2/12 高5/12	知多・猿投第６型式
248	142-06	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/	高台部 2/12	渥美第４型式
249	136-02	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi14	SD38 杭列周辺	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 3/12	渥美第４～５型式
250	141-04	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)8.9	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰N8/0	高台部 12/12	知多５型式 内面に煤付着
251	140-04	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ→内面研磨	やや密	灰白7.5Y7/1	高台部 2/12	知多・猿投第５型式 底部墨書あり
252	139-06	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや密	灰白7.5Y8/1	高台部 3/12	渥美第５型式
253	141-06	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕？ 内:ロクロナデ	やや粗	灰白7.5Y7/1	高台部 2/12	渥美第５型式
254	136-01	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi14	SD38 杭列周辺	(高台)8.15	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	やや密	灰白5Y7/1	高台部 10/12	渥美第５型式
255	144-01	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi19	SD38 杭列A	(高台)8.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白N7/0	高台部 4/12	渥美第５型式
256	140-02	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(高台)7.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	やや密	灰白N7/	高台部 9/12	渥美第５型式 底部墨書あり
257	135-07	土師器	皿	7-1東	Gi16	SZ40	(口)約9.0 (高)1.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	外:灰黄2.5Y7/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12	
258	135-04	土師器	皿	7-1東	Gi16	SZ40	(口)10.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
259	135-06	土師器	皿	7-1東	Gi16	SZ40	(口)10.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12	
260	138-04	土師器	皿	7-1東	Gi16	SZ40	(口)12.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/1	口縁部 2/12	
261	135-05	土師器	皿	7-1東	Gi16	SZ40	(口)10.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	外:灰白10YR8/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12	
262	135-02	土師器	皿	7-1東	Gi16	SZ40	(口)12.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
263	135-03	土師器	皿	7-1東	Gi16	SZ40	(口)12.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ・工具痕？	やや密	灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12	
264	135-01	土師器	皿	7-1東	Gi16	SZ40	(口)12.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	浅黄2.5Y7/3	口縁部 2/12	
265	138-01	土師器	甕	7-1東	Gi16	SZ40	(口)28.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	外:暗灰N3/ 内:黒褐10YR3/1	口縁部 2/12	

第 11 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（６）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
266	137-05	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕？ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部1/12	
267	137-03	灰釉陶器	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部1/12	
268	133-08	灰釉陶器	瓶	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)12.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白5Y7/1	高台部1/12	
269	133-01	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(口)17.0 (高)5.4 (高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	口縁部1/12	猿投３型式 内面の一部に炭化物付着
270	134-03	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)9.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや密	灰白N7/0	高台部2/12	猿投・知多４～５型式
271	133-03	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	外:灰白N7/0 内:灰黄2.5Y7/2	高台部5/12	知多５型式 内面に炭化物付着
272	136-04	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)7.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	やや密	灰白N8/	高台部3/12	知多・猿投第５型式
273	137-04	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)8.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部5/12	猿投・知多第５型式
274	137-02	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(口)14.2	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	口縁部2/12	知多・猿投第６型式
275	137-01	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(口)14.4 (高)5.5 (高台)5.9	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白10Y7/1	完存	知多・猿投第６型式 底部墨書「大」
276	134-04	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰N6/0	高台部2/12	猿投第６型式
277	134-05	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰白2.5Y7/1	高台部2/12	猿投・知多第６型式
278	133-07	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台) 約5.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	外:灰7.5Y6/1 内:灰5Y6/1	高台部3/12	猿投・知多第６型式 墨書あり
279	134-02	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部3/12	知多・猿投７型式
280	133-05	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部12/12	渥美第４～５型式
281	134-01	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部5/12	渥美第４～５型式
282	134-08	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)5.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白2.5Y7/1	高台部3/12	渥美第５型式
283	134-06	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部5/12	渥美第５型式
284	134-07	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰6/1	高台部5/12	渥美第５型式
285	133-04	陶器（山茶碗）	皿	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)6.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部2.5/12	渥美第５～６型式
286	136-03	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部5/12	渥美第５型式
287	137-07	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	やや密	灰白2.5Y8/1	高台部2/12	渥美第５型式
288	136-06	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白N7/	高台部4/12	渥美第５型式
289	137-06	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)8.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白2.5Y7/1	高台部3/12	渥美第５型式
290	133-06	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)9.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部2/12	渥美第５型式
291	136-07	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)9.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部2/12	渥美第５型式
292	136-05	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部3/12	渥美第５型式 内面自然釉
293	133-02	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	Gi16	SZ40	(口)15.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白7.5Y7/2	口縁部2/12	産地不明 外面下半部に煤付着
400	055-06	緑釉陶器	椀	7-1東	Gi15	SK39	(高台)8.2	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/2 釉:黄	高台部3/12	猿投 平安京Ⅱ中
401	158-02	土師器	皿	7-3A	Gw2	SD56	(口)10.3 (高)2.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部11/12	
402	159-02	土師器	坏	7-3A	－	SD56	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12	
403	158-07	土師器	坏	7-3A	－	SD56	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部2/12	
404	159-01	土師器	坏	7-3A	Gw2	SD56	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部2/12	
405	159-06	土師器	坏	7-3A	－	SD56	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	
406	158-01	土師器	坏	7-3A	Gw2	SD56	(口)14.8 (高)4.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部8/12	
407	158-05	土師器	坏	7-3A	Gw2	SD56	(口)15.0 (高)5.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部6/12	
408	158-09	土師器	甕	7-3A	－	SD56	(口)16.6	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	
409	158-08	土師器	甕	7-3B	－	SD56	(口)20.0	外:ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	外:灰白10YR8/2 内:黒褐10YR3/1	口縁部1/12	
410	159-03	灰釉陶器	椀	7-3A	－	SD56	(口)15.0 (高)5.3 (高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	外:灰白5Y7/2 内:灰白2.5Y8/1～8/2	高台部7/12	釉漬け掛け
411	158-06	灰釉陶器	椀	7-3A	－	SD56	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白2.5Y8/1	口縁部6/12	
412	158-04	灰釉陶器	椀	7-3A	－	SD56	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・自然降灰	密	素地:灰白5Y7/1 釉:灰オリーブ7.5Y6/2	高台部2/12	
413	158-03	灰釉陶器	瓶	7-3A	－	SD56	(頸)6.0	外:ロクロナデ・自然降灰 内:ロクロナデ・自然降灰	密	灰白5Y7/1	頸部3/12	
414	159-09	土師質	土錘	7-3A	－	SD56	(長)4.5 (幅)2.5	オサエ・ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4 灰白10YR8/2	完形	残重量26.53ｇ
415	143-03	弥生土器	高坏	7-1東	－	SD38 杭列1	(脚柱)3.4	外:櫛描直線文 内:ナデ	密	灰白5Y7/1	脚柱部完存	
416	143-04	弥生土器	壺	7-1東	Gi20	SD38 杭列B～E	(底)7.2	外:ナデ 内:ナデ	密	灰黄2.5Y6/2	底部6/12	
417	161-01	弥生土器	壺	7-3A	－	SD56	(口)19.8	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→刻目	粗	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部2/12	
418	143-02	弥生土器	台付甕	7-1東	Gi19	SD38 杭列A	(底)6.6	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ	密	灰N4/0	底部6/12	
419	143-05	古式土師器	台付甕（S字甕）	7-1東	Gi19	SD38 杭列A	(口)14.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:灰白10YR8/2 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部1/12	

第 12 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（７）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
420	159-07	須恵器	蓋	7-3A	Fi19	SD56	(稜)11.3	外:ロクロナデ→回転ケズリ 内:ロクロナデ→オサエ・ナデ	密	外:灰白5Y7/2 内:灰白5Y7/1	小片	TK208型式併行期
421	128-05	須恵器	坏身	7-1西	Fi19	SD36	(口)12.1	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	青灰5PB6/1	小片	TK217型式併行期
422	131-06	須恵器	壺	7-1東	－	包含層	(口)21.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	外:黄灰2.5YR5/1 内:黄灰2.5YR6/1	口縁部1/12	
423	132-01	黒色土器	椀	7-1東	－	包含層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:橙5YR7/6 内:黒N2/0	高台部7/12	内面に煤付着 伊勢産か
424	131-05	陶器（山茶碗）	椀	7-1東	－	包含層	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部1/12	内面に煤付着 高台を意図的に割っている？
425	146-01	土師器	坏	7-2	Ji4	SD41	(口)13.0 (底)7.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	底部6/12	
426	146-03	土師器	坏	7-2	Jj3	SD41	(口)13.4 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→線刻	やや密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/6	口縁部4/12	内面に線刻あり
427	146-02	土師器	坏	7-2	Ji4	SD41	(口)18.0 (底)7.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→暗文	やや密	外:橙5YR7/6 内:橙5YR7/6	底部6/12	
428	146-04	土師器	甕	7-2	Ji4	SD41	(口)15.5	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	
429	146-05	土師器	坏	7-2	Jj2～Jj3	SD42	(口)15.0 (底)12.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙5YR6/4 内:にぶい橙5YR6/4	底部6/12	内面に炭化物付着
430	148-06	土師器	皿	7-2	Ji5	SD43	(口)17.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→線刻	やや密	橙5YR6/6	口縁部1/12	内面に線刻あり
431	219-09	土師質	土錘	7-2	Ji13	SD43	(長)(3.3) (幅)1.25	ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	小片	残重量4.70ｇ
432	196-01	土師器	坏	7-3D	Jg11	SD47最下層	(口)15.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	口縁部5/12	
433	195-03	土師器	坏	7-3D	Jg11	SD47最下層	(口)14.0 (高)3.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部5/12	
434	255-05	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	(口)14.4 (高)2.65 (底)9.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	
435	191-02	土師器	坏	7-3D	Jf11	SD47下層	(口)14.6 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→工具痕・ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:浅黄橙7.5YR8/6	口縁部9/12	
436	195-02	土師器	坏	7-3D	Jf11	SD47下層	(底)14.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR6/6	口縁部6/12	
437	258-03	土師器	坏	7-3D	Jg11	SD47最下層	(口)15.2 (高)3.5	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	底部2/12	
438	258-06	土師器	坏	7-3D	Jg11	SD47最下層	(口)13.8 (高)3.4	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:浅黄橙7.5YR8/4 内:橙7.5YR6/6	口縁部1/12	
439	232-01	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	(口)14.5 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	
440	232-02	土師器	坏	7-2	Ji12～j13	SD47下層	(口)14.4 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:灰白2.5Y8/2	口縁部6/12	
441	191-03	土師器	坏	7-3D	Jf11	SD47最下層	(口)14.8 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:橙5YR7/6	口縁部8/12	
442	232-04	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	(口)14.9 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部3/12	口縁部に油煙痕あり
443	232-03	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	(口)14.9 (高)2.95	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:橙5YR7/8 内:橙5YR7/6	口縁部3/12	
444	232-05	土師器	坏	7-2	Ji12～j13	SD47最下層	(口)13.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部2/12	
445	232-07	土師器	坏	7-2	Ji12～j13	SD47下層	(口)13.6 (高)2.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ヨコナデ	密	外:橙5YR6/6 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	
446	255-06	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	(口)15.0 (高)3.1 (底)8.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/4	口縁部3/12	
447	198-01	土師器	坏	7-3D	Jf11	SD47最下層	(口)15.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部7/12	
448	232-06	土師器	坏	7-2	Ji12～j13	SD47最下層	(口)12.8 (高)2.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:白灰2.5Y8/2 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部2/12	
449	233-02	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	
450	039-02	土師器	坏	7-3D	Jf11	SD47最下層	(口)16.0 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:橙7.5YR6/6	口縁部2/12	墨書「衙」
451	057-05	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	(口)13.6 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部4/12	墨書「美」
452	057-04	土師器	坏	7-3D	Jf11	SD47最下層	(底)10.0	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部3/12	墨書「衙」か（草冠）
453	040-05	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	(口)14.0 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙2.5YR6/6、にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	墨書「衙」
454	041-04	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	(底)8.0	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部2/12	墨書（破片資料）
455	042-03	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47下層	(底)10.0	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰黄2.5Y7/2	底部1/12	墨書「葉」
456	063-11	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47最下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	灰白2.5Y8/2	底部片	墨書「衙」
457	040-09	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:灰白10YR8/2 内:浅黄橙10YR8/3	底部片	墨書「衙」
458	040-08	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書「衙」
459	040-07	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47下層	(底部)7.0	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:橙7.5YR7/6	底部2/12	墨書「衙」
460	039-05	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:灰白2.5Y8/2	底部片	墨書「再」ヵ
461	064-05	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47最下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	橙5YR6/6	底部片	墨書（破片資料）
462	064-06	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47最下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	橙5YR7/6	底部片	墨書（破片資料）
463	064-04	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47最下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄橙7.5YR8/4	底部片	墨書（破片資料）
464	063-10	土師器	坏か皿	7-2	Ji14	SD47最下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:灰白10YR8/2 内:浅黄橙7.5YR8/3	底部片	墨書（破片資料）
465	056-05	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書（破片資料）
466	057-02	土師器	坏か皿	7-3D	Jg11	SD47下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	橙7.5YR7/6	底部片	墨書（破片資料）
467	056-04	土師器	坏	7-2	Ji14	SD47下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書（破片資料）

第 13 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（８）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
468	064-08	土師器　坏か皿	7-2	Ji14	SD47 最下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙5YR7/8 内:にぶい黄橙10YR7/3	底部片	墨書（破片資料）
469	230-03	土師器　坏	7-2	Ji14	SD47 最下層	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ→放射状暗文	密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
470	198-05	土師器　坏	7-3D	Jf11	SD47 下層	(口)17.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→暗文	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
471	039-01	土師器　坏	7-2	Ji14	SD47 中層	(口)16.5 (高)4.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→放射状暗文	密	橙7.5YR7/6	完形	墨書「箭」
472	233-01	土師器　皿	7-2	Ji14	SD47 最下層	(口)16.8 (高)1.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
473	256-05	土師器　甑	7-2	Ji14	SD47 下層	(底)12.6	外:板ナデ 内:板ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:灰白2.5Y8/2	底部 1/12	
474	247-02	土師器　鉢	7-2	Ji14	SD47 下層	(底)11.6	外:板ナデ 内:板ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:黄橙2.5Y5/3	底部 6/12	
475	233-03	土師器　鉢	7-2	Ji14	SD47 下層	(口)22.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	外:淡黄2.5Y8/3 内:白灰2.5Y8/2	口縁部 3/12	
476	195-01	土師器　鉢	7-3D	Jf11	SD47 最下層	(口)11.2 (高)7.5 (底)23.6	外:オサエ→ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:ナデ・板ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口6/12 底8/12	底部にヘラ記号「○」
477	041-06	土師器　甕	7-2	Ji14	SD47 下層	－	外:工具ナデ 内:ケズリ	密	外:浅黄橙10YR8/3 内:灰白10YR8/2	体部片	墨書（破片資料）
478	274-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 最下層	(口)13.6 (高)5.9 (底)14.3	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	橙5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式
479	220-08	土師質　土錘	7-2	Ji14	SD47 下層	(長)4.0 (幅)2.65	ナデ	やや密	橙2.5YR6/6	ほぼ完存	重量19.57ｇ
480	219-01	土師質　土錘	7-3D	Jg11	SD47 中層	(長)4.3 (幅)1.95	ナデ	密	灰白10YR8/2	ほぼ完存	重量11.06ｇ
481	221-01	土師質　土錘	7-2	Ji14	SD47 下層	(長)(4.2) (幅)1.65	ナデ	密	褐灰10YR5/1	一部欠損	残重量10.35ｇ
482	221-02	土師質　土錘	7-2	Ji14	SD47 下層	(長)(4.35) (幅)1.4	ナデ	やや密	灰白10YR8/2	一部欠損	残重量5.80ｇ
483	218-11	土師質　土錘	7-3D	Jg11	SD47 中層	(長)(4.6) (幅)1.75	ナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/3	一部欠損	残重量12.11ｇ
484	218-10	土師質　土錘	7-3D	Jg11	SD47 中層	(長)4.95 (幅)1.55	ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	一部欠損	残重量8.70ｇ
485	219-03	土師質　土錘	7-2	Ji14	SD47 下層	(長)5.5 (幅)1.9	ナデ	やや粗	浅黄橙7.5YR8/3	一部欠損	重量14.22ｇ
486	219-02	土師質　土錘	7-2	Ji14	SD47 下層	(長)7.0 (幅)1.4	ナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	ほぼ完存	重量12.13ｇ
487	233-05	緑釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 最下層	(口)15.8	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地::灰7.5Y6/1 釉:浅緑	口縁部 1/12	京都小塩（硬胎） 平安京Ⅱ中
488	050-01	緑釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ・ケズリ→削り出し高台→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰5Y6/1 釉:浅緑～緑	高台部 3/12	京都小塩（硬胎） 平安京Ⅱ中
489	051-02	緑釉陶器　皿	7-2	Ji14	SD47 下層	(口)14.0	外:ロクロナデ・ケズリ→輪花→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:黄灰2.5Y6/1 釉:黄緑	口縁部 2/12	東海系Ａ（硬胎） 輪花あり
490	051-01	緑釉陶器　皿	7-2	Ji14	SD47 下層	(口)13.6	外:ロクロナデ・ケズリ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:黄緑	口縁部 2/12	猿投、焼成甘い 平安京Ⅱ中
491	233-04	緑釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 最下層	(口)15.8	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地::灰7.5Y6/1 釉:深緑	口縁部 1/12	猿投（硬胎）
492	053-03	緑釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 最下層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:淡黄2.5Y8/4 釉:黄緑	高台部 3/12	猿投、焼成甘い 平安京Ⅱ中
493	052-04	緑釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 最下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:黄色	高台部 3/12	猿投（硬胎） 平安京Ⅱ中
494	053-01	緑釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 中層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰N6/1 釉:浅緑	高台部 2/12	猿投（硬胎） 平安京Ⅱ中新
495	048-05	緑釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰N6/6 釉:緑	高台部 1/12	美濃 平安京Ⅲ古
496	054-08	緑釉緑彩陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 最下層	－	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:浅緑	小片	猿投（軟胎？） 平安京Ⅱ中新
497	260-08	灰釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 最下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・釉？ 内:ロクロナデ	やや密	素地:灰白5Y7/1 内釉:オリーブ灰10Y6/2	高台部 3/12	
498	202-01	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 下層	(口)14.6 (高)4.95 (高台)7.2	外:ロクロナデ→ケズリ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	外:オリーブ灰10Y6/2 内:灰白5Y7/1	口9/12 高11/12	内面の自然降灰顕著
499	257-06	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 最下層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ	密	内外:灰白5Y8/1に近い 釉:オリーブ灰10Y6/2	高台部 3/12	
500	260-05	灰釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 最下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・釉 内:ロクロナデ	密	素地:灰白5Y7/1 釉:灰オリーブ5Y6/2	高台部 3/12	
501	257-07	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 最下層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰黄2.5Y7/2 内:灰白7.5Y7/1	高台部 1/12	釉漬け掛け
502	200-07	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 下層	(高台)8.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰7.5Y6/1 内:灰白7.5Y7/1	高台部 12/12	釉:オリーブ灰10Y6/2
503	040-01	灰釉陶器　椀か皿	7-2	Ji14	SD47 下層	(高台)6.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	素地:灰白5Y7/1 釉:灰白7.5Y7/2	高台部 1/12	墨書「業」の一部か
504	257-09	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 最下層	(高台)6.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ	密	内外:灰白5Y7/1 釉:オリーブ灰10Y5/2	高台部 2/12	
505	258-05	灰釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 最下層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 3/12	
506	200-05	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 下層	(高台)8.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	内外:灰白2.5Y7/1 釉:オリーブ灰10Y6/2	高台部 5/12	
507	260-07	灰釉陶器　瓶	7-3D	Jh11	SD47 中層	(高台)10.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白N8/0	高台部 1/12	
508	205-02	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji14	SD47 最下層	(底)11.4	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	外:灰白7.5Y7/1 内:灰白5Y7/1	底部 2/12	釉ツケガケ 釉:オリーブ灰10Y5/2
509	201-01	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji14	SD47 下層	(口)19.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12	外釉:オリーブ灰10Y6/2 内釉:オリーブ灰10Y6/2
510	259-07	灰釉陶器　瓶	7-3D	Jg11	SD47 最下層	(高台)15.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 2/12	高台部に工具痕あり
511	208-02	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji14	SD47 下層	(底)約15.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	底部 2/12	
512	199-01	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji14	SD47 下層	(体)28.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→ケズリ	密	外:灰褐7.5YR4/2 釉:オリーブ灰10Y6/2	体部 12/4	
513	192-01	須恵器　盤	7-3D	Jg11	SD47 最下層	(高台)18.0	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白N7/0	底部 2/12	
514	192-02	須恵器　鉢	7-3D	Jg11	SD47 最下層	(底)22.0	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:回転ナデ	密	外:灰7.5Y5/1 内:灰N7/0	底部 2/12	

第 14 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（９）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
515	213-01	須恵器　甕	7-2	Ji14	SD47 下層	(口)26.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	青灰5PB5/1	口縁部 1/12以下	
516	192-03	須恵器　甕	7-3D	Jg11 ～12	SD47 下層	(口)35.0	外:回転ナデ→線刻 内:回転ナデ	密	外:黒褐10YR3/2 内:暗灰黄2.5Y5/2	口縁部 1/12	
517	193-01	須恵器　甕	7-3D	Jg11	SD47 下層	(口)46.0	外:回転ナデ→カキメ→沈線文→波状文 内:回転ナデ	密	外:灰N5/0 内:褐灰10YR6/1	口縁部 1/12	外面に自然釉
518	209-01	須恵器　甕	7-2	Ji14	SD47 下層	(口)50.0	外:回転ナデ→擦痕 内:回転ナデ	密	外:暗灰N3/0 内:灰N5/0	口縁部 1/12	黄土塗布 猿投窯
519	194-02	須恵器　甕	7-3D	Jg11	SD47 最下層	(口)52.0	外:回転ナデ→波状文・沈線 内:回転ナデ	密	灰N6/1	口縁部 1/12	
520	194-01	須恵器　甕	7-3D	Jg11	SD47 最下層	(口)58.2	外:回転ナデ→波状文・沈線 内:回転ナデ	密	灰N6/1	口縁部 1/12	猿投窯
521	212-02	須恵器　甕	7-2	Ji14	SD47 下層	(頸)47.0	外:回転ナデ→タタキ 内:回転ナデ→同心円状タタキ→板ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	頸部 1/12	
522	248-03	土師器　坏	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)11.9 (高)3.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
523	250-04	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 4/12	
524	251-03	土師器　坏	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)15.7 (高)3.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 2/12	
525	250-03	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)13.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	口縁部 4/12	
526	255-07	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.0 (高)2.8 (底)7.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
527	253-01	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.4 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:橙7.5YR7/6	口縁部 5/12	
528	250-01	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR6/6～ にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 9/12	
529	196-02	土師器　坏	7-3D	Jg11	SD47 上層	(口)14.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 8/12	
530	248-04	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)15.0 (高)3.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 3/12	
531	251-02	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.0 (高)3.15	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 4/12	
532	249-01	土師器　坏	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)14.7 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
533	250-06	土師器　坏	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)14.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙10YR8/3	口縁部 6/12	
534	255-03	土師器　坏	7-2	Ji13 ～j13	SD47 上層	(口)14.8 (高)2.9 (底)10.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:橙5YR7/6 内:橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	
535	251-01	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)15.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 10/12	
536	255-01	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)16.6 (高)2.8 (底)10.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:橙5YR7/6 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
537	256-01	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)11.6 (高)2.6 (底)6.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:浅黄橙7.5YR8/3 内:灰白10YR8/2	口縁部 2/12	
538	252-01	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)13.4 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
539	253-03	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)13.5 (高)2.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙5YR7/6 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 5/12	
540	253-04	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)13.7 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 3/12	
541	252-02	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)13.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
542	250-02	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)13.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
543	195-04	土師器　坏	7-3D	Ji13	SD47 上層	(口)14.4 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 6/12	
544	248-06	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.2 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	
545	248-05	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.2 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	
546	253-05	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.4 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 5/12	
547	255-08	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
548	252-07	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.4 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙5YR6/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	
549	255-04	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)15.2 (高)2.5 (底)10.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
550	252-05	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.6 (高)2.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい橙5YR7/4	口縁部 1.5/12	
551	252-04	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.6 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
552	248-07	土師器　坏	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)15.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 3/12	
553	252-03	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.8 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
554	252-08	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.6 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙10YR6/3 内:橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	
555	248-01	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)15.6 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
556	248-08	土師器　坏	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)15.1 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	
557	255-02	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
558	246-06	土師器　坏	7-2	Jh11	SD47 最上層	(口)16.4 (高)3.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙5YR7/6 内:橙5YR7/6	口縁部 2/12	
559	250-05	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	口縁部 2/12	
560	041-03	土師器　坏	7-2	Ji11	SD47 最上層	(底)8.6	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部 1/12	墨書（破片資料）
561	254-02	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)13.6 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR6/8	口縁部 1.5/12	墨書（破片資料）
562	041-02	土師器　坏	7-2	Ji11	SD47 最上層	(底)10.0	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙5YR7/8 内:橙5YR7/8	底部 1/12	墨書（破片資料）

第 15 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（10）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
563	042-01	土師器　坏か皿	7-2	-	SD47 上層	(底)6.0	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部 2/12	墨書（破片資料）
564	042-04	土師器　坏か皿	7-2	Ji14	SD47 上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:灰白2.5Y8/2 内:にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書「葉」
565	063-02	土師器　坏か皿	7-2	Jt12	SD47 最上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:浅黄橙10YR8/4	底部片	墨書（破片資料）
566	042-02	土師器　坏か皿	7-2	-	SD47 上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい褐7.5YR5/3 内:橙7.5YR6/6	底部片	墨書（破片資料）
567	042-06	土師器　坏か皿	7-3D	Jh11	SD47 最上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	橙5YR6/6	底部片	墨書（破片資料）
568	041-05	土師器　坏か皿	7-2	Ji13	SD47 上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:橙2.5YR6/6	体部片	墨書（破片資料）
569	040-04	土師器　坏か皿	7-2	-	SD47 上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR6/4	底部片	墨書（破片資料）
570	057-01	土師器　坏か皿	7-3D	Jf11	SD47 上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	橙5YR6/6	底部片	墨書（破片資料）
571	042-05	土師器　坏か皿	7-2	-	SD47 上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい褐7.5YR5/4	底部片	線刻あり
572	230-07	土師器　坏か皿	7-2	Ji14	SD47 最上層	—	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR7/6	小片	底部外面ヘラ記号「×」か
573	229-02	土師器　坏か皿	7-2	Ji14	SD47 最上層	—	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	小片	底部内面ヘラ記号「×」か
574	229-04	土師器　坏か皿	7-2	Ji14	SD47 最上層	—	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR7/6 内:浅黄橙10YR8/3	小片	底部内面ヘラ記号「×」か
575	229-03	土師器　坏か皿	7-2	Ji11	SD47 最上層	—	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:橙5YR6/6 内:灰黄褐10YR6/2	小片	底部内面ヘラ記号「□」
576	229-05	土師器　坏か皿	7-2	Ji12	SD47 最上層	—	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	橙5YR7/6	小片	底部内面ヘラ記号「#」か
577	230-06	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)13.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ→放射状暗文	やや密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
578	230-02	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)15.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ→放射状暗文	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
579	230-05	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)15.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ→放射状暗文	やや密	橙5YR7/6	口縁部 2/12	
580	230-04	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)17.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ→放射状暗文	密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
581	229-06	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)17.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ミガキ→放射状暗文	やや密	外:橙5YR6/8 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	
582	230-01	土師器　坏	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)19.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ→放射状暗文	やや密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
583	249-05	土師器　皿	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)14.7 (高)1.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
584	249-07	土師器　皿	7-2	Ji14	SD47 最上層	(口)16.2 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙2.5YR6/6	口縁部 1/12以下	
585	249-03	土師器　皿	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)17.4 (高)1.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	口縁部 2/12	
586	249-04	土師器　皿	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)13.9 (高)1.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙7.5YR7/6	口縁部 3/12	
587	249-06	土師器　皿	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)15.4 (高)1.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12以下	
588	249-08	土師器　皿	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)15.3 (高)1.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 3/12	
589	249-02	土師器　皿	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)16.6 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
590	196-05	土師器　皿	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)16.6 (高)2.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/7	口縁部 1/12	
591	244-02	土師器　小皿	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)10.6 (高)1.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 6/12	
592	245-01	土師器　小皿	7-2	Jj18	SD47 上層	(口)9.8 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	口縁部 10/12	
593	243-07	土師器　小皿	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)10.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→工具痕・ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 6/12	
594	243-05	土師器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)11.2 (高)1.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 5/12	
595	244-01	土師器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)11.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	
596	245-03	土師器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)11.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	
597	256-02	土師器　椀	7-2	ji13	SD47 最上層	(口)11.6 (高)2.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:灰白10YR8/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
598	256-03	土師器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)12.0 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:淡橙5YR8/3 内:浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 3/12	
599	244-04	土師器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)11.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
600	244-05	土師器　椀	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)12.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 5/12	
601	243-02	土師器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.0 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙10YR8/3	口縁部 5/12	
602	243-01	土師器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)13.4 (高)3.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 5/12	
603	244-06	土師器　椀	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	外:にぶい橙5YR6/4 内:にぶい橙5YR7/4	口縁部 3/12	
604	245-05	土師器　椀	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)13.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:褐灰10YR6/1	口縁部 2/12	
605	244-07	土師器　椀	7-2	-	SD47 最上層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	
606	243-04	土師器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	
607	246-03	土師器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)17.6 (高)3.85	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
608	246-01	土師器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)16.2 (高)3.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 5/12	
609	245-04	土師器　椀	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ・暗文	やや密	橙5YR7/6	口縁部 3/12	
610	254-01	土師器　椀	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)17.6 (高)4.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ・暗文	密	外:橙5YR7/8 内:橙5YR7/8	口縁部 2/12	
611	243-03	ロクロ土師器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)11.2 (高)2.45 (底)5.2	外:回転ナデ・糸切 内:回転ナデ	やや粗	にぶい黄橙10YR7/3	口3/12 底12/12	

第 16 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（11）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
612	243-06	ロクロ土師器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)10.8 (高)1.8 (底)5.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	底部 4/12	
613	231-02	黒色土器　椀	7-2	Ji12	SD47 上層	(口)12.0 (高台)6.0	外:オサエ・ナデ→高台貼付後ナデ・ヨコナデ 内:ヨコ	密	外:黄橙7.5YR8/8 内:黒5Y1.7/1	口縁部 2/12	
614	231-01	黒色土器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)16.0	外:ナデ→ケズリ 内:ミガキ	密	外:黄橙7.5YR8/8 内:黒5Y2/1	口縁部 1/12	
615	242-03	土師器　台付皿	7-2	Ji13	SD47 最上層	(台)9.4	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ナデ	やや密	外:浅黄橙10YR8/3 内:灰黄2.5Y7/2	台部 3/12	
616	242-01	土師器　台付鉢	7-2	Ji13	SD47 最上層	(台)16.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ナデ	やや密	外:浅黄橙10YR8/3 内:浅黄橙7.5YR8/3	台部 3/12	接合面にタタキ状工具痕あり
617	242-02	土師器　台付鉢	7-2	Ji13	SD47 最上層	(台)20.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ナデ	やや密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/6	台部 1/12	接合面にタタキ状工具痕あり
618	241-05	土師器　台付鉢	7-2	Ji13	SD47 最上層	(台)19.6	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ・板ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄橙10YR8/3	台部 5/12	
619	246-04	土師器　鉢	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)20.8	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/8	口縁部 1/12	
620	246-05	土師器　鉢	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)18.8 (高)7.4 (底)10.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	橙5YR7/8	口縁部 1/12	
621	238-02	土師器　鉢	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)23.0 (高)8.2 (高台)11.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口・底 3/12	
622	256-06	土師器　鉢	7-2	Ji11	SD47 最上層	(底)15.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙7.5YR7/6	底部 2/12	
623	242-04	土師器　鉢	7-2	Ji14	SD47 最上層	(底)15.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:灰黄褐10YR6/2	底部 1/12	
624	234-01	土師器　鉢	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)27.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
625	235-04	土師器　把手付鍋	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)28.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
626	234-02	土師器　把手付鍋	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)34.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:浅黄橙7.5YR8/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
627	236-04	土師器　把手付鍋	7-2	Ji14	SD47 最上層	(口)34.0	外:ハケメ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙5YR7/3 内:灰黄褐10YR6/2	口縁部 約1/12	口縁部内面に煤付着
628	247-01	土師器　把手付鍋	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)30.0	外:オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 2/12	
629	256-07	土師器　カマド	7-2	Ji13	SD47 上層	—	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR7/2	小片	
630	241-03	土師器　甕	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)13.6	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2.5/12	
631	241-04	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)13.0	外:ハケメ→ナデ・ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 5/12	
632	238-03	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	口縁部 6.5/12	
633	237-02	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)18.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	淡黄2.5Y8/3	口縁部 2/13	
634	235-02	土師器　甕	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)19.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:灰黄褐10YR6/2	口縁部 1/12	
635	235-03	土師器　甕	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)19.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
636	237-03	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)22.0	外:ハケメ→オサエ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
637	239-02	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)23.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:淡橙5YR8/3 内:淡橙5YR8/3	口縁部 2/12	体部内面に炭化物付着
638	239-01	土師器　甕	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)24.0	外:ハケメ→オサエ→ヨコナデ 内:ハケメ・オサエ→ヨコナデ	やや密	外:浅黄橙10YR8/3 内:灰白10YR8/2	口縁部 1.5/12	
639	236-02	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.0	外:ハケメ→オサエ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 3/12	口縁部内面に炭化物付着
640	237-01	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)16.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12	口縁部内面に炭化物付着
641	236-01	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)19.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ・ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4, 灰黄褐10YR6/2	口縁部 1/12	
642	239-04	土師器　甕	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)21.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙5YR7/4 内:にぶい橙5YR6/4	口縁部 2/12	
643	236-03	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)22.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
644	238-01	土師器　甕	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→板ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ・板ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 5/12	
645	241-02	土師器　甕	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)14.0	外:ハケメ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
646	241-01	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.0	外:ハケメ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:浅黄橙10YR8/3 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 3/12	
647	256-04	土師器　甕	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)16.6	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12	
648	240-05	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)16.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:浅黄橙10YR8/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	
649	240-02	土師器　甕	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)18.2	外:ハケメ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙5YR7/3 内:にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 1/12	
650	240-01	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12	体部外面に炭化物付着
651	258-01	土師器　甕	7-3D	Jj13	SD47 上層	(口)18.7	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙5YR6/6	口縁部 2/12	
652	240-04	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)19.0	外:ハケメ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
653	240-03	土師器　甕	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)19.8	外:ハケメ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 1/12	
654	239-03	土師器　甕	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)21.0	外:ハケメ→オサエ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
655	235-01	土師器　甕	7-2	Ji14	SD47 最上層	(口)21.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→工具痕→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:黄灰2.5Y6/1	口縁部 2/12	
656	239-05	土師器　甕	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)21.2	外:ハケメ→オサエ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:灰黄2.5Y7/2	口縁部 1/12	
657	237-04	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(底)9.5	外:ハケメ→ケズリ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	外:浅黄橙7.5YR8/3 内:灰白10YR8/2	口縁部 3/12	
658	229-01	土師器　甕	7-2	Jj13	SD47 最上層	—	外:オサエ 内:ナデ	やや粗	外:灰黄褐10YR5/2 内:黒褐10YR2/2	小片	底部外面ヘラ記号「×」か 外面煤付着、内面炭化物付着
659	064-09	土師器　甕	7-2	Ji13	SD47 上層	—	外:ハケメ 内:ナデ	密	にぶい橙5YR7/4	体部片	墨書「衛」「葉」の一部か（草冠）

第 17 表　出土遺物観察表（土製品ほか）(12)

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
660	214-01	須恵器　壺	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)13.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	赤灰2.5YR6/1	口縁部 3/12	
661	214-02	須恵器　壺	7-2	Jj13	SD47 上層	(頸)5.3	外:ロクロナデ→自然降灰 内:ロクロナデ→黄土塗布	密	灰N6/1	頸部 3/12	
662	191-05	須恵器　瓶	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(高台)14.0	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白N7/0 内:灰白5Y7/1	高台部 3/12	
663	213-03	須恵器　壺	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)11.3 (頸)9.5	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ・オサエ	密	明青灰5PB7/1	口3/12 頸3/12	
664	208-01	須恵器　壺	7-2	Ji14	SD47 上層	(頸)5.3	外:ロクロナデ→回転ケズリ後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰5Y5/1～灰5Y6/1 内:にぶい黄橙10YR7/3	頸部 12/12	
665	191-06	須恵器　鉢	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(底)14.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰N5/0 内:灰N6/1	底部 2/12	横瓶の可能性あり
666	212-03	須恵器　甕	7-2	Ji12	SD47 最上層	(頸)18.4	外:ロクロナデ→タタキ 内:ロクロナデ→同心円状タタキ	密	青灰5PB6/1	頸部 1/12	取手１か所残存(双方に付くかは不明)
667	208-03	須恵器　壺	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)32.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰5Y5/1 内:灰5Y6/1	口縁部 1/12	
668	210-01	須恵器　甕	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)29.4	外:ロクロナデ→タタキ 内:ロクロナデ→同心円状タタキ→ナデ	密	外:灰白N7/0 内:灰白N7/0	頸部 5/12	
669	193-02	須恵器　甕	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(口)46.2	外:ロクロナデ→沈線→波状文→刺突文 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	口縁部 1/12以下	
670	194-03	須恵器　甕	7-3D	Jg11	SD47 上層	(口)53.0	外:ロクロナデ→波状文・沈線 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	口縁部 1/12	猿投窯
671	211-03	須恵器　甕	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)55.0	外:ロクロナデ→波状文・沈線 内:ロクロナデ	密	明青灰5PB7/1	口縁部 1/12以下	猿投窯
672	211-02	須恵器　甕	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)53.9	外:ロクロナデ→波状文・沈線 内:ロクロナデ	密	明紫灰5P7/1	口縁部 1/12	猿投窯
673	211-01	須恵器　甕	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)54.7	外:ロクロナデ→波状文・沈線 内:ロクロナデ	密	明紫灰5P7/1	口縁部 2/12	
674	212-01	須恵器　甕	7-2	Ji13	SD47 上層	(頸)46.4	外:ロクロナデ→タタキ 内:ロクロナデ→同心円状タタキ→ナデ消し	密	灰白5Y7/1	頸部 1/12	黄土塗布
675	061-06	青磁 (越州窯系)　瓶	7-2	Ji13 ～j13	SD47 上層	(底)6.6	外:ロクロナデ→高台削り出し→釉 内:ロクロナデ→釉	密	にぶい黄橙10YR7/2 釉:にぶい黄橙10YR6/3	底部 5/12	蛇ノ目高台、重ね焼き痕あり
676	234-04	緑釉陶器　瓶 把手	7-2	Ji13	SD47 最上層	—	外:工具痕 内:工具痕	密	釉:灰白5Y7/2	小片	猿投 平安京Ⅱ中以前
677	053-10	緑釉陶器　瓶 把手	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)2.5	外:ナデ 内:板ナデ？	密	素地:7.5Y7/1灰白 釉:黄緑	小片	猿投 平安京Ⅱ中
678	061-04	緑釉陶器　瓶	7-3D	Jf11	SD47 上層	(胴)15.0	外:ロクロナデ・ケズリ→釉 内:ロクロナデ・ケズリ	密	素地:明褐灰7.5YR7/2 釉:浅緑	体部 3/12	猿投 平安京Ⅱ中
679	053-09	緑釉陶器　瓶	7-3D	Jh11	SD47 最上層	—	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/2 釉:黄	肩部 1/12	猿投　硬胎？(焼成甘い) 平安京Ⅱ中
680	048-04	緑釉陶器　唾壺	7-2	Ji13	SD47 最上層	(頸)6.2	外:ロクロナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:黄緑	高台部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
681	052-01	緑釉陶器　唾壺	7-2	Ji13	SD47 最上層	(肩)10.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ(釉付着)	密	素地:橙7.5YR7/6 釉:浅緑	肩部 2/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
682	061-03	緑釉陶器　瓶	7-3D	Jf11	SD47 上層	(底)11.8	外:ロクロナデ→ヘラ切り→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:黄緑	底部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
683	053-08	緑釉陶器　瓶	7-3D	－	SD47 上層	(底)14.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰10Y6/1 釉:黄緑～緑	底部片	猿投　内面釉あり　硬胎 平安京Ⅱ中
684	054-02	緑釉陶器　瓶	7-3D	－	SD47 上層	(底)14.2	外:ロクロナデ→ミガキ？→釉 内:剥離	密	素地:灰白7.5Y7/1 釉:黄緑	底部 1/12未満	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
685	051-05	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)15.0	外:ロクロナデ・ケズリ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:黄緑	口縁部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中以前
686	051-06	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)16.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y7/1 釉:黄緑	口縁部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中以前
687	062-04	緑釉陶器　椀	7-3D	Jh11	SD47 上層	(口)12.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:黄緑	口縁部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
688	049-06	緑釉陶器　皿	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)19.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白10YR7/1 釉:浅緑	口縁部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
689	054-06	緑釉陶器　稜椀	7-3D	Jf11	SD47 上層	(口)18.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:黄	口縁部 1/12未満	猿投　硬胎？焼成甘い 平安京Ⅱ中
690	060-01	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)16.7 (高)4.5 (高台)7.7	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白N7/ 釉:黄緑	口縁部 2/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
691	051-04	緑釉陶器　椀	7-2	－	SD47 最上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:黄緑	高台部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
692	052-02	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)7.3	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	やや密	素地:にぶい黄橙10YR7/2 釉:黄緑	高台部 3/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
693	049-03	緑釉陶器　椀	7-2	－	SD47 最上層	(高台)4.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:浅緑	高台部 2/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
694	050-08	緑釉陶器　椀	7-2	Ji11	SD47 最上層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素:黄灰2.5Y6/1 釉:浅緑	高台部 4/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
695	051-07	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)8.2	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:浅緑	高台部 3/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
696	053-05	緑釉陶器　皿	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:黄緑	底部片	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
697	060-06	緑釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 上層	(高台)8.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:黄灰2.5Y6/1 釉:深緑	高台部 4/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
698	234-03	緑釉緑彩陶器　椀	7-3D	－	SD47 最上層	—	内:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	釉:黄緑 緑彩:深緑	小片	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中新相
699	054-09	緑釉緑彩陶器　椀	7-3D	Jh11	SD47 最上層	—	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	釉:黄緑に緑	小片	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中新相
700	054-05	緑釉緑彩陶器　椀	7-3D	－	SD47 上層	(口)14.0	外:ロクロナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白N7/ 釉:浅緑～緑	口縁部 1/12未満	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中新相
701	054-01	緑釉緑彩陶器　椀	7-3D	—	SD47 最上層	(口)16.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白7.5Y7/2 釉:黄緑に緑	口縁部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中新相
702	052-03	緑釉緑彩陶器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰褐7.5YR6/2 釉:黄緑	高台部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中新相
703	053-07	緑釉緑彩陶器　椀	7-3D	Jf11	SD47 上層	(底)6.0	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/2 素地:黄緑に緑	底部片	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中新相
704	054-07	緑釉陶器　椀	7-3D	Jf11	SD47 最上層	(口)15.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰5Y6/1 釉:黄緑	口縁部 1/12未満	東海系Ａ　硬胎
705	054-03	緑釉陶器　椀	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(口)15.0	外:ロクロナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白5Y6/1 釉:黄緑	口縁部 1/12	東海系Ａ　硬胎 輪花あり
706	050-05	緑釉陶器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(高台)6.7	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y7/1 釉:緑	高台部 2/12	東海系Ａ　硬胎 平安京Ⅱ中新相
707	050-02	緑釉陶器　椀	7-2	Ji11	SD47 最上層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白10YR7/1 釉:浅緑	高台部 3/12	猿投　硬胎？（焼成甘い） 平安京Ⅱ中新相

第 18 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（13）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
708	053-02	緑釉陶器　椀	7-3D	Jh11	SD47 上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/2 釉:黄緑	高台部 3/12	東海系Ａ　硬胎 平安京Ⅱ中新相
709	051-09	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白10YR8/2 釉:浅緑	高台部 3/12	猿投　硬胎？（焼成甘い） 平安京Ⅱ中新相
710	053-06	緑釉陶器　椀	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(底)8.0	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰10Y6/1 釉:緑	底部片	東海系Ａ　硬胎 平安京Ⅱ中新相
711	261-02	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ	密	素地:灰白7.5Y7/1 釉:黄緑	高台部 2/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中新相
712	261-04	緑釉陶器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→陰刻花文→釉 内:ロクロナデ	密	素地:5Y5/1 釉:緑	高台部 1/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中新相
713	060-07	緑釉緑彩陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)13.6	外:ロクロナデ・ケズリ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/2 釉:黄に緑	口縁部 1/12	防長産の可能性あり 軟胎
714	060-08	緑釉緑彩陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ・ケズリ→釉(緑釉緑彩)	密	素地:灰白2.5Y8/2 釉:黄	高台部 3/12	防長産の可能性あり 軟胎
715	050-06	緑釉陶器　皿	7-2	－	SD47 最上層	(口)11.0	外:ロクロナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白N7/ 釉:黄緑	口縁部 1/12以下	京都篠　硬胎 平安京Ⅱ新
716	049-05	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:浅緑	口縁部 1/12	京都篠　硬胎 平安京Ⅱ新
717	054-04	緑釉陶器　皿	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(口)14.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白10Y7/2 釉:黄緑	口縁部 1/12未満	京都篠　硬胎 平安京Ⅱ新
718	060-02	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(高台)6.2	外:ロクロナデ→削り出し高台→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白N7/ 釉:黄緑	高台部 8/12	京都篠　硬胎　高台外面内部釉なし 平安京Ⅱ新
719	052-05	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)6.0	外:ロクロナデ・ケズリ→削り出し高台→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰N6/ 釉:緑	高台部 9/12	京都小塩もしくは篠　硬胎 平安京Ⅱ新　高台外面内部釉なし
720	049-02	緑釉陶器　椀	7-2	Jh12	SD47 最上層	(高台)5.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	やや密	素地:素地:黄灰2.5Y6/1 釉:浅緑	高台部 2/12	近江　軟胎 平安京Ⅲ古～中
721	048-07	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白10YR8/2 釉:緑～深緑	高台部 7/12	近江　軟胎 平安京Ⅲ古～中
722	049-01	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)6.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:浅黄橙10YR8/3 釉:深緑	高台部 4/12	近江　軟胎 平安京Ⅲ古～中
723	050-07	緑釉陶器　椀	7-2	－	SD47 最上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:にぶい橙7.5YR7/3 釉:緑	高台部 6/12	近江　軟胎 平安京Ⅲ古～中
724	051-03	緑釉陶器　椀	7-2	－	SD47 最上層	(高台)7.0	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:浅黄橙10YR8/3 釉:緑	高台部 3/12	近江　軟胎 平安京Ⅲ古～中
725	050-03	緑釉陶器　椀	7-2	－	SD47 最上層	(高台)8.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:にぶい黄橙10YR7/3 釉:緑	高台部 2/12	近江　軟胎 平安京Ⅲ古～中
726	053-04	緑釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:にぶい黄橙10YR 釉:深緑	高台部 3/12	近江　軟胎 平安京Ⅲ古～中
727	049-09	緑釉陶器　皿	7-2	Ji13～j13	SD47 上層	(口)12.0	外:ロクロナデ→ミガキ？→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰N6/1 釉:緑	口縁部 1/12	美濃　硬胎 平安京Ⅲ中
728	052-07	緑釉陶器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)12.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰N6/ 釉:濃緑	口縁部 1/12	美濃　硬胎 平安京Ⅲ中　輪花あり
729	049-08	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)12.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:白灰5Y7/1 釉:緑	口縁部 1/12未満	美濃　硬胎 平安京Ⅲ中
730	049-04	緑釉陶器　椀	7-2	Jh12	SD47 最上層	(口)15.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰N5/1 釉:深緑	口縁部 1/12	美濃　硬胎 平安京Ⅲ中
731	049-07	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)20.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰N6/1 釉:浅緑(剥離)	口縁部 1/12未満	美濃　硬胎 平安京Ⅲ中
732	048-09	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)6.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:浅黄橙10YR8/3 釉:黄緑	高台部 3/12	美濃か近江　軟胎
733	199-03	緑釉陶器　瓶	7-2	Ji13～j13	SD47 上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y8/2 内:灰黄2.5Y7/2	高台部 4/12	美濃 平安京Ⅲ中
734	050-04	緑釉陶器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(高台)6.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:黄灰2.5Y6/1 釉:黄緑	高台部 3/12	美濃か近江 硬胎
735	048-03	緑釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰7.5Y6/1 釉:浅緑	高台部 2/12	美濃か近江 硬胎
736	259-05	灰釉陶器　皿	7-3D	Jg11	SD47 上層	(口)15.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	口縁部 2/12	
737	200-03	灰釉陶器　皿	7-2	Ji13～j13	SD47 最上層	(口)16.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:浅黄2.5Y7/3 内:灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12	外釉:灰白5Y8/1
738	260-01	灰釉陶器　皿	7-3D	Jg11	SD47 上層	(口)15.0 (高)2.8 (高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	口1/12 高6/12	
739	206-02	灰釉陶器　皿	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)14.0 (高)2.0 (高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内釉:オリーブ灰10Y6/2	口・高 1/12未満	
740	200-04	灰釉陶器　皿	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.0 (高)2.6 (底)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰7.5Y6/1 内:灰白5Y7/1	口1/12 高5/12	釉ツケガケ 内釉:オリーブ灰10Y5/2
741	201-02	灰釉陶器　皿	7-2	Ji13	SD47 上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y7/1 内釉:オリーブ灰10Y6/2	高台部 5/12	
742	207-03	灰釉陶器　皿	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 12/12	
743	205-05	灰釉陶器　皿	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)14.0 (高)2.0 (高台)6.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/1	口1/12 高2/12	釉:灰オリーブ5Y5/3
744	206-01	灰釉陶器　皿	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)14.6 (高)2.8 (高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	内外:灰白2.5Y7/1 釉:灰オリーブ10Y5/2	口2/12 高5/12	
745	200-02	灰釉陶器　皿	7-2	Ji13～j13	SD47 上層	(口)16.6 (高)約2.9 (底)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/1	口2/12 高3/12	釉:オリーブ灰10Y6/2
746	260-03	灰釉陶器　皿	7-3D	Jg11	SD47 上層	(高台)6.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	素地:灰5Y6/1 釉:灰白5Y7/1	高台部 4/12	
747	208-08	灰釉陶器　皿	7-2	Ji14	SD47 上層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 6/12	
748	204-02	灰釉陶器　皿	7-2	Ji11	SD47 最上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	やや粗	灰白2.5Y7/1	高台部 5/12	
749	200-06	灰釉陶器　皿	7-2	Ji13	SD47 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 8/12	
750	052-06	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)12.0	外:ロクロナデ→ケズリ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y7/1 釉:灰オリーブ5Y6/2	口縁部 1/12	
751	260-02	灰釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 上層	(口)16.2	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	口縁部 1/12	
752	204-04	灰釉陶器　椀	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)17.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	やや密	灰白7.5Y7/1	口縁部 3/12	
753	261-01	灰釉陶器　椀	7-3D	Jf11	SD47 上層	(口)12.8 (高)3.1 (高台)5.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	口1/12 高1/12	
754	257-04	灰釉陶器　椀	7-2	Jj13	SD47 上層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	内外:黄灰2.5Y6/1 釉:灰白5Y8/1	高台部 3/12	

第 19 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（14）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
755	207-02	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)7.7	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	内外:灰白5Y7/1 釉:灰白5Y8/1	高台部 6/12	
756	257-02	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13 ～j13	SD47 上層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ・内面研磨	密	内外:灰白5Y7/1 釉:灰白5Y8/1	高台部 5/12	
757	204-01	灰釉陶器　椀	7-2	Ji11	SD47 最上層	(高台)8.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ・内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部 8/12	
758	202-05	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.0 (高)4.2 (高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	やや密	内外:灰白5Y7/1 内釉:オリーブ灰10Y5/2	口4/12 高4/12	
759	257-03	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰黄2.5Y7/2	高台部 5/12	
760	257-08	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ	密	内外:灰白2.5Y7/1 釉:オリーブ灰10Y6/2	高台部 3/12	
761	259-01	灰釉陶器　椀	7-3D	Jf11	SD47 上層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 2/12	
762	208-05	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部 3/12	
763	206-05	灰釉陶器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:黄灰2.5Y6/2 内:灰白5Y7/1	高台部 10/12	釉:灰5Y6/1
764	208-09	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 上層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 7/12	
765	203-02	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)7.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	内外:灰白N8/0 釉:灰オリーブ7.5Y5/2	高台部 10/12	釉漬け掛け
766	205-03	灰釉陶器　椀	7-2	Ji11	SD47 最上層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/1	高台部 12/12	釉:オリーブ灰10Y5/2
767	202-02	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 7/12	
768	257-05	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ	密	内外:灰白5Y7/1 釉:オリーブ灰10Y5/2	高台部 4/12	
769	259-04	灰釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部 3/12	
770	258-04	灰釉陶器　椀	7-3D	Jf11	SD47 上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 5/12	
771	259-06	灰釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(高台)8.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ	密	灰5Y6/1	高台部 2/12	
772	204-03	灰釉陶器　椀	7-2	Ji11	SD47 最上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ・内面研磨	やや密	内外:灰白2.5Y8/1 釉:灰オリーブ7.5Y6/2	高台部 5/12	
773	203-03	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	やや密	灰白2.5Y7/1	高台部 5/12	
774	259-02	灰釉陶器　椀	7-3D	Jf11	SD47 上層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部 4/12	
775	257-01	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ	密	内外:灰白5Y7/1 釉:灰白5Y8/1	高台部 4/12	
776	208-07	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 上層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 4/12	
777	207-04	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内釉:オリーブ灰10Y6/2	高台部 5/12	内面に自然降灰が認められる
778	259-03	灰釉陶器　椀	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部 1/12	
779	203-05	灰釉陶器　椀	7-2	JT13	SD47 最上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	黄灰2.5Y6/1	高台部 5/12	
780	260-04	灰釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・釉 内:ロクロナデ	密	素地:灰白5Y7/1 釉:灰オリーブ5Y7/1	高台部 3/12	
781	205-04	灰釉陶器　椀	7-2	Ji11	SD47 最上層	(高台)6.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y8/1 内:灰白2.5Y7/1	高台部 4/12	
782	260-06	灰釉陶器　椀	7-3D	Jg11	SD47 上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部 4/12	
783	203-04	灰釉陶器　椀	7-2	Jj13	SD47 最上層	(高台)7.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白2.5Y7/1	高台部 11/12	底部外面ヘラ記号「#」（ドーマン）
784	201-04	灰釉陶器　椀	7-2	Ji14	SD47 上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→ヘラ書き 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰白2.5Y7/1	高台部 8/12	底部外面ヘラ記号「#」（ドーマン）
785	202-06	灰釉陶器　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ・内面研磨	密	灰白5Y7/1	高台部 5/12	
786	203-01	灰釉陶器　椀	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)15.4 (高)6.0 (高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	口1/12 高5/12	籾殻痕付着？
787	203-06	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)8.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	内外:灰白7.5Y7/1 釉:灰白10Y7/1	口縁部 2/12	
788	202-03	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji13	SD47 上層	(頸)7.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰オリーブ7.5Y6/2 内:灰白5Y7/1	頸部 5/12	
789	208-06	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji14	SD47 上層	(頸)7.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	頸部 3/13	
790	206-06	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji13	SD47 最上層	(体)13.0	外:回転ケズリ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/1	体部径 4/12	釉:オリーブ灰10Y5/2
791	201-03	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji13 ～j13	SD47 上層	(底)9.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y8/1	高台部 3/12	
792	206-03	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji12	SD47 最上層	(高台)8.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白2.5Y7/1	高台部 7/12	釉:オリーブ灰10Y5/2
793	202-04	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)10.6	外:ロクロナデ→ヘラ切り？・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	粗	灰白5Y7/1	高台部 10/12	
794	207-01	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)9.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	内外:灰白5Y7/1 釉:オリーブ灰10Y5/2	高台部 10/12	
795	200-01	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji13	SD47 上層	(高台)13.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:灰5Y6/1 内:灰白5Y7/1に近い	高台部 3/12	外釉:オリーブ灰10Y5/2
796	213-02	灰釉陶器　壺	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)15.7	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・自然釉	密	明紫灰5P7/1	高台部 3/12	
797	206-04	灰釉陶器　壺	7-2	Ji12	SD47 最上層	(高台)18.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰5Y6/1 内:灰白5Y7/1	高台部 1/12	釉:オリーブ灰10Y6/2
798	199-02	灰釉陶器　短頸壺	7-2	Ji13 ～j13	SD47 上層	(口)14.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外釉:オリーブ灰10Y5/2 内:灰5Y6/1	口縁部 2/12	
799	205-01	灰釉陶器　短頸壺	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)約11.0	外:ロクロナデ→ケズリ(上から下方向)→擦痕 内:ロクロナデ	密	外:灰5Y6/1 内:灰白N7/0	口縁部 3/12	外面肩部の自然降灰顕著 釉:オリーブ灰10Y4/2
800	208-04	陶器（山茶碗）　椀	7-2	Ji14	SD47 最上層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 6/12	渥美第３型式
801	231-04	陶器（山茶碗）　椀	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)14.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰白2.5Y7/1	高台部 11/12	渥美第４型式

第 20 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（15）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
802	280-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)12.2 (高)5.6 (底)14.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
803	272-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.8 (高)5.3 (底)14.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12以下	志摩式
804	271-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)14.9 (高)5.7 (底)16.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR6/6 橙2.5YR6/8	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
805	283-01	土師質　製塩土器	7-3D	Jf11	SD47 最上層	(口)15.0 (高)5.0 (底)15.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
806	270-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 最上層	(口)15.0 (高)4.8 (底)16.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR5/3 内:橙5YR6/6	口縁部 1/12以下	志摩式 底部砂粒
807	262-05	土師質　製塩土器	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)16.0 (高)5.3 (底)15.7	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口1/12 底1/12	志摩式 底部砂粒
808	264-03	土師質　製塩土器	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)15.2 (高)5.6 (底)15.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙2.5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
809	279-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)15.8 (高)5.0 (底)15.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 2/12	志摩式 底部籾殻痕
810	262-01	土師質　製塩土器	7-2	Jh12	SD47 最上層	(口)15.1 (高)5.1 (底)16.3	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙7.5YR6/6	口1/12 底1/12	志摩式 底部砂粒
811	282-06	土師質　製塩土器	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(口)14.8 (高)5.3 (底)16.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:明赤褐5YR5/6 内:橙5YR6/6	口縁部 2/12	志摩式 底部砂粒
812	262-06	土師質　製塩土器	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)15.6 (高)5.6 (底)15.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR7/6	口1/12 底1/12	志摩式 底部砂粒
813	264-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)15.2 (高)4.9 (底)16.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
814	272-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)15.9 (高)5.1 (底)15.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙2.5YR6/8	口縁部 1/12以下	志摩式 底部砂粒
815	283-03	土師質　製塩土器	7-3D	Jf11	SD47 最上層	(口)15.8 (高)5.3 (底)16.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
816	279-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)15.6 (高)5.5 (底)15.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	橙2.5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
817	272-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)16.5 (高)5.2 (底)15.7	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	志摩式 底部砂粒
818	271-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)16.2 (高)5.5 (底)17.3	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙7.5YR7/6 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
819	268-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)16.2 (高)4.7 (底)17.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12以下	志摩式 底部砂粒
820	271-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)17.2 (高)5.0 (底)17.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
821	270-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)17.2 (高)4.75 (底)17.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙7.5YR6/6 内:橙7.5YR7/6	口縁部 2/12以下	志摩式 底部砂粒
822	263-02	土師質　製塩土器	7-2	-	SD47 最上層	(口)17.1 (高)5.4 (底)17.5	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR7/6	口1/12 底1/12	志摩式 底部籾殻痕
823	263-01	土師質　製塩土器	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)16.8 (高)5.8 (底)17.1	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙7.5YR7/6	口1/12 底1/12	志摩式 底部籾殻痕
824	271-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)16.8 (高)5.4 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR7/8	口縁部 1/12以下	志摩式 底部砂粒
825	267-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)16.0 (高)5.6 (底)16.5	外:オサエ・ナデ	やや密	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式
826	282-01	土師質　製塩土器	7-3D	Jf11	SD47 上層	(口)17.0 (高)5.3 (底)16.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR6/6 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
827	270-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 最上層	(口)17.3 (高)5.3 (底)17.3	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式
828	270-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)16.0 (高)5.0 (底)17.5	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR6/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12以下	底志摩式 部砂粒
829	279-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)18.0 (高)5.1 (底)16.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	にぶい橙5YR6/4	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
830	262-03	土師質　製塩土器	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)17.3 (高)5.7 (底)16.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい橙5YR7/4	口1/12 底1/12	志摩式 底部砂粒
831	282-05	土師質　製塩土器	7-3D	Jg11 ～12	SD47 上層	(口)17.8 (高5.4 (底)18.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:橙2.5YR6/8	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
832	277-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)17.6 (高)5.0 (底)18.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
833	266-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)17.0 (高)5.2 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR6/6 内:橙2.5YR6/6	口縁部 1/12以下	志摩式 底部籾殻痕
834	282-03	土師質　製塩土器	7-3D	Jg11	SD47 上層	(口)18.8 (高)6.2 (底)17.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR7/4 内:浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
835	275-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13 ～ji13	SD47 最上層	(口)19.4 (高)5.4 (底)17.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:橙7.5YR7/6 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
836	277-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)18.4 (高)5.8 (底)18.3	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式
837	268-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)16.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12以下	志摩式
838	278-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	橙5YR6/6	口縁部 2/12	志摩式
839	283-05	土師質　製塩土器	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(口)16.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい橙5YR6/4	口縁部 1/12	志摩式
840	283-02	土師質　製塩土器	7-3D	-	SD47 最上層	(口)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR7/4 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12	志摩式
841	268-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)16.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	底部 1/12	志摩式

第 21 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（16）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
842	265-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(底)16.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR7/6	底部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
843	267-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(底)17.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:灰白10Y8/2	底部 1/12	志摩式 二次被熱
844	275-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji13～j13	SD47 最上層	(底)17.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	外:にぶい橙5YR7/4 内:淡橙5YR8/4	底部 1/12以下	志摩式 底部砂粒
845	266-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(底)17.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙2.5YR6/8	底部 2/12	志摩式 底部籾殻痕
846	275-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji13～j13	SD47 最上層	(底)17.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙2.5YR6/6 内:橙5YR7/6	口縁部 2/12以下	志摩式 底部籾殻痕
847	267-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(底)17.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙7.5YR7/6	底部 1/12	志摩式 底部砂粒
848	266-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(底)18.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/6	底部 1/12以下	志摩式 底部籾殻痕
849	269-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(底)19.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:灰黄褐10YR5/2 内:にぶい橙7.5YR6/4	底部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
850	282-04	土師質　製塩土器	7-3D	Jf11	SD47 上層	(口)17.4 (高)6.1 (底)16.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
851	269-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)16.3 (高)5.8 (底)20.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:橙7.5YR6/6 内:橙5YR6/6	口縁部 1/12以下	志摩式 底部砂粒
852	276-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)5.15	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR6/6	—	志摩式 底部砂粒
853	269-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(高)5.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙7.5YR6/6 内:橙5YR6/6	—	志摩式
854	273-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)5.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙7.5YR7/6 内:橙5YR7/8	—	志摩式 底部籾殻痕
855	273-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)5.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/4	—	志摩式 底部砂粒
856	269-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(高)5.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:にぶい橙5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	—	志摩式 底部砂粒
857	276-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)6.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	—	志摩式 底部籾殻痕
858	227-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)16.4 (高)5.2 (底)16.5	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	橙色5YR7/6	口縁部 2/12	志摩式 底部砂粒
859	271-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13～j13	SD47 最上層	(口)17.0 (高)5.7 (底)18.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	橙5YR7/8	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
860	265-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)17.9 (高)5.8 (底)17.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	密	橙5YR6/6	口2/12 底1/12	志摩式 底部砂粒
861	227-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)17.2 (高)5.1 (底)17.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	橙色5YR7/8	口縁部 2/12	志摩式 底部籾殻痕
862	264-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)18.9 (高)5.2 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式
863	279-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)17.0 (高)6.05 (底)18.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや粗	外:灰褐7.5YR5/2 内:にぶい褐7.5YR6/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
864	267-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)18.6 (高)5.7 (底)20.0	外:オサエ・ナデ・工具ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	橙5YR6/8	口2/12 底2/12	志摩式 底部砂粒
865	276-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)4.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	橙5YR7/6	—	志摩式 底部籾殻痕
866	274-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji13～j13	SD47 最上層	(高)5.3	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	橙5YR6/6	—	志摩式 底部籾殻痕
867	265-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji12	SD47 最上層	—	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	密	浅黄橙7.5YR8/4	小片	志摩式
868	263-04	土師質　製塩土器	7-2	-	SD47 最上層	(口)14.6 (底)15.1	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR7/6	口1/12 底1/12	志摩式 底部籾殻痕
869	281-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)13.8 (高)5.4 (底)13.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
870	281-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)13.6 (高)5.9 (底)13.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	淡赤橙2.5YR7/4	口縁部 2/12	志摩式 底部砂粒
871	266-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.2 (高)5.1 (底)13.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:橙5YR7/6	口2/12 底1/12	志摩式 底部砂粒
872	280-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.8 (高)5.5 (底)15.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	外:灰褐7.5YR6/2 内:にぶい橙5YR6/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
873	279-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)14.2 (高)5.2 (底)14.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
874	264-02	土師質　製塩土器	7-2	Jj12	SD47 最上層	(口)16.1 (高)5.6 (底)15.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
875	269-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)16.0 (高)5.4 (底)16.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR6/4 内:にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
876	281-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)15.8 (高)5.8 (底)17.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
877	268-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)16.5 (高)4.9 (底)16.5	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
878	264-05	土師質　製塩土器	7-2	-	SD47 上層	(口)18.1 (高)5.6 (底)18.3	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:淡橙5YR8/4 内:褐灰5Y6/1	口縁部 1/12	志摩式
879	272-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)15.6 (高)6.1 (底)16.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙7.5YR7/6 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	志摩式 底部砂粒
880	263-03	土師質　製塩土器	7-2	-	SD47 最上層	(口)16.4 (高)5.7 (底)17.1	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙7.5YR7/6	口1/12 底1/12	志摩式 底部籾殻痕
881	262-02	土師質　製塩土器	7-2	Jh12	SD47 最上層	(口)14.5 (高)4.9 (底)15.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR6/6	口1/12 底1/12	志摩式
882	281-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)14.8 (高)5.5 (底)15.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
883	272-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)15.0 (高)5.6 (底)15.9	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR6/6	口縁部 1/12以下	志摩式 底部砂粒

第 22 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（17）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
884	278-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)16.0 (高)5.9 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	外:にぶい橙2.5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 2/12	志摩式 底部砂粒
885	281-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)15.8 (高)4.4 (底)15.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
886	264-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)16.0 (高)5.4 (底)16.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
887	285-03	土師質　製塩土器	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(口)16.4 (高)5.55 (底)16.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR7/6 内:灰白10YR8/2	口縁部 1/12	志摩式
888	280-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)16.4 (高)5.6 (底)16.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	志摩式
889	225-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13～i14	SD47 最上層	(口)16.5 (高)6.2 (底)16.1	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙色5YR7/6 内:橙色7.5YR7/6	口縁部 2/12	志摩式
890	284-06	土師質　製塩土器	7-3D	Jf11	SD47 下層	(口)16.4 (高)5.4 (底)16.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:浅黄橙7.5YR8/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式
891	274-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)15.8 (高)5.1 (底)17.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
892	268-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)17.0 (高)4.8 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12以下	志摩式 底部砂粒
893	267-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)17.3 (高)5.2 (底)18.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12強	志摩式 底部砂粒
894	280-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)16.6 (高)5.2 (底)17.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	外:淡赤橙2.5YR7/4 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒・二次被熱
895	280-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)17.2 (高)5.25 (底)16.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
896	274-01	土師質　製塩土器	7-2	－	SD47 上層	(口)15.8 (高)5.7 (底)17.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙2.5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
897	274-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)17.0 (高)5.6 (底)18.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12以下	志摩式 底部砂粒
898	279-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 上層	(口)17.0 (高)5.5 (底)18.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:灰褐7.5YR5/2 内:にぶい褐7.5YR6/3	口縁部 1/12	志摩式
899	270-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)18.0 (高)5.2 (底)18.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙2.5YR6/6 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
900	285-04	土師質　製塩土器	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(口)18.4 (高)5.25 (底)18.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙7.5YR6/6 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
901	263-06	土師質　製塩土器	7-2	－	SD47 最上層	(口)18.9 (高)5.4 (底)18.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	褐灰7.5YR6/1	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
902	275-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji13～j13	SD47 最上層	(口)19.0 (高)5.8 (底)19.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR7/6 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
903	277-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口) 19.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 2/12以下	志摩式
904	270-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji14	SD47 最上層	(口) 19.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙2.5YR6/4 内:にぶい橙5YR7/4	口縁部 2/12以下	志摩式
905	226-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13～i14	SD47 最上層	(口)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙色5YR7/6	口縁部 2/12	志摩式
906	277-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)18.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい橙5YR6/4	口縁部 2/12以下	志摩式
907	273-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)5.7	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい黄褐10YR5/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	－	志摩式 底部砂粒
908	276-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)5.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	外:にぶい褐7.5YR6/3 内:にぶい橙2.5YR6/4	－	志摩式 底部砂粒
909	273-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)4.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙2.5YR6/6	－	志摩式 底部砂粒
910	275-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13～j13	SD47 最上層	(底)13.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	浅黄橙7.5YR8/6	口縁部 2/12以下	志摩式 底部籾殻痕
911	274-05	土師質　製塩土器	7-2	－	SD47 最上層	(底)13.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙2.5YR6/6	底部 1/12以下	志摩式 底部籾殻痕
912	263-05	土師質　製塩土器	7-2	－	SD47 最上層	－	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR7/6	－	志摩式 底部砂粒
913	272-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(底)15.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR6/8	口縁部 2/12以下	志摩式 底部籾殻痕
914	265-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)15.6 (高)5.8 (底)16.1	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒・二次被熱
915	268-04	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)17.2 (高)5.0 (底)18.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 1/12以下	志摩式
916	271-03	土師質　製塩土器	7-2	Ji12	SD47 最上層	(口)18.5 (高)4.9	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	外:橙7.5YR7/6 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12	志摩式
917	277-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)16.0 (高)5.9 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式
918	265-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(底)16.9	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	密	橙2.5YR6/8	底部 1/12	志摩式
919	265-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(底)17.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	密	橙5YR7/6	底部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
920	266-06	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(底)18.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	橙5YR6/6	底部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
921	273-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)6.1	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	外:橙7.5YR7/6 内:浅黄橙7.5YR8/6	－	志摩式
922	273-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高)5.7	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	外:橙2.5YR7/6 内:橙2.5YR7/8	－	志摩式 底部砂粒
923	281-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)19.8 (高)5.8 (底)21.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや粗	外:褐灰7.5YR5/1 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	志摩式 底部砂粒
924	267-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji11	SD47 最上層	(口)18.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	外:にぶい橙2.5YR6/4 内:にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12以下	志摩式
925	280-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)13.8 (高)5.7 (底)14.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	粗	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
926	275-01	土師質　製塩土器	7-2	Ji13～j13	SD47 最上層	(口)15.0 (高)5.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや粗	外:橙2.5YR7/6 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12以下	志摩式

第 23 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（18）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
927	277-02	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 上層	(口)17.0 (高)5.0 (底)18.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	志摩式
928	262-04	土師質　製塩土器	7-2	Jj13	SD47 最上層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	浅黄橙7.5YR8/6	口縁部1/12	志摩式
929	266-05	土師質　製塩土器	7-2	Ji13	SD47 最上層	(口)17.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	橙5YR7/6	口縁部1/12	志摩式
930	218-08	土師質　土錘	7-2	－	SD47 上層	(長)(2.3) (幅)0.95	ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	小片	残重量1.54 g
931	224-04	土師質　土錘	7-2	Ji14	SD47 上層	(長)(3.4) (幅)0.95	ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	約1/3欠損	残重量2.33 g
932	222-01	土師質　土錘	7-3D	Jf11	SD47 上層	(長)3.5 (幅)1.2	ナデ	密	灰黄2.5Y7/2	ほぼ完存	残重量4.72 g
933	222-05	土師質　土錘	7-2	Ji13	SD47 最上層	(長)4.0 (幅)1.0	ナデ	粗	灰黄褐10YR5/2	一部欠損	残重量3.51 g
934	222-02	土師質　土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)4.0 (幅)1.0	ナデ	密	橙5YR6/6	ほぼ完存	重量3.43 g
935	219-06	土師質　土錘	7-2	Ji13	SD47 上層	(長)3.65 (幅)1.1	ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	完存	重量4.33 g
936	224-09	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)4.1 (幅)1.1	ナデ	密	灰N4/0	端部欠損	残重量4.58 g
937	222-03	土師質　土錘	7-3D	Jf11	SD47 最上層	(長)(4.0) (幅)1.0	ナデ	密	橙5YR6/6	約1/3～1/4欠損	残重量4.20 g
938	218-04	土師質　土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)(3.6) (幅)1.05	ナデ	密	橙5YR6/6	約2/3残存	残重量3.43 g
939	224-07	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)4.3 (幅)1.0	ナデ	やや粗	黄灰2.5Y5/1	両端欠損	残重量2.95 g
940	224-03	土師質　土錘	7-2	Ji14	SD47 上層	(長)4.6 (幅)1.0	ナデ 紐で巻いた痕跡あり	密	橙5YR6/6	ほぼ完存	残重量3.30 g
941	224-05	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)4.5 (幅)1.0	ナデ	密	灰白10YR8/2	完存	重量4.28 g
942	223-03	土師質　土錘	7-2	Jh12	SD47 最上層	(長)3.8 (幅)1.4	ナデ	やや密	にぶい橙5YR6/4	完存	重量5.85 g
943	217-10	土師質　土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)(4.05) (幅)1.4	ナデ	やや粗	にぶい黄橙10YR7/2	約2/3残存	残重量7.20 g
944	223-04	土師質　土錘	7-2	Jh12	SD47 最上層	(長)(4.15) (幅)1.1	ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	一部欠損	残重量4.61 g
945	224-01	土師質　土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)4.7 (幅)1.25	ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	一部欠損	重量5.73 g
946	217-09	土師質　土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)(4.05) (幅)1.5	ナデ	粗	灰白2.5Y8/2	約2/3残存	残重量8.12 g
947	216-02	土師質　土錘	7-2	Ji14	SD47 上層	(長)4.3 (幅)1.35	ナデ	密	灰白2.5Y7/1	完存	重量6.24 g
948	223-02	土師質　土錘	7-2	Jh12	SD47 最上層	(長)4.85 (幅)1.2	ナデ	やや粗	灰白10YR8/2	一部欠損	重量6.21 g
949	216-10	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)5.0 (幅)1.3	ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	ほぼ完存	重量5.65 g
950	219-04	土師質　土錘	7-2	－	SD47 最上層	(長)5.0 (幅)1.3	ナデ	やや密	灰白10YR8/2	ほぼ完存	重量8.47 g
951	219-08	土師質　土錘	7-2	Ji13	SD47 最上層	(長)4.7 (幅)1.6	ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	完存	重量8.70 g
952	216-11	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)(4.8) (幅)1.8	ナデ	密	黒褐2.5Y3/1	一部欠損	残重量12.35 g
953	218-05	土師質　土錘	7-2	－	SD47 上層	(長)(5.25) (幅)1.6	ナデ	やや密	灰白2.5Y8/1	一部欠損	残重量11.80 g
954	220-06	土師質　土錘	7-2	Ji13	SD47 上層	(長)(5.1) (幅)1.7	ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	一部欠損	残重量12.32 g
955	216-09	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)5.0 (幅)1.5	ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	ほぼ完存	重量9.12 g
956	221-06	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)5.6 (幅)1.5	ナデ	密	灰黄褐10YR6/2	ほぼ完存	重量11.03 g
957	216-08	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)(5.6) (幅)1.5	ナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	ほぼ完存	残重量11.14 g
958	216-07	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)(5.4) (幅)1.5	ナデ	密	浅黄2.5Y7/3	両端欠損	残重量16.28 g
959	224-08	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)(5.05) (幅)1.7	ナデ	やや密	灰白2.5Y8/1	両端欠損	残重量11.97 g
960	224-02	土師質　土錘	7-3D	Jh11	SD47 上層	(長)5.8 (幅)1.45	ナデ	やや粗	褐灰10YR4/1	一部欠損	重量10.30 g
961	218-07	土師質　土錘	7-2	－	SD47 上層	(長)(5.8) (幅)1.4	ナデ	やや粗	灰白10YR8/2	一部欠損	残重量10.69 g
962	223-01	土師質　土錘	7-2	Jh12	SD47 最上層	(長)5.8 (幅)2.0	ナデ	やや密	淡橙5YR8/4	一部欠損	重量16.56 g
963	216-06	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)5.7 (幅)1.9	ナデ	密	浅黄2.5Y7/3	完存	重量18.13 g
964	219-05	土師質　土錘	7-2	Ji13	SD47 上層	(長)5.25 (幅)1.9	ナデ 端部を工具で切る	密	灰白5Y7/1	完存	重量13.70 g
965	220-05	土師質　土錘	7-2	Ji13	SD47 上層	(長)5.6 (幅)1.7	ナデ 端部を工具で切る	粗	褐灰5YR5/1	一部欠損	重量15.62 g
966	221-10	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)5.6 (幅)1.3	ナデ	密	灰黄褐10YR5/2	完存	重量8.39 g
967	217-05	土師質　土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)5.6 (幅)1.6	ナデ 端部を工具で切る	密	にぶい橙5YR6/4	完存	重量13.83 g
968	216-03	土師質　土錘	7-2	Ji13～ji13	SD47 上層	(長)6.3 (幅)1.45	ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	完存	重量11.91 g
969	216-04	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)7.1 (幅)1.5	ナデ	やや粗	褐灰7.5YR6/1	完存	重量14.44 g
970	221-09	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)3.1 (幅)1.4	ナデ	密	灰白10YR8/1	完存	重量5.52 g
971	224-06	土師質　土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)3.3 (幅)1.7	ナデ	やや粗	灰白2.5Y7/1	一部欠損	重量8.20 g
972	223-09	土師質　土錘	7-2	－	SD47 最上層	(長)(3.55) (幅)1.65	ナデ	粗	浅黄橙7.5YR8/4	約1/2残存	残重量7.32 g
973	218-03	土師質　土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)3.9 (幅)1.6	ナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/3	両端欠損	残重量9.24 g
974	223-07	土師質　土錘	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(長)(3.7) (幅)1.5	ナデ	密	にぶい橙5YR7/4	一部欠損	残重量7.69 g
975	218-01	土師質　土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)(4.1) (幅)2.2	ナデ	密	灰白10YR8/2	約2/6残存	残重量9.77 g

第 24 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（19）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
976	215-06	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)3.9 (幅)2.5	ナデ	やや密	灰白5Y8/1	一部欠損	残重量18.26ｇ
977	223-08	土師質	土錘	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(長)4.0 (幅)2.5	ナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	小片	残重量9.67ｇ
978	222-04	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)(3.5) (幅)2.25	ナデ	粗	にぶい黄橙10YR7/3	約1/2欠損	残重量15.802ｇ
979	222-07	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)(4.0) (幅)2.0	ナデ	密	灰白2.5Y7/1	小片	残重量6.50ｇ
980	217-03	土師質	土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)3.85 (幅)2.3	ナデ 端部を工具で切る	密	にぶい橙2.5YR6/4	完存	重量19.94ｇ
981	215-05	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)4.3 (幅)2.6	ナデ 端部を工具で切る	やや粗	にぶい橙5YR7/3	ほぼ完存	重量25.94ｇ
982	222-08	土師質	土錘	7-2	Ji11	SD47 最上層	(長)(4.8) (幅)2.5	ナデ 端部を工具で切る	密	灰白2.5Y7/1	一部欠損	残重量29.09ｇ
983	222-09	土師質	土錘	7-2	Ji11	SD47 最上層	(長)(4.6) (幅)2.2	ナデ 端部を工具で切る	密	にぶい黄橙10YR7/4	小片	残重量17.92ｇ
984	223-06	土師質	土錘	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(長)4.8 (幅)2.3	ナデ 端部を工具で切る	やや粗	橙5YR6/6	完存	重量20.94ｇ
985	221-07	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)(5.3) (幅)2.1	ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	一部欠損	残重量19.12ｇ
986	220-07	土師質	土錘	7-2	Ji13	SD47 上層	(長)(4.2) (幅)2.6	ナデ 端部を工具で切る	密	浅黄橙10YR8/3	約1/3欠損	残重量19.98ｇ
987	217-04	土師質	土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)5.0 (幅)2.7	ナデ 端部を工具で切る	密	灰白10YR8/2	一部欠損	残重量30.33ｇ
988	217-06	土師質	土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)6.0 (幅)2.6	ナデ 端部を工具で切る	やや密	にぶい橙10YR7/2	約1/2残存	残重量25.91ｇ
989	220-02	土師質	土錘	7-2	Ji13	SD47 上層	(長)7.2 (幅)2.8	ナデ 端部を工具で切る	密	灰白10YR8/2	約1/2残存	残重量20.22ｇ
990	222-06	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)2.6 (幅)1.4	ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	完存	残重量4.86ｇ
991	218-09	土師質	土錘	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(長)3.5 (幅)1.8	ナデ	密	灰白7.5Y8/1	一部欠損	残重量8.13ｇ
992	216-05	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)4.1 (幅)1.75	ナデ	密	灰白10YR8/2	ほぼ完存	重量8.52ｇ
993	221-03	土師質	土錘	7-2	－	SD47 上層	(長)4.0 (幅)2.0	ナデ 端部を工具で切る	密	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ完存	重量11.04ｇ
994	218-06	土師質	土錘	7-2	－	SD47 上層	(長)4.5 (幅)2.2	ナデ 端部を工具で切る	密	灰黄褐10YR6/2	完存	重量15.19ｇ
995	221-05	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)4.4 (幅)2.1	ナデ 端部を工具で切る	密	にぶい黄橙10YR7/2	ほぼ完存	重量16.40ｇ
996	216-01	土師質	土錘	7-2	Ji13～j13	SD47 上層	(長)4.5 (幅)1.9	ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	ほぼ完存	重量18.34ｇ
997	219-07	土師質	土錘	7-2	Ji13	SD47 最上層	(長)4.3 (幅)1.95	ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	一部欠損	残重量11.23ｇ
998	220-04	土師質	土錘	7-2	Ji13	SD47 上層	(長)4.7 (幅)2.15	ナデ 端部を工具で切る	やや密	にぶい橙7.5YR6/4	ほぼ完存	重量17.94ｇ
999	215-07	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)5.1 (幅)2.5	ナデ 端部を工具で切る	密	灰白2.5Y8/1	完存	重量27.24ｇ
1000	216-13	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)(5.35) (幅)2.5	オサエ・ナデ	密	灰白10YR8/2	小片	残重量12.61ｇ
1001	217-08	土師質	土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)3.0 (幅)2.5	ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	ほぼ完存	重量15.74ｇ
1002	215-09	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)3.8 (幅)2.7	ナデ	やや密	浅黄橙2.5YR6/3	ほぼ完存	重量12.34ｇ
1003	218-02	土師質	土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)(3.1) (幅)3.3	ナデ 端部を工具で切る	密	灰N4/0	約1/4残存	残重量15.40ｇ
1004	217-02	土師質	土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)4.1 (幅)2.85	ナデ 端部を工具で切る	やや粗	灰白2.5Y8/2	完存	重量29.71ｇ
1005	220-03	土師質	土錘	7-2	Ji13	SD47 上層	(長)4.3 (幅)3.2	ナデ	やや密	にぶい橙2.5YR6/4	完存	重量38.43ｇ
1006	220-01	土師質	土錘	7-2	Ji13	SD47 上層	(長)3.1 (幅)3.95	ナデ 端部を工具で切る	密	灰白2.5Y8/1	完存	重量35.66ｇ
1007	217-07	土師質	土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)4.5 (幅)2.8	ナデ 端部を工具で切る	やや粗	黄灰2.5Y6/1	約1/2残存	残重量20.37ｇ
1008	215-03	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)4.3 (幅)3.0	ナデ 端部を工具で切る	やや密	灰白2.5Y8/1	完存	重量26.99ｇ
1009	215-02	土師質	土錘	7-2	Ji14	SD47 上層	(長)4.9 (幅)3.1	オサエ・ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	完存	重量40.43ｇ
1010	217-01	土師質	土錘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(長)4.3 (幅)3.4	ナデ 端部を工具で切る	密	にぶい橙7.5YR7/3	ほぼ完存	重量44.46ｇ
1011	215-04	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)4.35 (幅)3.5	ナデ 端部を工具で切る	密	灰白5Y7/1	完存	重量44.89ｇ
1012	215-08	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)3.8 (幅)2.7	ナデ 端部を工具で切る	密	浅黄橙7.5YR7/2	ほぼ完存	重量18.76ｇ
1013	215-01	土師質	土錘	7-2	Ji13～j13	SD47 上層	(長)4.3 (幅)3.5	ナデ 端部を工具で切る	密	浅黄橙10YR8/3	完存	重量18.98ｇ
1014	221-04	土師質	土錘	7-2	－	SD47 最上層	(長)4.5 (幅)3.45	ナデ 端部を工具で切る	密	灰黄2.5Y7/2	完存	重量40.63ｇ
1015	221-08	土師質	土錘	7-2	Ji12	SD47 最上層	(長)5.2 (幅)3.0	ナデ 端部を工具で切る	やや密	灰白10YR8/2	ほぼ完存	重量34.90ｇ
1016	223-05	土師質	土錘	7-3D	Jg11	SD47 最上層	(長)5.0 (幅)3.25	ナデ 端部を工具で切る	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	一部欠損	残重量39.23ｇ
1017	287-11	鉄製品	刀子	7-2	Ji13	SD47 最上層	(残存長)5.4 (厚)1.0	－	－	－	両端欠損	
1018	287-02	鉄製品	釘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(残存長)2.6 (厚)0.5	－	－	－	先端欠損	
1019	287-03	鉄製品	釘	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(残存長)4.9 (厚)0.6	－	－	－	先端欠損	
1020	287-07	鉄製品	鑿？	7-2	Ji13	SD47 最上層	(残存長)6.5	－	－	－	先端欠損	
1021	287-01	鉄製品	鍔？	7-3D	Jh11	SD7 最上層	(残存長)3.8 (厚)0.7	－	－	－	一部欠損	
1022	287-06	鉄製品	鍋	7-2	Ji13	SD47 最上層	(残存高)3.8	－	－	－	底部片	内外面に煤付着 鉄成分分析結果あり
1023	287-04	鉄製品	鍋？	7-2	Ji12	SD47 最上層	(残存長)5.6 (厚)1.1	－	－	－	小片	精錬用に小片に加工済みか
1024	177-03	土師器	椀	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)17.0 (高)4.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部3/12	

第 25 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（20）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1025	177-06	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)14.0 (高)3.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 4.5/12	
1026	177-04	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 9/12	
1027	176-03	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)14.0 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰黄2.5Y7/2	口縁部 3/12	
1028	176-06	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)15.0 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 3/12	
1029	176-04	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)15.0 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3.5/12	
1030	176-05	土師器　椀	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)17.0 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:灰黄2.5Y7/2 内:灰黄2.5Y6/2	口縁部 1/12	
1031	178-03	土師器　椀	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)17.0 (高)3.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
1032	058-03	土師器　坏	7-4	Jk19	SD53 最下層	(口)15.5 (高)3.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄褐10YR5/3 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 6/12	墨書(破片資料)
1033	064-01	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)14.8 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	墨書「成」か
1034	036-01	土師器　坏	7-4	JK19	SD53 最下層	(口)13.6 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 11/12強	墨書「官」
1035	177-05	土師器　皿	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)14.8 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:灰黄褐10YR6/2	口縁部 2/12	
1036	178-04	土師器　皿	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)16.0 (高)2.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR5/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 4/12	
1037	176-01	土師器　皿	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)19.0 (高)1.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
1038	056-01	土師器　皿	7-4	Jk19	SD53 最下層	(口)16.1 (高)2.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	完形	墨書「成」
1039	038-03	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 最下層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	底部片	墨書「衛」に類似 1641と同じ文字か
1040	037-03	土師器　坏か皿	7-4	Jk18	SD53 最下層	—	外:ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい橙5YR6/4	底部片	墨書「成」
1041	037-04	土師器　坏か皿	7-4	Jk18	SD53 最下層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい黄橙10YR6/3	底部片	墨書(破片資料)
1042	178-02	土師器　甕	7-4	-	SD53 最下層	(口)16.6 (高)14.9	外:ハケメ→ケズリ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ケズリ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:灰白2.5Y8/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 10/12	
1043	178-01	土師器　鉢	7-4	-	SD53 最下層	(口)26.0	外:オサエ→ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
1044	177-01	灰釉陶器　瓶	7-4	Jk18	SD53 最下層	(口)11.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ・自然降灰	密	灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12	
1045	177-02	灰釉陶器　椀	7-4	Jk18	SD53 最下層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 3/12	
1046	036-04	灰釉陶器　椀	7-4	Jk18	SD53 最下層	(高台)8.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・自然降灰 内:ロクロナデ	密	灰白N8/	高台部 6/13	墨書「#」(ドーマン)
1047	174-05	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
1048	172-04	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.7 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 3/12	油煙痕
1049	173-03	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.0 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
1050	172-05	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.6 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 5/12	油煙痕
1051	173-02	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)16.3 (高)3.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	口縁部 8/12	
1052	168-01	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)13.5 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部 6/12	
1053	172-02	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)13.7 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	口縁部 4/12	
1054	172-01	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.4 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	口縁部 7/12	
1055	173-01	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.4 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/8	口縁部 9/12	油煙痕
1056	172-06	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.3 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	口縁部 3/12	油煙痕
1057	172-03	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)15.7 (高)2.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 9/12	
1058	175-01	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.0 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→暗文	やや密	明褐灰7.5YR7/2	口縁部 3/12	油煙痕
1059	174-03	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.95 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰白7.5YR8/2	口縁部 3/12	
1060	168-02	土師器　皿	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)15.0 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 4/12	
1061	038-05	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 中層	(底)推定9.0	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	底部片	墨書(破片資料)
1062	056-02	土師器　坏	7-4	Jk19	SD53 中層	(口)13.8 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい橙7.5YR6/4	完形	墨書「官」
1063	038-06	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 中層	(底)推定7.0	外:ナデ 内:ナデ	密	橙5YR7/6	底部片	墨書(破片資料)
1064	037-01	土師器　皿	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)16.0 (高)2.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	口縁部 3/12	墨書「口」(不明)
1065	038-02	土師器　皿	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)16.0 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 5/12	墨書「成」
1066	037-05	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 中層	—	外:ナデ 内:ナデ	やや密	橙5YR7/6	底部片	墨書「貢」
1067	038-04	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 中層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書「衛」
1068	038-01	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 中層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書「衛」
1069	063-09	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 中層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書(破片資料)
1070	064-02	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 中層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい黄橙 内:橙5YR6/8	底部片	墨書(破片資料)
1071	063-04	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	底部片	墨書(破片資料)
1072	064-07	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 中層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	底部片	墨書(破片資料)
1073	063-07	土師器　坏か皿	7-4	-	SD53 中層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙5YR6/8 内:にぶい黄橙10YR7/3	底部片	墨書(破片資料)

第 26 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（21）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1074	064-03	土師器　坏か皿	7-4	−	SD54 上層	−	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書(破片資料)
1075	063-08	土師器　坏か皿	7-4	−	SD53 中層	−	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:暗灰N3/0	底部片	墨書(破片資料)
1076	174-07	土師器　甕	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)17.6	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	外:褐灰10YR6/1 内:褐灰7.5YR4/1	口縁部 3/12	頸部内面に煤付着
1077	171-06	土師器　鉢	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)22.4 (高)8.1 (底)10.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口5/12 高2/12	
1078	174-06	土師器　鉢	7-4	Jk18	SD53 中層	(底)14.4	外:ケズリ→ハケメ 内:オサエ・ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	底部 2/12	
1079	168-03	黒色土器　椀	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ミガキ 内:ミガキ	密	外:暗灰N3/0 内:暗灰N3/0	口縁部 1/12強	伊勢在地産か
1080	168-04	黒色土器　椀	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)18.0	外:ケズリ→ヨコナデ 内:ミガキ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:暗灰N3/0	口縁部 1/12	畿内産か
1081	164-07	須恵器　壺	7-4	Jk18	SD53 中層	(頸)12.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0, 灰N6/0	頸部 3/12	
1082	169-05	灰釉陶器　皿	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)17.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:オリーブ灰10Y6/2	口縁部 1/12	釉刷毛塗り
1083	168-07	灰釉陶器　椀	7-4	−	SD53 中層	(高台)8.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白2.5Y8/1	高台部 3/12	
1084	169-06	灰釉陶器　椀	7-4	Jk18	SD53 中層	(高台)9.1	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y6/1 釉:灰オリーブ7.5Y6/2	高台部 6/12	
1085	168-09	灰釉陶器　椀	7-4	−	SD53 中層	(高台)9.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白2.5Y7/1 釉:灰白7.5Y7/2	高台部 3/12	重ね焼き痕あり 見込みにミガキあり
1086	168-05	灰釉陶器　短頸壺	7-4	Jk18	SD53 中層	(口)15.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	素地:灰白2.5Y7/1 釉:灰オリーブ7.5Y6/2	口縁部 2/12	
1087	285-05	土師質　製塩土器	7-4	−	SD53 中層	(口)17.8 (高)5.65 (底)18.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR7/6 にぶい橙5YR6/4 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1088	282-02	土師質　製塩土器	7-4	−	SD53 中層	(口)13.8 (高)5.4 (底)13.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR7/6 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1089	285-02	土師質　製塩土器	7-4	−	SD53 中層	(高)5.65	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:灰黄2.5Y6/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	−	志摩式
1090	284-01	土師質　製塩土器	7-4	−	SD53 中層	(口)15.2 (高)5.0 (底)16.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1091	286-01	土師質　製塩土器	7-4	−	SD53 中層	(口)19.2 (高)5.55 (底)19.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1092	175-06	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)13.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	
1093	171-01	土師器　坏	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)13.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	赤10R5/6, にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 4/12	
1094	164-05	土師器　坏	7-4	Jk18	SD53 上層	(口)14.0 (高)3.0 (高台)6.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:橙7.5YR7/6 内:橙7.5YR7/6	口縁部 3/12	
1095	171-02	土師器　坏	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)13.8 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 5/12	
1096	170-07	土師器　坏	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)14.2 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 6/12	
1097	175-03	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)14.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 3/12	
1098	175-05	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)15.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12	
1099	174-04	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)13.0 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	淡黄2.5Y8/3	口縁部 9/12	
1100	175-04	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)13.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
1101	174-01	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)13.8 (高)2.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
1102	170-04	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)13.8 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 3/12	
1103	174-02	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)13.7 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 10/12	
1104	170-06	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)14.6 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	
1105	169-02	土師器　坏	7-4	−	SD53 上層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰黄2.5Y7/2	高台部 2/12	
1106	041-01	土師器　坏	7-2	J118 ～120	SD53 上層	(口)15.2 (高)3.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4、浅黄橙7.5YR8/6	口縁部 3/12	墨書(破片資料)
1107	175-02	土師器　坏	7-4	J118	SD53 上層	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→暗文	やや密	明褐灰7.5YR7/2	口縁部 4/12	
1108	171-05	土師器　坏	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)15.6 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:浅黄橙7.5YR8/6 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	
1109	170-05	土師器　皿	7-2	J118	SD53 上層	(口)16.6 (高)1.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 2/12	
1110	171-03	土師器　皿	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)15.3 (高)2.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙7.5YR7/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部 7/12	
1111	171-04	土師器　坏	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)14.5 (高)2.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 4/12	
1112	037-07	土師器　坏か皿	7-4	−	SD53 上層	−	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書「第」か
1113	040-10	土師器　坏か皿	7-2	Jk20	SD53 上層	−	外:ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	底部片	墨書「再」か
1114	063-03	土師器　坏か皿	7-4	J119	SD53 上層	−	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:浅黄橙10YR8/3	底部片	墨書(破片資料)
1115	040-06	黒色土器　椀	7-2	118	SD53 上層	(底部)8.0	外:ナデ→ミガキ 内:ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:黒N2/0	底部 3/12	墨書「衙」
1116	169-10	土師器　盤？	7-4	J118	SD53 上層	(厚)3.3	外:ケズリ	密	灰黄褐10YR5/2, にぶい黄橙10YR6/3	脚部片	
1117	164-06	須恵器　瓶	7-2	J118	SD53 上層	(底)7.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰7.5Y5/1 内:灰白5Y7/1	底部 5/12	
1118	048-10	緑釉陶器　水注瓶	7-4	−	SD53 上層	(長)4.2	外:オサエ・ナデ→釉 内:不明(孔径0.6cm)	密	素地:黄橙10YR8/2 釉:緑	水注部 完形	近江　軟胎 平安京Ⅲ古～中相
1119	061-01	緑釉緑彩陶器　椀	7-4	J119	SD53 上層	(高台)9.3	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:黄に緑	高台部 1/12	猿投 平安京Ⅱ中新相
1120	048-08	緑釉陶器　椀	7-4	Jk18	SD53 上層	(口)17.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:褐灰10YR6/1 釉:黄緑	口縁部 1/12	猿投　軟胎　輪花・陰刻あり 平安京Ⅱ中

第 27 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（22）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1121	060-04	緑釉陶器	椀	7-4	J119	SD53 上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:黄灰2.5Y6/1/ 釉:黄緑	高台部 7/12	猿投　硬胎　三又トチン痕あり 平安京Ⅱ中
1122	060-05	緑釉陶器	椀	7-4	J118	SD53 上層	(高台)7.7	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:黄緑	高台部 5/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
1123	060-03	緑釉陶器	椀	7-4	J119	SD53 上層	(高台)8.7	外:ロクロナデ・ケズリ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→ミガキ→釉	密	素地:灰白N7/ 釉:黄緑	高台部 8/12	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中新相
1124	048-02	緑釉陶器	椀	7-4	−	SD53 上層	(高台)8.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/2 釉:緑	高台部 1/12未満	近江　軟胎 平安京Ⅲ古～中
1125	169-08	灰釉陶器	皿	7-4	J119	SD53 上層	(高台)7.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→釉	密	灰白5Y7/1	高台部 5/12	釉刷毛塗り
1126	164-03	灰釉陶器	皿	7-4	−	SD53 上層	(口)16.0 (高)2.7 (高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	外:黄灰2.5Y6/1 釉:灰白2.5Y7/1	口1/12 高1/12	
1127	164-04	灰釉陶器	皿	7-2	J118	SD53 上層	(口)16.0 (高)2.8 (高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白7.5Y7/1 釉:灰オリーブ5Y5/2	口1/12 高3/12	
1128	168-06	灰釉陶器	椀	7-4	J118	SD53 上層	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→釉	密	灰白2.5Y7/1	口縁部 5/12	
1129	169-09	灰釉陶器	椀	7-4	J118	SD53 上層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→釉	密	灰白2.5Y7/1	高台部 1/12	
1130	164-02	灰釉陶器	椀	7-4	Jk19	SD53 上層	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→自然降灰？	密	素地:灰白5Y7/1 釉:灰白10Y7/1	高台部 2/12	
1131	169-03	灰釉陶器	椀	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 7/12	
1132	169-04	灰釉陶器	椀	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(高台)8.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	外:灰黄2.5Y7/2 内:灰白5Y7/1	高台部 4.5/12	
1133	164-01	灰釉陶器	椀	7-2	J118	SD53 上層	(口)14.0 (高)4.4 (高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ	密	素地:灰白5Y7/1 釉:灰白10Y7/1	口1/12 高5/12	釉漬け掛け
1134	169-01	灰釉陶器	椀	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→自然降灰	密	素地:灰黄7.5Y7/2 釉:オリーブ黄7.5Y6/3	高台部 4.5/12	
1135	168-08	灰釉陶器	椀	7-4	J118	SD53 上層	(高台)11.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白5Y8/1 釉:灰白7.5Y7/2	高台部 4/12	
1136	169-07	灰釉陶器	椀	7-4	−	SD53 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白2.5Y7/1	高台部 約1/12	釉刷毛塗り
1137	226-06	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)14.0 (高)5.6 (底)15.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙色5YR7/6	口縁部 2/12	志摩式 底部砂粒
1138	227-04	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)14.0 (高)5.8 (底)14.9	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:灰黄褐色10YR5/2 内:にぶい橙色7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式
1139	225-04	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)15.2 (高)5.4 (底)14.9	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい橙色7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1140	284-02	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)16.6 (高)5.8 (底)15.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:にぶい黄橙10YR7/4 灰黄褐10YR6/2 内:浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1141	284-03	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)15.8 (高)4.95 (底)16.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:浅黄橙10YR8/3 淡橙5YR8/4 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1142	284-05	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)16.6 (高)5.2 (底)17.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1143	286-02	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)15.8 (高)5.6 (底)16.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1144	226-04	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)16.0 (高)5.0 (底)16.7	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙色5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1145	226-05	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)15.3 (高)5.4 (底)16.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙色5YR6/6 内:橙色5YR7/8	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1146	227-02	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)17.6 (高)5.0 (底)17.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙色5YR7/8 内:橙色5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1147	226-01	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)18.4 (高)5.5 (底)18	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい橙色7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1148	226-03	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)18.1 (高)5.6 (底)17.9	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	外:橙色5YR7/6 内:にぶい橙色7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1149	227-01	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)16.8 (高)6.1 (底)16.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	やや密	外:にぶい橙色7.5YR6/4 内:にぶい橙色7.5YR7/4	口縁部 2/12	志摩式 底部砂粒
1150	284-04	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)16.4 (高)5.5 (底)16.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1151	225-02	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)15.3 (高)5.45 (底)17.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや密	外:にぶい橙色7.5YR6/4 内:にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部 4/12	志摩式 底部砂粒
1152	225-05	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)16.2 (高)5.4 (底)16.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや密	外:にぶい橙色7.5YR7/4 内:にぶい橙色7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1153	227-03	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)18.6 (高)5.3 (底)18.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや密	外:にぶい褐色7.5YR5/4 内:橙色7.5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1154	225-03	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(口)17.4 (高)5.75 (底)17.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや密	外:にぶい橙色7.5YR6/4 内:にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部 2/12	志摩式 底部籾殻痕
1155	225-06	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(底)18.9	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや密	外:にぶい橙色7.5YR6/4 内:にぶい橙色7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部籾殻痕
1156	285-01	土師質	製塩土器	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(高) 5.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄橙7.5YR8/3	−	志摩式
1157	170-03	土師質	土錘	7-4	J118	SD53 上層	(長)4.35 (幅)2.6	オサエ・ナデ→板状工具	密	灰白5Y8/1	完形	残重量20.66ｇ
1158	170-02	土師質	土錘	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(長)4.2 (幅)2.4	オサエ・ナデ	密	黄灰2.5Y5/1	完形	残重量22.37ｇ
1159	170-01	土師質	土錘	7-4	J118 ～119	SD53 上層	(長)5.1 (幅)2.0	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/1	ほぼ完形	残重量18.46ｇ
1160	165-01	瓦	平瓦	7-2	J118	SD53 上層	(厚)2.6	外:縄目 内:布目	密	灰N6/0	破片	焼成良好
1213	098-08	土師器	坏	7-2	Ji12	SK48	(口)13.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12	
1214	097-04	土師器	坏	7-2	Ji12	SK48	(口)10.5 (高)2.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/2	口縁部 12/12	
1215	244-08	土師器	坏	7-2	Ji12	SK48	(口)10.9 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙7.5YR8/3	完形	口縁部に油煙痕あり
1216	245-02	土師器	坏	7-2	Ji12	SK48	(口)11.3 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	灰白10YR8/2	口縁部 6/12	

第 28 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（23）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1217	099-02	土師器　坏	7-2	Ji12	SK48	(口)11.0 (高)約3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部11/12	
1218	099-01	土師器　坏	7-2	Ji12	SK48	(口)11.0 (高)2.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	淡黄2.5Y8/3	口縁部4/12	
1219	098-05	土師器　坏	7-2	Ji12	SK48	(口)11.3 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部12/12	
1220	097-05	土師器　坏	7-2	Ji12	SK48	(口)11.5 (高)2.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰白2.5Y8/2	口縁部11/12	
1221	098-04	土師器　坏	7-2	Ji12	SK48	(口)13.4 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部4/12	
1222	098-02	土師器　坏	7-2	Ji12	SK48	(口)12.7 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	ほぼ完形	
1223	098-06	土師器　坏	7-2	Ji12	SK48	(口)14.0 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:灰黄2.5Y7/2 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部1.5/12	
1224	098-03	土師器　坏	7-2	Ji12	SK48	(口)15.0 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白10Y8/2	口縁部2/12	
1225	098-07	土師器　椀	7-2	Ji12	SK48	(口)15.0 (高)4.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→板ナデ？→ヨコナデ	密	外:浅黄橙10YR8/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部4/12	
1226	097-02	土師器　甕	7-2	Ji12	SK48	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部3/12	
1227	098-01	土師器　甕	7-2	Ji12	SK48	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	口縁部2/12	
1228	097-01	土師器　甕	7-2	Ji12	SK48	(口)23.0	外:ハケメ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	
1229	097-03	土師器　鉢	7-2	Ji12	SK48	(口)23.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	
1230	099-05	灰釉陶器　椀	7-2	Ji12	SK48	(口)15.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	口縁部1/12	
1231	099-03	灰釉陶器　椀	7-2	Ji12	SK48	(口)14.4 (高)6.3 (高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	口縁部6/12	高台端部に籾殻痕あり
1232	099-07	灰釉陶器　椀	7-2	Ji12	SK48	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰白2.5Y8/1に近い	高台部5/12	釉刷毛塗り 墨書（破片資料）
1233	099-06	灰釉陶器　椀	7-2	Ji12	SK48	(口)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y8/1	口縁部2/12	
1234	099-04	灰釉陶器　瓶	7-2	Ji12	SK48	(口)11.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部完存	体部内面に自然釉付着
1235	261-03	緑釉陶器　皿	7-2	Ji12	SK48	(高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→ミガキ→釉 内:ロクロナデ	密	素地:灰7.5Y5/1 釉:黄緑	高台部1/12	猿投
1236	287-05	鉄製品　釘	7-2	Ji12	SK48	(長)4.0 (厚)1.0	－	－	－	ほぼ完形	
1237	244-03	土師器　坏	7-2	Jj18	SD49下層	(口)10.6 (高)3.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部3/12	
1238	057-06	土師器　坏	7-2	Jj18	SD49下層	(底)5.0	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR6/3	底部6/12	墨書「棄」
1239	040-02	土師器　皿	7-2	Jj18	SD49下層	(口)15.6 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部1/12	墨書「衙」
1240	039-04	土師器　坏か皿	7-2	Jj18	SD49下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙5YR6/4 内:にぶい黄褐10YR5/3	底部片	墨書「棄」
1241	040-03	土師器　坏か皿	7-2	Jj18	SD49下層	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:橙7.5YR7/6	底部片	墨書「衙」
1242	156-02	土師器　鉢	7-2	Jj18	SD49下層	(口)21.0 (頸)18.3	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ハケメ	密	橙5YR7/6	口1/12 頸2/12	
1243	154-06	ロクロ土師器　皿	7-2	Jj18	SD49下層	(高台)6.6	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白10YR8/2	高台部1/12	
1244	051-08	緑釉陶器　椀	7-2	Jj18	SD49下層	(高台)6.8	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/2 釉:黄	高台部1/12	猿投　軟胎 平安京Ⅱ中新相
1245	156-06	灰釉陶器　椀	7-2	Jj18	SD49下層	(口)16.2	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	灰白2.5Y8/1	口縁部1/12	釉刷毛塗り
1246	039-03	灰釉陶器　椀	7-2	Jj18	SD49下層	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・自然降灰	密	灰白5Y7/1	高台部3/12	墨書「棄」 転用硯、内面に朱墨付着
1247	156-04	土師器　皿	7-4	Jj18	SD49上層	(口)11.3 (高)1.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部2/12	
1248	156-05	土師器　皿	7-4	Jj18	SD49上層	(口)13.4 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部5/12	
1249	253-02	土師器　坏	7-2	i17	SD49上層	(口)14.8 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部2/12	
1250	057-03	土師器　坏	7-4	Jj18	SD49上層	(口)17.4 (高)3.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部2/12	墨書「棄」か
1251	155-05	土師器　皿	7-4	JK18	SD49上層	(口)16.3 (高)2.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部1/12	
1252	155-06	土師器　皿	7-4	Jj18	SD49上層	(口)17.4 (高)2.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部3/12	
1253	037-06	土師器　坏か皿	7-4	Jj18	SD49上層	－	外:ナデ 内:ナデ	やや密	橙5YR7/6	底部片	墨書（破片資料）
1254	155-04	ロクロ土師器　皿	7-4	Jj18	SD49上層	(底)5.2	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	橙5YR7/6	底部9/12	
1255	155-03	ロクロ土師器　椀	7-4	Jj18	SD49上層	(高台)5.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	浅黄橙10YR8/3	台部12/12	
1256	155-02	土師器　台付椀	7-4	Jj18	SD49上層	(高台)5.8	外:ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	台部10/12	
1257	156-01	土師器　甕	7-4	Jj18	SD49上層	(口)15.6 (頸)13.6	外:オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口2/12 頸2/12	
1258	156-03	土師器　甕	7-4	Jj18	SD49上層	(口)19.2 (頸)16.8	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口3/12 頸3/12	
1259	037-02	土師器　甕	7-4	Jj18	SD49上層	－	外:ハケメ 内:ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	体部片	墨書「□」（釈読できない）
1260	151-02	須恵器　鉢	7-4	Jj18	SD49上層	(底)16.0	外:ロクロナデ→タタキ 内:板ナデ・ナデ	密	外:灰N4/0 内:灰N6/1	高台部2/12	
1261	157-02	須恵器　甕	7-4	Jj18	SD49上層	(口)46.1	外:ロクロナデ→波状文 内:ロクロナデ	密	明紫灰5P7/1	口縁部1/12	波状文５本単位
1262	157-01	須恵器　甕	7-4	Jj18	SD49上層	(口)47.8	外:ロクロナデ→波状文 内:ロクロナデ	密	明紫灰5P7/1	口縁部1/12	波状文４本単位
1263	150-02	灰釉陶器　皿	7-4	Jj18	SD49上層	(高台)7.35	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部12/12	自然降灰が認められる
1264	154-01	灰釉陶器　皿	7-4	Jj18	SD49上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	明紫灰5P7/1	高台部1/12	
1265	150-03	灰釉陶器　皿	7-4	Jj18	SD49上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部3/12	

第 29 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（24）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1266	150-04	灰釉陶器	椀	7-4	Jj18	SD49 上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y8/1	高台部 3/12	
1267	150-05	灰釉陶器	椀	7-4	Jj18	SD49 上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 3/12	
1268	150-07	灰釉陶器	椀	7-4	Jj18	SD49 上層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 4/12	
1269	150-06	灰釉陶器	椀	7-4	Jj18	SD49 上層	(高台)10.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 3/12	
1270	154-03	灰釉陶器	椀	7-4	Jj18	SD49 上層	(高台)7.9	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部 4/12	
1271	151-01	灰釉陶器	瓶	7-4	Jj18	SD49 上層	(高台)14.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部 2/12	
1272	154-02	陶器 (山茶碗)	椀	7-4	Jj18	SD49 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	明青灰5PB7/1	高台部 9/12	猿投・知多第５型式
1273	150-01	陶器 (山茶碗)	椀	7-4	Jj18	SD49 上層	(高台)8.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白N8/0	高台部 6/12	知多・猿投第５型式
1274	154-05	陶器 (山茶碗)	椀	7-2	Jj18	SD49 上層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y8/1	高台部 8/12	渥美第５型式
1275	152-01	瓦	丸瓦	7-4	Jj18	SD49 上層	(残存幅)14.2	凹面:布 凸面:縄目	密	浅黄橙10YR8/3	6/12	焼成甘い
1276	154-07	土師質	土錘	7-4	Jj18	SD49 上層	(長)4.0 (幅)1.4	オサエ・ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	一部残存	残重量8.44ｇ
1277	062-03	土製品	土錘	7-2	k18	SD49 上層	(推定径)2.5	外:ナデ 内:ナデ	密	灰白7.5YR8/2	一部残存	
1278	062-01	土製品	土馬	7-2	k18	SD49 上層	(横)12.4 (縦)7.6	外:ナデ 内:ナデ	密	灰白2.5Y8/2	体部片側片	中空、厚み2.9cm
1279	081-04	土師器	坏	7-5	Jv21	SD52 下層	(口)13.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
1280	180-01	土師器	皿	7-4	Jq20	SD52 下層	(口)14.4 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙5YR7/6	口縁部 2/12	
1281	081-03	土師器	坏	7-5	Jv21	SD52 下層	(口)13.1	外:オサエ後ナデ 内:工具ナデ・ナデ	密	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
1282	081-07	土師器	坏	7-5	Jv21	SD52 下層	(口)14.1	外:オサエ→ナデ 内:工具ナデ・ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	
1283	179-01	土師器	坏	7-4	Jr20	SD52 下層	(口)16.0 (高)3.25	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	
1284	179-02	土師器	坏	7-4	Jr20	SD52 下層	(口)19.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:明黄褐10YR6/4 内:灰黄褐10YR6/2	口縁部 1/12	
1285	179-03	土師器	皿	7-4	Jq20	SD52 下層	(口)16.0 (高)1.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
1286	179-07	土師器	皿	7-4	立会	SD52 下層	(口)16.4 (高)2.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	外:浅黄橙7.5YR8/4 内:黄橙10YR8/6	口縁部 5/12	
1287	180-08	土師器	皿	7-4	Jp20	SD52 下層	(口)9.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 3/12	
1288	181-04	土師器	皿	7-4	Jp20	SD52 下層	(口)9.2 (高)2.0 (底)4.8	外:オサエ・ナデ→ケズリ→ハケメ→ヨコナデ 内:ケズリ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 6/12	
1289	181-02	土師器	甕	7-4	立会	SD52 下層	(口)17.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	外:浅黄橙10YR8/3 内:白灰2.5Y7/1	口縁部 8.5/12	
1290	183-05	土師器	甕	7-4	Jr20	SD52 上層	(口)14.4	外:オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙5YR6/4 内:灰白10YR8/2	口縁部 4/12	
1291	184-02	土師器	甕	7-4	Jr20	SD52 下層	(口)26.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	橙7.5YR6/6	口縁部 3/12	
1292	180-03	土師器	甕	7-4	Jp20	SD52 下層	(口)25.0	外:ハケメ→オサエ→ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ→ヨコナデ	やや密	外:橙2.5YR7/6 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
1293	184-01	土師器	甕	7-4	Jr20	SD52 下層	(口)22.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	
1294	184-03	土師器	甕	7-4	Jr20	SD52 下層	(口)24.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:褐灰10YR4/1 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12	
1295	183-01	須恵器	甕	7-4	Jn18	SD52 上層	(口)24.6	外:ロクロナデ→ヘラ切り・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	粗	外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 2/12	
1296	182-01	土師器	甕	7-4	Jn18	SD52 上層	(口)26.45	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ→ヨコナデ	やや粗	黒褐10YR3/1	口縁部 9/12	
1297	180-02	土師器	鉢	7-4	Jr20	SD52 下層	(口)24.6	外:ハケメ→ヨコナデ→磨滅 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
1298	181-01	土師器	鍋	7-4	立会	SD52 下層	(口)33.0	外:ハケメ→ケズリ→オサエ→ヨコナデ 内:ケズリ→ナデ→板ナデ→ヨコナデ	やや粗	外:灰白2.5Y8/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 1.5/12	
1299	061-02	緑釉陶器	瓶	7-4	Jm19	SD52 上層	－	外:ロクロナデ→陰刻→釉 内:ロクロナデ	密	素地:灰白N7/ 釉:浅緑	体部片	猿投　硬胎 平安京Ⅱ中
1300	048-01	緑釉陶器	椀	7-4	Jr20	SD52 上層	(高台)5.8	外:ロクロナデ→高台削出→釉 内:ロクロナデ→ミガキ不明→釉	密	素地:灰N6/1 釉:緑	高台部 5/12	東海系Ａ　硬胎 平安京Ⅱ新相
1301	181-03	須恵器	坏	7-4	Jr20	SD52 下層	(底)10.0	外:ロクロナデ→糸切 内:ロクロナデ	密	灰10Y6/1	口縁部 2/12	
1302	186-05	須恵器	坏	7-4	Jr20	SD52 下層	(口)13.4 (高)3.9 (底)8.9	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	明青灰5PB7/1	口縁部 1/12	美濃須衛窯
1303	183-02	須恵器	壺	7-4	Jn18	SD52 上層	(高台)9.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰N6/1 内:灰白N7/0	口縁部 1/12	
1304	183-04	灰釉陶器	瓶	7-4	Jp20	SD52 下層	(口)9.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	灰白7.5Y7/1	口縁部 2/12	
1305	187-01	灰釉陶器	瓶	7-4	－	SD52 上層	(高台)9.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	明青灰5PB7/1	高台部 3/12	
1306	186-02	灰釉陶器	三足盤？	7-4	－	SD52 上層	－	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	明紫灰5P7/1	高台部 1/12	
1307	036-03	灰釉陶器	皿	7-4	Jq21	SD52 下層	(口)14.7 (高)2.3 (高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 8/12	墨書「□」（釈読できない） 自然降灰顕著
1308	186-04	灰釉陶器	椀	7-4	Jm19	SD52 上層	(口)15.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	明紫灰5RP7/1	口縁部 2/12	輪花あり 釉漬け掛け
1309	080-03	灰釉陶器	椀	7-5	Jv21	SD52 下層	(高台)8.9	外:ロクロナデ・高台部貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 6/12	底部線刻あり
1310	186-03	灰釉陶器	椀	7-4	Jm18	SD52 上層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y8/1	高台部 6/12	
1311	185-06	灰釉陶器	椀	7-4	Jm19	SD52 上層	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 3/12	
1312	187-03	灰釉陶器	椀	7-4	Jr20	SD52 下層	(高台)7.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白10YR8/1	高台部 2/12	
1313	183-03	灰釉陶器	椀	7-4	Jp20	SD52 下層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→釉	密	灰黄2.5Y7/2	高台部 3/12	

第 30 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（25）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1314	185-07	灰釉陶器	椀	7-4	－	SD52 上層	(高台)8.9	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 3/12	
1315	186-06	灰釉陶器	椀	7-4	Jm19	SD52 上層	(高台)7.1	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y8/1	高台部 完存	釉漬け掛け
1316	187-02	灰釉陶器	椀	7-4	－	SD52 上層	(高台)8.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	明紫灰5P7/1	高台部 9/12	
1317	187-05	陶器（山茶碗）	皿	7-4	Jn18	SD52 下層	(高台)5.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	明紫灰5P7/1	高台部 12/12	渥美第４型式
1318	185-04	陶器（山茶碗）	椀	7-4	－	SD52 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 3/12	渥美第４型式
1319	185-05	陶器（山茶碗）	椀	7-4	Jn19	SD52 上層	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 3/12	渥美第４型式
1320	186-01	陶器（山茶碗）	椀	7-4	Jn19	SD52 上層	(高台)8.1	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部 6/12	渥美第４型式
1321	187-04	陶器（山茶碗）	椀	7-4	Jn18-19	SD52 下層	(高台)9.1	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 5/12	渥美第４型式
1322	185-01	陶器（山茶碗）	椀	7-4	－	SD52 上層	(口)17.0 (高)5.1 (底)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	底部 完存	知多・猿投第４型式
1323	185-02	陶器（山茶碗）	椀	7-4	－	SD52 上層	(口)16.4 (高)5.0 (底)7.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	口2/12 底7/12	知多・猿投第４型式
1324	080-01	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Jv21	SD52 下層	(口)17.7 (高)5.5 (高台)7.6	外:ロクロナデ・高台部貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白10YR7/1	高台部 12/12	渥美第４型式
1325	095-01	土師質	製塩土器	7-5	－	SD52 上層	(口)15.6	外:オサエ→ナデ 内:オサエ→ナデ	粗	外:橙5YR6/6 内:橙5YR6/8	口縁部 1/12	志摩式
1326	286-03	土師質	製塩土器	7-4	Jr20	SD52 下層	(口)16.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:橙5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式
1327	283-06	土師質	製塩土器	7-4	Jr20	SD52 下層	(底)16.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/6 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1328	285-06	土師質	製塩土器	7-4	Jp20	SD52 下層	(底)17.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい黄橙10YR7/3	底部 1/12	志摩式 底部砂粒
1329	179-05	土師質	製塩土器	7-4	立会	SD52 下層	(口)16.0 (高)5.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	粗	橙2.5YR5/6	口縁部 1/12	志摩式
1330	283-04	土師質	製塩土器	7-4	Jr20	SD52 下層	(口)16.8 (高)5.3 (底)18.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1331	179-06	土師質	製塩土器	7-4	立会	SD52 下層	(口)16.0 (高)5.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	にぶい橙5YR6/4	口縁部 1/12	志摩式
1332	180-04	土師質	土錘	7-4	Jn19	SD52 上層	(長)5.0 (幅)2.4	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/2	完形	重量18.98ｇ
1333	180-06	土師質	土錘	7-4	Jp20	SD52 下層	(長)4.55 (幅)2.5	オサエ・ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	完形	重量20.98ｇ
1334	180-05	土師質	土錘	7-4	Jm19	SD52 下層	(長)5.75 (幅)2.0	オサエ・ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	完形	重量14.09ｇ
1335	180-07	土師質	土錘	7-4	Jm18	SD52 上層	(長)4.2 (幅)3.2	オサエ・ナデ	密	灰黄2.5Y6/2	完形	重量44.02ｇ
1336	061-08	石帯	丸鞆	7-4	立会	SD52 下層	(最大長)3.5 (最大高)2.3	表面・側面研磨	－	暗青灰10BG4/1	完形	重量9.32ｇ、幅0.7cm 石材：メノウ
1337	061-07	石杁	丸鞆	7-4	Jn18	SD52 下層	(長)4.35 (高)2.85	表面・側面研磨	－	暗灰N3/	ほぼ完形	重量16.26ｇ、幅0.7cm 石材：滑石
1339	196-03	土師器	皿	7-3D	Jg11	SD84	(口)8.3 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白2.5Y8/1	完存	
1340	196-04	土師器	皿	7-3D	Jg11	SD84	(口)9.2 (高)2.85	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白2.5Y8/1	口縁部 8/12	
1341	258-07	土師器	皿	7-3D	Jg11	SD84	(口)10.0 (高)2.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	灰白2.5Y8/1	口縁部 3/12	
1342	191-01	ロクロ土師器	皿	7-3D	Jf11	SD84	(口)10.0 (高)2.0	外:回転ナデ→糸切 内:回転ナデ	密	橙5YR7/8	完形	底部径5.0
1343	258-02	ロクロ土師器	椀	7-3D	Jg11	SD84	(底)6.2	外:回転ナデ 内:回転ナデ	粗	灰白2.5Y8/1	底部 12/12	
1344	191-04	ロクロ土師器	椀	7-3D	Jf11	SD84	(高台)6.8	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:回転ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	底部 10/12	
1345	198-06	ロクロ土師器	椀	7-3D	Jf11	SD84	(高台)6.4	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:回転ナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/3	高台部 12/12	
1346	197-01	陶器（山茶碗）	椀	7-3D	Jg11	SD84	(高台)7.7	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや密	灰白5Y7/1	高台部 7/12	猿投第４型式
1347	197-02	陶器（山茶碗）	椀	7-3D	Jg11	SD84	(高台)7.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ	やや密	灰白5Y7/1	高台部 1/12	猿投第４型式
1348	197-03	陶器（山茶碗）	椀	7-3D	Jg11	SD84	(高台)9.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	やや密	灰白5Y7/1	高台部 6/12	渥美第５型式
1349	197-04	瓦器	椀	7-3D	Jf11	SD84	(口)14.6	外:ヨコミガキ 内:ヨコミガキ	密	灰N4/0	高台部 2/12	大和型
1350	159-04	土師器	鍋	7-3D	Jb12	SK85	(口)28.0	外:磨滅→ヨコナデ 内:ヨコ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 5/12	
1351	159-05	土師器	鍋	7-E	－	SD87	(口)26.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:灰白10YR8/2	口縁部 1/12	16世紀
1352	159-08	土師質	土錘	7-3E	－	SD87	(長)3.4 (幅)1.4	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/2	ほぼ完形	残重量6.59ｇ
1353	149-05	土師器	高坏	7-2	Ji3	pit1 掘方	(口)17.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	橙5YR6/6	口縁部 4/12	内外面ともに炭化物付着
1354	149-06	灰釉陶器	皿	7-2	Jj12	pit2	(高台)8.2	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 3/12	
1355	149-02	土師質	製塩土器	7-2	Jj11	pit1	－	オサエ・ナデ	やや密	外:橙2.5YR6/6 内:にぶい橙5YR7/4	小片	志摩式
1356	149-01	土師質	製塩土器	7-2	Jj11	pit1	－	オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	小片	志摩式
1357	149-04	土師質	製塩土器	7-2	Jj11	pit1	－	オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい橙5YR6/4	小片	志摩式
1358	149-03	土師質	製塩土器	7-2	Jj11	pit1	－	オサエ・ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	小片	志摩式
1359	152-02	土師器	皿	7-4	Jo20	包含層	(口)15.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	
1360	063-06	土師器	坏か皿	7-4	J020	遺構検出	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:橙7.5YR7/6	底部片	墨書「□」（不明）
1361	064-10	緑釉陶器	瓶	7-4	－	包含層	－	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	素地：浅黄橙10YR8/3 釉:明オリーブ灰5GY	肩部片	猿投 平安京Ⅱ中

第 31 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（26）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1362	048-06	緑釉緑彩陶器	椀	7-4	Jo19	遺構検出	－	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白2.5Y8/1 釉:浅緑に緑	小片	猿投　軟胎 平安京Ⅱ中新相
1363	151-08	灰釉陶器	瓶	7-4	Jo19 ～o20	遺構検出	(頸)5.6	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	内外:灰白2.5Y8/1 釉:明緑灰7.5GY7/1	頸部片	
1364	151-07	灰釉陶器	瓶	7-4	Jo19 ～o20	遺構検出	(頸)5.6	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	外:淡黄2.5Y8/3 内:灰白10YR8/2	頸部片	
1365	151-04	灰釉陶器	把手	7-4	Jm19	遺構検出	－	ナデ	密	外:淡黄2.5Y8/3 内:灰白10YR8/2	小片	
1366	151-06	灰釉陶器	皿	7-4	Jo19 ～o20	遺構検出	(口)11.0 (高)2.8 (高台)4.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	内外:灰白N7/0 釉:灰オリーブ5Y6/2	口縁部 1/12	
1367	165-04	灰釉陶器	椀	7-4	－	包含層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 5/12	
1368	151-05	灰釉陶器	椀	7-4	Jo19 ～o20	遺構検出	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N8/0	高台部 3/12	
1369	155-01	灰釉陶器	椀	7-4	Jo20	包含層	(高台)7.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・自然降灰	密	明紫灰5P7/1	高台部 5/12	
1370	166-06	灰釉陶器	椀	7-4	－	包含層	(高台)7.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白7.5Y7/1	高台部 5/12	内面に墨痕残る 転用硯か？
1371	151-03	灰釉陶器	椀	7-4	Jp20	遺構検出	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白N7/0 内:灰白5Y7/1	高台部 2/12	
1372	278-04	土師質	製塩土器	7-4	Jn19	遺構検出	(口)16.0 (高)5.9 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	外:淡橙5YR8/4 内:橙5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1373	278-02	土師質	製塩土器	7-4	Jo19 ～o20	遺構検出	(口)16.0 (高)5.9 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	外:褐灰7.5YR5/1 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	志摩式
1374	278-01	土師質	製塩土器	7-4	o19～ o20	遺構検出	(口)16.0 (高)5.9 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	橙2.5YR6/6	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒
1375	228-01	土師質	製塩土器	7-4	Jo19 ～o20	遺構検出	(口)18.7 (高)5.4 (底)18.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:橙色2.5YR7/6 内:橙色2.5YR7/8	口縁部 3/12	志摩式 底部砂粒
1376	278-03	土師質	製塩土器	7-4	Jo19 ～o20	遺構検出	(口)16.0 (高)5.9 (底)17.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ・工具ナデ	粗	にぶい赤橙10YR6/4	口縁部 1/12	志摩式 底部砂粒・二次被熱
1377	153-10	土師質	土錘	7-4	－	包含層	(長)2.8 (幅)1.3	オサエ・ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	径 6/12	残重量5.55ｇ
1378	153-01	土師質	土錘	7-4	Jd19	遺構検出	(長)3.95 (幅)1.45	オサエ・ナデ	密	橙7.5YR7/6	ほぼ 完形	残重量7.11ｇ
1379	153-03	土師質	土錘	7-4	Jh19	遺構検出	(長)3.9 (幅)2.0	オサエ・ナデ	密	灰白10YR8/2	完形	残重量10.46ｇ
1380	153-02	土師質	土錘	7-4	Jd19	遺構検出	(長)4.3 (幅)2.1	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/2 黒2.5GY2/1	完形	残重量15.34ｇ
1381	153-11	土師質	土錘	7-4	－	包含層	(長)4.4 (幅)2.1	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/2	完形	残重量20.86ｇ
1382	160-05	弥生土器	壺	7-4	Jq21	SD54	(底)4.4	外:ハケメ 内:板ナデ	やや粗	橙5YR6/6	底部 12/12	底部ヘラ切り
1383	161-04	弥生土器	壺	7-4	－	SD53	(口)15.0	外:ハケメ→ミガキ 内:オサエ→ハケメ	やや密	外:橙5YR7/6 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 5/12	
1384	197-05	弥生土器	壺	7-3D	－	SD47 上層	(口)16.4	外:ハケメ→突帯・刻目・ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコミガキ→タテミガキ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 12/12	
1385	197-06	弥生土器	壺	7-3D	－	SD47 上層	(底)6.8	外:ハケメ→ミガキ 内:ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR7/4 内:灰白2.5Y8/2	底部 12/12	
1386	198-03	弥生土器	壺	7-3D	Jh11	SD47 最上層	(底)6.0	外:ハケメ→ミガキ 内:板ナデ	やや粗	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:褐灰10YR4/1	底部 4/12	
1387	163-03	弥生土器	壺	7-2	－	SD49 下層	(底)6.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	底部 3/12	
1388	162-04	弥生土器	壺	7-2	Ji15	SD49 上層	－	外:ナデ→赤彩 内:ナデ	やや密	外:赤10R5/6 内:灰白2.5Y8/2	肩部片	赤彩あり
1389	162-01	弥生土器	壺	7-2	Ji15	SD49 上層	(肩)21.0	外:櫛描直線文→刻目→波状文 内:オサエ・ナデ	密	外:浅黄橙10YR8/4 内:灰白2.5Y8/1	頸部 2/12	波状文は9本単位
1390	163-02	弥生土器	高坏	7-2	－	SD49 下層	(口)21.4	外:ミガキ 内:ミガキ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
1391	147-02	弥生土器	高坏	7-2	Ji16	SD50	(口)19.0	外:磨滅 内:磨滅	やや密	外:淡黄2.5Y8/3 内:浅黄2.5Y7/3	口縁部 1/12	坏部外面に炭化物付着
1392	162-05	弥生土器	高坏	7-2	Ji15	SD49 上層	(稜)9.6	外:ミガキ 内:ミガキ	やや密	橙2.5YR6/6	坏部 2/12	
1393	163-04	弥生土器	高坏	7-2	－	SD49 下層	(脚柱)4.3	外:ハケメ→ミガキ 内:シボリメ	やや密	にぶい橙7.5YR6/4	脚柱部 完存	3方透かし、径1.2cm
1394	147-01	弥生土器	高坏	7-2	Ji16	SD50	(口)24.0	外:ミガキ→ヨコナデ 内:ミガキ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
1395	160-06	弥生土器	高坏	7-2	Jj5	SD43	(脚柱)2.9	外:櫛描直線文？→磨滅 内:シボリメ・ナデ	やや粗	外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい橙7.5YR7/4	脚柱部 12/12	
1396	163-01	弥生土器	高坏	7-2	Ji15	SD47 中層	(脚柱)3.3	外:ハケメ→ミガキ 内:オサエ・ナデ	やや粗	淡黄2.5Y8/3	脚柱部 完存	
1397	161-02	弥生土器	高坏	7-2	Jj5	SD43	(脚柱)3.3	外:ミガキ 内:ハケメ	やや粗	浅黄橙10YR8/3	脚柱部 6/12	4方透かし
1398	160-07	弥生土器	高坏	7-3D	Je11	SD86	(脚柱)3.5	外:櫛描直線文 内:シボリメ・ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/2	脚柱部 12/12	3方透かし
1399	161-03	弥生土器	高坏	7-2	－	SD49 下層	(脚柱)3.3	外:ミガキ 内:ナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	脚柱部 12/12	3方透かしか
1400	163-05	弥生土器	高坏	7-2	－	SD49 下層	(脚柱)3.5	外:ミガキ 内:ナデ？	粗	橙5YR7/6	脚柱部 完存	3方透かし、径1.2cm
1401	162-03	弥生土器	器台	7-2	－	SD49 下層	(底)11.2	外:ミガキ 内:ヨコ	やや密	にぶい橙7.5YR6/4	底部 3/12	
1402	162-06	弥生土器	台付甕	7-2	Ji13	SD47 最上層	(高台)6.2	外:ナデ 内:板ナデ・ナデ	やや粗	外:にぶい褐7.5YR6/3 内:灰白10YR8/2	高台部 12/12	
1403	160-03	弥生土器	台付甕	7-4	Jp20	SD52 下層	(高台)8.7	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/3	高台部 11/12	
1404	160-04	弥生土器	台付甕 (S字甕)	7-3D	Je11	SD86	(口)15.4	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12	
1405	162-02	弥生土器	台付甕 (S字甕)	7-2	Jj5	SD43	(接合部)5.2	外:ハケメ 内:ハケメ→ナデ	やや粗	褐灰10YR6/1	頸部 3/12	
1406	147-04	弥生土器	台付甕 (S字甕)	7-2	Ji16	SD50	(接合部)6.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:黄灰2.5Y4/1	接合部 3/12	
1407	160-02	石鏃	凹基式	7-4	立会	SD52 下層	(長)1.79 (幅)1.41 (厚さ)0.20	－	－	石質 サヌカイト	－	重量0.34ｇ

第 32 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（27）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1408	160-01	石鏃　有茎	7-2	Ji4	SD41東	(長)3.87 (幅)1.50 (厚さ)0.52	－	－	石質 二上山サヌカイト	－	重量2.62ｇ
1409	166-04	土師器　皿	7-2 7-4	－	廃土	(口)14.0 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	
1410	166-02	土師器　皿	7-4	－	廃土	(口)14.6 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	灰黄2.5Y7/2, 黄灰2.5Y5/1	口縁部3.5/12	
1411	056-03	土師器　坏	7-4	－	廃土	(口)13.6 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	墨書「衙」
1412	166-03	土師器　皿	7-2 7-4	－	廃土	(口)17.0 (高)1.9 (底)13.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口2/12 底3/12	
1413	058-02	土師器　坏か皿	7-2 7-4	－	廃土	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:浅黄橙10YR8/3 内:橙7.5YR7/6	底部片	墨書「西」
1414	166-05	ロクロ 土師器　皿	7-2 7-4	－	廃土	(底)4.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや密	外:灰黄2.5Y7/2 内:灰黄2.5Y6/2	底部12/12	
1415	167-01	土師器　甕	7-4	－	廃土	(口)18.4	外:ハケメ→オサエ・ナデ→沈線→ヨコナデ 内:板ナデ→ナデ→ヨコナデ	やや密	外:灰黄2.5Y6/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	口縁部内面に煤付着
1416	166-01	須恵器　甕	7-4	－	廃土	(口)40.0	外:ロクロナデ→ハケメ・カキメ 内:ロクロナデ	密	灰白N4/0,灰N5/0	口縁部1/12	
1417	165-03	緑釉陶器　椀	7-4	－	廃土	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	素地:灰N6/1 釉:剥離	高台部2/12	近江　硬胎
1418	261-05	緑釉陶器　瓶	7-4	－	廃土	－	外:ロクロナデ→陰刻花文→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:5Y5/1 釉:黄緑	小片	猿投　硬胎
1419	165-02	緑釉陶器　耳皿	7-4	－	廃土	(高台) 5.3～5.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	素地:オリーブ灰2.5GY6/1 釉:剥離	高台部10/12	近江　硬胎
1420	036-02	灰釉陶器　椀	7-4	－	廃土	(口)14.0 (高)4.5 (高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・籾殻痕 内:ロクロナデ→釉	密	灰白5Y7/1	口縁部5/12	墨書「成」か 釉ハケ塗り
1421	167-05	灰釉陶器　椀	7-2 7-4	－	廃土	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	内外:灰白5Y7/2 釉:オリーブ灰10Y5/2	高台部7/12	墨書「官」
1422	167-02	灰釉陶器　椀	7-4	－	廃土	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白5Y8/1 釉:灰白5Y7/2	高台部12/12	
1423	167-03	灰釉陶器　椀	7-2 7-4	－	廃土	(高台)7.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0に近い	高台部3.5/12	
1424	167-04	灰釉陶器　椀	7-2 7-4	－	廃土	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:オリ灰10Y5/2	高台部12/12	
1425	062-02	土製品　把手か	7-2	－	廃土	(長)10.5 (径)2.5	外:ナデ 内:ナデ	密	灰黄2.5Y7/2	把手完形	中空、孔径0.6～0.8cm。
1426	153-08	土師質　土錘	7-4	－	廃土	(長)2.15 (幅)0.95	オサエ・ナデ	密	にぶい橙5YR7/4	径6/12	残重量2.25ｇ
1427	153-05	土師質　土錘	7-4	－	廃土	(長)3.0 (幅)1.3	オサエ・ナデ	密	灰白5Y5/1	径6/12	残重量5.44ｇ
1428	153-07	土師質　土錘	7-4	－	廃土	(長)4.0 (幅)0.95	オサエ・ナデ	密	灰黄褐10YR5/2	完形	残重量2.75ｇ
1429	153-12	土師質　土錘	7-4	－	廃土	(長)4.3 (幅)1.3	オサエ・ナデ	やや粗	にぶい黄2.5Y6/4	ほぼ完形	残重量6.45ｇ
1430	153-04	土師質　土錘	7-4	－	廃土	(長)5.45 (幅)2.1	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/2	径10/12	残重量16.71ｇ
1431	153-06	土師質　土錘	7-4	－	廃土	(長)6.85 (幅)2.6	オサエ・ナデ	密	灰白5Y5/1	径6/12	残重量34.76ｇ
1432	153-09	土師質　土錘	7-4	－	廃土	(長)3.6 (幅)2.7	オサエ・ナデ	密	灰白5Y8/1	ほぼ完形	残重量25.16ｇ
1433	111-03	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)14.2 (高)3.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ→穿孔 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	完形	外→内方向の穿孔あり
1434	111-02	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)15.3 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ→穿孔 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	ほぼ完形	外→内方向の穿孔あり
1435	104-06	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)13.6 (高)3.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部2/12	
1436	107-04	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)14.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部2/12	
1437	103-07	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)15.2 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部3/12	
1438	112-02	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)14.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:褐灰10YR4/1 内:灰黄褐10YR4/2	口縁部2/12	外面全面に煤付着
1439	107-03	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)15.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部3/12	
1440	111-01	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)14.8 (高)3.25	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR6/6 内:にぶい橙5YR6/4	口縁部10/12	
1441	103-08	土師器　皿	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)15.0 (高)2.05	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	
1442	104-08	土師器　皿	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	灰黄2.5Y7/2	口縁部1/12	
1443	110-02	土師器　皿	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部1.5/12	
1444	107-02	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)15.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部1/12	墨書（破片資料）
1445	043-01	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)14.3 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部9/12	墨書「衆」
1446	044-03	土師器　坏か皿	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	底部片	墨書「衙」
1447	108-02	土師器　椀	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.2 (高)4.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙5YR7/4 内:にぶい橙7.5YR6/4	口縁部11/12	内面に黒斑あり
1448	058-04	黒色土器　小型壺	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(頸)1.15 (高)2.6	外:ミガキ 内:ミガキ	密	黒N1.5/0	完形	畿内産
1449	059-01	黒色土器　椀	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)19.8 (高)5.0	外:ヘラケズリ→粗いヘラミガキ 内:ミガキ→螺旋状暗文	密	外:灰褐7.5YR4/2 内:暗灰N3/0	口縁部11/12	墨書「衙」四方結界を示すもの
1450	115-03	土師器　甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)15.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	良	外:黒10YR2/1 内:灰黄褐10YR5/2	口縁部2/12	外面全面に煤付着
1451	108-01	土師器　甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)16.2 (高)15.85	外:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	やや密	外:灰黄褐10YR5/2 内:灰黄褐10YR5/2	口縁部10/12	体部外面に煤付着、内面底に炭化物あり。 底部外面にヘラ記号あり
1452	109-01	土師器　甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.6 (高)16.3	外:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	やや密	外:灰黄褐10YR6/2 内:褐灰10YR4/1	口縁部4/12	体部外面に煤、内面底に炭化物 底部外面にヘラ記号あり
1453	110-01	土師器　甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)18.6 (高)15.0	外:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデヘラ記号R110-05	やや密	外:灰黄褐10YR5/2 内:灰5YR6/1	口縁部11/12	体部外面に煤付着、内面全体に炭化物あり。底部外面にヘラ記号あり
1454	109-02	土師器　甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(体)18.4	外:ハケメ→ケズリ 内:板ナデ・ハケメ→ケズリ	やや密	外:灰褐7.5YR6/2 内:にぶい黄2.5Y6/3	底部完存	体部外面に煤付着、内面底部に炭化物あり。底部外面にヘラ記号あり
1455	112-01	土師器　甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(体)18.5	外:オサエ→ハケメ→ケズリ→穿孔 内:ナデ→ケズリ	密	外:黒N2/0 内:灰黄褐10YR5/2	底部完存	外面全面に煤付着、ヘラ記号あり 底部外面に外→内方向の穿孔

第 33 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（28）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1456	110-03	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	—	外:ナデ→ヘラ記号 内:ナデ	やや密	外:灰黄褐10YR5/2 内:灰5YR6/1	底部片	外面に煤付着。 底部外面にヘラ記号。
1457	110-04	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	—	外:ナデ→ケズリ→ヘラ記号 内:ナデ	やや密	外:灰黄褐10YR5/2 内:灰5YR6/1	底部片	外面に煤付着。 底部外面にヘラ記号。
1458	058-01	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)18.1 (頸)15.4 (高)15.6	外:ナデ→ハケメ→ケズリ 内:ナデ→板ナデ→ケズリ	密	灰黄2.5Y6/2	ほぼ完形	墨書「南」
1459	105-01	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.1 (高)15.2	外:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	ほぼ完形	
1460	115-04	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)15.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/3	体部4/12	
1461	105-02	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.6 (高)14.4	外:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	完形	口縁部に油煙痕
1462	113-01	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)15.0 (高)14.5	外:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/2～ 灰黄褐10YR5/2	ほぼ完形	
1463	106-01	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.7 (頸)14.9	外:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	密	灰黄褐10YR6/2	ほぼ完形	
1464	106-02	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.2 (高)16.2	外:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部6/12	
1465	114-01	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.6	外:オサエ・ナデ→ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/4	体部8/13	
1466	113-02	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)17.6 (高)16.4	外:ハケメ→ナデ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	ほぼ完形	
1467	108-03	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)18.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄2.5Y7/2	口縁部1/12	
1468	111-04	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)18.6	外:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	密	浅黄2.5Y7/3	口縁部2/12	口縁端部外面に沈線あり
1469	114-02	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(体)19.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ→ケズリ 内:板ナデ→ケズリ	密	外:灰黄褐10YR4/2 内:灰黄褐10YR6/2	底部完存	
1470	115-01	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(体)17.5	外:オサエ・ナデ→ハケメ→ケズリ 内:オサエ・ナデ→板ナデ→ケズリ	やや密	にぶい黄橙10YR6/3	体部部8/13	
1471	112-03	土師器	鉢	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)28.0 (頸)25.9	外:オサエ・ナデ→ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ケズリ・ヨコナデ	密	外:黒N2/0 内:灰黄褐10YR5/2	口縁部1/12	外面全面に煤付着
1472	107-01	土師器	片口鉢	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)30.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ 内:板ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部1/12	
1473	107-06	土師質	製塩土器	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)16.7 (底)17.7	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙2.5YR6/6	口2/12 底1/12	志摩式
1474	107-05	土師質	製塩土器	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	—	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙2.5YR6/6	口縁部片	志摩式
1475	115-02	灰釉陶器	瓶	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(口)7.6	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y8/1 内:灰白5Y7/2	口縁部1/12	自然降灰が認められる
1539	104-04	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)12.9 (高)2.35	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	
1540	102-02	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.2 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部7/12	
1541	100-02	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.4 (高)3.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	完形	
1542	100-05	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.6 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口5/12 底6/12	
1543	101-01	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.6 (高)3.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	ほぼ完形	
1544	100-04	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.6 (高)3.25	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口3/12 底6/12	
1545	103-09	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.8 (高)2.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部2/12	
1546	101-04	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.8 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口4/12 底6/12	
1547	104-01	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部3/12	
1548	101-02	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)15.0 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙5YR7/3 内:浅黄橙7.5YR8/3	口縁部6/12	
1549	103-04	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)15.2 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部4/12	
1550	104-02	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	
1551	103-06	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)13.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部4/12	
1552	100-01	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.6 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	ほぼ完形	
1553	100-03	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.2 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	ほぼ完形	
1554	103-01	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.4 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部10/12	
1555	102-01	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.4 (高)3.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:灰白7.5YR8/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	底11/12	外面ヨコナデ時に板状工具を用いる
1556	101-05	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)15.0 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口3/12 底4/12	
1557	103-05	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)15.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部3/12	
1558	100-06	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)15.0 (高)3.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部6/12	
1559	101-03	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)15.0 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	口4/12 底5/12	
1560	102-03	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)約14.0 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部4/12	
1561	104-03	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)15.8 (高)2.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部2/12	
1562	103-02	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)15.2 (高)3.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部6/12	
1563	101-06	土師器	皿	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(口)14.8 (高)2.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部10/12	
1564	104-09	土師器	甕	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/2	口縁部1/12	
1565	104-07	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 堀方上層	(口)15.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	
1566	104-05	土師器	坏	7-5	Jv20	SE72 堀方上層	(口)14.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙7.5YR6/6	口縁部1/12	

第 34 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（29）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1567	045-01	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 掘方上層	(坏稜)13.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	底部 4/12	墨書「令」
1568	044-01	土師器　坏	7-5	Jv20	SE72 掘方上層	(口)16.4 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 4/12	墨書「衙」
1619	072-05	土師器　坏	7-5	Jv24	SD66 下層	(口)13.7 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12	
1620	072-03	土師器　坏	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)13.7 (高)2.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 5/12	
1621	074-01	土師器　坏	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)13.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
1622	072-07	土師器　坏	7-5	Jv24	SD66 下層	(口)14.0 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
1623	073-03	土師器　坏	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)13.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰黄2.5Y6/2	口縁部 2/12	
1624	073-02	土師器　坏	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)14.0 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
1625	073-04	土師器　坏	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)14.5 (高)2.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	口縁部:橙5YR6/6 その他:浅黄橙10YR8/2	口縁部 4/12	
1626	074-02	土師器　坏	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)15.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙5YR7/6 内:口縁部橙5YR7/6	口縁部 5/12	
1627	073-05	土師器　坏	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)19.0 (高)2.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/6	口縁部 1/12	
1628	072-02	土師器　坏	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ・板ナデ→ヨコナデ 内:ナデ	密	橙7.5YR6/6	口縁部 2/12	
1629	043-02	土師器　坏	7-5	Jv24	SD66 下層	(口)13.9 (高)3.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→暗文	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 3/12	墨書「衙」 螺旋状暗文わずかに残る
1630	072-08	土師器　小皿	7-5	Jv24	SD66 下層	(口)12.6 (高)3.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 4/12	墨書（破片資料）
1631	045-02	土師器　坏	7-5	Jv24	SD66 下層	(口)14.8 (高)3.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 5/12	墨書（破片資料）
1632	063-01	土師器　坏	7-5	Jv24	SD66 下層	(口)14.8 (高)3.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 2/12	墨書（破片資料）
1633	044-02	土師器　皿	7-5	Ju22	SD66 下層	(口)15.6 (高)1.65	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 4/12	墨書「□木」？
1634	046-03	土師器　皿	7-5	Jv24	SD66 下層	(底)7.0	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:灰褐5YR5/2	底部 7/12	墨書（破片資料）
1635	046-02	土師器　坏か皿	7-5	Ju24	SD66 下層	(底)3.6	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部 9/12	墨書（破片資料）
1636	043-03	土師器　坏か皿	7-5	Jv24	SD66 下層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	明褐灰7.5YR7/2	底部片	墨書「南」
1637	044-04	土師器　坏か皿	7-5	Jv24	SD66 下層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙5YR6/4	底部片	墨書「南」
1638	063-05	土師器　坏か皿	7-5	Ju24	SD66 下層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/6	底部片	墨書（破片資料）
1639	044-06	土師器　坏か皿	7-6	Ju24	SD66 下層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/7	底部片	墨書（破片資料）
1640	044-05	土師器　坏か皿	7-5	Ju24	SD66 下層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/6	底部片	墨書（破片資料）
1641	045-03	土師器　坏か椀	7-5	Jv24	SD66 下層	—	外:ナデ→ミガキ 内:ミガキ→暗文	密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:灰N5/0	底部片	墨書「衙」に類似 1039と同じ文字か
1642	045-04	土師器　鉢か	7-5	Jv24	SD66 下層	(底)10.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙5YR7/4	底部 2/12	墨書「南」
1643	075-03	土師器　甕	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR6/2 内:灰黄2.5Y7/2	口縁部 2/12	体部内面に炭化物付着
1644	075-04	土師器　甕	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)27.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12	
1645	074-05	土師質　製塩土器	7-5	Ju24	SD66 下層	(底)14.5	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙7.5YR7/6	底部 1/13	志摩式
1646	076-03	土師質　製塩土器	7-5	Ju24	SD66 下層	(口)15.5 (高)5.2 (底)15.3	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	橙5YR6/4	口縁部 1/12	志摩式
1647	047-01	土師器　皿	7-5	Ju24	SD66 上層	(口)17.0 (高)2.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・沈線 内:ナデ→ヨコナデ→暗文	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 2/12	墨書「皆□」ヵ
1648	074-03	土師器　坏	7-5	Ju24	SD66 上層	(口)15.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 1.5/12	
1649	047-02	土師器　坏か皿	7-5	Ju24	SD66 上層	(底)6.0	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	底部片	墨書（破片資料）
1650	046-06	土師器　坏か皿	7-5	Ju24	SD66 上層	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	底部片	墨書（破片資料）
1651	076-04	黒色土器　椀	7-5	Ju24	SD66 上層	(口)19.0	外:ケズリ→ミガキ 内:ミガキ→暗文	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰白N41	口縁部 4/12	
1652	075-06	ロクロ土師器　椀	7-5	Jv1	SD66 上層	(高台)8.5	外:回転ナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:回転ナデ	やや密	淡黄2.5Y8/3	高台部 11/12	
1653	075-01	土師器　甕	7-5	Ju24	SD66 上層	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	口縁部内面に炭化物付着
1654	075-02	土師器　甕	7-5	Ju24	SD66 上層	(口)20.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 2/12	
1655	076-01	土師器　甕	7-5	Jv1	SD66 上層	(口)24.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	体部外面に煤多量に付着
1656	046-01	灰釉陶器　椀	7-5	JV1	SD66 上層	(底)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	底部 3/12	墨書「衙」
1657	075-05	灰釉陶器　椀	7-5	Jv1	SD66 上層	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨→自然降灰	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/2	高台部 6/12	
1658	076-02	土師質　製塩土器	7-5	Jv1	SD66 上層	(口)16.0 (高)5.2 (底)15.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:橙7.5YR7/6 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式
1663	077-02	土師器　坏	7-5	Ku22	SD67	(口)14.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
1664	077-01	土師器　坏	7-5	Ku22	SD67	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	
1665	077-03	土師器　鉢	7-5	Ku22	SD67	(底)12.0	外:オサエ・ナデ→ケズリ 内:オサエ・ナデ	密	橙7.5YR7/6	底部 2/12	
1666	056-06	土師器　坏か皿	7-5	Ku22	SD67	—	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい褐7.5YR5/4	底部片	墨書(破片資料)
1667	047-03	土師器　皿	7-5	Ku22	SD67	(口)16.0 (高)2.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	墨書「成」(内・外面にあり)
1668	077-05	灰釉陶器　皿	7-5	Ku22	SD67	(高台)6.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付→ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y8/1	底部 3/12	釉ハケ塗り　自然降灰

第 35 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（30）

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1669	077-07	土師質　製塩土器	7-5	Ku22	SD67	－	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙7.5YR6/6	小片	志摩式
1670	095-03	土師質　製塩土器	7-5	Ku22	SD67	(口)15.2	外:オサエ→ナデ 内:オサエ→ナデ	粗	外:浅黄橙7.5YR8/6 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部1/12	志摩式
1671	077-04	土師質　製塩土器	7-5	Ku22	SD67	(底)21.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:浅黄橙7.5YR8/4 内:浅黄橙7.5YR8/3	底部1/12	志摩式
1672	081-01	土師器　坏	7-5	Ku3	SD68	(口)13.9 (高)2.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部2/12	
1673	055-01	緑釉陶器　椀	7-5	Ku3	SD68	(高台)7.6	外:ロクロナデ・ケズリ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰N5/ 釉:濃緑	高台部1/12以下	近江　硬胎 平安京Ⅲ古～中
1674	061-05	緑釉陶器　唾壺	7-5	Ku3	SD68	(体部)7.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ	密	素地:灰N/6 釉:黄緑	体部2/12	美濃　硬胎 平安京Ⅲ中
1675	081-05	土師器　坏	7-5	Kv4	SD69	(口)13.8	外:工具ナデ・ナデ 内:工具ナデ・ナデ	密	橙5YR6/6	口縁部3/12	
1676	081-02	土師器　坏	7-5	Kv4	SD69	(口)13.2	外:工具ナデ・ナデ 内:工具ナデ・ナデ	密	橙5YR7/6	口縁部2/12	
1677	081-08	土師器　皿	7-5	Kv4	SD69	(口)12.9	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	密	灰白10YR8/1	口縁部2/12	
1678	079-04	土師器　甕	7-5	Kv4	SD69	(口)16.0 (頸)13.8	外:ハケメ・ナデ 内:ナデ・ハケメ	密	浅黄橙10YR8/3	口・頸1/12	
1679	079-03	土師器　甕	7-5	Kv4	SD69	(口)16.0 (頸)13.8	外:ハケメ・ナデ 内:ナデ・ハケメ	密	浅黄橙10YR8/3	口・頸2/12	
1680	078-03	土師器　台付皿	7-5	Ky3	SD70	(口)9.0 (高)2.2 (底)4.3	外:ロクロナデ・底部糸切 内:ロクロナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口4/12 底12/12	
1681	079-02	土師器　甕	7-5	Ky3	SD70	(口)16.8 (頸)14.7	外:ハケメ・ナデ 内:ナデ・ハケメ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口・頸1/12	
1682	082-02	土師器　鍋	7-5	Kd4	SD73	(口)22.0	外:オサエ→ナデ 内:オサエ→ハケメ・ナデ	密	外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部1/12	炭化物付着
1683	287-10	鉄製品　銭貨	7-5	Ke5	SD73	(径)2.4	－	－	－	完形	
1684	084-03	土師器　皿	7-5	Kd4	SD74	(口)8.0 (高)1.25 (高台)5.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	灰白10YR8/2	口・高8/12	
1685	078-02	土師器　鍋	7-5	Kd4	SD74	(口)28.8 (体)25.8	外:ナデ・ケズリ 内:ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口3/12 体1/12	
1686	083-03	土師器　台付坏	7-5	Mb4	SD81	(高台)7.4	外:高台貼付→ナデ 内:ナデ	密	外:灰黄2.5Y7/2 内:灰褐10YR5/1	高台部12/12	
1687	084-01	土師器　台付椀	7-5	Mb4	SD81	(高台)7.5	外:底部オサエ→ナデ・高台貼付→ナデ 内:オサエ→ナデ	密	淡黄2.5Y8/3	高台部9/12	刻書？
1688	083-05	土師器　皿	7-5	Mb4	SD81	(底)6.5	外:オサエ→ナデ・底部糸切 内:ナデ	密	灰白2.5Y8/2	底部6/12	
1689	083-02	土師器　甕	7-5	Mb4	SD81	(口)15.6	外:オサエ→ナデ・ハケメ 内:オサエ→ナデ・ハケメ	密	外:灰白2.5Y8/2 内:灰白2.5Y8/1	口縁部3/12	
1690	084-04	陶器 (山茶碗)	7-5	Mb4	SD81	(口)16.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白10YR8/1	口縁部1.5/12	自然釉
1691	084-07	陶器 (山茶碗)	7-5	Mb4	SD81	(底)8.3～8.7	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白7.5Y7/1 内:灰N5/0,灰白7.5Y8/1	底部12/12	
1692	084-05	灰釉陶器　壺	7-5	Mb4	SD81	(底)14.0	外:ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y8/1	底部2/12	
1693	084-06	陶器　椀	7-5	Mb4	SD81	(口)12.0 (高)4.8 (高台)約6.0	外:回転ケズリ・ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	素地:灰黄2.5Y7/2 釉:黒5Y2/1	口2/12 高1.5/12	天目茶碗
1694	082-05	陶器　丸皿	7-5	Mb4	SD81	(口)11.2 (底)5.0	外:回転ケズリ・ナデ 内:ロクロナデ	密	素地:灰白5Y8/1 釉:浅黄5Y7/3	口4/12 底7/12	菊花文 瀬戸大窯３基
1695	072-01	土師器　椀	7-5	Mb4～e5	SD83最下層	(口)13.0 (高)4.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:灰白10YR8/2 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部4/12	
1696	072-06	土師器　皿	7-5	Mb4～e5	SD83最下層	(口)18.0 (高)2.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部2/12	
1697	055-03	緑釉陶器　椀	7-5	Mb4～e5	SD83	(高台)7.6	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:灰白5Y8/1 釉:浅緑	高台部1/12	美濃 平安京Ⅲ中
1698	086-01	土師器　台付椀	7-5	Mb4～e5	SD83	(高台)7.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	浅黄橙7.5YR8/6	底部4.5/12	
1699	088-05	土師器　台付皿	7-5	Mb4～e5	SD83	(高台)7.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	高台部5/12	
1700	089-01	ロクロ 土師器　皿	7-5	Me5	SD83	(口)9.5 (高)1.7 (底)4.1	外:糸切・ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰黄2.5Y7/2 内:にぶ黄橙10YR7/2,7/3	口6/12 底12/12	
1701	088-01	ロクロ 土師器　皿	7-5	Mb4～e5	SD83	(口)9.8 (高)1.7 (底)5.6	外:糸切・ロクロナデ 内:オサエ→ナデ・ロクロナデ	密	灰白10YR8/2	口2/12 底12/12	
1702	088-02	ロクロ 土師器　皿	7-5	Mb4～e5	SD83	(口)10.0 (高)1.8 (底)5.0	外:糸切・ロクロナデ 内:ナデ・ロクロナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4～ 橙5YR7/6	底部12/12	
1703	091-01	ロクロ 土師器　椀	7-5	Mc4	SD83	(口)15.0 (高)4.3 (底)6.6	外:底部糸切・ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	底部12/12	
1704	091-06	土師器　甑？	7-5	Me5	SD83	－	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・オサエ	やや密	灰白2.5Y8/2	－	
1705	089-08	土師質　土錘	7-5	Me5	SD83	(長)5.05 (幅)1.6	オサエ・ナデ	密	黄灰2.5Y4/1,浅黄2.5Y7/3	－	残重量10.90ｇ
1706	072-04	土師質　土錘	7-5	Mf4	SD83	(長)7.2 (幅)3.0	オサエ・ナデ	やや粗	灰黄2.5Y7/2	－	残重量53.25ｇ
1707	083-01	土師器　甕	7-5	Mb4～e5	SD83	(口)21.0	外:オサエ→ナデ 内:工具ナデ・ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR5/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部2/12	
1708	082-03	土師器　甕	7-5	Me6	SD83	(口)20.0	外:オサエ→ナデ 内:工具ナデ・ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰黄2.5Y7/2	口縁部1.5/12	
1709	082-01	土師器　甕	7-5	Me6	SD83	(口)26.0	外:オサエ→ナデ・ハケメ 内:オサエ→ナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部1/12	
1710	087-04	土師器　甕	7-5	Mb4～e5	SD83	(口)20.0	外:ナデ 内:ハケメ・ナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部1/12	
1711	085-01	土師器　甕	7-5	Me5	SD83	(口)23.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ・工具ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部3/12	
1712	089-03	青磁　椀	7-5	Me5	SD83	(高台)6.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	素地：にぶい赤褐5YR5/3 釉：灰オリーブ5Y6/2	高台部10/12	
1713	084-02	陶器 (山茶碗)	7-5	Me6	SD83	(口)17.6 (高)5.4 (高台)9.5	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:灰白N8/0	口1/12 高5/12	自然釉
1714	090-04	陶器 (山茶碗)	7-5	Me5	SD83	(口)17.4 (高台)8.5	外:ロクロナデ・ナデ→高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	口3/12 高9/12	

第 36 表　出土遺物観察表（土製品ほか）（31）

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1715	085-05	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Mb4～e5	SD83	(口)14.4 (高)5.2 (高台)5.6	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	口4/12 底12/12	自然釉
1716	090-02	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Me5	SD83	(高台)8.5	外:ロクロナデ→底部糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y8/1	高台部12/12	
1717	089-05	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Me5	SD83	(高台)8.0	外:ロクロナデ→底部糸切・高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部6/12	
1718	091-03	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Me5	SD83	(高台)6.5	外:ロクロナデ→底部糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部5/12	
1719	091-02	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Md4	SD83	(高台)8.8	外:ロクロナデ→底部糸切・高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部12/12	
1720	091-04	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Md4	SD83	(高台)7.5	外:ロクロナデ→底部糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰5Y6/1	高台部10/12	
1721	086-02	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Mb4～e5	SD83	(底)6.4	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰N8/0	底部12/12	自然釉
1722	086-04	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Mb4～e6	SD83	(底)6.6	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白N8/0 内:灰白N7/0	底部6/12	
1723	089-04	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Me5	SD83	(高台)6.8	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1より白い	高台部5/12	
1724	086-03	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Me5	SD83	(底)7.2	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰N7/0	底部12/12	
1725	091-05	陶器（山茶碗）	皿	7-5	Me5	SD83	(底径) 3.8	外:ロクロナデ→底部糸切 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	底部完存	
1726	087-02	陶器	鉢	7-5	Me5	SD83	(口)30.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	口縁部1/12	片口
1727	089-07	陶器	鉢	7-5	Me5	SD83	(高台)11.2	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密	灰白5Y7/1	高台部3/12	片口か:練鉢
1728	088-03	土師器	皿	7-5	Mb4～e6	SD83	(口)10.2 (高)1.7	外:オサエ→ナデ 内:オサエ→ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部4/12	
1729	089-02	土師器	皿	7-5	Md4	SD83	(口)7.0 (高)1.8	外:オサエ→ナデ 内:オサエ→ナデ	密	淡黄2.5Y8/3	口縁部5/12	
1730	088-04	土師器	皿	7-5	Mb4～e6	SD83	(口)9.6 (高)1.6	外:オサエ→ナデ 内:オサエ→ナデ	やや密	外:浅黄橙10YR8/3 内:灰白10YR8/2	口縁部4/12	
1731	090-03	土師器	台付皿	7-5	Me5	SD83	(高台)4.5	外:ナデ・高台貼付→ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	高台部11/12	
1732	086-05	土師器	台付皿	7-5	Me5	SD83	(底)5.0	外:高台貼付→ナデ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	底部12/12	
1733	083-04	土師器	台付皿	7-5	Mb4～e6	SD83	(高台)5.0	外:高台貼付→ナデ 内:ナデ	密	灰白2.5Y8/2	高台部10/12	
1734	086-07	土師器	台付小椀	7-5	Me5	SD83	(口)8.0 (高)3.0 (高台)4.0	外:高台貼付→ナデ・オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	口2/12 底12/12	
1735	085-03	土師器	鍋	7-5	Me5	SD83	(口)18.0	外:ケズリ・オサエ→ナデ 内:ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:浅黄橙7.5YR8/3	口縁部1/12	
1736	089-06	土師器	鍋	7-5	Md4	SD83	(口)26.0	外:ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部1/12	
1737	087-01	土師器	鍋	7-5	Mb4～e6	SD83	(口)25.0	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	密	外:浅黄橙7.5YR8/3 内:灰白10YR8/2	口縁部1/12強	
1738	087-03	陶器	壺	7-5	Mb4～e6	SD83	(底)10.0	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	やや粗	外:灰褐7.5YR4/2 内:灰オリーブ7.5Y5/3	底部6/12	
1739	085-02	陶器	甕	7-5	Mb4～e6	SD83	(底)16.0	外:オサエ→ナデ・底部籾殻痕 内:ナデ	やや密	外:青灰5PB6/1 内:灰オリーブ5Y6/2	底部4/12	自然釉
1740	085-04	陶器	皿	7-5	Me5	SD83	(口)12.0	内外面：施釉	密	釉：灰白5Y7/2 素地：灰白10YR8/1	口縁部2/12	端反皿
1741	086-06	陶器	皿	7-5	Mb4～e6	SD83	(口)11.8 (高)3.4 (高台)4.3	外:ロクロナデ→ナデ・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外面:灰N7.5Y6/1 底部:にぶい褐7.5YR5/4	口4/12 底12/12	灰釉 唐津16～17c
1742	093-04	土師器	皿	7-5	Ma4	SE80	(口)12.8	外:ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4と灰白10YR8/2	口縁部1/12	
1743	092-06	土師器	台付椀	7-5	Ma4	SE80	(高台)7.0	外:ロクロナデ→底部糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:浅黄橙10YR8/3 内:灰白2.5Y8/1	高台部3/12	
1744	092-09	黒色土器	椀	7-5	Ma4	SE80	－	外:ナデ・ロクロナデ 内:暗文	密	外:灰黄褐10YR6/2 内:黒N2/0	底部2/12	
1745	092-08	ロクロ土師器	皿	7-5	Ma4	SE80	(底)6.0	外:底部糸切・回転ナデ 内:回転ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:黒褐10YR3/1	底部12/12	
1746	092-07	ロクロ土師器	皿	7-5	Ma4	SE80	(底)3.7	外:底部糸切・回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰黄2.5Y7/2	底部12/12	
1747	094-02	土師器	甕	7-5	Ma4	SE80	(口)15.5	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部2/12	
1748	093-09	土師器	甕	7-5	Ma4	SE80	(口)18.0	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:褐灰10YR5/1	口縁部1/12	
1749	094-04	土師器	甕	7-5	Ma4	SE80	(口)22.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	灰黄褐10YR5/2	口縁部1/12	
1750	094-06	白磁	椀	7-5	Ma4	SE80	－	調整不明	密	外:灰白7.5Y7/1 内:灰白N8/0	小片	
1751	094-01	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Ma4	SE80	(口)17.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白N8/0 内:灰オリーブ7.5Y5/2	口縁部2/12	
1752	092-05	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Ma4	SE80	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部3/12	自然釉・高台部研磨
1753	092-02	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Ma4	SE80	(高台)8.3	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	外:灰白N8/0 内:灰白N7/0	高台部5/12	煤付着
1754	092-04	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Ma4	SE80	(高台)7.05	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	外:灰白N8/0 内:灰白N7/0	高台部12/12	炭付着
1755	092-03	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Ma4	SE80	(高台)8.9	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部6/12	自然釉
1756	092-01	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Ma4	SE80	(高台)6.1	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部12/12	自然釉・底部墨書
1757	093-08	土師器	皿	7-5	Ma4	SE80	(口)7.3 (高)0.9	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	密	灰白10Y8/2	口縁部6/12	
1758	093-07	土師器	皿	7-5	Ma4	SE80	(口)7.8 (高)1.8	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	密	灰白7.5Y8/2	口縁部2/12	
1759	093-05	土師器	皿	7-5	Ma4	SE80	(口)11.0	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	密	灰白5Y8/1	口縁部1/12	
1760	093-02	土師器	皿	7-5	Ma4	SE80	(口)11.0	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	密	灰白2.5Y8/2	口縁部2/12	
1761	093-06	土師器	皿	7-5	Ma4	SE80	(口)11.7	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y8/1	口縁部1/12	

第 37 表　出土遺物観察表（土製品ほか）(32)

報告番号	実測番号	器種・質等	調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1762	093-01	土師器　皿	7-5	Ma4	SE80	(口)11.0	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
1763	093-03	土師器　皿	7-5	Ma4	SE80	(口)13.0	外:オサエ→ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	
1764	093-10	土師器　鍋	7-5	Ma4	SE80	(口)26.0	外:ナデ 内:ナデ	密	外:灰白10Y8/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
1765	094-03	土師器　鍋	7-5	Ma4	SE80	(口)34.0	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12	
1766	080-04	弥生土器　壺	7-5	Ju20	SK76	(頸)13.0	外:突帯貼付後ナデ 内:ハケメ	密	外:明赤褐5YR5/6 内:にぶい赤褐5YR5/4	頸部 2/12	
1767	119-01	弥生土器　壺	7-5	Jv20	SE72 上層	(口)18.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:橙5YR6/6, 内:橙5YR6/6	口縁部 4/12	
1768	119-04	弥生土器　壺	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(頸)9.0	外:ハケメ 内:ケズリ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	
1769	119-03	弥生土器　壺	7-5	Jv20	SE72	(口)16.0	外:ミガキ→ヨコナデ 内:ミガキ→ヨコナデ	密	明赤褐5YR5/6	口縁部 1/12	
1770	077-08	弥生土器　壺	7-5	Ju22	SD67	(底)4.0	外:ナデ 内:ナデ→工具痕	やや密	外:黄灰2.5Y4/1 内:灰黄2.5Y7/2	底部 12/12	
1771	120-03	弥生土器　壺	7-5	Jv20	SE72	(底)6.0	外:ミガキ 内:ハケメ・ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰黄2.5Y6/2	底部 12/12	
1772	120-02	弥生土器　壺	7-5	Jv20	SE72 廃土	(底)6.0	外:ハケメ→ナデ 内:ハケメ	やや密	外:灰黄2.5Y6/2 内:黒褐2.5Y3/1	底部 3/12	
1773	120-01	弥生土器　壺	7-5	Jv20	SE72	(底)9.5	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR6/4, 内:灰黄2.5Y7/2	口縁部 3/12	
1774	078-04	弥生土器　小型壺	7-5	－	包含層	(口)5.5 (高)4.3	外:ケズリ・ナデ 内:ナデ	密	橙5YR6/6	口縁部 2/12	
1775	119-06	弥生土器　小型壺	7-5	Jv20	SE72	(体部)6.5	外:板ナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい褐5YR6/4 内:橙5YR6/5	底部 6/12	1774と同一個体
1776	116-07	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72 排土	(口)16.0	外:ミガキ 内:ミガキ	やや密	橙5YR7/6	口縁部 2.5/12	
1777	117-01	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72	(口)18.0	外:ミガキ 内:ミガキ	密	明赤褐5YR5/6	口縁部 2/12	口縁端部に沈線あり
1778	117-03	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	－	外:ケズリ→ミガキ 内:磨滅	密	明赤褐5YR5/6	坏部片	
1779	120-04	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72 上層	(底)17.0	外:ハケメ→ミガキ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
1780	117-04	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(脚柱)2.5	外:ミガキ 内:シボリメ・オサエ・ナデ	密	浅黄2.5Y7/3	脚柱 完存	
1781	117-02	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72 上層	(脚柱)4.0	外:ミガキ→櫛描直線文 内:シボリメ	密	にぶい橙7.5YR6/4	脚柱部 2/12	透かし１か所のみ残存
1782	116-01	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SD52 (機械)	(脚柱)4.0	外:ミガキ→櫛描直線文 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	脚柱部 3/12	３方透かし、径0.8～1cm
1783	116-05	弥生土器　高坏	7-5	Jw24	SD66下層	(脚柱)4.0	外:櫛描直線文 内:オサエ・ナデ	密	にぶい橙2.5YR6/4	完形	透かし１か所のみ残存 径1.4cm
1784	116-04	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72 廃土	(脚柱)3.5	外:櫛描直線文 内:ハケメ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:浅黄橙10YR8/3	完形	透かし２段、径1.3cm 上段１方向のみ、下段１か所残存
1785	117-06	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72	(脚柱)3.4	外:櫛描直線文 内:ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	脚部片	透かし１か所のみ残存
1786	118-01	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72	(脚柱)3.3	外:櫛描直線文 内:ハケメ	密	にぶい褐7.5YR5/4	脚部片	３方透かし、径0.8～1cm
1787	116-06	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72 上層	(脚柱)3.7	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:橙5YR6/6	頸部 4/12	３方透かし、径約1.0cm
1788	117-05	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72	(底)12.0	外:ミガキ 内:磨滅	密	橙5YR6/6	底部 1/12	３方透かし、径約1.0cm
1789	116-03	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72 排土	(底)11.3	外:櫛描直線文→刺突文 内:オサエ・ナデ	やや密	橙5YR6/6	脚柱 完存	４方透かし、径1.1cm
1790	117-07	弥生土器　高坏	7-5	Jv20	SE72	(脚柱)13.2	外:ハケメ→ミガキ 内:ナデ・板ナデ	密	外:浅黄橙10YR8/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	底部 2/12	透かし１か所のみ残存 径約1.4cm
1791	082-04	弥生土器　鉢	7-5	Jb4	SD81	(口)10.0	外:ロクロナデ 内:ナデ	密	外:灰黄褐10YR5/2 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 6/12	
1792	119-05	弥生土器　鉢	7-5	Jv20	SE72	(体)17.0	内:櫛描直線文→刻み目 内:ハケメ→ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	体部 1/12	
1793	118-08	弥生土器　甕	7-5	Jv20	SE72	－	外:ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:灰褐7.5YR4/1 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 片	
1794	118-03	弥生土器　甕	7-5	Jv20	SE72 上層	(口)14.7	外:板ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	外:褐7.5YR4/3 内:灰黄褐10YR4/2	口縁部 2/12	外面に煤付着
1795	119-02	弥生土器　甕	7-5	Jv20	SE72 上層	(頸)13.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄褐10YR5/3 内:灰褐7.5YR5/2	頸部 2/12	外面に煤付着
1796	118-02	弥生土器　甕 (受口甕)	7-5	Jv20	SE72 上層	(口)16.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:灰褐7.5YR4/2 内:灰黄褐10YR4/2	口縁部 1/12	
1797	077-06	弥生土器　甕 (S字甕)	7-5	Ju22	SD67	(口)14.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→オサエ	やや密	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
1798	118-06	弥生土器　台付甕 (S字甕)	7-5	Jv20	SE72 上層	(口)15.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
1799	118-05	弥生土器　台付甕 (S字甕)	7-5	Jv20	SE72 上層	(口)17.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
1800	118-07	弥生土器　台付甕 (S字甕)	7-5	Jv20	SE72 上層	(口)14.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:浅黄橙10YR8/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
1801	118-04	弥生土器　台付甕 (S字甕)	7-5	Jv20	SE72 上層	(口)15.3	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 2/12	
1802	121-04	弥生土器　台付甕	7-5	Jv20	SE72	(底)6.4	外:ナデ 内:板ナデ	やや密	にぶい橙5YR6/4	底部 7/12	
1803	120-07	弥生土器　台付甕	7-5	Jv20	SE72 上層	(底)約8.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや密	外:浅黄橙10YR8/4 内:灰黄褐10YR6/2	底部 5.5/12	
1804	116-02	弥生土器　台付甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(脚台)7.0	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ	密	外:黄灰2.5Y5/1 内:黄灰2.5Y4/1	底部 9/12	
1805	120-06	弥生土器　台付甕	7-5	Jv20	SE72	(脚台)8.0	外:ハケメ→ナデ 内:ハケメ	やや密	外:灰黄2.5Y6/2 内:にぶい橙7.5YR7/3	底部 2/12	
1806	121-01	弥生土器　台付甕 (S字甕)	7-5	Jv20	SE72 上層	(底)約8.0	外:ハケメ→ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
1807	121-05	弥生土器　台付甕	7-5	Jv20	SE72 枠内最下層	(底)7.0	外:ハケメ→ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	灰黄2.5Y6/2	底部 3/12	
1808	121-02	弥生土器　台付甕 (S字甕)	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(接合部)5.4	外:ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	接合部 5/12	
1809	121-03	弥生土器　台付甕	7-5	Jv20	SE72 上層	(接合部)5.6	外:ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:灰黄2.5Y4/1 内:灰黄2.5Y5/1	接合部 5/13	

第 38 表　出土遺物観察表（土製品ほか）(33)

報告番号	実測番号	器種・質等		調査区	小地区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1810	120-05	弥生土器	台付甕（S字甕）	7-5	Jv20	SE72 枠内上層	(脚台)10.0	外:ハケメ→ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:灰褐5YR5/2 内:にぶい黄橙10YR7/2	底部 2/12	
1811	094-05	須恵器	甑	7-5	Ma4	SE80	(口)14.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	外:灰褐10YR5/1 内:灰褐10YR4/1	口縁部 1/12	
1812	090-01	須恵器	甕	7-5	Md4	SD83	(口)27.0	外:ナデ 内:ナデ	密	灰白5Y7/1	口縁部 1/12	
1813	081-06	土師器	坏	7-5	Mc4	包含層	(口)15.4	外:オサエ→ナデ 内:工具ナデ・ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
1814	080-02	陶器（山茶碗）	椀	7-5	Mb4	包含層	(高台)7.2	外:ロクロナデ→高台部貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 4/12	
1815	079-01	土師器	甕	7-5	Mb4	包含層	(口)18.1 (頸)16.5	外:ハケメ→ナデ 内:工具ナデ	密	灰黄2.5Y7/2	口・頸 3/12	
1816	078-01	土師器	鍋	7-5	Me5	包含層	(口)28.4 (頸)24.0 (体)32.6	外:オサエ・ナデ・ケズリ 内:オサエ・ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/2 内:褐灰10YR5/1	口4/12 頸4/12	
1817	287-08	銅製品	小柄	7-5	－	廃土	(残存長)8.4 (幅)1.5	－	－	－	端部欠損	
1818	096-06	土師器	甕	7-7	Ln17	SD57	(口)16.8	外:ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
1819	096-04	灰釉陶器	椀	7-7	Ln21	SD57	(口)17.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	素地：オリーブ黄7.5Y6/3 釉：灰白5Y8/1	口縁部 1/12	
1820	095-07	陶器（山茶碗）	椀	7-7	Ln20	SD57	(高台)7.6	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	外:灰白N8/0 内:灰白5Y8/1	高台部 2/12	高台部研磨 炭化物付着・墨書「○」
1821	095-05	陶器（山茶碗）	椀	7-7	Ln20	SD57	(高台)7.4	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ・内面研磨 内:ロクロナデ	密	灰白2.5Y8/1	高台部 5/12	高台部研磨
1822	096-11	土師質	土錘	7-7	Ln21	SD57	(長)3.75 (幅)0.9	オサエ・ナデ	密	浅黄橙10YR8/4	－	残重量2.55ｇ
1823	096-12	土師質	土錘	7-7	Ln21	SD57	(長)2.05 (幅)0.9	オサエ・ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ完形	残重量1.63ｇ
1824	096-09	土師質	土錘	7-7	Ln21	SD57	(長)4.6 (幅)1.1	オサエ・ナデ	密	淡黄2.5Y8/3	ほぼ完形	残重量5.01ｇ
1825	096-10	土師質	土錘	7-7	Ln21	SD57	(長)6.2 (幅)2.8	オサエ・ナデ	密	灰黄褐10YR5/2と黒N2/0	完形	残重量38.38ｇ
1826	096-02	土師器	皿	7-7	Ln22	SD58	(口)14.0	外:オサエ→ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12	
1827	096-05	陶器（山茶碗）	椀	7-7	Nn20	SD58	(口)16.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	外:灰白7.5Y7/2 内:灰白7.5Y7/1	口縁部 1/12	自然釉
1828	095-04	陶器（山茶碗）	椀	7-7	Nn21	SD58	(高台)8.0	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白N7/0	高台部 5/12	自然釉
1829	096-08	土師質	土錘	7-7	Ln20	SD58	(長)4.6 (幅)1.35	オサエ・ナデ	密	淡黄2.5Y8/3	ほぼ完形	残重量6.58ｇ
1830	096-03	土師器	皿	7-7	Ln16	SD61	(口)11.5	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
1831	096-07	土師質	土錘	7-7	Ln14	SD61	(長)3.2 (幅)2.1	オサエ・ナデ	密	灰白2.5Y8/2	径 10/12	残重量10.55ｇ
1832	096-01	土師器	皿	7-7	Ln12	SE64	(口)13.0	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
1833	095-06	陶器（山茶碗）	椀	7-7	Ln17	包含層	(高台)8.2	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	高台部 5/12	内面・高台部研磨・自然釉

第 39 表　出土遺物観察表（木製品）（1）

報告番号	実測番号	取上番号	器種			遺構			法量（cm）			木取り等	樹種	樹種学名	特記事項
			大別分類	細別用途	器種・小分類	地区	遺構	層位等	全長	幅	厚さ				
104	33-05	W219	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	28.3	4.3		丸太材	ハンノキ属	*Alnus* sp.(A)	上部欠損
105	35-01	W200	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	23.5	3.7		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	上部・先端部欠損
106	35-07	W205	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	21.8	6.9		丸太材	ハンノキ属	*Alnus* sp.(A)	上部欠損
107	34-08	W224	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	23.5	3.7		丸太材	マダケ属	*Phyllestachys* sp.	両端欠損
108	35-05	W201	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	24.1	4.4		丸太材	アカメガシワ	*Mallotus japonicus*	両端欠損
109	34-02	W212	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	17.0	3.6	3.7	丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	上部欠損 丸杭の先端部
110	34-03	W213	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	14.7	3.6		丸太材	ハンノキ属	*Alnus* sp.(A)	上部欠損
111	33-09	W220	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	14.3	4.2		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	両端欠損
112	34-07	W217	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	13.1	4.9		丸太材	ハンノキ属	*Alnus* sp.(A)	両端欠損
113	34-01	W209	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	13.3	3.0		丸太材	クロバイ	*Symplocos prunifolia*	両端欠損
114	35-06	W206	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	8.6	5.8		丸太材	ハンノキ属	*Alnus* sp.(A)	両端欠損
115	34-06	W215	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	9.9	3.7		丸太材	ハンノキ属	*Alnus* sp.(A)	両端欠損
116	34-04	W214	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	9.8	3.7		丸太材	ハンノキ属	*Alnus* sp.(A)	両端欠損
117	35-08	W207	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	7.8	3.0		丸太材	ヤナギ属	*Salix* sp.	両端欠損
118	35-03	W203	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	26.3	7.0		丸太材	ハンノキ属 (ヤシャブシ類)	*Alnus* sp.(B)	上部欠損
119	33-01	W208	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	30.1	5.3		丸太材	ハンノキ属	*Alnus* sp.(A)	上部欠損
120	35-04	W204	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	34.1	6.8		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	上部欠損、先端一部欠損
121	35-02	W202	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	38.3	6.9		丸太材	ハンノキ属	*Alnus* sp.(A)	上部欠損、先端一部欠損
122	34-05	W221	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	42.7	6.0		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	上部欠損、先端一部欠損
123	33-04	W216	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	41.1	5.5		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	上部欠損
124	33-02	W210	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	42.4	6.8		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	上部欠損
125	33-06	W218	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	47.4	6.4		丸太材	クリ	*Cryptomeria japonica*	上部欠損
126	33-03	W211	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	58.0	6.4		丸太材	スギ	*Cryptomeria japonica*	上部欠損
127	33-07	W222	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	63.6	5.5		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	上部欠損
128	33-08	W223	杭	丸杭		5-2	SD35	最下層	72.2	4.5		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	上部欠損
294	11-06	W50	杭	丸杭		7-1	SD38	堰A	113.5	7.4	4.2	丸太材	スギ	*Cryptomeria japonica*	樹皮残存
295	09-02	W67	杭	丸杭		7-1	SD38	堰A	86.5	4.6		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
296	02-04	W18	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	25.2	5.6	7.5	蜜柑割	アオダモ属	*Fraxnus* sp.	
297	02-05	W20	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	32.5	6.0	4.0	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
298	03-03	W30	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	54.3	7.2	5.0	蜜柑割	ネムノキ	*Albizzia julibrissin*	
299	14-04	W15	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	57.4	5.4	8.3	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
300	08-07	W22	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	58.6	8.7	4.2	蜜柑割	モミ	*Abies* firma	
301	14-07	W29	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	60.3	6.4	4.8	蜜柑割	ネムノキ	*Albizzia julibrissin*	
302	04-01	W13	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	66.0	9.5	6.2	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
303	20-04	W38	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	73.6	7.5	6.0	蜜柑割	ネムノキ	*Albizzia julibrissin*	
304	03-02	W39	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	74.2	7.5	5.5	蜜柑割	ネムノキ	*Albizzia julibrissin*	
305	13-03	W35	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	80.9	5.7	6.4	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
306	02-02	W19	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	50.1	8.5	5.6	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
307	02-01	W17	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	51.3	5.1	7.2	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
308	14-02	W24	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	89.6	7.4	6.4	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
309	14-01	W31	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	90.6	7.9	6.5	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
310	13-06	W16	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	91.7	7.1	5.6	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
311	20-01	W8	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	93.3	12.6		蜜柑割	ムクノキ	*Aphananthe aspera*	
312	14-06	W26	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	87.6	9.0	8.9	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
313	08-03	W23	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	84.0	12.6	6.1	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
314	03-01	W37	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	81.7	7.2	8.7	蜜柑割	ネムノキ	*Albizzia julibrissin*	
315	20-02	W9	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	78.1	6.8	4.8	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
316	20-03	W33	杭	角杭	有孔材	7-1	SD38	堰A	88.6	10.7	5.4	蜜柑割	モミ	*Abies* firma	板材転用ではなく杭として製作された可能性が高い
317	07-02	W12	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	96.3	12.2	6.0	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
318	20-06	W34	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	102.0	9.1		蜜柑割	モミ	*Abies* firma	
319	13-04	W21	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	103.0	10.1	7.0	蜜柑割	モミ	*Abies* firma	
320	14-03	W25	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	104.7	7.7	8.0	蜜柑割	モミ	*Abies* firma	
321	14-05	W14	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	107.7	11.6	4.1	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	

第 40 表　出土遺物観察表（木製品）（２）

報告番号	実測番号	取上番号	器種			遺構			法量（cm）			木取り等	樹種	樹種学名	特記事項
			大別分類	細別用途	器種・小分類	地区	遺構	層位等	全長	幅	厚さ				
322	07-01	W10	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	116.5	14.5	7.8	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
323	07-03	W11	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	117.6	6.0	10.1	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
324	20-05	W32	杭	角杭		7-1	SD38	堰A	119.2	9.1	7.5	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
325	20-07	W36	杭	丸杭		7-1	SD38	堰B	73.8	7.0		丸太材	ネムノキ	*Albizzia julibrissin*	
326	13-01	W45	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	85.6	9.6		半裁割	モミ	*Abies* firma	柱材転用か
327	08-06	W44	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	89.2	9.9	5.8	蜜柑割	モミ	*Abies* firma	くりこみあり
328	11-01	W47	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	73.5	14.0	8.6	蜜柑割	ヤマグワ	*Morus australis*	
329	08-05	W40	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	82.8	11.3	3.3	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
330	12-06	W57	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	83.5	6.9	8.5	蜜柑割	モミ	*Abies* firma	
331	11-05	W49	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	89.5	11.0	6.7	蜜柑割	モミ	*Abies* firma	
332	13-02	W46	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	91.0	10.2	5.9	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
333	10-08	W48	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	91.2	9.4		蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
334	08-04	W41	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	91.2	9.8	6.2	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
335	08-02	W42	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	92.9	10.5	5.0	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
336	08-01	W43	杭	角杭		7-1	SD38	堰B	112.0	9.1	5.7	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
337	05-01	W66	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	34.8	5.8	5.8	蜜柑割	ヤマグワ	*Morus australis*	
338	04-04	W54	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	41.1	7.0	6.7	蜜柑割	ネムノキ	*Albizzia julibrissin*	
339	04-06	W60	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	37.7	6.5	2.1	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
340	04-05	W56	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	38.8	6.1	3.0	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
341	06-05	W81	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	51.8	9.5	4.7	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
342	09-07	W83	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	64.0	7.0	3.6	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
343	11-03	W53	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	65.1	7.4	3.4	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
344	12-05	W55	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	68.2	6.2		蜜柑割	モミ	*Abies* firma	
345	11-02	W52	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	75.2	7.8	8.7	蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
346	12-04	W62	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	84.6	6.8		半裁割	ムクノキ	*Aphananthe aspera*	
347	09-01	W76	杭	角杭		7-1	SD38	堰C	91.4	7.5		蜜柑割	スギ	*Cryptomeria japonica*	
348	02-07	W59	杭	丸杭		7-1	SD38	堰D	14.4	3.0		丸太材	スギ	*Cryptomeria japonica*	
349	05-05	W73	杭	丸杭		7-1	SD38	堰D	54.1	6.2		丸太材	ムクノキ	*Aphananthe aspera*	
350	12-03	W58	杭	丸杭		7-1	SD38	堰D	117.0	6.6		丸太材	スギ	*Cryptomeria japonica*	
351	10-07	W51	杭	丸杭		7-1	SD38	堰D	117.4	7.3		丸太材	スギ	*Cryptomeria japonica*	
352	12-02	W64	杭	丸杭		7-1	SD38	堰D	118.5	6.6		丸太材	スギ	*Cryptomeria japonica*	
353	07-05	W63	杭	角杭		7-1	SD38	堰D	96.2	7.8	8.3	蜜柑割	ムクノキ	*Abies* firma	
354	07-04	W61	杭	角杭		7-1	SD38	堰D	94.2	7.6	13.1	蜜柑割	ネムノキ	*Albizzia julibrissin*	
355	10-09	W68	杭	丸杭		7-1	SD38	堰E	74.0	4.1		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
356	05-04	W71	杭	丸杭		7-1	SD38	堰E	47.2	5.0		丸太材	サワグルミ	*Pterocarya rhoifolia*	
357	05-02	W74	杭	丸杭		7-1	SD38	堰E	17.6	5.1		丸太材	ヤナギ属	*Salix* sp.	
358	01-02	W101	杭	丸杭		7-3A	SD38	堰F	13.3	4.0		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
359	01-03	W100	杭	丸杭		7-3A	SD38	堰F	18.6	5.5		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
360	02-06	W28	未製品？			7-1	SD38	堰A	20.2	14.5	6.2	半裁割	ウルシ属	*Rhus* sp.	
361	10-04	W2	板状	有孔材	杭転用	7-1	SD38	堰	58.3	3.5	1.2	割材削り出し	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata*	尖端焼け
362	34-19	W240	板状	木札か		7-1	SD38	SZ40	(34.1)	4.9	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	牛馬骨付近
363	34-20	W238	板状	木札か		7-1	SD38	SZ40	(33.2)	2.4	0.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	牛馬骨付近
364	34-21	W239	板状	木札か		7-1	SD38	SZ40	12.6	1.7	0.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	牛馬骨付近
365	01-08	W107	棒状材	火付木		7-1	SD38	SZ40	13.8	0.9	0.5	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
366	01-10	W111	棒状材	火付木		7-1	SD36	南岸	28.2	2.5	2.3	割材削り出し	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	一部焼けあり
367	34-17	W235	板材	積木状		7-1	SD38	SZ40	8.1	4.6	5.3	割材削り出し	ムクノキ	*Aphananthe aspera*	
368	34-18	W236	板材	積木状		7-1	SD38	SZ40	6.9	7.1	7.8	割材削り出し	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
369	34-16	W237	板材	積木状		7-1	SD38	SZ40	8.2	7.5	2.9	割材削り出し	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
370	34-13	W232	板材	積木状		7-1	SD38	SZ40	7.8	6.3	2.4	割材削り出し	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
371	34-14	W233	板材	積木状		7-1	SD38	SZ40	4.9	6.1	2.8	割材削り出し	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
372	04-08	W94	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	21.2	4.3		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
373	04-02	W7	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	25.7	4.3		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
374	03-04	W92	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	31.7	3.8		丸太材	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	

第 41 表　出土遺物観察表（木製品）（３）

報告番号	実測番号	取上番号	器種			遺構			法量（cm）			木取り等	樹種	樹種学名	特記事項
			大別分類	細別用途	器種・小分類	地区	遺構	層位等	全長	幅	厚さ				
375	06-06	W79	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	32.7	4.5		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
376	04-09	W96	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	35.6	4.1		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
377	04-07	W93	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	37.7	4.6		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
378	06-02	W87	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	39.1	3.9	3.8	丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
379	04-03	W4	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	48.0	4.4		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
380	05-07	W91	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	44.6	5.0		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
381	05-08	W95	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	45.3	5.6		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
382	06-04	W78	杭？	丸太材？		7-1	SD38	SZ40	41.0	7.7		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
383	10-01	W89	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	61.0	5.0		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
384	06-01	W77	杭？	丸太材？		7-1	SD38	SZ40	53.1	8.6		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
385	05-06	W90	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	52.7	4.5		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
386	06-03	W86	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	51.5	4.1		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
387	04-10	W97	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	51.2	4.3		丸太材	クリ	*Castanea crenata*	
388	05-03	W69	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	39.0	5.1		丸太材	同定せず	—	
389	10-02	W98	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	57.2	3.6		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
390	10-10	W88	杭？	丸太材？		7-1	SD38	SZ40	60.5	10.9		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
391	10-06	W75	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	72.1	7.8		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
392	10-05	W1	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	63.6	6.8		丸太材	スギ	*Cryptomeria japonica*	
393	10-03	W70	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	63.3	3.6		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
394	11-04	W6	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	95.7	6.0		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
395	09-04	W84	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	102.5	5.1		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
396	09-06	W85	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	102.2	4.8		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
397	09-05	W82	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	107.1	6.5		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
398	09-03	W72	材	丸太材？		7-1	SD38	SZ40	121.7	5.9		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
399	12-01	W3	杭	丸杭		7-1	SD38	SZ40	158.0	4.5		丸太材	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1161	31-13	K72	祭祀具	斎串	圭頭	7-4	SD53	最下層	20.4	1.9	0.5	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1162	30-06	K43	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	22.1	2.0	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1163	30-14	K52	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	22.7	1.8	0.35	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1164	30-02	K39	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	22.6	2.0	0.55	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1165	30-01	K38	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	23.7	1.9	0.6	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1166	31-03	K60	祭祀具	斎串	圭頭	7-3D	SD47	最下層	24.4	2.0	0.35	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1167	30-05	K42	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	18.6	2.2	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1168	31-08	K67	祭祀具	斎串	圭頭	7-3D	SD47	最下層	14.8	2.2	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1169	31-09	K68	祭祀具	斎串	圭頭	7-3D	SD47	最下層	21.3	1.6	0.25	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1170	31-07	K66	祭祀具	斎串	圭頭	7-3D	SD47	最下層	25.1	2.0	0.25	板目	ヒノキ属	*Cryptomeria japonica*	
1171	30-11	K48	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	13.4	1.5	0.25	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1172	31-10	K69	祭祀具	斎串		7-3D	SD47	最下層	23.8	1.5	0.4	板目	ヒノキ属	*Cryptomeria japonica*	
1173	30-08	K45	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	14.1	2.1	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1174	30-07	K44	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	15.4	1.7	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1175	30-04	K41	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	21.4	1.8	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1176	30-18	K55	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	7.5	1.6	0.45	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片
1177	30-21	K59	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	7.1	1.1	0.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片
1178	30-17	K54	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	5.4	0.9	0.5	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片
1179	30-19	K56	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	8.1	1.8	0.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片
1180	31-12	K71	祭祀具	斎串	圭頭	7-3D	SD47	最下層	8.2	1.9	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片
1181	31-16	K76	祭祀具	斎串	圭頭	7-4	SD53	最下層	6.7	1.9	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片
1182	30-09	K46	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	24.0	2.0	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1183	31-11	K70	祭祀具	斎串		7-3D	SD47	最下層	8.5	1.6	0.35	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片　Jf11出土
1184	31-17	K77	祭祀具	斎串		7-4	SD53	最下層	6.2	1.1	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片
1185	30-03	K40	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	20.2	2.1	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1186	31-01	K61	祭祀具	斎串	圭頭	7-3D	SD47	最下層	36.8	1.9	0.45	板目	ヒノキ属	*Cryptomeria japonica*	Jf11出土
1187	31-02	K62	祭祀具	斎串		7-3D	SD47	最下層	33.5	2.3	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	Jf11出土
1188	31-15	K74	祭祀具	斎串		7-4	SD53	最下層	17.8	1.3	0.6	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片

第 42 表　出土遺物観察表（木製品）（４）

報告番号	実測番号	取上番号	器種			遺構			法量（cm）			木取り等	樹種	樹種学名	特記事項
			大別分類	細別用途	器種・小分類	地区	遺構	層位等	全長	幅	厚さ				
1189	30-15	K51	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	40.5	2.0	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1190	31-05	K64	祭祀具	斎串		7-3D	SD47	最下層	25.3	1.7	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	Jf11出土
1191	31-06	K65	祭祀具	斎串	圭頭	7-3D	SD47	最下層	19.4	1.7	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	Jf11出土
1192	31-14	K73	祭祀具	斎串	圭頭	7-4	SD53	最下層	11.3	1.5	0.5	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1193	30-13	K50	祭祀具	斎串	圭頭	7-2	SD47	最下層	17.6	1.7	0.25	板目	アスナロ属	*Thujopsis dolabrata*	
1194	30-16	K53	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	39.9	1.3	0.5	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片
1195	30-10	K47	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	13.1	1.2	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1196	30-20	K57	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	8.5	1.0	0.5	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	破片
1197	30-12	K49	祭祀具	斎串		7-2	SD47	最下層	17.6	1.4	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1198	31-19	W116	祭祀具	武器形	刀子	7-3D	SD47	最下層	17.8	1.7	0.6	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1199	32-01	W197	祭祀具	動物形	鳥形	7-3D	SD47	最下層	11.2	3.3	0.3	柾目	アスナロ属	*Thujopsis dolabrata*	
1200	27-13	W183	農具	砧		7-3D	SD47	最下層	19.4	6.3	6.7	割材削り出し	アカガシ亜属	*Quercus* subgen.	
1201	01-12	W104	板材			7-4	SD53	中層	29.2	3.4	0.9	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1202	31-18	W198	板材			7-3D	SD47	最下層	19.9	3.6	0.7	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1203	01-05	W106	容器	曲物	底板	7-4	SD53	最下層	15.4	6.6	0.7	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	穿孔1
1204	01-09	W105	容器	曲物	側板	7-4	SD53	最下層	9.1	2.9	0.4	板目	アスナロ属	*Thujopsis dolabrata*	2破片・側面線刻あり
1205	01-04	W103	杭	角杭		7-4	SD53	中層	11.9	3.2		板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端のみ
1206	34-09	W227	木片			7-4	SD53	最下層	3.6	2.5	1.6	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1207	27-15	W184	棒状材	火付木		7-3D	SD47	最下層	11.9	1.2		割材削り出し	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	先端焼け
1208	27-16	W185	棒状材	火付木		7-3D	SD47	最下層	19.0	1.2	0.9	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1209	27-17	W186	棒状材	火付木		7-3D	SD47	最下層	21.8	1.1	0.9	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1210	31-04	W250	棒状材	火付木		7-3D	SD47	最下層	26.5	1.9	0.6	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1211	01-06	W117	棒状材	火付木		7-2	SD47	最下層	23.8	1.9	1.9	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1212	12-07	W225	棒状材	火付木		7-2	SD47	最下層	22.0	1.8	1.3	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1338	03-05	W102	板材			7-4	SD52	最下層	97.0	7.0	3.9	板目	マツ(二葉)	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
1476	28-04	K4	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	19.4	1.7	0.2	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1477	28-08	K8	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	19.1	1.5	0.2	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1478	28-06	K6	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	19.3	1.7	0.3	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1479	28-17	K17	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	19.8	1.9	0.5	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1480	28-12	K12	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.2	1.3	0.15	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1481	28-19	K19	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.3	1.6	0.2	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1482	28-27	K27	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.6	1.2	0.4	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1483	28-18	K18	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.7	1.6	0.15	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1484	28-21	K21	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.7	1.6	0.25	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1485	28-16	K16	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	21.2	1.1	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1486	28-23	K23	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	21.2	1.7	0.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1487	28-24	K24	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	21.1	1.5	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1488	28-22	K22	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	21.3	1.6	0.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1489	28-31	K31	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	21.6	1.5	0.2	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1490	28-02	K2	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.7	1.7	0.25	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1491	28-10	K10	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	16.8	1.2	0.1	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1492	28-29	K29	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	14.7	1.4	0.2	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1493	28-28	K28	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	15.0	1.8	0.25	板目	アスナロ属	*Thujopsis dolabrata*	
1494	29-03	K34	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	11.5	2.0	0.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1495	29-04	K35	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	9.1	1.5	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1496	29-05	K36	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	3.5	1.4	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1497	28-05	K5	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	19.1	1.7	0.2	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1498	28-30	K30	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	19.2	1.2	0.4	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1499	28-07	K7	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	19.4	1.5	0.1	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1500	28-11	K11	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	19.4	1.3	0.25	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1501	28-15	K15	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	19.7	1.2	0.3	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1502	28-09	K9	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.0	1.3	0.3	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1503	28-03	K3	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.1	1.8	0.3	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	

第 43 表　出土遺物観察表（木製品）（５）

報告番号	実測番号	取上番号	器種			遺構			法量（cm）			木取り等	樹種	樹種学名	特記事項
			大別分類	細別用途	器種・小分類	地区	遺構	層位等	全長	幅	厚さ				
1504	28-13	K13	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.2	1.5	0.15	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1505	28-01	K1	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.5	1.6	0.3	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1506	28-14	K14	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	20.8	1.3	0.3	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1507	28-20	K20	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	21.6	1.8	0.2	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1508	28-25	K25	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	16.1	1.9	0.25	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1509	28-26	K26	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	15.6	1.8	0.35	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1510	29-02	K33	祭祀具	斎串		7-5	SE72	最下層	11.3	1.7	0.2	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	
1511	27-11	W180	板材			7-5	SE72	最下層	39.0	3.2	3.1	柾目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1512	27-09	W176	板材			7-5	SE72	最下層	33.4	2.2	1.8	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1513	27-10	W178	板材			7-5	SE72	最下層	32.6	9.6	2.6	板目	同定せず	—	
1514	27-04	W177	板材			7-5	SE72	最下層	8.3	9.3	5.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1515	27-14	W181	杭	丸杭		7-5	SE72	最下層	7.7	3.2		丸太材	シイ属	*Castanopsis* sp.	先端のみ残存
1516	27-12	W182	杭	丸杭		7-5	SE72	最下層	32.9	3.1		丸太材	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	先端のみ
1517	29-09	W190	容器	折敷	底板	7-5	SE72	最下層	28.0	1.5	0.3	板目	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa*	桜の綴じ皮残る
1518	29-07	W188	紡織具			7-5	SE72	最下層	24.0	2.1	1.1	割材削り出し	アスナロ属	*Thujopsis dolabrata*	
1519	29-08	W189	紡織具			7-5	SE72	最下層	24.2	2.0	0.9	割材削り出し	アスナロ属	*Thujopsis dolabrata*	
1520	32-04	W170	装身具	横櫛		7-5	SE72	最下層	4.2	1.9	0.8	板目	イスノキ	*Distylium racemosum*	
1521	32-05	W199	装身具	横櫛		7-5	SE72	最下層	6.7	3.7	0.8	板目	イスノキ	*Distylium racemosum*	
1522	27-01	W168	容器	曲物	底板	7-5	SE72	最下層	22.9		0.8	板目	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa*	完形 木釘残る
1523	27-02	W169	容器	曲物	底板	7-5	SE72	最下層	13.9	3.1	0.9	板目	アスナロ属	*Thujopsis dolabrata*	表面焼け 径10.5、木釘残る
1524	29-15	W196	板材			7-5	SE72	最下層	49.8	2.9	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1525	29-11	W192	板材			7-5	SE72	最下層	12.8	1.8	0.6	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1526	29-14	W195	板材			7-5	SE72	最下層	27.3	2.5	0.4	板目	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
1527	29-10	W191	板材			7-5	SE72	最下層	21.9	2.0	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1528	34-12	W231	木片			7-5	SE72	最下層	19.9	2.7	0.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1529	34-11	W229	木片			7-5	SE72	最下層	21.1	3.3	1.0	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1530	29-13	W194	板材			7-5	SE72	最下層	16.1	1.1	0.9	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1531	29-12	W193	板材			7-5	SE72	最下層	12.1	0.9	0.5	割材削り出し	マツ（二葉）	*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*	
1532	01-07	W110	棒状材	火付木		7-5	SE72	最下層	10.5	2.0	2.3	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1533	27-03	W175	棒状材	火付木		7-5	SE72	最下層	11.0	1.5	0.7	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1534	27-18	W187	棒状材	火付木		7-5	SE72	最下層	22.2	2.2	0.7	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1535	27-08	W174	棒状材	火付木		7-5	SE72	最下層	26.3	1.5	1.0	割材削り出し	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa*	先端焼け
1536	27-05	W171	棒状材	火付木		7-5	SE72	最下層	29.1	1.2	1.3	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1537	27-07	W173	棒状材	火付木		7-5	SE72	最下層	30.3	2.2	1.8	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1538	27-06	W172	棒状材	火付木		7-5	SE72	最下層	25.2	3.7	2.6	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端焼け
1569	34-10	W228	板材			7-5	SE72	堀方	19.7	1.8	1.2	柾目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1570	15-04	W112	板材			7-5	SE72	掘方	21.3	9.9	2.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	井戸枠製作時の破片か
1571	15-05	W113	板材			7-5	SE72	掘方	7.3	5.3	4.7	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	井戸枠製作時の破片か
1572	15-06	W114	板材			7-5	SE72	掘方	6.7	7.5	3.1	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	井戸枠製作時の破片か
1573	25-02	W139	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	北面	194.2	6.6	3.8	柾目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1574	24-07	W138	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	北面	207.0	32.2	8.0	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	手斧の方向は上→下
1575	24-04	W137	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	北面	218.2	23.9	7.6	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	手斧の方向は上→下
1576	24-06	W136	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	北面	211.8	25.1	6.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	手斧の方向は上→下
1577	24-02	W145	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	南面	226.6	24.9	6.9	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	手斧の方向は下→上
1578	24-03	W144	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	南面	223.2	20.3	8.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	手斧の方向は上→下
1579	24-01	W143	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	南面	223.0	20.4	8.0	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	「→」の線刻あり 手斧の方向は上→下
1580	24-05	W142	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	南面	221.0	16.1	6.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	手斧の方向は上→下
1581	15-01	W165	井戸枠材	板状？		7-5	SE72	東面	21.9	13.3	4.7	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	1585の外面に付着
1582	22-06	W129	井戸枠材	板状	横板1	7-5	SE72	東面	110.8	16.4	5.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1583	18-02	W146	井戸枠材	板状	横板2	7-5	SE72	東面	89.7	20.1	4.0	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1584	25-03	W141	井戸枠材	板状	横板3	7-5	SE72	東面	122.2	27.3	4.4	柾目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1585	19-01	W147	井戸枠材	板状	横板4	7-5	SE72	東面	116.5	22.2	5.0	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	貫孔を1581で塞ぐ
1586	19-02	W148	井戸枠材	板状	横板5	7-5	SE72	東面	118.5	23.9	5.6	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1587	16-01	W149	井戸枠材	板状	横板6	7-5	SE72	東面	124.2	19.0	6.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	

第 44 表　出土遺物観察表（木製品）（６）

報告番号	実測番号	取上番号	器種			遺構			法量（cm）			木取り等	樹種	樹種学名	特記事項
			大別分類	細別用途	器種・小分類	地区	遺構	層位等	全長	幅	厚さ				
1588	26-02	W150	井戸枠材	板状	横板7	7-5	SE72	東面	132.3	21.2	5.1	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1589	16-02	W151	井戸枠材	板状	横板8	7-5	SE72	東面	122.4	23.2	5.7	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1590	26-04	W157	井戸枠材	板状	横板9	7-5	SE72	東面	109.3	30.0	6.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1591	23-03	W124	井戸枠材	板状	横板1	7-5	SE72	西面	60.6	14.2	5.5	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1592	23-06	W127	井戸枠材	板状	横板2	7-5	SE72	西面	71.0	10.3	2.2	板目	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa*	
1593	15-02	W122	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	西面	23.2	24.9	4.0	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	上部摩滅 下部は平らに成形
1594	15-03	W123	井戸枠材	板状	縦板	7-5	SE72	西面	30.4	32.8	3.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	上部摩滅 下部は平らに成形
1595	23-01	W128	井戸枠材	板状	横板3	7-5	SE72	西面	119.2	13.3	4.5	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1596	26-01	W131	井戸枠材	板状	横板4	7-5	SE72	西面	124.8	23.4	5.1	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1597	21-01	W132	井戸枠材	板状	横板5	7-5	SE72	西面	120.9	17.8	5.5	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1598	21-02	W133	井戸枠材	板状	横板6	7-5	SE72	西面	116.9	21.4	5.7	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1599	21-03	W134	井戸枠材	板状	横板7	7-5	SE72	西面	120.9	24.7	6.0	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1600	23-02	W135	井戸枠材	板状	横板8	7-5	SE72	西面	121.6	19.2	5.6	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1601	17-05	W156	井戸枠材	板状	横板9	7-5	SE72	西面	109.1	28.1	4.7	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1602	18-01	W158	井戸枠材	板状	横桟	7-5	SE72	南面か	116.9	16.8	4.0	板目	アスナロ属	*Thujopsis dolabrata*	材の中心に1603と接合するほぞあり、両端圧痕あり
1603	18-05	W164	井戸枠材	板状	横桟	7-5	SE72	南面か	83.6	17.4	4.6	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	材の中央に1604と接合するほぞあり、貫穴あり
1604	17-02	W153	井戸枠材	板状	横桟	7-5	SE72	北面か	110.4	16.0	6.0	追柾目	スギ	*Cryptomeria japonica*	両端部に圧痕あり 幅の広い丁斧痕
1605	17-04	W155	井戸枠材	板状	横桟	7-5	SE72	北面か	101.9	13.9	3.7	柾目	スギ	*Cryptomeria japonica*	尖端はつぶれる 材の中央に穿孔あり
1606	22-03	W121	井戸枠材	板状	横桟	7-5	SE72	北面	121.1	12.2	4.6	半裁削り出し	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	端部片側欠損
1607	22-04	W130	井戸枠材	板状	横桟	7-5	SE72	南面	126.0	11.6	5.9	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	横桟は、両端を加工するものの表面は節が残るもの
1608	26-01	W160	井戸枠材	板状	腰板	7-5	SE72	南面か	144.8	10.4	1.5	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1609	22-02	W120	井戸枠材	板状	腰板	7-5	SE72	北面	87.4	14.1	1.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1610	25-01	W119	井戸枠材	板状	腰板	7-5	SE72	北面	133.8	9.4	1.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1611	22-01	W118	井戸枠材	板状	腰板	7-5	SE72	北面	85.1	11.1	1.2	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1612	23-04	W125	井戸枠材	丸杭	支え木	7-5	SE72	西面	30.6	2.6		丸太材	シイ属	*Castanopsis* sp.	
1613	23-05	W126	井戸枠材	丸杭	支え木	7-5	SE72	西面	137.4	3.8		丸太材	ヤナギ属	*Salix* sp.	
1614	22-05	W140	井戸枠材	板状	腰板か	7-5	SE72	南面か	91.4	11.8	5.0	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	
1615	18-03	W163	井戸枠材	板状		7-5	SE72	不明	49.0	14.2	3.4	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	裏面と先端部腐食
1616	17-01	W152	井戸枠材	板状		7-5	SE72	不明	51.0	13.0	4.1	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	手斧痕残る
1617	18-04	W159	井戸枠材	板状	穿孔あり	7-5	SE72	不明	28.8	7.3	3.1	柾目	アスナロ属	*Thujopsis dolabrata*	台形状を呈し、表面を丁寧にけずる。貫穴２カ所。
1618	15-07	W166	井戸枠材	ほぞ？		7-5	SE72	不明	16.3	4.7	3.0	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	凹状のくぼみあり
1659	01-01	W108	板材			7-5	SD66	最下層	28.8	4.7	3.2	割材削り出し	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端杭状
1660	01-11	W109	板材	杭か		7-5	SD66	最下層	66.4	11.2	8.3	蜜柑割	コナラ	*Quercus serrata*	先端杭状
1661	32-02	K78	祭祀具	斎串		7-5	SD66	最下層	18.8	1.7	0.3	板目	スギ	*Cryptomeria japonica*	先端欠損
1662	32-03	W226	祭祀具	棒状製品		7-5	SD66	最下層	22.9	0.9	0.6	板目	ヒノキ属	*Chamaecyparis obtusa*	先端を丁寧に削る

V　自然科学分析

1　分析の目的

a　概要

朝見遺跡（第２次）では、井戸・大溝から多くの木製品が出土し、大溝の炭層からは鍋や釘などの金属製品・鉄滓が出土した。また、埋蔵環境で水を多く含んでいたことから、植物種実や動物遺存体、昆虫化石といった有機物が良く残っていた。これらについて自然科学分析を行うことで、当時の技術や植生の復元を試み、朝見遺跡の性格に迫る一助とした。

分析を行った項目および概要、執筆者は以下の通りである。樹種同定は、杭や板材など保存処理を行わなかった遺物を布谷知夫氏に依頼し、曲物・井戸枠材や祭祀具など保存処理を行った遺物を株式会社吉田生物研究所に委託した。樹種同定結果は、出土木製品一覧表（第 39 ～ 44 表）に反映しているため、詳細はそちらを参照されたい。微化石分析と昆虫化石分析は、株式会社古環境研究所に一括で委託した。赤彩顔料分析は、機材を用いた分析は間渕創氏に依頼し、本文は相場が執筆した。

なお、本文の内容については、報告書作成を進めていくうえで遺構の名称・時期などが分析当時と食い違いがでてきたため、以下の成果を基に若干の加筆・修正を行ったことを断っておきたい。（相場）

b　分析一覧

２　朝見遺跡（第２次）木製品の樹種同定結果

布谷知夫氏（三重県立博物館）

樹種同定①（杭・井戸枠材など）

５区・７－１区出土杭類と、７－４区・７－５区出土木製品・井戸枠の樹種同定（平安時代～室町時代）。

３　出土木製品の樹種同定結果

株式会社吉田生物研究所

樹種同定②（木製品・祭祀具など）

７－２区・７－５区出土木製品・木製祭祀具・井戸枠の樹種同定（平安時代～鎌倉時代）。(1)

４　朝見遺跡第２次調査における自然科学分析報告（微化石分析）

杉山真二氏・金原正子氏・金原美奈子氏（株式会社古環境研究所）

７－２区・７－４区・７－５区大溝・井戸の植物珪酸体分析・花粉分析・種実同定（平安時代～鎌倉時代）。

５　朝見遺跡第２次調査における自然科学分析報告（昆虫化石同定）

松田隆二氏（株式会社古環境研究所）

７－４区ＳＥ 72 出土昆虫の同定（平安時代）。

６　朝見遺跡出土鍛冶・鋳造関連遺物分析調査結果

大澤正己氏･鈴木瑞穂氏（日鉄住金テクノロジー株式会社、旧・株式会社九州テクノリサーチ）

７－２区ＳＤ 47 出土金属製品・鉄滓の成分分析（平安時代）。

７　赤色顔料分析

間渕創氏（三重県立博物館）

朱墨付着灰釉陶器の赤色顔料分析（平安時代）。(2)

８　朝見遺跡出土の動物遺存体

丸山真史氏（奈良文化財研究所）

５区・７－１～５区出土動物遺存体の同定および分析（平安時代～室町時代）。(3)

〔 註 〕

(1) 木製品保存処理の過程で樹種同定を行った。複数回にわたって保存処理を委託したため、成果報告書も同数存在するが、報告書掲載時にはそれらをまとめて１つの項目とし、処理番号は省略した。

(2) 蛍光Ｘ線分析結果のスペクトル図は、紙面の都合上省略した。

(3) 楕円フーリエ解析は植月学氏（山梨県立博物館）、ストロンチウム安定同位体分析は覚張隆史氏（北里大学医学部）のご協力による。

2　朝見遺跡（第２次）木製品の樹種同定結果

a　出土樹種について

朝見遺跡から出土した木製品の木取りを目視で確認しながら、木口、板目、柾目の三断面について、カミソリを使って薄い切片を作り、一時的なプレパラートを作成して生物顕微鏡で検鏡し、樹種同定

を行った。扱った試料数は209、同定した種数は19種（属を含む）であった。

同定した樹種名と簡単な生態分布等を以下に示す。

モミ（*Abies* firma）　10

モミ属には数種あるが、モミ以外は亜高山に生育する種であるため、モミとした。しかしモミ自体も本来の生育地はシイ・カシ帯の上部の岩が多いような立地であり、海抜400～500ｍ程度を好む種である。脂分が少なく、白い材を持ち、良材として使われることが多く、遺跡の周囲に見られた樹種ではない可能性がある。

マツ属複維管束亜属

（*Pinus* sp. Subgen. *Diploxylon*）　46

二葉のマツの仲間であり、クロマツは海岸のごく近くのみに生育するものであるために、アカマツであろうと考えられる。アカマツの自然の生育地は山の稜線部の乾燥した岩場であるとされている。そして、西日本ではシイ･カシ帯の元の林を何度か伐採し、乾燥した立地になった時に、アカマツを優占種とする林にと変わっていく。つまりアカマツの平地での出現は、その場所に人が住み着き、何度も林を伐採した結果に見られるようになったものと言える。

スギ（*Cryptomeria japonica*）　108

良材を得るために多用されてきたが、意識的な植林を始めるのは、それほど古い時代ではないと考えられている。すでに日本中に植林がされているために本来の生育地はわかりにくいが、スギの研究者の報告では、やや多湿な河川河口部のようなところとされている。そういう場所に大木のスギ林が存在し、登呂遺跡などでは近くのスギ林から大量のスギ材を得ていたとされる。また各地の埋没林などの位置などからも海岸近くの河口部でのスギ林の存在が推定されている。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）　3

スギの数に対してヒノキの数が少ないことは選択的な結果なのか、あるいはヒノキが周辺には少なかったのか、どちらかの判断をすることはできないが、やや不自然に思える。ヒノキは山地の傾斜地上部のやや乾燥した場所に生育する樹種であり、自然状態では平地には見られない。しかし材として緻密であり、加工しやすく、油分が少ないなどの特徴から、選んで使用されることが多い樹種である。

ヤナギ属（*Salix* sp.）　3

ヤナギの仲間は非常に種類が多く、またその同定は枝葉でも非常に困難であり、木材ではほとんど同定はできない状態である。ヤナギの仲間には、水辺を好む種と山地の乾いた場所で生育する種とがあり、水辺のヤナギの仲間は、大きな個体になるものが多い。試料からはその区別はできないが、平地での遺跡であり、近くに湿地や河川があると考えられるので、そういう湿地性のヤナギ類であろう。

ハンノキ属ヤシャブシ亜属

（*Alnus* sp. Subgen. *Alnaster*）　1

ハンノキの仲間は、二つの亜属に区別することができる。そのうちヤシャブシの仲間は平地の適湿地から山地に生育する。特別な利用事例はない。

ハンノキ属ハンノキ亜属

（*Alnus* sp. Subgen. *Alnus*）　9

ハンノキ属ハンノキ亜属は、いわゆるハンノキの仲間であり、この仲間にも、湿地の樹種と山地で生息する樹種とがある。この遺跡周辺の環境として、ごく近くにハンノキがあることは考えられる。ハンノキは、湿地の樹木の代表のように考えられているが、ヤナギの仲間は、根本が長期間、水に浸かっても生育ができるのに対して、ハンノキは長期間の水没には耐えられない。低湿地や谷部などのような環境を選んで生育する。

マダケ属（*Phyllestachya* sp.）　3

この試料は非常に太いタケの幹であり、マダケ属と判断した。マダケの仲間は多くの種があるが、材ではその区別は容易ではない。

サワグルミ（*Pterocarya rhoifoli*）　1

サワグルミの生育地は、山地の渓谷であり、谷底の湿気た、空中湿度の高い場所に、30ｍにもなるような大きな個体になる。根は浅く、材としても柔らかく、あまり特定の使用例のない樹種である。平地に見られるようなことはほぼなく、人為的に持ち込まれたものである可能性が高い。

シイ属（*Castanopsis* sp.）　2

シイの仲間は、この地域の安定した、人の手つかずの森の優占種であり、シイの材が出るということは、もともとの森であるシイやカシ類などの照葉樹

林が見られるということであろう。特にシイの森の生育には、適湿な土壌水分を持った土壌が必要であり、また材は堅く、その性質を利用されることも多い。シイの仲間には海岸性のシイと丘陵地のシイとがある。材の組織からおそらく丘陵地のシイ（コジイ）と思われる。

クリ（*Cryptomeria japonica*）　2

日本在来のクリであるヤマグリと思われる。クリは実を食用として、また材は湿気に強いため、様々な活用がされる。遺跡からもよく出土するが、本来の生育立地は照葉樹林帯の上部あたりであり、海抜400 ～ 500 mほどの場所とされている。そういう場所から持ち込まれたか、あるいは近年の研究事例からは、実と材の利用価値が高いために集落の近くに半栽培状態であったとも考えられる。

コナラ（*Qercus serratea*）　1

丘陵地で普通にみられるブナ科の樹木であり、ドングリの形の実をつける。いわゆるシイやカシなどの常緑広葉樹が優先するもともとの、手つかずの森が伐採され、少し落ち着いてきた段階で明るい立地に落葉広葉樹の森が作られる。この時の優占樹種の一つである。このコナラなどの森をさらに利用。伐採すると、アカマツが優占する林になると言われている。

ムクノキ（*Aphananthe aspera*）　5

丘陵地の下線近くなどに見ることが多い樹木で、河川の自然堤防の上のような微高地を中心に生育している種と思われる。ケヤキ、エノキと共に落葉広葉樹林を作ることが多い。特に成長の速い樹種でもあり、目立つ種である。この種の果実は甘くておいしいため、近年までは子どもにとって魅力のある野外からのおやつであった。

ヤマグワ（*Morus australis*）　2

樹高が10 mを超える落葉広葉樹であり、乾燥地から適湿地まで、幅広い環境で生育するが、日がよく当たる場を好み、現在見ることができる個体は、林縁や伐採跡地に回復してくる植生の中である場合が多く、小さな個体を見る。材は堅く、細工物などに使用される。食することができるクワの実は、ヤマグワではない。養蚕で使うクワは、中国原産のクワを改良したものである。

ウルシ属（*Rhus* sp.）　1

ウルシの属は、ハゼの仲間とウルシ の仲間がある。ウルシは中国大陸から、もたらされたものと考えられてきたが、近年の研究からその伝来は、縄文時代のかなり早い時期であると考えられるようになっている。今回出土した種の同定はできていないが､この地域にふつうにみられるウルシ属の樹種は、ヤマウルシとヤマハゼである。どちらも林縁や伐採跡などの日が当たる場所に、初期に侵入してくるパイオニア植物のひとつである。

アオダモ属（*Fraxnus* sp.）　1

やや発達した落葉広葉樹林の中のメンバーとして生育する。単独で林を作ることはない。材は粘りがあり、有用材として選択的に使われている。バットを作るのに使用されるシオジも､アオダモ属である。

ネムノキ（*Albizzia julibrissin*）　9

幅広い場所で見ることができるが、本来は川岸近くのやや湿気た立地で生育する種である。日が当たる場所でしか生育することができず、伐採跡地や川の洪水後などのパイオニア種である。

アカメガシワ（*Mallotus japonicas*）　1

ネムノキと同様なパイオニア種であるが、伐採跡地などにもっとも初期に姿を見せる樹種である。成長の速い落葉広葉樹であるが､特に材の用途はない。

クロバイ（*Symplocos prunifolia*）　1

シイ林の中に生育することが多い常緑広葉樹であ

第 45 表　杭・井戸枠類同定結果一覧

器種	樹種	点数
杭	スギ	67
	マツ	41
	モミ	10
	ネムノキ	9
	ハンノキ亜属	9
	ムクノキ	4
	マダケ属	3
	ヤマグワ	2
	ヤナギ属	2
	クリ	2
	アオダモ属	1
	ウルシ属	1
	サワグルミ	1
	シイ属	1
	アカメガシワ	1
	ハンノキ属ヤシャブシ亜属	1
	クロバイ	1

器種	樹種	点数
火付け木	コナラ	1
	スギ	18
	ヒノキ	2
井戸枠	スギ	3
	ヒノキ	1
	ヤナギ属	1
	シイ属	1
木片	スギ	5
積み木材	マツ	5
	ムクノキ	1
木札	スギ	3
斎串	スギ	12

計209個体、19種（属を含む）

り、植物社会学的な知見では、近畿地方の丘陵地の極相林は「シイ－クロバイ群集」と名付けられるほどにシイと結びつきの強い樹種である。シイほどの大木にはならず、特に材の利用はない。

b　用途ごとの樹種の特徴

用途ごとに同定した樹種と件数を第45表で示す。

杭には17樹種が使われていた。スギとマツが特に多く、モミ、ネムノキ、ハンノキ属はそれに続いて９～10、それ以外は４～１程度の使用数である。樹種の性質や生育場所としては、特に統一的な特徴はなく、近くから入手できる樹種を適当に使っているように思われる。使用数の多い上位３種は針葉樹であり、おそらくまっすぐで割り易いことから選択的に使われていると考えられる。またマツ､スギは、杭以外の使用例にも多く見られており、有用な材として使われ、その一部あるいは使用した残りの材が杭として使用されたとも考えられる。

板材、火付け材、木札、斎串などはやはり針葉樹が多く使われている。これらは割って加工しやすいことによる選択であろう。

井戸枠、木片、積み木材なども、やはり針葉樹が多く使われている。選択した結果なのか、あるいは近くにあった木材を使ったのかは明らかではない。しかし井戸枠については厚い板材として加工するためには針葉樹が向いているが、もう一つの必要な性質である水に対して強い、ということについては、ヤナギ材は向いてはいないと思われる。

全体として、スギ、マツ、モミを選択的に使用し、その他の材は身近な樹種を適時に選らんでいるような印象である。

c　周囲の植生復元について考えられること

出現した19の樹種には、植生としてまとまった傾向は見られない。むしろいろいろな植生の中からその都度に材を伐採してきたように思える。19種の中でまとまった植生単位と思えるものには、スギ林、モミ林、ヒノキ林があげられる。それぞれ純林に近い林を作る樹種である。ただし遺跡の場所の近くにその森林があるということではなく、むしろ遠方から伐採して持ち込まれたものと考えられる。

またそれ以外でまとった植生単位としては、クロバイなどを含むシイ林、ハンノキ類やヤナギ属を含む湿地植生、伐採された跡地に成立したパイオニア種を中心とした植生が考えられる。シイは１点だけであり、カシ類は見られなかった。カシ類は堅い材であり用途が多いため、遺跡の出土材にはよく見られるものであるが、今回見られなかったということは、やはりシイやカシの林は、近くにはないということだろう。シイやカシの林は本来の人が伐採を始める以前に有った原生植生であり、現在では社寺林などの保護された林などで見ることができる。近くにシイやカシの林がないということは、おそらくその遺跡の成立以前から長く人の活動が、広く行なわれていたということだろう。

その他の出現樹種では、マツを優占種とする植生が考えられるが、マツ林の中には、その生育の段階によってさまざまな樹種が入るのが普通であるため、そのマツ林には、コナラ、アオダモ類、ムクノキがあった可能性がある。クリについては、栽培の可能性もあり、またマツ林の中に見られた可能性もある。残ったサワグルミについては、遺跡近くに見られた可能性は少ない。

出土した材だけから考えると、遺跡の周辺には、多くの落葉樹を含んだマツ林、湿地、伐採されて以後それほど時間がたっていない立地と広場に面した林縁の植生などが見られ、強い人為の加わった場所であったと思われる。少し離れた場所には照葉樹林、スギ、ヒノキ、モミの針葉樹の森があったと考えられる。

布谷知夫（三重県立博物館）

3　出土木製品の樹種同定結果

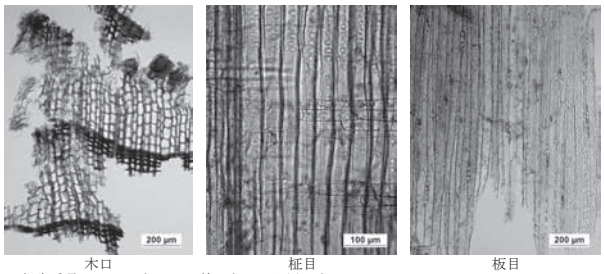
a　試料

試料は三重県朝見遺跡（第２次）から出土した紡織具２点、服飾具２点、容器１点、農具１点、容器４点､祭祀具64点､用途不明品２点､井戸枠材16点、合計92点である。

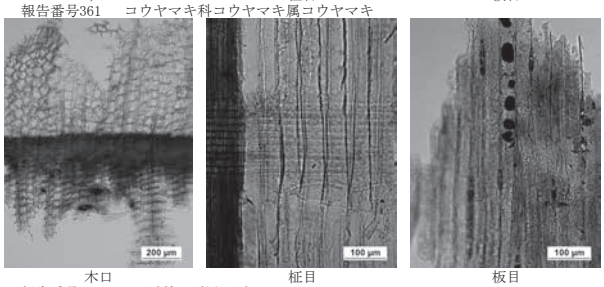
b　観察方法

剃刀で木口（横断面）､柾目（放射断面）､板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した（写真２～7)。

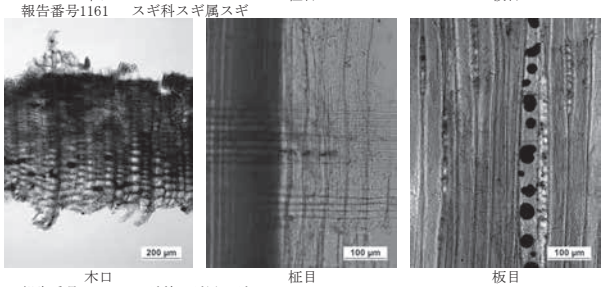
c　結果



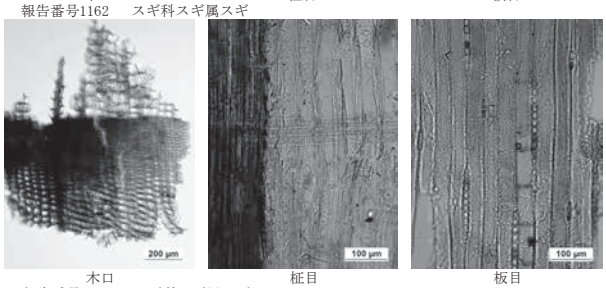
木口　柾目　板目
報告番号361　コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ



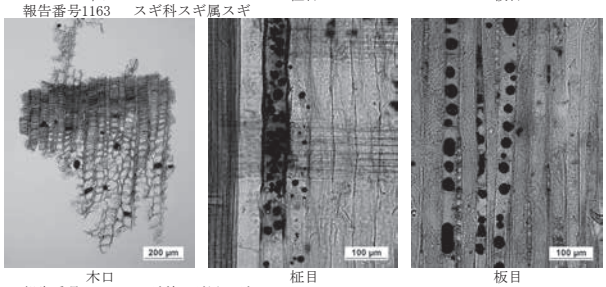
木口　柾目　板目
報告番号1161　スギ科スギ属スギ



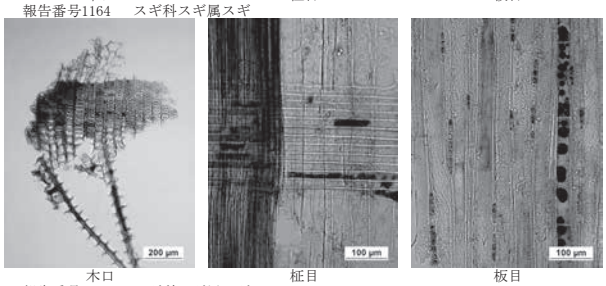
木口　柾目　板目
報告番号1162　スギ科スギ属スギ



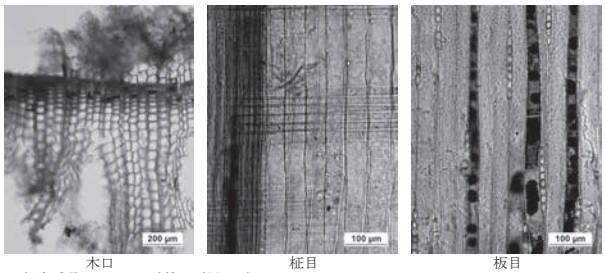
木口　柾目　板目
報告番号1163　スギ科スギ属スギ



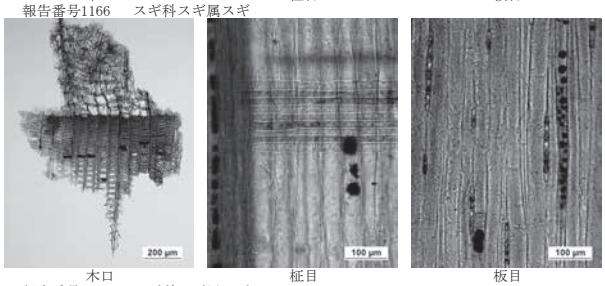
木口　柾目　板目
報告番号1164　スギ科スギ属スギ



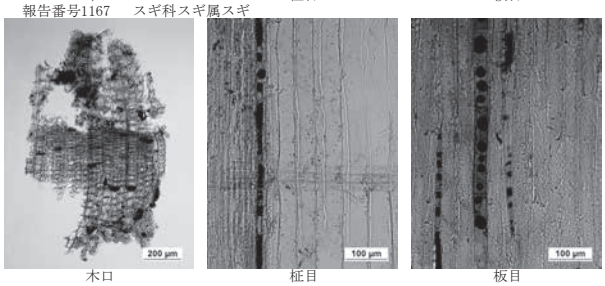
木口　柾目　板目
報告番号1165　スギ科スギ属スギ



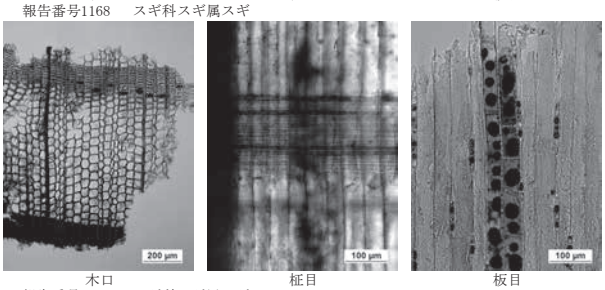
木口　柾目　板目
報告番号1166　スギ科スギ属スギ



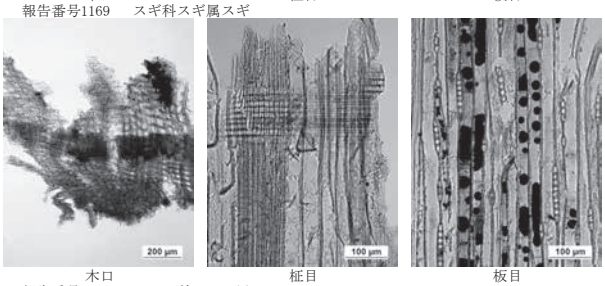
木口　柾目　板目
報告番号1167　スギ科スギ属スギ



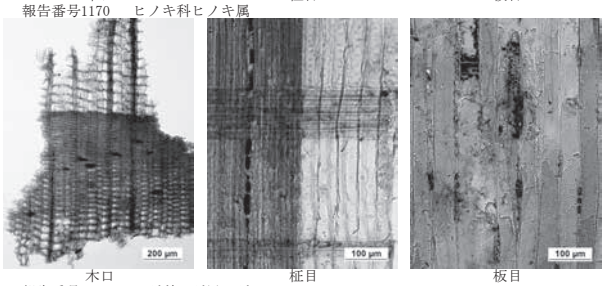
木口　柾目　板目
報告番号1168　スギ科スギ属スギ



木口　柾目　板目
報告番号1169　スギ科スギ属スギ

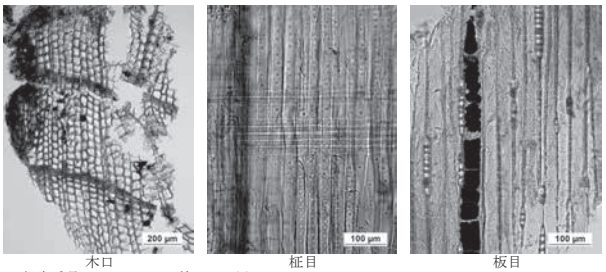


木口　柾目　板目
報告番号1170　ヒノキ科ヒノキ属

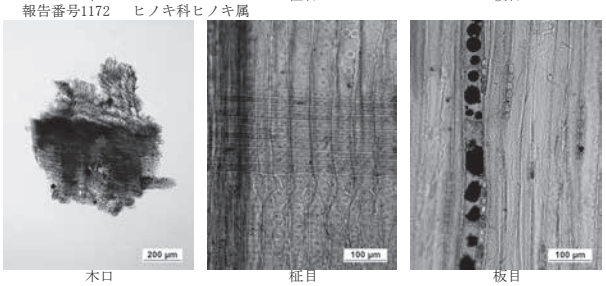


木口　柾目　板目
報告番号1171　スギ科スギ属スギ

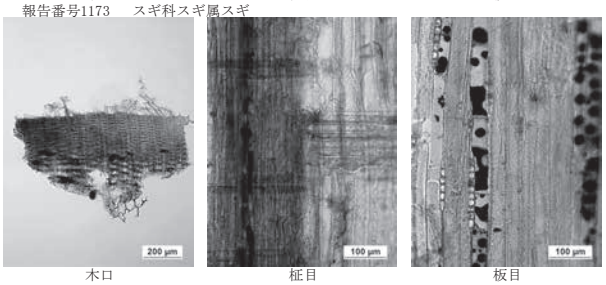
写真２　樹種同定顕微鏡写真（１）



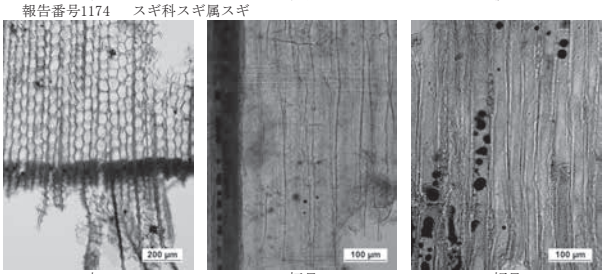
木口　柾目　板目
報告番号1172　ヒノキ科ヒノキ属



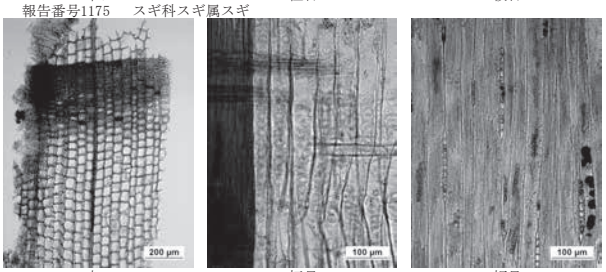
木口　柾目　板目
報告番号1173　スギ科スギ属スギ



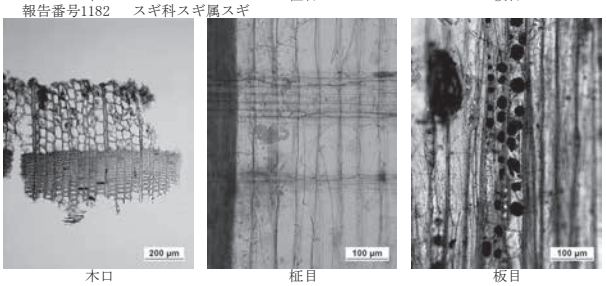
木口　柾目　板目
報告番号1174　スギ科スギ属スギ



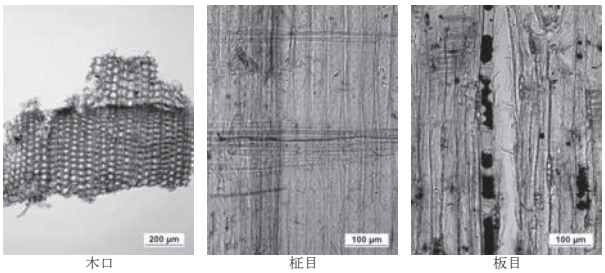
木口　柾目　板目
報告番号1175　スギ科スギ属スギ



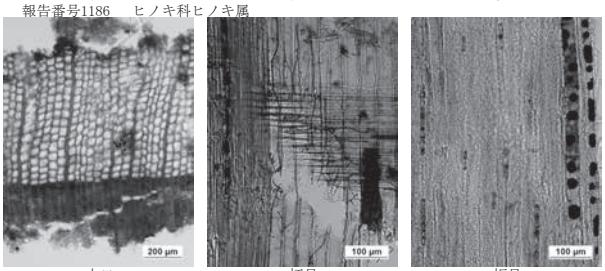
木口　柾目　板目
報告番号1182　スギ科スギ属スギ



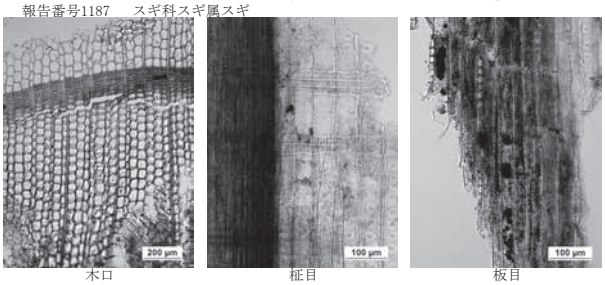
木口　柾目　板目
報告番号1185　スギ科スギ属スギ



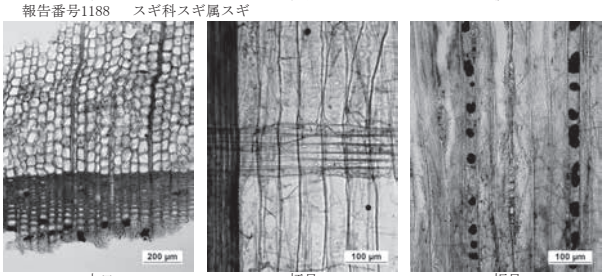
木口　柾目　板目
報告番号1186　ヒノキ科ヒノキ属



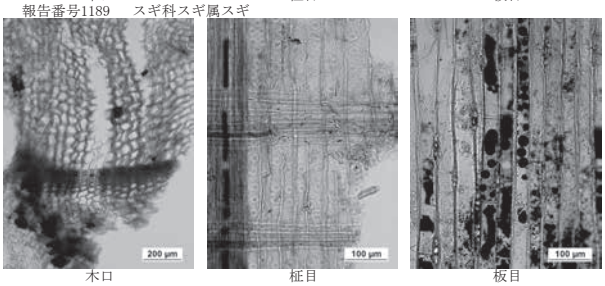
木口　柾目　板目
報告番号1187　スギ科スギ属スギ



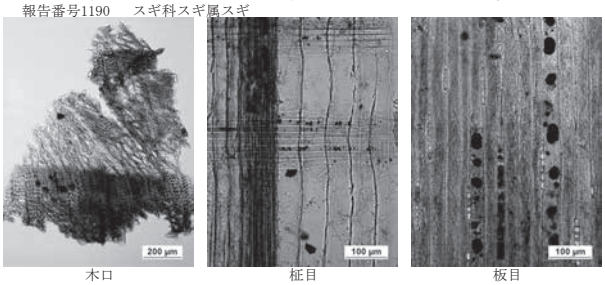
木口　柾目　板目
報告番号1188　スギ科スギ属スギ



木口　柾目　板目
報告番号1189　スギ科スギ属スギ



木口　柾目　板目
報告番号1190　スギ科スギ属スギ



木口　柾目　板目
報告番号1191　スギ科スギ属スギ

写真３　樹種同定顕微鏡写真（２）

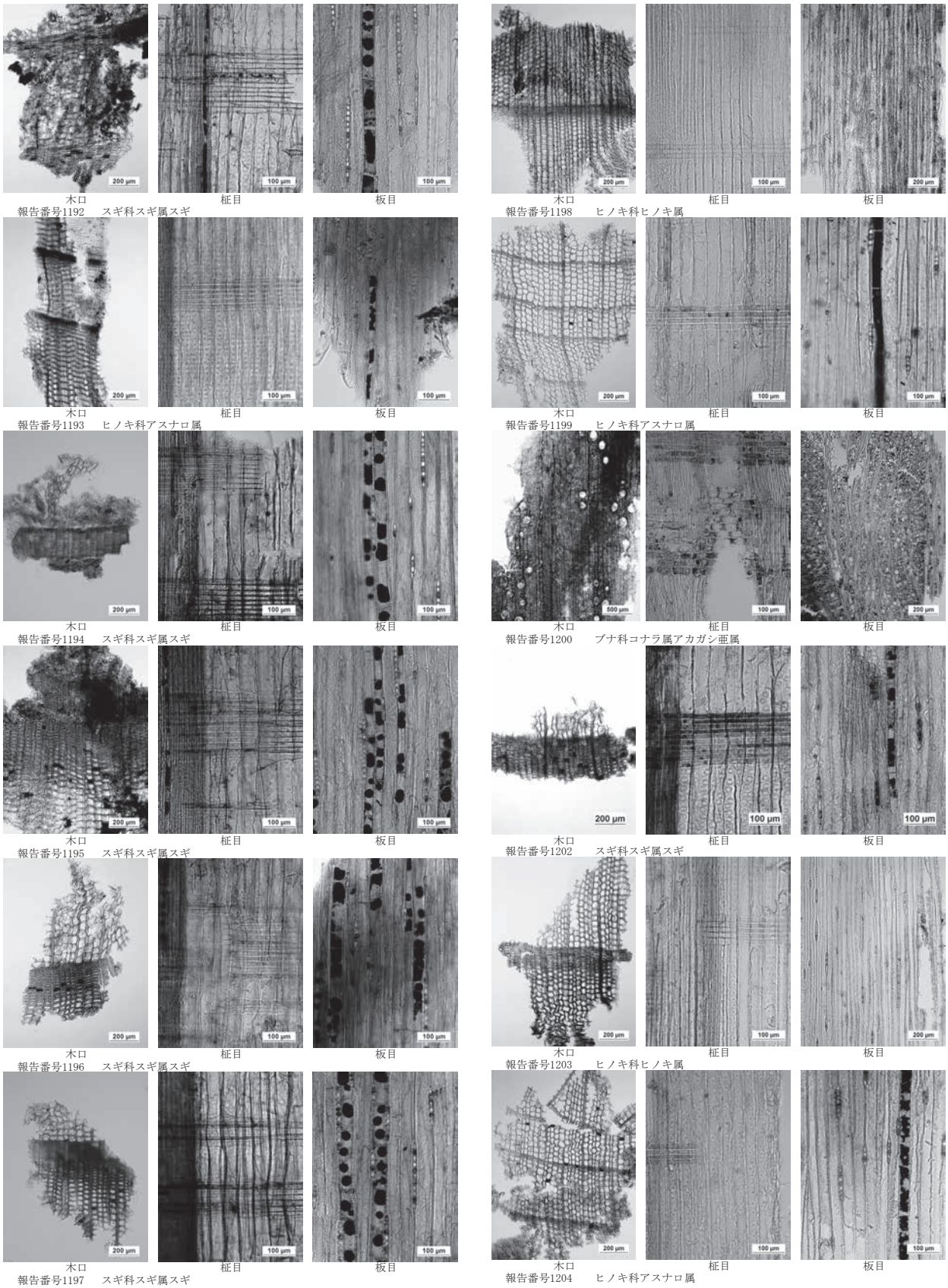


写真４　樹種同定顕微鏡写真（３）

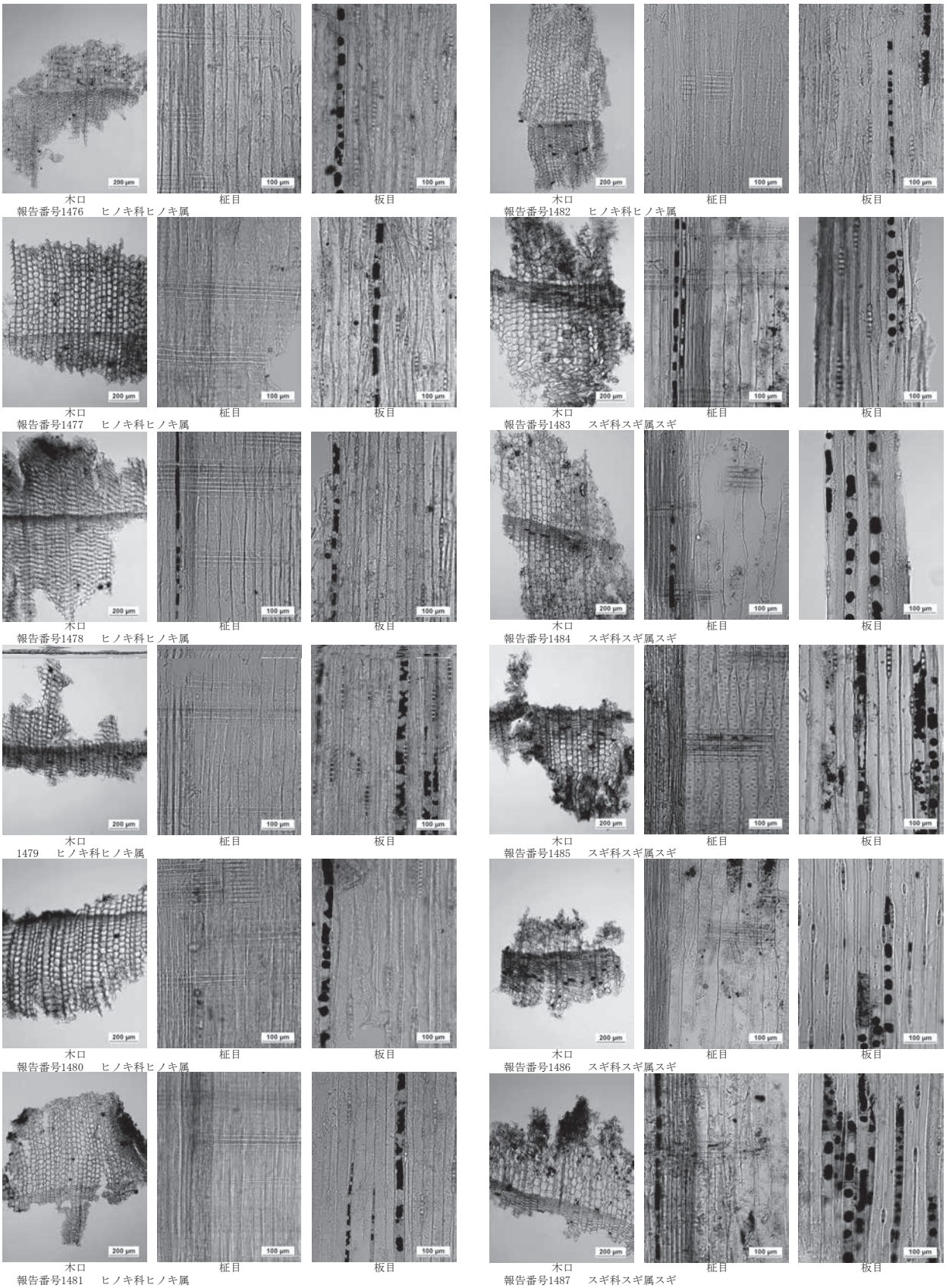
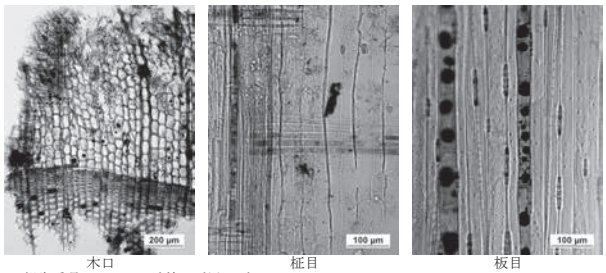
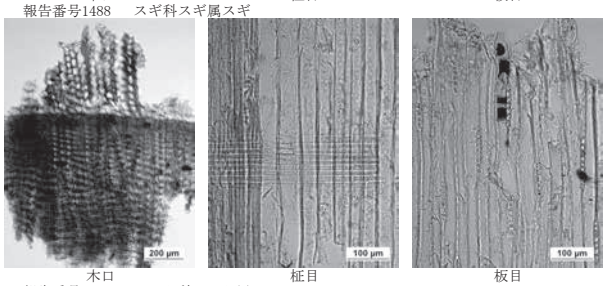


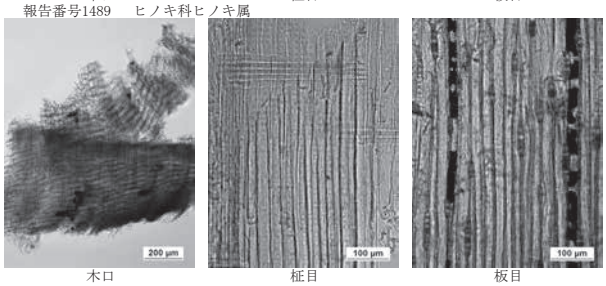
写真５　樹種同定顕微鏡写真（４）



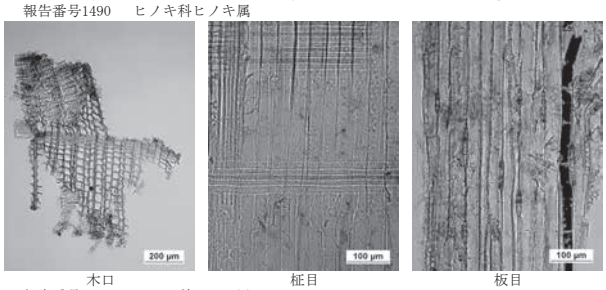
木口　柾目　板目
報告番号1488　スギ科スギ属スギ



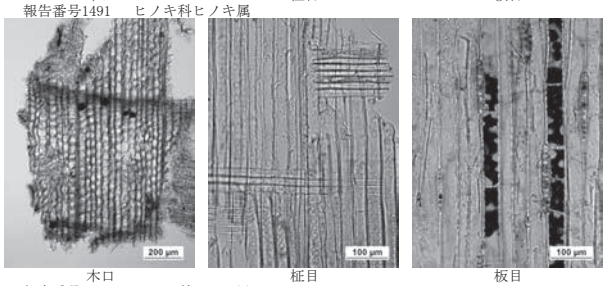
木口　柾目　板目
報告番号1489　ヒノキ科ヒノキ属



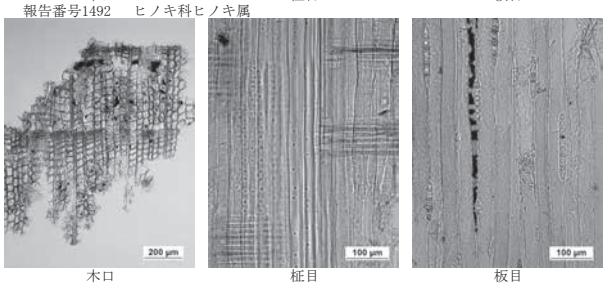
木口　柾目　板目
報告番号1490　ヒノキ科ヒノキ属



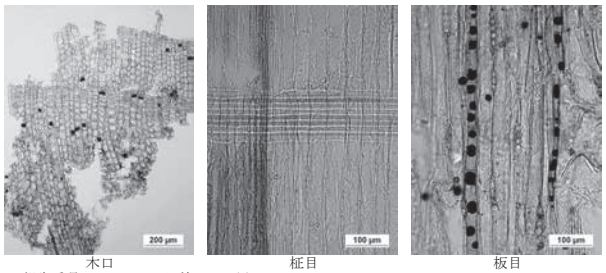
木口　柾目　板目
報告番号1491　ヒノキ科ヒノキ属



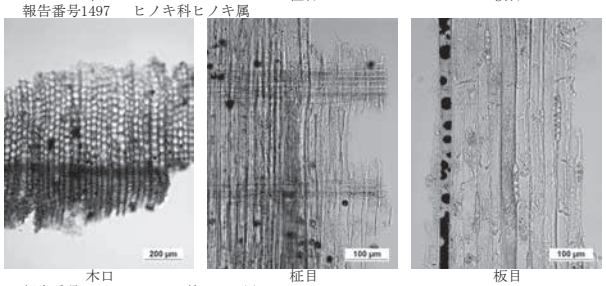
木口　柾目　板目
報告番号1492　ヒノキ科ヒノキ属



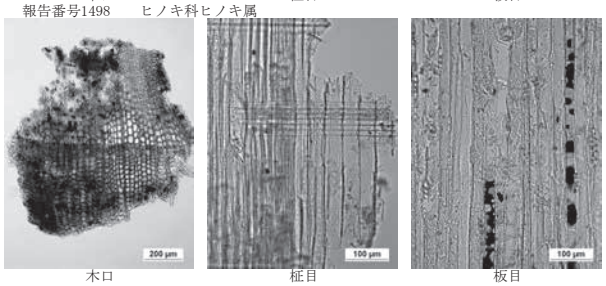
木口　柾目　板目
報告番号1493　ヒノキ科アスナロ属



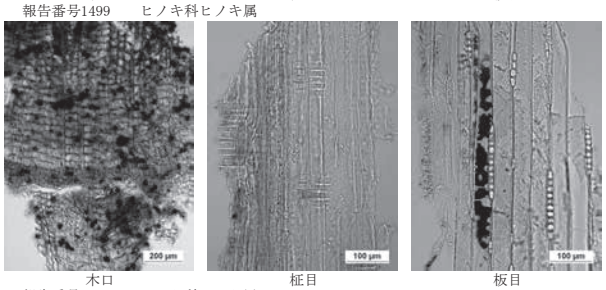
木口　柾目　板目
報告番号1497　ヒノキ科ヒノキ属



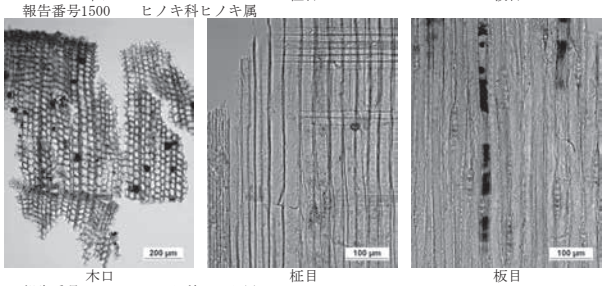
木口　柾目　板目
報告番号1498　ヒノキ科ヒノキ属



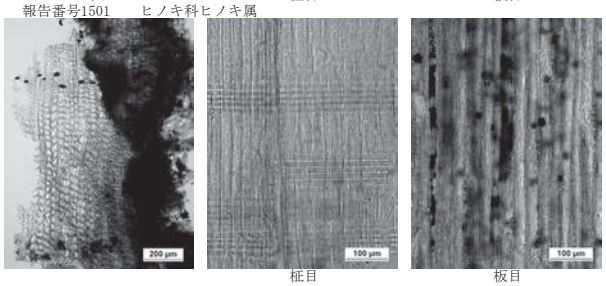
木口　柾目　板目
報告番号1499　ヒノキ科ヒノキ属



木口　柾目　板目
報告番号1500　ヒノキ科ヒノキ属

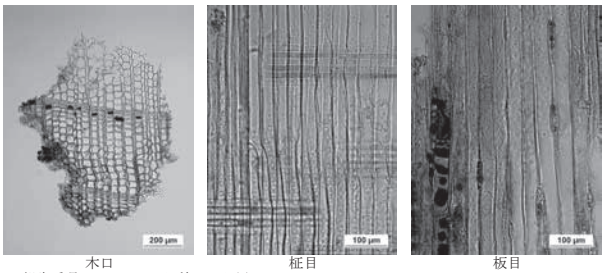


木口　柾目　板目
報告番号1501　ヒノキ科ヒノキ属



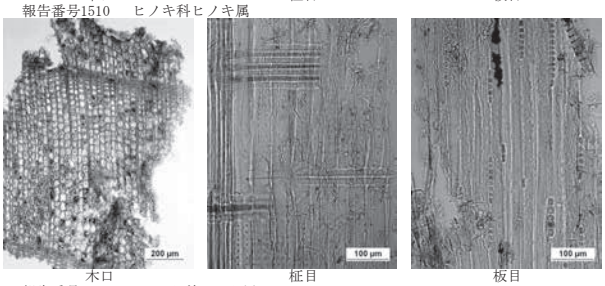
木口　柾目　板目
報告番号1502　ヒノキ科ヒノキ属

写真６　樹種同定顕微鏡写真（５）



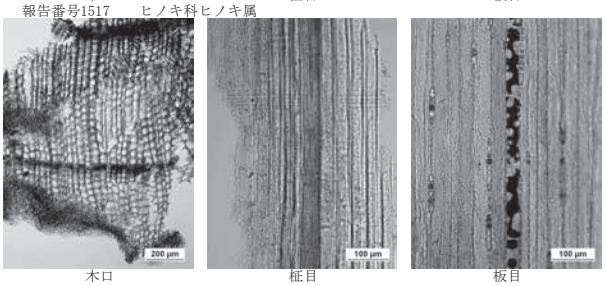
木口　柾目　板目

報告番号1510　ヒノキ科ヒノキ属



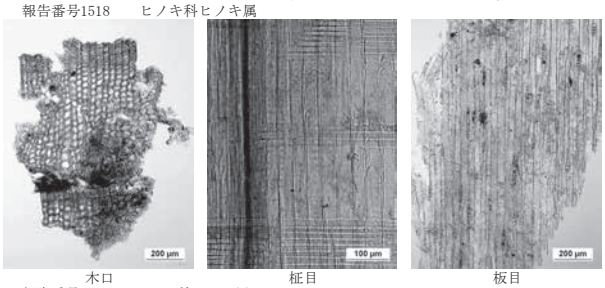
木口　柾目　板目

報告番号1517　ヒノキ科ヒノキ属



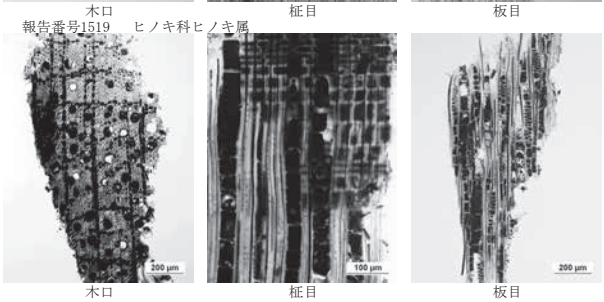
木口　柾目　板目

報告番号1518　ヒノキ科ヒノキ属



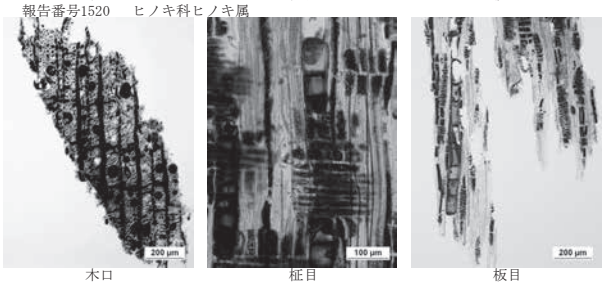
木口　柾目　板目

報告番号1519　ヒノキ科ヒノキ属



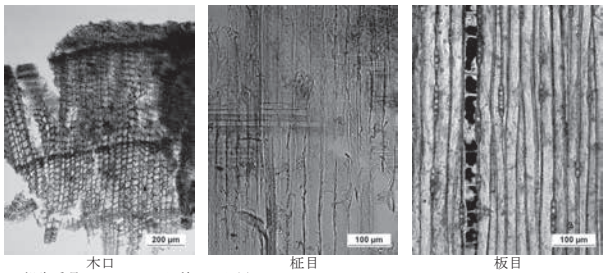
木口　柾目　板目

報告番号1520　ヒノキ科ヒノキ属



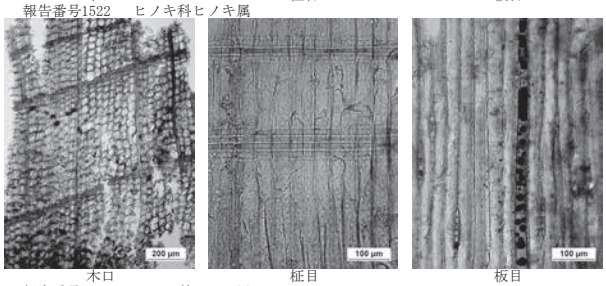
木口　柾目　板目

報告番号1521　ヒノキ科ヒノキ属



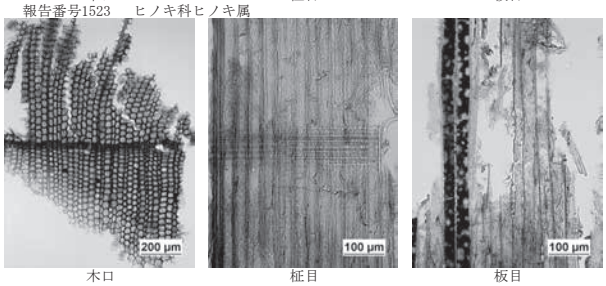
木口　柾目　板目

報告番号1522　ヒノキ科ヒノキ属



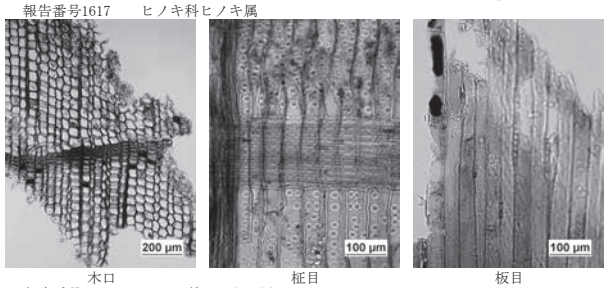
木口　柾目　板目

報告番号1523　ヒノキ科ヒノキ属



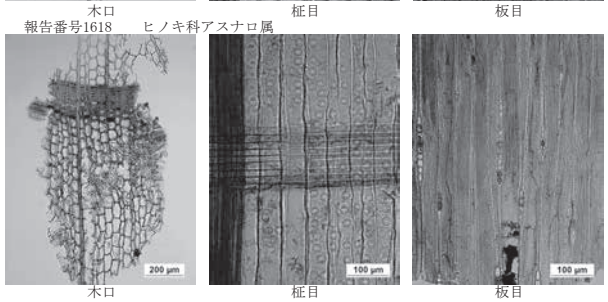
木口　柾目　板目

報告番号1617　ヒノキ科ヒノキ属



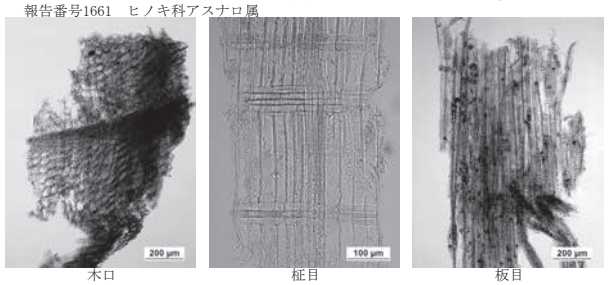
木口　柾目　板目

報告番号1618　ヒノキ科アスナロ属



木口　柾目　板目

報告番号1661　ヒノキ科アスナロ属



木口　柾目　板目

報告番号1662　マンサク科イスノキ属イスノキ

紙面の都合上、1503 ～ 1509・1573 ～ 1581・1602 ～ 1605 の顕微鏡写真は掲載していない。

写真７　樹種同定顕微鏡写真（６）

以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

(*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柾目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で１分野に１～２個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州（福島以南)、四国、九州（宮崎まで）に分布する。

スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica* D.Don）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

ヒノキ科ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南)、四国、九州に分布する。

ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

マンサク科イスノキ属イスノキ

(*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～50μm)がおおむね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は１～２列のものが多数走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物（チロース）がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は１～２細胞列、高さ～１mm で多数分布している。イスノキは本州(関東以西)、四国、九州、琉球に分布する。

ブナ科コナラ属アカガシ亜属

(*Quercus* subgen. C*yclobalanopsis*)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～ 200 μ m）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に１～３細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。（株式会社吉田生物研究所）

〔 使用顕微鏡・参考文献 〕

・使用顕微鏡　Nikon DS-Fi1
・林 昭三 1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
・伊東隆夫 1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ』京都大学木質科学研究所
・島地 謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版
・北村四郎・村田 源 1979『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』保育社
・奈良国立文化財研究所 1985『奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇』
・奈良国立文化財研究所 1993『奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇』

4　朝見遺跡第２次調査における自然科学分析報告（微化石分析）

a　はじめに

朝見遺跡第２次では、平安時代や鎌倉時代の大溝や井戸が検出された。これら遺構から採取された堆

積物について植物珪酸体分析、花粉分析、種実同定を行ない、農耕や植生、環境の復元を試みる。

b　試料

分析試料は朝見遺跡２次調査より採取された試料であり、第 46 表に詳細を示す。

c　植物珪酸体分析

（1）方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）

2）試料約 1 g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02 g 添加（0.1mg の精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散

5）沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数

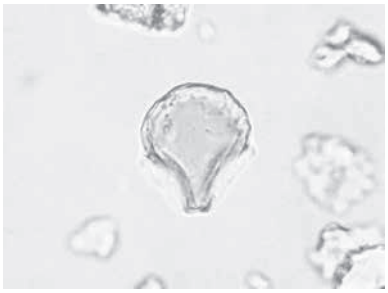
同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて､試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の

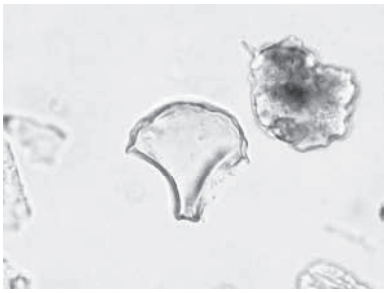
第 46 表　微化石分析資料一覧

試料	調査区	遺構	性格	層位	時期	プラント・オパール	花粉	種実	昆虫化石
1	7-2	耕作土	大溝	耕作土	近世？	○	○		
2	7-2	包含層	大溝	包含層	平安前期以降	○	○		
3	7-2	SD47	大溝	炭層	平安前期後半	○	○		
4	7-2	SD47	大溝	炭層	平安前期後半	○	○		
4-2*	7-2	SD47	大溝	炭層	平安前期後半		○		
5	7-2	SD47	大溝	炭層	平安前期後半	○	○		
6	7-2	SD47	大溝	上層	平安前期後半	○	○		
7	7-2	SD47	大溝	中層	平安前期以前	○	○		
8	7-2	SD47	大溝	中層	平安前期以前	○	○		
9	7-4	包含層	大溝	包含層	平安前期以降	○	○		
10	7-4	SD49	大溝	上層	鎌倉以前	○	○		
11	7-4	SD49	大溝	下層	鎌倉以前	○	○		
12	7-4	SD49	大溝	下層	鎌倉以前	○	○		
13	7-4	SD49	大溝	ベース	平安前期以前	○	○		
14	7-4	SD53	大溝	上層	平安前期後半	○	○		
15	7-4	SD53	大溝	下層	平安前期後半	○	○		
16	7-4	SD53	大溝	ベース	平安前期以前	○	○		
17	7-4	SD52	大溝	上層	鎌倉時代前期	○	○		
18	7-4	SD52	大溝	中層	平安前～後期	○	○		
19	7-4	SD52	大溝	下層	平安前～後期	○	○		
20	7-4	SD52	大溝	ベース	平安前期以前	○	○		
21	7-5	SE72	井戸	堀り方埋土	平安前期後半	○	○	○	
22	7-5	SE72	井戸枠内	最下層	平安前期後半	○	○	○	
23	7-5	SE72	井戸枠内	最下層	平安前期後半	○	○	○	
24	7-5	SE72	井戸枠内	最下層	平安前期後半	○	○	○	
25	7-3D	SD47	大溝	最下層	平安前期後半	○	○	○	
26	7-5	SE72	井戸枠内	最下層	平安前期後半			○	
27	7-3D	SD47	大溝	最下層	平安前期後半			○	
28	7-4	SD53	大溝	最下層	平安前期後半			○	
29	7-4	SD53	大溝	最下層	平安前期後半			○	
30	7-5	SE72	井戸枠内	上層	平安前期後半				○
31	7-5	SE72	井戸枠内	最下層	平安前期後半				○

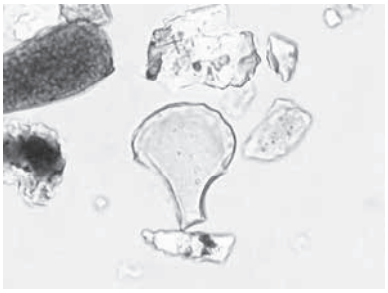
＊：試料４で肉眼的に土色の異なる灰色層の分析



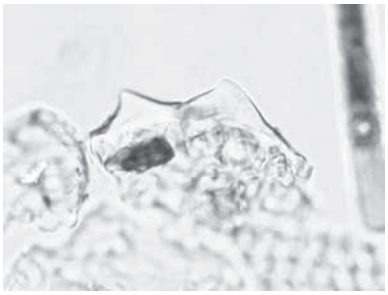
イネ
試料１



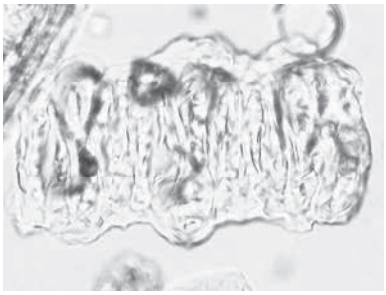
イネ
試料４



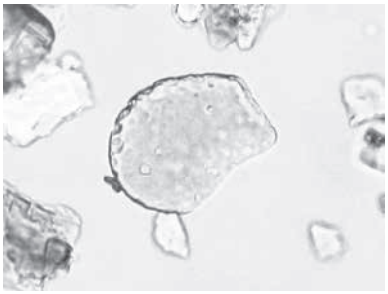
イネ
試料７



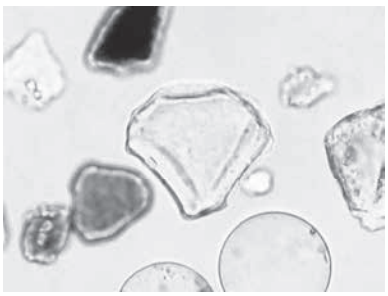
イネの籾殻（穎の表皮細胞）
試料４



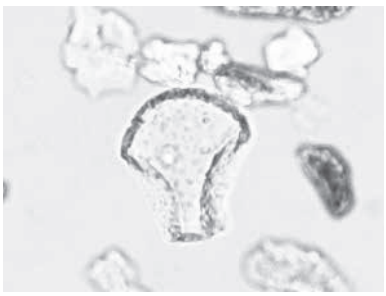
イネの籾殻（穎の表皮細胞）
試料４



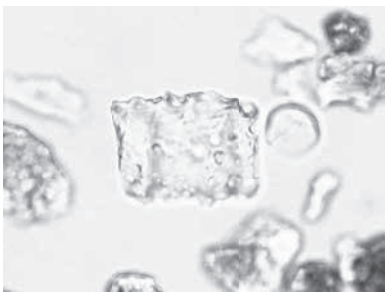
ヨシ属
試料16



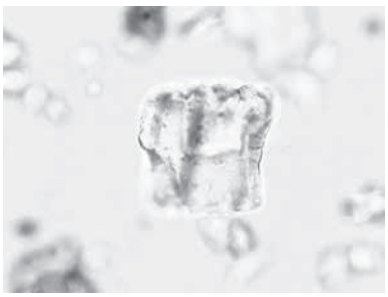
ススキ属型
試料５



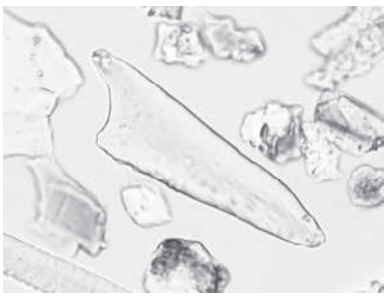
メダケ節型
試料11



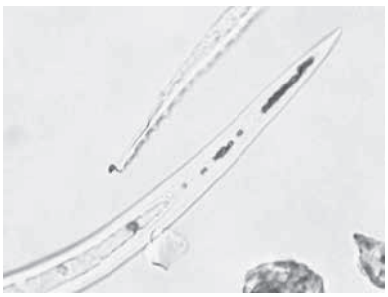
ネザサ節型
試料１



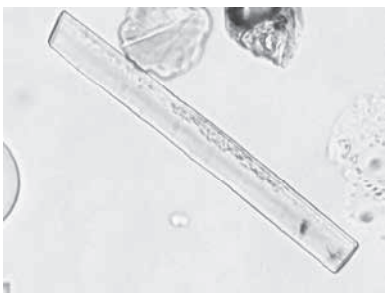
ネザサ節型
試料16



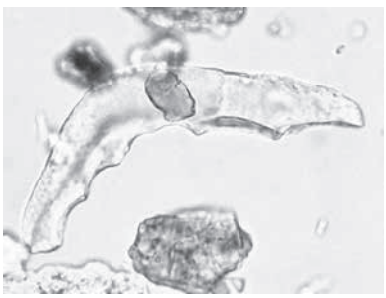
表皮毛起源
試料３



表皮毛起源（剛毛由来？）
試料４



棒状珪酸体（芒由来？）
試料５



クスノキ科
試料23

海綿骨針
試料17

50 μ m

写真８　植物珪酸体分析

検出密度（単位：×100個/g）

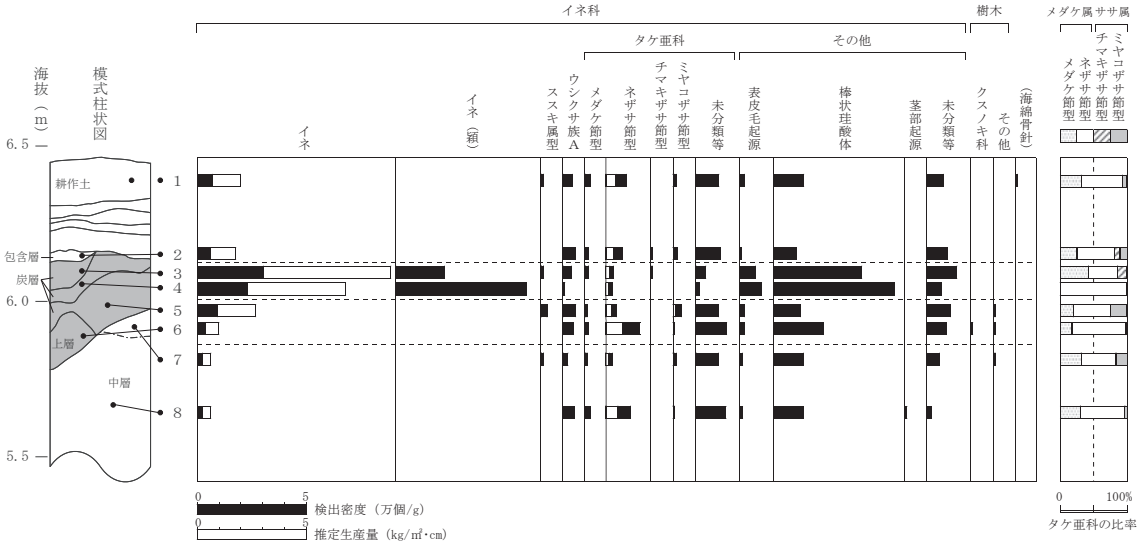
地点・試料		SD47								SD49					SD53			SD52				SE72				SD47
分類群	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
イネ科	Gramineae																									
イネ	*Oryza sativa*	68	61	309	237	93	34	21	21	14	20	7	7		101	13		35	61				26	36	29	14
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	*Oryza sativa* (husk Phytolith)			223	596										22											
ヨシ属	*Phragmites*																7			7						
キビ族型	Paniceae type																						8			
ススキ属型	*Miscanthus* type	7		7		22		7							14	7			7	7		19		7	14	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	41	55	36	7	57	48	21	50	29	34	29	7		36	7		7	20	7	14	19	20	22	36	
タケ亜科	Bambusoideae																									
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	21	14	14		7	14	7	21	36	34	43	7	14	22	33		28	14		7	13	13	7	36	14
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	96	75	36	29	50	158	29	114	87	40	136	42	7	58	66	65	83	102	88	65	26	111	144	79	63
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		7	7														7				6	13	7		
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	14	20			36	7	14	7	7	20	14	7	7		20	7	14	7	7	7	13		22	21	21
未分類等	Others	103	109	43	14	101	138	100	135	130	114	179	56	41	101	72	58	69	41	48	43	32	65	122	71	70
その他のイネ科	Others																									
表皮毛起源	Husk hair origin	21	7	72	101	22	21	14	14	14	13	7			14	7	7	28	7			6	20	7	21	7
棒状珪酸体	Rod-shaped	137	102	403	553	122	227	135	135	72	20	57		7	180	13	7	49	54	27	7	13	39	29	57	42
茎部起源	Stem origin								7																	
未分類等	Others	75	95	137	65	108	89	57	21	51	34	29	14	20	29	39	51	21	75	54	29	19	26	29	43	28
樹木起源	Arboreal																									
クスノキ科	Lauraceae						7													7				7	7	28
その他	Others					7	7	7				7	7			7		7		14		6	13	14	14	35
（海綿骨針）	Sponge spicules	7										7						7		7						
植物珪酸体総数	Total	581	545	1287	1602	625	750	413	526	441	330	507	148	95	577	283	202	347	388	265	172	172	355	453	429	321

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

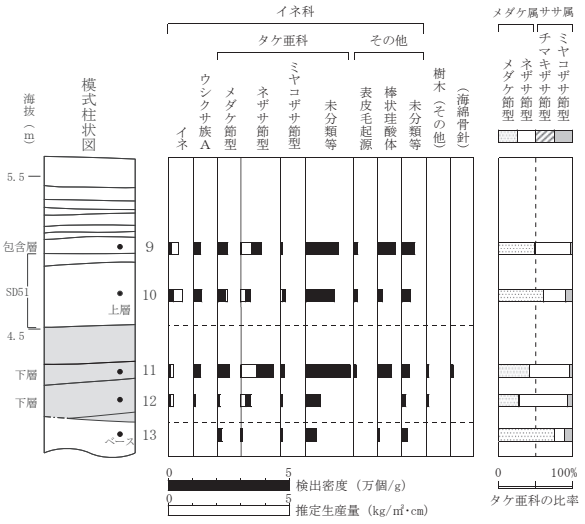
イネ	*Oryza sativa*	2.01	1.80	9.09	6.97	2.74	1.01	0.63	0.63	0.42	0.59	0.21	0.21		2.97	0.39		1.02	1.80				0.77	1.06	0.84	0.41
ヨシ属	*Phragmites*																0.46			0.43						
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.08		0.09		0.27		0.09							0.18	0.08			0.08	0.08		0.24		0.09	0.18	
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.24	0.16	0.17		0.08	0.16	0.08	0.25	0.42	0.39	0.50	0.08	0.16	0.25	0.38		0.32	0.16		0.08	0.15	0.15	0.08	0.41	0.16
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.46	0.36	0.17	0.14	0.24	0.76	0.14	0.55	0.42	0.19	0.65	0.20	0.03	0.28	0.32	0.31	0.40	0.49	0.42	0.31	0.12	0.53	0.69	0.38	0.30
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		0.05	0.05														0.05				0.05	0.10	0.05		
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.04	0.06			0.11	0.02	0.04	0.02	0.02	0.06	0.04	0.02	0.02		0.06	0.02	0.04	0.02	0.02	0.02	0.04		0.06	0.06	0.06

タケ亜科の比率（%）

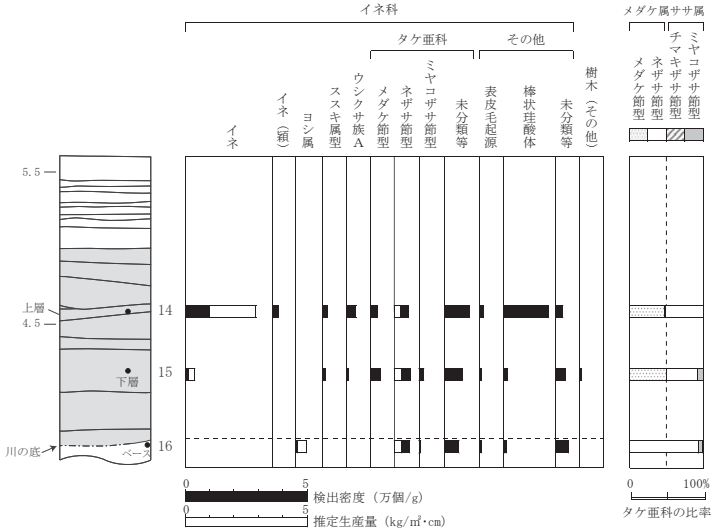
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	32	25	42		19	17	32	30	49	61	42	27	75	48	50		39	24		20	42	19	9	48	31
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	62	57	44	100	56	81	52	67	49	30	55	66	15	52	42	94	49	73	95	75	34	68	77	44	57
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		8	14														6				13	13	6		
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	6	10			25	2	16	3	3	9	4	7	10		8	6	5	3	5	5	11		7	8	12
メダケ率	Medake ratio	94	82	86	100	75	98	84	97	97	91	96	93	90	100	92	94	89	97	95	95	76	87	87	92	88



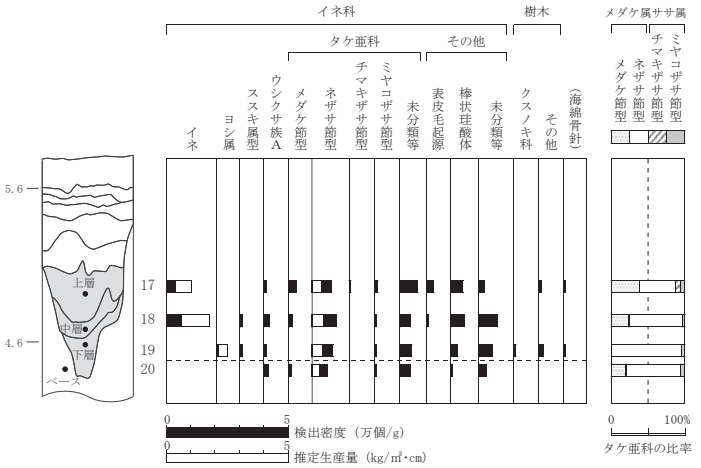
第97図　ＳＤ47植物珪酸体分析結果



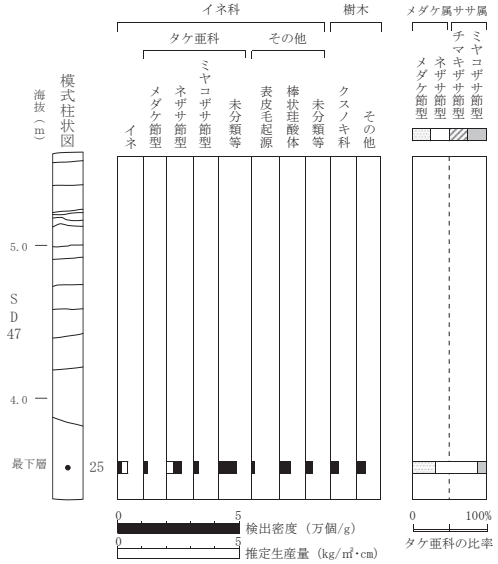
第98図　ＳＤ53植物珪酸体分析結果



第99図　ＳＤ49植物珪酸体分析結果



第100図　ＳＤ52植物珪酸体分析結果



第101図　ＳＤ47植物珪酸体分析結果

仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

（2）結果

1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 47 表および第 97 ～ 102 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す（写真 8）。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族 A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

クスノキ科、その他

2）植物珪酸体の検出状況

7－2区SD 47（試料 1 ～ 8）（第 97 図）

試料 1 ～試料 8 について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、試料 3 と試料 4 では密度が 30,900 個 / g および 23,700 個 / g とかなり高い値であり、試料 1、試料 2、試料 5 でも 6,100 ～ 9,300 個 / g と高い値である。これらの値は、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個 / g を大きく上回っている。また、試料 3 と試料 4 ではイネの籾殻（穎の表皮細胞）が 22,300 個 / g および 59,600 個 / g とかなり高い密度で検出された。その他の分類群では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族 A、メダケ節型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねイネが優勢であり、とくに試料 3 と試料 4 では圧倒的に卓越している。また、部分的にネザサ節型も比較的多くなっている。

7－4区SD 49・SD 51（試料 9 ～ 13）（第 99 図）

試料 9 ～試料 13 について分析を行った。その結果、試料 9 ～試料 12 からイネが検出された。密度は 700 ～ 2,000 個 / g と比較的低い値である。その他の分類群では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ウシクサ族 A、メダケ節型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）なども認められた。

7－4区SD 53（試料 14 ～ 16）（第 98 図）

試料 14 ～試料 16 について分析を行った。その結果、試料 14 と試料 15 からイネが検出された。このうち、試料 14 では密度が 10,100 個 / g とかなり高い値であり、試料 13 では 1,300 個 / g と低い値である。また、試料 14 ではイネの籾殻（穎の表皮細胞）も認められた。その他の分類群では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族 A、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、試料 14 ではイネが優勢となっている。

7－4区SD 52（試料 17 ～ 20）（第 100 図）

試料試料 17 ～試料 20 について分析を行った。その結果、試料 17 と試料 18 からイネが検出された。このうち、試料 18 では密度が 6,100 個 / g と高い値であり、試料 17 でも 3,600 個 / g と比較的高い値である。その他の分類群では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族 A、メダケ節型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、試料 17 と試料 18 ではイネが優勢となっている。

7－5区SE 72（試料 21 ～ 24）（第 102 図）

試料 21 ～試料 24 について分析を行った。その結果、試料 22 ～試料 24 からイネが検出された。このうち、試料 23 では密度が 3,600 個 / g と比較的高い値であり、試料 22 と試料 24 では 2,600 ～ 2,900 個 / g と比較的低い値である。その他の分類群では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族 A、メダケ節型、ミヤコザサ節型、樹木（そ

の他）なども認められた。

７－３Ｄ区ＳＤ47（試料 25）（第 101 図）

試料 25 について分析を行った。その結果、イネ、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型、およびクスノキ科などの樹木が検出されたが、いずれも比較的少量である。イネの密度は 1,400 個 / ｇと低い値である。

ｄ　花粉分析

（１）方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から 1 cm^3 を採量

２）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎

３）水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

４）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置

５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理

７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

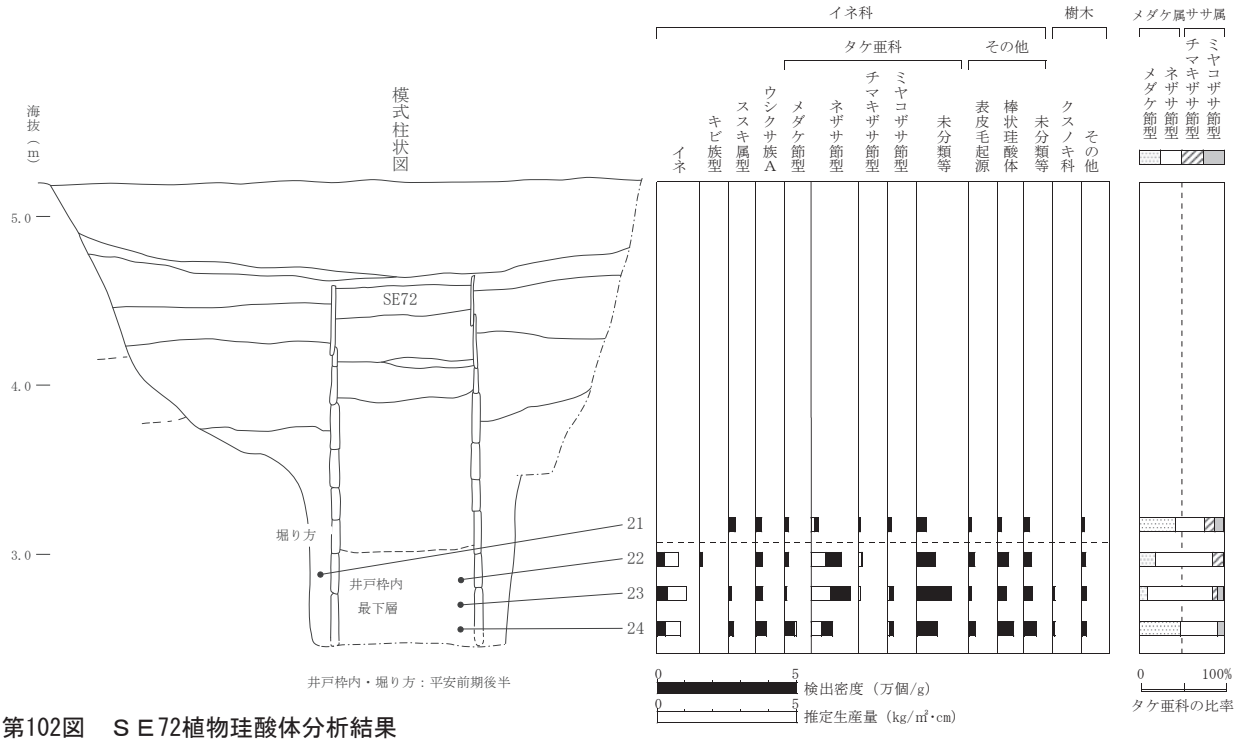
８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この分析処理を施すとクスノキ科の花粉は分解し検出されない。

（２）結果

１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉 32、樹木花粉と草本花粉を含むもの７、草本花粉 27、シダ植物胞子２形態の計 68 である。これらの学名と和名および粒数を表２に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第103～106図に示す。なお、200 個未満であっても 100 個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した（写真９･10）。また、寄生虫卵についても検鏡した結果、４分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。



第102図　ＳＥ72植物珪酸体分析結果

第48表　花粉分析結果

分類群		7-2調査区								7-4調査区												7-5調査区				7-3D調査区	7-2④
		耕作土	包含層	SD47						包含層	SD49				SD53			SD52				SE72				SD47	灰色層
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
Arboreal pollen	樹木花粉																										
Podocarpus	マキ属											2	1			1			1			1	5		1	2	
Abies	モミ属											3				4			1				1	3	2	1	
Tsuga	ツガ属											2			1	2			1				5	2		3	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属								2			7	5		6	3			1				4	4	6	7	
Cryptomeria japonica	スギ								1			23	27		10	27			330	11		2	40	13	12	40	1
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ								1						1									1	1	1	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科											12	16		4	30			7				16	3	2	15	
Salix	ヤナギ属															4			7							239	3
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ																									1	
Alnus	ハンノキ属								1		1	1															
Betula	カバノキ属								1			2	3										3	2	1	3	
Corylus	ハシバミ属											3	1									1	4	1	2		
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ								1			1	3			1							1	4		4	1
Castanea crenata	クリ											1				4		1	3					1		3	
Castanopsis	シイ属						1		1			6	13		15	24			4			1	14	7	2	34	
Fagus	ブナ属																						6	1		1	
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属			1	1		2		6			8	18		21	28			3			3	174	221	251	24	2
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属								3			36	26		17	87	1	1	12			1	26	31	2	49	3
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ											1	1			3			6				4	6	2	1	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ											7	5			3							9	24	10	1	
Mallotus japonicus	アカメガシワ												2														
Zanthoxylum	サンショウ属															1											
Ilex	モチノキ属																								1		
Celastraceae	ニシキギ科															3									3		
Acer	カエデ属																							1			
Aesculus turbinata	トチノキ								1			5			2	6		1	1								
Vitis	ブドウ属															2										2	
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ												1		1				1							1	
Camellia	ツバキ属											1															
Diospyros	カキ属																						16	3			
Styrax	エゴノキ属															1											
Oleaceae	モクセイ科											4	1			7							1			2	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉																										
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			1					14		1	10	19		18	36			9			5	38	59	34	26	
Saxifragaceae	ユキノシタ科															1											
Rosaceae	バラ科											9				24			1				1	2	2	15	1
Leguminosae	マメ科											1	1						1								
Araliaceae	ウコギ科								1										23					1	1		
Scrophulariaceae	ゴマノハグサ科																						1				
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属																						2			1	
Nonarboreal pollen	草本花粉																										
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属															1										2	
Gramineae	イネ科			17	25		5		27		2	56	78		148	68		2	19	*		11	32	49	18	27	8
Oryza type	イネ属型			1	3				12			11	17		8	11	1		6			1	21	24	2	4	
Cyperaceae	カヤツリグサ科			2	1				1			11	12		17	15	2		4				2	2	4		4
Monochoria	ミズアオイ属															3											
Polygonum	タデ属				1				1						6				1								
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節															1										1	
Rumex	ギシギシ属																						1	2		3	
Fagopyrum	ソバ属												2														
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科			1	4		1		4				5		100	3			2				3	6	7	1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科			1					1						10	1						1	2				2
Nuphar	コウホネ属																									1	
Ranunculus	キンポウゲ属											1	1		2	1											
Thalictrum	カラマツソウ属														1												1
Cruciferae	アブラナ科			1									1		14	7			1				3	2		4	
Impatiens	ツリフネソウ属						3		20			2	1		1	3							1	1	19	11	
Rotala	キカシグサ属												1														
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属																									1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科											1	5		3	6			1			3	21	20	4	3	

Apioideae	セリ亜科															1											
Labiatae	シソ科								1																		
Plantago	オオバコ属												1		16	4							7	6			
Cucurbitaceae	ウリ科																								1	1	
Actinostemma lobatum	ゴキヅル																		4								
Lactucoideae	タンポポ亜科			5	7				3			1			1			1				1				1	
Asteroideae	キク亜科												5		1	1						2	2	1	1	1	
Artemisia	ヨモギ属			2	2	1	1		8			13	47		10	11		1	13			6	7	11	39	10	1
Fern spore	シダ植物胞子																										
Monolate type spore	単条溝胞子		2	3	2	4	10	10	24	3	10	12	14		8	8		5	1	2		4	1	1	2	5	13
Trilate type spore	三条溝胞子	1			1		7		9	2	1	4	10		3	2			3	1		1		2	1	1	3
Arboreal pollen	樹木花粉			1	1		3		18		1	125	123		78	241	1	3	378	11		9	329	328	298	434	11
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			1					15		1	20	20		18	61			34			5	42	62	37	42	1
Nonarboreal pollen	草本花粉			30	43	1	10		78		2	96	176		338	137	3	4	51			25	102	124	95	71	16
Total pollen	花粉総数	0	0	32	44	1	13	0	111	0	4	241	319	0	434	439	4	7	463	11	0	39	473	514	430	547	28
Pollen frequencies of $1cm^3$	試料 $1cm^3$ 中の花粉密度			1.9 $\times 10^2$	3.5 $\times 10^2$	0.6 $\times 10$	9.0 $\times 10$	0.6 $\times 10$	3.2 $\times 10^2$		3.5 $\times 10$	1.7 $\times 10^3$	2.6 $\times 10^3$		9.4 $\times 10^3$	1.8 $\times 10^4$	2.8 $\times 10$	6.6 $\times 10$	3.9 $\times 10^4$	6.6 $\times 10$		2.4 $\times 10^2$	9.5 $\times 10^3$	8.9 $\times 10^3$	1.1 $\times 10^4$	2.4 $\times 10^4$	1.8 $\times 10^2$
Unknown pollen	未同定花粉						2	1	9		1	5	12		7	10		4	3			1	2	5	11	15	2
Fern spore	シダ植物胞子	1	2	3	3	4	17	10	33	5	11	16	24		11	10		5	4	3		5	1	3	3	6	16
Helminth eggs	寄生虫卵																										
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵												1														
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵															1											
Diphyllobothrium latum(nihonkaiense)	日本海裂頭条虫卵																										1
Unknown eggs	不明虫卵																						1	1			
Total	計												1			1							1	1			1
Helminth eggs frequencies of $1cm^3$	試料 $1cm^3$ 中の寄生虫卵密度												8.0 $\times 10$			1.0 $\times 10$							1.7 $\times 10$	1.4 $\times 10$			0.6 $\times 10$
Stone cell	石細胞	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(++)	(++)	<(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	<(+)	<(+)	<(+)	(++)	(+)	<(+)	(+)	<(+)	(+)	(+)	(+)	<(+)	<(+)	(+)	<(+)	(++)

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ノブドウ、ツバキ属、カキ属、エゴノキ属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、タデ属イタドリ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、キカシグサ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、ウリ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、日本海裂頭条虫、不明虫卵

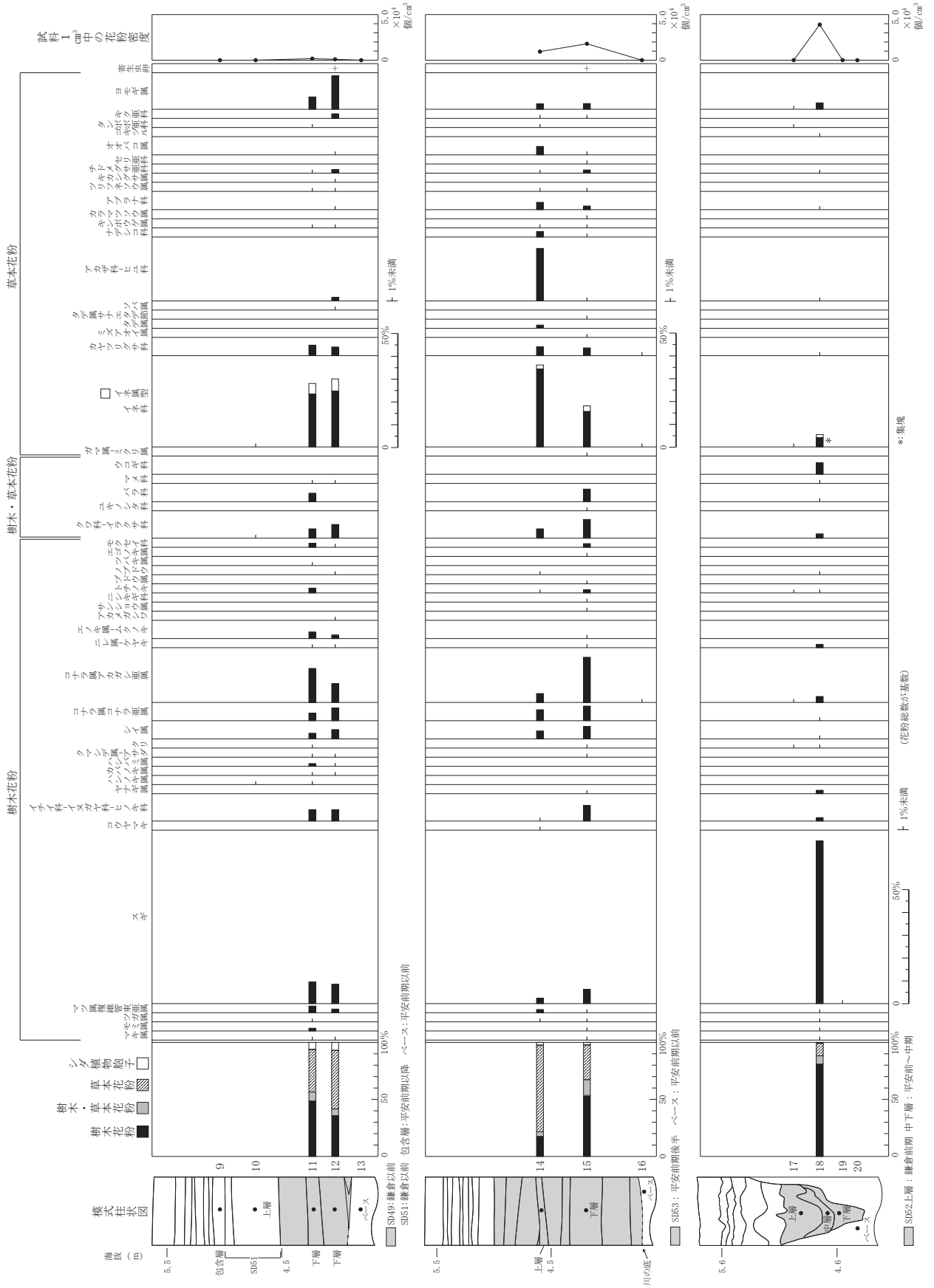
以下にこれらの特徴を示す。

・回虫　*Ascaris（lumbricoides）*

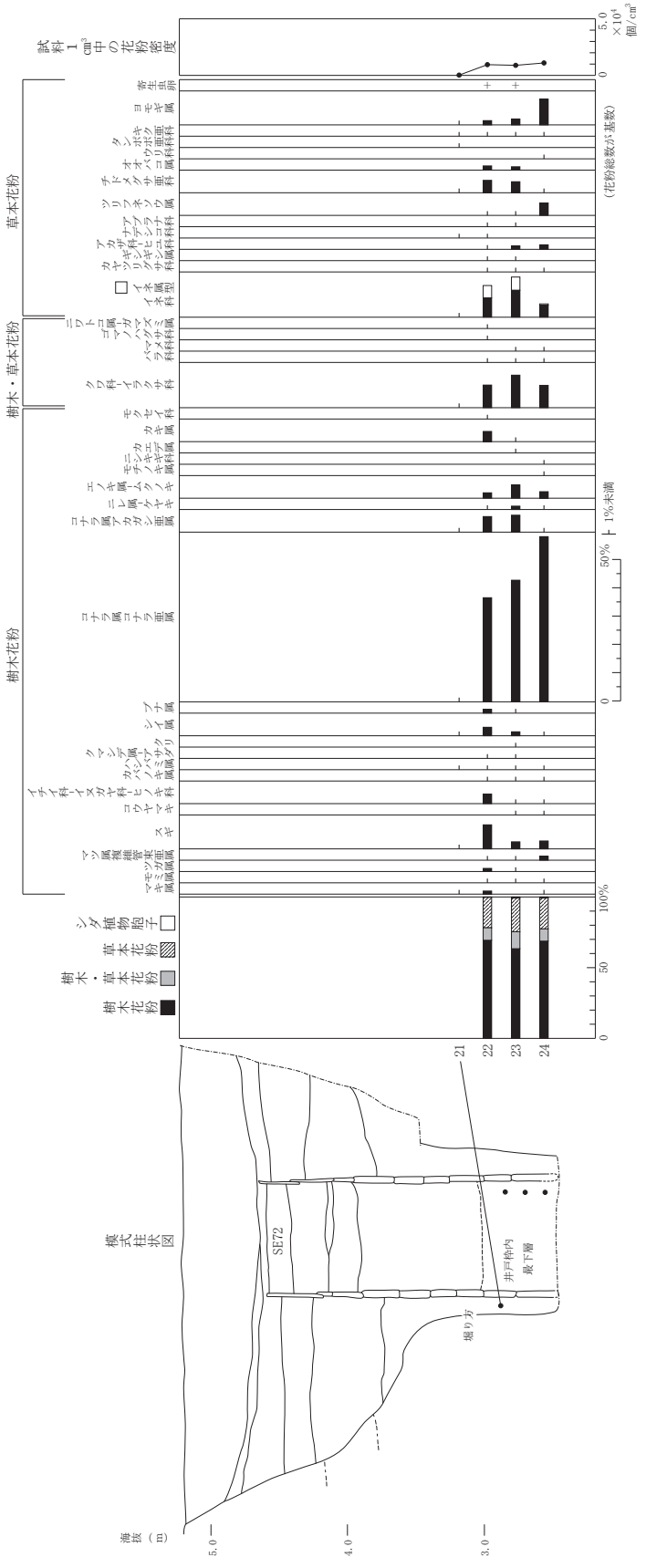
回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられ、卵には受精卵と不受精卵がある。遺跡の堆積物の分析では、堆積年数や薬品処理のため、受精卵と不受精卵の区別は不明瞭である。比較的大きな虫卵で、およそ80×60 μmあり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

・鞭虫　*Trichuris（trichiura）*

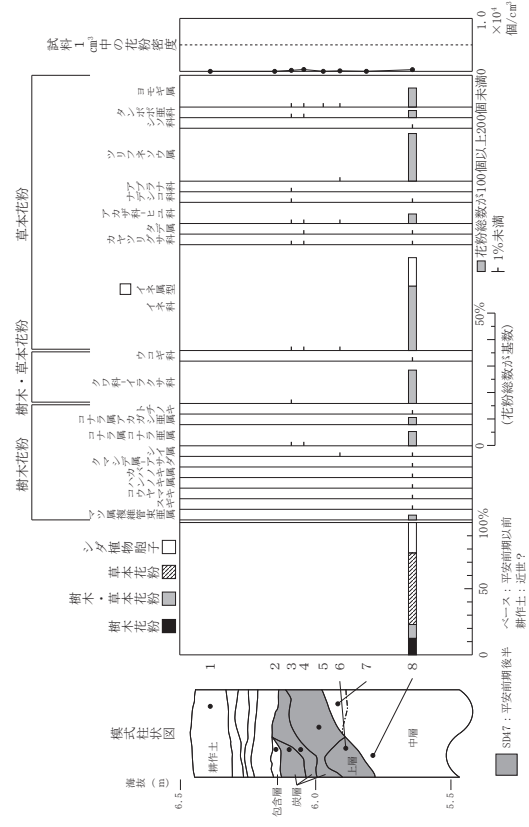
鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大き



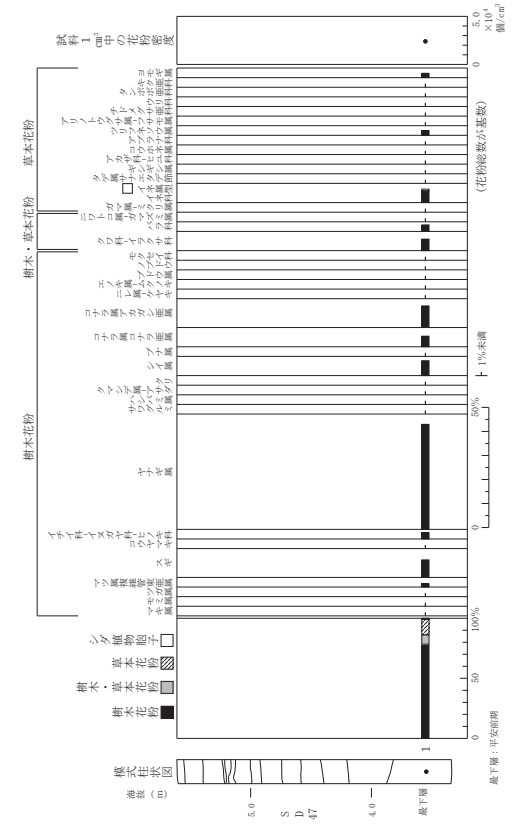
第103図　７－４区花粉ダイアグラム



第104図　ＳＥ72花粉ダイアグラム

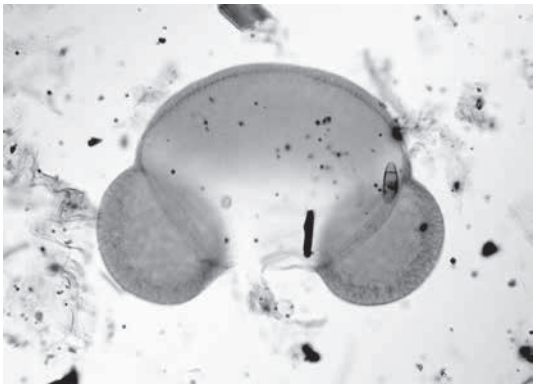


第105図　ＳＤ47花粉ダイアグラム

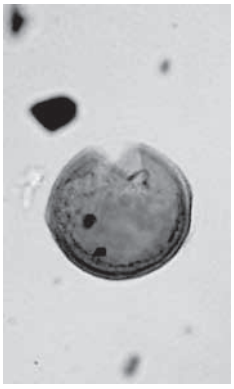


第106図　７－３Ｄ区ＳＤ47花粉ダイアグラム

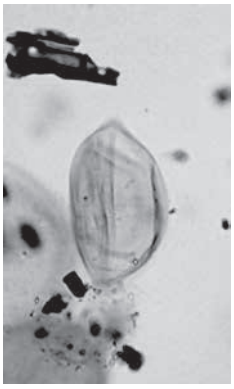
図10　朝見遺跡、7-3D調査区における花粉ダイアグラム



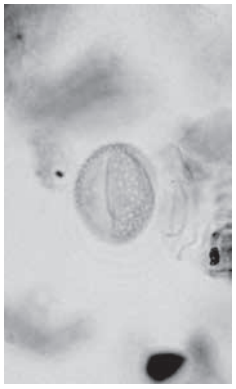
1　モミ属（試料18）



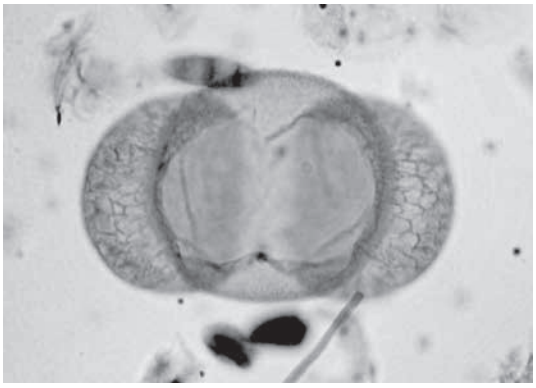
2　スギ（試料18）



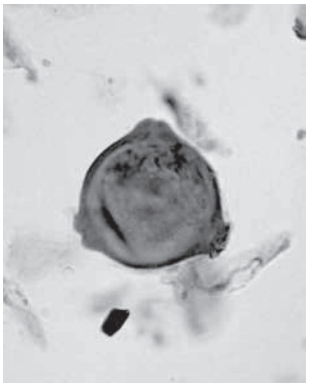
3　イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（試料18）



4　ヤナギ属（試料25）



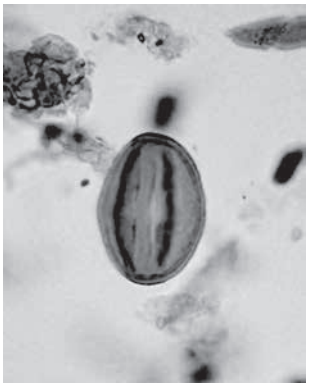
5　マツ属複維管束亜属（試料23）



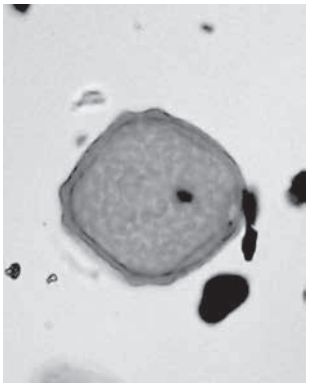
6　カバノキ属（試料25）

7　シイ属（試料25）

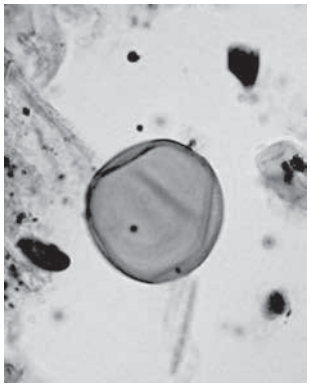
8　コナラ属コナラ亜属（試料18）



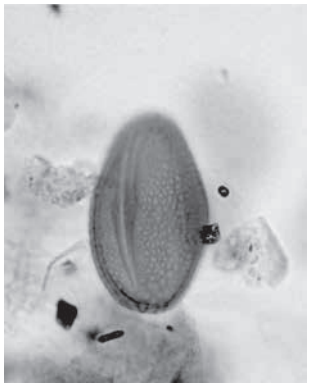
9　コナラ属アカガシ亜属（試料15）



10　ニレ属－ケヤキ（試料18）

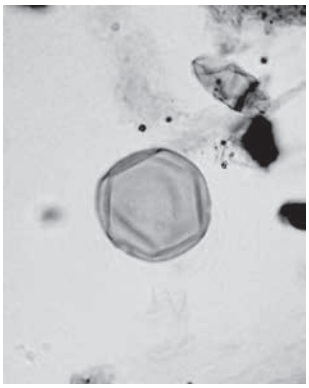


11　エノキ属－ムクノキ（試料23）



12　ノブドウ（試料14）

13　カキ属（試料23）



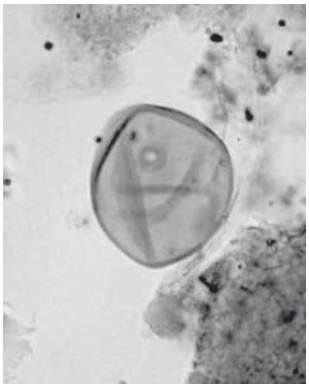
14　クワ科－イラクサ科（試料23）

15　バラ科（試料18）

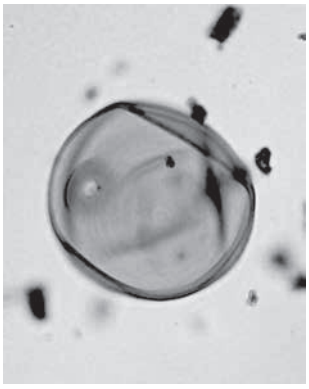
16　ウコギ科（試料18）

1―10μm、2-16―10μm

写真９　花粉・胞子・寄生虫卵（１）

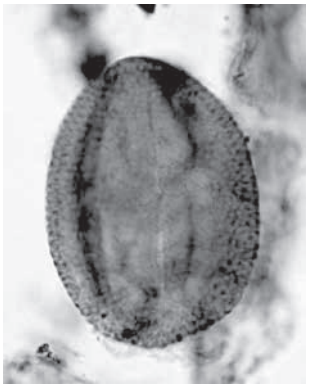


17　イネ科（試料22）

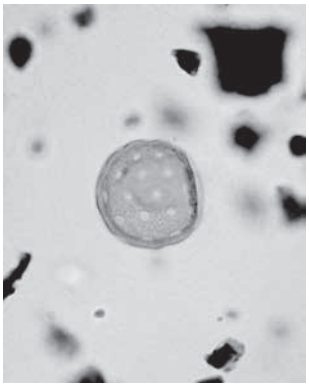


18　イネ属型（試料18）

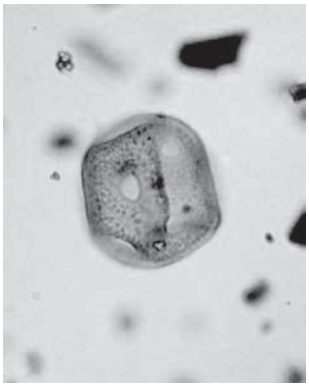
19　カヤツリグサ科（試料23）



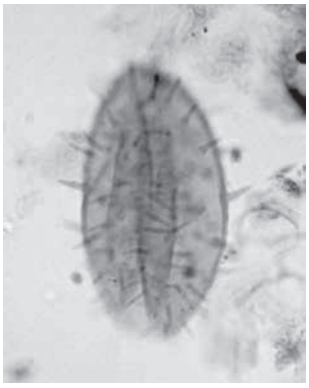
20　ソバ属（試料12）



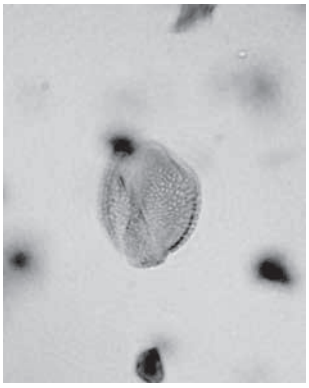
21　アカザ科－ヒユ科（試料12）



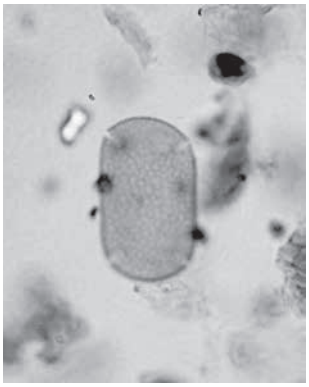
22　ナデシコ科（試料14）



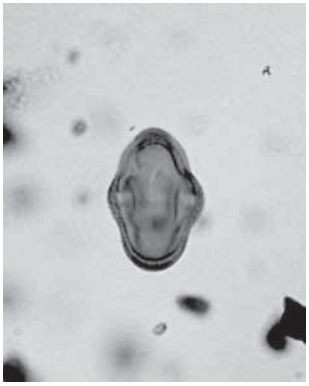
23　コウホネ属（試料25）



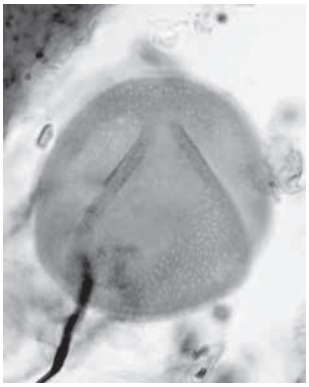
24　アブラナ科（試料14）



25　ツリフネソウ属（試料25）

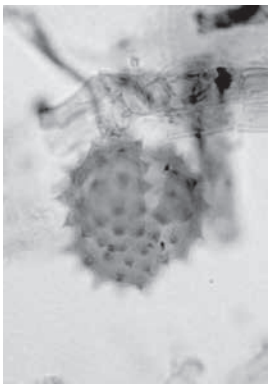


26　チドメグサ亜科（試料18）



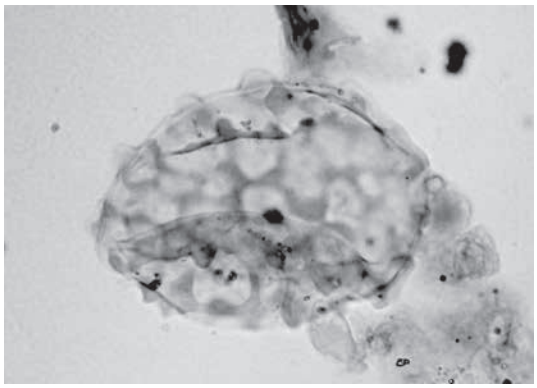
27　ウリ科（試料24）

28　ゴキヅル（試料18）

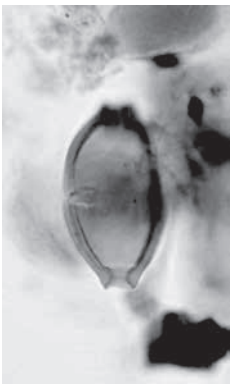


29　キク亜科（試料25）

30　ヨモギ属（試料18）



31　回虫卵（試料12）



32　鞭虫卵（試料15）

10 μm

写真 10　花粉・胞子・寄生虫卵（２）

さは、50 × 30 μｍでレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、３～６週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

・日本海裂頭条虫　*Diphyllobothrium latum(nihonkaiense)*

日本海裂頭条虫は、北半球に分布し、特に北欧、北米、東北アジア地域に多い。卵の大きさは、66 ～ 75 × 45 ～ 53 で楕円形、小蓋がある。ケンミジンコ類などの第１中間宿主を経て、第２中間宿主のマスやサケの生食によって感染する。

・不明虫卵　*Unknown eggs*

卵の大きさは異形吸虫類卵より小型で淡黄色、一端に小蓋がある。

２）花粉群集の特徴

７－２区ＳＤ 47（試料１～８）（第 105 図）

下位より、試料８、試料７では、樹木花粉が約 12.5％、樹木・草本花粉が約 10.5％、草本花粉が約 54.0％、シダ植物胞子が約 23.0％を占め、花粉密度は低い。草本花粉のイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、次にツリフネソウ属が多く、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、タンポポ亜科などが伴われる。樹木・草本花粉はクワ科－イラクサ科で占められ、樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が出現する。試料６から試料３（SD47）では、花粉密度が極めて低く花粉はほとんど検出されない。草本花粉のヨモギ属、イネ科、アカザ科－ヒユ科などがわずかに出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属などがわずかに出現する。試料４において肉眼的に土色の異なる灰色の部分について追加分析（試料４- ２）をしたところ、組成、構成に違いは認められなかった。試料２、試料１（包含層、耕作土）は、花粉密度が極めて低く花粉は検出されない。

７－４区ＳＤ 49・ＳＤ 51（試料９～ 13）（第 103 図）

下部の試料 13 では花粉密度が極めて低く花粉は検出されない。試料 12 では、樹木花粉が約 36.0％、草本花粉が約 51.5％を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科が伴われ、ソバ属が出現する。樹木・草本花粉では、クワ科－イラクサ科、樹木花粉では、スギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などが出現する。わずかに回虫卵が検出される。試料 11 では、樹木花粉の占める割合が増加しコナラ属アカガシ亜属が増加する。試料 10（SD51）、試料９（包含層）では、花粉密度が極めて低く花粉はほとんど検出されない。

７－４区ＳＤ 53（試料 14 ～ 16）（第 103 図）

試料 16（ベース）では、花粉密度が極めて低く花粉はほとんど検出されない。試料 15 では、樹木花粉が約 53.5％樹木・草本花粉が約 13.5％、草本花粉が約 30.5％を占める。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属を主にコナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などが出現する。樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科、バラ科がやや多い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アブラナ科、チドメグサ亜科が低率に出現する。鞭虫卵がわずかに出現する。試料 14 では、草本花粉が約 76.0％を占めるようになる。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、アカザ科－ヒユ科が優占し、カヤツリグサ科、オオバコ属、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属が伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、スギなどが出現する。

７－４区ＳＤ 52（試料 17 ～ 20）（第 103 図）

試料 20、試料 19 では、花粉密度が極めて低く花粉はほとんど検出されない。試料 18 では、樹木花粉が約 80％以上を占め、スギが卓越する。試料 17 では、花粉密度が極めて低く花粉はほとんど検出されない。

７－５区ＳＥ 72（試料 21 ～ 24）（第 104 図）

試料 24 では、樹木花粉が約 69.0％を占め、コナラ属コナラ亜属が卓越する。他にスギ、エノキ属－ムクノキ、マツ属複維管束亜属が低率に出現する。樹木・草本花粉ではクワ科－イラクサ科、草本花粉ではヨモギ属、ツリフネソウ属、イネ科（イネ属型を含む）が出現する。試料 23 では、コナラ属コナラ亜属の割合がやや減少しコナラ属アカガシ亜属が増加する。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、チドメグサ亜科が増加し、ヨモギ属が減少する。試

料 22 では、コナラ属コナラ亜属がわずかに減少しスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、カキ属が増加する。試料 21 では、花粉密度が極めて低くほとんど検出されない。

７－３Ｄ区ＳＤ 47（試料 25）（第 106 図）

樹木花粉が約 78.5％を占め、ヤナギ属が高率に出現しスギ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属が伴われる。樹木・草本花粉では、クワ科－イラクサ科、バラ科が出現し、草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）を主にツリフネソウ属、ヨモギ属が出現する。

ｅ　種実同定

（１）方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

１）試料 200 ～ 180cm^3 に水を加え放置し、泥化

２）攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別

３）残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

（２）結果

１）分類群（堆積物）

樹木３、草本 24 の計 27 分類群が同定される。学名、和名および粒数を第 50 表に示し、主要な分類群を写真 11・12 に示す。200cm^3 中の種実数をダイアグラムに示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

〔樹木〕

コナラ属コナラ亜属　*Quercus*　subgen. *Lepidobalanus*　殻斗　ブナ科

殻斗は黒褐色で椀状を呈し、鱗片が覆瓦状に並ぶ。殻斗壁が上端ほど薄くなり、先端がやや内側に向く。

キイチゴ属　Rubus　核　バラ科　長さ 1.86㎜×幅 1.16㎜

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

ブドウ属　Vitis　種子（完形・破片）　ブドウ科　長さ 4.40㎜×幅 2.95㎜、 4.11㎜× 3.47㎜

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

〔草本〕

ミクリ属　*Spaganium*　果実　ミクリ科

淡褐色で側面観は倒卵形、上面観は円形。表面には縦方向に５本程度の筋が走る。

イネ　*Oryza sativa* L.　穎（完形･破片）　長さ 6.14㎜×幅 3.08㎜、7.58㎜× 2.83㎜・果実（炭化）　長さ 5.40㎜×幅 2.80㎜　イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものはなかった。

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

ヒエ属　*Echinochloa*　果実　イネ科　長さ 2.61㎜×幅 2.07㎜

茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある。

イネ科　*Gramineae*　穎（完形・破片）　長さ 2.88㎜×幅 0.77㎜

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

ホタルイ属　*Scirpus*　果実　カヤツリグサ科　長さ 2.03㎜×幅 1.57㎜

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な

第 49 表　種実計測値

7-5　SE72　最下層（番号26）

モモ	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）
1	32.54	22.43	15.77
2	31.15	25.26	19.04
3	29.77	18.5	14.27

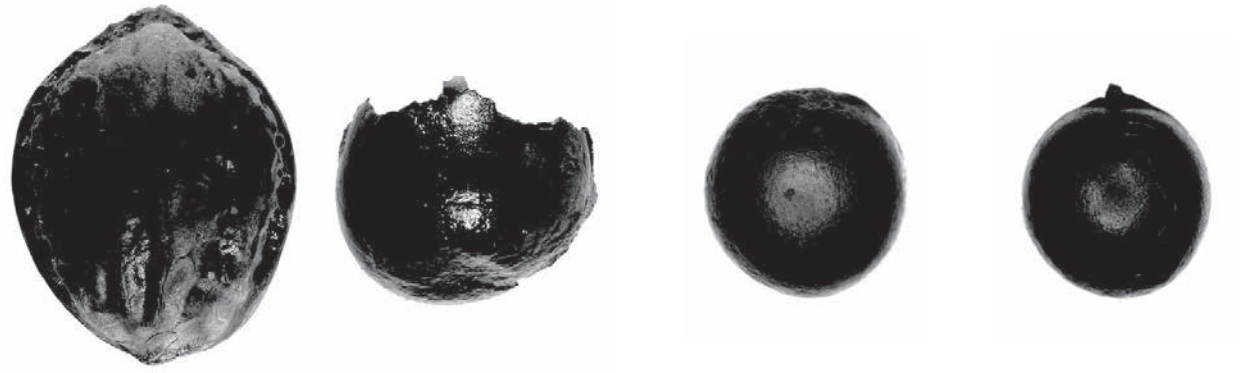
7-4　SD53　（番号28）

モモ	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）
1	22.49	18.15	15.62
2	20.84	17.2	15.16

スモモ	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）
1	16.12	11.57	8.90

7-4　SD53　最下層（番号29）

オニグルミ	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）
1	31.98	25.09	23.67



1　オニグルミ核(試料29)　10.0mm
2　コナラ属クヌギ節堅果破片(試料26)　10.0mm
3　クスノキ種子(試料29)　1.0mm
4　クスノキ種子(試料29)　1.0mm
5　クスノキ種子(試料29)　1.0mm
6　モモ核(試料26)　10.0mm
7　モモ核(試料26)　10.0mm
8　モモ核(試料26)　10.0mm
9　モモ核(試料28)　10.0mm
10　モモ核(試料28)　10.0mm
11　スモモ核(試料28)　5.0mm
12　エゴノキ核(試料29)　0.5mm
13　エゴノキ核(試料29)　0.5mm
14　エゴノキ核(試料29)　0.5mm
15　エゴノキ核(試料29)　0.5mm
16　エゴノキ核(試料29)　0.5mm

写真11　出土種実（堆積物）

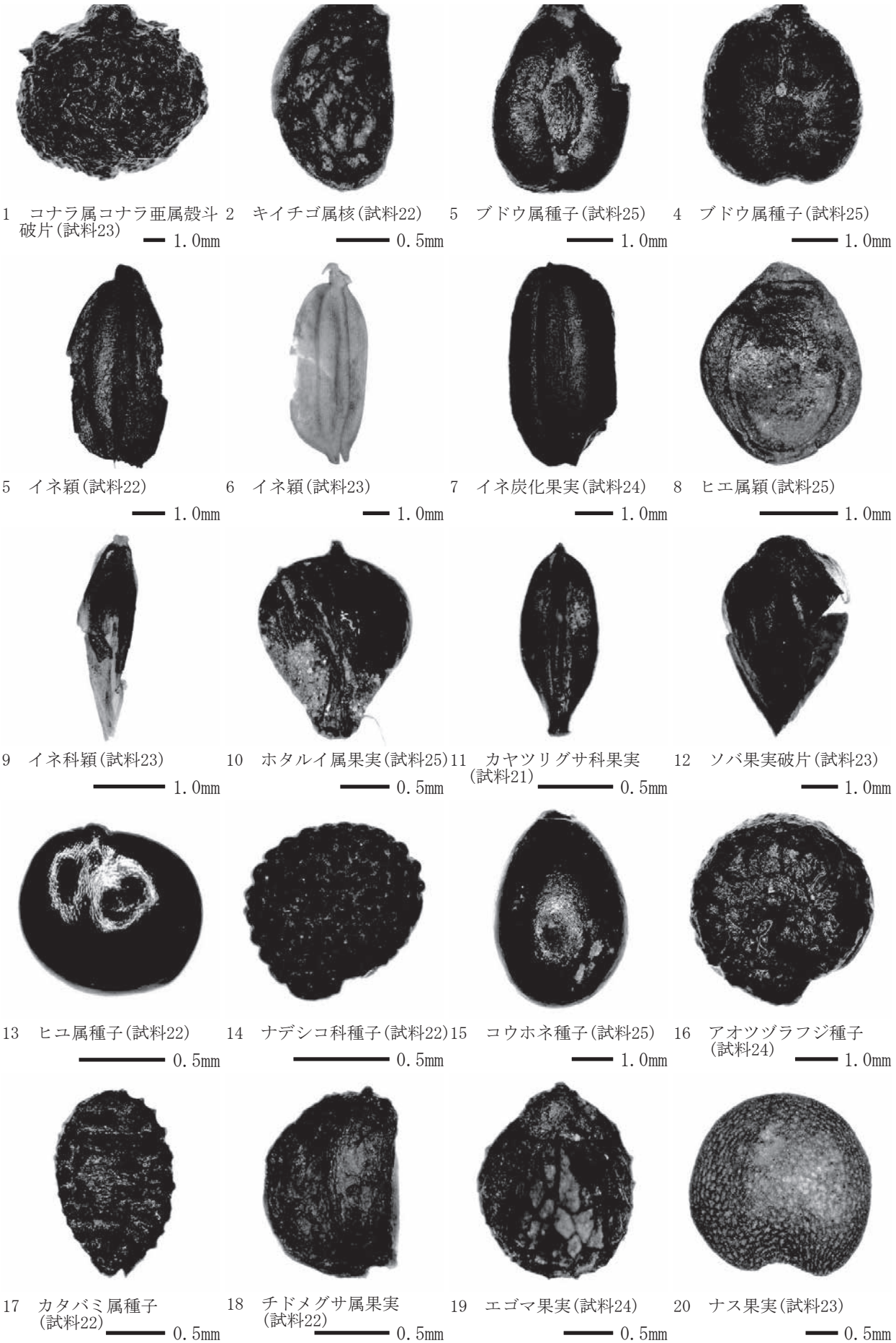


写真 12　出土種実（水洗選別済み）

隆起がある。

スゲ属 *Carex* 果実（破片） カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 *Cyperaseae* 果実 長さ 1.30㎜×幅 0.53㎜

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形。

コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. plantaginea Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に８～10 本程度の隆起があり、その間には横方向に微細な隆線がある。種皮は薄く透き通る。

イグサ科 *Juncaceae* 種子

半透明の黄褐色ないし茶褐色、ゆがんだ卵形を呈す。両端は尖り､黒褐色。表面には網目模様がある。

ソバ Fagopyrum esculentum Moench 果実（破片） タデ科 長さ 5.59㎜×幅 3.50㎜

黒褐色で卵形を呈す｡表面には縞状の模様がある。断面は三角形である。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

黒褐色で先端がとがる広卵形を呈す。表面には網目模様があり、断面は両凸レンズ形である。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝がはしる。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科 長さ 1.01㎜×幅 1.07㎜

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。

アカザ属 - ヒユ属 *Chenopodium-Amaranthus* 種子（破片） アカザ科 - ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈する。ヘソ部分が欠けているためハイフン（－）で結んで示した。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子（完形・破片） 長さ 0.93㎜×幅 0.94㎜

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

コウホネ *Nuphar japonicum* DC. 種子 スイレン科 長さ 4.82㎜×幅 3.30㎜

茶褐色で倒卵形を呈す。一側にヘソから先端まで延びる線条がある。

アオツヅラフジ *Cocculus trilobus* DC. 種子 ツヅラフジ科 長さ 4.49㎜×幅 4.30㎜

茶褐色で円形を呈し、中央部は大きくくぼむ。縁は隆起し、隆起上には放射状の模様がある。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科 長さ 1.60㎜×幅 1.01㎜

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に６～８本の隆起が走る。

チドメグサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科 長さ 1.27㎜×幅 0.87㎜

淡褐色で半円形を呈す。断面は楕円形である。両面に明瞭な一本の円弧状の隆起が走る。

エゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica* Hara 果実 シソ科 長さ 1.97㎜×幅 1.61㎜

黒褐色～灰褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。径 2.2 ～ 2.4㎜。径 2.2㎜以上をエゴマとし、2.0㎜以下をシソ属とした。

シソ属 *Perilla* 果実（破片） シソ科

茶褐色で円形を呈し、下端にヘソがある。表面には大きい網目模様がある。

イヌホウズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科 長さ 2.86㎜×幅 2.82㎜

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

メナモミ *Siegesbeckia pubescens* Makino 果実 キク科

黒色で倒卵形を呈し、上端は切形で、下端は細く曲る。表面は粗く、断面はひし形である。

タカサブロウ *Eclipta* prostrata L. 果実 キク科

黄褐色で長倒卵形を呈し、一端は切形である。中央部にはいぼ状の突起がある。

２）分類群（水洗選別済み）

樹木７分類群が同定される。学名、和名および粒数を表４に、主要な分類群を写真に示す。以下に同

第 50 表　種実同定結果（堆積物）

分類群		部位	7-5調査区				7-3D調査区
			SE72				SD47
学名	和名		21	22	23	24	25
Arbor	樹木						
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	殻斗(破片)			2		
Rubus	キイチゴ属	核		2			
Vitis	ブドウ属	種子					2
		(破片)					1
Herb	草本						
Sparganium	ミクリ属	果実					1
Oryza sativa L.	イネ	穎		1	1		
		(破片)		10	48		
		炭化果実				1	
Echinochloa	ヒエ属	穎					1
Gramineae	イネ科	穎	1		8		2
		(破片)		1	2	8	
Scirpus	ホタルイ属	果実		4			1
Carex	スゲ属	果実(破片)		6			
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	5		12	4	
Monochoria vaginalis Presl var. *plantaginea* Solms-Laub.	コナギ	種子		1	2		1
Juncaceae	イグサ科	種子		2			
Fagopyrum esculentum Moench	ソバ	果実(破片)			1		
Polygonum	タデ属	果実		4			4
Chenopodium	アカザ属	種子		1			
Amaranthus	ヒユ属	種子		6	8		
Chenopodium-Amaranthus	アカザ属-ヒユ属	種子(破片)		1			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子		28	20	4	4
		(破片)		4			
Nuphar japonicum DC.	コウホネ	種子					3
Cocculus orbiculatus DC.	アオツヅラフジ	種子				1	
Oxalis	カタバミ属	種子	2	5	38	4	
		(破片)		19	10		
Hydrocotyle	チドメグサ属	果実	2	8	12	4	
Perilla frutescens var. *japonica* Hara	エゴマ	果実				2	
Perilla	シソ属	果実(破片)					1
Solanum nigrum L.	イヌホウズキ	種子	1	2	2		
Siegesbeckia pubescens Makino	メナモミ	果実				4	
Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実		2			
Total	合計		11	107	166	32	21
Unknown seeds	不明種実	(破片)					1
Unknown	不明	幼果	3				
	昆虫	(破片)		(++)	(++)	(+)	(+)

(21-23, 25　200cm3中0.25mm篩)
(24　180cm3中0.25mm篩)

第 51 表　種実同定結果（水洗選別済み）

分類群		部位	7-5調査区	7-3D調査区	7-4調査区	
			SE72最下層	SD47最下層	SD53	SD53最下層
学名	和名		26	27	28	29
Arbor	樹木					
Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核				1
Quercus sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節	堅果(破片)	1			
Quercus	コナラ属	堅果(破片)	3			
Cinnamomum camphora S.	クスノキ	種子				3
Prunus persica Batsch	モモ	核	3		2	
		(破片)	1	1		
Prunus salicina Lindley	スモモ	核			1	
Styrax japonica S. et Z.	エゴノキ	核			1	7
		(破片)			3	
Total	合計		8	1	7	11
	備考		木材片(2)			

第 52 表　昆虫化石同定結果

番号	試料名		分類群		部位	出土日
			和名	学名		
30	7-5調査区	SE72上層東側横板ホゾ穴内部	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* Motschulsky	P1, E4, A22, L1	2011/9/27
31		SE72井戸枠内最下層	アオゴミムシ属	*Chlaenius* sp.	H1	2011/9/28
			アオゴミムシ属	*Chlaenius* sp.	P1	
			ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* Motschulsky	E3	

(部位凡例)　H(Head)：頭部, P(Pronotum)：前胸背板, E(Elytron)：鞘翅, A(Abdomen)：腹部, L(Leg)：腿脛節, O(Others)：その他

定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

〔樹木〕

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核 クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* 堅果（破片） ブナ科

基部は明灰褐色、上部は濃褐色で表面には縦線条が密に並ぶ。花柱基部の伏毛は淡褐色。光沢は弱い。

コナラ属 *Quercus* 堅果・幼果 ブナ科（破片）

黒褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

クスノキ *Cinnamomum camphora* S. 種子 クスノキ科 長さ7.03㎜×幅6.76㎜、7.24㎜×6.37㎜、8.22㎜×7.36㎜

黒褐色で球形を呈す。一条の稜線が走りその中央が突起する。

モモ *Prunus persica* Batsch 核（完形・破片） バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

スモモ *Prunus salicina* Lindley 核 バラ科

淡褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。断面は扁平である。

エゴノキ *Styrax japonica* S. et Z. 核（完形・破片） エゴノキ科 長さ2.33㎜×幅1.51㎜、1.83㎜×1.27㎜、2.00㎜×1.44㎜、2.02㎜×1.16㎜、2.14㎜×1.41㎜

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に３本の溝が走る。

３）種実群集の特徴

７－５区ＳＥ72（第107図）

試料21からは草本種実のカヤツリグサ科５、カタバミ属２、チドメグサ属２、イネ科１、イヌホウズキ１、不明幼果３が検出された。

試料22からは、草本種実のナデシコ科32が多く、次いでカタバミ属24、イネ11、チドメグサ属８、スゲ属６、ヒユ属６、ホタルイ属４、タデ属４、イグサ科２、イヌホウズキ２、タカサブロウ２、イネ科１、コナギ１、アカザ属１、アカザ属－ヒユ属１が、樹木種実ではキイチゴ属２が検出された。

試料23からは草本種実のイネ49、カタバミ属48、ナデシコ科20、カヤツリグサ科12、チドメグサ属12、イネ科10、ヒユ属８、コナギ２、イヌホウズキ２、ソバ１が、樹木種実ではコナラ属コナラ亜属２が検出された。

試料24からは、草本種実のイネ科８、カヤツリグサ科４、ナデシコ科４、カタバミ属４、チドメグサ属４、メナモミ４、エゴマ２、イネ炭化果実１が検出された。

７－３Ｄ調査区ＳＤ47（第108図）

試料25からは、草本種実のタデ属４、ナデシコ科４、コウホネ３、イネ科２、ミクリ属１、ヒエ属１、ホタルイ属１、コナギ１、シソ属１が検出された。

水洗選別済み試料

７－５区ＳＥ72の試料26からは、樹木種実のコナラ属クヌギ節１、コナラ属３、モモ４が同定された（第51表）。７－３Ｄ区ＳＤ47の試料27からは、樹木種実のモモ１が同定された。７－４区ではＳＤ53の試料28から樹木種実のモモ２、スモモ１、エゴノキ４が同定され、ＳＤ53最下層の試料29から樹木種実のオニグルミ１、クスノキ３、エゴノキ７が同定された。

ｆ　考察

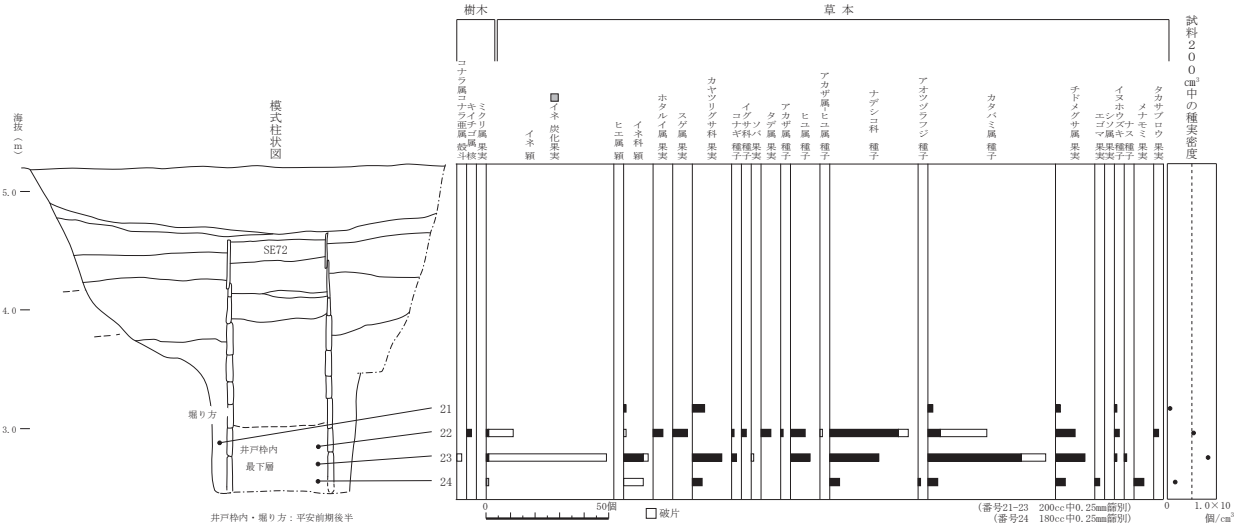
７－２区ＳＤ47（試料１～８）

下位より、試料８では草本花粉の占める割合が高く、周辺には草本やネザサ節などのササ類が分布し、樹木が少ない環境であった。イネ属型を含むイネ科が多く、イネの植物珪酸体がやや低い密度であるが検出されていることから、周辺には水田が分布していたと推定される。溝の縁辺にはツリフネソウ属が多く生育しており、上部にはヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、タンポポ亜科などの乾燥を好む草本が分布していた。またクワ科－イラクサ科はカナムグラやイラクサなどの草本が考えられる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が出現し、周辺地域にはコナラなどの二次林とカシ類の照葉樹

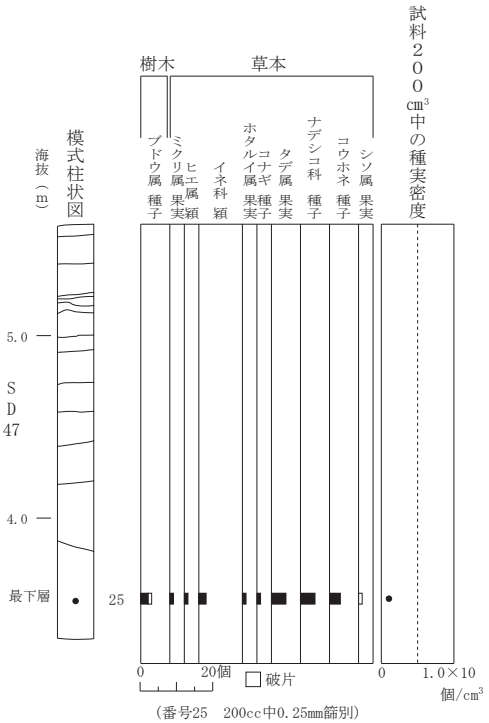
林分布していた。ＳＤ47（試料６から試料３）の時期は、草本花粉のヨモギ属、イネ科、アカザ科－ヒユ科などがわずかに出現する一方、イネの植物珪酸体が高い密度であることから、近傍で稲作が営まれており、周辺には乾燥を好むヨモギ属、イネ科、アカザ科－ヒユ科などの草本とコナラ（コナラ属コナラ亜属）の二次林が分布していた。なお､炭層（試料３、試料４）ではイネやイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体がかなり多量に検出されることから、稲藁や籾殻が何らかの形で大溝内に入れられていた可能性が考えられる。稲藁の利用としては、建物の屋根材や壁材、敷物、履物、俵、縄など多様な用途が想定される。

７－４区ＳＤ49、ＳＤ51（試料９～13）：平安時代前期以前から鎌倉以前

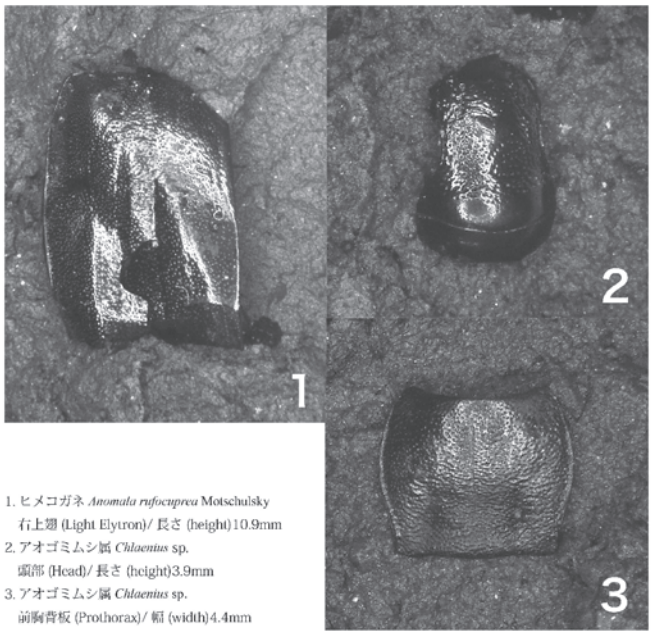
ＳＤ49（試料11・12）の時期は、周囲にはイネ科（イネ属型を含む）を主にヨモギ属、カヤツリグサ科、ネザサ節などのササ類が生育し、水田の分布が示唆される。ソバ属が検出され、畠の分布も示唆される。周辺はやや森林が多く、スギ、コナラ属ア



第107図　ＳＥ72種実ダイアグラム



第108図　７－３Ｄ区種実ダイアグラム



1. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky
右上翅 (Light Elytron)/ 長さ (height)10.9mm
2. アオゴミムシ属 *Chlaenius* sp.
頭部 (Head)/ 長さ (height)3.9mm
3. アオゴミムシ属 *Chlaenius* sp.
前胸背板 (Prothorax)/ 幅 (width)4.4mm

写真13　昆虫写真

カガシ亜属を主に、コナラ属コナラ亜属、シイ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの森林が分布していた。回虫卵が検出され、ヒトの近接した居住や活動が示唆される。

７－４区ＳＤ 53（試料 14 ～ 16）

ＳＤ 53 の下部の試料 15（平安時代前期後半）の時期は、周囲に比較的森林が多く、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹を主にコナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の森林が分布していた。溝の縁辺には、クワ科－イラクサ科、バラ科、樹木ではエゴノキが生育していた。周囲は、イネ科（イネ属型を含む）を主に、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アブラナ科、チドメグサ亜科などが分布し、水田が分布していた。上部の試料 14（平安時代前期後半）の時期になると、イネ科（イネ属型を含む）とアカザ科－ヒユ科を主に、カヤツリグサ科、オオバコ属、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属の草本が分布し、周囲の水田の拡大と乾燥した人為改変地の拡大が示唆される。一方、周囲の森林は大きく減少する。大型種実遺体からモモ、スモモの栽培植物と食用となるオニグルミが同定される。

７－４区ＳＤ 52（試料 17 ～ 20）

試料 18（平安時代前期～中期）の時期は、スギが卓越し、近接してスギが生育していた。イネ科（イネ属型を含む）の草本が生育し、近辺には水田の分布が示唆される。

７－５調査区ＳＥ 72（試料 21 ～ 24）

試料 22 ～ 24 では、コナラ属コナラ亜属が卓越し、クヌギ（種実から）が近接して分布し、周囲にはカタバミ属、ナデシコ科、カヤツリグサ科、チドメグサ属、ツリフネソウ属、イネ科の人里植物が生育していた。

栽培植物は、種実遺体でイネ頴の破片が多く、ソバ、エゴマ、モモが検出されるている。また、イネの植物珪酸体も比較的高い密度である。このことから近傍に水田と畠の分布が推定される。他の食用になるキイチゴ属検出されている。

７－３Ｄ区ＳＤ 47（試料 25）

溝の縁辺には、流路沿いを好むヤナギ属が生育し、クワ科－イラクサ科、バラ科、イネ科、ツリフネソウ属、ヨモギ属の草本が分布し、溝内にはコウホネやミクリ属、コナギの水生植物が生育していた。周辺地域にはスギ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属の樹木が分布していた。栽培植物では、モモが検出され、食用となるブドウ属も検出されている。

ｇ　まとめ

朝見遺跡第２次調査において、プラント・オパール分析、花粉分析、種実同定を行い、農耕、植生ならびに環境の復元を行った。

ＳＤ 52、ＳＥ 72、ＳＤ 47 では樹木が多く、それぞれスギ、コナラ属コナラ亜属（クヌギ）、ヤナギが近接して生育分布していた。ＳＤ 53 では、下層から上層にかけて周辺ではコナラ属アカガシ亜属の森林が減少し、水田の拡大が示唆された。ＳＤ 49 では水田を主に畠の分布が示唆された。栽培植物としては、イネ、ソバ、エゴマ、モモ、スモモが検出され、食用になるオニグルミやブドウ属が検出された。

以上のことから、これらの遺構の時期である平安時代前期頃に、大きな開発が行われ周囲の森林が減少し、水田を主に畠が拡大したとみなされる。周辺の比較的乾燥したところには、ススキ属やチガヤ属、メダケ属（おもにネザサ節）などが生育していたと推定される。湿地性のヨシ属やスゲ属などがほとんど検出されないことから、大溝内は常時滞水するような状況ではなかったと考えられる。

なお、ＳＤ 47 の炭層（試料３、試料４）ではイネやイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体が多量に検出されており、稲藁や籾殻が何らかの形で大溝内に投入されていた可能性が考えられた。

（杉山真二、金原正子、金原美奈子）

〔 参考文献 〕

・笠原安夫 1985『日本雑草図説』養賢堂，494p.
・笠原安夫 1988「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究第２巻生業』雄山閣　出版，p.131 － 139.
・金原正明 1993「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法』角川書店，p.248-262.
・金原正明 1996「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル No.409』ニューサイエンス社，p.15 － 19.
・島倉巳三郎 1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第５集，60p.
・杉山真二・藤原宏志 1986「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」

『考古学と自然科学』19，p.69-84.
・杉山真二 1999「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究』38（2），p.109-123.
・杉山真二 2000『植物珪酸体（プラント・オパール）考古学と植物学』同成社，p.189-213.
・中村純 1967『花粉分析』古今書院，p.82-102.
・中村純 1974「イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究』13,p.187-193.
・中村純 1977「稲作とイネ花粉」考古学と自然科学，第10号，p.21-30.
・中村純 1980「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』91p.
・藤原宏志 1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9，p.15-29.
・藤原宏志・杉山真二 1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17，p.73-85.
・南木睦彦 1993「葉･果実･種子．日本第四紀学会編」『第四紀試料分析法』東京大学出版会，p.276 － 283.

5　朝見遺跡第２次調査における自然科学分析報告（昆虫化石同定）

a　はじめに

朝見遺跡（第２次）発掘調査の結果、平安時代の大溝や祭祀土坑・鎌倉時代の条里溝などの遺構や、越州窯系青磁や緑釉および灰釉陶器、墨書土器などの遺物が見つかっている。ここでは、朝見遺跡第２次調査で出土した昆虫化石について同定を行い、当時の周辺環境について検討した。同定にあたっては、愛知県埋蔵文化財調査センター奥野絵美氏にご協力いただいた。

b　分析試料

昆虫化石（遺体ともいう）が得られた場所は、７－５区の北端に位置する井戸ＳＥ72である。この昆虫化石は朝見遺跡で平成23年９月27日から28日にかけて採取された。昆虫化石が得られた地点は２カ所で、井戸ＳＥ27の上層東側横板ホゾ穴内部（試料30）と井戸枠内最下層（試料31）である（第46表）。以下に各試料の詳細を述べる。

試料30（ＳＥ72上層出土）　東側横板のホゾ穴の中から、28点の昆虫化石がまとまった状態で出土した。昆虫化石が出土した状況から、これらは同一個体の昆虫の破片であると思われる（現場担当者所見）。上層の土質は青灰粘土層である。

試料31（ＳＥ72最下層出土）　試料31では、井戸枠内部の最下層から５点の昆虫化石が見つかった。試料31の土質については植物質の多く混じる黒色土である

c　分析方法

昆虫の化石は顕微鏡下で一点ずつ現生の標本と比較しながら同定作業を行った後、リスト化した（第52表）。特に状態の良い昆虫化石については写真撮影を行っている（写真13）。分析後の昆虫化石は50％濃度のエチルアルコールを吹き付けた後、密封容器に入れて保管してある。

d　分析結果

試料30（ＳＥ72上層出土）　試料30は、28点の昆虫化石すべてが同一のヒメコガネ Anomala rufocuprea Motschulsky の外骨格（表皮）破片および切片であることがわかった。ヒメコガネはマメ科植物などの葉を食べる陸生の食植性昆虫である。このヒメコガネを顕微鏡下で詳細に観察したところ、外骨格以外は腐食して完全に失われており、遺跡で認められる昆虫化石としての特徴を兼ね備えていた。よってこの昆虫化石は、朝見遺跡の発掘調査以後に、現生の昆虫が井戸ＳＥ72の土中に潜り込んだものでは無いということができる。

出土したヒメコガネの部位は、前胸背板片が１点、左右の上翅片が４点、爪が１点、腹部腹板片が３点、腹部が３点、その他腹部切片16点であった。このうち左上翅は半分に割れてはいたものの、ほぼ完全な形で出土していた。よって計測を行ったところ、長さが12mmであった。それゆえ朝見遺跡から出土したヒメコガネの全長は16mm前後であると推定できる。現生のヒメコガネ体長は13～16mm前後であるため（岡島1983）、朝見遺跡の井戸から見つかったヒメコガネは現代のヒメコガネとおおよそ同程度の大きさであったと言える（写真13）。

試料31（ＳＥ72最下層出土）　試料31を顕微鏡下で観察したところ、昆虫化石５点のうち３点はヒメコガネの上翅片であり、残り２点はアオゴミムシ Chlaenius sp. の頭部および前胸背板片であった。アオゴミムシ属は地表面付近に生息する食肉性の歩行虫である（写真13）。

e　考察

以上、朝見遺跡から出土した昆虫化石について述

べた。今回認められた昆虫化石の数は少数であり朝見遺跡全体の古環境を復元することは難しいが、食植性昆虫のヒメコガネが認められたことから、遺跡とその周辺にマメ科植物や果樹など人間の介在を受けた植生が広がっていた可能性が指摘できる。

ヒメコガネは元来、林縁や二次林などの広葉樹の樹葉に依存して生活していた食葉性昆虫とされるが、人為による植生改変や畑作物などの出現に伴って食性転換し、多くの栽培作物を加害するようになったと考えられている（森 2010）。それゆえヒメコガネは、日本の山地開発や畑作農耕の歴史を考える上で非常に重要な昆虫である。これまでの研究では、愛知県東海市畑間遺跡（奥野・森 2009）や愛知県稲沢市長野北浦遺跡（奥野・蔭山）、愛知県一宮市大毛沖・大毛池田・田所遺跡（森 2010）など、鎌倉から室町時代の中世の遺跡でヒメコガネが大発生していたことが明らかになっている。だが、中世以前の古代の遺跡については昆虫化石の分析例が少なく、詳細は明らかになっていない。よって今後、古代から中世にかけての遺跡である朝見遺跡において詳細な昆虫化石の分析を進めて行く必要がある。　（松田隆二）

〔 参考文献 〕

・岡島秀治 1983『日本の甲虫』自然観察シリーズ 15 生態編　小学館
・奥野絵美・森　勇一 2009「愛知県畑間・東畑遺跡から検出された昆虫化石について」『愛知県畑間・東畑遺跡発掘調査報告書』pp.73-79 国際航業株式会社編集・愛知県東海市教育委員会発行
・奥野絵美・蔭山誠一 2010「中世下津を考える（その 2）－自然科学的古環境解析とその評価－」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要』11 pp. 66-67 愛知県埋蔵文化財センター
・奥野絵美 2011「昆虫化石を用いた長野北浦遺跡の古環境復元」『長野北浦遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
・日本昆虫学会 1955 原色日本昆虫図鑑甲虫編、保育社
・森　勇一 2010『時代を彩った昆虫たち　坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざまで』pp.365-371 坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

6　鍛冶・鋳造関連遺物分析調査結果

a　いきさつ

朝見遺跡は三重県松阪市和屋町に所在する。７－２区・７－４区の平安時代前期後半～後期と推定される大溝（ＳＤ 47 ＝ＳＤ 53）等から複数の鉄滓が出土した。また周辺からは鍛造・鋳造鉄器も多数出土している。当該期の鉄器製作の様相を検討する目的から、分析調査の運びとなった。

b　調査方法

供試材　第 53 表に示す。出土鍛冶関連遺物の調査を行った。

調査項目

（１）肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

（２）マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

（３）顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150、#24#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の３μと１μで鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では５％ナイタル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

（４）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester ）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉱滓中の晶出物の判定を行った。また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に 136゜の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は 50gf または 200gf で測定した。

（５）ＥＰＭＡ（Electron Probe Micro Analyzer）調査

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し定性的

な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

（6）化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

c　調査結果

ASM－1：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：110 gでやや偏平な椀形鍛冶滓破片である。上下面と弧状の側面は本来の表面で、直線状の側面2面が破面である。表面には広い範囲で茶褐色の鉄錆化物や黄褐色の土砂が付着する。滓の地の色調は暗灰色で、着磁性があるが特殊金属探知機での反応はなく、まとまった鉄部が存在する可能性は低い。また下面表層には幅10mm強の木炭痕が残り、気孔もかなり密にみられる。ただし他の面の気孔は少なく緻密である。

（2）マクロ組織：写真14①に示す。上面側では白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）の割合が高く、白みがかった色調となっている。一方、下面側はウスタイトの割合が低く発達した淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の晶出から、灰色味を帯びる。

（3）顕微鏡組織：写真14②③に示す。下面側の滓部の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。さらに③下側のように下面表層には部分的に灰褐色多角形結晶マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

第53表　鍛冶・鋳造関連遺物の履歴と調査項目

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目									備考
				大きさ	重量	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ﾋﾞｯｶｰｽ断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	ｶﾛﾘｰ	
				（mm）	（g）										
ASM-1	SD47上層	椀形鍛冶滓	平安前期後半～後期	60×45×18	110.3	H（○）	○	○	○		○	○			
ASM-2		椀形鍛冶滓		42×34×25	38.2	錆化（△）	○	○	○		○	○			
ASM-3-1		鉄塊系遺物				H（○）	○	○			○				*付着物除去後75.42g
ASM-3-2		椀形鍛冶滓		65×45×42	101.8	なし	○	○	○		○	○			廃棄後2片接着、2片とも調査
ASM-4	SD47上層	鉄器片（鋳造品）		55×47×12	49.4	錆化（△）	○	○							
ASM-5		鉄器片（鋳造品）		63×60×20	68.8	錆化（△）	○	○							
ASM-6		鉄器片（鍛造品）		38×37×22	42.9	L（●）	○	○	○		○				*付着物除去後39.17g
ASM-7	SD47上層	椀形鍛冶滓		65×50×20	143.4	なし	○	○	○		○	○			最大破片を調査
ASM-8	SD47最上層	鉄器片（鋳造品）		42×32×25	20.2	錆化（△）	○	○							
ASM-9	SD32	坩堝	中世～近世？	56×70×16	57.7	なし	○	○			○				
ASM-10	SD47最上層	鉄製品（鍛造品）	平安前期後半～後期	57×26×7	21.8	L（●）	○	○	○		○				
ASM-11	SD47上層	鉄器片（鋳造品）		50×46×6	28.7	L（●）	○	○	○		○				

（４）ビッカース断面硬度：写真 14 ②③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は 476Hv、487Hv であった。ウスタイトの文献硬度値[1] 450 ～ 500Hv の範囲内であり、ウスタイトに同定される。灰褐色多角形結晶の硬度値は 559Hv、591Hv であった。マグネタイトの文献硬度値の範囲内でマグネタイトに同定される。さらに淡灰色柱状結晶の硬度値は 632Hv、677Hv、702Hv であった。ファヤライトの文献硬度値 600 ～ 700Hv の上限を僅かに超えるものもみられるが、後述のＥＰＭＡ調査結果からもファヤライトに同定される。

（５）ＥＰＭＡ調査：写真 14 ④に下面側の滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色樹枝状結晶と灰褐色多角形結晶の特性Ｘ線像では、鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は白色樹枝状結晶が 95.3%FeO（分析点 4）でウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。灰褐色多角形結晶は 94.7%FeO － 4.0%Al_2O_3 であった（分析点１）。マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）で微量アルミナ（Al_2O_3）を固溶する。

また白色樹枝状結晶および褐色多角形結晶内の微結晶、および周囲の暗色多角形結晶は特性Ｘ線像をみると鉄（Fe）、アルミニウム（Al）に反応がある。定量分析値は 61.3%FeO － 32.2%Al_2O_3 － 1.6%TiO_2（分析点 2）、60.8%FeO － 27.4%Al_2O_3 － 5.3%TiO_2（分析点 5）、52.8%FeO － 44.2%Al_2O_3（分析点 3）であった。前２点はマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）とヘルシナイト（Hercynite：FeO・Al_2O_3）の中間の組成の固溶体で、さらに微量チタン（TiO_2）を固溶する。一方、後１点はヘルシナイト（Hercynite：FeO・Al_2O_3）に同定される。

さらに淡灰色柱状結晶は特性Ｘ線像をみると、鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は 67.9%FeO － 1.5%MgO － 31.1%SiO_2（分析点 6）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）で、微量マグネシア（MgO）を固溶する。素地部分の定量分析値は 41.7%SiO_2 － 25.4%Al_2O_3 － 7.2%CaO － 8.2%Na_2O － 3.5%P_2O_5 － 12.6%FeO（分析点 7）であった。非晶質珪酸塩である。

（６）化学組成分析：第 54 表に示す。全鉄分（Total Fe）は 59.89% と高値であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は 0.14%、酸化第１鉄（FeO）が 55.40%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）23.86% の割合である。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）は 18.83% とやや低めで、塩基性成分（CaO ＋ MgO）も 1.52% と低値であった。主に製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.18%、バナジウム（V）が 0.01% と低値であった。酸化マンガン（MnO）は 0.13%、銅（Cu）＜ 0.01% と低い。

当鉄滓は鉄酸化物の割合が高く、製鉄原料起源の脈石成分（TiO_2、V）の低減傾向が顕著であった。この特徴から鍛錬鍛冶滓に分類される。主に鉄素材を熱間で加工した時の吹き減り（酸化に伴う損失）で生じた滓と考えられる。

ASM － 2：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察：38 ｇのごく小形で偏平な椀形鍛冶滓である。表面は淡褐色の土砂で覆われる。明瞭な破面はなくほぼ完形と推定される。滓の地の色調は暗灰色で、着磁性はあるが特殊金属探知機での反応はなく、まとまった鉄部が存在する可能性は低い。また表面にはごく細かい木炭痕による凹凸が残る。

（２）マクロ組織：写真 15 ①に示す。滓中にはごく小形不定形の錆化鉄（青灰色部）が確認された。

（３）顕微鏡組織：写真 15 ②③に示す。②左側は滓部である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。一方②右側は錆化鉄部で、③はその拡大である。淡灰白色地のフェライト（ferrite：純鉄、α 鉄）地に微かに黒色層状のパーライト（Pearlite）組織痕跡が残存する。この金属組織痕跡から炭素含有量は 0.2% 前後の軟鉄と推測される。

（４）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の調査を実施した。硬度値は 432Hv、451Hv であった。やや軟質であるが結晶の色調と形状、後述のＥＰＭＡ調査結果からウスタイトに同定される。

（５）ＥＰＭＡ調査：写真 15 ④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色樹枝状結晶は特性Ｘ線像をみると鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値 96.0%FeO であった（分析点 8）。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。また淡灰色盤状結晶は、特性Ｘ線像では、鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素

（O）に反応がみられる。定量分析値は 58.1%FeO − 1.2%MnO − 1.0%MgO − 32.1%SiO_2 であった（分析点 9）。ファヤライト（Fayalite：2FeO·SiO_2）で、微量マンガン（MnO）、マグネシア（MgO）を固溶する。素地部分の定量分析値は 37.7%SiO_2 − 17.1%Al_2O_3 − 9.6%CaO − 2.4%K_2O − 3.8%Na_2O − 1.9%P_2O_5 − 23.5%FeO（分析点 10）であった。非晶質珪酸塩でかなり鉄分（FeO）の割合が高い。

（6）化学組成分析：第 54 表に示す。全鉄分（Total Fe）58.72% に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.06%、酸化第 1 鉄（FeO）39.02%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）40.51% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）の割合は 13.96% と低く、塩基性成分（CaO + MgO）も 0.94% と低値である。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.20%、バナジウム（V）が 0.01% も低値であった。さらに酸化マンガン（MnO）0.33%、銅（Cu）＜も 0.01% と低値である。

当鉄滓も椀形鍛冶滓（ASM − 1）と類似した鉱物·化学組成であり、鍛錬鍛冶滓に分類される。

ASM − 3 − 1：鉄塊系遺物

（1）肉眼観察：全体が黄褐色の土砂で覆われた塊状の鍛冶関連遺物であった。供試材の採取時の断面観察結果から、2 個体が廃棄後二次的に固着した可能性が高いと考えられた。そこで錆化鉄主体で、一部金属鉄が残存する個体を ASM − 3 − 1 として調査を実施した。

（2）マクロ組織：写真 16 ①に示す。表層（上下面）に薄く滓部が確認されるが鉄主体の遺物であった。また鉄部の大半は錆化しているが、一部金属鉄が残存する（明色部）。

（3）顕微鏡組織：写真 16 ②〜⑤に示す。②は表層の滓部の拡大である。白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。

③は錆化鉄部の拡大である。針状セメンタイト（Cementite：Fe_3C）が広い範囲で残存する。また④⑤は金属鉄部の拡大である。3% ナイタルで腐食したところ、黒色層状のパーライト（Peralite）素地に白色板状のセメンタイトが析出する、過共析組織（C ＞ 0.77%）が確認された。

（4）ビッカース断面硬度：写真 16 ②③の金属鉄部（過共析組織）の硬度を測定した。素地部分の硬度値は 316Hv であった。パーライトの層間が密なため、かなり硬質の値となった。また板状セメンタイトが析出する個所は 426Hv とより硬質で、組織に見合った値といえる。ただし正常なセメンタイトは 800 〜 1050Hv を呈する。426Hv は風化の影響を配慮すべきではなかろうか。

（5）ＥＰＭＡ調査：写真 16 ⑥に滓部の反射電子像（COMP）を示す。明白色粒状結晶は特性Ｘ線像をみると鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は 98.7%FeO（分析点 25）、97.7%FeO（分析点 26）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。一方明白色粒状結晶の周囲や粒全体がやや暗い色調を呈する部分もあるが、こうした個所では特性Ｘ線像の鉄（Fe）の反応がやや弱く、定量分析値も 67.7%FeO − 5.9%SiO_2 − 3.7%Al_2O_3（分析点 27）、81.9%FeO − 6.9%SiO_2 − 2.2%Al_2O_3（分析点 28）と大きく減衰し、総計が 100% を大きく割り込んでいる。これはウスタイトが風化の影響を受けたものと判断される。

当鉄塊系遺物は付着滓の鉱物組成から、鍛冶処理途中の原料鉄に分類される。また金属組織および錆化鉄部に残存する組織痕跡から、比較的まとまりの良い高炭素鋼であったことが明らかとなった。高さや焼入れ性を要求される刃金に適した原料といえる。

ASM − 3 − 2：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：鉄塊系遺物（ASM − 3 − 1）の項で述べたように、当遺物は本来別の 2 個体が廃棄後二次的に固着した可能性が高いと考えられた。そこで椀状の滓主体の個体を ASM − 3 − 2 として調査を実施した。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。表面は若干風化気味で中小の気孔が散在するが緻密である。

（2）マクロ組織：写真 17 ①に示す。写真上側の青灰色部は錆化鉄である。こちら側が鉄塊系遺物（ASM − 3 − 1）と接していた面であり、廃棄後に金属鉄部の錆化に伴い接着したものと推定される。

（3）顕微鏡組織：写真 17 ②③に示す。青灰色部は錆化鉄である。金属鉄組織痕跡は不明瞭であり、本来の鉄中の炭素含有量を推定する手がかりは得られなかった。また滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶

滓の晶癖である。

（４）ビッカース断面硬度：写真 17 ③の発達した白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は 453Hv、465Hv であった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトに同定される。

（５）ＥＰＭＡ調査：写真 17 ④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。発達した白色樹枝状結晶は特性Ｘ線像をみると鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は 99.1%FeO であった（分析点 29）。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。また暗色結晶は特性Ｘ線像では珪素（Si）、アルミニウム（Al）、カリウム（K）に反応がみられる。定量分析値は 8.5%K_2O − 63.7%SiO_2 − 26.0%Al_2O_3 であった（分析点 30）。オルソクレース（Orthoclase：$KAlSi_3O_8$）と推測される。淡灰色柱状結晶は特性Ｘ線像では鉄（Fe）、珪素（Si）、カルシウム（Ca）酸素（O）に反応がある。定量分析値は中央の暗色部が 62.4%FeO − 4.5%CaO − 31.4%SiO_2（分析点 31）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）で、微量ライム（CaO）を固溶する。一方外周の明色部は 47.1%FeO − 14.5%CaO − 32.1%SiO_2（分析点 32）と、かなりライム（CaO）が鉄分（FeO）を置換した組成〔2（Fe,Ca）O･SiO_2〕となっている。

（６）化学組成分析：第 54 表に示す。全鉄分（Total Fe）56.28% に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.33%、酸化第１鉄（FeO）41.67%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）33.69% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K2O + Na_2O）の割合は 12.88% と低く、塩基性成分（CaO + MgO）も 0.63% と低値である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.26%、バナジウム（V）も 0.02% と低い。酸化マンガン（MnO）0.17%、銅（Cu）も＜ 0.01% と低値である。

当鉄滓も椀形鍛冶滓（ASM − 1、2）と類似する鉱物・化学組成であり、鍛錬鍛冶滓に分類される。

ASM − 4：鉄器片（鋳造品）

（１）肉眼観察：全体が淡褐色の土砂で覆われた、板状の鉄製品の破片である。土砂の付着で表面観察が困難であるが、緩やかに内湾する形状から鉄鍋などの器物の破片と推測される。やや軽い質感で特殊金属探知機での反応はなく、金属鉄部は残存していないと考えられる。

（２）マクロ組織：写真 18 ①に示す。断面が緩やかに内湾する形状の鋳造鉄器である。両端は破面で、鉄鍋等の体部破片の可能性が高い。厚みは４㎜前後と観察される。

（３）顕微鏡組織：写真 18 ②③に示す。金属鉄部は残存していないが、ほぼ全面金属鉄組織の痕跡が観察される。片状黒鉛（C）および蜂の巣状のレデブライト（Ledebulite）が確認される斑鋳鉄であった。

ASM − 5：鉄器片（鋳造品）

（１）肉眼観察：全体が黄褐色の土砂で覆われた、板状の鉄製品の破片である。側面全面が破面で、下端部がはっきりと湾曲している。鉄鍋などの器物の底部から体部にかけての破面と推測される。やや軽い質感で特殊金属探知機での反応はなく、金属鉄部は残存していないと考えられる。

（２）マクロ組織：写真 18 ④に示す。上側（写真右側）は薄手で、下側（左側）の湾曲部が肥厚する。また内部にはごく細かい気孔（鋳巣）が散在する。厚みは４㎜程度から８㎜まで肥大する。

（３）顕微鏡組織：写真 18 ⑤⑥に示す。金属鉄部は残存していないが、ほぼ全面パーライト（pearlite）とセメンタイト（cementite）の共晶組成白鋳鉄組織（C4.26%）痕跡が残存し、自然腐食を受けて色調は金属鉄組織とは反転する。

ASM − 6：鉄器片（鍛造品）

（１）肉眼観察：全体が黄褐色の土砂で厚く覆われた、43g とごく小形の鉄製品の破片と推定される。土砂の付着で表面観察が困難であるが、重量感があり特殊金属探知機のＬ（●）で反応があり、内部には金属鉄の良好残存が推定される。

（２）マクロ組織：写真 19 ①に示す。金属鉄が良好に残存する断面凸形の鉄製品である。内部には展伸した形状の非金属介在物が多数分布しており、折返し鍛錬が施された鍛造品であった。下部と右端部に鍛接線が観察できる。

（３）顕微鏡組織：写真 19 ②〜⑤、写真 20 ①②に示す。写真 13 ②左上の明色部は低炭素域で、フェライト（Ferrite：α鉄）の割合が高い。写真 19 ③左上および写真 20 ①はその拡大で、この個所は炭素含有量が 0.1% 以下の軟鉄と推定される。

これに対して②の中央下寄りの素地はマルテンサ

イト（Martensite）で、旧オーステナイト（Austenite：γ鉄）粒界に沿って白色針状のフェライト、黒色微細パーライト（Pearlite）が析出する。写真19④はその拡大である。熱間加工後に水冷されたことを示す組織である。冷却速度がやや遅いため、均質なマルテンサイト組織にならず、粒界に針状フェライトおよび微細パーライトが確認される。また②下側でもマルテンサイトは観察されるがその割合は少なく、パーライトの割合が高い。写真19⑤はその拡大である。表層部は水冷前にパーライト変態（727℃）が進んでいたものと判断される。これらの金属鉄組織から、上述した端部の低炭素域以外の炭素含有量は0.5%～0.7%程度の鋼と推測される。

写真20①②の展伸状暗色部は鉄中非金属介在物である。①では白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。②では素地のガラス質滓中に淡褐色片状の鉄チタン酸化物が晶出する。こうした非金属介在物の組成についてはＥＰＭＡ調査の項で詳述する。

（４）ビッカース断面硬度：写真19②の金属鉄部の硬度を0.5mm間隔で直線状に測定した。硬度値は129Hv～702Hvであった。③～⑤はその拡大である。低炭素域（③）では軟質で、高炭素域特にマルテンサイト組織部分（④）で硬質傾向が顕著である。

（５）ＥＰＭＡ調査：写真20③に鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶の定量分析値は97.2%FeOであった（分析点41）。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。また淡灰色結晶の定量分析値は68.6%FeO－30.4%SiO_2（分析点42）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO·SiO_2）に同定される。

もう１視野、鉄中非金属介在物の調査を実施した。写真20④に反射電子像（COMP）を示す。淡褐色微結晶は特性Ｘ線像をみるとチタン（Ti）、バナジウム（V）に反応がある。定量分析値は32.5%FeO－16.9%TiO_2－24.2%V_2O_3－8.9%Cr_2O_3－6.9%Al_2O_3－2.7%MgO－2.6%MnO（分析点38）、34.2%FeO－16.3%TiO_2－25.6%V_2O_3－10.0%Cr_2O_3－7.0%Al_2O_3－2.9%MgO－2.7%MnO（分析点39）であった。この結晶の色調・形状は、砂鉄を高温製錬[(2)]した時に生じるシュードブルーカイト（Pseudobrookite：Fe_2O_3·TiO_2）とよく似ているが、バナジウム（V_2O_3）、クロム（Cr_2O_3）など他の元素がかなりの割合で置換している。また素地部分の定量分析値は49.4%SiO_2－16.3%Al_2O_3－9.1%CaO－1.2%MgO－3.0%K_2O－7.9%FeO－5.9%TiO_2（分析点40）であった。非晶質珪酸塩である。低炭素域のウスタイト、高炭素域のチタン酸化物の存在は異材鍛接の可能性が窺える。

当鉄器は非金属介在物中にチタン（TiO_2）の影響が確認され、始発原料が砂鉄（含チタン鉄鉱）であることが明らかとなった。また金属鉄部は局部的に炭素含有量が0.1%以下の低炭素域も存在するが、広い範囲が炭素含有量0.5～0.7%程度の鋼と推定される。さらに熱間で鍛打加工した後に水冷した痕跡も確認された。

ASM－７：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察：平面不整楕円状で143ｇの完形椀形鍛冶滓である。滓の色調は暗灰色で、表層はやや風化気味である。着磁性はごく弱い。また上面は幅10mmほどの木炭痕による凹凸が散在しており、木炭も部分的に残存する。下面には薄く灰褐色の鍛冶炉床土が固着する。

（２）マクロ組織：写真21①に示す。滓中には細かい気孔が散在するが緻密である。下側には部分的に鍛冶炉床土（暗色部）が付着する。

（３）顕微鏡組織：写真21②③に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また③左下は錆化鉄部である。金属鉄組織痕跡は不明瞭で、炭素含有量などを推定する情報は得られなかった。

（４）ビッカース断面硬度：写真21②の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は489Hv、499Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトに同定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は703Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の上限を僅かに上回るが、後述のＥＰＭＡ調査結果からファヤライトに同定される。

（５）ＥＰＭＡ調査：写真21④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。滓中の微小明白色粒は特性Ｘ線像をみると鉄（Fe）にのみ強い反応がある。定量分析値は97.5%Feであった（分析点１）。金属鉄（Metallic Fe）に同定される。また白色粒状結晶は特性Ｘ線像では鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。

定量分析値は 95.0%FeO であった（分析点 11）。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。ウスタイトの周囲の暗色微結晶は特性Ｘ線像をみると鉄（Fe）、アルミニウム（Al）に反応がある。定量分析値は 55.9%FeO − 32.7%Al_2O_3 − 11.6%SiO_2 であった（分析点 12）。微結晶はヘルシナイト（Hercynite：FeO･Al_2O_3）で、定量値は周囲のファヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）の影響を受けたと推測される。淡灰色柱状結晶は特性Ｘ線像では鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は 64.1%FeO − 1.6%MgO − 1.3%MnO − 31.5%SiO_2 であった（分析点 13）。ファヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）で、微量マンガン（MnO）、マグネシア（MgO）を固溶する。また黒色素地部分の定量分析値は 43.5%SiO_2 − 22.3%Al_2O_3 − 5.6%CaO − 7.1%K_2O − 1.8%Na_2O − 16.8%FeO であった。非晶質珪酸塩である。

（６）化学組成分析：第 54 表に示す。全鉄分（Total Fe）49.39% に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.10%、酸化第１鉄（FeO）43.54%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）22.09% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）28.11% で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は 2.18% と低値であった。砂鉄起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.32%、バナジウム（V）が 0.02% である。酸化マンガン（MnO）は 0.62%、銅（Cu）は＜ 0.01% と低値であった。

当鉄滓も製鉄原料（砂鉄）起源の脈石成分（TiO_2、V）の低減傾向が顕著で、鍛錬鍛冶滓に分類される。

ASM − 8：鉄器片（鋳造品）

（１）肉眼観察：表面が茶褐色の土砂に覆われた鉄製品の破片と推定される。やや厚手の板状の片面に筋状の突出部をもち、羽釜の鍔部分の小破片の可能性が考えられる。また非常に軽い質感で特殊金属探知機での反応はなく、完全錆化と判断できる。

（２）マクロ組織：写真 22 ①に示す。写真左上が肉眼観察の項で述べた筋状の突出部、右側は板状の体部にあたる。

（３）顕微鏡組織：写真 22 ②③に示す。金属鉄部は残存していないが、ほぼ全面金属鉄組織の痕跡が観察される。片状黒鉛および蜂の巣状のレデブライトが観察できる斑鋳鉄であった。

ASM − 9：坩堝

（１）肉眼観察：16㎜と厚手で椀状の坩堝または取堝の口縁部破片である。内外面の広い範囲で薄く黒灰色の付着物が確認できるが、全体に熱影響は弱く、溶着金属やその錆化物の付着もみられない。胎土は淡褐色の粘土質で、有機質の混和物や石英、長石類、雲母などの微細な砂粒、スコリアなどが若干含まれる。

（２）マクロ組織：写真 22 ④に示す。内外面とも熱影響はごく弱く、表層部分もガラス質化していない。

（３）顕微鏡組織：写真 22 ⑤に示す。素地は暗黒色の粘土鉱物で、微細な無色・有色鉱物が点在する、

（４）ＥＰＭＡ調査：写真 22 ⑥に内面表層部の反射電子像（COMP）を示す。明白色鉱物の定量分析値は 10.4%Fe − 48.0%Ti − 33.0%O（分析点 6）であった。シュードブルーカイト（Pseudobrookite：Fe_2O_3･TiO_2）と推定される。また明灰色鉱物の定量分析値は 6.3%Na_2O − 5.9%CaO − 61.3%SiO_2 − 27.4%Al_2O_3（分析点 33）、7.9%Na_2O − 4.5%CaO − 63.1%SiO_2 − 25.2%Al_2O_3（分析点 34）であった。斜長石（Plagioclase）に同定される。

さらに特性Ｘ線像では表層部で銅（Cu）に反応がみられる。非常に微細なため定量分析の実施は困難であったが、溶着金属と推定される。

以上のＥＰＭＡ調査結果から、当坩堝は銅（Cu）または銅合金の溶解、鋳造に用いられた可能性が高いと考えられる。

ASM − 10：鉄器（鍛造品）

（１）肉眼観察：薄板状の鍛造鉄器の破片である。表面全体は茶褐色〜黒色の錆に覆われており、表面が一部剥落しているが、特殊金属探知機のＬ（●）で反応があり、内部には金属鉄が良好に残存すると推定される。

（２）マクロ組織：写真 23 ①に示す。金属鉄部を 3% ナイタルで腐食したところ、ほぼ均質な亜共析組織が確認された。

（３）顕微鏡組織：写真 23 ②〜④に示す。素地部分は黒色層状のパーライトで、白色針状のフェライトが析出する。炭素含有量は 0.6% 前後の鋼と推定される。

（４）ビッカース断面硬度：写真 23 ②〜④の金属鉄部の硬度を測定した。硬度値は 205 〜 244Hv であっ

た。組織に見合った値である。

（５）ＥＰＭＡ調査：写真 23 ⑤に非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。微細な淡褐色結晶は特性Ｘ線像をみるとチタン（TiO_2）に反応がある。定量分析値は 21.1%FeO － 75.2%TiO_2 － 1.7%Al_2O_3 － 1.5%V_2O_3 － 1.1%MgO（分析点 16）、38.9%FeO － 52.7%TiO_2 － 1.5%Al_2O_3 － 1.9%MnO － 1.3%MgO（分析点 18）であった。前者はシュードブルーカイト（Pseudobrookite：Fe_2O_3･TiO_2）、後者はイルミナイト（Ilmenite：FeO･TiO_2）と推定される。さらに素地部分の定量分析値は 52.0%SiO_2 － 10.5%Al_2O_3 － 6.7%CaO － 2.6%K_2O － 11.7%FeO － 7.4%TiO_2（分析点 17）であった。非晶質珪酸塩で、鉄分（FeO）やチタン（TiO_2）を含んでいる。

もう１視野非金属介在物の調査を実施した。写真 17 ⑥に非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。淡灰色柱状結晶の定量分析値は 69.1%FeO － 31.7%SiO_2 であった（分析点 20）ファヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）に同定される。素地の暗色部の定量分析値は 43.5%SiO_2 － 14.2%Al_2O_3 － 5.0%CaO － 4.4%K_2O － 26.7%FeO － 1.7%TiO_2（分析点 19）であった。非晶質珪酸塩で鉄分（FeO）の割合が高い。また微細な淡茶褐色結晶が凝集して晶出する領域の定量分析値は 60.2%FeO － 22.6%TiO_2 － 12.3%SiO_2 － 2.7%Al_2O_3（分析 21）であった。微結晶はウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO･TiO_2）に近い組成で、その周囲は非晶質珪酸塩と推定される。

当鉄器も鉄器片（ASM － ６）と同様、非金属介在物中のチタン（TiO_2）の影響が顕著であり、始発原料が砂鉄（含チタン鉄鉱）であることが明らかとなった。また金属鉄部は炭素含有量 0.6% 前後の均質な鋼であった。

ASM － 11：鉄器片（鋳造品）

（１）肉眼観察：板状の鋳造鉄器の破片である。側面は全面破面で、鉄器片（ASM － ５）のように下端部が緩やかに湾曲している。鉄鍋などの器物の体部から底部にかけての破片の可能性が高い。特殊金属探知機のＬ（●）で反応があり、内部には金属鉄の良好残存が推定される。

（２）マクロ組織：写真 24 ①に示す。表層は錆化しているが、内部には金属鉄が残存する。また内部には非常に細かい気孔（鋳巣）が散在する。

（３）顕微鏡組織：写真 24 ②③に示す。３％ナイタルで腐食したところ、ほぼ全面黒色層状のオーステナイト（常温でパーライト）の初晶と地はレデブライトの亜共晶組成白鋳鉄組織が確認された。

（４）ビッカース断面硬度：写真 24 ③の金属鉄部の硬度を測定した。白色蜂の巣状のレデブライト硬度値は 688Hv、702Hv、板状セメンタイトの硬度値は 613Hv と非常に硬質であった。組織に見合った値といえる。

（５）ＥＰＭＡ調査：写真 24 ④に鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。鉄中の微小黄褐色粒は特性Ｘ線像をみると硫黄（S）に強く、チタン（Ti）に弱い反応がある。定量分析値は 60.6%Fe － 1.3%Ti － 34.0%S（分析点２）、60.2%Fe － 1.2%Ti － 35.7%S（分析点３）であった。硫化鉄（FeS）で微量チタン（TiO_2）を固溶する。また周囲の金属鉄部は燐（P）に弱い反応がある。定量分析値は 96.8%Fe － 0.9%P（分析点３）、98.7%Fe － 0.9%P（分析点４）と若干燐（P）を固溶する。

上述のように硫化鉄中に微量チタン（TiO_2）の影響が確認されたことから、当鉄器の始発原料は砂鉄の可能性が高いと考えられる。

ｄ　まとめ

朝見遺跡から出土した、平安時代前期後半～後期と推定される鍛冶関連遺物を調査した結果、当遺跡では製鉄原料起源の不純物が充分除去された状態の鉄素材（新鉄）または廃鉄器（古鉄）が鍛冶原料として搬入されており、熱間加工による鍛造鉄器製作が推定される。詳細は以下の通りである。

〈１〉椀形鍛冶滓（ASM －１、２、３－２、７）はすべて鍛錬鍛冶滓に分類される。いずれも製鉄原料起源の脈石成分の低減傾向が顕著で、始発原料について言及することは難しい。ただし後述する鍛造鉄器（ASM － ６、10）、鋳造鉄器（ASM － 11）は鉄中非金属介在物中にチタン（Ti）の影響が確認できて、始発原料は砂鉄系と判断される。

古代の近畿～東海地域では、特に近江で塊状の鉄鉱石を製鉄原料とした鉄生産の活況が知られている。しかし平安時代に入ると近江では製鉄遺跡がほとんどみられなくなり、この時期には他地域より搬

入された砂鉄を始発原料とする鉄素材（新鉄）または廃鉄器の流通が推測される。

〈2〉鉄塊系遺物（ASM－3－1）は付着滓の鉱物組成から、鍛冶処理途中の小鉄塊と推定される。鉄中炭素含有量は1.5%程度の高炭素鋼で、硬さや焼入れ性を要求される刃金原料に適した性状といえる。

〈3〉今回調査を実施した鉄製品6点のうち、2点（ASM－6､10）は鍛造品であった。どちらも鋼で、ASM－6には水焼入れが施されていた。これらの製品が当遺跡で製作されたものであれば、用途に応じ熱処理を実施していたものと考えられる。

また鉄中非金属介在物中には、イルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）、シュードブルーカイト（Pseudobrookite：$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）など、砂鉄を高温製錬した時に生じる反応副生物が確認された。この特徴から、これらの鍛造鉄器は鋳造鉄器の破片（廃鉄器）を鍛冶原料としたものではないと判断される。

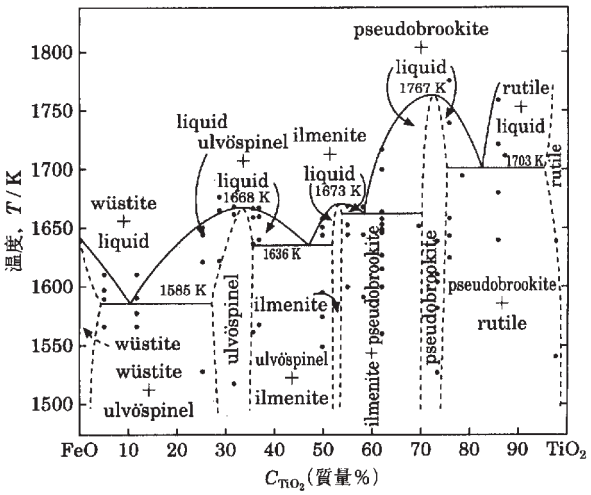
〈4〉鉄製品4点（ASM－4、5、8、11）は鋳造鉄器破片であった。鉄鍋・釜などの鉄鋳物が一般に普及するようになると、その小破片が鍛冶原料としても利用されるようになり、鍛冶関連遺物としばしば共伴する。当遺跡はなかでも比較的早い時期の事例として注目される。

〈5〉坩堝（ASM－9）は熱影響が弱く、溶解した金属に関する情報が乏しかったが、ＥＰＭＡ調査の結果、非常に微細な銅（Cu）の付着が確認できた。銅（または銅合金）の溶解、鋳造に用いられたことが明らかとなった。　（大澤正己･鈴木瑞穂）

〔註〕

(1) 日刊工業新聞社1968『焼結鉱組織写真および識別法』ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、チタン（TiO_2）を固溶するため、同じスピネル類のマグネタイトよりも硬質である。通常600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。鉄（FeO）とアルミナ（Al_2O_3）からなるヘルシナイトはさらに硬質で1000Hv前後に達する場合も多い。

(2) J.B.Mac chesney and A. Murau：American Mineralogist, 46（1961）, 572
イルミナイト（Ilmenite:$FeO \cdot TiO_2$）、シュードブルーカイト（Pseudobrookite:$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）、ルチル（Rutile:TiO_2）の晶出はFeO－TiO_2二元平衡状態図から高温化操業が推定される。



第109図　FeO-TiO_2二元平衡状態図

7　赤色顔料分析

a　はじめに

朝見遺跡（第2次）7－4区ＳＤ49から出土した灰釉陶器（1246）は、底部外面に「葉」が記された墨書土器であるが、内面には赤彩が観察され、朱墨の転用硯と推測される。

この朱墨について、三重県立博物館において蛍光Ｘ線を用いた元素同定による分析調査を実施し、赤色顔料がベンガラ・水銀朱のいずれかであるかの判別を試みた。

b　分析方法および使用機器

分析は、三重県立博物館の間渕創氏に依頼した。使用機器は携帯型蛍光Ｘ線分析装置（Thermo Scientific社製 NITON XL3t-950S）で、資料の赤彩部分の定性分析を行なった。

c　結果

赤彩部分の定性分析では、スペクトルでは、鉄（Fe-K α：6.40keV､-K β：7.06keV）および水銀（Hg-L α：9.99keV、-L β：11.82keV）が検出された。次に、赤彩の施されていない胎土を分析したところ、水銀は検出されず鉄のみがみられ、鉄は赤彩部分とほぼ同じ比率であった。

したがって、赤彩部分でみられた水銀から、資料（1246）の表面に付着した赤彩は、水銀系赤色顔料であると推定される。　（相場）

第 54 表　出土鍛冶・鋳造関連遺物の化学組成

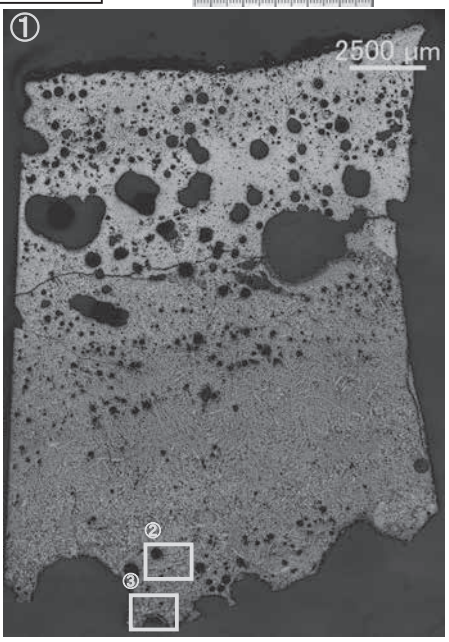
符号	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第１鉄 (FeO)	酸化第２鉄 (Fe_2O_3)	* 二酸化珪素 (SiO_2)	* 酸化ｱﾙﾐﾆｳﾑ (Al_2O_3)	* 酸化ｶﾙｼｳﾑ (CaO)	* 酸化ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ (MgO)	* 酸化ｶﾘｳﾑ (K_2O)	* 酸化ﾅﾄﾘｳﾑ (Na_2O)	酸化ﾏﾝｶﾞﾝ (MnO)	二酸化ﾁﾀﾝ (TiO_2)	酸化ｸﾛﾑ (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	ﾊﾞﾅｼﾞｳﾑ (V)	銅 (Cu)	二酸化ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ (ZrO2)	Σ * 造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe
ASM-1	ＳＤ47上層	椀形鍛冶滓	平安前期後半～後期	59.89	0.14	55.40	23.86	12.70	3.16	0.89	0.63	0.85	0.60	0.13	0.18	0.03	0.02	0.58	0.10	0.01	<0.01	0.01	18.83	0.314	0.003
ASM-2		椀形鍛冶滓		58.72	0.06	39.02	40.51	9.63	2.93	0.58	0.36	0.17	0.29	0.33	0.20	0.02	0.03	0.71	0.25	0.01	<0.01	0.02	13.96	0.238	0.003
ASM-3-2		椀形鍛冶滓		56.28	0.33	41.67	33.69	9.45	2.52	0.34	0.29	0.07	0.21	0.17	0.26	0.03	0.03	0.69	0.58	0.02	<0.01	0.02	12.88	0.229	0.005
ASM-7	SD47上層	椀形鍛冶滓		49.39	0.10	43.54	22.09	19.40	5.06	1.30	0.88	0.95	0.52	0.62	0.32	0.07	0.02	0.99	0.38	0.02	<0.01	0.01	28.11	0.569	0.006

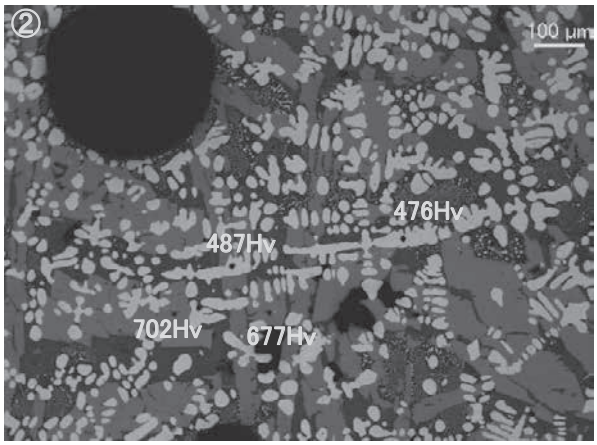
第 55 表　出土鍛冶・鋳造関連遺物調査結果のまとめ

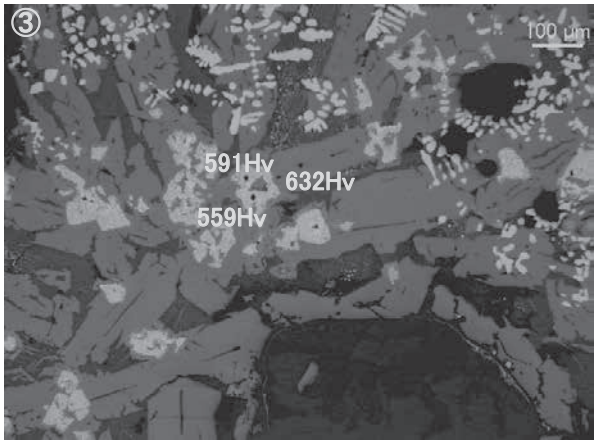
符号	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%） Total Ｆｅ	Ｆｅ２０３	塩基性成分	Ｔｉ０２	Ｖ	Ｍｎ０	造滓成分	Ｃｕ	所見
ASM-1	ＳＤ47上層	椀形鍛冶滓	平安前期後半～後期	滓部:W+M+H＋F	59.89	23.86	1.52	0.18	0.01	0.13	18.83	<0.01	鍛錬鍛冶滓
ASM-2		椀形鍛冶滓		滓部:W+F、錆化鉄部:亜共析(<0.77%C)組織痕跡	58.72	40.51	0.94	0.20	0.01	0.33	13.96	<0.01	鍛錬鍛冶滓
ASM-3-1		鉄塊系遺物		滓部:W、金属鉄部:過共析(>0.77%C)組織	－	－	－	－	－	－	－	－	鍛冶処理途中の原料鉄、高炭素鋼で硬さ・焼入れ性を要求される刃金原料に適する
ASM-3-2		椀形鍛冶滓		滓部:W+F、錆化鉄部:金属組織痕跡不明瞭	56.28	33.69	0.63	0.26	0.02	0.17	12.88	<0.01	鍛錬鍛冶滓
ASM-4	ＳＤ47上層	鉄器片（鋳造品）		錆化鉄部:斑鋳鉄組織痕跡	－	－	－	－	－	－	－	－	鋳造鉄器片（鍛冶原料鉄か）
ASM-5		鉄器片（鋳造品）		錆化鉄部:共晶組成白鋳鉄組織痕跡	－	－	－	－	－	－	－	－	鋳造鉄器片（鍛冶原料鉄か）
ASM-6		鉄器片（鍛造品）		非金属介在物:W、Ps、 金属鉄部:ﾌｪﾗｲﾄ・ﾊﾟｰﾗｲﾄ・ﾏﾙﾃﾝｻｲﾄ	－	－	－	－	－	－	－	－	鍛造鉄器片（始発原料:砂鉄、高温製錬、水冷痕跡）
ASM-7	SD47上層	椀形鍛冶滓		滓部:W+F、錆化鉄部:金属組織痕跡不明瞭	49.39	22.09	2.18	0.32	0.02	0.62	28.11	<0.01	鍛錬鍛冶滓
ASM-8	SD47最上層	鉄器片（鋳造品）		錆化鉄部:斑鋳鉄組織痕跡	－	－	－	－	－	－	－	－	鋳造鉄器片（鍛冶原料鉄か）
ASM-9	SD32	坩堝	近世？	素地:粘土鉱物、無色・有色鉱物混在	－	－	－	－	－	－	－	－	銅（または青銅）の溶解・鋳造に用いられた可能性が高い
ASM-10	SD47最上層	鉄製品（鍛造品）	平安前期後半～後期	非金属介在物:Ps+I、U、F、 金属鉄部:亜共析組織	－	－	－	－	－	－	－	－	鍛造鉄器片（C:0.6%程度の鋼、 始発原料:砂鉄、高温製錬）
ASM-11	SD47上層	鉄器片（鋳造品）		非金属介在物:硫化鉄、 金属鉄部:亜共晶組成白鋳鉄組織	－	－	－	－	－	－	－	－	鋳造鉄器片（始発原料:砂鉄の可能性が高い、 鍛冶原料鉄か）

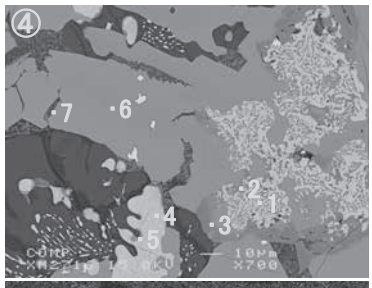
W:Wustite（FeO）、M:Magnetite（Fe_3O_4）、H:Hercynite（$FeO \cdot Al_2O_3$）、F:Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）、Ps:Pseudobrookite（$Fe_2O_3 \cdot TiO_2$）、I:Ilmenite（$FeO \cdot TiO_2$）、U:Ulvöspinel（$2FeO \cdot TiO_2$）

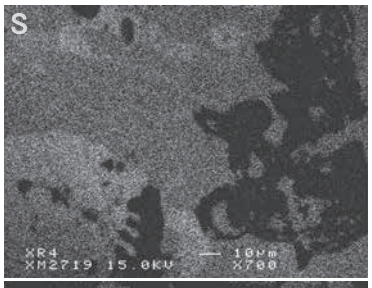
ASM−1
椀形鍛冶滓
①マクロ組織
②滓部:ウスタイト(微細ヘルシナイト・ファヤライト
③滓部(下面表層):マグネタイト・ファヤライト
硬度:荷重50gf

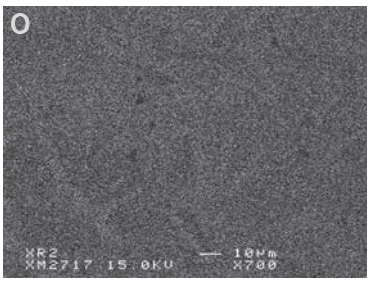


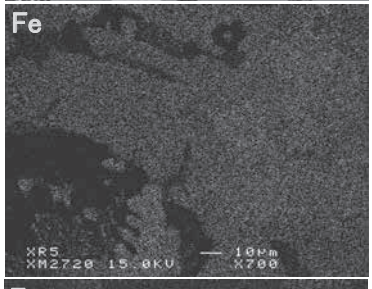


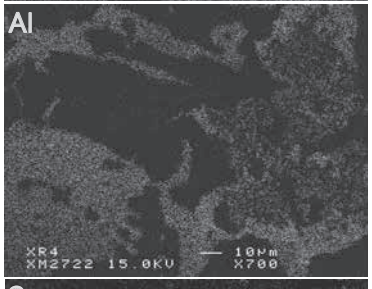












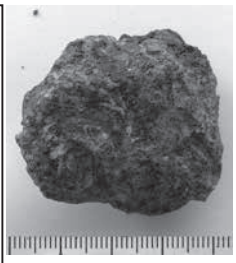
滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

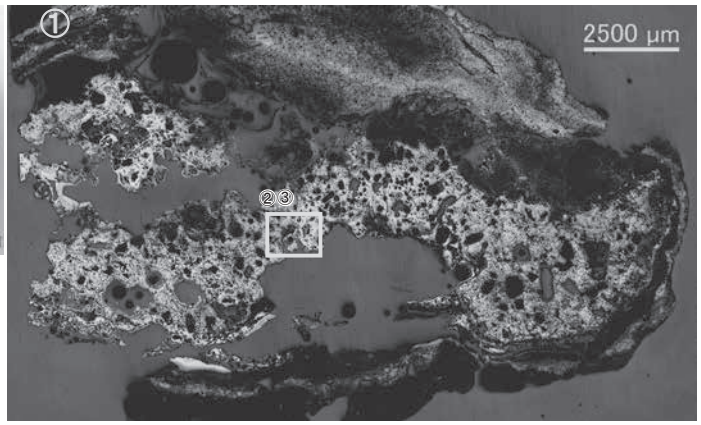
定量分析値

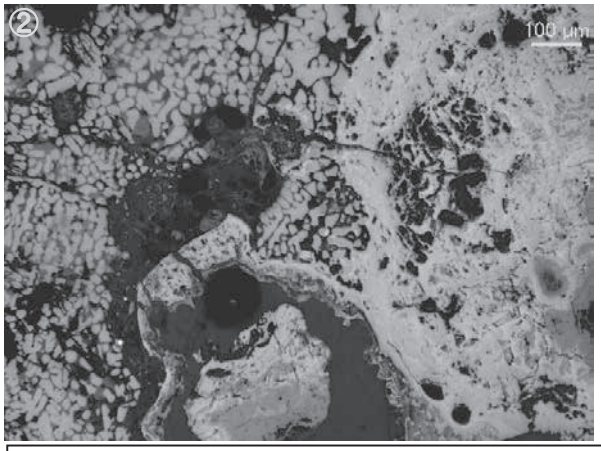
Element	1	2	3	4	5	6	7
Na_2O	0.043	0.041	0.075	0.025	0.060	–	8.173
MgO	0.127	0.133	0.169	0.017	0.070	1.468	0.008
Al_2O_3	4.041	32.213	44.217	0.493	27.353	0.142	25.374
SiO_2	0.442	0.438	0.159	0.352	6.342	31.053	41.729
P_2O_5	–	–	0.024	–	–	0.034	3.544
S	–	0.006	0.003	–	–	0.003	0.034
K_2O	–	–	0.045	0.097	0.862	0.029	0.836
CaO	–	–	–	–	–	0.157	7.242
TiO_2	0.801	1.624	0.964	0.613	5.317	0.009	0.521
Cr_2O_3	–	0.149	0.068	–	0.009	0.052	–
MnO	0.060	0.038	0.047	0.019	0.050	0.077	–
FeO	94.744	61.291	52.839	95.265	60.760	67.909	12.638
As_2O_5	–	0.116	0.328	–	0.144	–	–
V_2O_3	0.035	0.143	0.049	0.045	0.109	0.009	0.022
PbO	0.034	0.035	–	0.011	0.079	–	–
CuO	–	0.007	0.034	–	–	0.075	0.011
SnO_2	–	0.036	0.018	–	0.018	–	–
MoO_3	0.071	–	–	–	–	0.017	–
Total	100.398	96.270	99.039	96.937	101.173	101.034	100.132

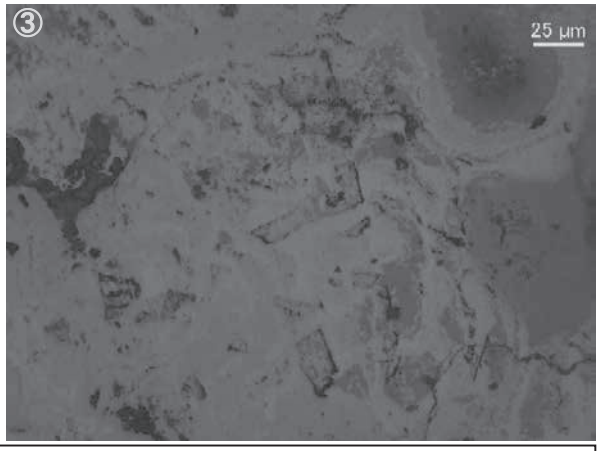
写真 14　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果

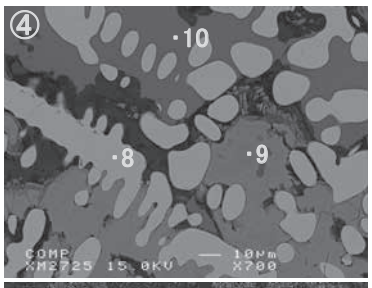
ASM-2
椀形鍛冶滓
①ﾏｸﾛ組織
②③滓部:ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ、錆化鉄部:亜共析組織痕跡残存
〔白色粒状結晶
硬度:432Hv、451Hv、ｳｽﾀｲﾄ(荷重:50gf)〕

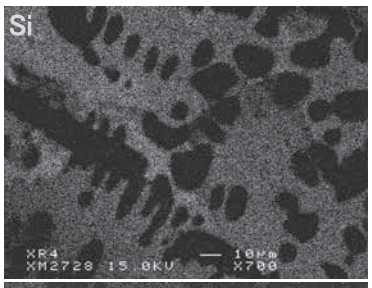


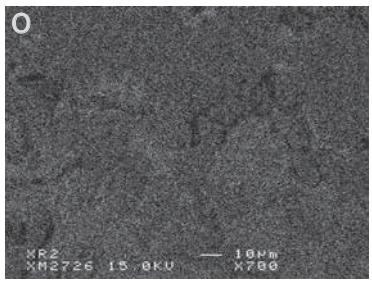


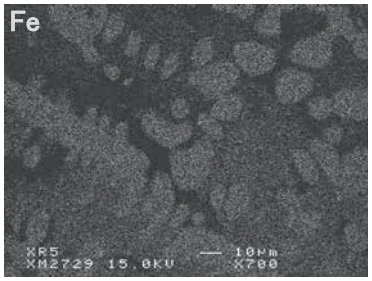


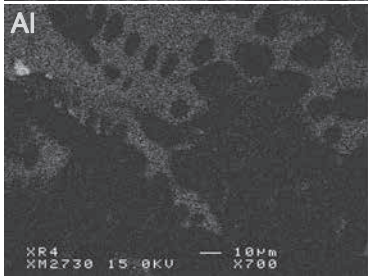


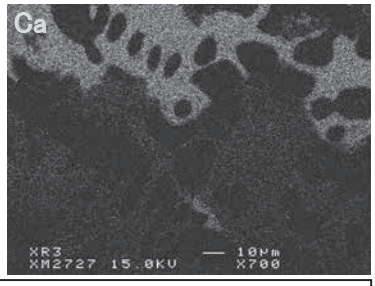












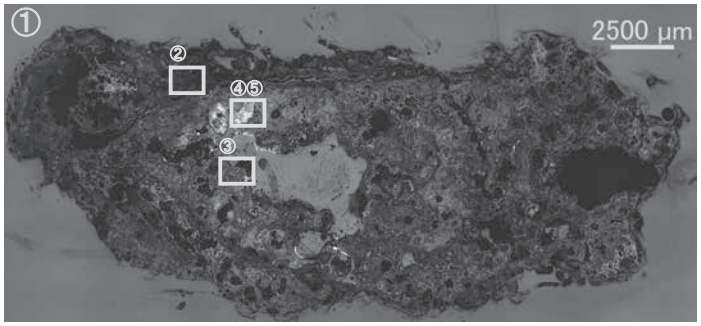
滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

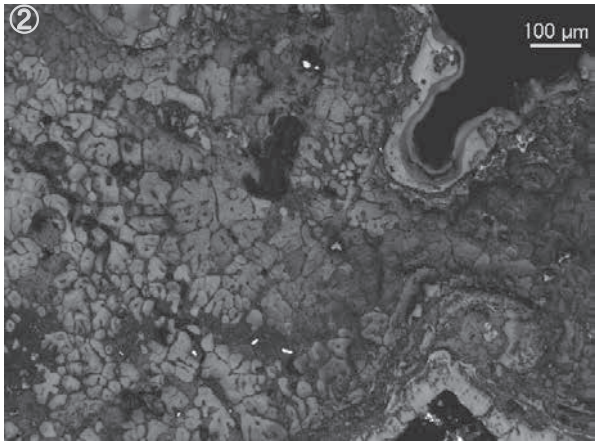
定量分析値

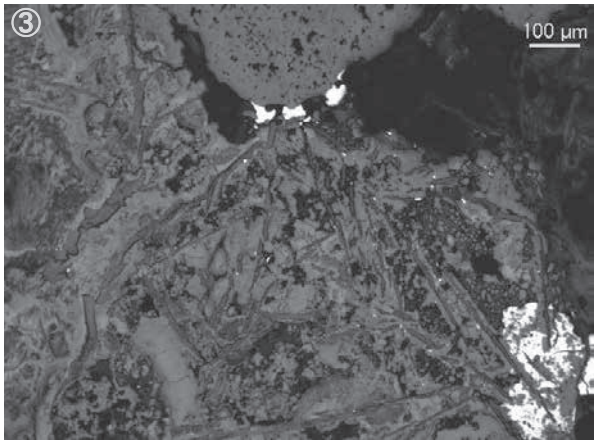
Element	8	9	10
Na_2O	–	0.031	3.844
MgO	0.080	1.041	0.051
Al_2O_3	0.999	0.816	17.125
SiO_2	0.217	32.104	37.684
P_2O_5	0.014	0.381	1.928
S	0.008	0.005	0.191
K_2O	–	–	2.401
CaO	–	0.561	9.618
TiO_2	0.634	0.013	0.228
Cr_2O_3	–	0.027	0.010
MnO	0.452	1.182	0.319
FeO	95.969	58.146	23.537
As_2O_5	0.235	0.204	–
V_2O_3	0.020	0.001	0.004
PbO	–	0.011	0.028
CuO	–	0.110	–
SnO_2	–	–	–
MoO_3	–	0.183	–
Total	98.628	94.816	96.968

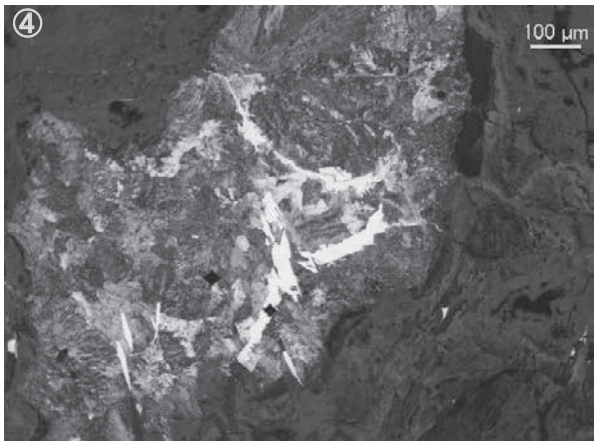
写真 15　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果

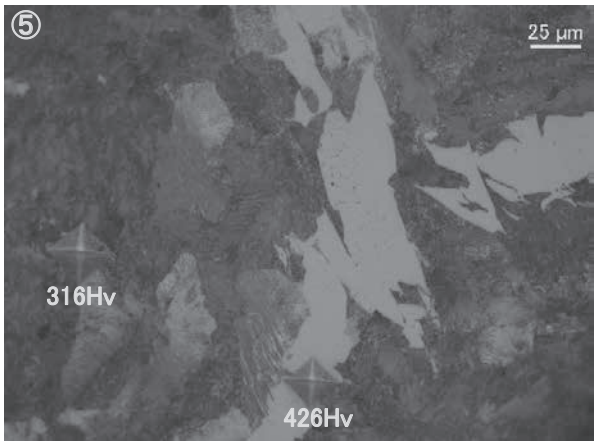
ASM-3-1
鉄塊系遺物
①ﾏｸﾛ組織
②滓部:ｳｽﾀｲﾄ、③錆化鉄部:過共析組織痕跡④⑤金属鉄部:ﾅｲﾀﾙetch過共析組織。硬度:荷重200gf

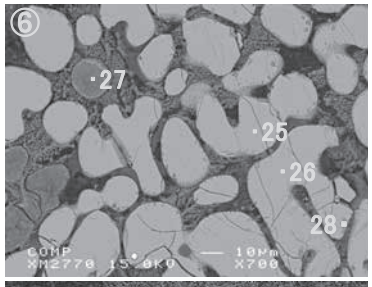


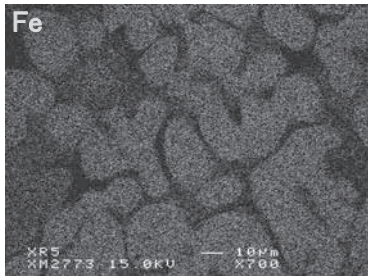


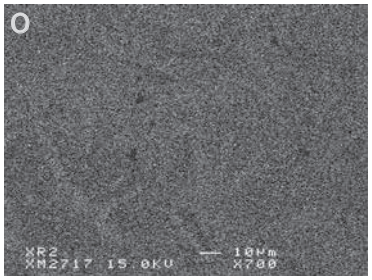












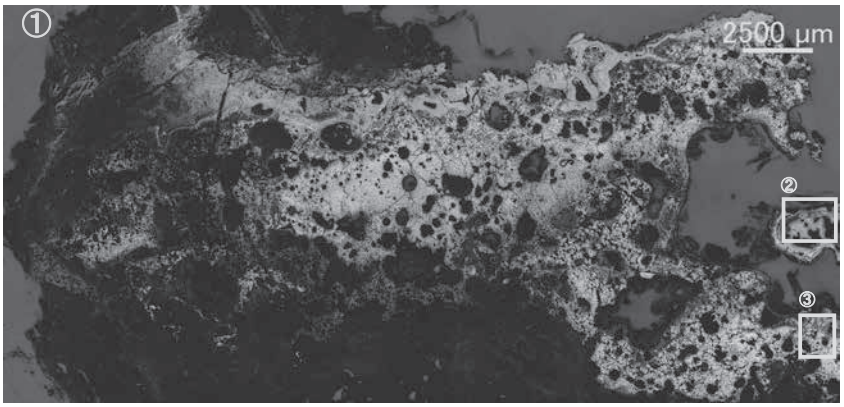
滓部の反射電子像（COMP）および特性X線像

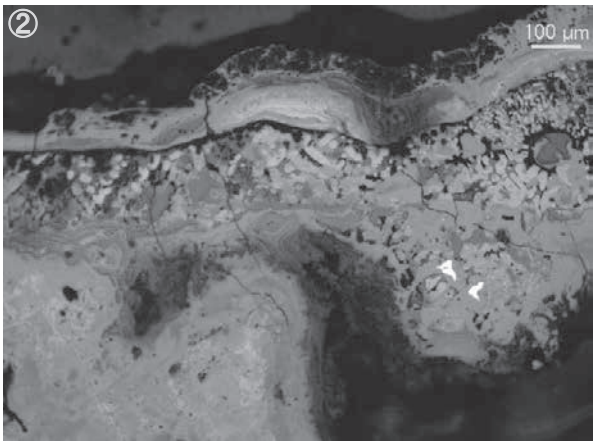
定量分析値

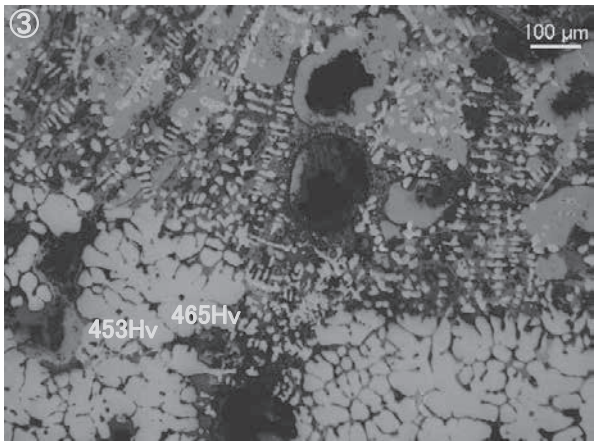
Element	25	26	27	28
Na_2O	0.081	0.087	0.087	0.047
MgO	0.347	0.354	0.271	0.397
Al_2O_3	–	0.008	3.712	2.214
SiO_2	0.122	0.121	5.858	6.891
P_2O_5	–	–	0.284	0.203
S	0.005	0.003	0.275	0.011
K_2O	–	–	0.012	0.031
CaO	–	–	0.025	0.068
TiO_2	0.211	0.165	0.421	0.224
Cr_2O_3	0.012	–	0.049	–
MnO	0.292	0.299	0.143	0.206
FeO	98.688	97.740	67.670	81.877
As_2O_5	–	0.185	–	–
V_2O_3	–	0.033	0.069	0.018
PbO	0.051	0.006	–	–
CuO	0.103	0.057	–	–
SnO_2	–	0.005	–	–
MoO_3	0.094	–	0.064	–
Total	100.006	99.063	78.940	82.187

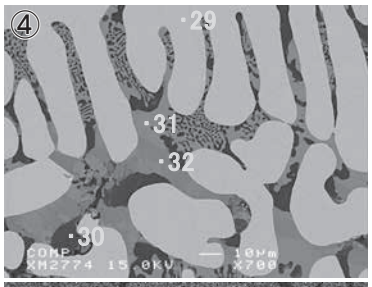
写真 16　鉄塊系遺物の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果

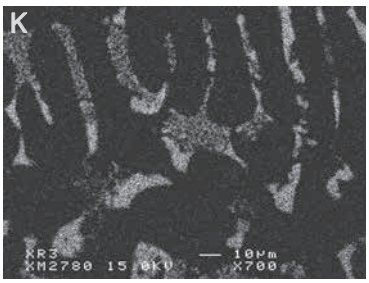
ASM−3−2
椀形鍛冶滓
②③滓部:ウスタイト・ファヤライト、微小金属鉄、銹化鉄（金属組織痕跡不明瞭）
硬度;荷重50gf

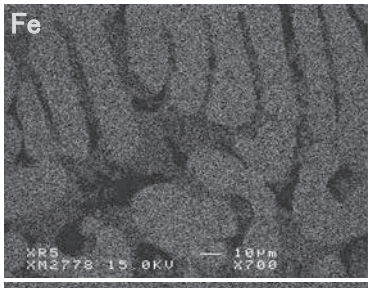


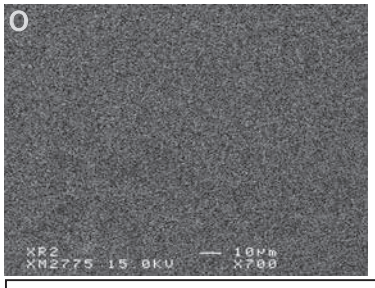


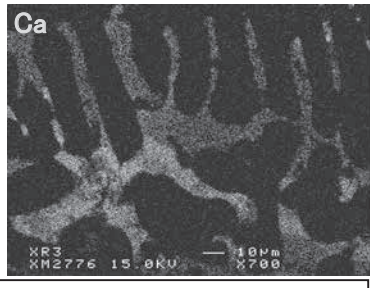












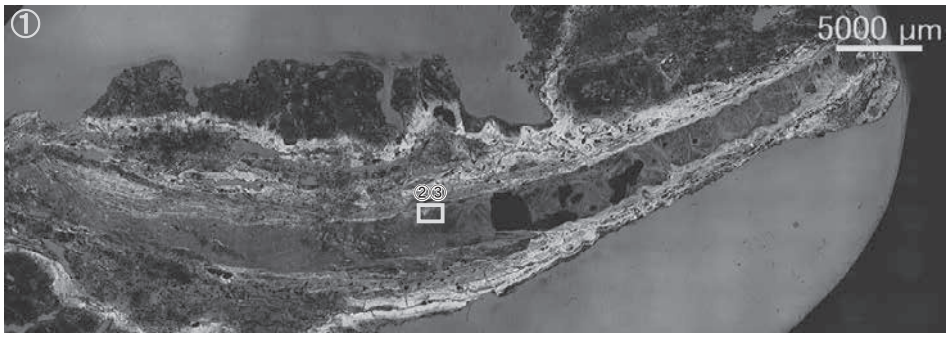
滓部の反射電子像（COMP）および特性X線像

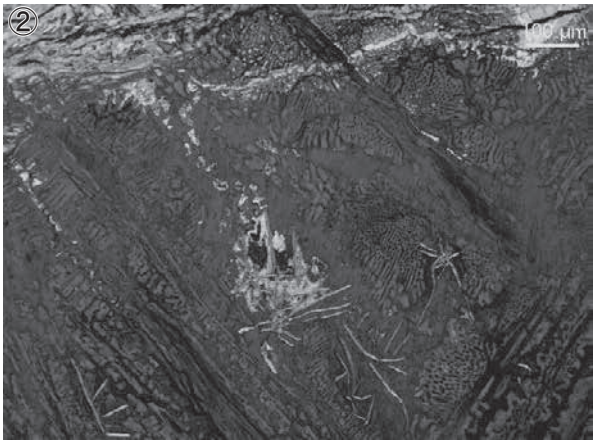
定量分析値

Element	29	30	31	32
Na_2O	0.081	0.380	−	0.220
MgO	0.057	0.002	0.884	0.455
Al_2O_3	0.222	26.022	0.031	0.032
SiO_2	0.227	63.725	31.446	32.058
P_2O_5	0.044	0.061	0.050	0.328
S	0.009	0.006	0.002	−
K_2O	0.014	8.539	0.030	0.040
CaO	−	0.050	4.548	14.460
TiO_2	0.184	−	0.007	0.024
Cr_2O_3	0.047	0.011	−	0.052
MnO	0.089	−	0.434	0.323
FeO	99.069	1.890	62.439	47.081
As_2O_5	0.185	−	−	−
V_2O_3	0.026	−	−	−
PbO	−	−	−	−
CuO	0.107	0.058	−	0.045
SnO_2	0.097	−	−	−
MoO_3	0.008	−	−	−
Total	100.466	100.744	99.871	95.118

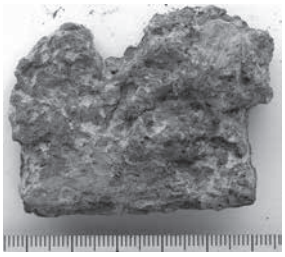
写真 17　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果

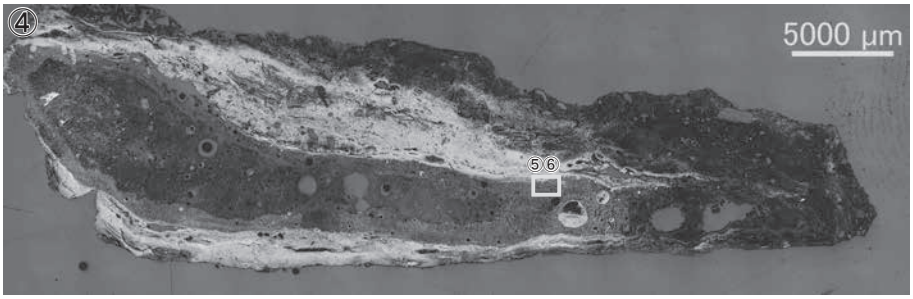
ASM-4
鉄器片（鋳造品）
①ﾏｸﾛ組織
②③斑鋳鉄組織痕跡

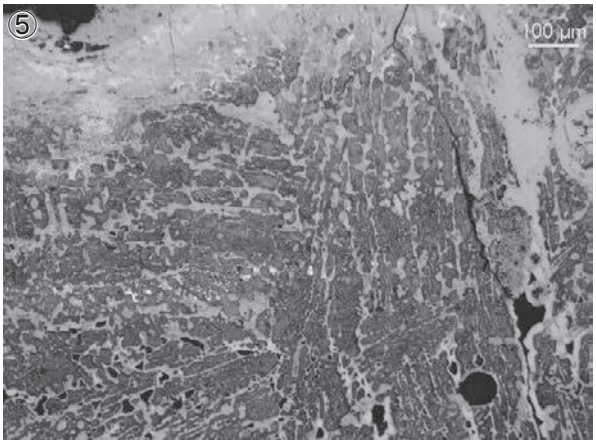




ASM-5
鉄器片（鋳造品）
④ﾏｸﾛ組織
⑤⑥亜共晶組成白鋳鉄
組織痕跡







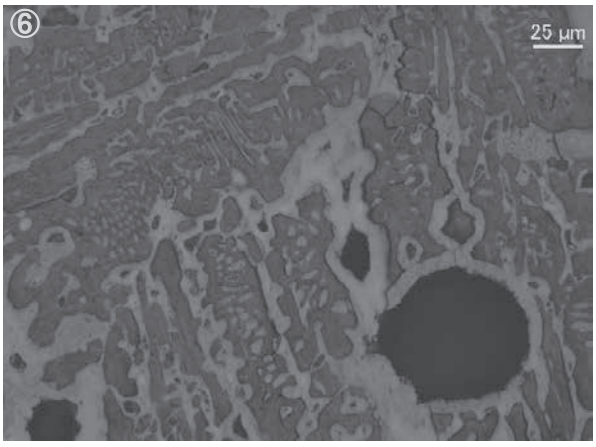
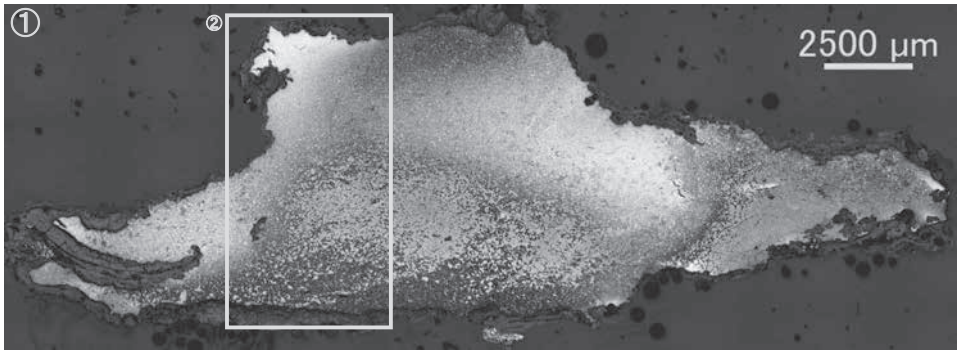
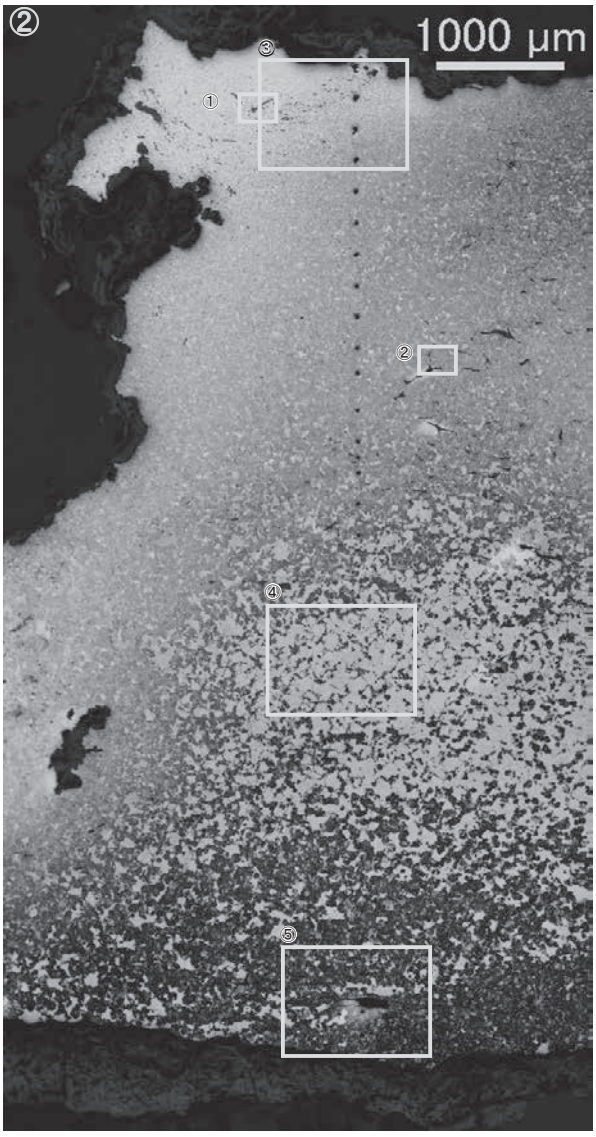
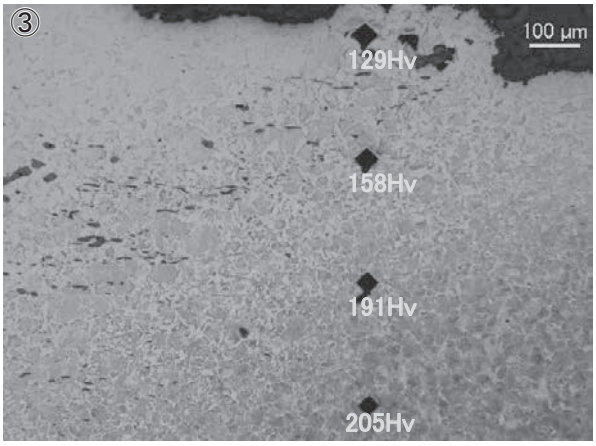


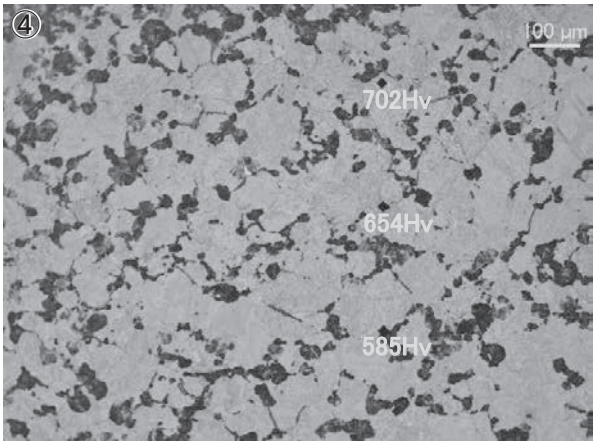
写真 18　鉄器片（鋳造品）の顕微鏡組織

ASM-6
鉄器（鍛造品）
①ﾏｸﾛ組織
②～⑤金属鉄部:ﾅｲﾀﾙ etch
低炭素域:ﾌｪﾗｲﾄ･ﾍﾞｲﾅｲﾄ
高炭素域:針状ﾌｪﾗｲﾄ･微細ﾊﾟｰﾗｲﾄ･ﾏﾙﾃﾝｻｲﾄ
写真20①②非金属介在物









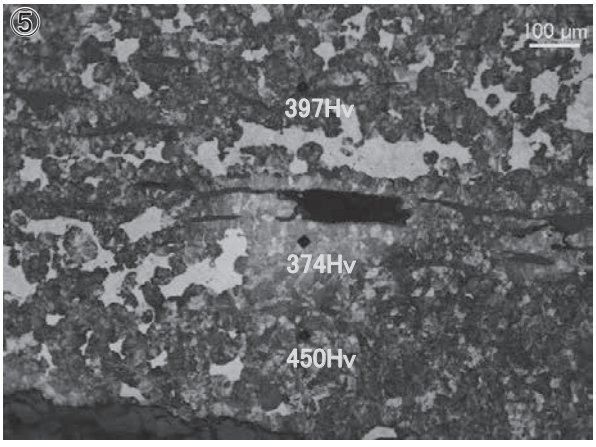
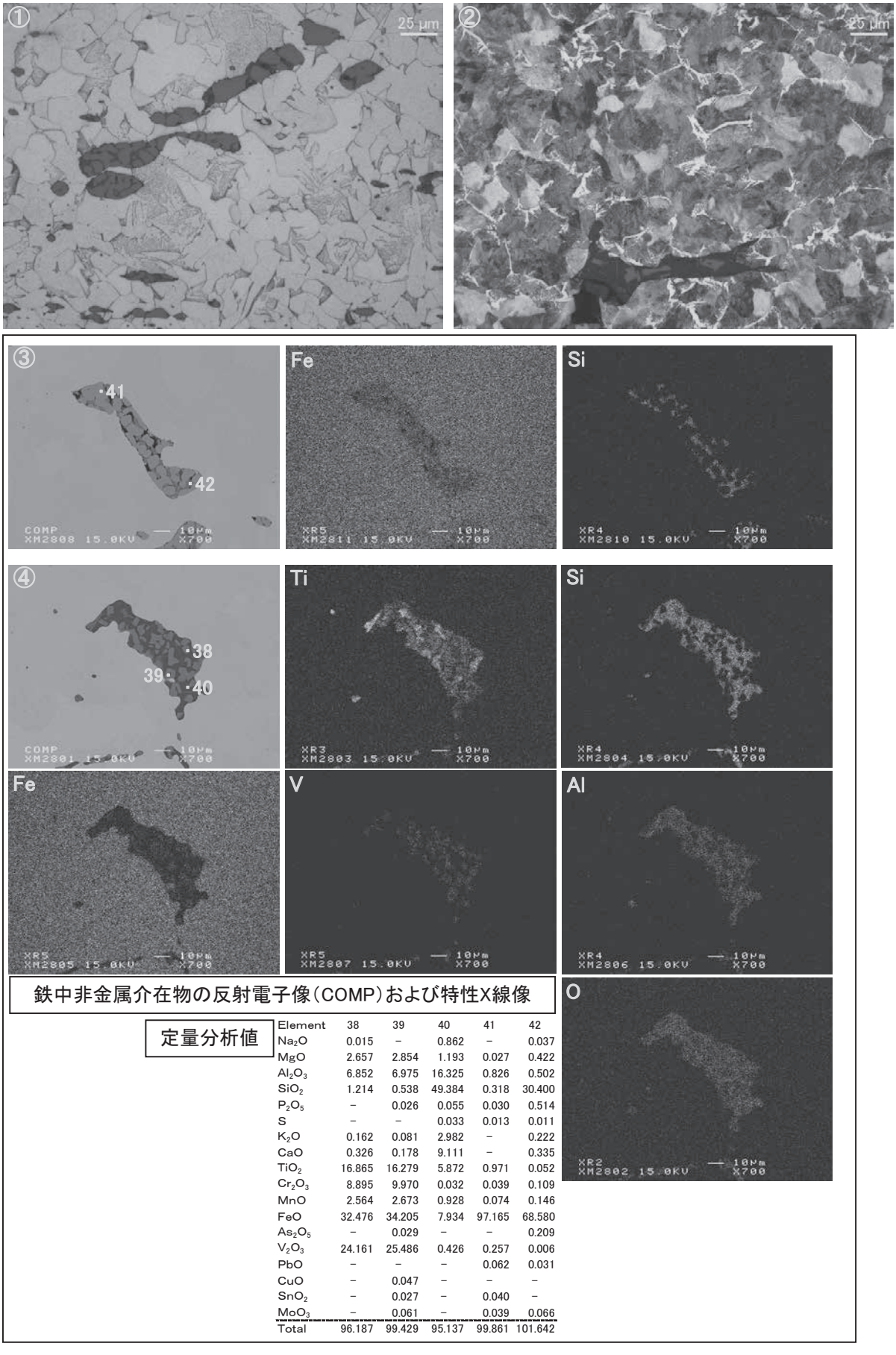


写真 19　鉄器片（鍛造品）滓の顕微鏡組織



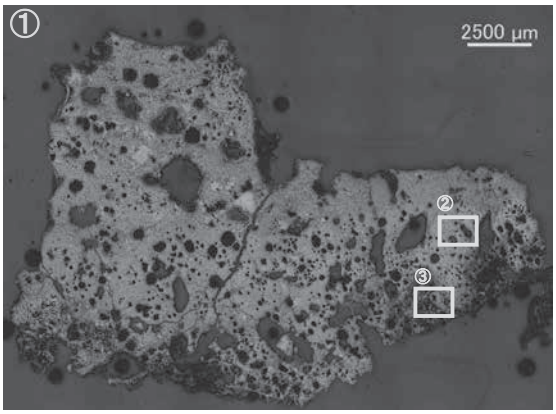
鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）および特性X線像

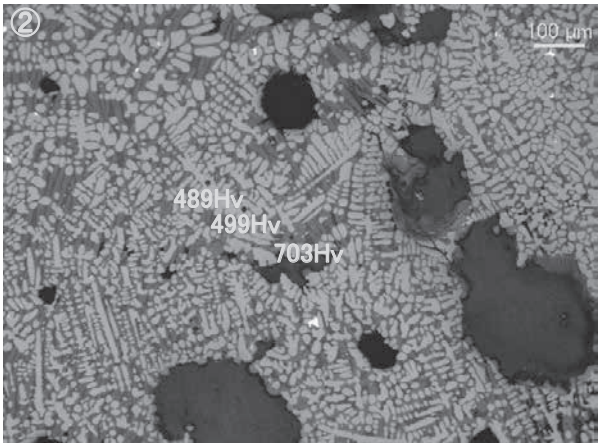
定量分析値

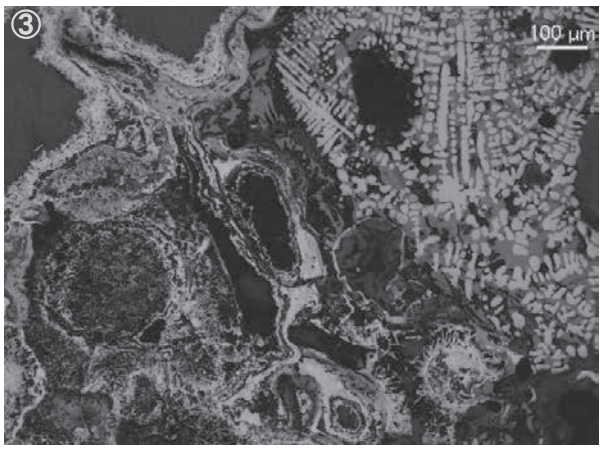
Element	38	39	40	41	42
Na_2O	0.015	–	0.862	–	0.037
MgO	2.657	2.854	1.193	0.027	0.422
Al_2O_3	6.852	6.975	16.325	0.826	0.502
SiO_2	1.214	0.538	49.384	0.318	30.400
P_2O_5	–	0.026	0.055	0.030	0.514
S	–	–	0.033	0.013	0.011
K_2O	0.162	0.081	2.982	–	0.222
CaO	0.326	0.178	9.111	–	0.335
TiO_2	16.865	16.279	5.872	0.971	0.052
Cr_2O_3	8.895	9.970	0.032	0.039	0.109
MnO	2.564	2.673	0.928	0.074	0.146
FeO	32.476	34.205	7.934	97.165	68.580
As_2O_5	–	0.029	–	–	0.209
V_2O_3	24.161	25.486	0.426	0.257	0.006
PbO	–	–	–	0.062	0.031
CuO	–	0.047	–	–	–
SnO_2	–	0.027	–	0.040	–
MoO_3	–	0.061	–	0.039	0.066
Total	96.187	99.429	95.137	99.861	101.642

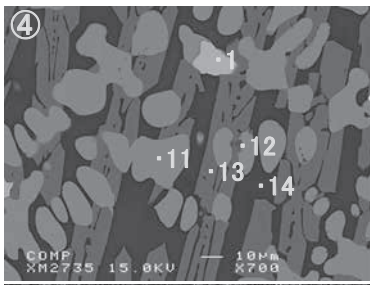
写真 20　鉄器片（鍛造品）の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果

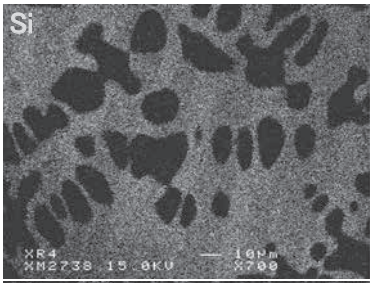
ASM−7
椀形鍛冶滓
①ﾏｸﾛ組織
②滓部:ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ、硬度:荷重50gf
③滓部:ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ、銹化鉄部:金属組織痕跡不明瞭

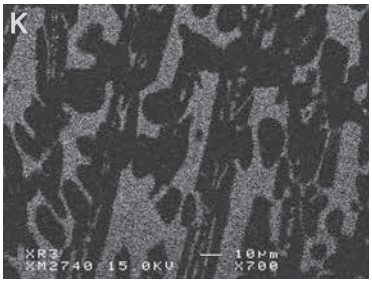


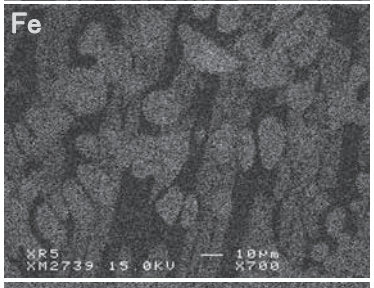


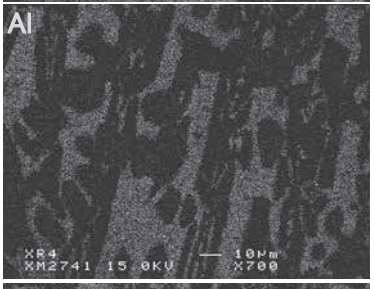


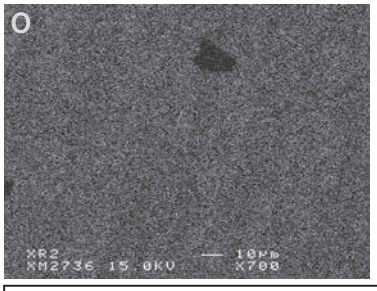


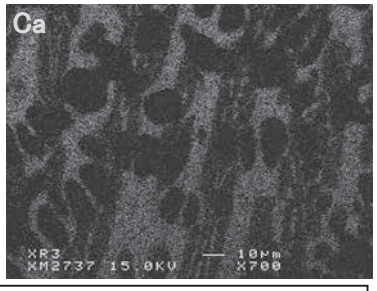












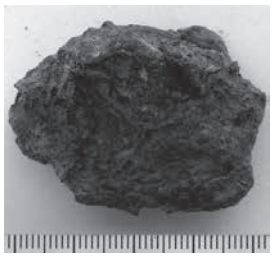
滓部の反射電子像（COMP）および特性X線像

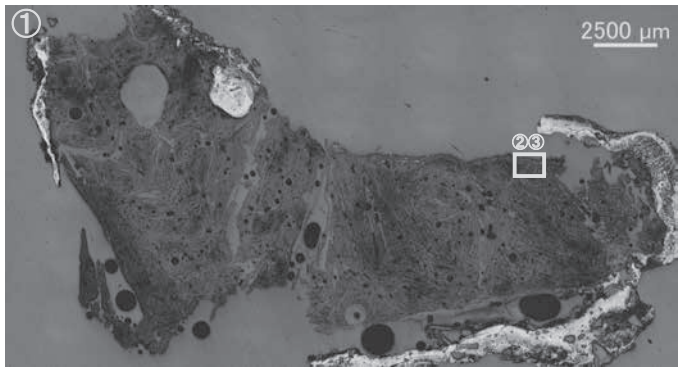
定量分析値

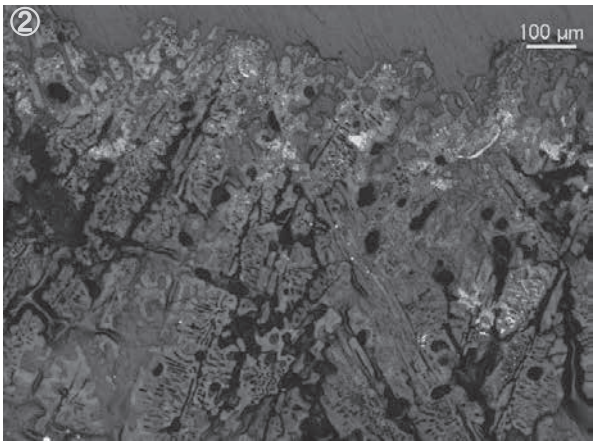
Element	11	12	13	14	Element	1
Na_2O	0.043	−	0.068	1.772	Cu	0.050
MgO	0.133	0.577	1.585	0.025	Pb	0.012
Al_2O_3	1.112	32.701	0.165	22.299	Sn	−
SiO_2	0.187	11.590	31.451	43.459	Zn	0.081
P_2O_5	−	0.203	0.032	1.027	Fe	97.494
S	−	0.007	0.011	0.094	As	0.074
K_2O	0.031	0.019	0.093	7.144	Sb	0.019
CaO	−	0.431	0.462	5.606	Bi	−
TiO_2	0.602	0.624	0.014	0.066	Se	−
Cr_2O_3	0.102	0.036	0.018	0.031	Ag	−
MnO	0.463	0.785	1.267	0.284	O	−
FeO	95.027	55.857	64.077	16.824	S	0.002
As_2O_5	−	0.485	0.044	0.046	Ce	−
V_2O_3	0.061	0.066	−	−	V	−
PbO	−	−	0.002	0.023	Pb	−
CuO	0.007	0.003	0.079	−	Mn	−
SnO_2	0.042	0.037	−	−	Ti	−
MoO_3	−	0.050	0.025	−		
Total	97.810	103.471	99.393	98.700	Total	97.732

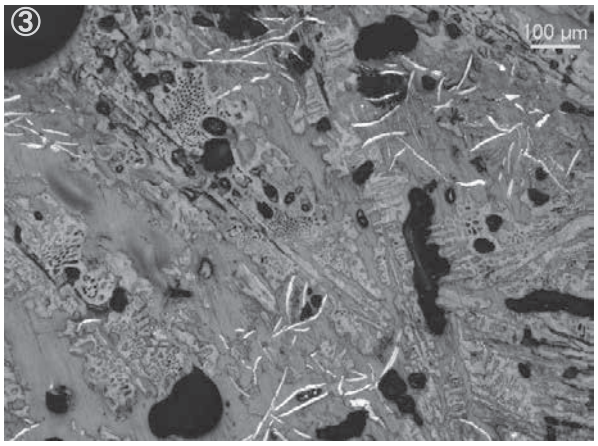
写真 21　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果

ASM−8
鉄器片（鋳造品）
①ﾏｸﾛ組織
②③斑鋳鉄組織痕跡

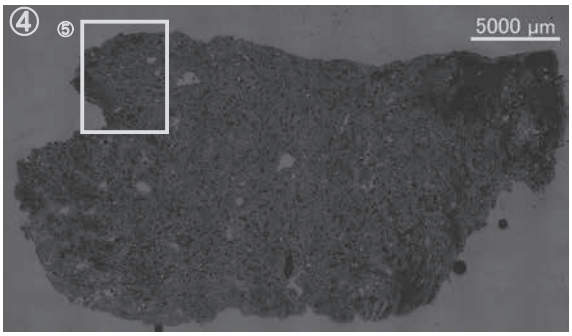


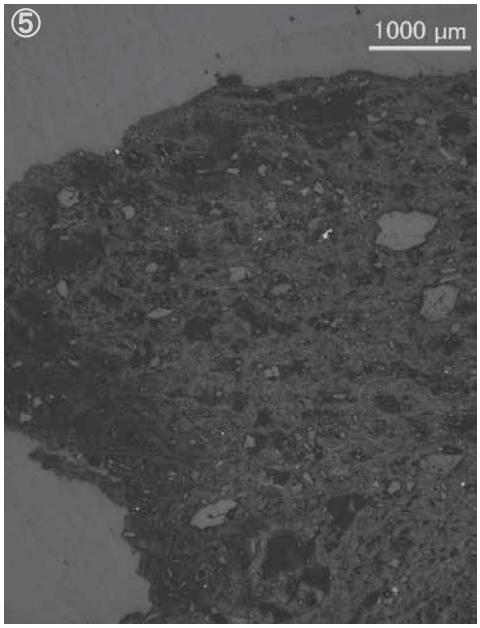


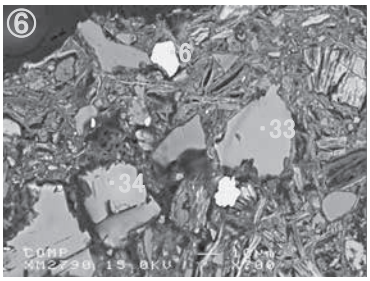




ASM−9
坩堝
④ﾏｸﾛ組織
⑤素地:粘土鉱物、有色･無色鉱物混在







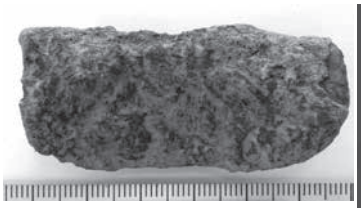
定量分析値

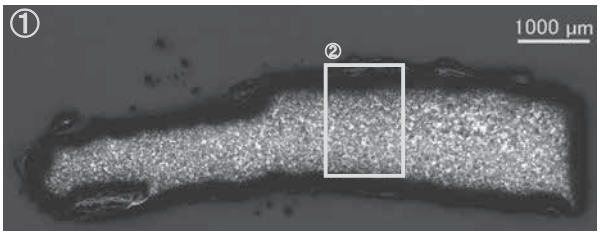
Element	33	34	Element	6
Na_2O	6.313	7.885	Cu	−
MgO	−	0.017	Pb	−
Al_2O_3	27.387	25.214	Sn	0.021
SiO_2	61.344	63.079	Zn	−
P_2O_5	0.017	0.009	Fe	10.369
S	−	−	As	0.015
K_2O	0.046	0.141	Sb	0.042
CaO	5.919	4.535	Bi	−
TiO_2	0.026	−	Se	−
Cr_2O_3	−	−	Ag	−
MnO	0.008	−	O	33.035
FeO	0.325	0.080	S	0.013
As_2O_5	−	−	Ce	0.126
V_2O_3	0.005	−	V	0.311
PbO	−	0.072	Pb	0.168
CuO	0.029	1.324	Mn	0.095
SnO_2	−	−	Ti	47.957
MoO_3	0.036	−		
Total	101.455	102.356	Total	92.152

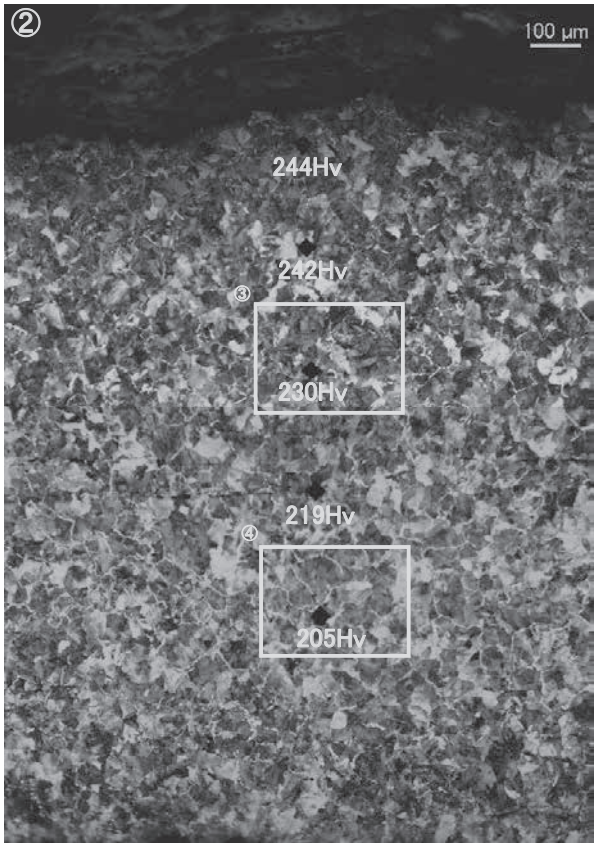
表層部の反射電子像（COMP）および特性X線像

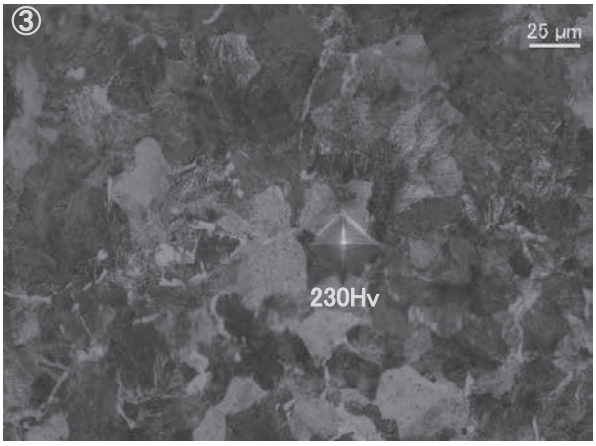
写真 22　鉄器片（鋳造品）・坩堝の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果

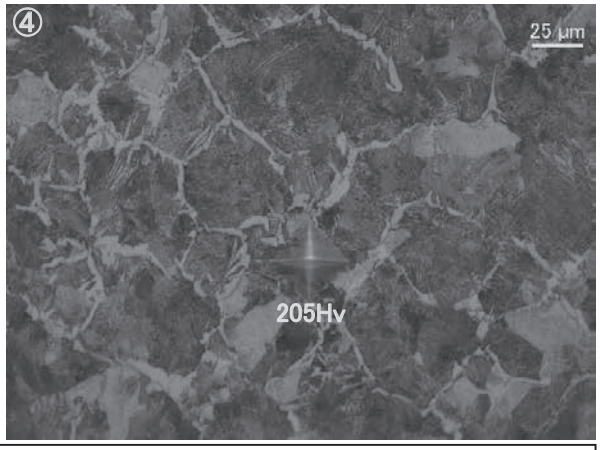
ASM-10
鉄器（鍛造品）
①マクロ組織、金属鉄部:ナイタルetch ②～④亜共析組織、硬度:荷重200gf

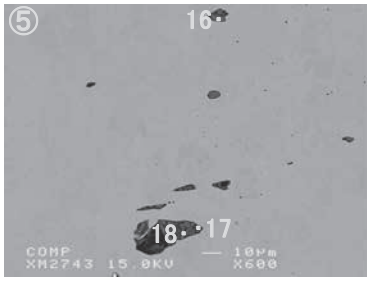


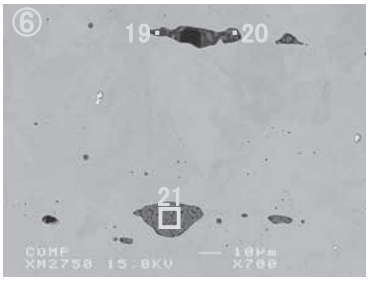


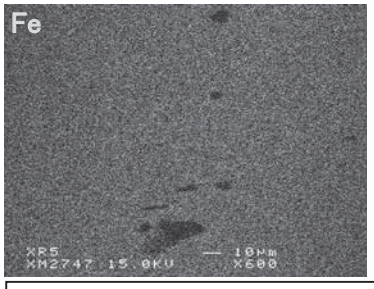


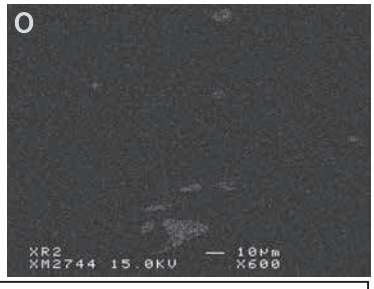












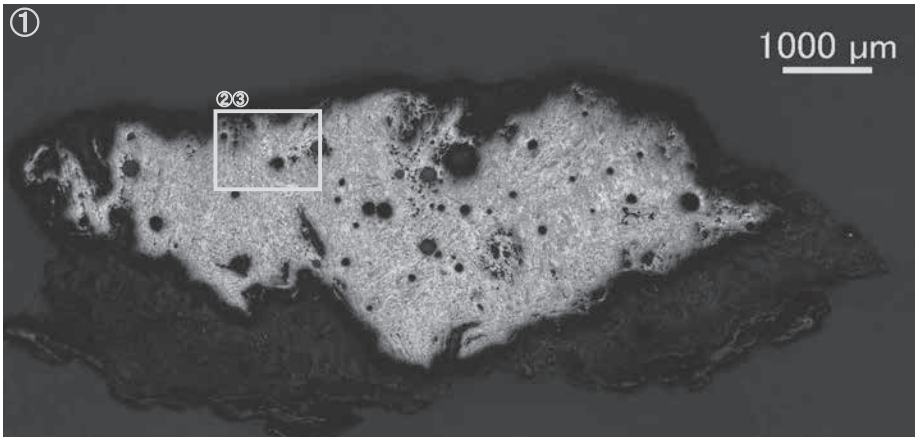
鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）および特性X線像

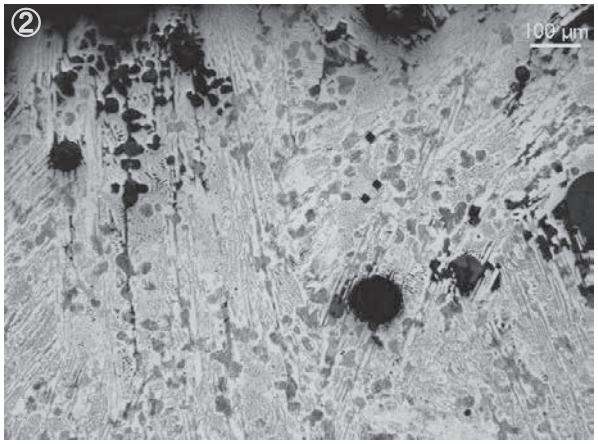
定量分析値

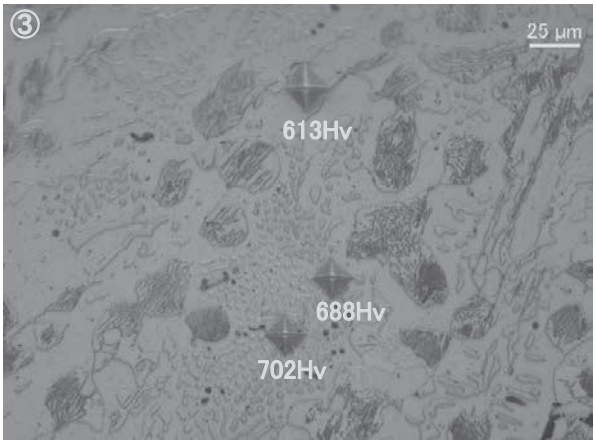
Element	16	17	18	19	20	21
Na_2O	–	0.674	0.079	2.222	–	0.258
MgO	1.065	0.497	1.284	0.033	0.621	0.422
Al_2O_3	1.666	10.457	1.499	14.238	0.372	2.660
SiO_2	0.383	51.984	5.686	43.538	31.727	12.319
P_2O_5	–	0.035	–	0.319	0.042	0.241
S	–	–	0.015	0.050	0.006	0.002
K_2O	0.032	2.574	0.229	4.354	0.061	0.629
CaO	0.065	6.705	0.465	5.020	0.296	0.943
TiO_2	75.177	7.357	52.696	1.726	0.240	22.569
Cr_2O_3	0.167	–	0.085	–	–	0.145
MnO	0.716	0.821	1.930	0.084	0.474	0.398
FeO	21.076	11.721	38.924	26.697	69.100	60.205
As_2O_5	0.188	–	–	–	–	–
V_2O_3	1.528	0.081	0.629	0.062	–	0.411
PbO	–	0.002	–	0.023	–	0.036
CuO	–	0.085	–	0.039	0.010	–
SnO_2	–	–	–	–	0.018	–
MoO_3	–	–	–	–	–	0.016
Total	102.063	92.993	103.521	98.405	102.967	101.254

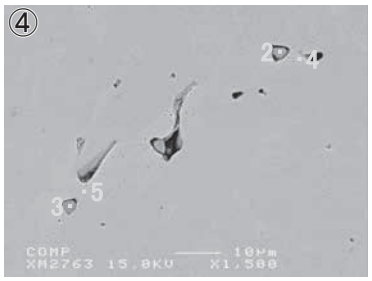
写真 23　鉄器片（鍛造品）の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果

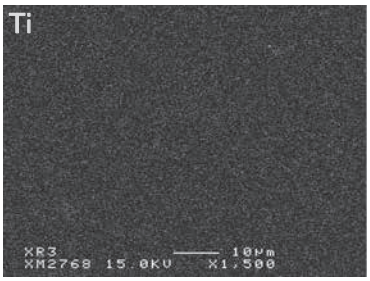
ASM-11
鉄器片（鋳造品）
①ﾏｸﾛ組織、金属鉄部:ﾅｲﾀﾙetch ②③亜共晶組成白鋳鉄組織、硬度:荷重200gf

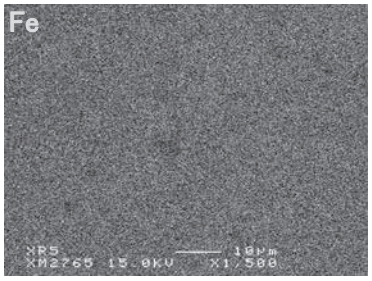












鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）および特性X線像

定量分析値

Element	2	3	4	5
Cu	0.006	0.079	0.068	0.031
Pb	0.032	0.002	–	–
Sn	–	–	0.003	–
Zn	0.088	0.027	–	–
Fe	60.643	60.213	96.843	98.731
As	–	0.013	0.032	–
Sb	0.050	–	–	0.033
Bi	–	–	–	–
Se	0.058	–	–	–
Ag	–	–	0.002	0.002
O	0.610	0.278	–	–
S	33.995	35.686	0.004	0.008
Ce	–	–	0.048	0.028
V	0.516	0.439	0.042	0.011
P	0.068	0.018	0.863	0.916
Mn	0.358	0.416	–	0.015
Ti	1.342	1.165	0.012	–
Total	97.766	98.336	97.917	99.775

写真 24　鉄器片（鋳造品）の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果

8　朝見遺跡出土の動物遺存体

a　動物遺存体の概要

今回の朝見遺跡の発掘調査では、破片数にして総数64点の動物遺存体が出土した。それらのうち種と部位を同定したものは58点にのぼり、その内訳はウマが36点、ウシが22点を数える（第56表、第58表）。それらが出土した調査区は、５－２区、７－１区、７－２区、７－４区、７－５区、７－７区の計６地区である。それぞれの地区で動物遺存体が出土した遺構とその時期は、以下の通りである。

５－２区　条里溝ＳＤ35の内部に築かれた木組みの堰付近からウマ、ウシの骨などとともに、室町時代の土器が出土している。

７－１東区　条里溝ＳＤ38および、その内部に築かれた石組遺構ＳＺ40からウマ、ウシの骨などとともに、鎌倉時代後期の土器が出土している。

７－２区　大溝ＳＤ47最下層から大型哺乳類の歯とともに、平安時代前期後半の土器が、その上層にあたる土坑SK48から大型哺乳類の歯とともに平安時代後期の土器が出土している。

７－４区　大溝ＳＤ52からウマの歯とともに、平安時代後期から鎌倉時代初頭の土器が、大溝ＳＤ53からウマの歯とともに、平安時代前期後半から平安時代後期の土器が出土している。

７－５区　井戸ＳＥ72からウマの骨などとともに、平安時代前期後半の土器が出土している。

７－７区　条里溝ＳＤ57、ＳＤ58からウマの歯とともに、平安時代後期から鎌倉時代前期の土器が出土している。

いずれの遺構も水分が豊富な土壌環境であり、動物遺存体は微生物などによる分解を免れたと思われる。資料のなかには、脆弱なものが多く含まれており、アクリル系合成樹脂（アセトンで５～10％に希釈したパラロイドＢ72）を塗布して補強した。なお、以下に記載するウマ、ウシの体高・年齢は、林田重幸・山内忠平（1957）、西中川駿編（1991）に倣って推定している。

b　動物種別の特徴

ウマ　５－２区ＳＤ35から、上顎骨から遊離した臼歯（左１右１不明１）３点､切歯（上下左右不明）１点、中手骨あるいは中足骨（左右不明）１点が出土している。臼歯のうち１点は第３あるいは第４前臼歯であり、歯冠高62.5mmを測り、生後４～５年の若齢個体と推定される。他の臼歯１点は、第３あるいは第４乳臼歯であり、生後３年以内の幼齢個体と推定される。残りの臼歯１点は、細片となっており歯種の特定には至らない。切歯は咬耗の進行状況から、壮齢から老齢個体と推定される。中手骨あるいは中足骨は骨幹部最小幅（SD）34.9mmを測り、体高110～120cmと推定される。

７－１東区ＳＤ38から中足骨（右）が１点出土しており、その最大長（GL）は251.1mmを測る。同区ＳＤ38内のＳＺ40からウマの頭蓋骨１点、上顎骨から遊離した臼歯（左）１点が出土している。頭蓋骨には切歯、犬歯、臼歯が植立しており、オスと考えられる。切歯の咬耗の進行状況では生後７年と推定され、第１後臼歯の歯冠高が38.3mmを測ることから生後８～９年と推定される。全臼歯列長は、左が167.8mm、右が164.4mmを測り、日本在来馬の御崎馬などの中型馬に相当する。臼歯は、第４前臼歯、第１、第２後臼歯のいずれかと考えられる。残存する歯冠の最大長が43.1mmを測り、生後８～９年程度の壮齢個体と推定される。

７－４区ＳＤ52から、下顎骨から遊離した臼歯が出土しており、細片であることから歯種の特定には至らないが、最少で２本が存在する。残存する歯冠長では若齢から壮齢個体と推定される。同区ＳＤ53から、上顎骨から遊離した第１・２・３後臼歯が出土しており、第２後臼歯は歯冠高62.1mm以上、第３後臼歯は歯冠高58.7mm以上を測り、生後６年以下の若齢個体と推定される。

７－５区ＳＥ72から、上顎骨から遊離した臼歯（左６右６）12点、切歯（左）３点、大腿骨（右）１点が出土している。左右の臼歯はいずれも同一個体のもので、切歯も同一個体の可能性があり、１頭分の頭蓋骨が存在したと考えられる。ウマの上顎臼歯の歯冠高から生後６～８年と推定され、臼歯列長

第56表　種名表

脊椎動物門　Vertebrata	
哺乳綱　Mammalia	
奇蹄目　Perissodactyla	偶蹄目　Artiodactyla
ウマ科　Equidae	ウシ科　Bovidae
ウマ　*Equus caballus*	ウシ　*Bos Taurus*

はトカラ馬などの小型馬に相当する。

このウマの上顎第１後臼歯の咬合面の楕円フーリエ解析を植月学氏に依頼し、その結果をご教示いただいた。馬歯の咬合面の形状は、遺伝的影響が強く反映され、現生在来馬の標本では品種別個体群を識別できる可能性があり、今回の結果は山梨県、長野県などの中部地方の古代遺跡から出土した馬の範疇に収まることが判明した（植月ほか 2013）。

また、ウマの上顎第１・第２・第３後臼歯のストロンチウム安定同位体分析を覚張隆史氏に依頼し、その結果をご教示いただいた。ウマの歯のストロンチウム安定同位体の平均値は 0.709583、標準偏差が 0.000258 を示した。日本におけるストロンチウム同位体比は、数キロの移動で小数点第３位が変動することが予想されているが、当資料にはその変動が見られない。したがって、当資料は第１後臼歯が放出する０歳から第３後臼歯の歯根部が形成される５歳まで、長距離移動をしていないことを示唆する（第 59 表）。

７－７区ＳＤ 57 から、下顎骨から遊離した第２、３、４前臼歯、第１、２、３後臼歯（左）１点ずつが出土しており、いずれも同一個体のものと考えられる。下顎臼歯は、歯冠高から生後５～７年と推定され、歯列長は御崎馬などの中型馬に相当する。

ＳＤ 58 から、上顎骨から遊離した臼歯（右）１点が出土している。上顎臼歯は、歯冠高 48.4mm を測り、生後６～７年と推定される。

ウシ　５－２区ＳＤ 35 から、脛骨（左）が１点出土している。

７－１区ＳＤ 38 から、顎骨から遊離した同一個体の上顎臼歯（第２前臼歯～第２後臼歯）５点、下顎骨（左１右２）、橈骨（左１右２）、脛骨（左２右１）が３点ずつ、尺骨（左１右１）、中手骨／中足骨（左右不明）が２点ずつ、肩甲骨（左）、上腕骨（右）、距骨（左）が１点ずつ、計 21 点が出土している。左の下顎骨は、後臼歯列長 88.5mm を測り、日本在来の口之島牛のメスに相当する。右の橈骨のうち１点は、近位端最大幅（Bp）83.4mm を、もう１点は最大長（GL）268.0mm、近位端最大幅（Bp）82.8mm を測り、それぞれ体高 120cm ～ 125cm、115 ～ 120cm と推定される。

第 57 表　馬歯のストロンチウム同位体比

Sample name	$^{87}Sr/^{86}Sr$	STD Err
Asami M1 crown	0.709729	0.000005
Asami M1 root	0.709694	0.000005
Asami M2 crown	0.709597	0.000004
Asami M2 root	0.709671	0.000007
Asami M3 crown	0.709740	0.000006
Asami M3 root	0.709066	0.000005

ウマ／ウシ　５－２区ＳＤ 35 から、長管骨が３点出土しており、いずれも骨端部がなく、種の同定にはいたらない。

７－１区ＳＤ 38 から、上腕骨（左）１点、長管骨１点、四肢骨と思われるもの１点、計３点が出土している。いずれも著しく破損しており種の同定には至らない。

７－２区ＳＤ 47 から、顎骨から遊離した臼歯が１点出土している。細片となっており、種の同定には至らない。

ｃ　時期・遺構別の特徴

平安前期後半　７－５区井戸ＳＥ 72 の底部からウマの遊離歯、大腿骨が出土している。顎骨が腐朽したため､臼歯だけが出土したと考えられる。ウマは、生後６～８年の若齢個体である。祭祀遺物が多数出土しており､祭祀におけるウマの供儀が想定される。

平安前期～後期　７－２区ＳＤ 47、７－４区ＳＤ 53 は、同一の大溝であり、平安時代前期後半を主として、後期前半の遺物を含む。ウマとウマ／ウシの遊離歯だけが出土しており、ウマは生後６年以下の若齢から壮齢の個体である。それぞれの遺構で祭祀遺物が多数出土しているが、動物遺存体の出土量は乏しく祭祀との関連は明らかでない。

平安後期　７－２区土坑ＳＫ 48 では、発掘調査時に馬歯の出土が確認されているが、取り上げ後、崩壊が進行しており、種を特定することは困難である。

鎌倉前期　７－７区条里溝ＳＤ 57、ＳＤ 58 は隣り合っており、両方でウマの遊離歯が出土している。ＳＤ 57 では同一個体のウマの下顎臼歯が出土しており、顎骨が腐朽したため、臼歯だけが出土したと考えられる。埋納施設は検出していないが、溝の外縁部で出土しており、意図的に配置した可能性もある。

鎌倉後期　７－１区条里溝ＳＤ 38 からウマの頭蓋骨、上顎臼歯、中足骨、ウシの下顎骨、上顎臼歯、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、脛骨、距骨、中手骨

／中足骨が、石組遺構ＳＺ40の周辺で出土している。ウマの頭蓋骨やウシの下顎骨には、ほぼ完形で出土したものが含まれており、他の遺構に比べて保存状態が良い。ウシが大部分をしめ、四肢骨が多く出土していることも特徴的である。

室町後期　５－２区条里溝ＳＤ35では、ウマの遊離歯と中手骨／中足骨、ウシの脛骨が木組みの堰の周辺で出土している。ウマは遊離歯が多いため、ウマとウシの比率に大差は見られないと言えよう。

ｄ　朝見遺跡における古代・中世の牛馬利用

ウマ、ウシは、農耕・運搬・騎乗・車の牽引などに使役され、時には犠牲となり、死ねばそれらの皮・肉・骨・角・蹄などが資源として利用され、人間にとって利用価値の高い家畜である。

当遺跡では、平安時代から室町時代までの井戸や溝などからウマとウシが出土している。いずれも低湿な環境の遺構であり、保存状態に恵まれたと考えられる。今回、注目されるのは、７－５区井戸ＳＥ72（平安前期後半）、７－７区条里溝ＳＤ57（鎌倉前期）、７－１区条里溝ＳＤ38（鎌倉後期）から出土したウマ、ウシの遺存体である。

７－５区の平安時代前期の井戸ＳＥ72は、方形の木組み枠の井戸で、その底部からウマの左右の上顎臼歯が出土しており、ウマの頭蓋骨があったと考えられる。井戸からウマの頭部が出土している代表的な遺跡は、古墳時代の大阪府中野遺跡、飛鳥時代の奈良県藤原宮跡第25次調査があげられる（四条畷市教育委員会編1988・土肥1983）。また、岡山県鹿田遺跡では、ウシの頭蓋骨が鎌倉時代の井戸から出土している（松井1993）。これらはいずれも祭祀に伴う牛馬供儀と見られるが、いずれも頭部のみが出土していることが特徴である。当遺跡のウマは、生後６～８年の若齢馬であり、自然死したものとは考えがたく、祭祀にともなって供儀されたことが想定できる。その後、このウマの頭蓋骨は朽ち果て、土中で分解したと考えられる。また、ウマの大腿骨の破片が出土していることから、頭部だけでなく、胴部や四肢を含めた全身を井戸に投じた可能性もある。このように井戸から牛馬の頭部だけが出土した前例とは異なる特徴が見られるが、当遺跡の井戸の最下層では、斎串、完形の甕、底部を穿孔した土師器坏などの祭祀に関連する遺物が出土しており、ウマを供儀した可能性が高い。

牛馬を供儀する祭祀は、溝でも見られる。大阪府池島・福万寺遺跡では、平安時代後期の水田の溝の底部に掘った土坑にウシの頭蓋骨や下顎骨を埋納するほか、溝の肩にウマの頭蓋骨を配置あるいは埋納した祭祀が行われた可能性がある（松井1995、丸山・松井2006）。当遺跡でも、７－７区条里溝ＳＤ57では、ウマの下顎骨が溝の外縁部で出土しており、祭祀の可能性を指摘できる。しかし、埋納遺構と思われる痕跡は見られず、祭祀に関連する遺物が伴っていないため、馬を供儀したことを断定するには至らない。

７－１区のＳＺ40を含む条里溝ＳＤ38では、ウマの頭蓋骨、中足骨、ウシの下顎骨、主要な四肢骨が出土している。当遺構も、土師器の皿がまとまって出土するなど、祭祀に関連する可能性もあるがウマ、ウシの頭蓋骨、下顎骨、四肢骨は散乱状態で出土しており、出土位置には一括性が見られない。ウマの頭蓋骨は、口蓋部を上方にした状態、すなわち仰向けで出土しており、頭頂部が破損している。(1) このウマの頭蓋骨の頭頂部が意図的に破壊された可能性がある。７世紀の大阪府森の宮遺跡、８世紀後半の大阪府城山遺跡で、頭頂部が割り取られたウマの頭蓋骨が出土しており、脳漿鞣しにウマの脳を摘出して使用したと考えられている（久保1996、松井1986）。当遺跡では、ウマの頭蓋骨のほか、ウシの下顎骨や四肢骨も出土しており、近郊で牛馬が解体され、それらの皮や肉を取り、脳髄も利用して皮鞣しが行われていたことを想定できる。

ｅ　まとめ

当遺跡では、平安時代から室町時代にかけて、井戸や溝に牛馬が投棄されており、それぞれの遺構の性格や共伴遺物を考慮すると、祭祀に供儀されたことや斃牛馬処理、皮鞣しに関連したものと考えられる。祭祀に供儀された可能性が高い７－５区ＳＥ72の馬歯では、楕円フーリエ解析、ストロンチウム安定同位体分析を試みたが、今後それぞれの分析資料の蓄積により、どのようなウマが祭祀に利用されたのか明らかになることが期待される。

（丸山真史　奈良文化財研究所・客員研究員）

謝辞

楕円フーリエ解析およびストロンチウム安定同位体分析を行って頂いた植月学氏（山梨県立博物館）、覚張隆史氏（北里大学医学部）に感謝の意を表します。また、植月学氏には、馬歯の歯種同定にもご協力をいただきました。重ねて感謝申し上げます。

〔 註 〕

（1）脆弱な状態であったため周辺の土壌を土台として取り上げ、元興寺文化財研究所において保存処理を行った際に、一度上下反転した写真で観察した。頭蓋骨の形態を維持するため、土壌を完全に除去することはできず、出土した仰向けの状態で保管している。

〔 参考文献 〕

植月学・孫晙鎬・津村宏臣・丸山真史・Gundem Can Yumni・庄田慎矢・菊地大樹・本郷一美 2013「臼歯形状からみた日韓古代馬の関係」『第 30 回文化財科学会要旨集』文化財科学会 pp.156-157

久保和士 1996「動物遺体の調査結果」『森ノ宮遺跡Ⅱ』大阪市文化財協会 pp.134-174

四条畷市教育委員会編 1988『中野遺跡発掘調査概要・Ⅴ』四条畷市教育委員会

土肥孝 1983「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立 30 執念記念論文集刊行会 pp.383-400

西中川駿編 1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告

林田重幸・山内忠平 1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告書』第６号 pp.146-156

松井章 1986「城山遺跡出土の動物遺存体」『城山（その２）』大阪府教育委員会 pp.227-232

松井章 1993「鹿田遺跡第５次調査（医学部附属病院管理棟新営に伴う発掘調査）出土のウシ」『鹿田遺跡３』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.115-118

松井章 1995「池島･福万寺遺跡出土の動物遺存体」『池島･福万寺遺跡発掘調査概要Ⅺ－ 90-3 調査区（1992 年度）の概要』大阪文化財センター pp.99-104

丸山真史・松井章 2006「池島・福万寺遺跡出土の動物遺存体」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 34』大阪府文化財センター pp.203-206

第 58 表　ウマ・ウシの集計表

地区	遺構	時期	種	部位	左	右	－	計
5-2	SD35	室町後期	ウマ	遊離歯	1	1	2	4
				中手骨/中足骨			1	1
			ウシ	脛骨	1			1
7-1東	SD38	鎌倉後期	ウシ	遊離歯	5			5
				下顎骨	1	2		3
				肩甲骨	1			1
				上腕骨		1		1
				橈骨	1	2		3
				尺骨	1	1		2
				脛骨	2	1		3
				距骨	1			1
				中手骨/中足骨			2	2
			ウマ	頭蓋骨	1			1
				遊離歯	1			1
				中足骨		1		1
7-4	SD52	平安後期～鎌倉初頭	ウマ	遊離歯			2	2
	SD53	平安前期後半	ウマ	遊離歯		3		3
7-5	SE72	平安前期後半	ウマ	遊離歯	9	6		15
				大腿骨		1		1
7-7	SD57	平安後期～鎌倉前期	ウマ	遊離歯	6			6
	SD58	平安後期～鎌倉前期	ウマ	遊離歯		1		1

第 59 表　ウマ・ウシの臼歯計測値（単位：mm）

種類	項目	左						右					
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
SD38ウマ 上顎臼歯（頭蓋骨）（第23図骨１）	歯冠長	27.3	24.1	23.2	27.1	26.6	36.7	24.1	84.3	25.5	23.6	23.6	22.6
	歯冠幅	25.3	23	22.4	25.3	26.1	35.9	22.7	25.8	24.8	24.1	23.1	21.5
	歯冠高	－	－	－	－	－	－	－	－	－	38.83	－	－
	歯列長	77.1			95.2			92.8			75.4		
		167.8						164.4					
SD57ウマ 下顎臼歯（遊離歯）	歯冠長	28.4	24.3+	24.8	26.6	－	32.1						
	歯冠幅	28.6	13.3	14	－	－	13						
	歯冠高	61.1	62.3	53.1	61.3	－	37.6						
	歯列長	159.3											
SE72ウマ 上顎臼歯（遊離歯）	歯冠長	－	－	－	－	－	－	36.8	28.4	26.7	－		－
	歯冠幅	20.9	24.7	25.3	26.6	25.4		23.1	24.7	25.9	－	23.4	－
	歯冠高	47.5	51.9	44.3	49.8	44.4+	35.4	35.2	47.3	54.2	－	54.3	52.2
	歯列長	147.7以上						88.4			－		
SD38ウシ 下顎臼歯（下顎骨）（第24図骨２）	歯冠長	35.6	24.4	22.3	17.0	－	－						
	歯列長	88.5			－								
SD28ウシ 上顎臼歯（遊離歯）	歯冠長	－	30.9	21.8	15.1	15.5	不可						
	歯冠幅	－	24.7	23.6	21.7	17.6	不可						
SD38ウシ 下顎臼歯（下顎骨）	歯冠長							－	－	20.1	20.1	24.6	38.0
	歯冠幅							－	－	13.2	15.7	17.9	16.7

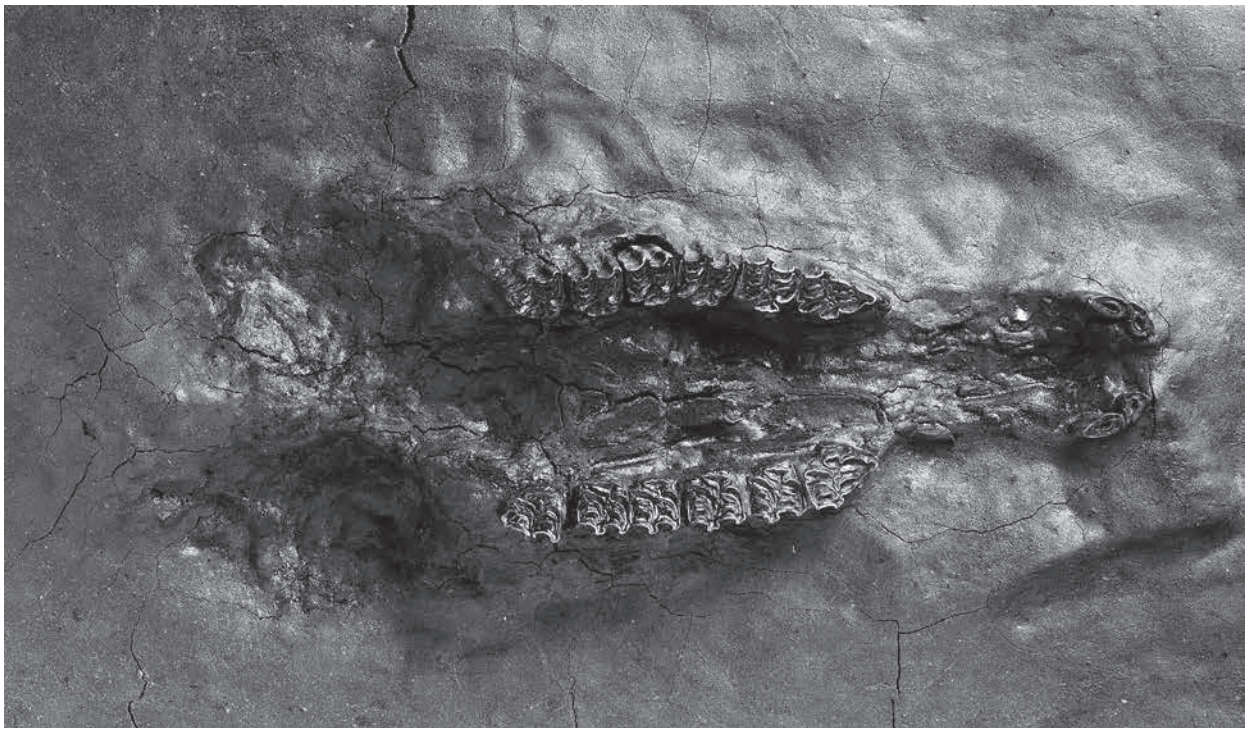


写真 25　ＳＤ 38 出土のウマ（第 23 図　骨 1、ＰＥＧ含浸法保存処理済み）

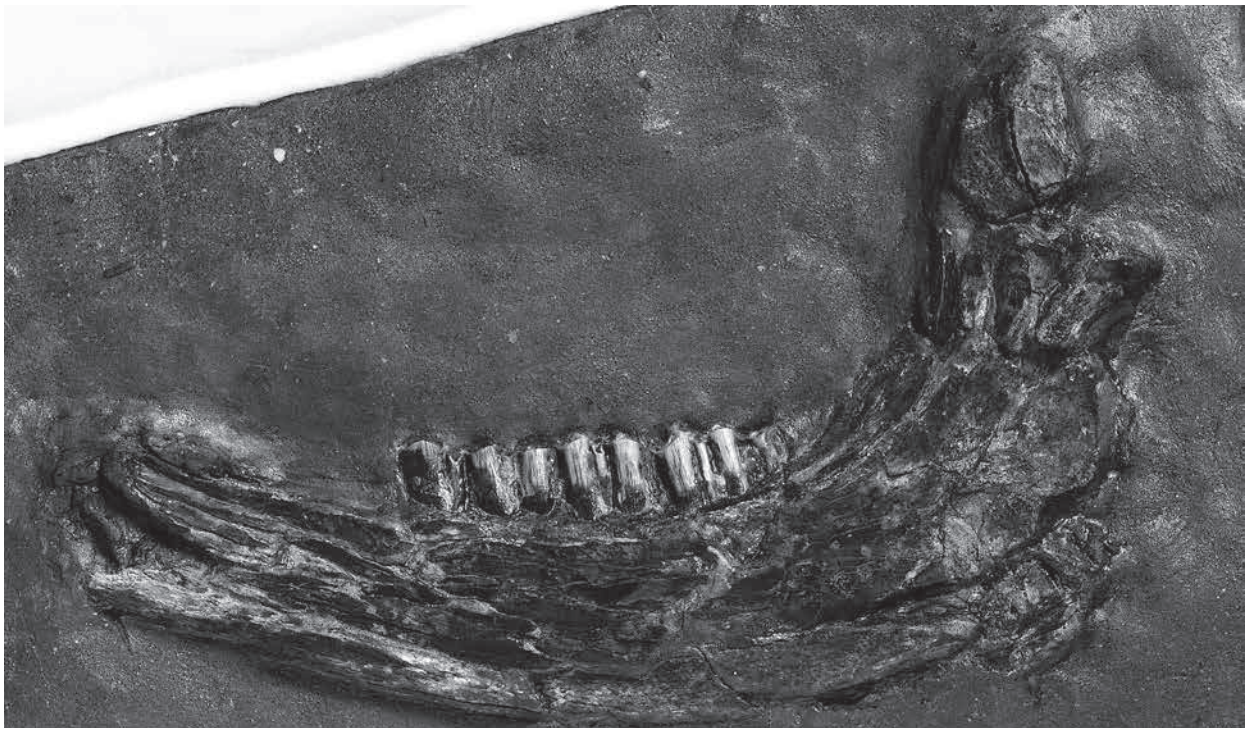


写真 26　ＳＤ 38 出土のウシ（第 24 図　骨 3、ＰＥＧ含浸法保存処理済み）

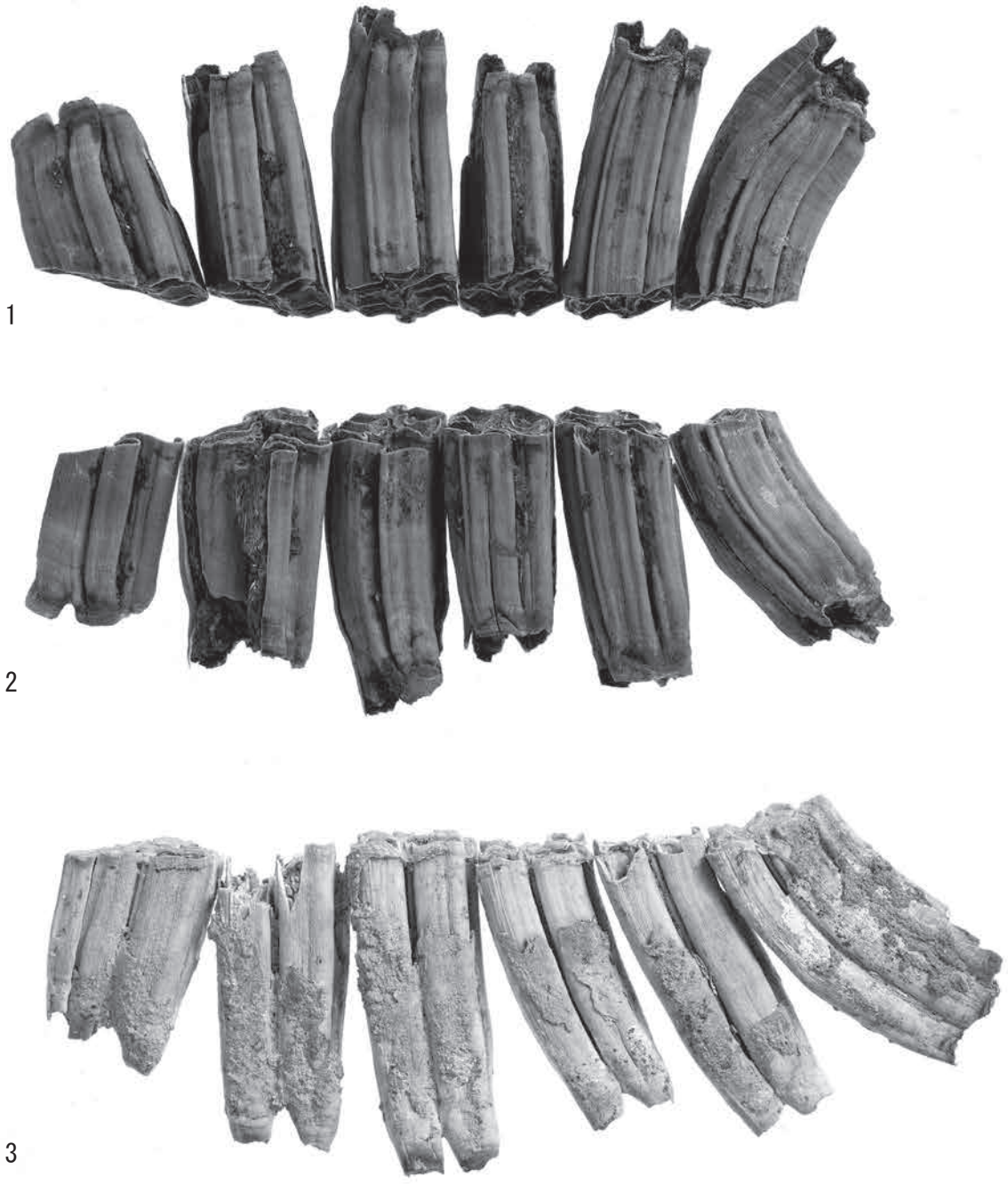


写真 27　ＳＥ 72・ＳＤ 57 出土のウマ（１・２、ＳＥ 72 出土の上顎臼歯　３、ＳＤ 57 出土の下顎臼歯）

写真 28　ＳＤ 38 出土のウシ　（1、下顎骨　2、上腕骨　3、橈骨　4、脛骨　5、距骨）

Ⅵ　調査のまとめ

1　朝見遺跡の変遷

縄文時代　縄文時代の遺構は認められない。７－４区ＳＤ52から、二上山サヌカイトの石鏃が出土している。平成24年度範囲確認調査では、第２次調査区の南東付近で中期頃の土器片が見つかっている。

弥生時代　前～中期の遺物は認められない。後期後半は、遺構は見られないものの、７－４・７－５区の包含層から遺物が出土している。平成22年度範囲確認調査坑No.22で当該期の土坑を検出しており、居住域は７－５区西側に想定される。

朝見遺跡の東辺は瀬干遺跡(1)と接していることから、方形周溝墓が見つかる可能性がある。

古墳時代　古墳時代前期は、前時代に引き続き７－５区南西側に居住域があったと考えられる。５－１区ＳＤ34は落ち込み状の浅い溝であるが、緑色泥岩の管玉（92）が出土しており、周囲に削平された墳墓が存在する可能性がある。なお、遺跡内には、面塚を含む７基の古墳が存在したといわれている。(2)

飛鳥～奈良時代　遺物・遺構ともにほとんど認められない。６区自然流路ＳＲ88の時期はおおむね古代と考えられ、条里型地割が施工される段階には既に埋没していたことが想定される。

平安時代前期後半　平安時代初頭の遺物はみられない。９世紀末から10世紀前半頃、櫛田川水系から水を引くための大溝ＳＤ47が築造される。この時期の遺物は、石帯、墨書土器（「官」３点含む）、施釉陶器、朱墨付着転用硯、馬歯、鉄製品・鍛鉄や鉄滓など､いわゆる官衙関連遺物が多い。したがって、櫛田川の自然堤防上に位置する現在の住宅地付近に公的機関や富豪層の居館があった可能性が高く、朝見遺跡がもっとも栄えていた時期と言える。

大溝群や井戸ＳＥ72からは、木製祭祀具、土馬、墨書土器や馬の頭蓋骨など水への祈りや鎮めに通じる遺物が多数出土しており、人々が当地の開発を祈願した様子がうかがわれる。

平安時代後期　祭祀土坑ＳＫ48は、既に水流の弱くなった大溝ＳＤ47に向かって雨乞いをした遺構と考えられる。ＳＤ49とＳＤ52は、ＳＤ47に代わる水路で、これらは区画溝の可能性が高い。

祭祀土坑ＳＫ48の上には、多量の遺物が投棄される（＝ＳＤ47最上層・炭層）。この多くは９世紀末から10世紀前半の様相を示す官衙関連遺物であるが、最上層が堆積した時期は10世紀後半と考えられるため、朝見遺跡の公的機関としての役割は約100年で終了したことがわかる。

いくつかの条里溝が機能し始め、ＳＤ90最下層からは11世紀前半の様相を示す遺物が出土している。

鎌倉時代～室町時代　鎌倉時代初頭にＳＤ52・ＳＤ49が埋没することで官衙に関わる遺構・遺物が姿を消し、それに代わって現代の景観につながる開発が始まる。１区大溝ＳＤ１は、ＳＤ47と同じく櫛田川水系から水を引くための大型用水路と考えられるが、その経路はより直線的である。昭和23年撮影の航空写真（写真29）で、和屋町（朝見遺跡）から立田町（中坪遺跡）にかけて斜めに走る溝はＳＤ51そのものとみられ、これが第２次世界大戦後に現在の幹線用水路へと付け替えられたことが推測される。

いずれの条里溝も、鎌倉時代初頭には使用されている。鎌倉時代後期には、７－１区ＳＤ38で杭を用いた水利施設が造られる。蜜柑割材や丸太材を使い分けた比較的大規模なもので、条里溝ＳＤ38と大型用水路ＳＤ１の分水地点に造られていることから水路兼護岸施設であったと考えられる。牛馬骨とともに土師器小皿や火付木が出土した石組遺構ＳＺ40は、水口における雨乞い祭祀跡の可能性がある。

室町時代、５区ＳＤ35で丸杭を用いた堰が設けられる。これは鎌倉時代のＳＤ38堰に比べ脆弱で、水位の調節といった簡単な機能が想定される。

中世は、溝の改修や護岸工事、水利施設の設置など農耕に対する熱意がうかがえる時期である。

近世～現代　耕作土直下で見られる明黄褐色の床土は近世以降に形成されたものである。床土は場所によっては何層もみられ、繰り返し耕作を行ったことがわかる。７－５区南端部を東流するＳＤ74は、近世頃の自然流路である。

今回発掘調査によって「条里溝」と認定したものの多くは、約1,000年間同じ位置で水路として使用されているもので、コンクリート製暗渠の真下から平安期の溝が現れるという状況であった。調査対象にならなかった範囲においても、地割を区画する幅１ｍ程度の条里溝が無尽に走っており、現在も水が流れている。すなわち、条里型地割が残る地域における条里溝とは、古代から現代まで使用され続けている、いわば生きた遺構なのである。今回の発掘調査によって、溝と水田で形成された条里型地割という「景観そのもの」が、広大な遺構であるということが再認識されたといえよう。

2　平安時代の遺構

a　大溝

概要　現状の地割に沿わない、平安時代前期後半の大溝を検出した。埋土からは官衙的な様相を示す遺物が多量に出土した（第112図）。

大溝ＳＤ47（＝ＳＤ53≒ＳＤ66）　規模は幅７ｍ、深さ1.4ｍで、断面形は整った逆台形を呈する。集落の西側縁辺地を蛇行し、流れの方向は南東→北西である。大溝は人工的で、上流で櫛田川から分水し、下流の中坪遺跡・堀町遺跡へと続くもので、その性格は農耕用大型水路が想定される。

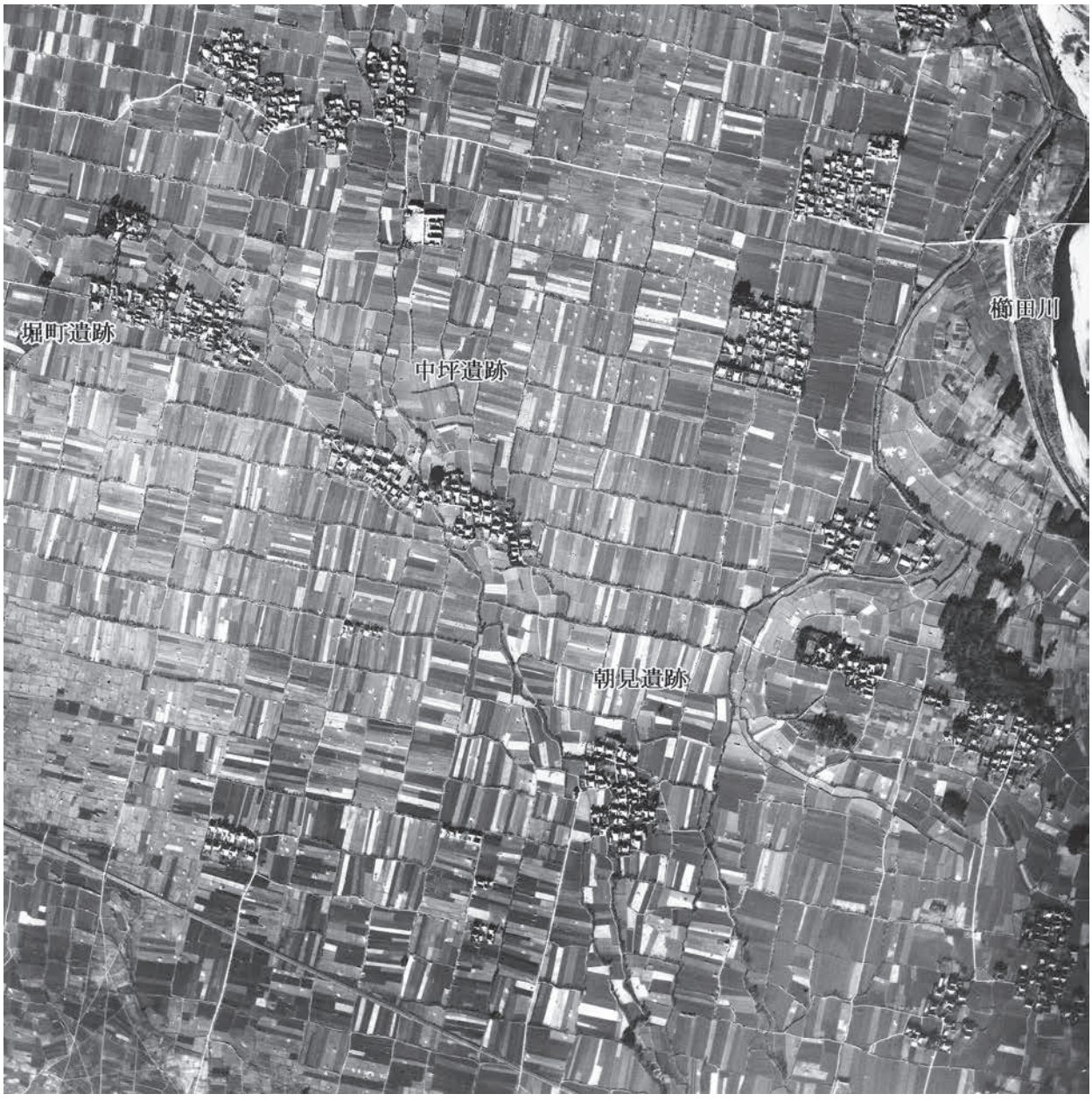


写真29　条里型地割航空写真（昭和23年12月17日撮影　国土地理院空中写真USA-R2303-22）

第110図　朝見遺跡の変遷（1）（1：2,500）

第111図　朝見遺跡の変遷（２）（１：2,500）

掘削時期は平安時代前期後半の９世紀末から10世紀前半である。最下層は一定の水流があり、土師器や灰釉陶器の破片が多く出土した。最下層直上からは、斎串・形代などの木製品ほか、「官」「成」を含む完形の墨書土器が出土した。ＳＤ47は造られて間もなく用水路としての機能を失ったようで、10世紀後半にはほとんど埋没する。隣接したＳＫ48で祭祀が行われたのち、ＳＤ47・ＳＫ48の上面に籾殻・稲藁や周囲の木を燃やした炭とともに多量の遺物が投棄される。特に、７－２区ＳＤ47西岸には炭の層が厚く堆積し、官衙関連遺物が多量に廃棄されており､溝が埋まってできた窪地は最終的に「ごみ捨て場」として利用されたようである。

大溝ＳＤ52・ＳＤ49　平安時代前期後半から鎌倉時代初頭まで機能した溝で、断面形はＶ字状を呈する。ＳＤ52は比較的直線的であることから居住域の区画溝に相当する可能性があるが、ほぼ南北方向であるため条里型地割の軸とは合致しない。この２つの大溝は、木製祭祀具が見られない点、石帯や朱墨転用硯など実務に関わる遺物が捨てられている点が特徴的である。ただし、ＳＤ49からは土馬が１点出土しており、墨書土器「衙」も複数見つかっていることから､祭祀と無関係であったわけではない。

ｂ　祭祀土坑ＳＫ48

大溝ＳＤ47に隣接する。直径1.7ｍのほぼ正円形を呈しており、深さは0.25ｍと浅い。時期は10世紀後半で、大溝ＳＤ47最上層に遺物が投棄される直前である。

土坑の東側で、油煙痕の残る完形の土師器坏が複数出土した。土坑内に獣骨が埋納された可能性があり、水辺の祭祀すなわち雨乞いの痕跡とみられる。

ｃ　井戸ＳＥ72

概要　時期はＳＤ47と同じ９世紀末から10世紀前半である。推定される居住域とは大溝を挟んで対岸に位置するため、生活用水ではない可能性がある。古代の井戸祭祀については、祭祀遺物の段階的な埋納が指摘されるが､(3) ＳＥ72では掘方・井戸枠内最下層・井戸枠内最上層の３ヵ所で祭祀の痕跡が確認され、祭祀は構築時と廃絶時に行われたと考えられる。

掘方の出土遺物と祭祀　掘方から「衙」と「令」の墨書土器が出土しており、「守ることを命ずる」という意味が推測される。井戸掘方の祭祀は、井戸を開削するにあたって井神を招いて湧水を祈願する目的があったと考えられる。

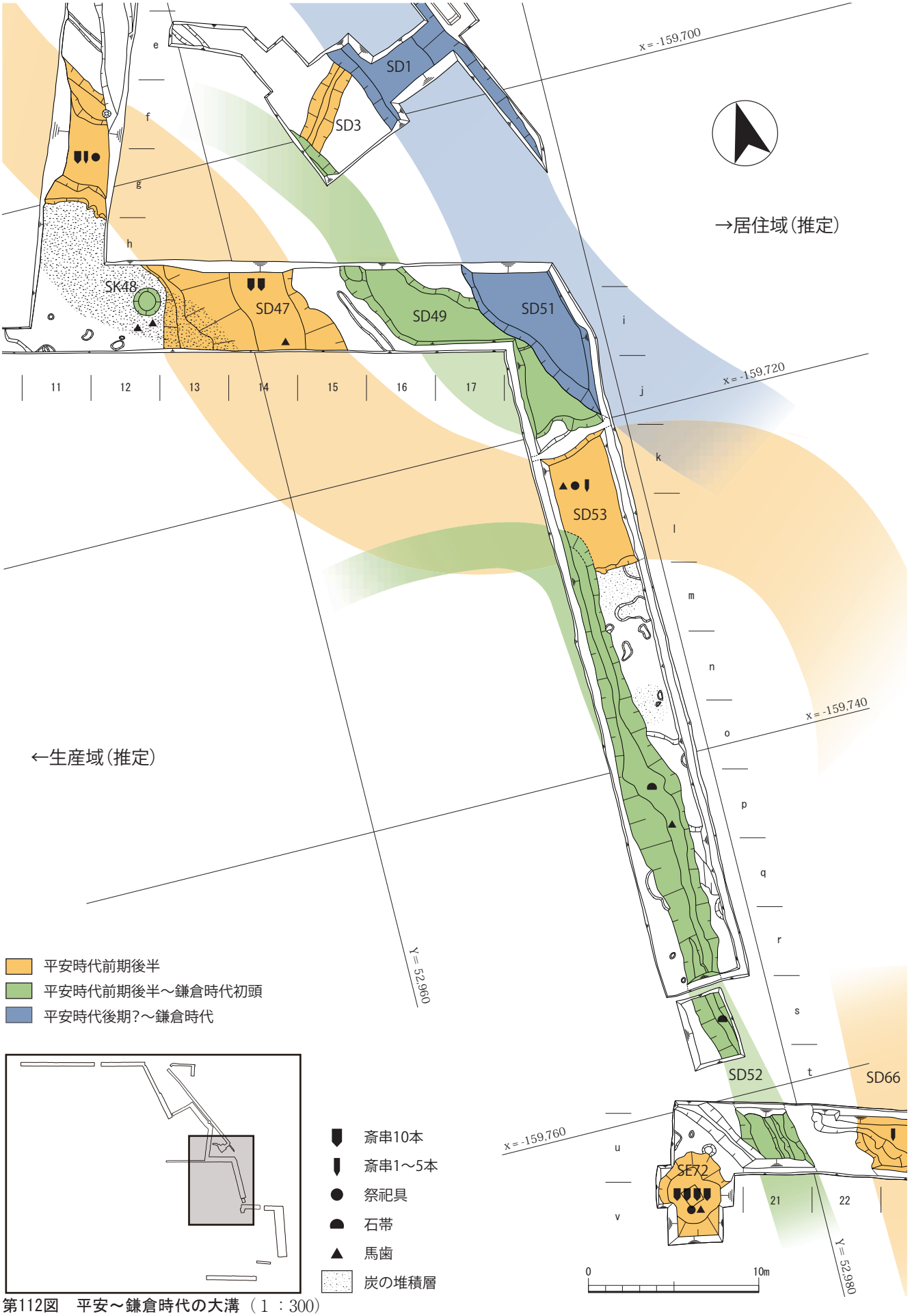
最下層の出土遺物と祭祀　まず、特徴的な遺物を概観する。土師器坏（1433・1434）は、弥生時代以降の伝統である焼成後の底部穿孔がみられる。墨書土器「衆」１点、「衙」２点は、「守る」という意味であろうか。墨書土器「衙」（1449）は四方結界を示している。黒色土器小型壺（1348）は畿内から直接的に搬入されたもので、水に関わる祭祀遺物である可能性がある。土師器甕は約21点出土しており、これらは火を受けた痕跡の無い13点と、底部にヘラ記号をもち内外面に炭化物が多量に付着する８点の二手に分類される。火を受けた痕跡のない一群には、「南」と両面に大きく墨書された甕が１点、口縁部に油煙痕がある甕が１点ある。

木製品は横櫛２点、紡織具１式、斎串35本、火付木である。斎串は井神への供物と思われるが、祭場の範囲を示す結界として使用されたのち廃棄された可能性もある。(4) 横櫛は、井戸の祭祀遺物としては一般的である。(5) 紡織具は古墳時代から続く日本古来の祭祀具で、宗像社の模造品や、６世紀代の土製模造品に紡織具を用いた祭祀の事例が見られ、横櫛と紡織具は荒ぶる神を鎮める意図が想定されている。(6)

出土した有機物はウマの頭蓋骨･モモの種である。ウマの骨を投棄する、いわゆる「殺牛馬祭祀」については次項で詳述する。

次に、最下層における祭祀の実態を考えていきたい。火付木が複数出土した点、土師器甕が多数煤けている点、土師器甕（1461）の口縁部に油煙痕がみられる点は、祭祀行為が夜間に行われたことを示唆している。(7) 被熱痕のある甕に施されたヘラ記号は「△」「○」「⊗」「φ」など統一性がないが、いずれの記号も焼成前に書かれているため、土器製作段階から祭祀用の器として用途が決まっていたことがわかる。

また、生活痕跡のない土師器類と祭祀遺物のみが投棄され、緑釉陶器や灰釉陶器といった瓷器がみられない点が特筆される。隣接するＳＤ47からは緑釉陶器が多量に出土しているため、井戸を構築した



第112図　平安～鎌倉時代の大溝（1：300）

集団が瓷器を所持していたことは明らかであるが、その中でも意図的に土師器類のみを選んで用いていたことがわかる。土師器類のみが井戸から出土する類例には、神奈川県中原上宿遺跡が挙げられる。中原上宿遺跡Ⅳ区ＳＥ01の構築時期は８世紀末～９世紀初頭、廃棄時期は９世紀中葉である。出土遺物は圧倒的に土師器坏が多く、またほとんど未使用のものであるとされ、馬歯も出土していることから、この事象に対し祭祀的要素を類推している。(8)

最後に、最下層の祭祀が行われた時期であるが、出土状況からは使用時か廃絶時かの区別は困難であった。しかしながら、飲用水や農業用水として利用する井戸内に煤の付着した甕や馬骨を投棄するとは考え難いため、現時点では廃絶時を想定しておきたい。なお、使用時であれば雨乞いもしくは井神に対して豊富な水を願うまつりであり、廃絶時であれば井神を鎮めるまつりが想定される。墨書土器「鬻」、横櫛や紡織具などの鎮魂具など、出土遺物の様相が全体的に「鎮める」意図が強い点は、廃絶時の祭祀とする根拠といえるのではないであろうか。

最上層の祭祀　井戸枠内最上層では、墨書のないほぼ完形の土師器坏が約20枚敷き並べられていた。これは井戸枠内が完全に埋没した段階で行われた閉鎖時の祭祀であろう。坏に何らかの有機物を入れて供えたと考えられ、モモなどの果実が想定される。

井戸枠の構造　縦板組と横板組を組み合わせる井戸枠構造(9)は、松阪市杉垣内遺跡(10)、同南山遺跡(11)、同堀町遺跡(12)で確認されており、平安時代前期から後期にかけての松阪市域の地域色といえそうである。(13)

なかでも、杉垣内遺跡の井戸は、構造だけでなく斎串や横櫛など祭祀遺物にも共通性が認められる。斎串は、９世紀末にはほとんどみられなくなり、代わって陰陽道祭祀が採り入れられることが指摘されている。(14) 横櫛についても平安京では10世紀以降ほとんど見られなくなるため、ＳＥ72は古代における井戸祭祀の最終段階に相当するといえよう。

3　朝見遺跡の牛馬と祭祀

朝見遺跡の牛馬骨　朝見遺跡では、平安時代から室町時代まで、全ての時代で牛馬骨が出土した（第58表）。このうち、ＳＫ48・ＳＥ72では祭祀の痕跡が明確に認められた。ＳＺ40は、断定はできないものの祭祀遺構である可能性がある。その他の遺構出土牛馬骨については、祭祀ではなく、農耕利用のため飼育され、投棄されたと考えるほうが妥当であろう。

松井章氏は、各地の出土例から、確実に祭祀と考えられる例は「井戸に埋納されていた牛の頭蓋骨」と「水田の水路、または畦畔に穴を掘っておさめる」という２種類があるとしている。(15) 朝見遺跡の出土事例は、若干の差異はあるもののＳＫ48・ＳＥ72が前者、ＳＺ40が後者に相当するものと思われる。

古代の動物祭祀　牛馬を犠牲にする祭祀の実態については文献史料、民俗学、考古学など様々な視点から研究されている。

馬は、雄略紀頃から祓に用いられる御贖（祓物）として用いられ、『続日本紀』宝亀年間には祈雨・止雨のため神社に奉献されている。牛馬の犠牲を伴う祭祀は文献上にも散見され、例えば『日本書紀』皇極天皇元年（642）七月十五日条には日照りに際して村々で牛馬を殺し河の神に奉じていることを示す記事があり、『続日本日紀』天平13年（741）二月七日条には牛馬屠殺に罰則を課す記事がある。また、８世紀末から９世紀前半には殺牛の禁止令を示す記事が増加し、旱魃に対する雨乞いないしは漢神祭祀を国家が禁止している。

牛馬を殺す請雨儀礼は、古墳時代初頭の農耕儀礼に端を発する日本の固有の風習(16)であるのか、渡来人に由来する儀礼であるのかについて議論が分かれているが(17)、いずれにしても古代以来見られる祭祀の方法としての「殺牛・殺馬」は、度重なる国家の禁止令にも関わらず民間信仰として現代まで存続したことが確認されている。

ＳＫ48の土坑内に埋納された牛もしくは馬は、有機物のため朽ちてしまったと考えられる。この祭祀は、常に清浄な水が湧きだすことを願うもの、もしくは雨乞いが目的で、その対象は土師器坏が供えられた祭祀大溝ＳＤ47と思われる。

ＳＥ72では、若齢馬の頭蓋骨と大腿骨片が出土した。共伴した遺物の内容から、雨乞いや農業用水確保の儀礼というよりも「井神に奉献された」とみるほうがいいように思える。桜井秀雄氏は、井戸か

ら出土した牛馬遺存体を「歯や骨そのもののもつ呪力に期待して、歯や骨を投入する呪術的祭祀行為のあらわれ」[18]としているが、ＳＥ72の事例はこのような信仰のひとつなのかもしれない。[19]

なお、朝見遺跡周辺では、堀町遺跡の平安時代末の土坑ＳＫ６で牛の骨が見つかっており、何らかの儀礼的な意味合いを持って埋納された可能性が指摘されている。[20] 斎宮跡第61次調査では、平安時代前期の井戸ＳＥ4050から、刀子形木製品と馬歯が出土しており、廃絶時の祭祀に関わると考えられる。[21]

中世の動物祭祀　７－１区ＳＺ40では、牛と馬が散乱状態で出土した。土師器小皿、火付木、木札状木製品が共伴しており、石組は水利施設とは考えられないことから、条里溝と大溝の分水地点で獣骨を用いた雨乞い祭祀が行われた可能性を指摘しておきたい。ただし、頭骨のみではない点、頭頂部が破砕されている点から投棄されただけの可能性も残る。

文献資料や民俗学の視点から、動物祭祀は中世に変質することが確認される。同じ殺牛馬を伴う雨乞いでも、古代の「動物＝生贄･供物」という発想は、中世に「動物＝穢れ」という意識となり、聖地を骨や血で穢すことによって神の怒りを誘って降雨を得るという思想に転換したことが指摘される。[22] したがって、ＳＺ40については、このような中世の情景を想定しておきたい。

4　平安時代の遺物

平安時代の大溝群からは、整理用コンテナケース約80箱の土器が出土した。本項では平安時代の出土遺物について種類ごとに整理を行い、様相を概観する。墨書土器については別項を設け後述した。

土師器　土師器坏の形態は、器壁が薄い斎宮編年第Ⅱ期第３段階（850～900年）のものと、坏と椀の区別が難しくなり色調が白っぽくなる第Ⅱ期第４段階（900～950年）のものに分類され、それぞれ大溝の最下層と最上層で主体となる。大溝最上層からはロクロ成形の土師器が出土する。

斎宮跡出土の土師器類は、古代の有尓郷域内で製作されており、この有尓郷産土師器は飯野郡内の琵琶垣内遺跡にも供給が認められる。[23] 一方、飯高郡の土師器類は有尓郷産土師器ではなく、一志郡の土師器類は京ないし畿内的な様相を示している。[24] 平安時代における朝見遺跡や堀町遺跡の土師器類は、形態・胎土ともに斎宮跡出土資料と近似する。したがって、櫛田川下流域は有尓郷産土師器の供給エリアであった可能性が高く、多気郡や斎宮跡との関わりが濃い地域といえる。

須恵器　器種は甕が主体で、瓶類が数点みられる。産地は、実測図を掲載しなかった体部片を含め猿投窯産が７～８割ともっとも多く、いくつかには黄土の塗布がみられた。内面に同心円状のタタキ痕がある美濃須衛窯産や、在地の伊勢産は少ない。[25]

ＳＤ52出土坏（1302）は美濃須衛窯産である。

越州窯系青磁　越州窯系青磁は中国浙江省・福建省で焼かれる器で、日本には９世紀から10世紀にかけて椀類を中心に将来される。三重県内では、平安京と密接な関係を有する斎宮跡が突出した出土量を誇るが、その他は東裏遺跡[26]、木造赤坂遺跡[27]、堀田遺跡[28]など数例のみで、希少性は高い。

朝見遺跡の越州窯系青磁椀（675）は、薄く精良な磁胎で、淡黄灰色の釉が均質にかかる。蛇ノ目高台の高台幅が狭いことから、輪高台になる直前の時期にあたり、大宰府編年Ⅰ－ｂ類に相当し、９世紀中頃の浙江省産と考えられる。[29] 器種は椀と考えられるが､高台の径が狭いため唾壺の可能性もある。

緑釉陶器　第１次調査は破片数２点、第２次調査は破片数269点、あわせて271点が出土した。このうち実測図を掲載した個体は94点で、器種は圧倒的に椀･皿類が多い。そのほかは瓶類11点､唾壺３点、耳皿１点で、瓶類には陰刻花文が描かれる猿投窯産破片（1299）を含む。なお、実測しなかった破片は全て椀・皿類である（第60表）。

出土遺構の分布は、ＳＤ47最上層とＳＤ53上層がその大半を占める。最上層では投棄された状態で出土しており、遺物の時期幅は大きい（第61表・第114図）。

三重県下における緑釉陶器の出土量は、斎宮跡が突出した量を誇り、次に津市六大Ｂ遺跡[30]で約670点､伊賀国府跡[31]で約400点､津市位田遺跡[32]で270点である。出土量は位田遺跡とほぼ同数であるが、朝見遺跡の発掘調査は今後も継続するため、さらに上回る可能性が高い。

今回、平安京出土土器編年[33]に基づき、緑釉陶器の時期・生産地の検討を行った。[34]

まず時期ごとの状況を見ていく（第113図）。9世紀前半頃の形態をした緑釉陶器は少量認められ、いずれも猿投窯産である。平安京Ⅱ期中段階～中段階新相は猿投窯産・東海系が急激に増加し、131点が出土している。猿投窯産緑釉陶器の釉の色は9世紀末に黄色から緑色に変化するが、朝見遺跡の緑釉陶器は双方の色が見てとれ、ちょうど転換期の様相を示している。灰釉陶器のピークも当該期にあたることから、朝見遺跡への施釉陶器の搬入は9世紀第3四半期の半ばから900年頃にかけて最盛期を迎えると考えられる。続く平安京Ⅱ期新段階になると、猿投窯産・東海系の出土が全くなくなり、京都系のみが確認される。平安京Ⅲ期古段階から中段階は、近江・美濃産が搬入される。

次に産地別に見ていくと、猿投窯産がもっとも多く123点で、ほとんどの個体が平安京Ⅱ期中段階から中段階新相に併行する。陰刻花文は椀類2点、瓶類2点に認められる。緑釉の濃淡により花文を描く緑釉緑彩陶器は11点で、器種は全て椀である。

京都系は24点で、小塩窯と篠窯の2系統が確認される。内訳は、小塩窯4点、篠窯19点、小塩もしくは篠窯とされるものが1点である。

美濃ないし近江産の時期は10世紀で、近江産が36点と若干多く出土している。

ガラス質の釉薬がみられる椀（713・714）は、防長産（長門産）もしくは東海系と考えられる。[35]緑彩が口縁部から垂れる手法は猿投窯産には見られない特徴であるが、防長産の緑彩は口縁端部から垂れるのが一般的であるのに対し、713は口縁端部から若干離れた位置から施釉されていることから、施釉方法から産地の断定はできない。産地を明確に特定することができないため、ここでは可能性を指摘するに留めておきたい。

灰釉陶器　多量に出土したため総出土量は不明であるが、高台径がよく残る191点を報告書に掲載した。器種は椀・皿類が圧倒的に多く、その他は瓶類が22点、短頸壺が3点、耳皿が1点、三足盤の脚と考えられる個体が1点である。

ＳＤ47における灰釉陶器の椀・皿類は、器壁が薄く、いわゆる「三日月高台」を有し、猿投窯黒笹90号窯式期の様相を示すものが主体である。ただし、黒笹14号窯式期の様相を示すものも一定量出土している。灰釉陶器窯編年表では、黒笹14号窯式期と黒笹90号窯式期は型式が重複する時期があることから、灰釉陶器がもっとも搬入された時期は、猿投窯系Ⅵ期古～中段階、9世紀半ば過ぎから10世紀初頭頃の時期幅を想定したい。[36]

施釉方法を明確に観察できる個体は少ないが、刷毛塗り・漬け掛けともに複数点観察された。

また、自然降灰によって見込みに重ね焼きの痕跡が残る個体など、刷毛塗りや漬け掛けといった人工的な施釉方法ではなく自然降灰による釉薬状の膜が張られている場合が多い。（相場）

志摩式製塩土器　志摩式製塩土器の出土量は、総重量約62kgに達する。三重県において、志摩式製塩土器がほぼ完全な形で出土している遺跡は伊賀市歌野遺跡[37]・伊賀市三谷遺跡[38]・伊勢市高向遺跡[39]の3個所であり、歌野遺跡での1個体の重量は、ほぼ805ｇ（復元）である。したがって当遺跡から出土した点数は、重量的にみて、約78個体に及ぶと判断される。そして掲載点数は、181点である。このうち、ＳＤ47炭層出土の製塩土器は76個体分である。

ここで、志摩式製塩土器について若干の考察を行う。旧伊勢・伊賀・志摩国の製塩は、塩釜を使用していたと考えられる。その理由は、『日本三代実録』に存在する。[40]『日本三代実録』は天安2年（858）から仁和3年（887）までの30年間を扱っている。その中で、貞観17年(875)十一月及び十二月条に「庶人伴善男没官懇田、陸田、山林庄家、稲、塩浜塩釜等在諸国。皆充造京城道橋料」とある。つまり伴（大伴）善男が諸国に財産を有し、その中に塩浜や塩釜を有していたことが知れる。さらにその諸国の中で旧伊勢国に私有地が多かったことが判明している。したがって塩浜や塩釜は、旧伊勢国に属した可能性が高いと判断できる。仮に他国であったとしても、効率的な塩釜による製塩方法は、旧伊勢国に導入されていたと考えられる。つまり9世紀後半には塩釜による製塩方法が導入されていたと言えよう。また、大伴氏と製塩が関わりの深い可能性も考えられる。

そして志摩式製塩土器は、これまでの研究成果[41]

から８世紀を初源とされ、三重県各地での出土が認められるものである。たとえば斎宮跡では、９世紀から10世紀に最盛期を迎えたように出土する。つまり、塩釜で製塩が行われている一方で、志摩式製塩土器も出土している状況である。つまり、志摩式製塩土器は、煎熬容器の可能性がかなり低いと言わざるを得ない。結論として志摩式製塩土器が出土するということは、すでに土器製塩から鉄釜へとかなりの早い時点（８世紀）で転換したことを示している。

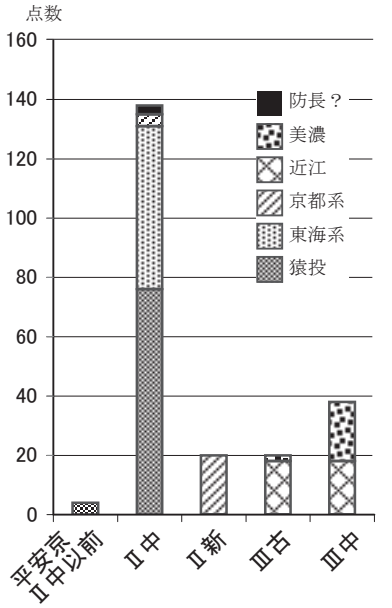
当遺跡の志摩式製塩土器は県内においてもトップレベルの出土量である。そして、消費地と推測される。塩の消費が多い要因は、１つ目に牛馬の生産[42]、２つ目に祭祀に関わって使用、３つ目に牛馬の肉食に調味料として使用された可能性があろう。１と３つ目の使用理由は、牛馬骨が多く出土していることである。２つ目の理由は、斎串や祭祀に使われた可能性がある墨書土器が多く出土することなどから推測できよう。（萩原）

土錘　朝見遺跡からは、150点を超える土錘が出土した。土錘の材質はすべて土師質である。

県内の土錘については、鈴鹿市大木ノ輪遺跡の調査報告において、細長い管状をなすＡ類（管系）と

第60表　緑釉陶器の時期・生産地・器種分類結果

時期	生産地	器種					破片数	全体比
		椀	皿	瓶類	唾壺	耳皿		
Ⅱ期中段階以前	猿投	3		1			4	1.5
Ⅱ期中段階（870～900年頃）	猿投	35	3	8	2		48	17.7
	東海系	51					51	18.8
	京都系	4					4	1.5
	防長？	3					3	1.1
Ⅱ期中段階新相	猿投	28					28	10.3
	東海系	4					4	1.5
Ⅱ期新段階（900～930年頃）	京都系	19	1				20	7.4
Ⅲ期古段階（930～960年頃）	美濃	2					2	0.7
Ⅲ期古～中段階	近江	34		1		1	36	13.3
Ⅲ期中段階（960～990年頃）	美濃	17	1	1	1		20	7.4
時期不明	猿投	43					43	15.9
	美濃か近江	7					7	2.6
	不明	1					1	0.3
	合計	251	5	11	3	1	271点	100.0%

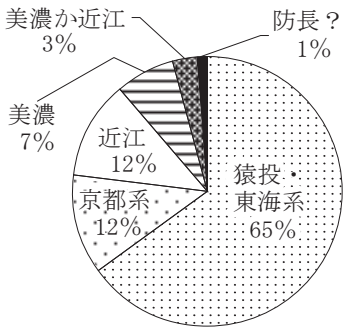


近江産は、Ⅲ古～中段階の時期幅がみられるため、36点をⅢ古・Ⅲ中で２分した。

第113図　緑釉陶器生産地の推移

第61表　ＳＤ47出土緑釉陶器の時期・生産地

時期	生産地	遺構			破片数
		最下層	中層	上・最上層	
Ⅱ期中段階以前	猿投			1	1
Ⅱ期中段階	猿投	1	5	9	15
	東海系		3		3
	京都系	1		1	2
Ⅱ期中段階新相	猿投	1		8	9
	東海系	3		60	63
Ⅱ期新段階	京都系			13	13
	防長？			2	2
Ⅲ期古段階	美濃			1	1
Ⅲ期古～中段階	近江			17	17
Ⅲ期中段階	美濃		1	8	9
その他	美濃か近江			4	4
	不明			1	1
	合計	6	9	125	140



点数140

第114図　ＳＤ47出土緑釉陶器の生産地

玉状のＢ類（玉系）に分類される。[43] 今回、出土した資料について重量や形態の分析は行えなかったが、平安時代のＳＤ47最上層出土の土錘（第60図）87点はおおむねＡ類であった。大木ノ輪遺跡においても、平安・鎌倉時代の溝からはＡ類の出土が確認されており、時期的な差といえそうである。

土錘は、本来の用途は刺網や曳網といった漁労具であろうが、斎宮跡をはじめ内陸でも役所的な施設を伴う遺跡から多く出土する傾向があるため、漁労具としての用途以外にも、紡織具や精錬鍛冶の材料、祭祀遺物としての用途が想定される。

土馬　体部片１点（1278）が出土している。出土遺構は、大溝ＳＤ49上層である。

三重県内の土馬は、馬具の表現をもつ飾馬が多く、斎宮跡出土土馬の大半は飾馬である。[44] 今回出土した土馬の体部片は鞍の表現が認められないため裸馬と考えられるが、土馬の時期は平安時代であるため、裸馬である理由は小笠原好彦氏の指摘する年代差によるものと考えられる。[45]

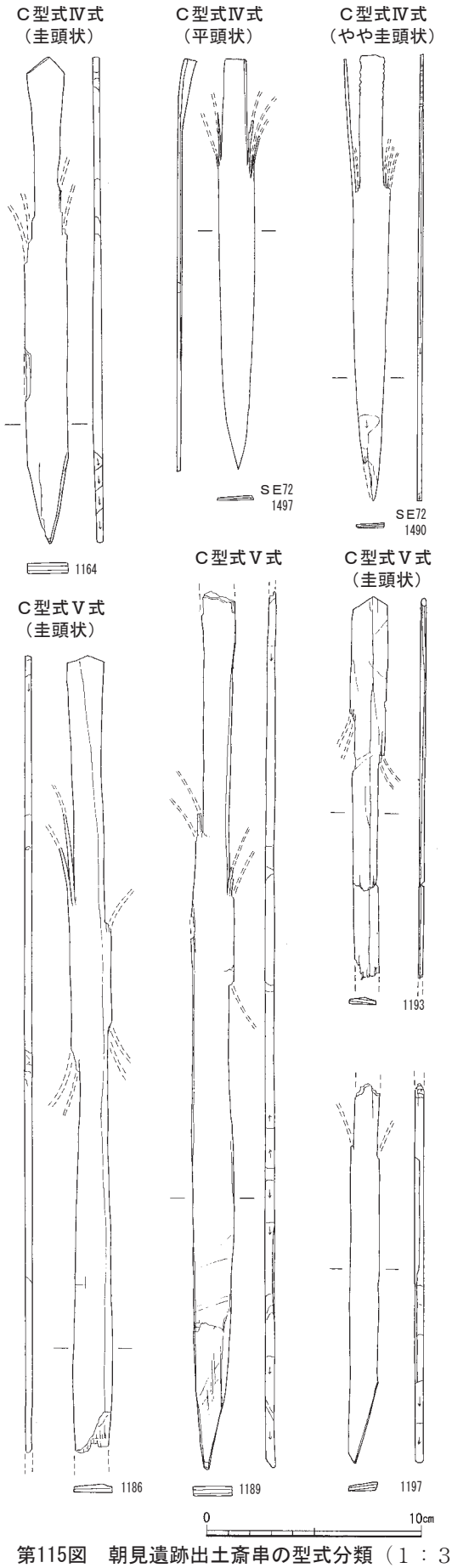
土馬の使用用途は、水神をまつる河川祭祀、もしくは祈雨祭祀と考えられる。同時期のＳＥ72・ＳＫ48では馬を犠牲とした祭祀が行われていることから、大溝出土の土馬も神に奉献されたものであろう。

木製品　井戸枠･曲物など器種はあまり多くないが、農耕具などの基礎的な生産用具がない点は、消費施設の様相と捉えることができる。

出土木製品は、井戸枠と曲物を除くと祭祀関連遺物の点数がもっとも多く、内訳は、斎串73点、刀子形木製品１点、鳥形木製品１点、紡織具２点１式、横櫛２点で、時期は全て９世紀末から10世紀前半の範疇におさまるものと考えられる。

斎串の出土遺構とその比率は、ＳＤ47（＝ＳＤ53≒ＳＤ66）が38本で52％、ＳＥ72が35本で48％である。斎串は『木器集成図録』[46] 型式分類によるＣ型式に分類され、上を圭頭状、下端を剣先状に作る。両端の形状と切込みの形状に視点を置くと、その中でも差異を見出すことができ、切込みは、『木器集成図録』において側面の左右２ヶ所以上に切込みを入れるⅣ式と、側面の上下左右２ヶ所以上に切込みを入れるＶ式の２系統に分類される。

斎串は、出土遺構によって形状が異なる点が特筆



第115図　朝見遺跡出土斎串の型式分類（１：３）

第 62 表　第１・２次調査出土墨書土器一覧

墨書	性格	報告番号	実測番号	質	器種	部位	調査次数	調査区	遺構	層位
衙	呪句？	450	039-02	土師器	坏	底外	2	7-3D	SD47	最下層
衙	呪句？	453	040-05	土師器	坏	底外	2	7-2	SD47	下層
衙	呪句？	456	063-11	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	最下層
衙	呪句？	457	040-09	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	下層
衙	呪句？	458	040-08	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	下層
衙	呪句？	459	040-07	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	下層
衙	呪句？	471	039-01	土師器	坏	底外	2	7-2	SD47	中層
衙	呪句？	1067	038-04	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
衙	呪句？	1068	038-01	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
衙	呪句？	1239	040-02	土師器	皿	底外	2	7-2	SD49	下層
衙	呪句？	1241	040-03	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD49	下層
衙	呪句？	1411	056-03	土師器	坏	底外	2	7-4	廃土	－
衙	呪句？	1446	044-03	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SE72	枠内最下層
衙	呪句？	1568	044-01	土師器	坏	底外	2	7-5	SE72	堀方
衙	呪句？	1629	043-02	土師器	坏	底外	2	7-5	SD66	下層
衙	呪句？	1115	040-06	黒色土器	椀	底外	2	7-2	SD53	上層
衙	呪句？	1449	059-01	黒色土器	椀	底外	2	7-5	SE72	枠内最下層
衙	呪句？	1656	046-01	灰釉陶器	椀	底外	2	7-5	SD66	上層
衙に類似	呪句？	1039	038-03	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	最下層
衙に類似	呪句？	1641	045-03	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SD66	下層
葉	不明	455	042-03	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	下層
葉	不明	564	042-04	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	上層
葉	不明	1240	039-04	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD49	下層
葉	不明	1246	039-03	灰釉陶器	椀	底外	2	7-2	SD49	下層
葉ヵ	不明	1250	057-03	土師器	坏	底外	2	7-4	SD49	上層
業	不明	1238	057-06	土師器	坏	底外	2	7-2	SD49	下層
業の一部？	不明	503	040-01	灰釉陶器	椀か皿	底外	2	7-2	SD47	下層
第ヵ	不明	1112	037-07	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	上層
粂	呪句？	1445	043-01	土師器	坏	底外	2	7-5	SE72	枠内最下層
（草冠）	不明	659	064-09	土師器	甕	体外	2	7-2	SD47	上層
（草冠）	不明	452	057-04	土師器	坏	底外	2	7-3D	SD47	最下層
成	吉祥句	1038	056-01	土師器	皿	底外	2	7-4	SD53	最下層
成	吉祥句	1040	037-03	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	最下層
成	吉祥句	1065	038-02	土師器	皿	底外	2	7-4	SD53	中層
成	吉祥句	1667	056-06	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SD67	－
成ヵ	吉祥句	1033	064-01	土師器	坏	底外	2	7-4	SD53	最下層
成ヵ	吉祥句	1420	036-02	灰釉陶器	椀	底外	2	7-4	廃土	－
官	官司	1421	167-05	灰釉陶器	椀	底外	2	7-2 7-4	廃土	－
官	官司	1034	036-01	土師器	坏	底外	2	7-4	SD53	最下層
官	官司	1062	056-02	土師器	坏	底外	2	7-4	SD53	中層
再ヵ	不明	460	039-05	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	下層
再ヵ	不明	1113	040-10	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD53	上層
南	方位	1458	058-01	土師器	甕	体外	2	7-5	SE72	枠内最下層
南	方位	1636	043-03	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SD66	下層
南	方位	1637	044-04	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SD66	下層
南	方位	1642	045-04	土師器	鉢か	底外	2	7-5	SD66	下層
西	方位	1413	058-02	土師器	坏か皿	底外	2	7-2 7-4	廃土	－
美	吉祥句？	451	057-05	土師器	坏	底外	2	7-2	SD47	下層
貢	吉祥句？	1066	037-05	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
令	呪句？	1567	045-01	土師器	坏	底外	2	7-5	SE72	堀方
廾	祭祀	1046	036-04	灰釉陶器	椀	底外	2	7-4	SD53	最下層
至良？	吉祥句	15	11-05	土師器	坏	底外	範	40	SD	不明
口木？	不明	1633	044-02	土師器	皿	底外	2	7-5	SD66	下層
皆口ヵ	人名?	1647	047-01	土師器	皿	底外	2	7-5	SD66	上層
不明	不明	1064	037-01	土師器	皿	底外	2	7-4	SD53	中層
不明	不明	1259	037-02	土師器	甕	体内	2	7-4	SD49	上層
不明	不明	1307	036-03	灰釉陶器	皿	底外	2	7-4	SD52	下層
破片資料	不明	454	041-04	土師器	坏	底外	2	7-2	SD47	下層
破片資料	不明	461	064-05	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	最下層
破片資料	不明	462	064-06	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	最下層
破片資料	不明	463	064-04	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	最下層
破片資料	不明	464	063-10	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	最下層
破片資料	不明	465	056-05	土師器	坏	底外	2	7-2	SD47	下層
破片資料	不明	466	057-02	土師器	坏か皿	底外	2	7-3D	SD47	下層
破片資料	不明	467	056-04	土師器	坏	底外	2	7-2	SD47	下層
破片資料	不明	468	064-08	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	最下層
破片資料	不明	477	041-06	土師器	甕	体内	2	7-2	SD47	下層
破片資料	不明	560	041-03	土師器	坏	底外	2	7-2	SD47	最上層
破片資料	不明	561	254-02	土師器	坏	底内	2	7-2	SD47	最上層
破片資料	不明	562	041-02	土師器	坏	底外	2	7-2	SD47	最上層
破片資料	不明	563	042-01	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	上層
破片資料	不明	565	063-02	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	最上層
破片資料	不明	566	042-02	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	上層
破片資料	不明	567	042-06	土師器	坏か皿	底外	2	7-3D	SD47	最上層
破片資料	不明	568	041-05	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	上層
破片資料	不明	569	040-04	土師器	坏か皿	底外	2	7-2	SD47	上層
破片資料	不明	570	057-01	土師器	坏か皿	底外	2	7-3D	SD47	上層
破片資料	不明	1032	058-03	土師器	坏	口外	2	7-4	SD53	最下層
破片資料	不明	1041	037-04	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	最下層
破片資料	不明	1061	038-05	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
破片資料	不明	1063	038-06	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
破片資料	不明	1069	063-09	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
破片資料	不明	1070	064-02	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
破片資料	不明	1071	063-04	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
破片資料	不明	1072	064-07	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
破片資料	不明	1073	063-07	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
破片資料	不明	1074	064-03	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
破片資料	不明	1075	063-08	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	中層
破片資料	不明	1106	041-01	土師器	坏	底外	2	7-2	SD53	上層
破片資料	不明	1114	063-03	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD53	上層
破片資料	不明	1253	037-06	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	SD49	上層
破片資料	不明	1360	063-06	土師器	坏か皿	底外	2	7-4	包含層	－
破片資料	不明	1444	107-02	土師器	坏	底外	2	7-5	SE72	枠内最下層
破片資料	不明	1630	072-08	土師器	小皿	底外	2	7-5	SD66	下層
破片資料	不明	1631	045-02	土師器	坏	底外	2	7-5	SD66	下層
破片資料	不明	1632	063-01	土師器	坏	底外	2	7-5	SD66	下層
破片資料	不明	1634	046-03	土師器	皿	底外	2	7-5	SD66	下層
破片資料	不明	1635	046-02	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SD66	下層
破片資料	不明	1638	063-05	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SD66	下層
破片資料	不明	1639	044-06	土師器	坏か皿	底外	2	7-6	SD66	下層
破片資料	不明	1640	044-05	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SD66	下層
破片資料	不明	1649	047-02	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SD66	上層
破片資料	不明	1650	046-06	土師器	坏か皿	底外	2	7-5	SD66	上層
破片資料	不明	1666	047-03	土師器	皿	底外	2	7-5	SD67	－
破片資料	不明	235	144-04	灰釉陶器	皿	底外	2	7-1	SD38	－
破片資料	不明	1232	099-07	灰釉陶器	椀	底外	2	7-2	SK48	－

このほか、実測図を掲載しなかった小片が 24 点あり、いずれも土師器底部外面の破片である。未実測資料の内訳はＳＤ 47 最下層３点・同上層２点・最上層１点、ＳＤ 66 下層４点、同上層３点、ＳＤ 53 中層６点、同上層２点、ＳＤ 67 １点、廃土２点である。

される。大溝ＳＤ47・ＳＤ53出土斎串は全体的に分厚いことが特徴で、その型式分類は、全体像がわかる27点のうちＣ型式Ⅳ式が17点（63％）、Ｃ型式Ⅴ式が10点（37％）である。上端の形状は圭頭を忠実に再現するもの（1164）が主体であるが、Ｃ型式Ⅴ式にはやや緩やかに山状を呈するもの（1180・1191～1193）が数点みられる。Ｃ型式Ⅴ式のうち３点（1195～1197）の切先は、ほぼ剣先状だが一側面から鋭く切込まれるタイプである。

一方、ＳＥ72出土斎串はすべてＣ型式Ⅳ式で、大溝出土斎串に比べて厚みは薄い。上端の形状は、一見平頭状を呈するものが約半数を占めるが、これらは詳細に観察するとわずかながら圭頭状を意識して製作された痕跡があることから、分類上Ｃ型式とした（1497など）。切先はおおむね剣先状で、２点のみ一方向から切り落とされる形状をとる。ＳＥ72からは、Ｃ型式Ⅳ式のうち上端側面に細かい刻み目を施すものが１点（1490）だけ出土しており、これは『木器集成図録』Ⅵ式を意識している可能性がある。

朝見遺跡と同時期、同様の祭祀が行われたと考えられる堀町遺跡の斎串型式分類比率は、全体の98.6％がＣ型式にあたり、なかでもⅣ式・Ⅴ式が約半数を占めるなど、似た傾向を示している。[47] 平頭状の斎串は、杉垣内遺跡ＳＥ24[48]で同様の形態がみられるが、形状や厚みに時期・遺構差は認められないため、現時点では製作者の差と捉えておきたい。

刀子形木製品は、柄部分は欠損していて観察できない。刀身は両側から削り、先端は斜めに切り落として切先を表現している。同じような刀子形木製品は、斎宮跡第61次調査ＳＥ4050から馬歯とともに出土している。[49]

金属製品・鉄滓　ＳＤ47炭層からは、鍛鉄が出土している。鉄鍋片は鍛造品で、製品として利用したのち鍛冶原料にするため小片にされる。土器片が付着した刀子は精錬鍛冶に関わるとみられる。自然科学分析の結果、椀形鍛冶滓類は鍛錬鍛冶滓であった。

このように、出土量は少ないながらも複数種類の古鉄の出土が認められることから、金属製品の鍛錬鍛冶工房が遺跡内に存在していた可能性が高い。これは、当該期における一般的な集落の鍛冶レベルを上回るものであり、末端官衙に付随する官営工房のような役割を想定したい。（相場）

5　平安時代における墨書土器の傾向

a　墨書土器の概要

文字資料の総数（第62表、第121・122図）　平安時代における墨書土器の総数は130点で、画数が２角以上、もしくは筆遣いのわかる106点を図化・掲載した。文字の観察は肉眼観察を基本とし、状態に応じて土器の墨書部分を湿らせた上での観察や、赤外線カメラによる確認を併用した。[50]

当遺跡では大溝や井戸から斎串を含む良好な木製品が出土しているものの、木簡は出土していない。また、井戸枠の表面には、「↑」に類した記号は認められたが、こちらにも文字資料は見られなかった。

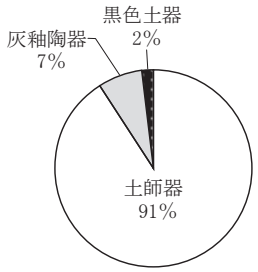
土器の種類と器種（第63表・第116図）　墨書される土器の種類は、土師器が119点ともっとも多く全体の９割以上を占め、残りは灰釉陶器が９点、黒色土器が２点である。須恵器は墨書が認められないが、これは出土した器種に甕が多いためと考えられる。

土器の種類ごとに器種構成を確認する。破片資料が多いため詳細な比率は不明であるが、土師器は坏が27点ともっとも多く、皿は９点である。坏もしくは皿と考えられる破片資料を合わせると、土師器食膳具が圧倒的に多い。そのほか、土師器甕が４点、鉢が１点ある。黒色土器は２点とも椀で、灰釉陶器は椀が６点、皿が２点、椀もしくは皿が１点である。

部位の検討（第117図）　食膳具の場合、底部外面に書かれる場合がほとんどである。側面に記される場合、文字が書かれる方向、つまり正位・倒位・側位のいずれであるかが墨書土器の機能を考える上で重要とされるが、土師器坏（1032）は破片資料であるため文字の全体像は窺い知れない。ただし、筆順から推測して側位の可能性が高い。

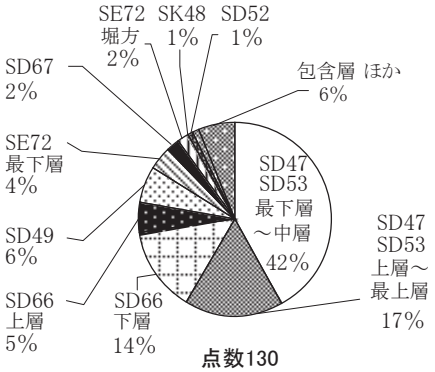
煮沸具は、土師器甕の体部外面が２点、体部内面が２点、土師器鉢の底部外面が１点である。体部内面に書かれた土師器甕（477・1259）は、破片資料であるため文字は釈読できなかった。

土器の使用痕跡　墨書土器、特に食膳具は何かを盛り付けるといった用途が想定されるが、明確に使用痕跡が見られる個体は認められない。また、意図的な破砕、いわゆる打ちかきは観察できず、油煙痕が



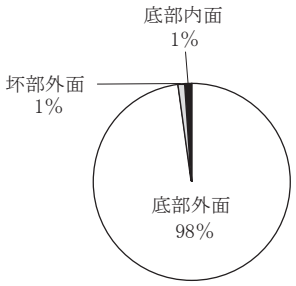
点数130

第116図　墨書される土器



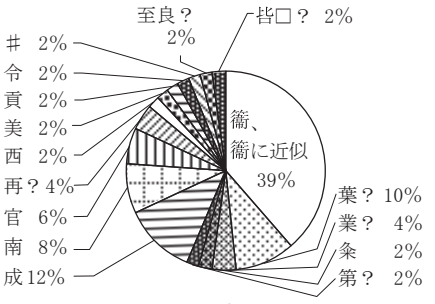
点数130

第118図　墨書土器出土遺構の比率



点数125

第117図　食膳具の墨書位置



点数51

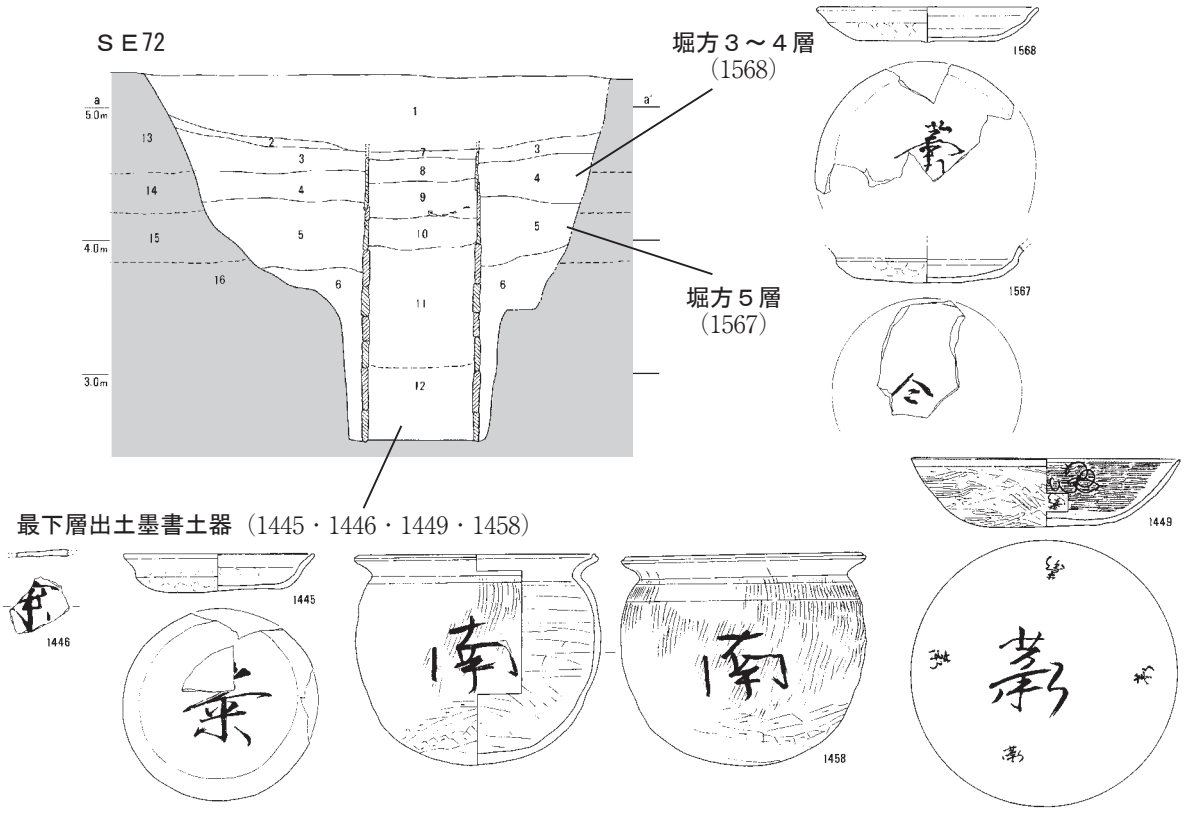
第119図　判読できる文字

第 63 表　土器の種類と器種

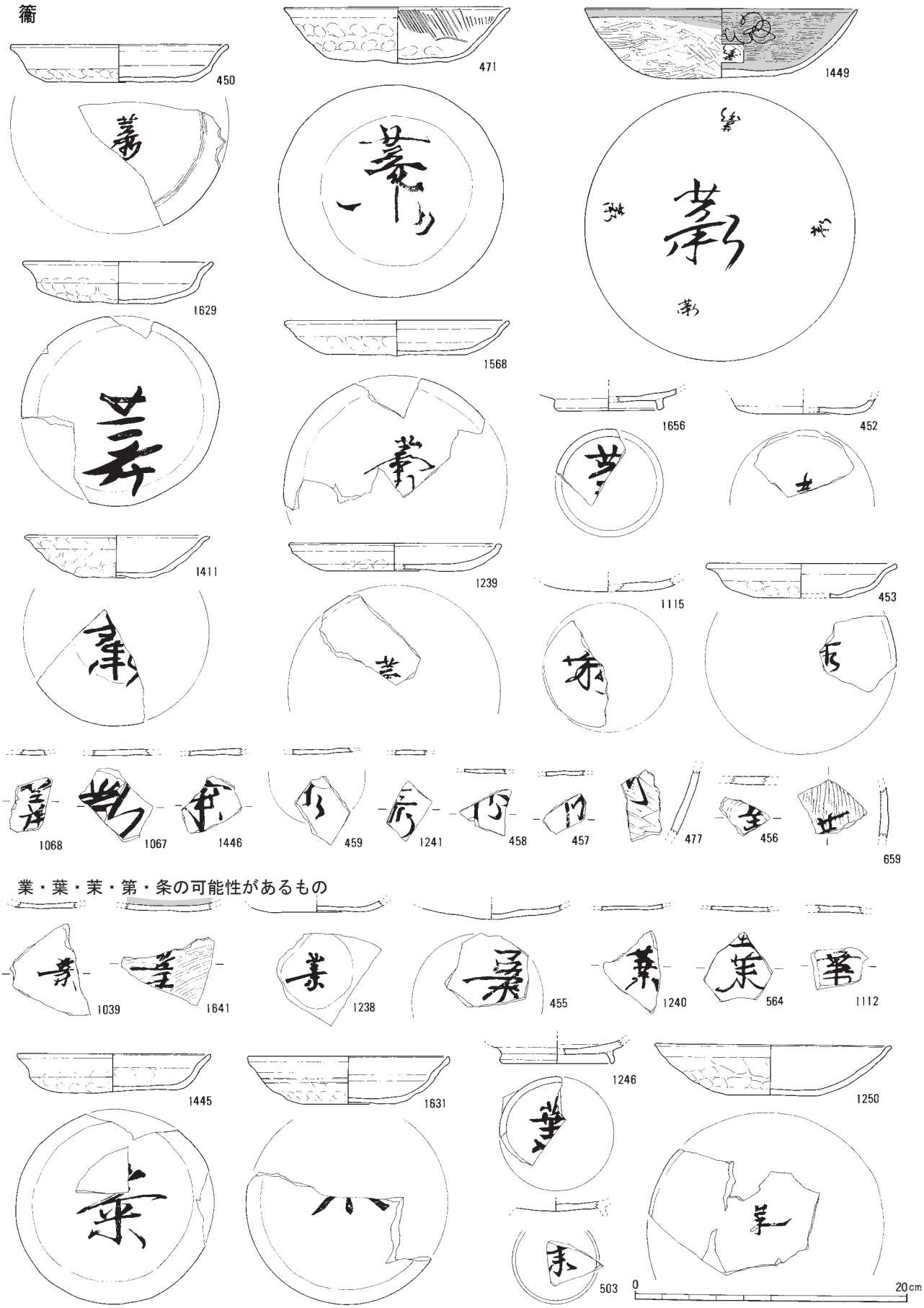
種	器種	点数
土師器	坏	27
	皿	9
	坏か皿	78
	甕	4
	鉢	1
黒色土器	椀	2
灰釉陶器	椀	6
	皿	2
	椀か皿	1
	合計	130

第 64 表　判読できる文字

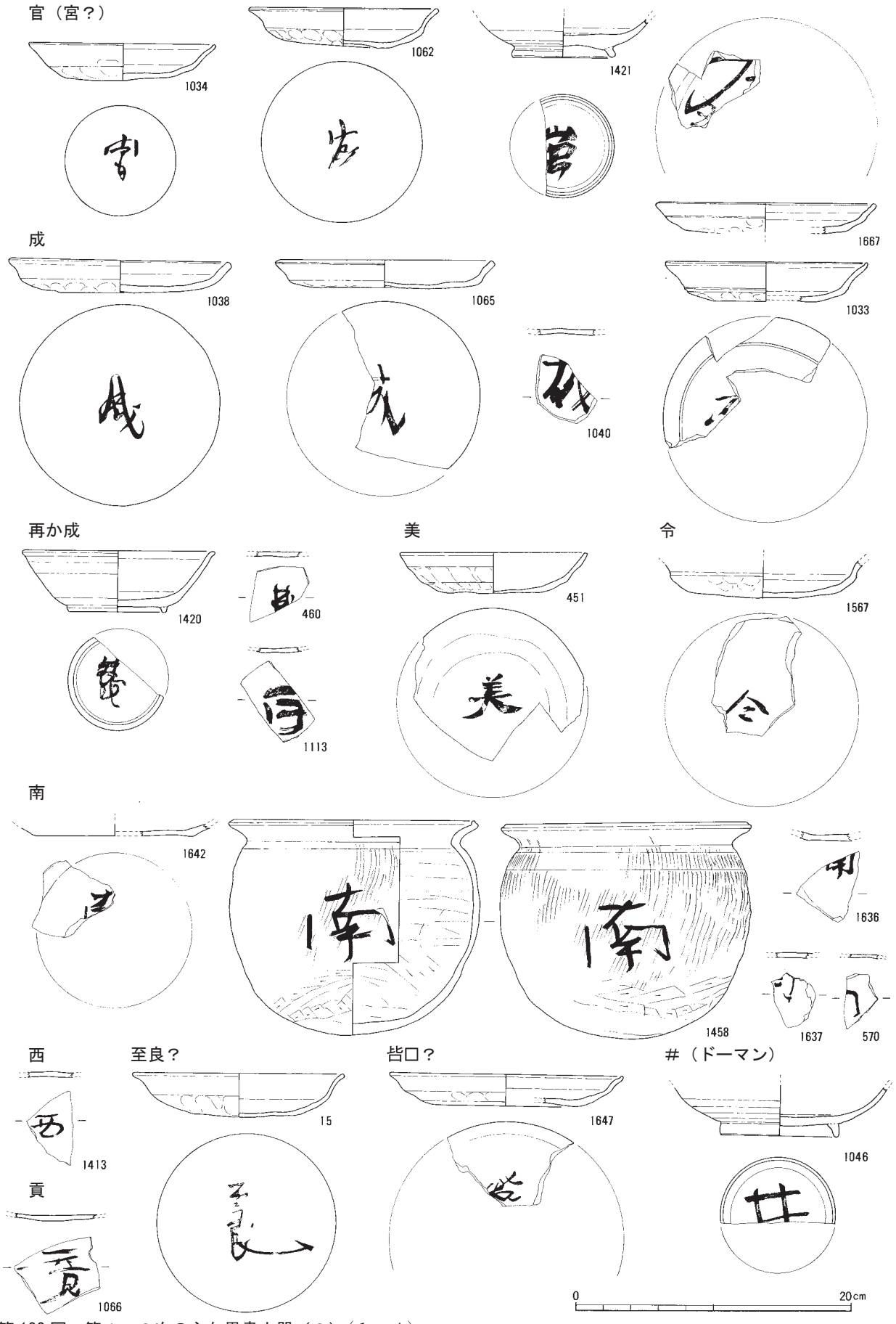
文字	点数
籌、もしくは 籌に近似	20
成	6
南	4
官	3
再？	2
葉？	5
業？	2
その他「一字」 （第、粂、西、美、 貢、令、廿）	各1
その他「二字」 （至良、皆口？）	各1
合計	51



第120図　ＳＥ72墨書土器出土位置図



第 121 図　第１・２次の主な墨書土器（１）（１：４）



第 122 図　第１・２次の主な墨書土器（２）（１：４）

残る個体もみられなかった。

文字を書いた人数　「籌」は様々な筆遣いがあり、複数の人が書いたことがわかるが、詳細な検討は行っていない。「南」と「成」は、同じ文字でも字の上手・下手が認められ、その他の文字についても基本的に同一人物の筆致はないものと思われる。

b　墨書土器の出土状況

墨書土器出土遺構（第118図）　墨書土器が出土した遺構はＳＤ47（＝ＳＤ53）、ＳＤ66、ＳＤ49、ＳＥ72、ＳＤ67、ＳＤ52である。同一の大溝とみられるＳＤ47（＝ＳＤ53）とＳＤ66から、墨書土器全体の79％が出土している。

遺構・層位ごとの状況　ＳＤ47・ＳＤ53最下層～中層からは54点が出土した。文字は「籌」がもっとも多く、次が「成」4点、「官」2点で、その他は「美」「＃」である。ＳＤ66下層18点を合わせると、墨書土器全体の約半数がこの層から出土している。完形品が多く、意図的に投棄された可能性が高い。

ＳＤ47・ＳＤ53上層～最上層22点とＳＤ66上層7点は、「葉」や「第」と読める個体が出土しているが、いずれも破片で、多量の遺物とともに小片化したものが捨てられたとみられる。

ＳＤ49は8点、ＳＤ52は1点である。破片資料が多いが、「籌」に類する文字が多い。ＳＤ47と隣接しているにも関わらず墨書土器の点数は少なく、この差は溝の性格を表していると考えられる。

ＳＥ72は、井戸枠内最下層から「籌」「南」「粂」、掘方から「籌」「令」が出土した。井戸枠内と掘方双方から「籌」が出土したことが特筆される。

c　文字の検討

記載内容　平安時代における墨書土器の性格については、多くの研究がなされている。(51) 第62表では、文字の性格について先学に従って「官司」（役職・身分や所有）、「地名・個人名」、「方位」、「吉祥句」、「祭祀」（呪術）に分類した。これ以外にも、数量を示すものや習書戯書的なものが知られているが、朝見遺跡第1・2次調査ではそれらは出土していない。

実測を行った105点のうち、釈読できた破片は51点である。以下に、分類ごとの詳細を示す。

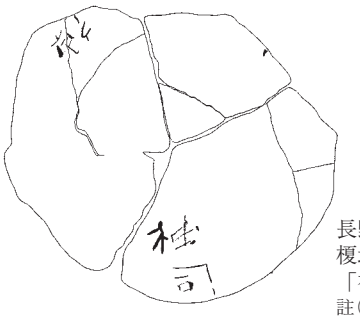
官司	官、第？
人名・地名	粂、皆□、□木
方位	南、西
吉祥句	成、至良、美
呪句？	籌、令、貢、＃
不明	葉、業

文字の検討　次に、文字の内容と意味を検討する。

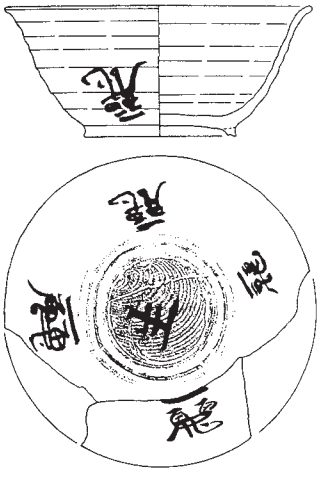
籌　ＳＤ47やＳＥ72といった祭祀遺構からの出土が多く、おおむね大きく一文字のみ書かれているため、吉祥句もしくは呪句である可能性が高い。本遺跡を代表する文字であるが、確実な釈読はできなかった。字のくずし方から、上は竹冠、下は「衛」が推測され、「守る」という意味合いが想定される。非常に書き慣れた筆致であることから、文字を良く知る人々が、2つの文字を組み合わせ、文字自体を一種のまじない記号のように作り上げた可能性が高く、護符的な性格が想定されるため、むしろ「読めない」点を重視することが重要なのかもしれない。

「籌」もしくはそれに近似する文字は20点出土し、判読できる墨書土器のうち39％を占める。「籌」「葉」「業」「第」など草冠、竹冠に類する部首を持つ文字は、全体の過半数を占める（第119図）。

黒色土器椀（1449）は文字の記載方法が特徴的



長野県
榎垣外遺跡
「神司」
註(52)から転載



山形県
今塚遺跡
「生」「麗」
註(53)から転載

第123図　多文字墨書土器の類例（スケール任意）

で、文字内容の解釈を考える上で注目される。官衙における墨書土器は通常実用的で、坏形土器の底部外面ないし体部外面に正位で記されるものが多い。一方、祭祀に伴う墨書土器は、神への祈り・伝達という意味合いが強く、文字が書かれる位置は土器の内面や、体部外面の倒位・横位など多様である。長野県榎垣外遺跡の墨書土器「神司」は、黒色土器椀（1449）と同じく文字が放射状に倒位で書かれている。[52] また、平安時代の地方官衙とされる山形県今塚遺跡では、四隅に「麗」、中心に「生」と書かれた須恵器が出土しており[53]、そのほか「麗」のみが書かれた土器も多数出土している（第123図）。

同じ文字を２ヶ所以上記す場合は、土器自体を結界に見立てていると考えられている。例えば実際に祭祀を行う際は斎串や幣で四隅を囲って中央（神がかったもの）を守るが、黒色土器椀（1449）は、その状況を土器上で表現していると思われる。これは「衞」の文字自体を護符と捉え、意味を「衛（守る）」とした推測を裏付けるものといえよう。

成　吉祥句で、６点が出土している。出土地点はＳＤ53が多い。成就する、という意味が考えられる。

南　方位を示す。４点全てが７－５区から出土している。このことから、７－５区周辺がある一定の位置からみた南であった、もしくは７－５区周辺が南に関する地名であったことが想定される。文字の筆致は、1458のみ大ぶりで様相が異なる。

ＳＥ72土師器甕（1458）は両面に「南」と書かれており、同じ文字が２ヵ所以上認められることから、黒色土器椀（1449）と同じく、土器上で結界を表現して甕の内容物を守っていたことが推測される。

葉　「衞」、「業」と類似する。朱墨の転用硯として用いられた灰釉陶器椀（1246）は、墨書土器として利用したのち硯に転用されたことが想定される。つまり、「葉」の字が書かれた個体は、「衞」のように溝や井戸に投げられることなく（投げ捨てることが最終目的なのではなく）、文字を書いたのち保管されていたことがわかる。そのため、「葉」は祭祀に関わる文字ではなく何らかの集団を現す可能性がある。

業　「衞」、「葉」、「第」と類似するが、意味は不明である。他遺跡でみられるものではなく類例はない。

第　「衞」、「葉」、「業」と類似する。「第」であるならば、屋敷地という意味であろうか。

粂　久米氏は武器・武具を司る氏族で、氏族を特定する用語以外に、「守る」という意味をもつ可能性が考えられる。なお、松阪市には久米町・佐久米町の地名が残るが、それらとの関わりは不明である。斎宮跡第19次調査において「久米」と読める平安時代後期の須恵器が出土している。[54]

西　方位を意味する。遺構に伴わない遺物であるため、どの地点を意識しているかは不明である。

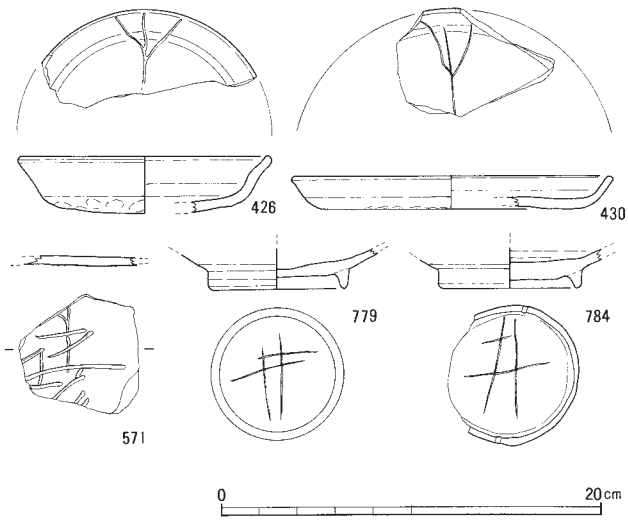
卄　水神に関わる祭祀的なドーマン記号である。[55] 墨書土器のほか、刻書土器も２点出土しており、器種はどちらも灰釉陶器椀である（第124図）。他遺跡でも多数見つかっており、堀町遺跡では、「卄」が線刻されたものが21点と多量に出土している。[56]

令　命令する、伝えるという意味をもつ用語で、同一の遺構から出土した「衞」と組み合わせた場合「守ることを命ずる」ととれる。松阪市赤部遺跡では、10世紀前半の溝から土師器坏「令」が２点出土しているが、これ以外の墨書土器や祭祀具は出土していないため、文字のもつ意味は不明である。[57]

貢　文字の通り、貢ぎ物に関わる可能性がある。供献用の器という意味であろうか。

美　１点のみ出土した。吉祥句であろうか。

至良　吉祥句もしくは人名である。範囲確認調査において１点のみ出土した。祭祀関係の文字は大きく太く書かれる傾向にあるが、15は比較的文字が小さく細く、字体も異なっていることから、地名や人



第124図　主な刻書土器（１：４）

名のような固有名詞の書き方に近い。

皆口　土師器坏の偏った位置に小さく書かれていることから２文字以上と想定され、人名の可能性がある。上半部は「此」の略字とみられ、「あざまろ」や「あざひと」などの人名が想定される。

ｄ　その他の文字関連資料

刻書土器　「○」や「×」など明らかに記号と認識できるものを除くと、５点確認された（第 124 図）。

426･430 はＳＤ 41･ＳＤ 43 出土の土師器坏･皿で、時期は９世紀中頃と大溝に比べやや古い。破片資料のため文字か記号かの判別はつかないが、坏部内面にヘラ書きされていることが特徴である。571 は土師器坏底部の刻書土器で、天地はわからないが文字の一部であろうか。779・784 は灰釉陶器椀の高台部で、細い針状の工具で「＃」が書かれている。

転用硯　ＳＤ 49 出土灰釉陶器椀（1246）は、底部外面に「葉」の墨書を持ち、底部内面に朱の付着が認められたことから転用硯と考えられる。朱墨は官衙で文書を訂正する際に用いる道具であるため、朝見遺跡の性格を考える上で非常に重要な資料である。ただし、自然科学分析の結果、朱墨の成分はベンガラではなく水銀朱であった。朱墨は一般的にベンガラが用いられるため、水銀朱の場合は工業用の墨、例えば製品加工などの用途も想定される。

ｅ　朝見遺跡における墨書土器の位置づけ

三重県内の墨書土器　次に、県内で平安期の官衙や富豪層居館地と推定される遺跡から出土した墨書土器を概観し、朝見遺跡と比較したい。８世紀の墨書土器は官衙出土例がほとんどで、実務や管理の必要性から官司的で複数字記入が特徴である。これに対し、９世紀以降になると集落遺跡でも吉祥句を一文字のみ記載する例が増加し、官衙でも一文字墨書土器が増加することが全国的に指摘される。(58)

斎宮跡は、県下でもっとも多くの墨書土器が出土しており、土師器を主体として使用する特殊性が指摘されている。(59)墨書土器の時期は平安時代が多く、「厨」「目代」「官」「膳」「殿司」といった斎宮寮の官司名・官職名を示すものが多数見受けられる。また、平安時代には、一般集落と同じように「万」「豊」「豊兆」「年平」といった吉祥句が増加する。(60)

桑名市柚井遺跡では、９世紀頃の土師器･須恵器･灰釉陶器で構成される墨書土器群に「平安」「加富」「萬」などの吉祥句と、「宅」に関わるものが何点かみられる。(61) 鈴鹿市高井Ａ遺跡は、奈良時代後半から平安時代後半の集落跡で、「井施」（井戸二施ス）と記された水に関わる祭祀遺物がみられる。(62) 朝見遺跡に近い堀町遺跡では、「上」「大吉」「宮」「律」「西」「秋木」などが土師器坏の底部に書かれている。(63)

このように、三重県内でも９世紀になると地方官衙・集落ともに吉祥句や祭祀的な意味合いの強い文字が増加する傾向を見てとることができる。朝見遺跡の墨書土器も、官司的なものより祭祀的な意味合いが強いこと、一文字墨書土器が多いことなど、全国的な９世紀の特徴と合致しているといえよう。

使用用途　最後に、墨書土器が何の目的で使用され、廃棄されたのかを具体的に考えていきたい。

９世紀代の東国の集落遺跡では、特定の文字を大量の土器の底部外面に書き投棄する行為が多くみられる。その場合、文字の種類は各遺跡で共通して用いられる極めて限定的なもので、字形も類似する。無文字社会に近い古代東国の状況下で、文字は一定の呪力を持ち得ていたのである。(64) 前述の柚井遺跡の墨書土器は、数人で大量に書かれたもので、なかには「なぞった」だけのものも見受けられ、東国型祭祀の最西端であるとする見方がある。(65)

朝見遺跡の場合、「鬻」の文字に代表されるように特定文字が護符的性格をもって多量の土器に記されている。「業」や「葉」についても、「鬻」の一部が変形した結果、本来の字形を離れ記号化したものと捉えられる可能性があり、出土状況は東国型祭祀と類似する。しかしながら、朝見遺跡出土墨書土器の特徴的な点は、文字の筆致が書きなれた人によるもので、草書に近い字形も認められることである。これは、東国における墨書土器研究の成果である「官衙出土資料は字が上手・一般集落出土資料は字が下手」という傾向と異なっている。つまり、文字の筆遣いからみた朝見遺跡は一般的な集落ではなく、東国型祭祀の類型に当てはめることはできない。

一つの文字を多量に書く必要性は、多数参加型の儀礼に用いるためと考えられる。この儀礼の内容は、結集する人々による大規模な飲食が推定されることが多い。三上喜孝氏は、地方社会における墨書土器

の用途として、農繁期の共同労働に伴う「魚酒」の神への供献と共同飲食行為を想定している。(66) また、８世紀後半から９世紀前葉にかけての官衙・神社関連遺構が検出された島根県青木遺跡では、多量に出土した墨書土器「伊」「家永」「秋永」「廣方」が、水田開発に関わる集団名を意味しているとし、この墨書土器が水田開発・経営の基盤となった共同体の執り行う農耕儀礼あるいは結盟儀礼を内容とする供飲供食儀礼で使用されたとしている。(67) 朝見遺跡における公的機関は、大溝の掘削と条里型地割の施工に関連する可能性が高く、青木遺跡と同様の性格を有しているといえる。ただし、「鬻」は集団などの固有名詞を示す文字ではなく、護符的性格としての意味合いが強い呪句と考えられることから、墨書土器が「供食の器」として用いられたとする根拠に乏しい。

供食儀礼以外では、地方官衙と目される山形県今塚遺跡の例が挙げられる。今塚遺跡では、平安時代の墨書土器が多量に投棄されており、その要因を「水辺で供物を捧げる供膳具として墨書土器が用いられ、使用後に一括廃棄（祓い）された」としている。(68) 朝見遺跡の墨書土器の用途も、現時点ではこのような水辺の祭祀で用いられた可能性を想定しておきたい。(69)

6　出土木製品の樹種

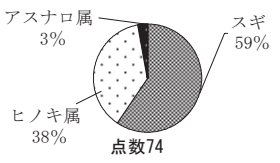
a　木製品における樹種の選択

井戸枠材の樹種　井戸枠にはスギが用いられている。近隣の堀町遺跡第１～４次調査においても、平安時代と鎌倉時代の井戸枠はおおむねスギ材で、僅かにヒノキ属、ツブラジイが見られる程度である。

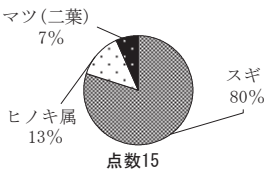
祭祀具の樹種　ＳＤ47刀子形（1198）とＳＤ66棒状製品（1662）がヒノキ属、ＳＤ47鳥形（1199）とＳＥ72紡織具(1518･1519)がアスナロ属であった。

斎串は、大溝および井戸から計74本が出土し、全て樹種同定を行い、このうち73本について図化･掲載した。斎串の樹種は、スギが44点と過半数を占め、次いでヒノキ属が28点、アスナロ属が２点であった（第125図）。ＳＤ47とＳＥ72の斎串は、遺構によって薄さと形態が異なっていたため、一種類の材を分割して製作したものと想定していたが、同定の結果、遺構に関わらずスギとヒノキ属が分け隔てなく用いられていた。このことから、斎串は一度に１本の材から作るのではなく、あらかじめストックされているであろうスギとヒノキ属の用材を適宜用いながら製作されたことがわかる。

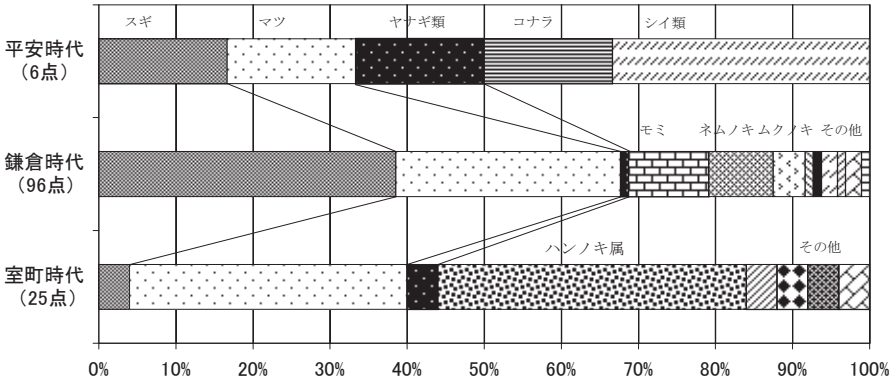
火付木の樹種　火付木、いわゆる「燃えさし」は平



第125図　斎串の樹種



第126図　火付木の樹種



第127図　杭における樹種選択の推移

第65表　杭の点数および樹種

時代（地区）	出土点数	杭の種類		樹種																
		丸杭	角杭	スギ	マツ（二葉）	モミ	ヤナギ属	コナラ	シイ類	ネムノキ	ムクノキ	アオダモ属	クリ	サワグルミ	ヤマグワ	ハンノキ属	アカメガシワ	クロバイ	マダケ属	同定せず
平安時代（7-4・5）	6	4	2	1	1	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鎌倉時代（7-1）	96	43	53	37	28	10	1	0	0	8	4	1	1	1	2	0	0	0	2	1
室町時代（5-2）	25	25	0	1	9	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	10	1	1	1	0

安時代～鎌倉時代にかけて15本が出土した。樹種同定の結果スギが12点と８割を占め、次いでヒノキ属､マツ（二葉）であった（第126図)。マツ（二葉）の時期はすべて中世である。火付木は手の平サイズの小さい材で使用は一過性であるが、油分が多く可燃性の高いマツより、乾燥させたスギ・ヒノキ属を用いていることから、杭のように身近に植生する材を選ぶのではなく、乾燥された生活用材の切れ端などを選ぶ傾向があるようである。

ｂ　平安時代から鎌倉時代における杭の樹種

杭の樹種　第２次調査では、平安・鎌倉・室町時代の杭127点が出土し、このうち125点を図化・掲載し､126点の樹種同定を行った（第65表･第127図)。

杭は、耐久性・加工性の求められる製品や建築部材と比べ、木材選択時にあまり付加価値を求める必要がない材である。製作時には遺跡周辺から材を調達していたと考えられるため、杭の樹種はもっとも身近な地域の植生を反映しているといえる。(70)

平安時代は点数が少なく、流路から点的に出土しているため検討材料に欠ける面があるが､鎌倉時代･室町時代の杭は堰の構築材であり、建築部材に用いられるヒノキやマキなどの転用がみられないことから、杭製作時に一括して材を調達したことが想定され、身近な植生を反映している可能性が高い。

同定の結果、全時代を通じてスギ・マツのほか、水辺を好むヤナギ類が認められた。以下に、時代ごとの特徴を記す。

平安時代　７－４区・７－５区から丸杭４点、角杭２点が点的に出土した。

点数は少ないが、コナラとマツが出土していることが特徴といえる。布谷氏の分析によると、コナラは「手つかずの森が伐採され、少し落ち着いてきた段階で明るい立地に落葉広葉樹の森が作られる」際の占有樹種であり、アカマツは「コナラなどの森をさらに利用。伐採すると、アカマツが優占する林になる」とされる。今回出土した杭はいずれも平安時代前期の遺構から出土しているため、コナラとマツの時期的な差は見いだせないものの、この時期には人の手によって何度も伐採が行われ、既に二次林が形成されていたことがわかる。(71)

なお、杭以外では、ＳＤ52最下層からマツを用いた板材（1338）が出土している。

鎌倉時代　７－１区の堰およびＳＺ40から96本の杭が出土した。内訳は丸太材を用いた丸杭43本、蜜柑割などの加工を施した角杭が53本である。主体はスギ・マツ・モミといった針葉樹で、材そのもののねじれや蜜柑割の加工痕から、ひとつの材を分割して複数の杭を製作したことがわかる。

マツは遺跡周辺から調達してきた樹種と考えられる。次に多いのはニレ科（ムクノキ・アオダモ属）とマメ科（ネムノキ)、マダケ属などである。

室町時代　５－２区の堰から25本の杭が出土し、いずれも丸杭である。堰は脆弱な構造で、角杭は認められない。

前時代に引き続きマツが多く認められる。次に多いハンノキ属は、遺跡周辺の植生と考えられる。

７　条里型地割の施工と朝見遺跡

ａ　櫛田川下流域の条里型地割

櫛田川下流域の歴史と立地　朝見遺跡のある櫛田川下流域の両岸には旧飯野郡条里型地割（方位は北で約15°東偏）が広がっている。当該地は現在に至るまで広大な範囲に条里景観が残っており、伊勢神宮の神三郡や、東寺領大国荘・川合荘が関係することから、比較的早い段階から注目される地域である。

伊勢神宮の神三郡は度会郡・多気郡・飯野郡であるが、その成立時期に違いがみられ、度会郡・多気郡が７世紀半ば頃に立評され神郡となっているのに対し、飯野郡は９世紀末に神郡化されている。これは、寛平元年（889）宇多天皇が飯野郡を神宮に一代限りの寄進をし、同９年（897）に永代の寄進がされたことによる。朝見遺跡の最盛期と考えられる９世紀末から10世紀初頭は、飯野郡がちょうど神郡化した時期に相当する。

飯野郡内では、櫛田川中流域の大国荘が弘仁３年（812）に、川合荘が延暦22年（803）に京都東寺に施入されるため、当該地の開発は初期荘園の成立とともに本格的に始まったと推測されている。

なお、東寺施入前の大国荘が元斎宮の布勢内親王領であったこと、両荘が12世紀に早々と退転する理由が神宮支配力の卓越性・在地領主や名主の台頭にあるとみられることは、当該地の性格を考える上

第128図　調査区と周辺の小字

で看過できない。

櫛田川下流域の条里制研究　多気郡・飯野郡の条里制研究は、大西源一氏によって始まる。(72)

倉田康夫氏は、櫛田川下流の左岸域について「部分的にしても早期に開発することの困難な地形」であるとし、開発時期は段丘部（５世紀後半～６世紀）にやや遅れる７～８世紀頃を想定している。(73)

谷岡武雄氏は、諸史料に基づきながら坪名と坪並の復元を試みている。その際、多気郡・飯野郡の郡界を現在の祓川の位置であるとした上で、坪並や条と里の呼称は郡を単位とするという原則に則り、飯野郡条里の範囲を櫛田川右岸域「漕代郷」「三宅郷」と左岸域「櫛田郷」「長田郷」までとした。(74)

また、星野利幸氏は神三郡、特に多気・飯野郡について、東寺領大国庄・川合庄に関する資料を用いながら条里の位置比定を試みている。(75)

地割型と地割の規模　一斉に広範囲が開発されたと考えられる沖積平野の平坦面は、長地型地割がもっとも多い。半折型は、朝見遺跡北東の微高地上に多くみられる。いわゆる「条里型集落」にあたる上七見・下七見町周辺は小型地割が混在する。

現地表面に残っている旧飯野郡条里プランを、2,500 分の１松阪都市計画図（平成５年版）上で測定すると、方格の辺長は東西 106 ～ 110 ｍ（平均 109.6 ｍ）、南北 108 ～ 120 ｍ（平均 109.9 ｍ）である（測定数 20）。これは、奈良盆地の平均 109.3 ｍという典型的なサイズに比べてやや大きい。(76)

朝見遺跡周辺の地籍図（第 128 図）　朝見遺跡周辺では、坪名から坪並が明確に復元できる小字は認められない。今回、地元での慣用地名聞き取り調査を行った結果、正式小字として採用されているうちのいくつかに相違が見られた。(77)

第 128 図のうち、溝や湿地に関わると考えられる小字は「雨田」「長田」「せき」「一ノ上堰」「二ノ上堰」「服保町（はらぼちょ）」「うなぎ」である。

神社に関わる地名は「宮ノ前」「山ノ神戸」「社」「坪社」がある。これらを現地の状況や発掘調査事例と照らし合わせると、まず第 128 図①の位置に所在する和屋町畠田神社および現在の居住域を含む小字が「宮ノ前」で、隣接して「山ノ神戸」がある。現在の居住域の北側には、地元からの信仰を集める「面塚」があることから、これらの小字は畠田神社ではなく面塚に対応する可能性もある。なお、明治 19 年頃の「伊勢国飯野郡和屋村全図」には第 128 図②③地点にも神社が認められるが、これは現在の畠田神社（同①地点）に合祀したものと想定される。

寺院に関わる地名は、「堂月」「塔ノ本」「大蓮寺」「あみだ後」「焼佛」がある。このうち、「大蓮寺」は発掘調査が実施されており、櫛田神社周辺の大雷廃寺との関わりが指摘されている。(78)

ｂ　朝見遺跡における条里型地割関連遺構

条里溝の規模　ここでは、実際に発掘調査で検出された条里溝の概要と機能時期を述べる（第 66 表）。ただし、調査区は幅が４ｍと細長い形状であるため、溝の幅や深さ、水田の面的広がりなど全体像を把握できる遺構は少なかった。また、現地表面と遺構検出面の比高差が約 30cm しかなく、耕作による削平を恒常的に受けていた可能性が高いため、畦畔を捉えることはできなかった。

調査の結果、耕地を区画する条里溝と認識できる溝を９条検出した。このうち一連の溝と考えられるものを除くと４条である。溝間の距離は、６区ＳＤ 90 と７－１区ＳＤ 35 で約 112 ｍを測る。

溝はすべて素掘りである。規模は様々で、大規模（幅３ｍ以上×深さ１ｍ以上）、中規模（幅３ｍ×深さ 0.6 ｍ）、小規模（幅 0.4 ｍ×深さ 0.2 ｍ）に分類される。中規模な溝が主体と考えられ、現在用いられている素掘りの用水路をみても、おおむね中規模クラスの溝が主体的に用いられている様が見てとれる。

条里溝の概要と時期　５区ＳＤ 35 では、11 世紀前半頃の溝と室町時代後期の溝が重複しており、坪界からは中世の木組の杭列を検出した。東西方向に走る条里溝ＳＤ 35 は条里溝ＳＤ 90 と一連の条里溝と考えられ、最下層の埋没時期は 11 世紀前半である。６－１区条里溝ＳＤ 90 の真上にはコンクリート製の用水路が走っており、現代に至るまで同一の場所を水路として利用していたことがわかる。

７－１区で検出した東西方向の条里溝は、平安時代後期から機能し、室町時代に埋没する。溝底では鎌倉時代後期の木組の杭列を検出し、この時期に大きな改修が行われたようすがうかがえる。

７－７区では、小規模な東西溝を１条検出した。

調査区は条里型地割の坪界にあたり、調査区の西側では同一方向の水路が現在も機能している。遺物の時期は鎌倉時代前半である。

c　条里型地割の施工時期と問題点

条里制研究における施工時期　発掘調査の結果、条里を区画する溝の最下層は11世紀前半に埋没したことが明らかになった。

条里制とは、律令制度の整備に伴って全国各地で行われた耕地の区画整備事業の総称で、条里呼称法が導入・整備されてプランが完成するのは８世紀中頃とされる。(79) ところが、発掘調査によって明らかになった条里型地割の施工時期は、平安時代や中世の時期を示すものが多い。例えば、三重県内においても、安濃川流域の条里型地割は平安時代末あるいは中世初頭以降の施工が推定される。(80) また、典型的な条里型地割分布地である奈良盆地の場合でも、田原本町多遺跡の条里型地割は平安時代中期以降の施工と考えられており、寺沢薫氏は盆地内の「景観的な条里」の形成時期は11世紀を遡らないと考えている。(81) 広瀬和雄氏は、発掘調査の結果から、畿内の条里型地割の景観が平安時代～鎌倉時代までしか遡らず、８・９世紀の時点ではまだ断片的な施工しか行われていなかったと指摘している。(82)

その要因は、時代ごとの目的や地形的な制約によるところが大きい。金田章裕氏は、律令制下で出発した「律令の条里プラン」が、９世紀に行政上の土地管理システムとして整備されたのち国司や国衙による「国図の条里プラン」として機能し、12世紀頃には「荘園の条里プラン」として再編・広域に施工された、と指摘している。(83) したがって、現在目にすることができる条里の景観は、段階的な施工を想定し、計画と開発・使用の時間幅を広くみる必要があるのである。

南勢地域の条里制研究においては、その設計時期を律令期とする見方が多い。斎宮跡のある多気郡の条里型地割について、伊藤裕偉氏は、斎宮寮方格地割が古代官道（伊勢道）と条里プランとの関係から設定されたと考えられるため、その基準となる多気郡条里も律令制に伴って設計された可能性がある、と指摘している。(84) また、谷岡氏は、神三郡域における地割の不連続性は、神三郡の成立経緯や地形的条件が主因となって表れた施工年代の差であると推測し、度会・多気郡の正南北地割は断片的ではあるが施工が古く、飯野郡のように地割の軸が斜めに傾くほど新しいとしている。(85) つまり、多気郡や度会郡では、実際に条里型地割が発掘調査された事例はほとんどないものの、金田氏のいう「律令の条里プラン」が、少なくとも奈良時代末の時点で部分的には存在していたことが想定されている。

櫛田川下流域における施工時期　飯野郡条里プランは古代伊勢道の軸に合致するものであるため(86)、官道を基軸としたプラン自体は、古代伊勢道が完成した律令期から存在していた可能性が高い。(87)

ただし、櫛田川下流域の地割に関連する調査事例

第66表　条里溝一覧

地区	遺構	規模(m)			溝の方向	遺物の時期	備考
		長さ	幅	深さ			
5区	SD35	不明	9.30	0.86	東西	平安後期～現代	室町時代の杭列を検出。 現代まで同一の溝を利用。
6区	SD90	50.0～	1.35	1.22	東西	平安後期～現代	5区SD35と一連の溝か。 現代まで同一の溝を利用。
6区	SD89	5.5～	7.0～	5.8	南北	中世～現代	西端で杭列を検出。 近年まで溝を利用し、埋め立て。
7-1区	SD35	不明	9.30	0.86	東西	平安後期～室町	SD35～38は一連の溝か。
7-1区	SD36	50.0～	3.5～	0.99	東西	平安後期～室町	
7-1区	SD37	39.0～	4.8～2.0	1.34	東西	平安後期～室町	
7-1区	SD38	30.0～	3.5～	0.79	東西	平安後期～室町	鎌倉時代後期の杭列、牛馬骨出土。
7-7区	SD57	21.1～	0.5～1.2	0.05～0.2	東西	鎌倉前期	SD57～58は一連の溝か。
7-7区	SD58	17.0～	0.3～0.5	0.05～0.2	東西	鎌倉前期	

は、必ずしも律令期まで遡るものではない。朝見遺跡の約500ｍ西方に位置する綾垣内遺跡では地割方向に沿う奈良時代後半～平安時代初期ないしは平安時代後期の溝が５条見つかっているが、現在見られる畦畔には合致せず、遺物も少ないため、条里型地割に伴う溝であるかどうかの判別は難しい。(88)

朝見遺跡にほぼ隣接する大蓮寺遺跡では、10世紀後半の掘立柱建物５棟とそれに伴う区画溝を確認している。(89) これらは、周囲の飯野郡条里と方位が揃うことが特筆される。広瀬和雄氏は、10世紀末頃に条里地帯の中に新しく作られる村落は、建物をはじめ全体の方位が条里型地割と合致するなど地割に規制された動きがみられる、と指摘する。(90) つまり、大蓮寺遺跡の建物群が建てられた10世紀後半には、既に周囲の地割が完成していたことが理解される。

琵琶垣内遺跡では飯野郡条里に合致する軸をとる奈良～平安時代の建物が４棟見つかっているが、所属時期が明確なものは平安時代後期末である。(91)

したがって、官道を基軸とした「律令の条里プラン」自体は存在していたのかもしれないが、旧飯野郡域の櫛田川下流域に本格的な開発が及んだと確実に言えるのは10世紀頃といえそうである。また、今回土壌分析結果から導き出された植生の変遷は、朝見遺跡の最盛期である平安時代前半に大規模開発が行われ周囲の森林が減少し、平安時代後期に人里植物の生育とともにイネ科植物が急増する、すなわち農耕地を拡大したことを示唆しており、朝見遺跡周辺の大開発が平安時代に行われたことを裏付けるものと考えられる。

多気郡に比べ開発が遅れた要因として、神三郡の行政上、飯野郡域の神郡化が９世紀末と遅かった点が指摘できる。また、櫛田川下流域が氾濫原であったため流路の移動が多かったという地形的な制約が大きいと思われる。平安時代における櫛田川の氾濫は以下の通りである。

・承和14年（847）､大洪水。多気河（櫛田川）氾濫。嘉祥２年（849）の班田時に混乱が生じる。(92)
・永保２年（1082）大洪水。(93)
・保安２年（1121）大洪水。(94)

承和14年の史料について、榎村氏は「両郡の境界が必ずしも確立されたものではなく、むしろその境界線には、絶えず荒廃地となる可能性を持った、不安定な開墾地が広範に散在していた可能性を示唆している」とし、「こうした所属の不明確な地域であるがゆえに、大国荘や川合荘などの親王賜田や勅旨田に期限を持つ、すなわち公的な大規模占有を前提とした初期荘園が成立したという見方も可能なのではないだろうか」と指摘する。(95) 多気・飯野郡境周辺の郷の成立年代は不確かであるが、平安期の櫛田川下流域は、ある意味「早い者勝ち」ともいえる領域であったことが想定されているのである。

8　平安時代における朝見遺跡の実態

a　官衙関連遺物と条里型地割

朝見遺跡の性格　今回の調査区内では、飛鳥～平安時代初頭の遺物がほとんど出土しなかった。したがって、平安期の朝見遺跡は自然発生的な集落ではなく、９世紀後半段階に入植してできた集落といえる。

「官」という文字が出土していることから、官人の居住もしくは接待が想定される。また、馬歯が多く見つかっているため、役所機能に併設して馬の飼育を行っていた可能性が高い。検出された遺構と遺物から考えると、郡レベルの出先機関が設置され、その上層機関から官衙関連遺物を入手していたことが推測されよう。

こうした出先機関の性格は、櫛田川下流域の開発を担うもの、つまり地割の施工を実際に行う集団であったと想定したい。９世紀末から10世紀前半頃、櫛田川下流域の中でも比較的上流部に公的機関が設置され、櫛田川から水を引く大溝を築造し水に関わる祭祀を行っていたという調査成果と、10世紀後半～11世紀前半までに下流域の条里型地割施工工事が終了する動きは連動しているように思われる。大河から水を引く大事業は、土地全体の開発計画と同時に行うことが想定されるため、その後に行われる地割の施工工事との関連性は極めて高いといえよう。

b　土地開発の主体

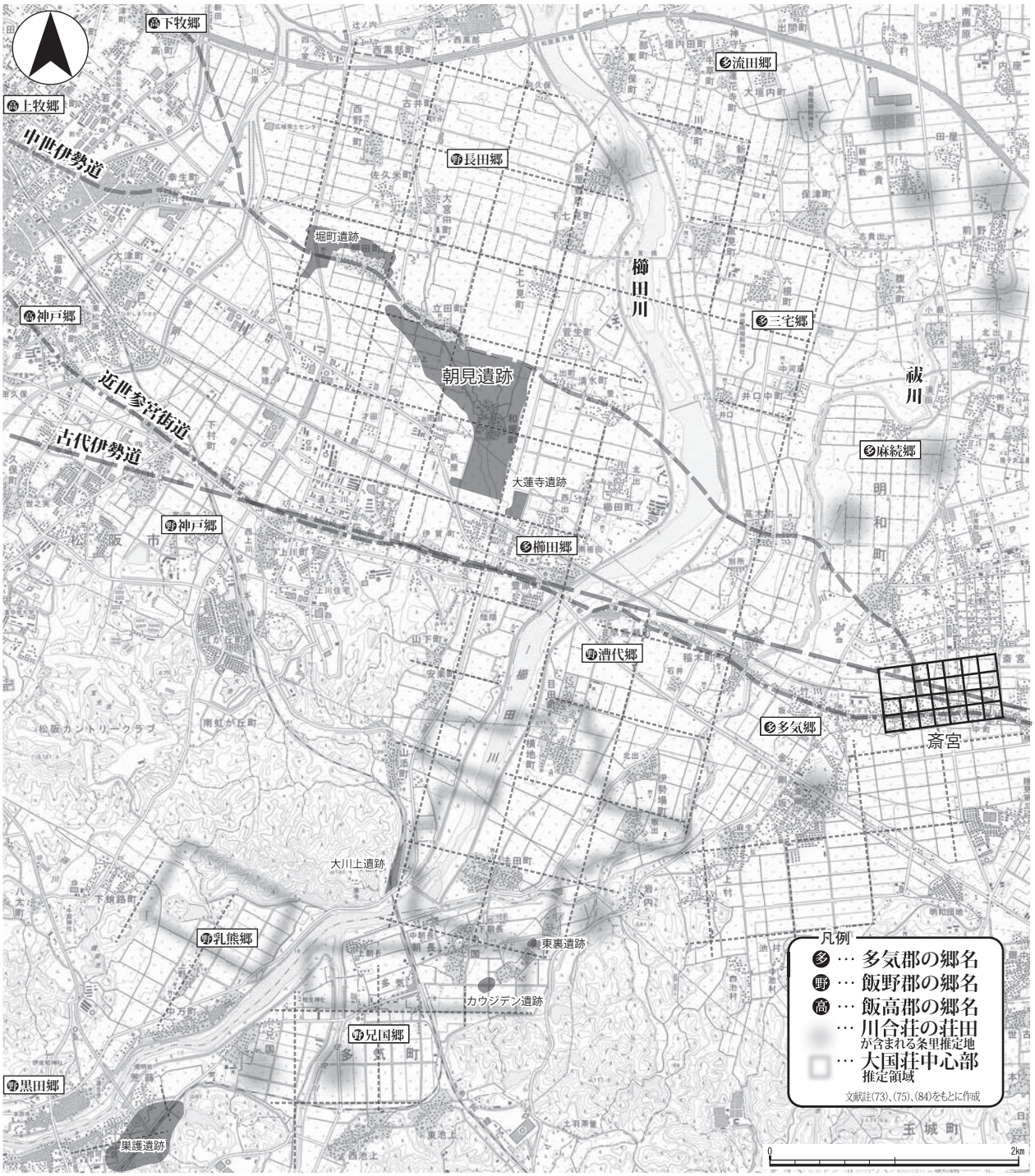
次に、９世紀後半に朝見遺跡に官衙関連遺物を持ち込んだ集団、すなわち櫛田川下流域の大開発を指示した主体者は誰であったのかという問題を考える。大溝や条里溝の計画・掘削は、当時の一大開発

事業である。統一条里の広域施工は、労働力を集中的に使用できる政治主体がなくては成し得ないものであるため、郡ないしは同程度の権力を想定する必要がある。

ただし、朝見遺跡では、荘園荘所関連遺跡と目される石川県上荒屋遺跡[96]、鳥取県岩吉遺跡[97]、島根県青木遺跡[98]のように固有名詞を示す木簡・墨書土器が出土していない。そのため、限られた情報から考えうる母体全てを検討していくこととする。

飯野郡の場合　朝見遺跡を含む祓川以西の下流域一帯には旧飯野郡条里が認められるため、行政上は飯野郡の影響下にあった可能性が高い。

しかしながら、前述のとおり平安時代の下流域は氾濫原であったため、「多気郡と飯野郡は櫛田川を境とする」という郡界の原則が曖昧となっている。9世紀頃の内容を伝える『倭名類聚抄』[99]の多気郡の郷



第129図　櫛田川下流域の郡・郷と荘園（1：50,000）〔国土地理院「松阪」「松阪港」1：25,000より〕郷名は『倭名類聚抄』による。

名には、多気郷・麻続郷のほか、三宅郷・櫛田郷など祓川以西で飯野郡条里内の地名が挙げられており、川が境界線となっていない。また、飯野郡長田郷・飯野郡渭代郷は、地名からみても氾濫原であった可能性が高く、朝見遺跡の位置はちょうど飯野郡長田郷と多気郡櫛田郷の境にあたるため、境界は不確かである。

さらに、式内社の分布をみても、現在の祓川（当時の櫛田川本流）以西に多気郡の式内社が存在する。実際、朝見遺跡と水系を同じくする中坪遺跡内にある穴師神社も、多気郡の管轄である。[100]榎村氏では、この「飯野郡内にある多気郡所属神社」について、「行政的な境界確定の不安定さと、開発による土地占有の結果、いわば多気郡の「飛び地」的な集落が発生していたことを示すもの」としている。[101]

したがって、下流域西岸部、特に朝見遺跡周辺は、条里型地割、『倭名類聚抄』の郷名、さらには延喜式内社の所属と、どの視点からも飯野郡・多気郡の比定が錯綜しているのが現状である。ただし、堀町遺跡内にある朝田寺には、9世紀前半の優れた作風を示す地蔵菩薩立像が伝わっており、朝見遺跡に公的機関が設置される前段階に、飯野郡内にこのような仏像を造像できる勢力があった点は看過できない。

斎宮の場合　次に、発掘調査の成果から見ていくと、まず多量に出土した墨書土器が検討材料となる。当時精緻な文字を書くことのできた最寄りの集団は、間違いなく斎宮であろう。斎宮とは、墨書土器に土師器が多い点や、土器の器種組成が近似する。

斎宮は、あくまでも国の出先機関であり、経済的には神三郡にそれほど依存していないことが指摘されるが[102]、神郡の土地管理に関しては一定程度の行政的な役割を有していたと考えられる。例えば、『続日本後紀』承和12年（845）に斎宮寮頭・助が多気・度会の神郡雑務を検校したという記事[103]がある。神郡雑務の内容については、『類聚三大格』延暦20年（801）に「應修理溝池十九處」とあり、田が荒廃しているため池溝を改修せよと命じられた内容が記載されている。[104]その他の雑務には駅家の修理や漆の植栽が挙げられているが、真っ先に池溝の修理が上がっていることから、土地の管理が重要な用務であったことが見て取れ、このような検校を通して斎宮が神郡の開発に携わっていたことがわかる。したがって、9世紀末に神郡化した飯野郡域の開発に斎宮が関わっていた可能性は高い。

初期荘園との関わり　最後に、飯野郡・斎宮以外の可能性として、中央と直接的なつながりを持った在地勢力、すなわち初期荘園経営から連なるような中央官人と地元富豪層との関わりが考えられる。9世紀後半は院宮王臣家と地方の富豪層が結合し、王臣家荘が地方諸国に増加した時期であり、続く9世紀末の国政改革では、院宮王臣家と富豪層の私的結合を断ち切る政策が採られている。朝見遺跡にあった公的機関の機能時期は、こういった地域社会における支配構造の変革期にあたる。

緑釉陶器は、本来政治的要素の強い官衙中枢部で使用するものではない私的奢侈品であり、発掘調査においても役所中心部ではなく貴族の邸宅など私的な空間から出土することが指摘されている。[105]今回出土した緑釉陶器の産地は猿投・京都・近江・美濃（・防長？）など広域に及び、このような複数の産地との流通を掌握する中央官人ないし王臣家が、当地の開発に関与した可能性を考える必要があろう。

緑釉陶器の生産と流通には、9世紀半ば以降淳和院が関わったという指摘[106]がある。大国荘の領有権争いを記した東寺百合文書「伊勢国飯野郡寺田坪付勘文案」[107]には、領主の欄に東寺・東大寺の名前とともに淳和院が列記されており、飯野郡内に緑釉陶器の入手ルートがあったことがわかる。10世紀前半の延長7年（929）に書かれたこの文書では、領地争いは東寺と東大寺の二大勢力が中心となり、淳和院勢力は三番手となっている。しかし、文書が書かれる直前の9世紀末には、「延喜の荘園整理令」によって地方の富豪層と院宮王臣家を断ち切る政策が採られていることから、文書成立前の9世紀代には、淳和院勢力がより大きかった可能性がある。

以上をまとめると、条里プランからは飯野郡、墨書土器や器種組成全体からは斎宮、緑釉陶器からは院宮王臣家が想定され、多くの要素があるにも関わらず、どれも推論の域を出ない。山川均氏は、奈良盆地における9世紀後半～10世紀段階の開発契機を「荘園・公領の開発にあり、その具体的な主導者は権門もしくは在庁官人層」としているが[108]、これを朝見遺跡に当てはめてみた場合、権門（王臣家）

と在庁官人層（飯野郡・多気郡・斎宮？）、いずれも可能性があるといえそうである。

ただし、現時点であえて開発主体を限定するならば、越州窯系青磁や緑釉陶器の入手経路が想定できる斎宮と院宮王臣家が候補となり、墨書土器や器種組成など多くの遺物で強い共通性が認められる斎宮がもっとも有力な候補といえるのではないだろうか。

c　平安時代における官衙関連遺跡

前項では、朝見遺跡と斎宮の関わりを指摘した。

そこで本項では、櫛田川流域で官衙関連とされる遺跡や斎宮との関係が指摘される遺跡を概観し、朝見遺跡の位置付けをより明確にしていきたい。

多気郡内の遺跡　まず、基本となる斎宮跡は、隆盛期が斎宮編年第Ⅰ期第４段階（770 ～ 785 年）から同第Ⅱ期第３段階（850 ～ 900 年）のおよそ 130 年間で、土器の出土量がピークを迎えるのは同第Ⅱ期第３段階である。(109) また、斎宮寮としての行政的機能が充実した時期も９世紀で、官司名や官職名が書かれた墨書土器や硯など役所関連遺物の出土量も多く、これは朝見遺跡とのピークとも重なる。

多気郡内の遺跡では、多気町カウジデン遺跡で奈良～平安時代の大溝や平安時代末の四面廂付掘立柱を検出し、大溝からは斎串や土器類が出土した。10 世紀初頭の土師器坏・灰釉陶器に「中万」の墨書が見られることが特筆され、飯野郡域にある松阪市中万の人々による出作の可能性が指摘される。(110) カウジデン遺跡に近接する東裏遺跡では奈良～平安時代にかけての掘立柱建物や倉庫、納屋的な建物が見つかり、越州窯系青磁・須恵器円面硯・緑釉花文風字硯・「中臣」墨書土器が出土している。(111) この両遺跡は朝見遺跡と同じような公的機関と考えられ、その性格は大国荘荘園経営に関する事務所である可能性が指摘されている。

多気町巣護遺跡では、石帯や緑釉陶器が出土し、隣接する上ノ垣内遺跡の集落と大国荘・川合荘との関わりが考えられている。(112) なお、巣護遺跡の調査では、多気郡条里の形成時期を平安時代後半頃と推定していることから、櫛田川中流域は下流域と同時期に開発が行われたことがわかる。

松阪市南山遺跡は、祓川と櫛田川の河口部、砂堆の上に立地し、河口部の物流拠点集落と考えられる (113)。朝見遺跡と同じ構造をとる井戸が検出されているほか、石帯や「舎」と書かれた土錘が出土しており、斎宮との関わりが指摘される。(114)

このように、当該地には、朝見遺跡以外にも石帯・緑釉陶器や墨書土器などが出土する「下級官衙」ともいうべき遺跡が点在し、同レベルの官人と公的機関の存在が認められる。これらの遺跡は器種組成や祭祀内容などに共通性が強い。特に、巣護遺跡・東裏遺跡・カウジデン遺跡・朝見遺跡は、自然発生的な集落ではなく、荘園や条里型地割の施工に伴って設置され、管理運営の実務に携わっていた可能性が高い。平安時代の櫛田川流域には、斎宮も含め、このような地域開発拠点・物流拠点ともいうべき遺跡が約４km おきに設置されていた状況を見てとることができるのである（第 129 図）。

飯野郡内の遺跡　琵琶垣内遺跡は、奈良時代末頃にピークを迎える遺跡で、「下厨前」「厨前」「厨酒」といった墨書土器が出土し、古代伊勢道沿いに位置することから、神宮や斎宮寮に貢納する供物の供給地として機能していたことが想定される。(115)

堀町遺跡は、斎宮跡と同じ文字が書かれた墨書土器やひらがな墨書土器が出土したこと、関連する小字名があることから、斎宮に関連のある施設や寮田が遺跡周辺に存在していた可能性が指摘される。(116)

松阪市大川上遺跡では、９世紀後半の墨書土器に「神宮寺」「萬」「泰了」などがみられ、伊勢神宮寺が所在していた可能性が指摘される。(117)

上記の遺跡はそれぞれ性格が異なるため集落としての共通性は見出せないが、旧飯野郡域にあっても斎宮あるいは神宮の影響力が及んでいた可能性が認識されている。また、大川上遺跡や朝見遺跡の墨書土器が非常に書き慣れた筆致である点、堀町遺跡でひらがな墨書土器が出土している点から、文字そのものの熟練度は他地域に比べて高いように思われる。

9　民俗行事と今後の課題

a　民俗行事と発掘調査

四藺生神事　朝見遺跡・中坪遺跡・堀町遺跡のある和屋町・立田町・朝田町は、上水道や幹線用水路を共有し、平成のほ場整備事業を合同で行うなど、現代においても農耕と水利によって結ばれている。

毎年２月11日に行われる四蘭生神事は上記３町が合同で行う行事である（松阪市指定無形文化財）。(118) 起源は鎌倉時代とされ、ひとつの「白幣（オハゲ）」を、リレーのバトンのように和屋町→立田町→朝田町へと渡していく行事である。まず和屋町の人々が午前中に畠田神社（第128図①地点）を出発し、町内を巡り伊勢神宮・面塚方面などを拝礼したのち、幣を立田町の村境に突き刺す（第128図⑤地点）。立田町の人々はこれを引き抜き式内穴師神社で祭ったのち、朝田町に送る。幣は、朝田町の式内意非多神社に納められ年中飾られることになる。このリレーの経路こそ、平安時代～鎌倉時代の大溝であるＳＤ47やＳＤ１に沿ったものと考えられる。和屋町集落内を出て北上する一行は、幹線用水路沿いを走ったのち、一度水田域に入って区画の溝に沿うように立田町との境に到達する。整備された幹線用水路沿いだけでなく水田域に入る経路を取る理由は、幹線用水路が完成する以前に走っていた水路（ＳＤ１）を踏襲しているものと思われる（写真30）。

和屋町の面塚についても、調査との関わりが若干指摘できる。面塚は、水田のなかに島のように残された盛土状の高まりで、古墳かどうかは不明である。天から降ってきた翁の面７点を、７基の塚を設けて奉納したという伝承が残るが、現在は面塚１基のみが認められる。(119) 面が天から降ってきたという故事との関わりからか、面塚で雨乞いの神事を行っていたことが伝わっている。今回の調査では、平安～中世の雨乞いが想定される遺構を検出したが、農耕地帯において雨乞いが近年まで行われていたことを示す伝承が残っている点は興味深い。この面塚の実態については、今後の調査で明らかとなろう。

なお、和屋町では、毎年６月に幹線用水路の上流（第128図④付近）で幣をつけた青竹を用いる祭事を行い、８月には虫送り（写真31）が行われるなど、水と農耕のまつりが現代まで受け継がれている。

ｂ　今後の課題

今回の調査では、櫛田川下流域の条里溝が10世紀頃に施工され、その後、中世から現代にいたるまで改築されながら利用されていることが理解された。

官衙関連遺物は、そのほとんどが廃棄された状態で出土し、建物跡はＳＢ46以外見つけることができなかった。ほ場整備に伴う発掘調査は次年度以降も続くため、地割や祭祀大溝の軸と合致するような建物の発見を期待したい。

櫛田川下流域は、氾濫が繰り返されて旧流路が錯綜する一方、その恩恵を受けた肥沃な大地を有し、多くの郷が密集する農耕地帯である。朝見遺跡の実態については、堀町遺跡・中坪遺跡・大蓮寺遺跡など一連の遺跡群を含めて検討する必要があろう。今後の発掘調査によって、当地域の成り立ちがより明らかになることを期待したい。　　（相場）

〔註〕

（１）三重県埋蔵文化財センター2000『瀬干遺跡（第２次）発掘調査報告』
（２）大西源一1911「県下に於ける古墳時代遺跡」『三重県史談会々誌』第２巻第10号
（３）北田裕行2000「古代都城における井戸祭祀」『考古学研究』第47号第１号 考古学研究会
（４）黒崎直1976「斎串考」『古代研究』10
（５）大場磐雄1970「水霊信仰の考古学的考察」『祭祀遺跡－神道考古学の基礎的研究－』角川書店
（６）金子裕之1991「楽器・酒造具・紡織具」『古墳時代の研究』３ 雄山閣

写真30　四蘭生神事のようす（第128図⑤地点）

写真31　面塚と虫送り（南から）

（7）井戸を廃し新しい井戸を用いる際に、「廃する井戸で、井之神上行事。井上で忌火をかざして迎火とし警蹕三声の間に祝詞」といった行為を行う『遷井祭』があることが指摘される。水野正好 2005「井戸をめぐるまじない世界」『考古学ジャーナル』No.537
（8）中原上宿遺跡調査団 1981『平塚海岸・伊勢原線新設工事に伴う発掘調査報告書 中原上宿』
（9）井戸の構造と変遷をまとめた宇野氏の分類にも、この縦板＋横板組タイプは認められない。宇野隆夫 1982「井戸考」『史林』第 65 巻第５号 史学研究会
(10) 三重県教育委員会 1989「杉垣内遺跡」『昭和 61 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』
(11) 松阪市教育委員会 1980『南山遺跡発掘調査報告』
(12) 三重県埋蔵文化財センター 2000『堀町遺跡』
(13) この傾向は、既に駒田氏によって指摘されている（駒田利治 2008「井戸跡」『三重県史』資料編考古２）。ただし、指摘された阿形遺跡ＳＥ 91（平安後期）や雲出島貫遺跡ＳＥ 567（12 世紀後半～ 13 世紀前半）は縦板組に横桟状の板を組み合わせるタイプと見受けられるため、縦板＋横板組の分布は松阪市域（～明和町域？）に絞ることができるかもしれない。
(14) 前掲註（３）に同じ。
(15) 松井章 1995「古代･中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館 研究報告 61 集』国立歴史民俗博物館
(16) 土肥孝 1983「日本古代における犠牲馬」『奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集 文化財論叢』土肥氏からは、ＳＫ 48 検出時に現地指導を頂いた。
(17) 伊藤信博 2004「「御霊神」の誕生（２）」『言語文化論集』第 25 巻第２号 名古屋大学
(18) 桜井秀雄 1992「井戸から出土する牛馬遺存体について－動物犠牲との関係」『考古学研究』第 39 巻２号
(19) ただし、ＳＥ 72・ＳＫ 48 ともに、生きた牛馬を殺して神に捧げたのか、それとも動物骨をシンボルとして捧げたのかという動物犠牲時の定義については、調査時の状況からはわからなかった。
(20) 前掲註（12）に同じ
(21) 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 1986『史跡斎宮跡発掘調査概報』
(22) 松井章 2001「動物祭祀」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
(23) 三重県埋蔵文化財センター 2006『琵琶垣内遺跡（第１・４次）発掘調査報告』
(24) 伊藤裕偉氏のご教示による。
(25) 尾野善裕氏のご教示による。
(26) 埋蔵文化財研究会 1989『第 26 回埋蔵文化財研究集会　古代の対外交渉－古墳時代後期～平安時代前半の舶載品を巡って－』
(27) 三重県埋蔵文化財センター 2012『木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡発掘調査報告』
(28) 三重県埋蔵文化財センター 2002『堀田（第３～５次調査）』
(29) 越州窯系青磁の時期・産地については中島恒次郎氏のご教示による。太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV －陶磁器分類編－』
(30) 三重県埋蔵文化財センター 2006『六大Ｂ遺跡（Ｂ～Ⅰ地区）発掘調査報告』
(31) 三重県埋蔵文化財センター 1992『伊賀国府跡（第４次）発掘調査報告』
(32) 三重県埋蔵文化財センター 1999『位田遺跡発掘調査報告』
(33) 京都市埋蔵文化財研究所 1990『平安京右京三条三坊』
(34) 尾野善裕氏、平尾政幸氏のご教示による。なお、本項における「東海系」とは、猿投の一部と尾北・東濃を含む地域を示す。
(35) 防長産は、杉原和恵氏のご教示による。所見は、古代の土器研究会の諸氏に頂いた。
(36) 尾野善裕 2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市教育委員会
(37) 三重県教育委員会 1983「歌野遺跡」『昭和 57 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
(38) 三重県教育委員会 1982「三谷遺跡」『昭和 56 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
(39) 三重県教育委員会・建設省中部地方建設局 1973「高向遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』
(40) 黒板勝美編 1937『新訂増補国史大系　第４巻　日本三代実録（前・後篇）』吉川弘文館
(41) 三重県埋蔵文化財センター 2004『山村遺跡発掘調査報告』
(42) 山梨県考古学協会 2008『塩の考古学 －ゆく塩、くる塩、古代の塩とその流通を考える－』
(43) 藤田道子 2011「蔀屋北遺跡の渡来人と牧」『ヒストリア』229 号
(45) 三重県埋蔵文化財センター 2008『大木ノ輪遺跡』
(44) 山中由紀子 2008「三重県出土の土馬」『三重県史』資料編 考古 1
(45) 小笠原好彦 1975「土馬考」『物質文化』25 物質文化研究会
(46) 奈良国立文化財会研究所 1985『木器集成図録－近畿古代編－』
(47) 前掲註（12）に同じ。
(48) 前掲註（10）に同じ。
(49) 前掲註（21）に同じ。
(50) 墨書土器の釈読は平川南氏のご指導と、榎村寛之氏、小林秀氏のご教示による。
(51) 平川南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
(52) 平川南 1994「榎垣外遺跡榎海戸地籍出土の墨書土器」『平成５年度榎垣外遺跡ほか発掘調査報告』岡谷市教育委員会
(53) 植松暁彦 2003「今塚遺跡の再検討とその性格について」『研究紀要』創刊号、財団法人山形県埋蔵文化財センター
(54) 三重県教育委員会 1979『斎宮跡発掘調査概報Ⅰ』
(55) 平川南 1991「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告第 35 集 創立 10 周年記念論文集』
(56) 前掲註（12）に同じ
(57) 松阪市教育委員会 2007『赤部遺跡 一般国道 23 号中勢道路建設地内埋蔵文化財発掘調査報告』
(58) 仲山秀樹 1995「墨書土器と集落遺跡」『歴史評論』２月号歴史科学協議会編集
(59) 榎村寛之 1998「斎宮の墨書土器・再考」『斎宮歴史博物館　研究紀要』７　斎宮歴史博物館
(60) 斎宮歴史博物館 1997『眠りから覚めた文字たち－斎宮跡の墨書土器－』
(61) 鈴木敏雄 1971「三重県考古誌考Ⅰ 桑名郡多度町柚井貝塚誌考」『三重県郷土資料叢書』33
(62) 三重県埋蔵文化財センター 1998『高井Ａ遺跡発掘調

査報告』

(63) 前掲註（12）に同じ。堀町遺跡では平成 24・25 年度調査でも当該期の墨書土器が多数出土している。

(64) 前掲註（51）に同じ。

(65) 前掲註（59）に同じ。

(66) 三上喜孝 2003「文献史学からみた墨書土器の機能と役割」『古代官衙・集落と墨書土器－墨書土器の機能と性格をめぐって－』奈良文化財研究所

(67) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006『青木遺跡Ⅱ』

(68) 前掲註（53）に同じ。

(69) 斎宮跡では、特定文字が多量に生産・消費される関東型の行為が見られない。榎村氏は、その要因を「多数の人間が一斉に何かの祭祀・呪術を行うような機会が相対的に少なかった」からとしている。（前掲註 59）

(70) 玉城町田丸道遺跡において古墳時代後期の堰から出土した杭の樹種同定を行っている。三重県埋蔵文化財センター 2013『平成 21 ～ 23 年度県営農業基盤整備事業（伊勢管内）埋蔵文化財発掘調査報告』

(71) ただし、朝見遺跡から約 1 km 北東にある村竹コノ遺跡では、古墳時代前期段階からアカマツが確認される。村竹コノ遺跡の杭の場合、弥生時代後期はヒノキ・コナラ節が用いられるが、古墳時代前期になるとマキ属を主体としてアカマツが用いられ、鎌倉時代はアカマツが多くなるようである。したがって、朝見遺跡の場合も古墳時代頃から開発に伴う植生の変化があった可能性は高い。
三重県埋蔵文化財センター 2009『村竹コノ遺跡』

(72) 大西源一 1954「伊勢国飯野・多気両郡に於ける条里の復元」『歴史地理』85-2

(73) 倉田康夫 1976『条里制と荘園』東京堂出版／同 1986「条里制研究を通して地籍図の利用と保存－三重県の場合－」『条里制研究』第２号　条里制研究会

(74) 谷岡武雄 1979「飯野・多気郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版

(75) 星野利幸 2007「神三郡の土地利用について」『斎宮歴史博物館 研究紀要』16 斎宮歴史博物館／斎宮歴史博物館 2010『斎王のおひざもと』

(76) 木全敬三 1987「条里地割の計測と解析」『奈良県史４，条里制』奈良県史編集委員会編

(77) 帝国市町村地圃刊行会『三重県飯南郡朝見村土地宝典』（昭和 18 年 11 月 15 日）を参考にした。第 128 図では、慣用地名を括弧内に併記している。

(78) 三重県埋蔵文化財センター 1996「綾垣内遺跡」『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡』

(79) 金田章裕 1993『古代日本の景観』吉川弘文館

(80) 山口格「条里プラン出現期の検討－三重県津市の事例から－」『研究紀要』第６号 三重県埋蔵文化財センター

(81) 寺沢薫 1984「奈良県多遺跡の条里遺構と二、三の問題」『条里制研究』３　条里制研究会

(82) 広瀬和雄 1989「畿内の条里地割」『考古学ジャーナル』310 ニューサイエンス社

(83) 前掲註（79）に同じ。

(84) 伊藤裕偉 2004「斎宮寮・伊勢道・条里」『斎宮歴史博物館　研究紀要』13 斎宮歴史博物館

(85) 前掲註（74）に同じ。

(86) 前掲註（84）に同じ。

(87) 官道が条里型地割の基軸となる例は、地方でも多くみられる。矢田勝 1997「条里の広域施工時期と変遷過程についての試論－静清平野における律令期統一条里遺構の調査が投げかける諸問題－」『研究紀要』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所など

(88) 前掲註（78）に同じ。

(89) 三重県埋蔵文化財センター 2012「大蓮寺遺跡（第２次）現地説明会資料」

(90) 広瀬和雄 1998「中世村落の形成と展開」『物質文化』物質文化研究会

(91) 三重県埋蔵文化財センター 2006『琵琶垣内遺跡（第１・４次）発掘調査報告』

(92) 高山寺文書太政官符案 承平２年

(93) 飯野郡意非多神社由緒記、成立年不詳

(94) 東寺百合文書「伊勢国大国荘流失田畠注進状」保安２年

(95) 榎村寛之 1999「斎宮祈年祭についての基礎的考察」『斎宮歴史博物館 研究紀要』８ 斎宮歴史博物館

(96) 金沢市教育委員会 1997『上荒屋遺跡 東大寺領横江荘推定地』、同 2000『金沢市内遺跡発掘調査報告書』

(97) 鳥取県教育委員会 1997『岩吉遺跡Ⅳ』

(98) 前掲註（67）に同じ。

(99) 臨川書店 1966『諸本集成倭名類聚抄（外篇）』

(100) 前掲註（95）に同じ。

(101) 式内社研究会編 1990『式内社調査報告』第６巻 東海道１ 皇学館大学出版部

(102) 前掲註（95）に同じ。

(103)『続日本後紀』承和 12 年６月８日条

(104)『類聚三代格』延暦 20 年 10 月 19 日条

(105) 尾野善裕 2002「平安時代における緑釉陶器の生産・流通と消費」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 92 集 国立歴史民俗博物館

(106) 尾野善裕 2013「古代尾張における施釉陶器生産」『名古屋市史』考古２ 新修名古屋市史編集委員会編

(107) 東寺百合文書「伊勢国飯野郡寺田坪付勘文案」延久７年

(108) 山川均 1995「条里制と村落」『歴史評論』No.538、歴史科学協議会

(109) 倉田直純 2005「斎宮の全盛」『明和町史』明和町史編さん委員会

(110) 三重県教育委員会 1980「カウジデン遺跡」『昭和 54 年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』

(111) 前掲註（26）に同じ。

(112) 三重県埋蔵文化財センター 1995『明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・巣護遺跡』

(113) 前掲註（11）に同じ。

(114) 榎村寛之氏のご教示による

(115) 前掲註（23）に同じ。

(116) 小濱学 2005「斎宮跡出土平仮名墨書土器の現状と研究」『斎宮歴史博物館　研究紀要』14 斎宮歴史博物館。なお、三重県内においてひらがな墨書土器が出土しているのは、斎宮跡と堀町遺跡のみである。

(117) 三重県埋蔵文化財センター 1999『大川上遺跡発掘調査報告』

(118) 松阪市 1981『松阪市史 第 10 巻史料篇 民俗』

(119) 現在でも、毎年９月に黒翁の能面を面塚にある祠に掛ける行事が行われており、伊勢神宮の猿楽座「和屋能」との関わりが指摘されている。

写 真 図 版

現在の朝見上地区（三重県農林水産部提供）

写真図版 1

調査前風景と幹線用水路（南東から）

1区全景（南から）

２区全景（北から）

１区ＳＤ１（南から）

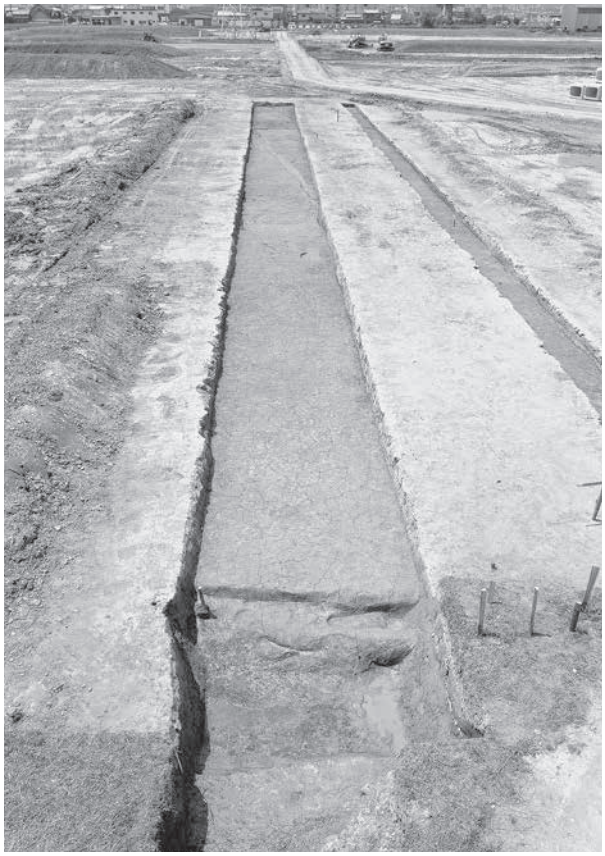
３区全景（北から）

４区全景（南東から）

４区ＳＤ12（北から）

写真図版３

５区



５－１区全景（北から）

５－２区全景（東から）

５－２区調査前風景（東から）

５－１区ＳＤ 35（東から）

５－２区ＳＤ 35 杭列（北東から）

ＳＤ 35 杭（南から）

６区調査前風景（西から）

ＳＲ 88（東から）

ＳＤ 90（西から）

６区全景（南東から）

写真図版５

7－1区(1)

７－１区全景（西から）

７－１区全景（東から）

ＳＤ 38 杭列（南東から）

ＳＤ 38 杭列（南から）

ＳＤ 38 杭列Ａ（南東から）

ＳＤ 38 杭列Ｂ（南東から）

調査風景（南東から）

写真図版 7

7－1区(3)

ＳＺ 40（南東から）

ＳＺ 40（南から）

ＳＤ 38 出土ウマ（西から）

ＳＤ 38 出土ウシ（東から）

ＳＤ 38 出土獣骨（西から）

７－３Ａ区全景（南東から）

７－３Ｅ区調査前風景（南東から）

７－３Ｅ区全景（南東から）

７－３Ａ区全景（北西から）

写真図版９

7－2区(1)

７－２区全景（西から）

ＳＤ 47・ＳＤ 49（北から）

ＳＫ 48（南西から）

ＳＫ 48 半裁状況（南東から）

ＳＫ 47・ＳＫ 48（北から）

ＳＤ 47 最上層（炭層）土層断面図（北から）

ＳＤ 47 遺物出土状況（471）（北から）

写真図版 11

7－4区

７－４区全景（北から）

７－４区全景（南から）

７－５区調査前風景（北西から）

ＳＤ 69（北から）

７－５区全景（南東から）

７－５区全景（北西から）

写真図版 13

7－5区(2)

ＳＥ 72 井戸枠内上層（北西から）

ＳＥ 72 井戸枠内検出状況（北西から）

ＳＥ 72 土層断面（北から）

ＳＥ 72 井戸枠（西から）

７－７区全景（南東から）

７－７区全景（北西から）

ＳＥ 64（北から）

ＳＤ 57 出土馬歯（北から）

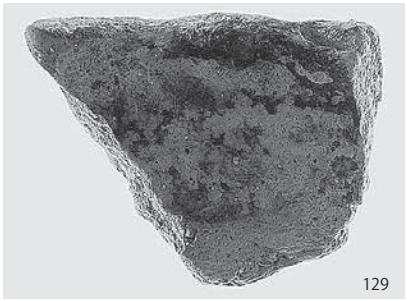
写真図版 15

8

15

92

102


129

151

152

198

216

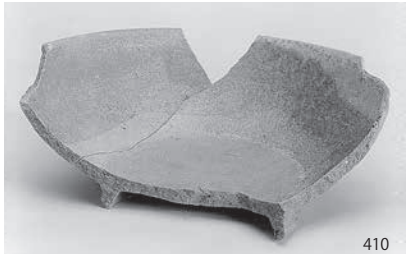
245

275

275 墨書

401

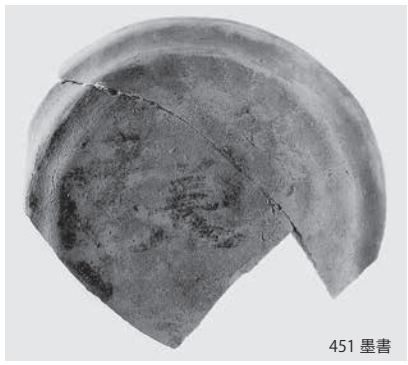
406


410

435

441

451


451 墨書

471

476

488

489

490

498

512

517

520

528

533

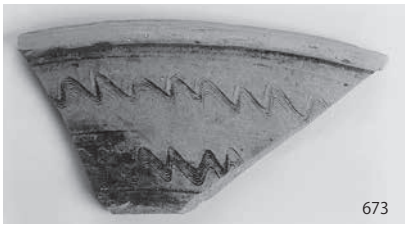
535

592

608

664

672


673

682

690

697

714

735

740

745

786

799

858

写真図版 17

861

889

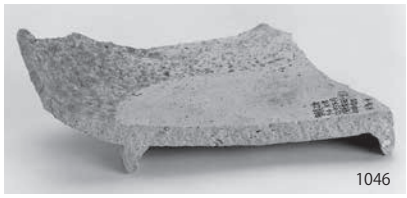
1032

1034

1038

1038 墨書

1042


1046

1051

1052

1055

1057

1062

1064

1065

1086

1117

1121

1123

1151

1154

1214

1215

1216

1217

1219

1220

1221

1222

1224

1226

1228

1231

1278

1283

1289

1296

1307

1322

1324

1339

1340

1342

1375

1420

1421

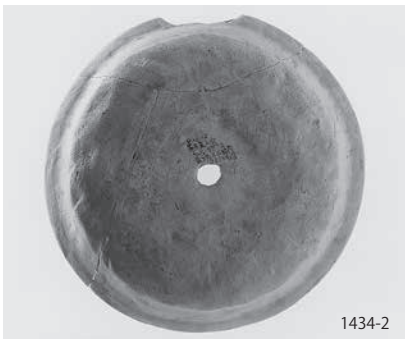
1425

写真図版 19

1433-1

1433-2

1434-1


1434-2

1440

1445-1

1445 墨書

1447

1448 底部

1449

1451

1452

1453

1454

1455

1458-1

1458-2

1459

1461

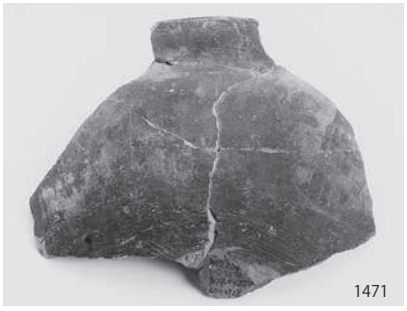
1462

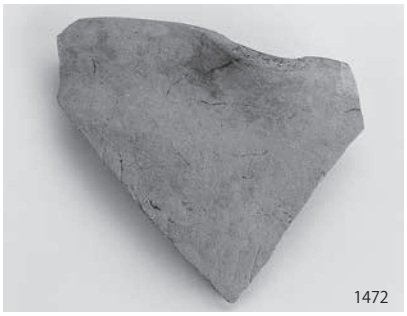
1463

1464

1465

1466


1471


1472

1541

1542

1543

1552

1553

1554

1555

1563

1568

1629

1631

1655

1657

1674

1694

1695

1700

1713

写真図版 21

1714

1739

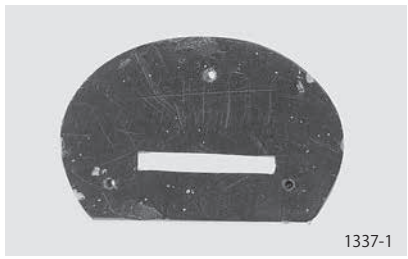
1791

1715

1741

1774

1336-1

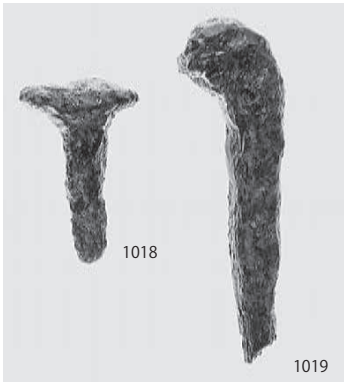

1337-1

1407

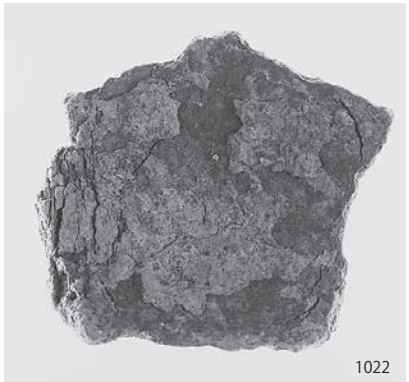
1336-2

1337-2

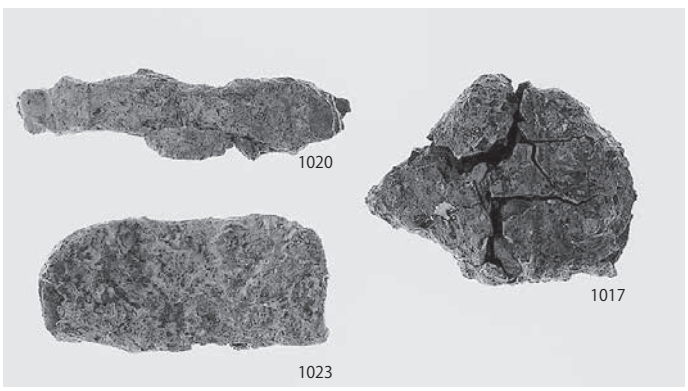
1408

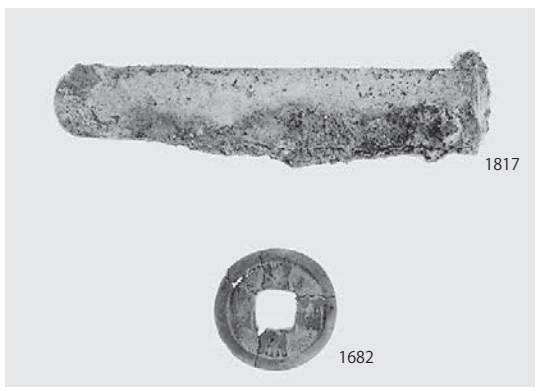

1018
1019

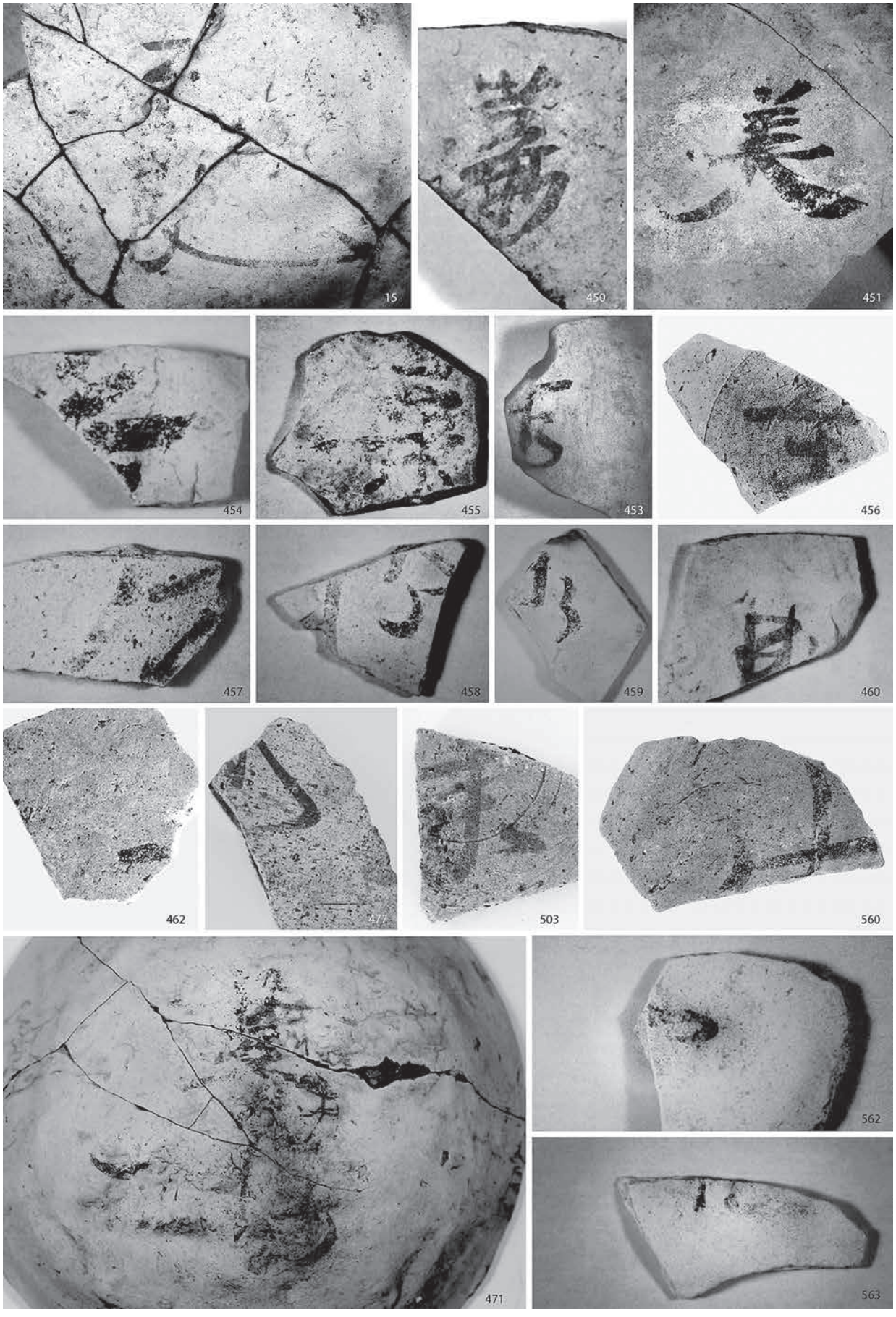
1021


1022

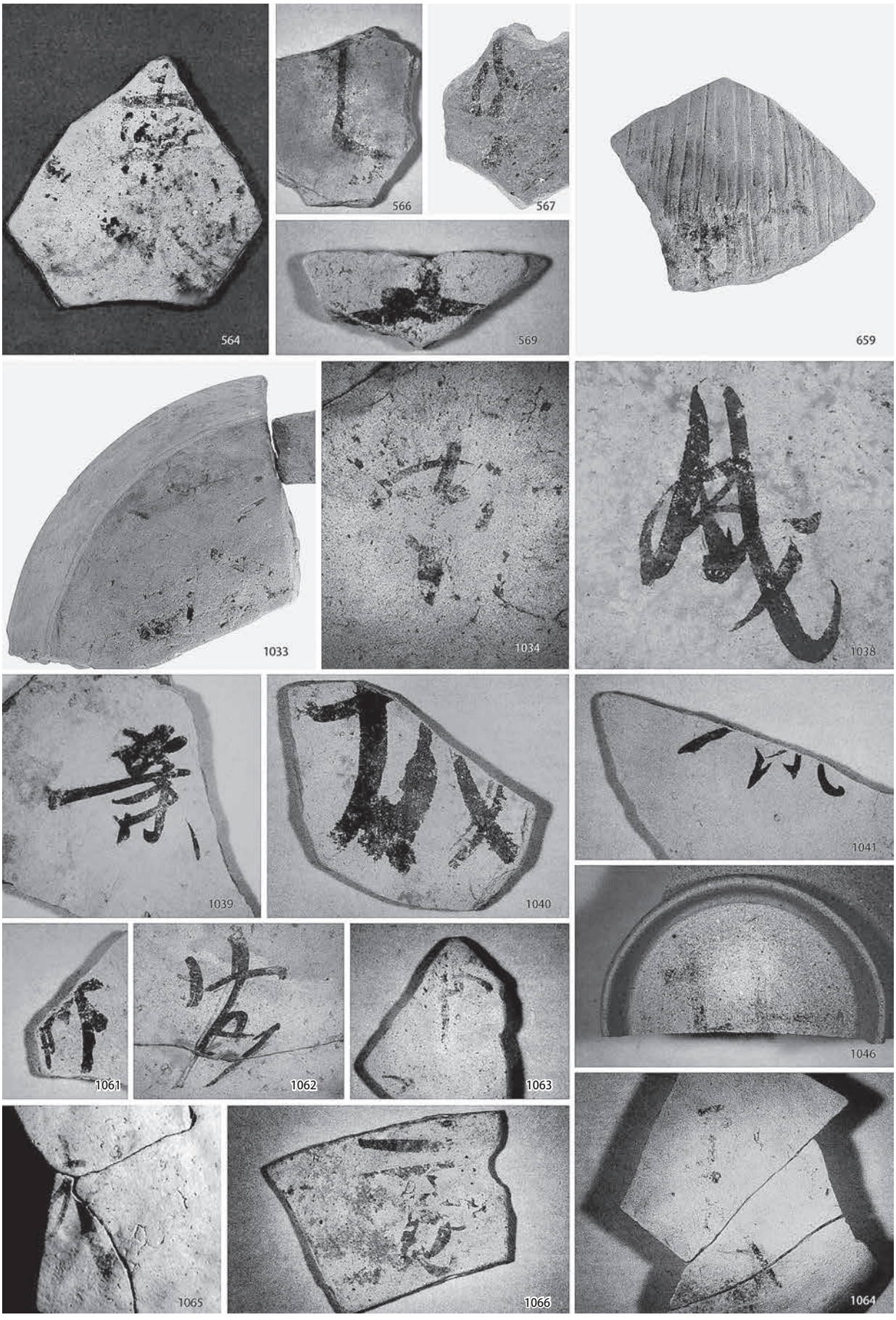
1236

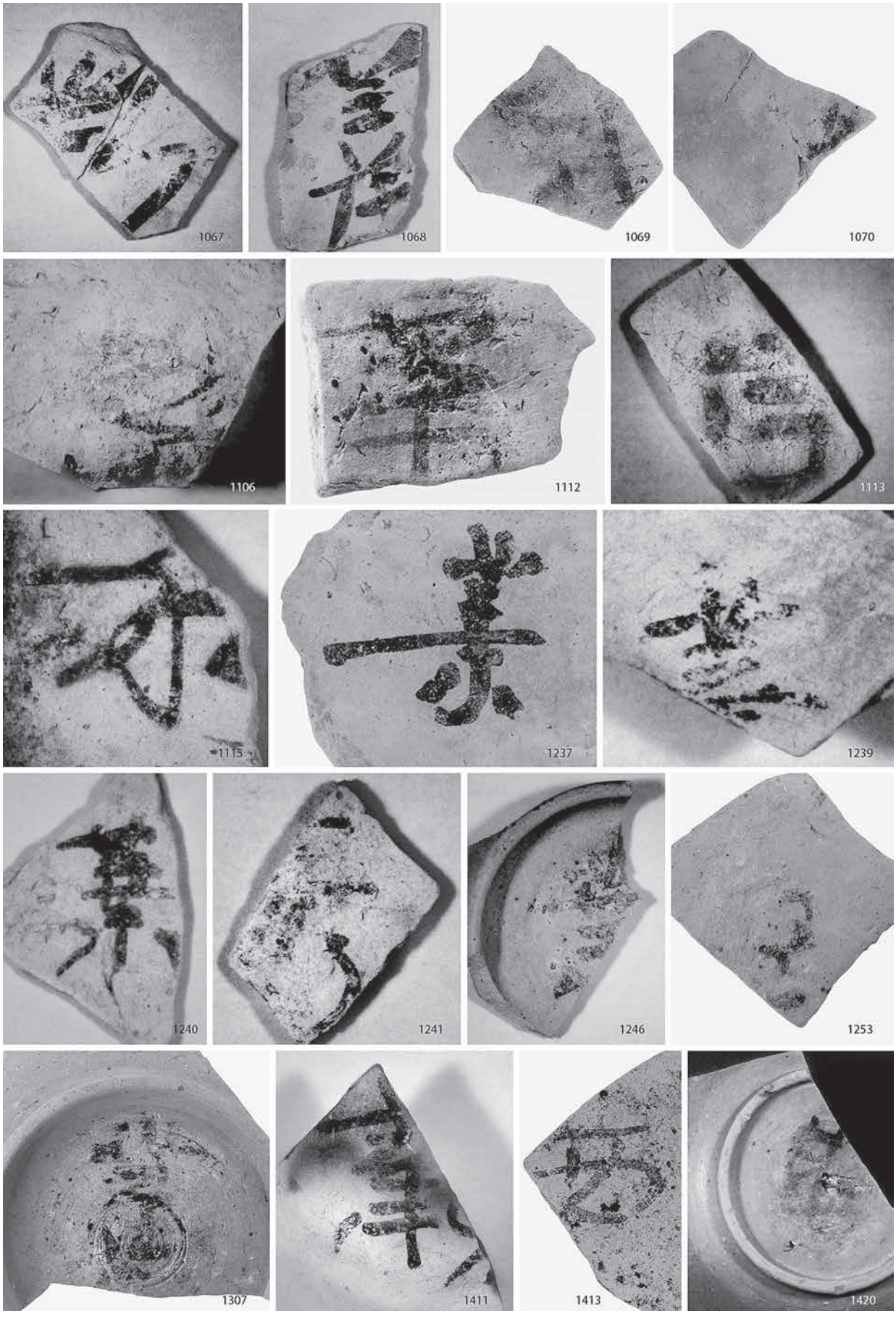

1020
1017
1023


1817
1682


15
450
451
454
455
453
456
457
458
459
460
462
477
503
560
471
562
563

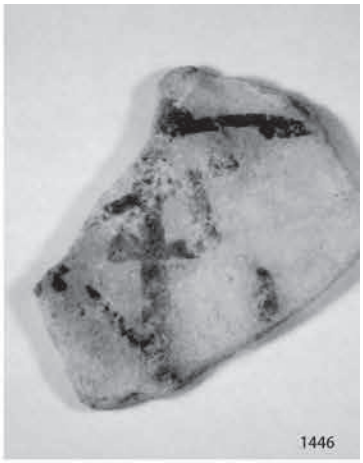
写真図版 23

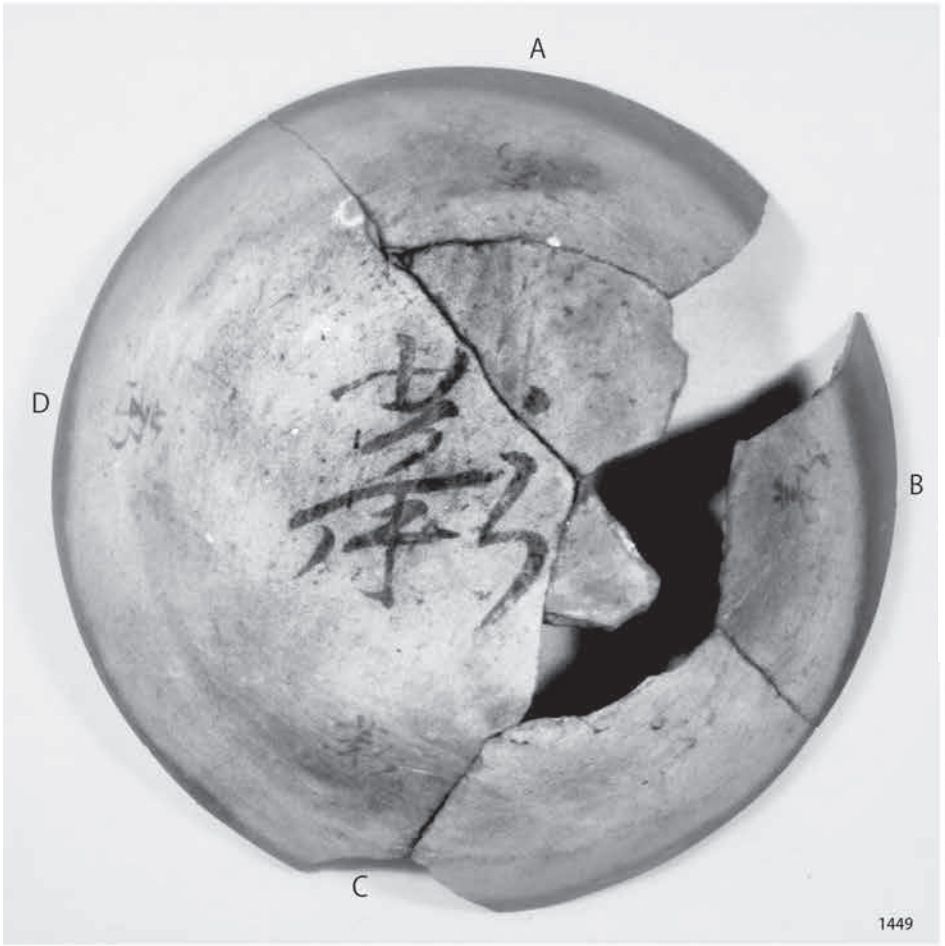

564
566
567
569
659
1033
1034
1038
1039
1040
1041
1046
1061
1062
1063
1065
1066
1064


1067
1068
1069
1070
1106
1112
1113
1115
1237
1239
1240
1241
1246
1253
1307
1411
1413
1420

1421

1445


1446



1449

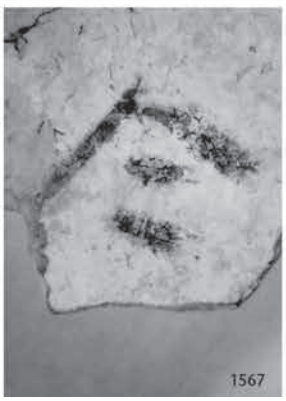
1449-A

1449-B

1449-C

1458 オモテ

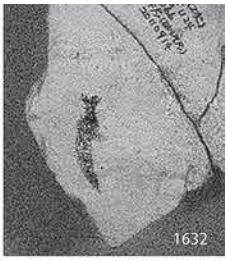
1458 ウラ

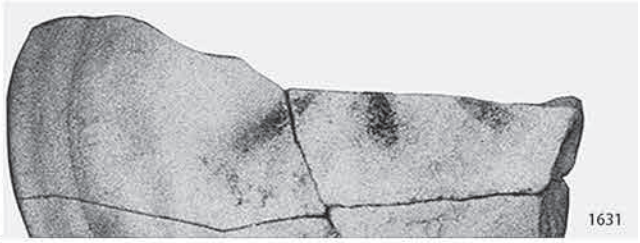

1567

1449-D

1567

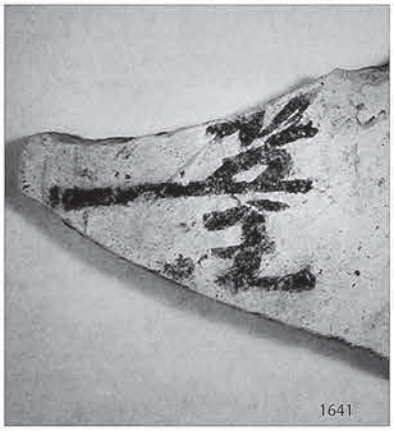
1629


1632


1631

1633

1635


1641

1642

1036

1637

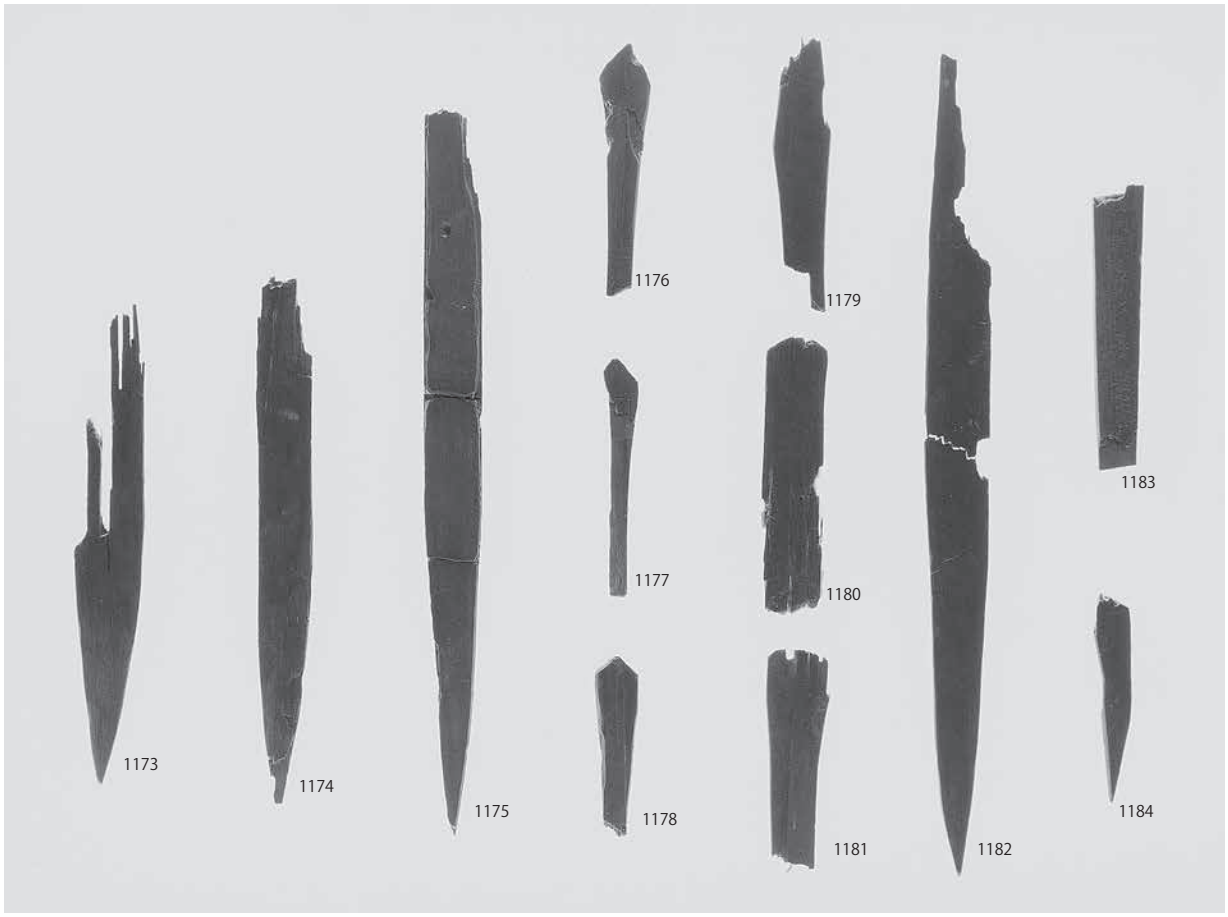
1647

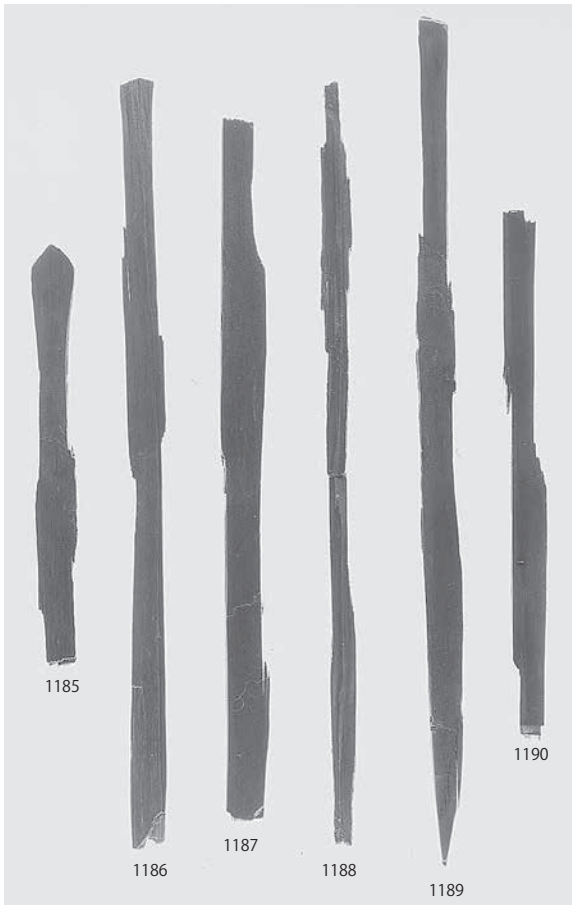
1649

1656

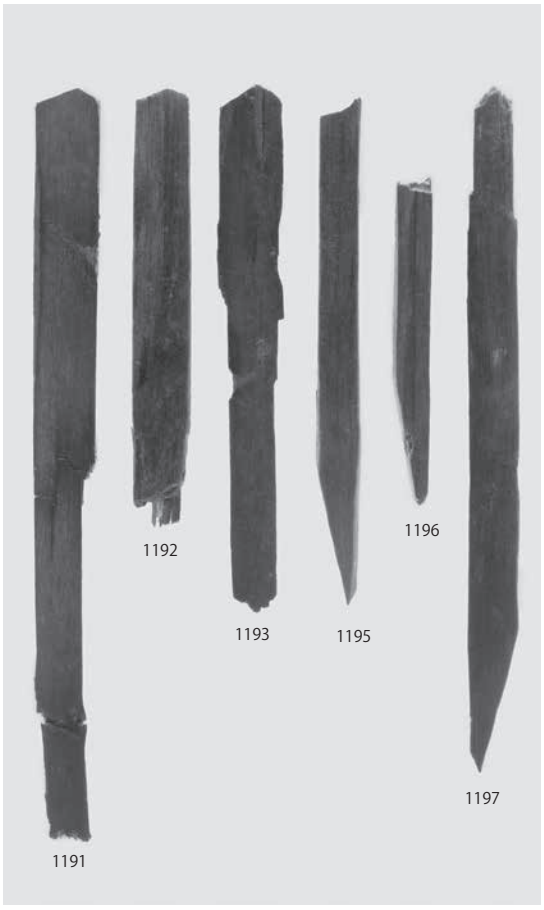
1667

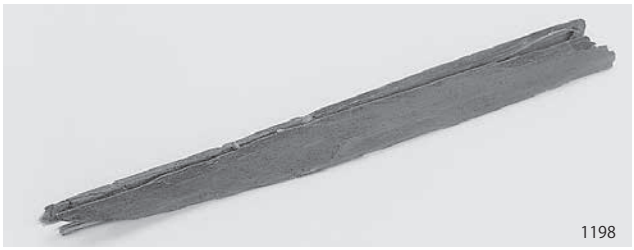
571


1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1180
1181
1182
1183
1184

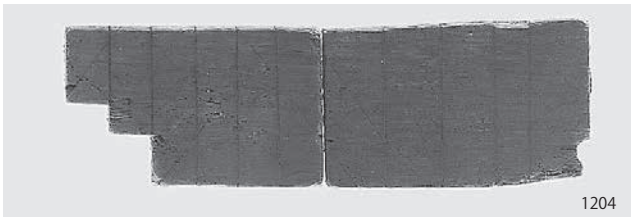

1185
1186
1187
1188
1189
1190

1194

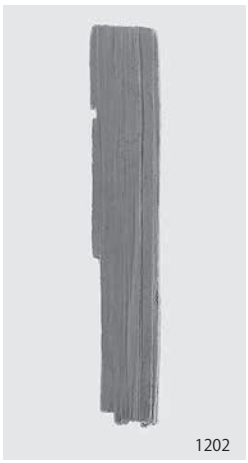

1191
1192
1193
1195
1196
1197


1198

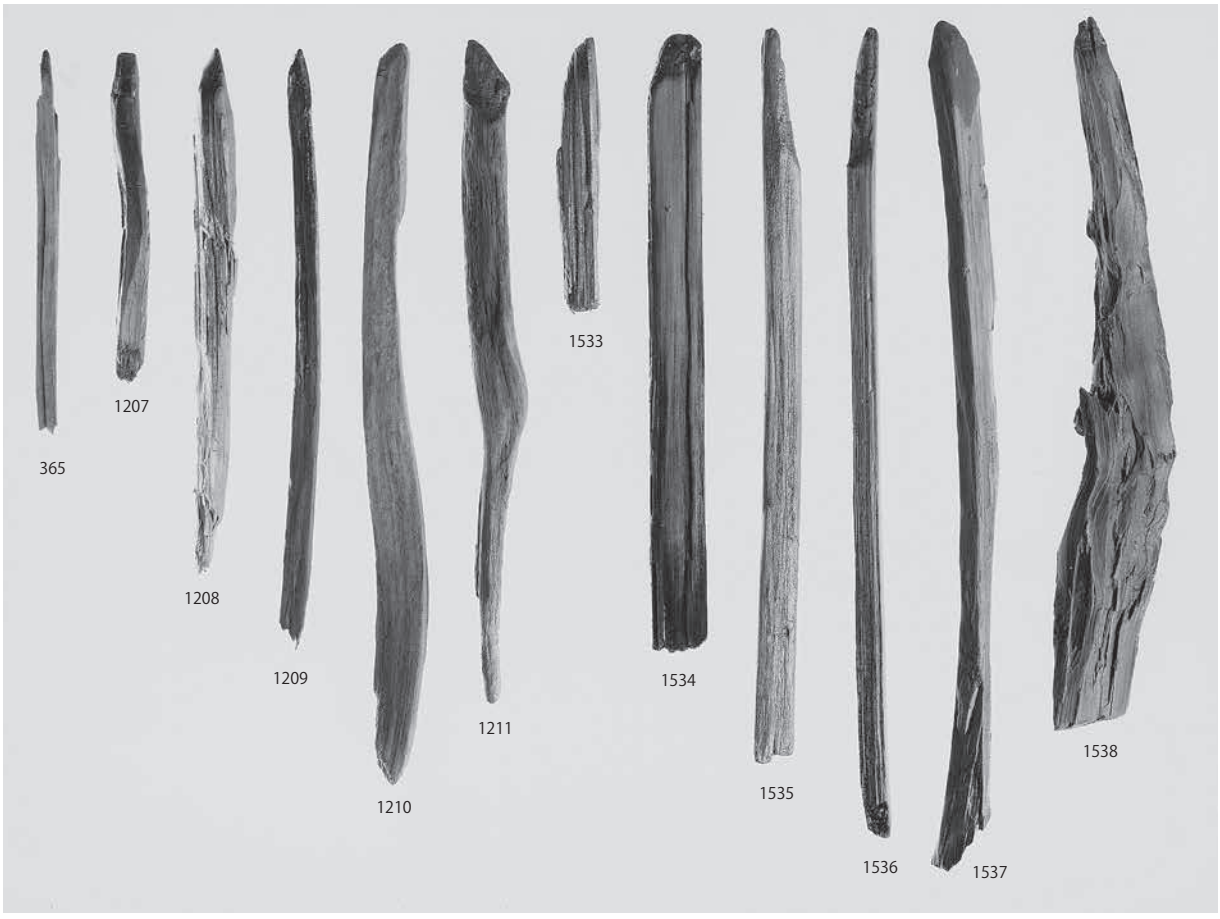
1200


1204

1205

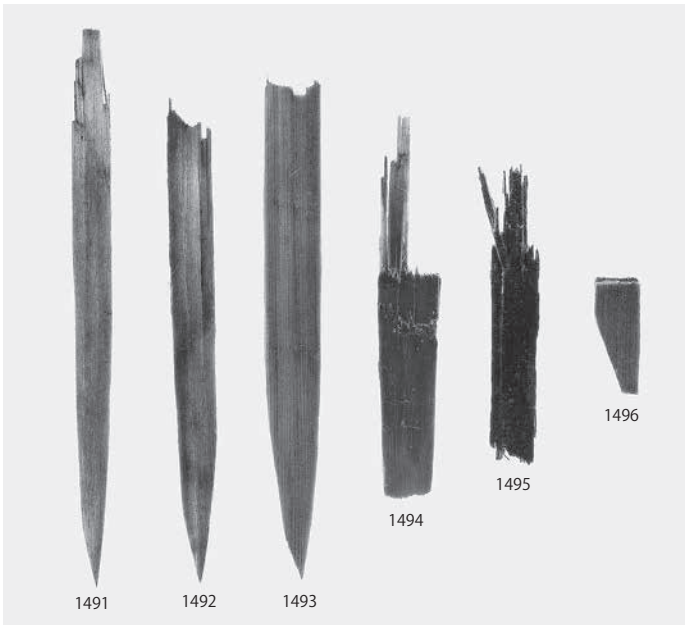

1202

1203

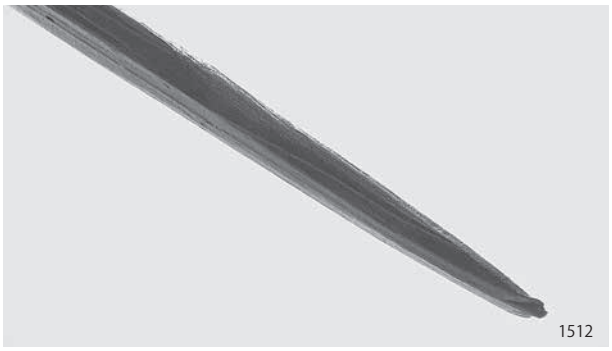


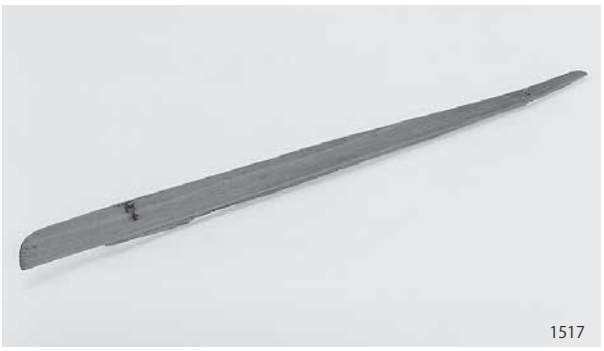
写真図版 29

1490
詳細


1491
1492
1493
1494
1495
1496

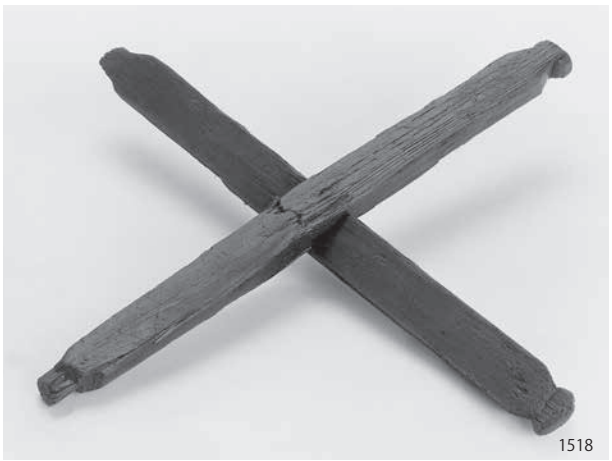
1524


1512

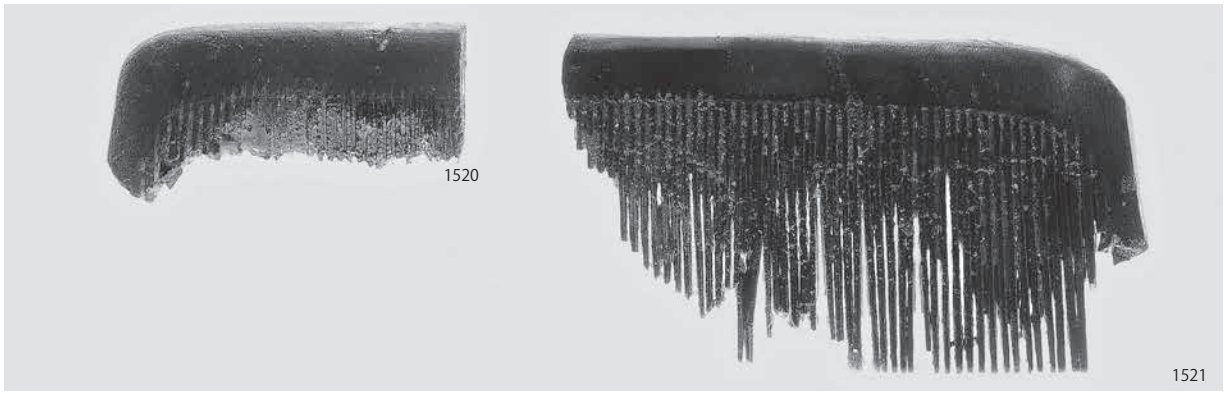

1517

1516

1522


1518

1523


1520
1521

1573
1574

1575
1576

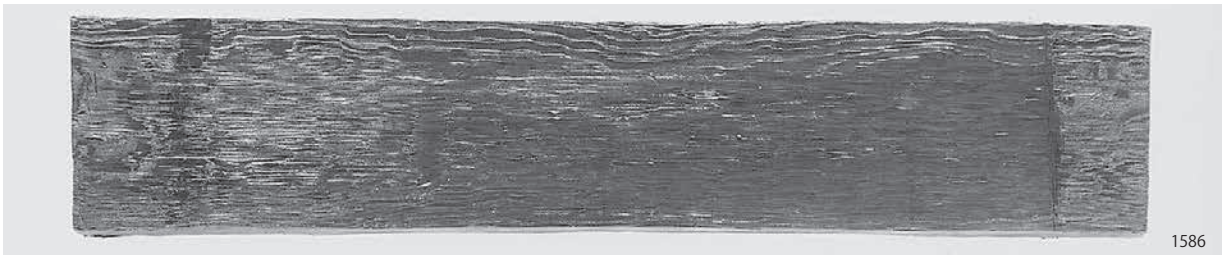
1577
1578

1579
1580

写真図版 31

1584

1585


1586

1587

1588

1589

1590

1595

1596

1597

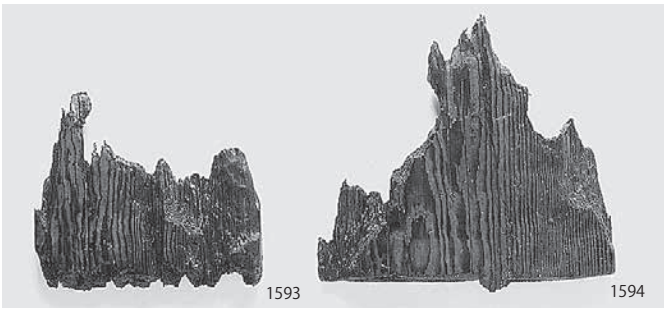
1598

1599

1600

1601

1581


1593　1594

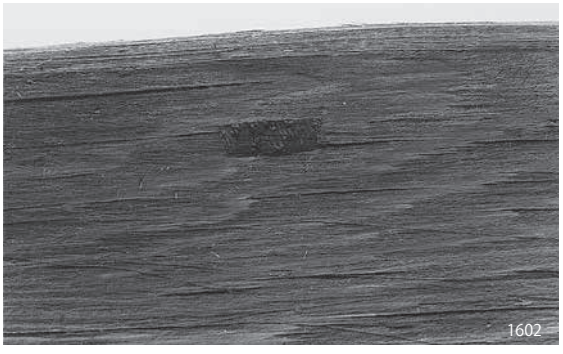
1596 裏

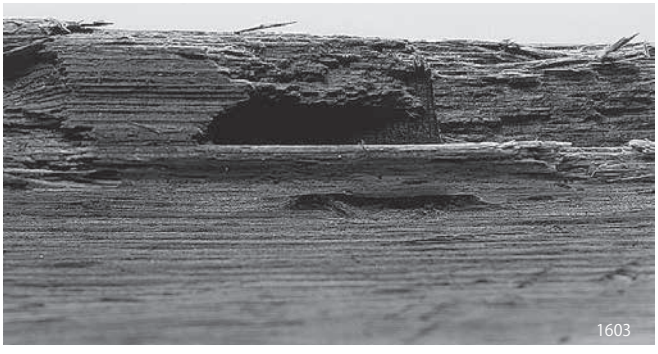
1602

1603

1604

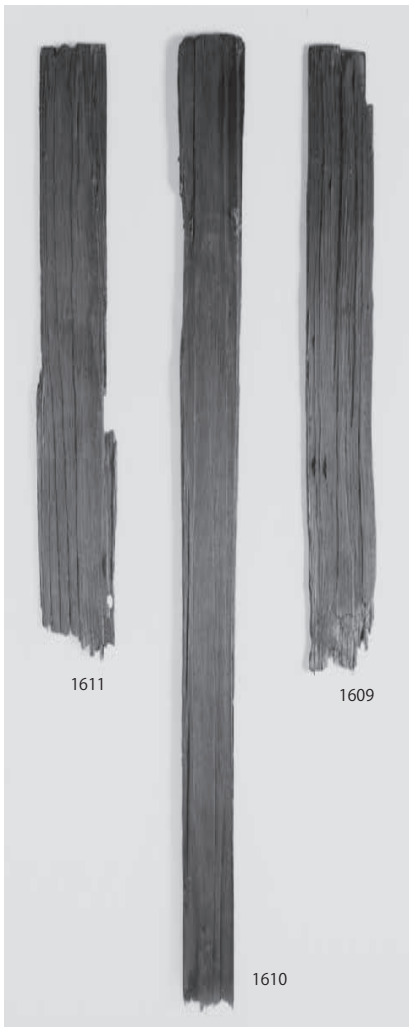
1605


1602

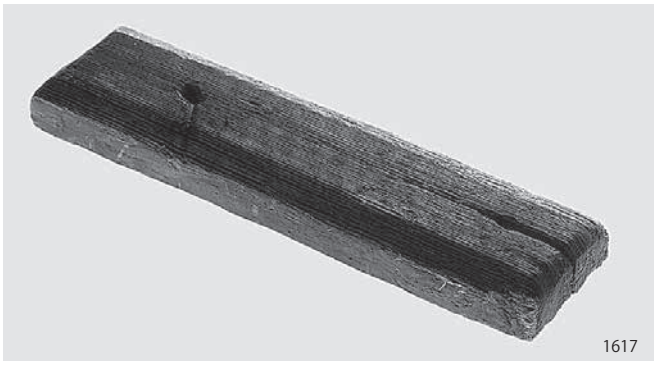

1603

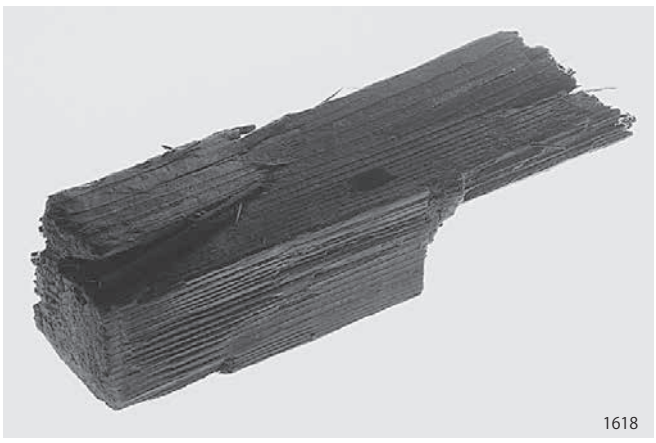
1606
1607

1608


1611
1609
1610

1616


1617


1618

1661
1662

105

123

124

126

127

128

294

295

300

303

308

310

312

313

314

316

317

319

320

321

323

324

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

343

344

345

346

350

351

352

361

354

396

393

399

報 告 書 抄 録

ふりがな	あさみいせき（だい１・２じ）はっくつちょうさほうこく
書　　名	朝見遺跡（第１・２次）発掘調査報告
副 書 名	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	351
編著者名	相場さやか　萩原義彦
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　　ＴＥＬ　0596-52-1732
発行年月日	西暦2014（平成26）年10月31日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
朝見遺跡（あさみ いせき）	松阪市和屋町（まつさかし わやちょう）	24204	a838	34°55’85”	136°57’74”	20101027～20101119	205	平成22年度高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）
						20110525～20111222、20120210～20120224	3,412	平成23年度高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）

種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文時代～古墳時代	なし	石器・弥生土器・土師器・須恵器・管玉	
	平安時代	溝・井戸・土坑	土師器・須恵器・越州窯系青磁・緑釉陶器・灰釉陶器・製塩土器・土錘・石帯・鉄滓・斎串・牛馬骨	官衙関連遺物
	鎌倉時代	溝（堰）	土師器・山茶碗・木杭・牛馬骨	
	室町時代	溝（堰）	土師器・陶器・木杭・牛馬骨	

要　約

朝見遺跡の位置する櫛田川下流域の沖積平野には、飯野郡の条里型地割が広がっている。

第１・２次発掘調査では平安時代～中世の溝を多数検出した。９世紀末から10世紀前半の大溝は、櫛田川から水を引くための大型用水路と考えられる。それに後続する平安～鎌倉時代の大溝３条も、用水路や区画溝として用いられていたと推測される。平安時代の大溝や井戸からは多くの官衙遺跡関連遺物が出土しており、当遺跡に条里型地割の施工に関わる公的機関があった可能性が高い。

地割を区画する条里溝は４条確認された。条里溝は平安時代後期以降に埋没していることから、櫛田川下流域に条里型地割が施工された年代は10世紀頃と考えられる。鎌倉～室町時代の条里溝からは、農耕用の護岸や杭列を検出した。

樹種同定・植物遺存体分析・動物遺存体分析ほかの自然科学分析を実施し、布谷知夫氏・丸山真史氏ほかの原稿を掲載した。

三重県埋蔵文化財調査報告 351

朝見遺跡（第１・２次）発掘調査報告

2014 年 10 月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　　株式会社アイブレーン